

児玉町文化財調査報告書 第1集

長 沖 古 墳 群

児玉町 児玉南土地地区画整理事業発掘調査報告

埼玉県 児玉郡 児玉町 教育委員会

児玉町文化財調査報告書 第1集

なが おき
長 沖 古 墳 群

児玉町児玉南土地地区画整理事業発掘調査報告

1980

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

序

児玉町は、埼玉県の西北部に位置し、南半分を秩父山系に続く丘陵や山で占められている、人口19,000人弱の自然環境に恵まれた町であります。

さて、当町は、埋蔵文化財が極めて多く、一部の山間部を除き、そのほとんどが埋蔵文化財の包蔵地といっても過言ではありません。その区域内には、埼玉県重要選定遺跡4箇所を含む264箇所の遺跡が確認されている現状であります。この文化財は、我々の祖先のすぐれた文化活動の所産であり、又、長い年月の間大切に守られてきた貴重な遺産でもあり、後世に残しておかなければならないものですが、当町も都市化の流れとともに開発事業が進められてきております。その一環として、昭和49年に児玉町都市計画に基づく、児玉南土地区画整理事業が計画されることになりました。この区画整理事業地内は、埼玉県重要選定遺跡である長沖古墳群にあたり、関係機関と慎重に検討を重ねた結果、保存状況の良い前方後円墳2基を残し、他の部分については発掘調査をして記録保存することとなり、昭和50年度から54年度にわたる5年計画(当初は4年計画)で、発掘調査を実施したものであります。この5年間の発掘調査により古代の歴史を解明するうえで貴重な成果を得ることができ、ここに報告書を刊行することになりました。本書が学術研究並びに郷土の歴史資料として役立つことができれば幸いです。

最後に、調査期間中格別なるご指導、ご協力をいただいた関係諸機関、地主関係者、調査に参加された方々に心からお礼を申し上げます。次第であります。

昭和55年3月

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

教育長 海北 堅太郎

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字長沖を中心に分布する埼玉県重要選定遺跡「長沖古墳群」の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、児玉町都市計画事業児玉南土地区画整理事業に伴い、昭和51年より4年間5次要して、児玉町教育委員会が実施したものである。
3. 調査期間と調査古墳は下記の通りである。

	期 日	調 査 古 墳
第1次調査	昭和51年2月17日～同年3月31日	1号墳・2号墳・3号墳
第2次調査	昭和51年6月25日～同年10月31日	8号墳・9号墳・10号墳・11号墳・12号墳 14号墳・15号墳・16号墳
第3次調査	昭和52年6月25日～同年10月14日	22号墳・23号墳・24号墳・25号墳・26号墳
第4次調査	昭和53年7月18日～同年11月30日	21号墳・27号墳・28号墳・29号墳
第5次調査	昭和54年7月25日～同年10月31日	25号墳・28号墳

調査古墳番号の1～29のうち欠けている番号の古墳は、昭和51年に別途実施した都市計画道路環状1号線に伴う調査で発掘された古墳である。

4. 調査は、菅谷浩之が担当し、金子章、山崎武を中心に進めた。第4次調査については、鈴木徳雄が調査員として専従した。
5. 発掘調査ならびに報告書作成に要する諸経費には、町費、文化庁からの国庫補助金及び埼玉県教育委員会からの県費補助金があてられた。
6. 報告書作成にあたり、遺物整理、図面の作成は菅谷浩之、金子章、山崎武、鈴木純、萩原恭一が中心となり行なった。遺物写真の撮影には、田島長通氏の協力を得、菅谷、金子があたった。編集は金子が行ない、菅谷が統括した。
7. 本書の執筆は、文末に記載する分担で行なった。
8. 本書に掲載した図面に示した方位はすべて磁北である。

土層断面図に貼付したスクリーントーンは、左上りの斜線が旧表土層、右上りの斜線が基盤層、細い横縞が漸移層を表わす。(但し第67図長沖21号墳石室実測図の断面図は、旧表土層下を一括して右上りの斜線のスクリーントーンを使用した。)また、埴輪実測図に貼付したスクリーントーンは丹塗を表わす。その他のスクリーントーンについては、必要に応じて各図面に注記した。

挿図の縮尺は、各図面に明記した。

9. 発掘調査から本書作成に至るまで下記の方々の協力を得た。ここに記して厚く感謝の意を表したい。(敬称略)

今井宏・岡本幸男・駒宮史郎・坂本和俊・(故)杉山匡司・田口一郎・田島三郎

10. 発掘調査及び遺物整理の参加者は下記の通りである。

《発掘調査参加者》

(一般) 新井三郎・井田幸雄・伊藤一子・伊藤直吉・梅沢トモ子・大家清・岡芹裕司・笠原孝

木村福太郎・倉林貞夫・倉林三郎・倉林志津・倉林しず子・倉林たつ・倉林竹雄・倉林照子・倉林とき・倉林富江・倉林春雄・倉林久子・倉林英夫・倉林正子・倉林正世・倉林満・倉林りん・倉林やす子・小林歌子・小林陽子・小峰清・小茂田雅泰・齊藤俊美・佐藤英治・志塚正夫・紫崎のり子・渋谷よし・島野治・島野すが・清水金吾・清水しげ子・清水力三・高木弘之・高橋和枝・伊達鈴子・田淵吉子・田中喜作・出牛光治・永尾茂・中島トミ子・中林とも子・中林久孝・中村一彦・根岸ヨシ子・萩原則之・堀川ヒロ・堀川功一・細谷正一・前沢宏親・間正保・松村キエ・松村菊治・根岸よし子・山口ユキ・山田金造・山田松江・横川京江・横川コウ・横川裕治・吉田美子

〈学生〉 池田晃一・石井信浩・市川淳子・乾芳宏・内田清・岡部邦彦・金子彰男・金子章・菊地昌宏・工藤洋昭・倉本穰・黒沢公雄・後藤範章・小林康久・酒井進・佐々木英一・真田繁一・塩谷耕治・篠崎潔・鈴木純・須永光一・関口和宏・武田敦・角田修・鶴見勝司・鳥羽政之・萩原恭一・橋本富夫・橋本雅夫・福島基継・福留和子・藤岡正弘・増山恵子・町沢紳子・宮下俊夫・茂木祐二・森山栄一・矢沼克則・矢野和久・山川守男・山口逸弘・山崎武・吉沢達他・渡辺直樹・日賀野宏明
本庄高等学校考古学部・熊谷女子高等学校日本史部

〈遺物整理参加者〉

〈一般〉 飯島富枝・井田富江・伊藤直吉・内田義雄・梅沢トモ子・荻野喜久江・奥原美津子・奥原ムラ・雉岡泰子・倉林とき・倉林富江・倉林英夫・小林陽子・阪本曜子・真尾とみ子・柴崎のり子・島野浩・杉山静江・杉山幸久・高木弘之・田口照代・出牛光弘・富丘睦・林和代・福島園江

〈学生〉 金子彰男・金子章・倉本穰・篠崎潔・鈴木純・住谷昭洋・萩原恭一・福島基継・福留和子・増山恵子・山川守男・山口逸弘・山崎武

11. 1次から4次調査については、すでに概報を刊行しているが、その記述は本書をもって正とする。
12. 調査では縄文時代等の遺構も発見されてはいるが、4年間5次を要して実施した調査で資料も膨大な量となったため、本書では古墳の報告を主とし、他の時期の調査については、後日別途報告の予定である。

本文目次

序	
例言	
I 発掘調査の契機と経過	1
1 発掘調査の契機	1
2 発掘調査の経過	1
II 長沖古墳群の位置と環境	3
1 長沖古墳群の位置	3
2 長沖古墳群の歴史的環境	3
3 長沖古墳群及び高柳古墳群の分布	7
III 各古墳の調査	12
1 長沖1号墳	12
2 長沖2号墳	17
3 長沖3号墳	19
4 長沖8号墳	27
5 長沖9号墳	34
6 長沖10号墳	39
7 長沖11号墳	44
8 長沖12号墳	51
9 長沖14号墳	56
10 長沖15号墳	60
11 長沖16号墳	60
12 長沖21・29号墳	62
13 長沖22・26号墳	70
14 長沖23・24号墳	77
15 長沖25号墳	82
16 長沖27号墳	87
17 長沖28号墳	92
IV 埴輪各説	95
1 円筒埴輪	95
(1) 長沖1号墳	95

(2) 長沖 2 号墳	96
(3) 長沖 8 号墳	96
(4) 長沖12号墳	97
(5) 長沖14号墳	97
(6) 長沖15号墳	98
(7) 長沖繩文 A 地区 (14・15・16号墳) 表採	99
(8) 長沖21号墳	99
(9) 長沖22号墳	100
(10) 長沖23号墳	102
(11) 長沖24号墳	102
(12) 長沖25号墳	103
(13) 長沖27号墳	104
(14) 長沖28号墳	105
(15) 長沖34号墳	105
2 形象埴輪	170
(1) 長沖 1 号墳	170
(2) 長沖 8 号墳	171
(3) 長沖21号墳	172
(4) 長沖22号墳	173
(5) 長沖23号墳	174
(6) 長沖25号墳	174
V 遺構と遺物のまとめ	176
1 墳丘と周溝	176
2 主体部	185
3 土器	196
4 埴輪	200
VI 考察	204
1 長沖古墳群の成立	204
2 長沖古墳群の性格	209
VII おわりに	210

挿 図 目 次

第1図	長沖古墳群の位置と周辺の古墳時代の遺跡	5
第2図	長沖・高柳古墳群分布図	折込
第3図	調査古墳の位置と周辺地形図	11
第4図	長沖1・2号墳全体図	12
第5図	長沖1号墳全測図	13
第6図	長沖1号墳周溝土層断面図	13
第7図	長沖1号墳主体部実測図	15
第8図	長沖1号墳出土土器	16
第9図	長沖2号墳全測図	17
第10図	長沖2号墳周溝土層断面図	18
第11図	長沖2号墳出土土器	18
第12図	長沖3号墳墳丘測量図	19
第13図	長沖3・8・9・10号墳全体図	20
第14図	長沖3号墳全測図	21
第15図	長沖3号墳土層断面図	21
第16図	長沖3号墳石室実測図	23
第17図	長沖3号墳石室出土直刀実測図	24
第18図	長沖3号墳石室出土遺物実測図	25
第19図	長沖3号墳出土土器	26
第20図	長沖3号墳出土須恵器拓影図	26
第21図	長沖8号墳墳丘測量図	27
第22図	長沖8号墳全測図	29
第23図	長沖8号墳墳丘・周溝土層断面図	30
第24図	長沖8号墳石室実測図	折込
第25図	長沖8号墳石室出土遺物実測図	31
第26図	長沖8号墳出土須恵器拓影図	32
第27図	長沖8号墳出土須恵器拓影図	33
第28図	長沖9・10号墳墳丘測量図	34
第29図	長沖9号墳全測図	35
第30図	長沖9号墳墳丘土層断面図	35
第31図	長沖9号墳石室実測図	37
第32図	長沖9号墳出土土器	38
第33図	長沖9号墳石室出土遺物実測図	38
第34図	長沖10号墳全測図	39

第35図	長沖10号墳土層断面図	39
第36図	長沖10号墳石室内遺物出土状態図	40
第37図	長沖10号墳石室実測図	41
第38図	長沖10号墳出土土器	42
第39図	長沖10号墳石室出土遺物実測図	43
第40図	長沖11・12号墳全体図	44
第41図	長沖11号墳全測図	45
第42図	長沖11号墳土層断面図	45
第43図	長沖11号墳石室棺床面遺物出土状態図	46
第44図	長沖11号墳石室実測図	47
第45図	長沖11号墳石室出土遺物実測図	48
第46図	長沖11号墳出土土器実測図	49
第47図	長沖11号墳出土須恵器拓影図	49
第48図	長沖12号墳全測図	51
第49図	長沖12号墳周溝土層断面図	51
第50図	長沖12号墳土器出土状態図	52
第51図	長沖12号墳主体部実測図	53
第52図	長沖12号墳出土遺物実測図	54
第53図	長沖12号墳出土土器	55
第54図	長沖繩文A地区(14・15・16号墳)地形測量図	57
第55図	長沖14・15・16・22号墳全体図	58
第56図	長沖14号墳全測図	59
第57図	長沖14・15・16号墳周溝土層断面図	59
第58図	長沖14号墳出土土器	60
第59図	長沖15号墳全測図	61
第60図	長沖16号墳全測図	61
第61図	長沖21号墳墳丘測量図	62
第62図	長沖21号墳全測図	折込
第63図	長沖21号墳墳丘土層断面図	63
第64図	長沖29号墳周溝土層断面図	64
第65図	長沖21号墳控之積み実測図	65
第66図	長沖21号墳石室棺床面実測図	66
第67図	長沖21号墳石室実測図	折込
第68図	長沖21号墳出土土器	68
第69図	長沖21号墳石室出土遺物実測図	68
第70図	長沖21号墳石室出土遺物実測図	69

第71図	長沖22号墳墳丘測量図	70
第72図	長沖22号墳全測図	71
第73図	長沖22号墳墳丘・周溝土層断面図	72
第74図	長沖22号墳主体部実測図	73
第75図	長沖22号墳出土土器	74
第76図	長沖22号墳出土須恵器拓影図	75
第77図	長沖23・24・25号墳全体図	76
第78図	長沖23号墳墳丘測量図	77
第79図	長沖23号墳墳丘・周溝土層断面図	78
第80図	長沖23・24号墳全測図	79
第81図	長沖23号墳出土土器	80
第82図	長沖23号墳石室出土遺物実測図	80
第83図	長沖23号墳石室実測図	81
第84図	長沖25号墳全測図	折込
第85図	長沖25号墳周溝土層断面図	83
第86図	長沖25号墳前方部周溝内土器・埴輪出土状態図	84
第87図	長沖25号墳出土土器	85
第88図	長沖25号墳出土須恵器拓影図	86
第89図	長沖27・28号墳墳丘測量図	87
第90図	長沖27・28号墳全体図	88
第91図	長沖27号墳全測図	89
第92図	長沖27号墳墳丘・周溝土層断面図	90
第93図	長沖27号墳出土土器	90
第94図	長沖27号墳主体部実測図	91
第95図	長沖28号墳全測図	92
第96図	長沖28号墳周溝土層断面図	92
第97図	長沖28号墳石室実測図	93
第98図	長沖28号墳出土遺物実測図	94
第99図	長沖1号墳出土埴輪実測図	106
第100図	長沖1号墳出土埴輪実測図	107
第101図	長沖1号墳出土埴輪拓影図	108
第102図	長沖1号墳出土埴輪拓影図	109
第103図	長沖2号墳出土埴輪実測図	110
第104図	長沖2号墳出土埴輪拓影図	110
第105図	長沖2号墳出土埴輪拓影図	111
第106図	長沖8号墳出土埴輪実測図	112

第107图	長沖8号墳出土埴輪拓影图	113
第108图	長沖8号墳出土埴輪拓影图	114
第109图	長沖8号墳出土埴輪拓影图	115
第110图	長沖12号墳出土埴輪拓影图	116
第111图	長沖14号墳出土埴輪実測图	117
第112图	長沖14号墳出土埴輪拓影图	118
第113图	長沖15号墳出土埴輪実測图	119
第114图	長沖15号墳周溝内側出土埴輪実測图	120
第115图	長沖15号墳出土埴輪拓影图	120
第116图	長沖繩文A地区(14・15・16号墳)表採埴輪拓影图	121
第117图	長沖21号墳出土埴輪実測图	122
第118图	長沖21号墳出土埴輪拓影图	122
第119图	長沖21号墳出土埴輪拓影图	123
第120图	長沖22号墳出土埴輪実測图	124
第121图	長沖22号墳出土埴輪実測图	125
第122图	長沖22号墳出土埴輪実測图	126
第123图	長沖22号墳出土埴輪実測图	127
第124图	長沖22号墳出土埴輪実測图	128
第125图	長沖22号墳出土埴輪拓影图	129
第126图	長沖22号墳出土埴輪拓影图	130
第127图	長沖23・24号墳出土埴輪拓影图	131
第128图	長沖25号墳出土埴輪実測图	132
第129图	長沖25号墳出土埴輪実測图	133
第130图	長沖25号墳出土埴輪実測图	134
第131图	長沖25号墳出土埴輪実測图	135
第132图	長沖25号墳出土埴輪拓影图	135
第133图	長沖25号墳出土埴輪拓影图	136
第134图	長沖25号墳出土埴輪拓影图	137
第135图	長沖25号墳出土埴輪拓影图	138
第136图	長沖27号墳出土埴輪拓影图	139
第137图	長沖28号墳出土埴輪実測图	140
第138图	長沖28号墳出土埴輪拓影图	140
第139图	長沖28号墳出土埴輪拓影图	141
第140图	長沖34号墳出土埴輪拓影图	142

図 版 目 次

- 図版1 長沖古墳群調査区空中写真
- 図版2 1. 陣見山丘陵より児玉郡平野を隔て榛名山を望む
2. 長沖1・2号墳付近より陣見山を望む
- 図版3 1. 長沖1・2号墳付近より西方を望む
2. 長沖1号墳全景(西より)
- 図版4 1. 長沖1号墳全景(北より)
2. 長沖1号墳周溝西側
- 図版5 1. 長沖1号墳石室全景
2. 長沖1号墳地輪列出土状態
- 図版6 1. 長沖1号墳地輪出土状態
2. 長沖1号墳周溝内土師器出土状態
- 図版7 1. 長沖2号墳周溝内須恵器・土師器出土状態
2. 長沖2号墳須恵器出土状態
- 図版8 1. 長沖3号墳墳丘全景(西より)
2. 長沖3号墳全景(南より)
- 図版9 1. 長沖3号墳石室全景
2. 長沖3号墳奥壁積み方近景
- 図版10 1. 長沖3号墳石室内遺物出土状態
2. 長沖3号墳控え積み
- 図版11 1. 長沖8・9・10号墳墳丘全景(南東より)
2. 長沖8号墳墳丘全景(南より)
- 図版12 1. 長沖8号墳作業風景
2. 長沖8号墳全景(前方部より)
- 図版13 1. 長沖8号墳近景(前方部より)
2. 長沖8号墳前方部接合部周溝近景
- 図版14 1. 長沖8号墳天井石検出状態
2. 長沖8号墳石室全景
- 図版15 1. 長沖8号墳奥壁
2. 長沖8号墳控え積み(東より)
- 図版16 1. 長沖9・10号墳墳丘遠景(北東より)
2. 長沖9号墳墳丘全景(南西より)
- 図版17 1. 長沖9号墳表土除去状態
2. 長沖9号墳石室全景
- 図版18 2. 長沖9号墳奥壁積み方近景
- 図版19 1. 長沖9号墳石室内直刀出土状態
2. 長沖9号墳石室内須恵器出土状態
- 図版20 1. 長沖9号墳控え積み(西より)
2. 長沖9号墳控え積み(北より)
- 図版21 1. 長沖10号墳墳丘全景(南西より)
2. 長沖10号墳石室全景
- 図版22 1. 長沖10号墳石室内鉄鍬出土状態
2. 長沖10号墳石室内直刀出土状態
- 図版23 1. 長沖10号墳控え積み(北東より)
2. 長沖11号墳墳丘全景(南より)
- 図版24 1. 長沖11号墳全景(南西より)
2. 長沖11号墳石室全景(北東より)
- 図版25 1. 長沖11号墳石室近景
2. 長沖11号墳前庭部
- 図版26 1. 長沖11号墳前庭部須恵器出土状態
2. 長沖11号墳石室内遺物出土状態
- 図版27 1. 長沖12号墳墳丘全景(南より)
2. 長沖12号墳全景(西より)
- 図版28 1. 長沖12号墳周溝南東側
2. 長沖12号墳主体部全景
- 図版29 1. 長沖12号墳土師器出土状態
2. 長沖12号墳土師器出土状態
- 図版30 1. 長沖縄文A地区(14・15・16号墳)全景(南東より)
2. 長沖縄文A地区(14・15・16号墳)作業風景
- 図版31 1. 長沖縄文A地区(14・15・16号墳)調査時全景(北より)
2. 長沖14・15・16号墳全景(北より)
- 図版32 1. 長沖14号墳近景(南より)
2. 長沖14号墳周溝断面
- 図版33 1. 長沖15号墳近景(西より)
2. 長沖15号墳周溝断面
- 図版34 1. 長沖16号墳周溝近景(北より)
2. 長沖16号墳周溝断面
- 図版35 1. 長沖第2次調査現地説明会風景

- 図版35 2. 長沖21号墳墳丘(南東より)
- 図版36 1. 長沖21号墳全景(調査時南東より)
2. 長沖21号墳全景(調査時北より)
- 図版37 1. 長沖21号墳墳丘断面(Aセクション)
2. 長沖21号墳墳丘断面(Bセクション)
- 図版38 1. 長沖21号墳天井石被覆粘土及び礫
2. 長沖21号墳天井石検出状態
- 図版39 1. 長沖21号墳石室全景
2. 長沖21号墳羨道部閉塞状態
- 図版40 1. 長沖21号墳玄室棺床面
2. 長沖21号墳閉塞石積み方
- 図版41 1. 長沖21号墳側壁玄門積み方
2. 長沖21号墳側壁積み方近景
- 図版42 1. 長沖21号墳控え積み(東より)
2. 長沖21号墳控え積み(西より)
- 図版43 1. 長沖21号墳控え積み(北より)
2. 長沖22号墳墳丘全景(南東より)
- 図版44 1. 長沖22号墳全景(南東より)
2. 長沖22号墳全景(北西より)
- 図版45 1. 長沖22号・26号墳周溝
2. 長沖22号墳周溝断面
- 図版46 1. 長沖22号墳墳丘断面
2. 長沖22号墳主体部
- 図版47 1. 長沖23号墳墳丘伐採風景
2. 長沖23号墳墳丘(南より)
- 図版48 1. 長沖23号墳全景(北西より)
2. 長沖23号墳石室全景
- 図版49 1. 長沖23号墳石室側面
2. 長沖23号墳控え積み(北西より)
- 図版50 1. 長沖25号墳作業風景(第5次調査)
2. 長沖25号墳前方部周溝遠景(南西より、第3次調査)
- 図版51 1. 長沖25号墳前方部周溝近景(南東より、第3次調査)
2. 長沖25号墳周溝全景(南西より、第5次調査)
- 図版52 1. 長沖25号墳全景(北東より、第5次調査)
2. 長沖25号墳クビレ部周溝近景(南東より)
- 図版53 1. 長沖25号墳前方部周溝近景(南東より、第5次調査)
- 図版53 2. 長沖25号墳前方部周溝東南コーナー部
- 図版54 1. 長沖25号墳前方部周溝ブリッジ部
2. 長沖25号クビレ部周溝断面
- 図版55 1. 長沖25号墳前方部周溝内人物埴輪出土状態
2. 長沖25号墳前方部周溝内埴輪出土状態
- 図版56 1. 長沖25号墳前方部周溝内土師器・埴輪出土状態
2. 長沖25号墳前方部周溝内土師器・埴輪出土状態
- 図版57 1. 長沖25号墳前方部周溝内土師器出土状態
2. 長沖25号墳前方部周溝内土師器出土状態
- 図版58 1. 長沖27号墳墳丘全景(南東より)
2. 長沖27号墳全景(北東より)
- 図版59 1. 長沖27号墳全景(北西より)
2. 長沖27号墳全景(墳丘除去後)
- 図版60 1. 長沖27号墳周溝断面
2. 長沖27号墳主体部
- 図版61 1. 長沖28号墳墳丘全景(北より)
2. 長沖28号墳墳丘全景(北東より)
- 図版62 1. 長沖28号墳周溝断面
2. 長沖28号墳石室全景(北東より)
- 図版63 1. 長沖28号墳石室近景(北東より)
2. 長沖28号墳石室側壁積み方近景
- 図版64 1. 長沖3号墳石室出土遺物(装身具)
2. 長沖3号墳石室出土遺物(鉄製品・装身具)
- 図版65 1. 長沖8号墳石室出土遺物(鉄製品・装身具)
2. 長沖9号墳石室出土遺物(鉄製品・装身具)
- 図版66 1. 長沖10号墳石室出土遺物(鉄製品)
2. 長沖10号墳石室出土遺物(装身具)
- 図版67 1. 長沖3号墳石室出土遺物(直刀)
2. 長沖9号墳石室出土遺物(直刀)
3. 長沖10号墳石室出土遺物(直刀)
4. 長沖11号墳石室出土遺物(鉄製品・装身具)
- 図版68 1. 長沖21号墳石室出土遺物(装身具)
2. 長沖21号墳石室出土遺物(鉄製品)
- 図版69 1. 長沖21号墳石室出土遺物(鉄製品)
2. 長沖23号墳石室出土遺物(鉄製品・装身具)
- 図版70 1. 長沖1号墳出土土器

- 図版70 2. 長沖2号墳出土土器
3. 長沖2号墳出土土器
4. 長沖9号墳出土土器
5. 長沖11号墳出土土器
6. 長沖11号墳出土土器
- 図版71 1. 長沖12号墳出土土器
2. 長沖12号墳出土土器
3. 長沖12号墳出土土器
4. 長沖14号墳出土土器
5. 長沖25号墳出土土器
6. 長沖25号墳出土土器
7. 長沖25号墳出土土器
- 図版72 1. 長沖1号墳出土土円筒埴輪(第99図-1)
2. 長沖1号墳出土土円筒埴輪(第99図-2)
3. 長沖1号墳出土土円筒埴輪(第99図-3)
4. 長沖1号墳出土土円筒埴輪(第99図-6)
5. 長沖1号墳出土土円筒埴輪(第99図-7)
- 図版73 1. 長沖1号墳出土土円筒埴輪(第100図-1)
2. 長沖1号墳出土土円筒埴輪(第100図-2)
3. 長沖1号墳出土土円筒埴輪(第100図-5)
4. 長沖1号墳出土土円筒埴輪(第100図-7)
- 図版74 1. 長沖1号墳出土土形象埴輪(馬)
2. 長沖1号墳出土土形象埴輪(馬、脚部)
3. 長沖1号墳出土土形象埴輪(馬、脚部)
4. 長沖1号墳出土土形象埴輪(馬、脚部)
5. 長沖1号墳出土土形象埴輪(馬、脚部)
6. 長沖1号墳出土土形象埴輪(馬、脚部)
- 図版75 1. 長沖1号墳出土土形象埴輪(人物)
2. 長沖2号墳出土土円筒埴輪(第103図-1)
3. 長沖2号墳出土土円筒埴輪(第103図-2)
- 図版76 1. 長沖8号墳出土土埴輪(形象台部第106図-2)
2. 長沖8号墳出土土埴輪(形象台部第106図-3)
3. 長沖8号墳出土土円筒埴輪(第106図-4)
4. 長沖8号墳出土土円筒埴輪(第106図-5)
- 図版77 1. 長沖8号墳出土土形象埴輪(靱・人物他)
2. 長沖8号墳出土土形象埴輪(人物)
- 図版78 1. 長沖8号墳出土(馬他)
2. 長沖14号墳出土朝顔形円筒埴輪(第111図-1)
3. 長沖14号墳出土土円筒埴輪(第111図-3)
- 図版79 1. 長沖15号墳周溝内側出土土円筒埴輪(第114図)
2. 長沖15号墳出土土円筒埴輪(第113図-1)
3. 長沖15号墳出土土円筒埴輪(第113図-2)
- 図版80 1. 長沖21号墳出土土円筒埴輪(第117図-1)
2. 長沖21号墳出土土円筒埴輪(第117図-2)
3. 長沖21号墳出土土形象埴輪(人物・馬他)
- 図版81 1. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第120図-1)
2. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第120図-2)
3. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第120図-4)
4. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第121図-1)
- 図版82 1. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第121図-2)
2. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第121図-4)
3. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第122図-4)
4. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第122図-2)
5. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第122図-3)
- 図版83 1. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第123図-4)
2. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第123図-5)
3. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第123図-3)
4. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第123図-6)
5. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第124図-1)
- 図版84 1. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第124図-3)
2. 長沖22号墳出土土円筒埴輪(第124図-4)
3. 長沖22号墳出土土形象埴輪(馬)
- 図版85 1. 長沖22号墳出土土形象埴輪(馬)
2. 長沖22号墳出土土形象埴輪(馬)
3. 長沖22号墳出土土形象埴輪(人物)
4. 長沖23号墳出土土形象埴輪
- 図版86 1. 長沖25号墳出土土円筒埴輪(第128図-1)
2. 長沖25号墳出土土円筒埴輪(第128図-2)
3. 長沖25号墳出土土円筒埴輪(第128図-5)
4. 長沖25号墳出土土円筒埴輪(第129図-2)
- 図版87 1. 長沖25号墳出土土円筒埴輪(第129図-3)
2. 長沖25号墳出土土円筒埴輪(第129図-4)

- 図版87 3. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第130図-1)
4. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第130図-2)
- 図版88 1. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第131図-1)
2. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第131図-3)
3. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第131図-4)
4. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第130図-3)
5. 長沖25号墳出土形象埴輪 (人物)
- 図版89 1. 長沖25号墳出土形象埴輪 (人物)
2. 長沖28号墳出土円筒埴輪 (第137図-1)
3. 長沖28号墳出土円筒埴輪 (第137図-2)
- 図版90 1. 外面全面縦方向のへら削り
2. 凸帯断続撫で技法
3. 基底部外面板押圧
4. 基底部内面横ハケ調整
5. 基底部内面縦方向の刀子削り
6. 基底部内面横方向の刀子削り①
7. 基底部内面横方向の刀子削り②

I 発掘調査の契機と経過

1. 発掘調査の契機

埼玉県北部に位置している児玉町は、周辺を丘陵や水田等に囲まれた静かな町で、古代からの遺跡など歴史的遺産に恵まれている。埋蔵文化財の包蔵地も多く、埼玉県が昭和50年に刊行した埼玉県市町村別遺跡地図には264箇所の遺跡が記載され、その後新たに発見された遺跡もいくつかある。

町は自然環境に恵まれ、開発行為も少ないのどかで落ち着いた町であった。しかし、近年この町にも都市化・工業化の波が僅かずつではあるが押し寄せ、変貌しつつある。町の北側を通る関越自動車道とそれに伴うインターチェンジの開通は昭和55年7月に予定され、この開通をみこしての旧飛行場跡の児玉工業団地の造成もその一つであろう。

これらの地方開発の影響は、児玉町自体にも新たな機運をもたらしている。開発行為以外にも、町自体の再生問題がある。近年、自治体で都市開発計画が行なわれているが、町でも昭和49年度の児玉町都市計画に基づく「児玉南土地区画整理事業」を計画した。都市計画事業が実施されることとなった長沖地区は、土地利用計画により昭和48年に第一種住居専用地域に指定されている。この付近は近年新興住宅地として、昔ながらの幅の狭い道路際に、下水施設のないままに家が建ち並びはじめている。町の中心部にも近いため益々宅地化が進み、乱開発を防止するためにも本地域の整理事業が町の課題となった。対象面積は36.9ヘクタールで、計画地域の中央には東西に幅18mの環状1号線の都市計画道路も盛り込まれた。

この区画整理事業地内は、埼玉県重要選定遺跡である長沖古墳群の一部にあたり、計画の実施については県教育委員会で現地を確認調査を行った。その結果、前方後円墳2基を含む古墳15基、集落址2箇所が確認された。町と県教育委員会との協議により、保存状態の良い前方後円墳2基の付近は児童公園として残し、他の古墳は調査を実施して記録を残すことになった。

調査は菅谷浩之(県立本庄高校教諭、現県立浦和第一女子高校)が担当し、町文化財保護審議委員会の協力を得て昭和50年度より4か年計画で発掘を実施した。しかし、予想された以上に古墳の規模が大きく、調査中に9基の古墳址なども発見され、計画は1年延長され5年計画となり、昭和55年3月に報告書を刊行し一連の発掘調査を終えた。なお、事業主体者の計画調整により2基を残しているが、今後の事業の進展に伴って2基の古墳も調査を実施する予定である。(三上元一)

2. 発掘調査の経過

第一次調査 調査区域は、本古墳群の東端にあたり、付近には古墳は見られず土器片の散布から集落址と考えられていた。調査は夏に実施の予定であったが桑畑が中心のため、養蚕との関係から冬に変更され昭和51年2月17日から3月31日まで実施した。道路幅の部分の集落址とみられた場所にトレンチを設定し、調査を実施したが、遺構はなかなか発見されず、結局は古墳址の調査となった。

古墳址の調査終了後、道路予定地の延長上に存在していた3号墳の調査に臨んだ。石室の調査に問題はなかったが、地山が粘土質で冬のため乾燥し周溝確認調査で苦勞した古墳である。

第二次調査 今回の調査は円墳5基に、縄文時代の集落の調査であった。5基の古墳に8・9・10・11・12号の番号をつけたが、これは前年に町独自に長沖古墳群の調査を実施し4～7号墳とつけたためである。6月25日から学生を中心に測量を開始した。

いずれの古墳も桑畑に存在しているため、調査範囲の桑の抜根で苦勞したが、発掘は7月1日より入った。当初は小規模な古墳と考えられていたが、8号墳においては周溝を追求していくうちに帆立貝式前方後円墳であることが確認され、周溝の全掘を行わなければならなくなったため、予定が大幅に遅れることとなった。9・10号墳は横穴式石室で特に問題もなかった。12号墳は高さ1mほど残るほとんど破壊されていた古墳であったが、竪穴系の主体部が発見された。縄文集落地点では住居址が発見されず、縄文の包含層の調査であり、調査区域内では3基の古墳址も検出された。

夏休みには、県立本庄高校考古学部、同熊谷女子高校日本史部の協力を得たものの、古墳址の発見もあり、調査終了は10月31日であった。

第三次調査 調査も3年目に入り、古墳群の概要もある程度つかめてきたが、昭和52年の三次調査は21号・22号・23号墳の3基の予定で6月25日から調査に入った。21号墳から測量に入り、東側の23号墳から発掘にとりかかった。23号墳のトレンチを設定していくうち、東側に大規模な周溝を確認した。この周溝の調査は予想外の日数と予算を消化したため、当初の計画を大幅に変更するようになってしまった。

夏休みも終り、学生も帰ったため大型円墳は測量したものの、予算的にみても調査は不可能になり、22号墳の調査に全力をそそいだ。その結果、墳丘をもつ古墳2基の他に古墳址3基を確認し、10月14日に調査を終了した。

第四次調査 第三次調査の発掘予定であったが、第四次調査に回った21号墳のほか、27号墳の調査を行なった。21号墳は前年に測量が終っているため、発掘にとりかかったが、27号墳とは450mほど離れているため、2班に別けて併行して調査を実施した。調査は昭和53年7月18日からはじまったが、21号墳周辺の縄文時代の遺構と、近世の遺構のため4箇月の調査になった。長沖古墳群の調査は第四次調査までの予定であったが、予定古墳を調査することができず一年延長となることになった。

第五次調査 28号墳の調査と、第三次調査で確認された前方後円墳とみられる25号墳の周溝を拡張し古墳の形態と規模を確認することであった。28号墳の調査を昭和54年7月25日から実施し、9月10日に終了させ、25号墳にかかった。墳丘はなく範囲が広いため桑をブルドーザーで抜根して、周溝の調査を行ない、くびれ部も確認し前方後円墳であることが明らかになった。ただ、道路によって十分な調査はできなかったが10月31日をもって5年にわたる長沖古墳群の調査を終了した。

報告書の刊行があったため、8月から植輪の水洗などの整理もはじめ、調査終了とともに整理の主体を児玉町共和公民館に移し、遺物の復原作業や実測図の図版化などの作業を行ない、11月編集会議を持ち、報告書の基本方針、執筆内容などを検討し金子章を中心として報告書の作成にかかり、3月31日報告書を刊行するはこびとなった。

(三上元一)

II 長沖古墳群の位置と環境

1. 長沖古墳群の位置

長沖古墳群の存在している児玉町は、埼玉県の西北端に位置していて、児玉郡のなかでは中央部にあたる。児玉郡の北側は利根川、西は長野県に源を発する神流川を境として古代の上毛野国である群馬県に接していて、ここまでくると秩父の山々は目の前にせまり、榛名山や赤城山などの上毛の山もすぐ近くにみえる。

児玉郡の面積は200平方キロほどあり、そのなかで児玉町のしめる面積は53.23平方キロで、人口19000人の町である。町の南半分は標高549.2mの不動山や、530.9mの陣見山を中心とする秩父山地に続く山からなり、山の南側は秩父郡長瀨町や皆野町である。そのため町の南の長沖古墳群の近くは丘陵や台地で、町の北側は沖積地で水田地帯となっている。ただ、町の東には標高139.1mの生野山丘陵が残丘として独立して存在する。今回調査の対象となった古墳群のすぐ南には、秩父山地に源を発する身馴川（小山川）が流れ、扇状地が形成されている。調査した古墳の過半数は、この河岸段丘上の標高105mから110mの所に築かれた古墳である。

交通機関としては国鉄八高線の便があり、又、町の中央には群馬県から長野県の佐久にぬける国道254号線がはしり、この付近では鎌倉街道として古くから利用されていた。町の産業はおもに農業で、養蚕の盛んなところであるが、そのほかに瓦の生産でも知られる静かな田舎の町である。（菅谷浩之）

2. 長沖古墳群の歴史的環境

長沖古墳群をとりまく歴史的環境は、実に変化に富んでいる。これは児玉郡のおかれた位置と土地が、古代の地域文化を発達させるのに都合のよい環境にあったからであろう。南は秩父山地に連なる山々で、大里郡寄居町から西にのびる児玉丘陵を控え、東は標高117mの独立した山崎山丘陵が南から北にのび、児玉郡の南と東は丘陵によって地域をくぎられ、郡の中央には標高139mの生野山丘陵と、標高105mの浅見山丘陵の二つの独立した丘陵が存在していて、自然景観に富む。また古代においては古墳文化の栄えた上毛野国と隣接して位置していたことも大きな要因であろう。

丘陵の周辺には小河川が流れていて、これらの河川は古代から重要な灌漑の水源となっていたようで河川沿いに重要な遺跡が多い。美里村を流れる志戸川とその支流の天神川、秩父山地に源をなす身馴川（小山川）それに児玉町の北から、本庄市にかけて流れる女堀や男堀が代表的な小河川である。

児玉郡内の丘陵地帯や台地の多くの場所に、縄文時代の遺跡があり、美里村あたりでは水田にかこまれた、微高地でも住居址が発見されている。ただ遺跡の多いわりには調査例が少なく、美里村北貝戸遺跡（註1）の諸磯期の調査や、児玉町賀家上遺跡の加曾利期の調査が代表的なものである。

長沖古墳群内をみても、古墳群の西側の台地には加曾利E期の土器片が多数散布していて、今回の古墳群の調査でも、加曾利期の遺物の包含層を確認したり、時期は不明であるが、諸磯期の埋設土器を伴

う土壇に切られている住居址、加曾利E期の土壇、それに勝坂や阿玉台期の土器片も出土していて、古墳の墳丘内などにも石器などが多くみられた。(註2)

弥生時代の遺跡は、かつてほとんど調査例がなく、児玉町では僅かに生野山丘陵内のゴルフコースの造成に伴う調査(註3)で数軒、下浅見の飯玉東遺跡(註4)において、1軒の後期の住居址が発見されているのみである。弥生時代の良好な資料としては、郡内では美里村の神明ヶ谷戸遺跡(註5)があり、中期の環濠をめぐらす該期の住居址10軒、後期のもの3軒からなる遺跡が代表的なものである。同時期の遺跡は他にもあるが割合に少ない。

古墳時代にはいと、児玉郡内の遺跡は爆発的に増加する。郡内でも古墳群の調査は、長沖古墳群をはじめとして、代表的なものでは神川村青柳古墳群(註6)、北塚原古墳群(註7)、美里村大町古墳群(註8)、塚本山古墳群(註9)、美里村と児玉町にまたがる生野山古墳群(註10)などがあり、古墳群の内容については、青柳古墳群や塚本古墳群の報告書にくわしく紹介されている。

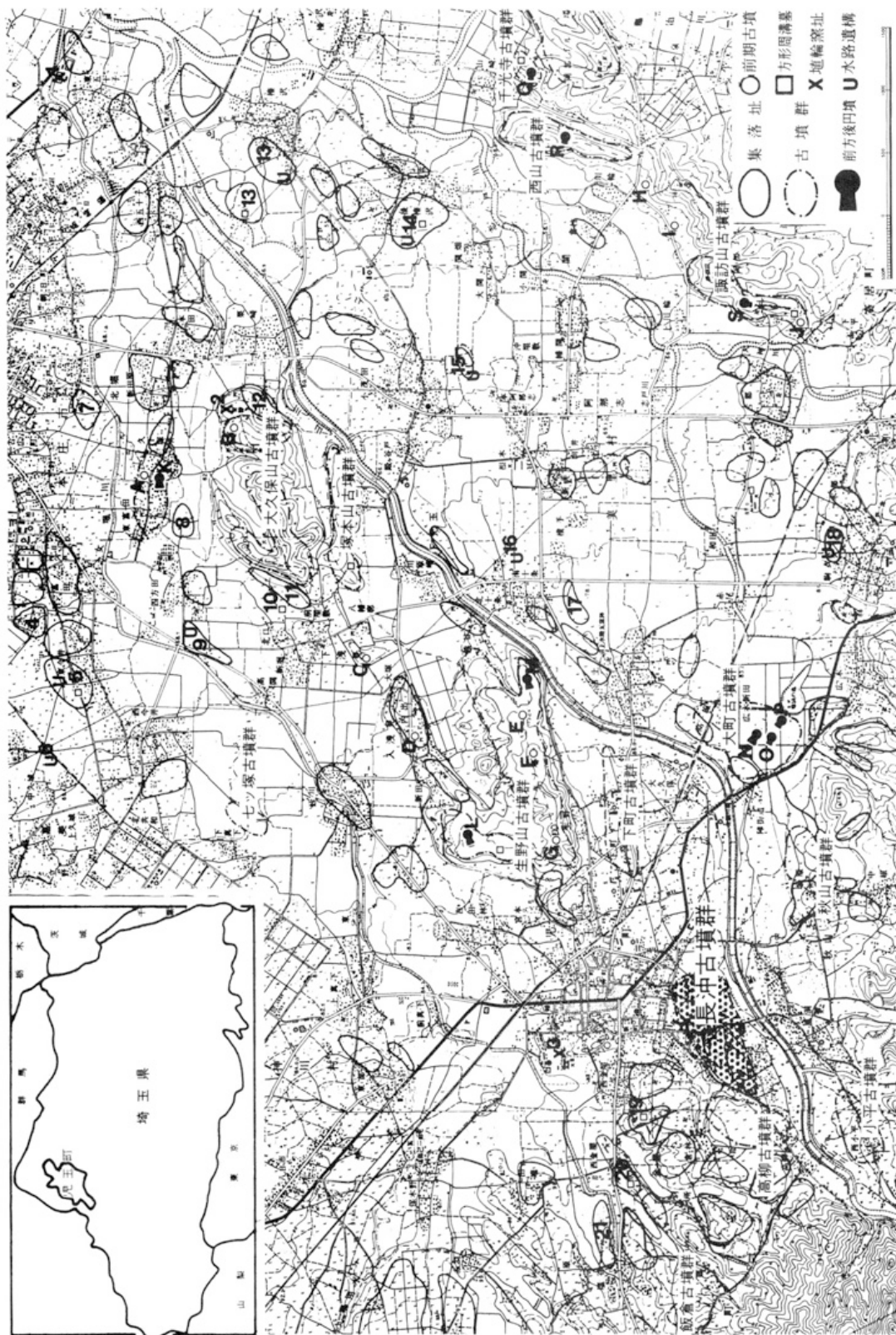
児玉郡内に存在する古墳は実に多く、児玉町だけをとりても、まず生野山古墳群があげられる。直径約50mを測り、5世紀中頃に築かれた將軍塚古墳をはじめ、銚子塚古墳と生野山16号墳の2基の前方後円墳をもつ大古墳群である。丘陵の南側のすぐ下の沖積地にも、近年まで多数の古墳を擁した古墳群(仮称下町古墳群)の存在が知れるが、現在は1基を残すのみである。

長沖古墳群の西には、高柳古墳群があり今でも43基程残っている。身馴川の南には小平古墳群や、美里村に近い秋山地区には、庚申塚古墳(註11)を中心とする秋山古墳群がある。町の南の飯倉地区の丘陵には飯倉古墳群が存在しているように、丘陵や台地に多くの古墳をみることができる。児玉郡内の各地にも児玉町と同じような立地条件の基には必ずと言って良い程古墳が分布している。丘陵地帯ばかりでなく、蛭川地区の七ツ塚古墳群は今では1基を残しているだけで様子を知るべくもないが、水田地帯の微高地に築かれた古墳群である。

古墳群以外でも、単独に存在している古墳で重要なものがある。入浅見の鷺山古墳は直径50mの円墳で、5世紀前半から中頃に築かれた古墳と推定され、美里村長坂聖天塚古墳(註12)と時期を同じくするほどの県内でも古い古墳であるとみられる。同じく入浅見の金鑽神社古墳も5世紀代の古墳とみられる直径40mほどの円墳であり、両墳とも児玉町の代表的な古式の古墳である。

方形周溝墓も児玉町では前述の塚本山古墳群や生野山古墳群中での調査をはじめ、飯玉東遺跡、金屋池脇遺跡(註13)、枇杷橋遺跡(註14)などで発見されている。

- | | | | |
|-------------|-------------|-----------------------------|----------------------------|
| A. 公柳塚古墳 | K. 七色塚古墳 | 2. 宍勝寺裏埴輪窯址 | 12. 東谷遺跡(和II~鬼II) |
| B. 前山2号墳 | L. 生野山銚子塚古墳 | 3. 八幡山埴輪窯址 | 13. 大寄・西浦北遺跡(五~鬼II.水路・五) |
| G. 鷺山古墳 | M. 生野山16号墳 | 4. 西富田新田遺跡(和泉II) | 14. 地神祇・石蒔遺跡(五~鬼I.水路・五,鬼I) |
| D. 浅見金鑽神社古墳 | N. 大町9号墳 | 5. 諏訪遺跡(五領,和II,鬼高I.水路・鬼III) | 15. 日の森遺跡(五.水路・五) |
| E. 生野山9号墳 | O. 大町8号墳 | 6. 久城前遺跡(鬼III) | 16. 前畑遺跡(和) |
| F. 生野山將軍塚古墳 | P. 大町兩子塚古墳 | 7. 笠ヶ谷戸遺跡(和II) | 17. 樋之口遺跡(和II~鬼I) |
| G. 生野山三角点古墳 | Q. 千光寺1号墳 | 8. 下田遺跡(五,鬼I~鬼III) | 18. 北貝戸遺跡(五,和.水路・五) |
| H. 川輪聖天塚古墳 | R. 西山5号墳 | 9. 後張遺跡(五~鬼I.水路・鬼III以降) | 19. 池脇遺跡 |
| I. 長坂聖天塚古墳 | S. 諏訪山古墳 | 10. 飯玉東遺跡 | 20. 枇杷橋遺跡(和I) |
| J. 安光寺2号墳 | 1. 赤坂埴輪窯址 | 11. 雷電下遺跡(五,鬼II. III) | 21. ミカド遺跡(五,鬼I) |



第1図 長沖古墳群の位置と周辺の古墳時代の遺跡 (1 : 50000)

古墳時代の集落も多く、とくに町の北にある水田地帯の微高地に分布し、五領期の雷電下遺跡（註15）や五領期から鬼高期にかけての住居址が200軒ほど検出された後張遺跡（註16）が調査されている。また町の西の金屋地区に存在していたミカド遺跡（註17）は鬼高期を中心とする集落で、古式須恵器を多く出土したことで知られている。

奈良・平安時代の遺物の散布している場所もきりがなが、羽釜を多く出土した枇杷橋遺跡や御林下遺跡（註18）などが調査され、飯倉では瓦の窯跡が知られている。町の北の水田地帯には、現在でも条里制の跡がよく残っている。そのほか、児玉町周辺は武蔵武士の発祥として重要な位置にあって、町の中央には15世紀の初めに築かれたといわれる、県指定の雉ヶ岡城もあり、各地に中世武士が存在していたことは吾妻鏡などに記されている。（菅谷浩之）

- 註1 菅谷浩之・坂本和俊『北貝戸遺跡』美里村教育委員会 1977年
- 註2 菅谷浩之他『長沖古墳群』一第4次発掘調査一児玉町教育委員会 1979年
- 註3 小沢国平・菅谷浩之・駒宮史朗「生野山古墳群発掘調査概要」『第6回遺跡発掘調査報告発表要旨』埼玉考古学会他 1973年
- 註4 駒宮史朗・大和修「雷電下、飯玉東」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』IX 埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集 埼玉県教育委員会 1979年
- 註5 坂本和俊・岡本幸男「神明ヶ谷戸遺跡発掘調査概要」『第13回遺跡発掘調査報告発表要旨』埼玉考古学会他 1980年
- 註6 菅谷浩之他『青柳古墳群発掘調査報告書』埼玉遺跡調査会 1973年
- 註7 増田逸朗「北塚原古墳群発掘概要」『第4回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他 1971年
- 註8 菅谷浩之・笹森健一『広木大町古墳群調査概報』美里村教育委員会 1975年
- 註9 増田逸朗・小久保徹他「塚本山古墳群」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』VI 埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 埼玉県教育委員会 1977年
- 註10 註3と同じ
- 註11 小沢国平『児玉町庚申塚古墳発掘調査記録』児玉町教育委員会 1958年
- 註12 菅谷浩之・坂本和俊「美里村聖天塚古墳の調査」『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他 1975年
- 註13 小沢国平「児玉町金屋池脇遺跡」『埼玉考古』第7号 埼玉考古学会 1969年
- 註14 菅谷浩之・駒宮史朗他『枇杷橋遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会 1974年
- 註15 註4と同じ
- 註16 増田逸朗・宮崎朝雄「児玉町後張遺跡の調査」『第10回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他 1977年
- 註17 坂本和俊「ミカド遺跡の調査」『第11回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他 1978年
- 註18 駒宮史朗他「御林下」『埼玉県遺跡発掘調査報告書第13集』埼玉県教育委員会 1978年

3. 長沖古墳群及び高柳古墳群の分布

児玉町太駄の奥に源を発する身馴川（小山川）は、ちょうど長沖地区あたりで山間部をぬけ、町の南を東流しながらその水を平野部へと注いでいる。この身馴川の北岸に分布する長沖及び高柳古墳群は、その広大な面積とそこに密集して存在する古墳の数で県北でも有数な古墳群として知られている。付近一帯を総括する旧金屋地区には古く152基の古墳が存在し、そのうち字長沖・高柳地区については5基の前方後円墳を含む136基の古墳が存在していた（註1）。その後、一連の盗掘や耕作等による破壊を受け、消滅してしまった古墳も少なくないが、同地区の台地上には現在でも数多くの古墳を見ることができる。1975年以後の2度の分布調査と今回の都市計画に伴う5次に亘る発掘調査で、全く消滅してしまったものも含め、現時点では総計157基の古墳が確認されている。しかし、現状での古墳群は保存状態が極めて悪く、削平されてどうにか墳丘と認められるものや半壊以上されているものが大部分であり、保存の良好なものは数える程しかない。しかも土取りや宅造による破壊は進行中であり、ここ2、3年の間にも何の処置もされないまま消滅してしまった古墳も何基かあった。この様に本古墳群は決して楽観視できない状態にあり、早急になんらかの保存対策を取らなければいずれ絶滅の危機に瀕することは明白であろう。

長沖及び高柳古墳群は、同地区の字名を取った呼称であるが、現在字長沖・高柳は多少入りこんでいるため、はっきりと古墳群を長沖地区と高柳地区とに別け難い。又、古墳群を所属地区だけによって別けて扱うのは疑問であり、且つ本古墳群の様に連続して存在する場合は特に問題がある。そこで、できるだけ立地的に大別した方がより良いという観点から、本古墳群の存在する台地を北から分断する様に入る大きな谷を境として両群を分けることにしている。現在、この谷に沿って児玉金沢秩父線（県道76号）が通っており、便宜的にこの西を大きく高柳古墳群、東を長沖古墳群と呼ぶことにする。両古墳群は巨視的にみれば一つの連続する古墳群であり、両群の総称としては、従来よりの長沖・高柳古墳群と呼ぶことにする。

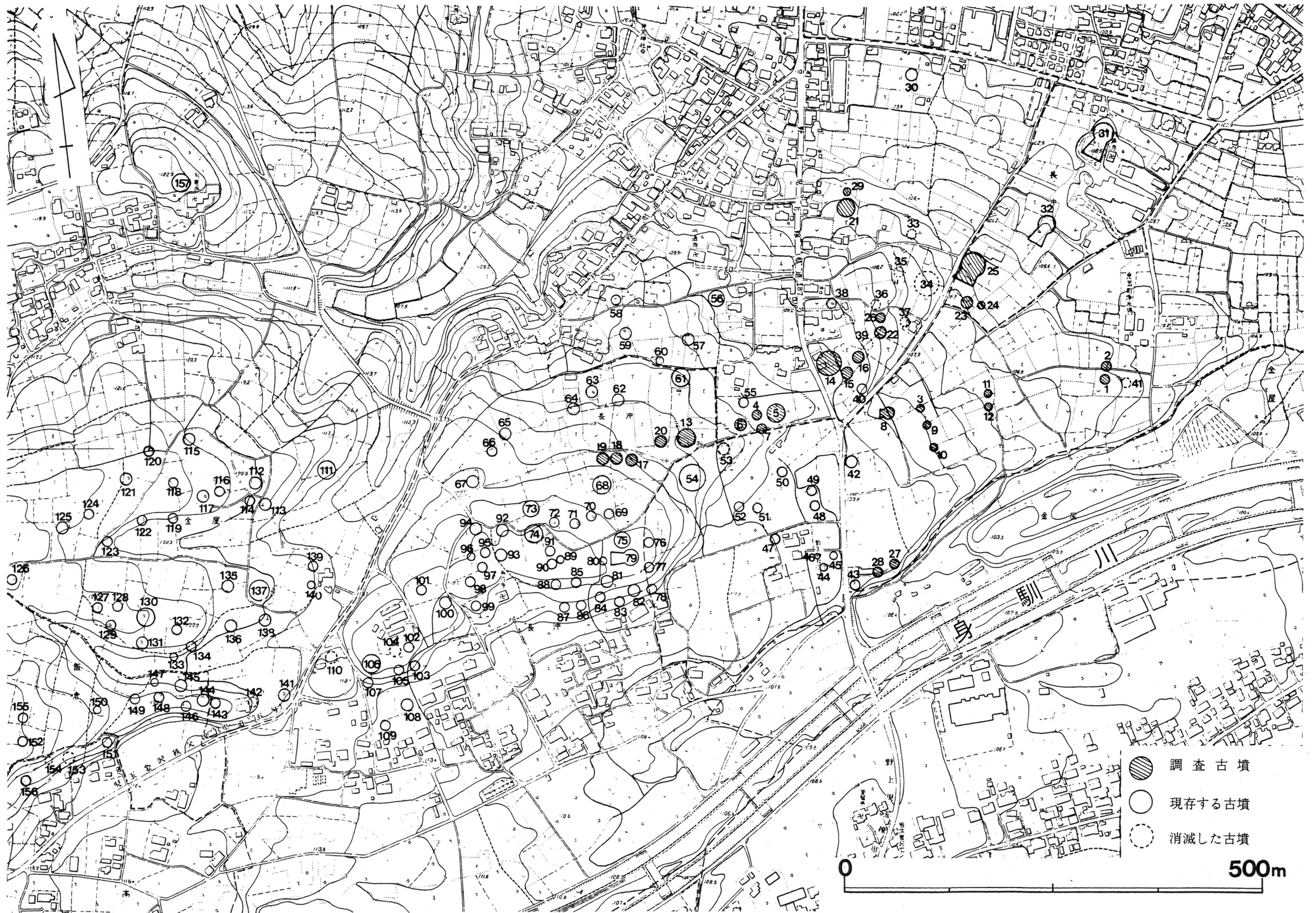
長沖・高柳古墳群の大部分の古墳は、南の丘陵地帯より続く洪積台地上に位置し、残りの古墳が台地の南を東流している身馴川によって形成された河岸段丘上に位置している。この台地と河岸段丘は東に向ってゆるやかに傾斜し、外見上ははっきりと両者が別けられるのは22号墳あたりまでで、その先へ行く程境は不明瞭になっている。しかし、第3次の調査で明らかになった23号墳の北数m程でロームの基盤が切れ、その南が氾濫土となっていることからすればこのあたりまで台地が続いていることがわかる。又、台地の北側の先端は21号墳の付近で、この古墳の北30m程で段をなして急に低くなっている。逆に台地と河岸段丘は、西へ行く程その段差を増し、80号墳あたりでは3m程の比高差がある。台地の標高は高柳古墳群の最高所で124m、長沖古墳群の中央部に位置する79号墳（十兵塚古墳）あたりで118m、21号墳あたりで106mである。長沖地区の台地上に立地する古墳は、身馴川に面する台地肩部にやや集中する傾向が認められるものの、58号墳の様に北側の谷に面するものもあり、台地上に多少の粗密をもって広く分布している。これに対して、河岸段丘上に位置する古墳は、飯玉神社の東に多く存在している。西側の地区には現在長沖の集落があり、それによって消滅してしまったものもあると考えられるが、段丘上の古墳の分布の傾向としてはやはり東部のやや広がった所に多く立

地していることが窺えよう。高柳地区の古墳は、西から三つに分かれて延びる尾根上にそれぞれ15～17基が平均に分布するが、下段の河岸段丘面に位置する古墳は一基も確認されていない。又、この北方の谷を隔てた別の台地上には157号墳が一基のみ所在している。付近には他に古墳が全く認められず、独立墳の様相を呈しており、あるいは別系統の古墳として捉えられるかも知れないが、ここでは一応広義での高柳古墳群に含めておいた。このように古墳は、身馴川に沿って南北0.5km、東西1.5kmにわたって細長く分布し、東は児玉浄水場付近まで及んでいる。この東端付近は西部に比べて平坦地で、比較的早くから開発が進んでしまって古墳は見られないが、埴輪片の散布が多少認められることからこの東にも古墳の存在が予想されている。

前述した様に、長沖・高柳古墳群には5基の前方後円墳が存在したことが知られており、その内訳は長沖地区に3基、高柳地区に2基となっている。しかし、現状では、すでに述べた如く谷を境として両群を分けた場合、西側の高柳古墳群には1基の前方後円墳もみられず、すべて長沖古墳群内に所在している。本古墳群内については、調査で5基の前方後円墳がすでに明らかになっているが、他に110号墳が聞き込みの結果、前方後円墳であった可能性が高い。尚、110号墳が消滅したのは余り古くないことから、前記の5基の古墳は、8号墳を除いたそれぞれの古墳に当てることができると思われる。この様に長沖地内には6基の前方後円墳が確認されているが、かつて円墳であると思われた8号墳が帆立貝式前方後円墳であった様に、現在円墳と思われている中にもこの形式のものが存在する可能性がある。

前方後円墳は、確認された6基の内、円満寺地内に位置する31号墳を最北として、32・25号墳の3基が主軸をほぼ同方向に向けてながら、東端近くに直線的に並んで位置している。この3基は調査で明らかになった25号墳を除いて詳細は不明であるが、どれも墳丘長35m以上を測るものと思われる。特に25号墳は前方部の発達した古墳で墳丘長40.0mを有することが知られている。又、31号墳は、現状では墓地となっているため破壊が著しく明確な形態等は不明であるが、50m級の規模を有する古墳になるかも知れない。ここより280m程南西に離れて墳丘長26.3mの8号墳が主軸を東西方面に向けて河岸段丘上に位置している。さらに西には横穴式石室を内包すると考えられている墳丘長37mの十兵衛塚古墳が、古墳群の中央部の台地の縁に沿って主軸を東西に向けて位置している。110号墳については消滅してしまっているので規模は明らかでないが、長沖の西端に位置し、やはり東西に主軸を向けていた様である。

大型円墳は、調査で明らかになった14号墳をはじめ、34（消滅）・54号墳等30～40m級のものが3～4基みられる。そのうち、14号墳は出土遺物から5世紀代の築造と思われるもので、本古墳群の先駆的なものである。十兵衛塚古墳の北東90mに位置する54号墳は、形態上から竪穴系の主体部を有するものと思われ、付近の人の話によっても箱式石棺が存在したということであり、時間的に14号墳に続くと思われる古墳である。34号墳については古い地籍図によって知られた古墳であり、詳細は明らかでないが、その存在は聞き込みでも確かである。削平された際に横穴式石室に使用された様な河原石はみられなかったという話からすれば、竪穴系の主体部の可能性が高い。さらに34号墳と近接して存在する25号墳の調査を行った際に拡張したトレンチ内より、古い様相を呈する埴輪片が出土している。出土地点の位置からしても34号墳に伴う可能性が最も強く、そうであれば5C代に溯る古墳に34号墳の存在を当てることができる。14・54号墳との関連で興味深いものとなろう。



第2図 長沖・高柳古墳群分布図 (1:5000)

長沖古墳群は、前記の前方後円墳や大型円墳を中核に、大部分が中小規模の円墳で構成されているが、系列的に捉えられると思われる古式古墳も存在し、より様相を複雑にしている。(山崎 武)

註1 『埼玉県史』 第1巻 1951

長沖・高柳古墳群古墳一覧

古墳	径(m)	高さ(m)	埴輪	備考	古墳	径(m)	高さ(m)	埴輪	備考	古墳	径(m)	高さ(m)	埴輪	備考
1	16		○	本報告掲載	30	10.1	1.6			59	12.5	2.3	○	
2	15		○	"	31	50.4	2.5	○	前方後円墳	60	11.8	1.2	○	
3	14	1.2	○	"	32	32.8	2	○	"	61	23.4	4.2	○	
4	18	1.2	○	環状1号線調査 袖無型横穴式石室	33				消滅	62	15	2.7	○	
5	20		○	" 周溝一部確認	34			○	"	63	17.4	2.9		
6	19		○	" "	35				"	64	13.3	2.8		
7				" "	36				"	65	11	1.8		
8	26.3	1.5	○	本報告掲載 帆立貝式前方後円墳	37				"	66	8	1.2	○	
9	10~15	1.5		"	38	7.1	1.5	○		67				消滅
10	12	1.5		"	39				消滅	68	20.6	1		
11	14	0.5		"	40	7.7	0.5	○		69	10.6	1.2	○	
12	11	1	○	"	41				消滅	70	11.3	1.9	○	
13	21	3.2	○	環状1号線調査 袖無型横穴式石室	42	9.9	1.5			71	9.9	2		
14	34		○	本報告掲載	43				消滅	72	13.7	2.3	○	
15	19		○	"	44	10.9	1.1			73	14.5	2.1	○	奥壁露出
16	22			"	45	14.8	1.9			74	16.8	1.6	○	
17				環状1号線調査 周溝一部確認	46	12.2	1.7			75	8	1.4		
18	23		○	" "	47	13.8	1.4			76	8.5	1	○	
19				" "	48	12	1.1			77	9.5	1.5		
20	24		○	" "	49	15.6	1.1			78	8.2	1.6	○	
21	31	2.5	○	本報告掲載	50	10.1	1.7			79	37	3.5	○	前方後円墳・十兵衛塚古墳
22	17	2.1	○	"	51	10.7	1.8			80	13.2	0.8		
23	20	1.7	○	"	52	8	1.7	○		81	12.5	1.6		横穴式石室・開口
24			○	"	53				消滅	82	8.6	1.5		
25	40		○	" 前方後円墳	54	31.4	5.3			83	17	1.6		
26				"	55	8.5	1.0			84	8.5	1.2		
27	16	1.2	○	"	56	18.8	2.7			85	14	1.3		
28	14.5	1	○	"	57	6.6	1.2			86	13.5	1.7	○	
29				"	58	12.8	2.3			87	7	1.2	○	

古 墳	径 (m)	高さ (m)	埴 輪	備 考	古 墳	径 (m)	高さ (m)	埴 輪	備 考	古 墳	径 (m)	高さ (m)	埴 輪	備 考
88	20	1.85			112	12	1.7			136	11.9	2.5		
89	8.6	1.2			113	9.4	2.4			137	35	2.5	○	
90	13.8	1.3			114	20.6	1.5	○		138	16.8	3.1	○	
91	9.8	1.2			115	16	1.8			139	15.2	1.9	○	
92	18.5	1.5	○		116	10.5	2.1			140	5.1	0.9	○	
93	18.5	1.8			117	11.8	3.5	○		141	15.4	1.8	○	
94	26.8	1.75	○		118				削 平	142			○	消 滅
95	11	1.3			119	14.5	2.2			143	11.3	1.9		
96	5	0.9			120	8.5	1			144	10.7	2.1	○	
97	14.2	1.7			121	12.6	3.1			145	19	4	○	
98			○	削 平	122	13.8	2.5	○	横穴式石室・開口	146	5	0.6		
99	10.5	1.5	○		123	3.7	0.3			147	6.2	0.9		
100	10.5	1.1	○		124	12.2	0.6			148	12.8	1.9		
101	12.6	0.8	○		125	10.7	1.5		横穴式石室・開口	149	11.8	1.8	○	
102	15.6	1.5	○		126	15	2.2			150	5.7	1	○	
103	14.2	1.6			127	14.5	0.4	○		151			○	消 滅
104				消 滅	128	19.2	1.6	○		152				
105	14.6	2.1			129	15.2	2.6	○		153	10.6	2.3	○	
106	26	3.3			130	21.5	3.7	○		154				消 滅
107	12.8	1.6			131	16.8	4.1	○		155	9.3	2.1	○	
108	15.9	4.2			132	11.5	2.3			156	12.3	1.5	○	
109	14.8	0.9			133				消 滅	157	30	3		
110				消滅 前方後円墳?	134	10.5	0.9							
111	31.2	3.4	○	横穴式石室・開口	135	16.7	1.7	○						



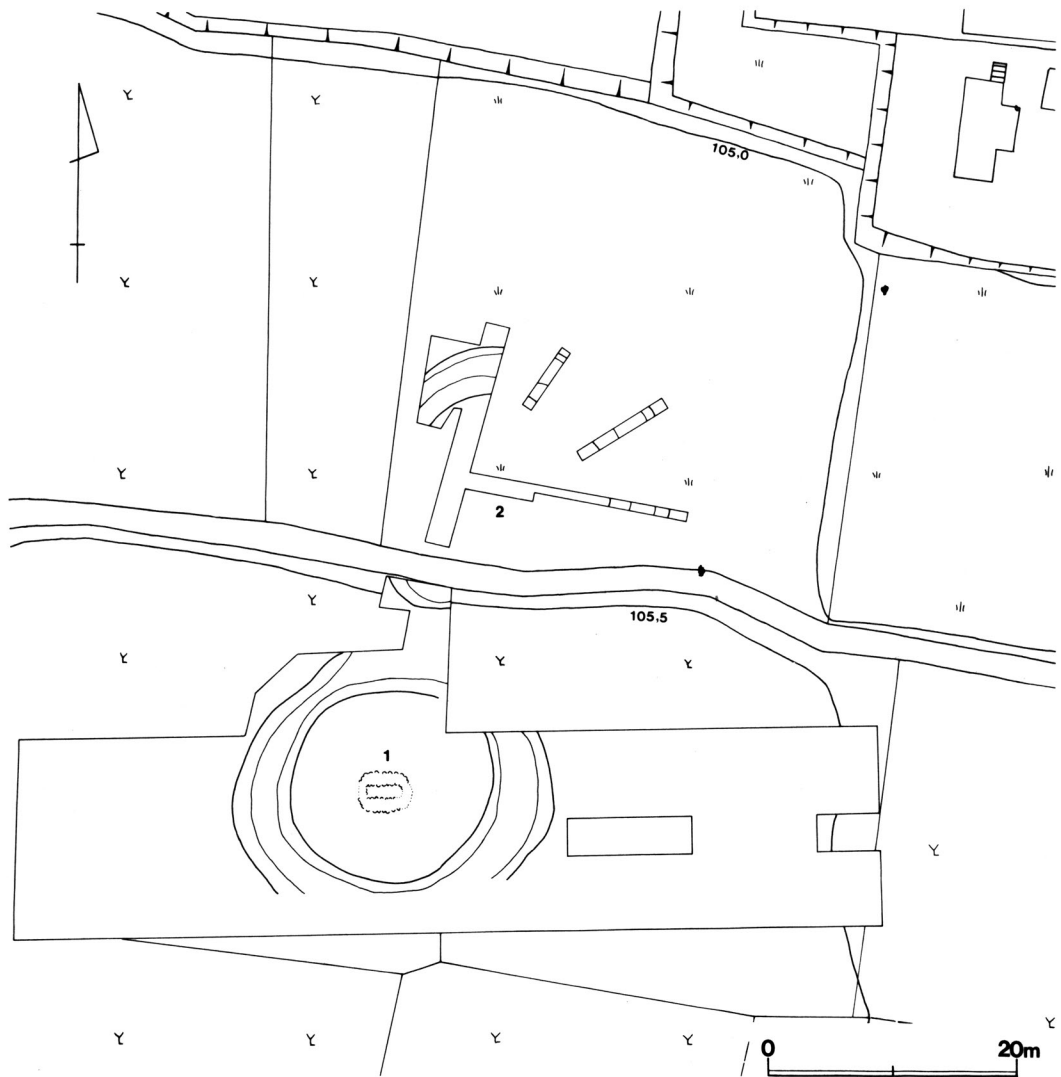
第3図 調査古墳の位置と周辺地形図 (1:4000)

III 各古墳の調査

1. 長沖1号墳

古墳の立地と現状

1号墳の周辺は平坦な土地で、桑畑になっていた。現在、この付近までくると古墳はみられず、古墳群として墳丘の残っている古墳から約250mほど東に離れていて、調査の段階では、古墳址の調査になるとは思いもよらなかったほどである。なお、調査地点は身馴川段丘崖から150mの距離であるため、畑は砂利が多かった。



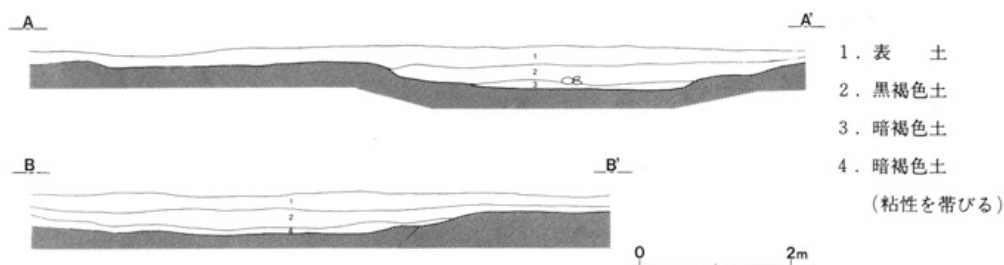
第4図 長沖1・2号墳全体図(1:600)

区画整理事業でこの地域にも道路が作られるため、遺跡確認のための分布調査をおこなったところ、わずかではあったが、土器片が散布していたため集落址の存在を想定して、道路敷内の調査を実施した。

道路敷に沿って、住居址確認用のトレンチを設定し遺構の検出につとめた。氾濫を受けた粘土の土と砂利で遺構確認に手間どったが、住居址は発見されなかったものの、河原石や周溝状の溝を発見して、古墳址であることが判明した。



第5図 長沖1号墳全測図(1:200)



第6図 長沖1号墳周溝土層断面図(1:100)

形態

墳丘はすでに削平されてしまい、墳丘から見た古墳について述べることはできないが、周溝が比較的良く残っていたので、おおよその形態を知ることができた。ただ、調査範囲が道路幅の15mに限定されていたため、周溝の全掘は不可能であった。さらに周溝を確認すべく、道路敷の全面を削ったが、道路予定地内の南側は農業用水路のパイプ敷設のため、深く掘られていて長さ19m、幅3mにわたって周溝が壊されていた。

また、この付近は身馴川の氾濫を受けていて粘質の土で、土層が不明確なところもあり、場所によっては遺溝を確実につかむことが困難なところもあった。周溝は褐色の粘土層を20cmから50cmほど掘り込んだ全体に浅い溝で、立ち上りは外側、内側ともゆるやかで、溝はそれほど整然としたものではない。

周溝を調査中に底の部分から土師器も出土し、竪穴系の主体部であることが判明したため、正確な古墳の規模や形態を知るために、道路敷以外の北側にトレンチを設定し拡張した。ところが、北側の周溝立ち上りはトレンチを入れても判明せず、さらに拡張をかきねたが、しっかりしたものは確認されず、1号墳から約1mほど北で、2号墳の周溝を発見した。1号墳の北側の周溝の外側は、おそらくゆるやかな立ち上りで、浅い掘り込みであったろう。

周溝の底部は、全体に一樣なものではなく、平らな面もあったものの、不規則に掘られた部分が多い。溝の上幅は東側で5.8m、西側で4.8m程度で、底幅は西側に比べて東側の幅が広く、東で2.7m西で1.4mほどである。周溝内には河原石が多く入っていたが、主体部や墳丘に使用された石であったろう。

これらの結果から、1号墳は周溝をふくめ径24mほどの円墳であることがわかった。

墳丘については、主体部の位置や、古墳の直径からみても、それほどの高さのある古墳ではなかったようである。

主体部

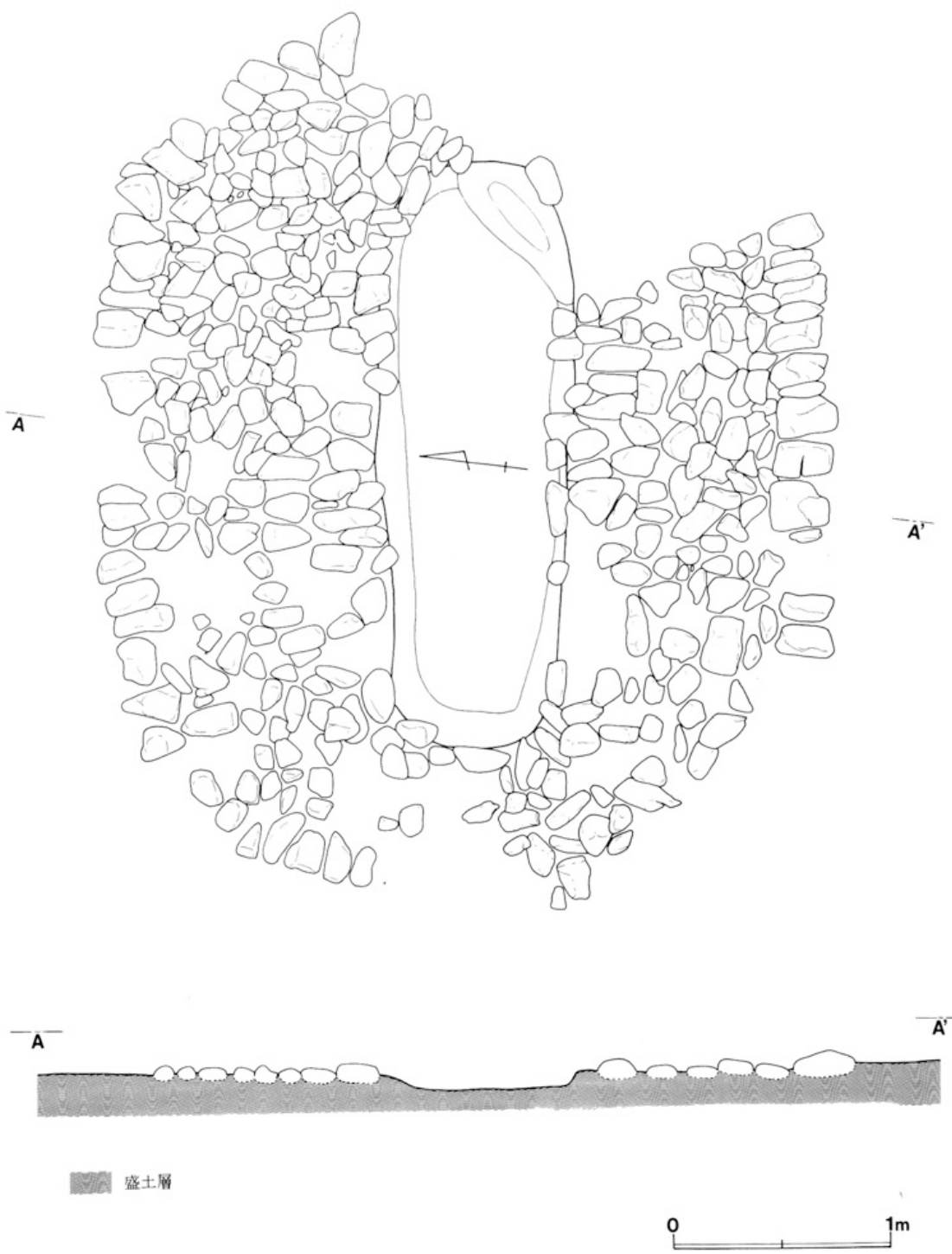
墳丘は早い時期に行なわれたであろう開壘の時に、崩されてしまって残ってはいなかったが、主体部も破壊されたことは、古墳の存在していた場所の畦の下から、主体部に使用されていたと思われる河原石が帯状に埋められていたことでもわかる。

調査の結果、主体部の石積みまでは残っていなかったが、さいわい根石に使われたとみられる河原石が、多少残っていたため、おおよその主体部を知ることができた。

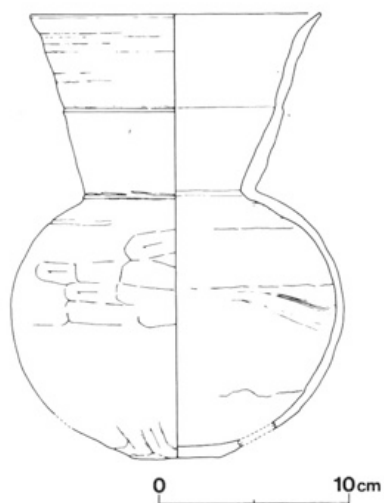
主体部周辺にみられた河原石は、いずれも25cm×15cmや18cm×12cm程度のもので、一部で河原石が三個ほど積まれていた程度で、主体部の側壁にあたる部分の石も、いくつかが規則的にならなっていたぐらいである。

東側では、石がだいぶとりはらわれてしまっていたが、主体部は河原石の配置からみると、長さ2.5m、幅60cm前後であると考えられる。正確な埋葬施設の規模を知ることができなかったが、幅の狭い小規模な石室であると思われる。

主体部の根石ともみられる石をはずすと、主体部の中心には掘り方が存在する。掘り方の規模は東西に2.7m、幅は中央部で90cmで掘り込んでいるとはいっても、5cmから8cmほどの浅いものである。



第7図 長沖1号墳主体部実測図(1:30)



第8図 長沖1号墳出土土器(1:4)

なお、主体部の根石とみられる河原石から内側に、10cmから20cmの幅で粘土が薄く敷かれている。

主体部を取り囲む後込めに使用された様な河原石はよく残っていた。主体部の周囲に小判形状に配され、外側の河原石は規則的に配列されている。この外側と主体部の間に入れてあった石は雑然と配されているが、石が敷かれていた幅は南で1.3mほどで、全体的には東西4.2m、南北3.5mの範囲である。

このような、横穴式石室の控え積みと思われるような石が検出されたが、横穴式石室の場合は小砂利が多く入れられている。本古墳の場合は小砂利はみられず、また横穴式石室の場合、いずれも側壁の根石に大きな石を使用しているが、本古墳は小さな河原石を使用している。

これらからみると、1号墳の主体部は竖穴系の主体部であることは確かで、緑泥片岩もみあたらず、また主体部に片岩を埋め込んだともみあたらなかったことから、河原石による礫層のような主体部であろう。

出土遺物

埴輪

墳丘が削平されていたわりには埴輪列はよく残っていたほうである。ただ、東側の半分には全くみられなかった。古墳築成時にはこの部分にも埴輪が存在していたが、古墳削平の際に失われたのであろう。西側でも部分的に失われていたが、3箇所にわたって埴輪列がみられた。

北側寄りでは馬形埴輪の脚部が二個体分認められた。他の二箇所では円筒埴輪のみで、南側では6mの範囲で埴輪列が残っていた。円筒埴輪のほとんどは基底部のみ残っているものが多かったが、しっかりした位置がつかめたのは15本ほどで、20cm程度の間隔で存在していた。なお、北側の周溝の内側から多数の破片が出土しているが、なかには馬や人物埴輪もみられた。周溝内においては他の部分からはほとんど出土していない。

土器(第8図・図版70-1)

周溝の西側で外側の周溝立ち上り部分より土師器広口壺が1点出土した。

土師器広口壺 器高23.3cm、口径15.3cm、胴部径17.2cmのもので最大径は胴部中央にある。口縁部は直線的に外傾し、口唇部に至って僅かに外反する。口縁部のほぼ中央には稜が巡る。

口縁部内外面は横撫でが施されている。胴部外面は篋削り、同内面は横撫で調整による。胴部内面には一部輪積み痕が残るが、比較的丁寧なつくりである。

色調は赤褐色を呈し焼成は良好である。胎土はわずかに微砂を含む。

(菅谷浩之)

2. 長沖2号墳

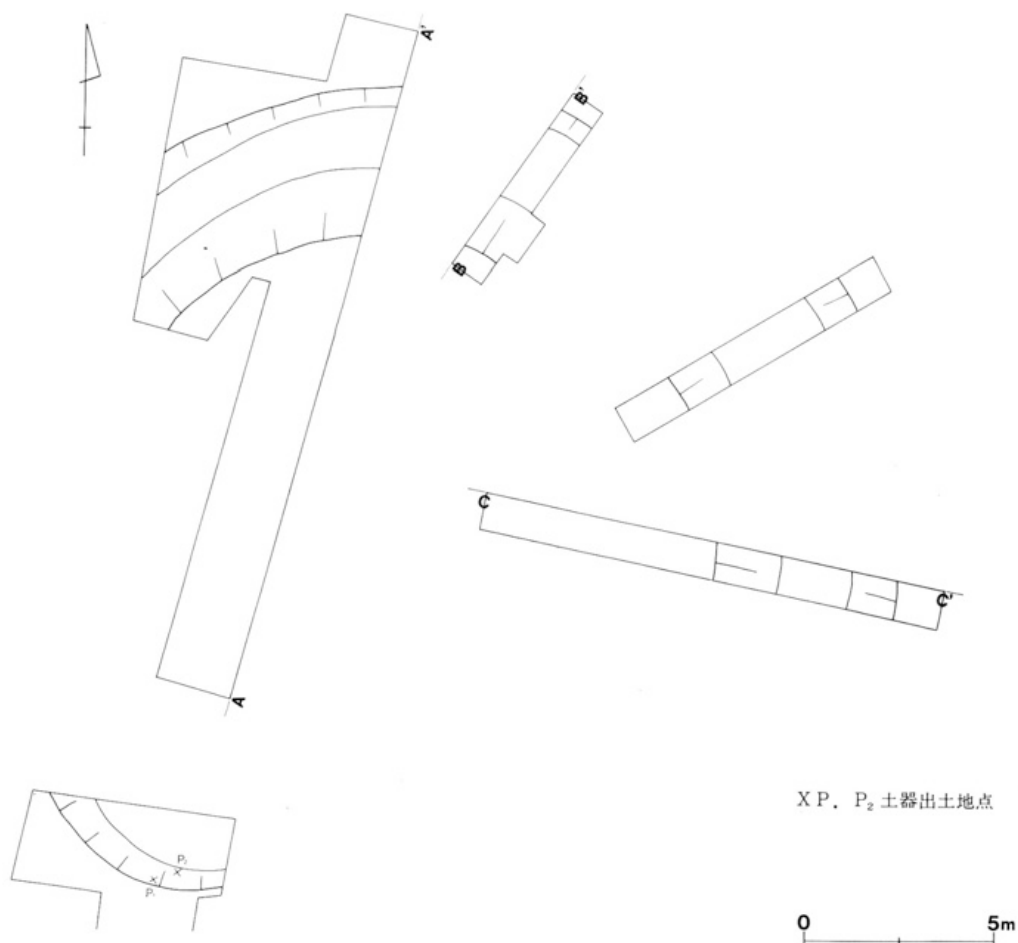
古墳の立地と現状

1号墳北側周溝の確認調査にてまどったため、さらにトレンチを北側に延長したことによって発見された古墳である。1号墳とは約1mほどしか離れていない。近接関係にあった古墳で、1号墳と同じく、調査に入るまではここに古墳が存在していたということは、まったくわからず平坦な場所であった。

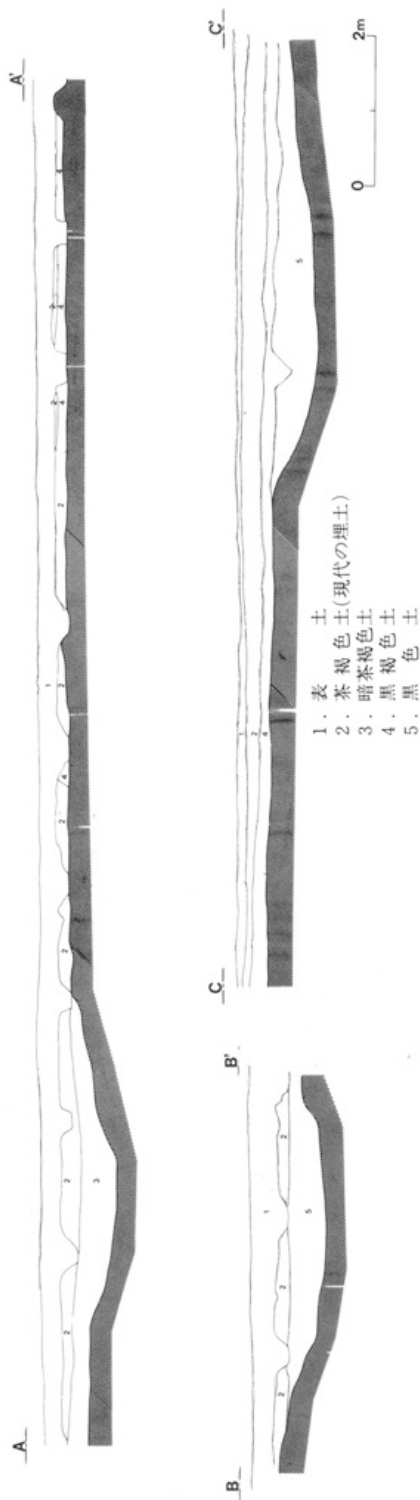
なお、古墳の存在していた場所は休耕地になっていたため、荒地になっていて墳丘の盛土も判明できなかった。

形態

1号墳の調査のために入れたトレンチに、2号墳の南側の一部の周溝がかかり、古い須恵器が出土したために、古墳の形態を知るべく4本のトレンチを設定して調査した。その結果、径23.1mの小規模な円墳であることがわかった。



第9図 長沖2号墳全測図(1:200)



第10図 長沖2号墳周溝土層断面図(1:100)

周溝は幅4.4mほどで、深さは表土から1mほどあり、粘土質の暗茶褐色の土を掘り込んでいる。溝の立ち上りは内側、外側ともなだらかで、溝の堆積土は黒褐色の粘土質の土である。

主体部

墳丘はすべて削平されてしまっていて、何も残っていなかった。周溝を確認するためのトレンチを中央に延長してみたが、そのかぎりでは主体部は認められず、おそらく1号墳と同タイプの竪穴系の石室であったとみられる。

出土遺物

埴輪

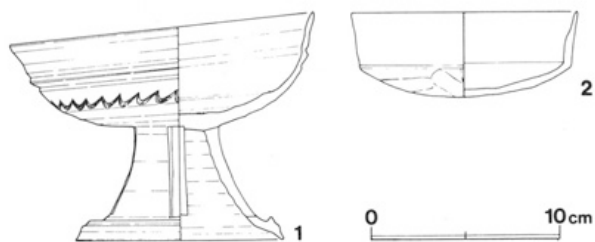
墳丘は削平されて存在せず、1号墳のように現在の表土を削って埴輪列の調査を行ったのではなく、いずれも周溝の調査の際に各トレンチより出土したもので、埴輪の状態を知る資料を得ることはできなかったが、各トレンチから出土しているため、埴輪列は一周していたものであろう。

土器(第11図・図版70-2,3)

周溝南側の外側立ち上り部より、土師器杯、須恵器無蓋高杯が出土した。

土師器杯(2) 口径11.9cm、器高4.5cmで、口縁はほぼ直に立つ。体部外面は篋削りにより丹念に調整されている。胎土、焼成とも良好で、色調は橙褐色を呈す。

須恵器無蓋高杯(1) 口径16.1cm、脚径10.8cm、器高12.6cmで、脚部四方に方形透しをもつ。口縁部と体部とは上下に2本の沈線をもつ稜により分けられ、体部には簡略化された波状文が巡る。焼成はやや甘く、灰褐色の部分が多い。また、坏部は若干歪んでいる。(菅谷浩之)



第11図 長沖2号墳出土土器(1:4)

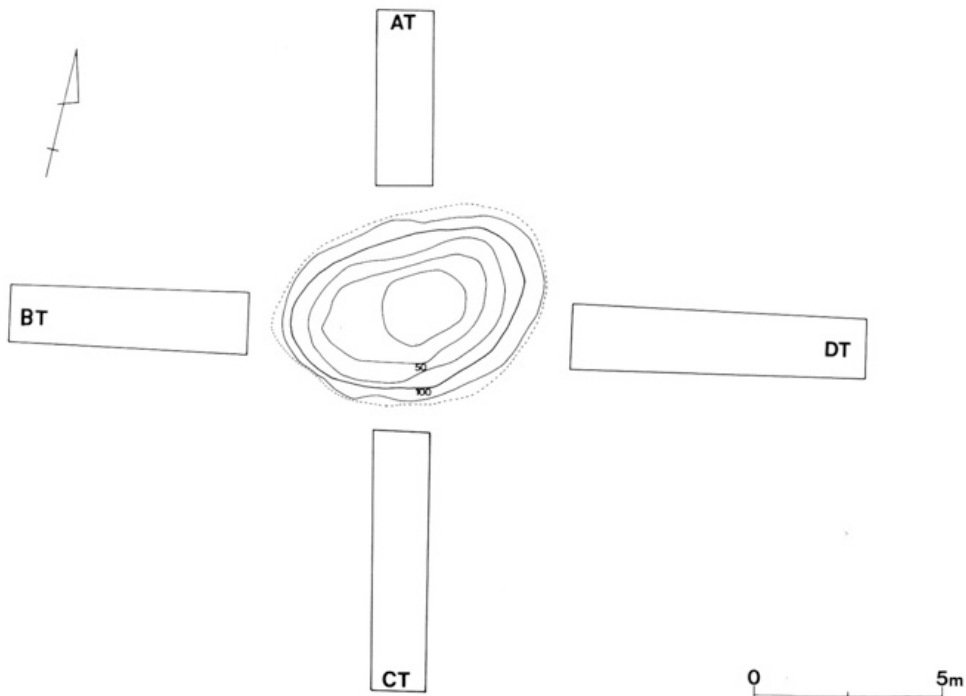
3. 長 沖 3 号 墳

古墳の立地と現状

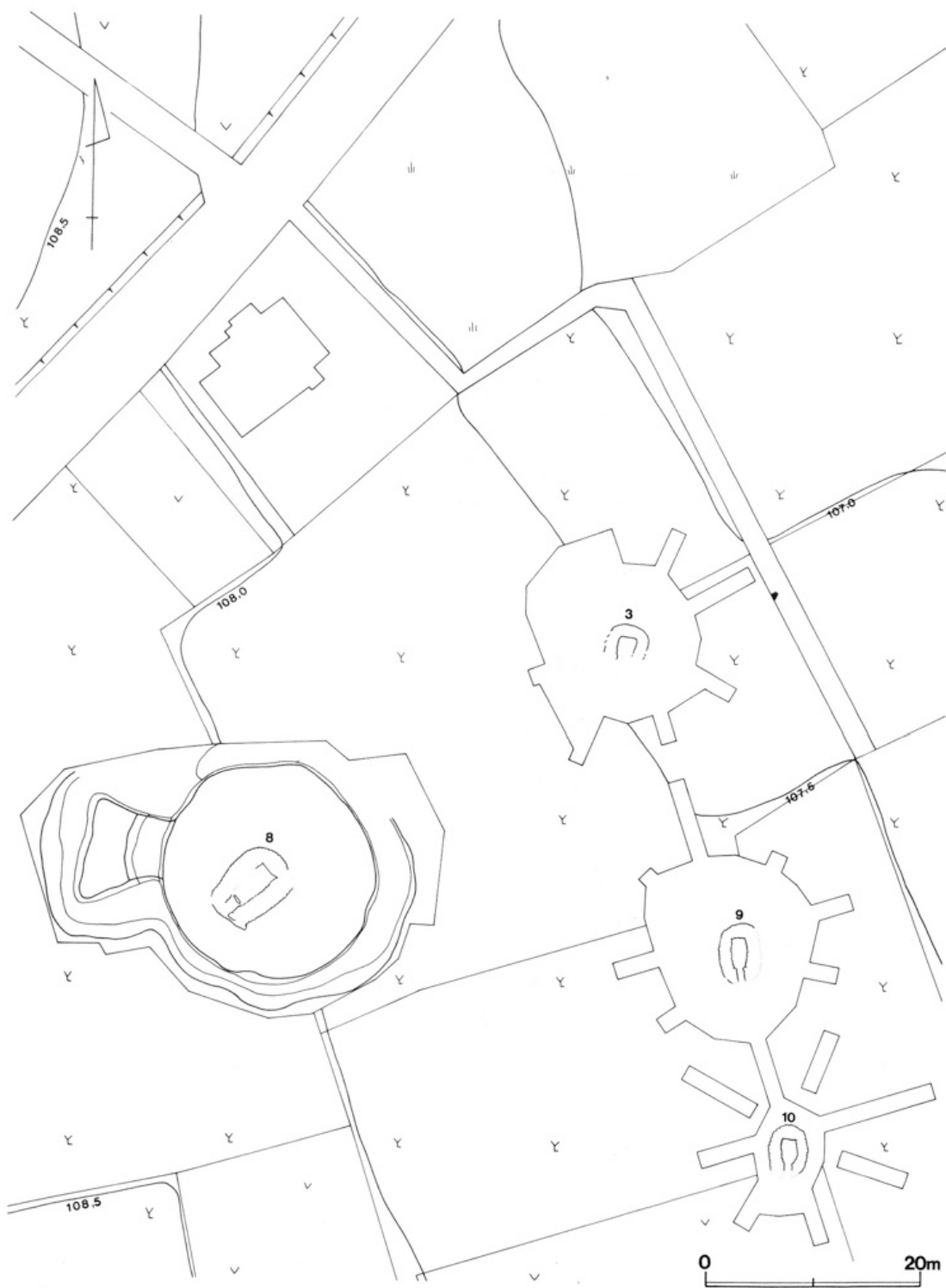
3号墳は、本古墳群の古墳立地を大きく台地上と河岸段丘面に分けた場合、下段である段丘面に立地し、現在の崖からは最短距離で120m程離れており、段丘面に位置する古墳としては、やや奥まった台地の裾部に近い所に存在する。すぐ北の台地上に存在する22号墳とは、標高にして1～2m程の差がみられ、台地上の古墳とは明らかに立地を異にしている。現在、3号墳の付近はほとんどが桑畑に利用されており、本墳も墳丘裾部まで桑が植えられて破壊が大分進行していた。

本墳の南には9・10号墳が、西には8号墳が近接して位置し、現状では4基の古墳がまとまって存在していた。その中でも本墳は、耕作や盗掘による破壊が最も著しく、墳丘の南側では石室の控え積みである石組も一部露出していた。調査時点での規模は、長径で東西に7.3m、短径5.1m、高さ1.25mを測り、墳丘全体に河原石が無造作に積まれて集石の山と化していた。

調査は本墳の周溝及び主体部を検出するため、残存する墳丘を中心に合計8本のトレンチを放射状に設定し、その後、その間を拡張して最終的には古墳を全掘した。各トレンチは、本墳の規模がわからないことや、他の古墳址との関係を捉えるため長く設定したが、この範囲においては、他の遺構を検出することはできなかった。



第12図 長沖3号墳墳丘測量図(1:200)

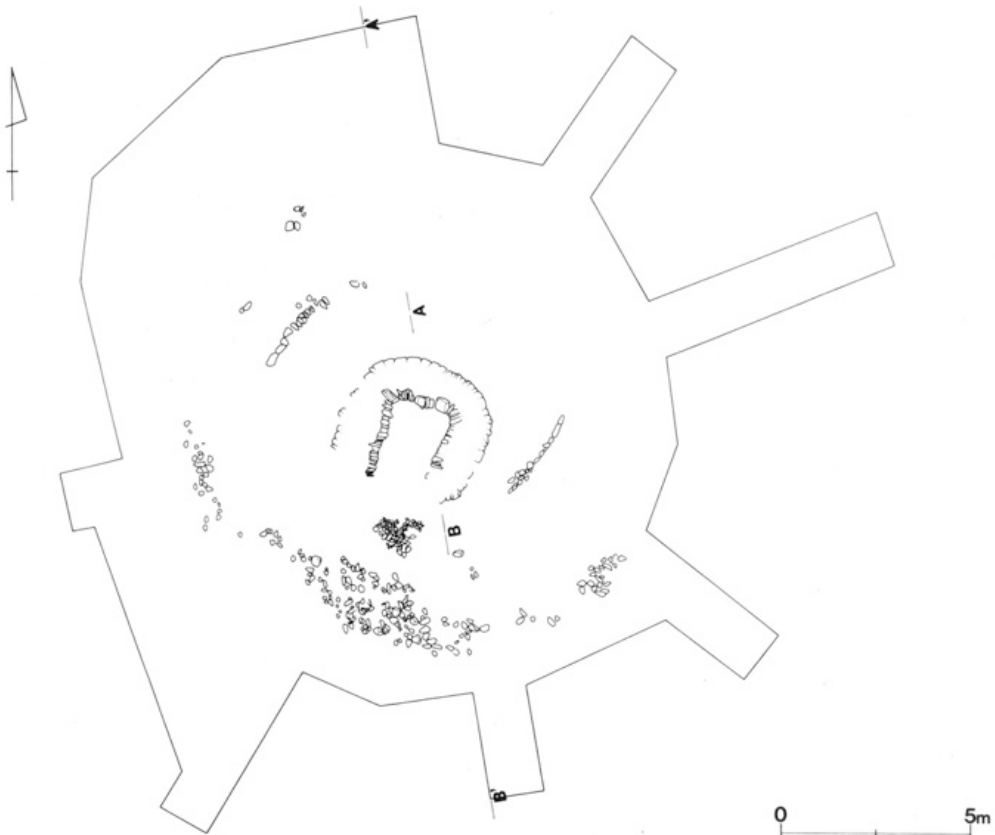


第13図 長沖3・8・9・10号墳全体図(1:600)

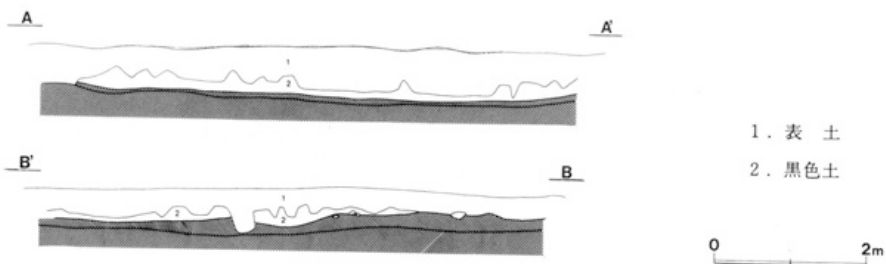
形態

本墳の周溝は、主体部の周囲を全掘したにもかかわらず検出できず、また、各トレンチの土層観察によっても明瞭な落ち込みは確認できなかった。そのため本墳の正確な形態及び規模は不明であるが、主体部を巡る葦石の根石列が西側と東側に検出されており、ある程度の規模を知ることができた。この根石列は、20～30m程の石を使用し、やや楕円形を呈するが直径7m程で主体部を半周しており、且つ石室の南側には、墳丘や石室に使用されたと思われる河原石が、石室を中心として分布しており、両者の位置及び分布状況から本墳は直径10m程の円墳であったと推定される。

本墳の周溝については、旧表土とその下の基盤層が粘性を帯びていて、なかなか周溝の落ち込みを確認することが難しかったが、隣接する8号墳でははっきりと周溝が確認できていること、また、河原



第14図 長沖3号墳全測図(1:200)



第15図 長沖3号墳土層断面図(1:100)

石の分布のレベルが石室下の旧表土面とほとんど変わらないことからして、築造当初から明確に掘り込む周溝は存在しなかったものと思われる。また、当時存在したとしても旧表土を若干削った程度の浅いものであったと考えられる。

主体部

主体部は主軸をN-22°-Eに取る、河原石使用の胴張り横穴式石室である。石室は羨道部が大きく破壊を受けており、全容を知ることはできないが、各部の規模は石室残存長2.75m、玄室長2.35m奥壁幅1.48m、玄室最大幅1.78m、玄門幅1.05mを測る。

壁は扁平な石を小口積みにし、要所に大きめの石を配する所謂模様積みと称されているもので奥壁にややその傾向が認められる以外、両側壁は余り顕著にこの手法がみられないが、それでも根石には大きめの石を配して構築の手法としている。奥壁及び東壁は、著しい破壊が墳丘に及んでいる割には残存状態が比較的良好で、最高部で1.05m程を測る。それに対して西壁は、大きく石室内に崩れ込んでいた。

石室の平面形は、奥壁から側壁への移行がゆるやかに丸みを持って続くもので、両壁を明確には別け難いプランを呈している。玄門部には片岩等の板石を使用した痕跡はみられず、側壁と羨道部も明確な袖を持たない形態の石室であるが、両袖型の範疇に入るものと思われる。

棺床面は攪乱により部分的にしか残っていないが、旧地表とみられる暗褐色土の上に砂利及び10cm~15cm程の扁平な石を敷いて構築している。同様な敷石は、玄室前面部においてもほぼ同じレベルで見られ、おそらく羨道部の棺床面になるものと思われる。このことから玄室部と羨道部の棺床面は段を成さないものであったと想定される。

天井石については、調査の段階で一枚も発見されていないが、盗掘の際に持ち運ばれてしまったものであろう。

後込めは、壁の持ち送りを上からおさえ込むように砂利及び河原石で積まれ、その外に控え積みが周っている。控え積みの石は、玄室内の石に比べて大きさに大小があり、面も多少でこぼこして構築されている。おそらく、石室内に用いられた石に比べて使用石材を厳選していないためだと思われる。

出土遺物

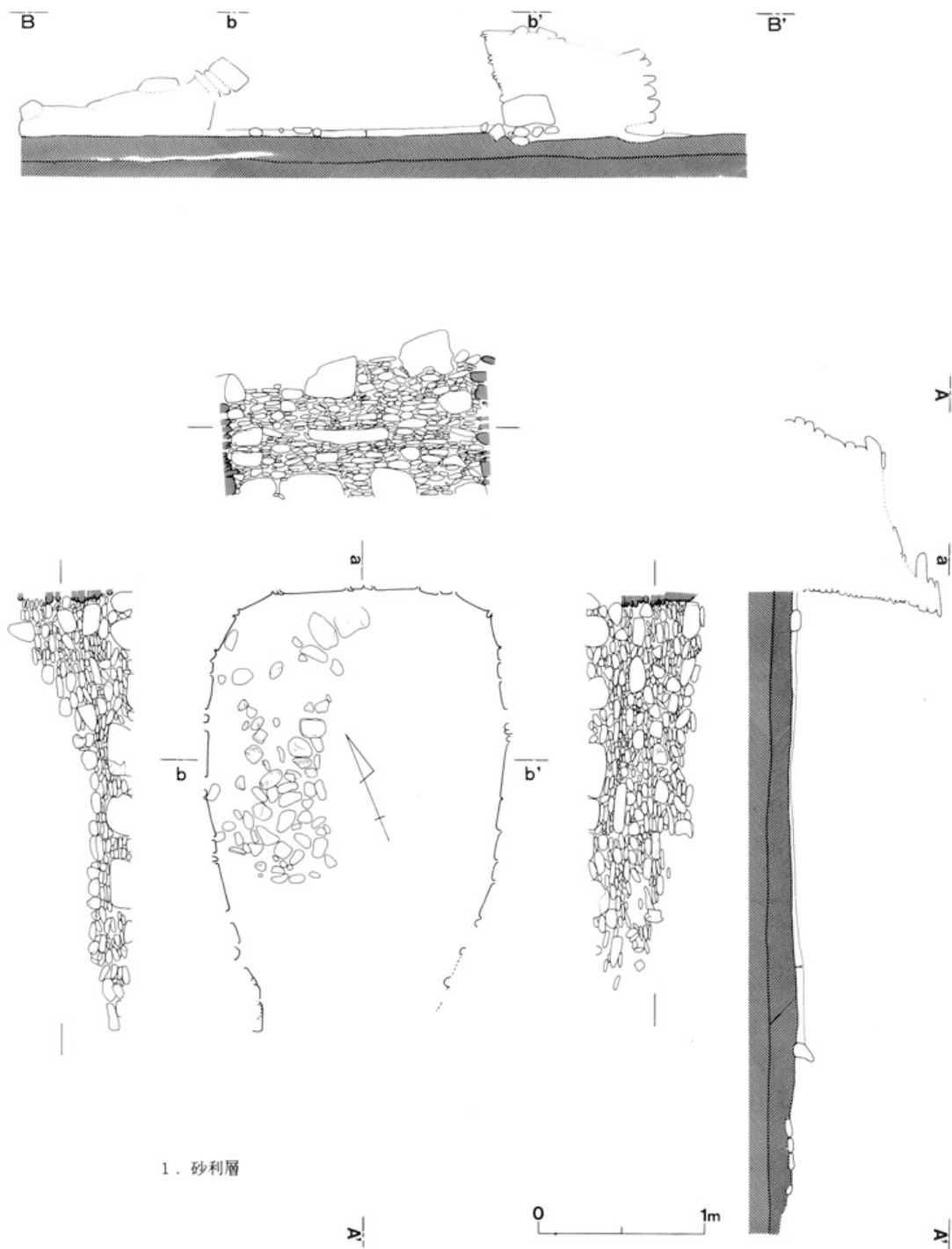
埴輪

墳丘及びトレンチ内から少量検出されたのみで、そのほとんどが円筒埴輪片であったが、本墳に伴うものかを断定することは難しい。

装身具（第18図-1~28・図版64-1, 2）

すべて玄室内において、攪乱により浮いた状態で検出された。

勾玉（1~10）全部で10個出土している。1が水晶製である他はすべて瑪瑙製である。いずれもコの字形に近い形状を呈するが、6・8がやや丸みを持っている。腹面を正面としてみた場合 左からの穿孔のもの4・5・6・7・8・10と右からの穿孔のもの1・2・3・9がある。1は片面に平らな面を残し、もう一面は丸みをもつものであるが、穿孔は平らな面の方から行なわれている。他はどれも両面に平らな面を持ち、断面はやや扁平である。



1. 砂利層

第16図 長沖3号墳石室実測図 (1:40)



第17図 長沖3号墳石室出土直刀実測図(1:5)

切子玉(11~15) 5個出土し、すべて水晶製である。いずれも六面を成し、稜及び両面は磨滅している。大きさはそれぞれ異なり、11で2.4cm、以下12、2.1cm、13、2.25cm、14、2.05cm、15、1.7cmを測る。穿孔はすべて片面より行なわれている。

管玉(16) 碧玉製で濃緑色を呈する。長さ2.55cm、径0.95cmで、穿孔は一方から施されている。全体に丁寧に研磨されており光沢がある。

丸玉(17~26) 10個出土している。21はガラス製で緑色を呈する。他は蛇紋岩製で黒色に近いものから風化して白色に近いものまである。いずれも、両面が玉ずれにより平らになっている。大きさはいろいろあり最大の20で、径1.4cm、厚さ1.0cm、最小の26で、径0.9cm、厚さ0.6cmである。

耳環(27、28) 2個出土している。どちらも鉄芯製で円形の環状を成し、断面はやや扁平である。27は長径3.1cm、短径2.8cm、厚さ0.5cm、28は長径3.1cm、短径2.7cm、厚さ0.5cmで、形状、大きさがほとんど同じであることから対を成したものと思われる。

鉄製品(第17図・図版67-1、第18図-29~38・図版64-2) 直刀が玄室の西壁に接して検出され、原位置の出土と思われる以外、他はすべて攪乱により浮いた状態で発見された。

直刀(第17図) 茎の一部が欠けているが、ほぼ完形で保存状態も良い。平造平棟で全長85.7cm、刀身長75.0cm、棟幅0.8cmを測る。関部には幅1.2cmの鉄製の鏹とそれに接して長径7.4cm、短径5.9cm、厚さ0.8cmの無窓倒卵形の鏹がついている。茎には目釘が2箇所残る。

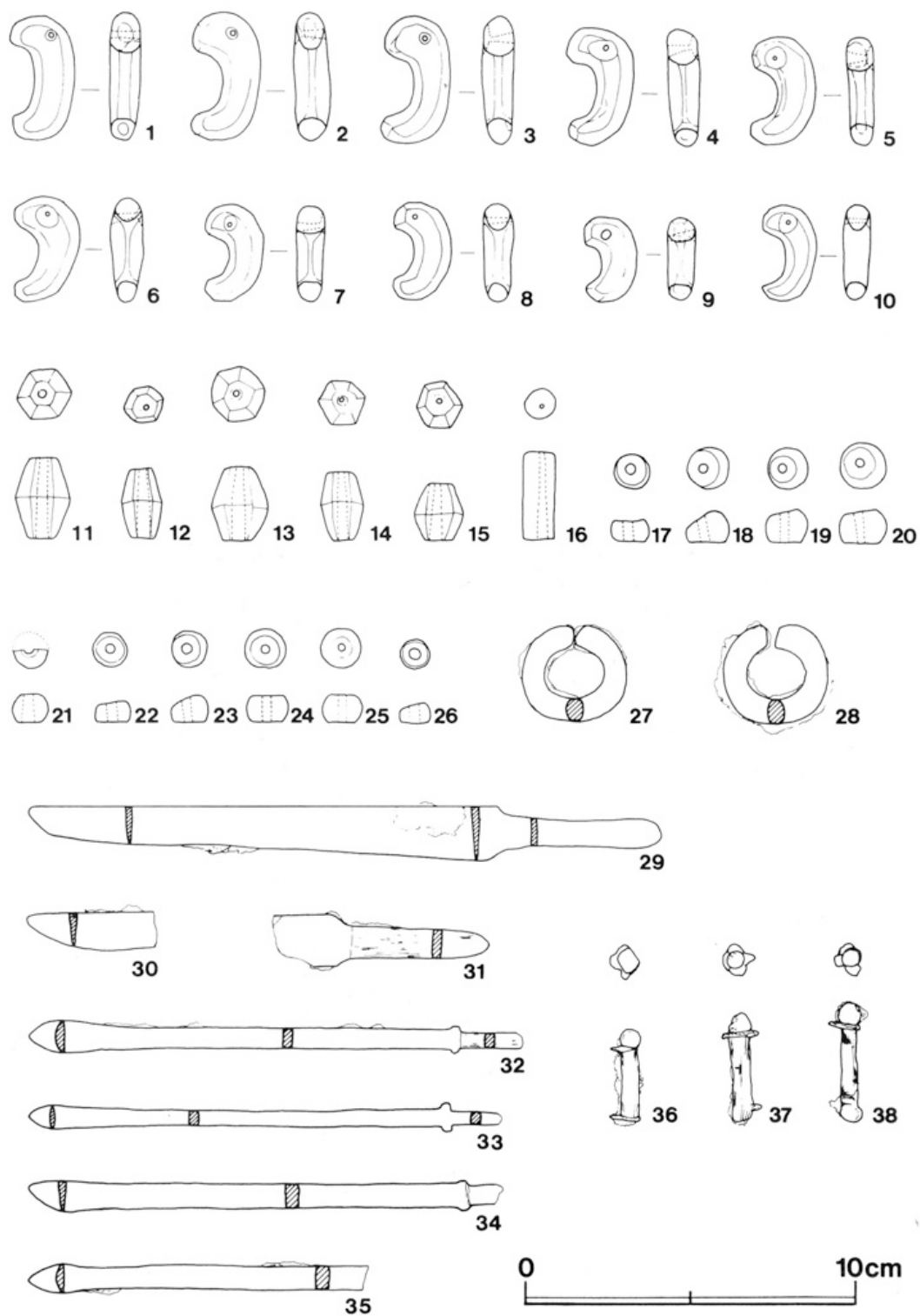
刀子(第18図-29~31) 29は完形品で、全長19.1cm、刀身長13.9cm、棟幅0.5cm、身幅中央で1.3cmである。平造平棟で関は両関である。30・31は同一個体のもと思われる。両関造りでは茎には木質部が残る。どちらも身幅は茎に近い部分が幅広く、切先に近づくにつれて次第に狭くなっている。目釘はなく、茎部末端はやや丸みを持つ。

鉄鏹(32~35) どれも錆化が進んでおり、保存状態は良好でない。32・33・34は一部欠損しているがほぼ完形である。32・33・35は有茎尖根端丸鏹箭式、34は有茎尖根関無片箭式である。

両頭座金付留金具(36~38) 同形状のもので、両端に丸い頭と花卉がつく。花卉は腐蝕が激しく形態は明らかでない。大きさは、それぞれ異なり、36で長さ2.9cm、37で3.3cm、38で3.6cmである。38には木質が付着している。

土器(第19、20図)

いずれも石室前面の河原石の分布する前庭部付近より出土したもので



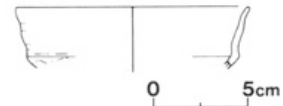
第18図 長沖3号墳石室出土遺物実測図(1:2)

ある。

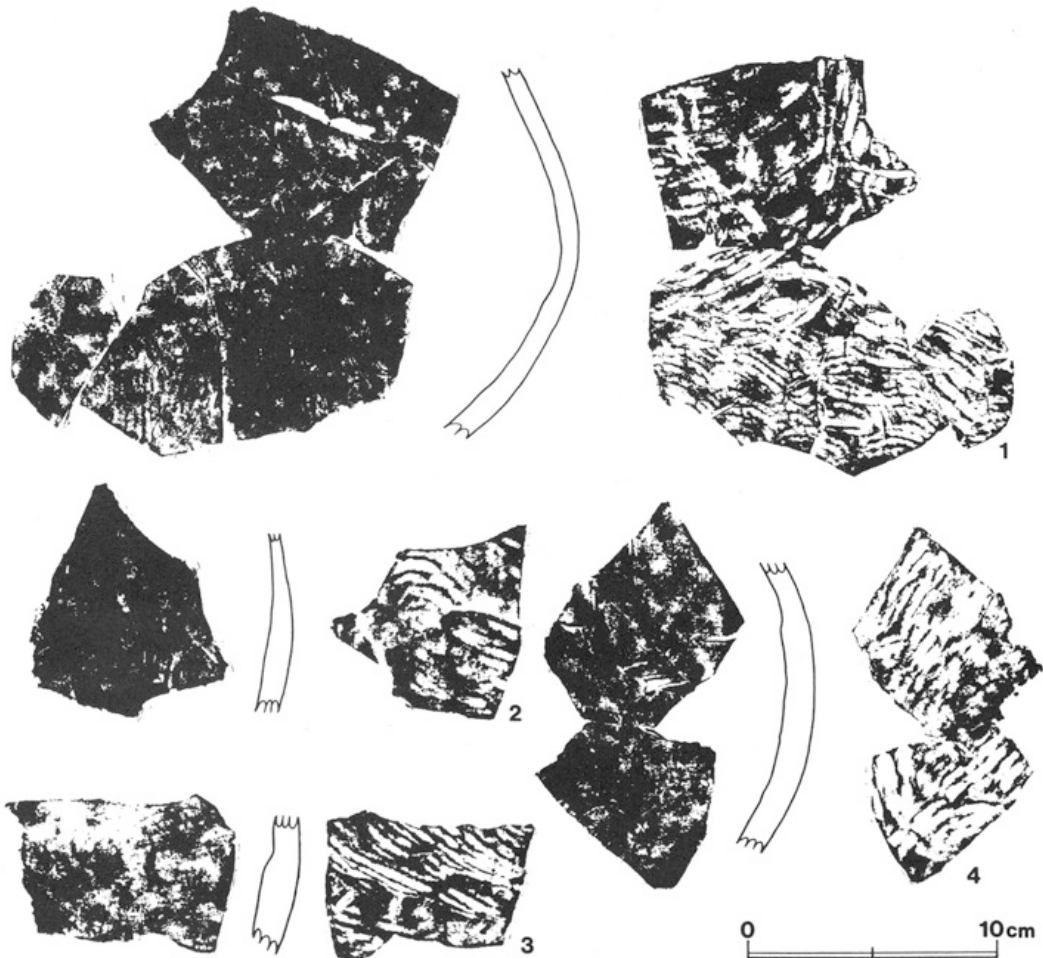
土師器坏（第19図）推定口径12.2cmで、底部が欠損しているため高さは不明である。口縁部は外反しながら立ち上がり、内外面とも横撫で調整されている。底部外面は篋削りである。色調は黄褐色で、胎土、焼成とも良好である。

須恵器甕（第20図）1～4の破片とも作り、胎土、焼成及び色調がよく類似し、接合はしなかったものの同一個体の可能性が強い。たしかな器形は不明であるが、1の破片の胴の張り具合から中型品の部類に入る甕と思われる。いずれも胴部の破片であり、外面には浅い平行叩き目文が、内面には同心円文の叩き目がみられる。色調は表面が暗灰褐色で断面が淡褐色を呈し、焼成がやや甘い。胎土は良好である。作りは総体的に雑で、1では器肉が一定せず、かなり薄いところからやや厚いところがある。また、2では内面に接合痕が残る。

（山崎 武）



第19図 長沖3号墳出土土器
(1:4)



第20図 長沖3号墳出土 須恵器拓影図 (1:3)

4. 長沖8号墳

古墳の立地と現状

8号墳は、身馴川扇状地の扇頂部に当たる地域の段丘平坦面に位置する古墳であり、段丘崖まで約130mを測る所に存在する。段丘平坦面は、かつての河川の氾濫によりもたらされた砂利を多く含む粘土質の土壌で覆われ、そのほとんどが桑畑として利用されていた。本墳の北方約40mには、河川の氾濫堆積作用を免れた丘陵地帯から張り出す洪積台地が北東に延び、当古墳群の立地的環境を大きく二分する地形を形造っている。

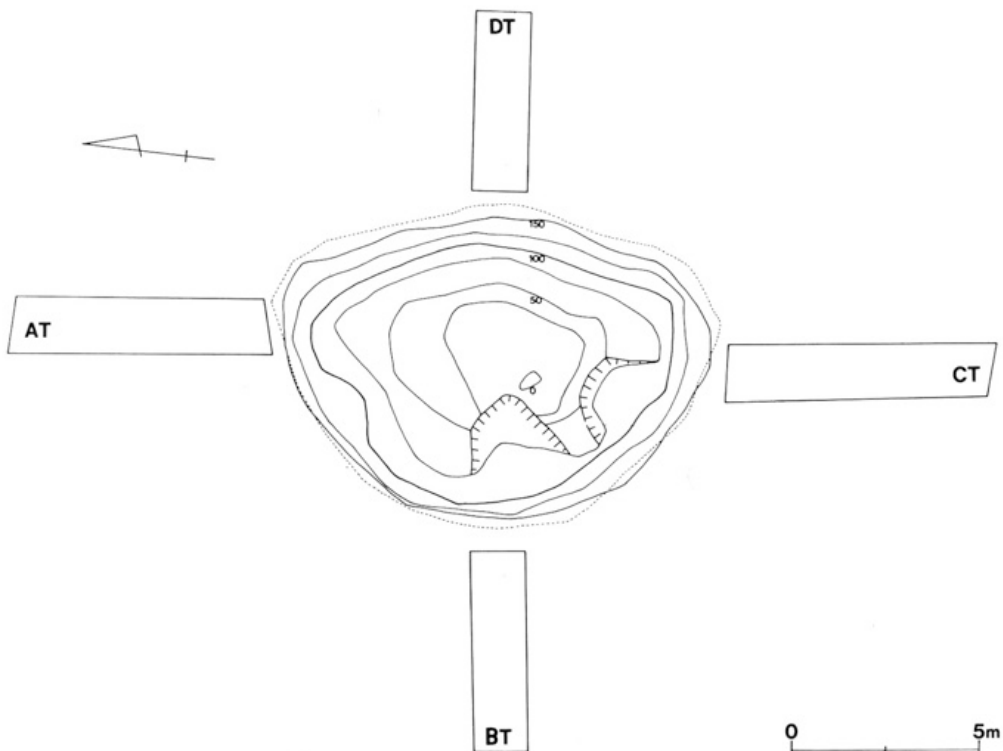
現在、本墳の周辺には東30m程に3・9・10号墳が、北西約50m及び南西約50mにそれぞれ一基が点在しており、調査対象区域内で最も古墳が集中していた。

本墳は周囲を桑畑に囲まれ、現存していた墳丘には、開墾や盗掘等により掘り出された河原石が積まれていた。現状での規模は南北11.5m、東西8.5m、高さ1.5mを測り、付近に在する古墳の中では比較的大きな墳丘を留めていた。

調査は、残存していた墳丘を中心に十字にトレンチを設定し、その後必要に応じて、トレンチを新たに設けて掘り進めた。最終的には墳丘及びその周辺部の全面排土を行い、遺構の完掘に努めた。

形態

8号墳は、現状での外見からは円墳としい古墳であった。しかし、墳丘周囲に検出された周溝の形



第21図 長沖8号墳墳丘測量図(1:200)

状から、主軸（後円部の中心点を通り、前方部前端線と直交する線）をN-103°-Eに取り、前方部を西方に置く前方後円墳であると判明した。

規模は主軸長周溝内側で26.3m、同外側34.8m、後円部周溝内径19.7m、同外径27.0m、前方部周溝内側前端線幅9.2m、同外側において13.6mを測り、後円部の大きさの割に前方部が長さ、幅ともに小さく、その平面プロポジションは帆立貝式と呼称される形態に類する。

墳丘の形状、規模については、調査によっても明確にするべき遺溝の検出がなく、全容については不明である。ただ、後円部においては、石室羨門部から円弧を描き左右に延びる石積みが一部検出され、石室全長を半径とした径約12mの葺石に相当する石積みが巡っていたことが推察される。この石積みは墳丘の最大径を成すものではなく、おそらくはその外側に埴輪の樹立帯を持つテラスが付設されていたのであろう。

前方部では、墳丘の有無すら確認できなかった。しかし、前方部前面の周溝の堆積状態を見ると、後円部で顕著に見受けられる墳丘の流土らしい暗褐色土の堆積が少ない様子が窺え、墳丘が存在していたとしても、そう盛土の高いものではなかったと推定される。

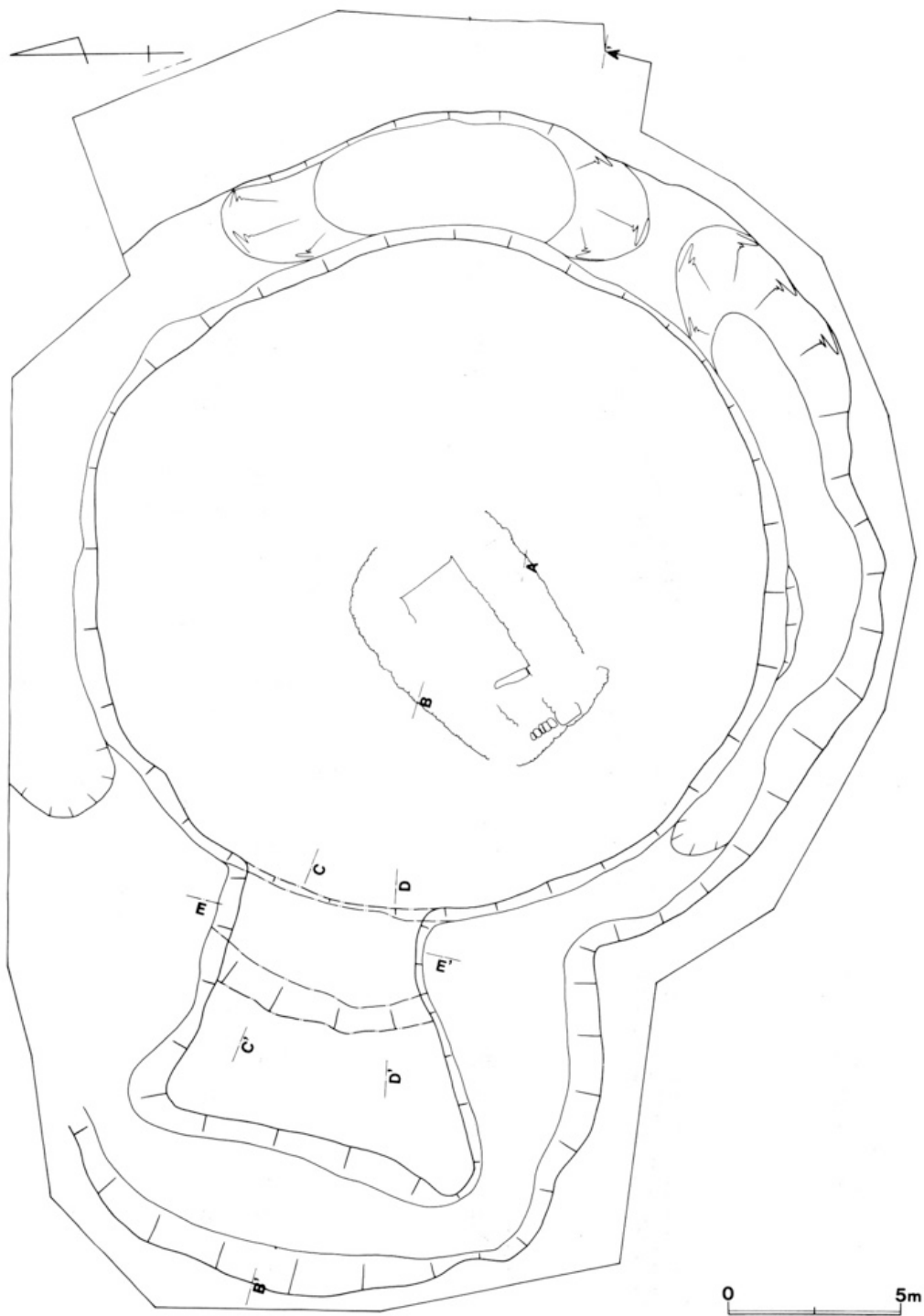
周溝については、北側の一部を残し掘り上げることができ、ほぼ当時の姿を明らかにできた。

後円部周溝は、内、外の立ち上り線ともほぼ正円形を描き巡るが、東側で上幅3.8mと最も幅広く、確認された南側では、くびれ部に近づくに従い若干外側が狭まって来る様子が知れ、内、外径の中心点のずれが感じられる。最も狭くなる南側のくびれ部付近では、上幅で2.3mを測る。深さは、後円部東側で基盤から15～40cmと浅く、南側と北側のくびれ部付近にかけては45～55cmを数える。溝の立ち上り方は、内側が比較的明瞭に急傾斜で立ち上るに対し、外側では緩傾斜をもって開く。

前方部では、周溝内側立ち上り線による側線の開きが左右対象でない。南側立ち上り線についても内側同様にくびれて側線を成しながらも、そのあり方は直線的には延びず、やや蛇行した曲線を描く。また、前方部前面の周溝においても、内側が直線的であるに対し、外側が多少彎曲ぎみとなっている。北側立ち上り線は、北西コーナー部あたりよりだれてしまい確認できなかった。幅は前方部前面中央で上幅4.7m、狭い所では北西コーナー部の1.2m、南西コーナー部の1.7m、最も広い部分は南側くびれ部近くの5m程である。その深さは、各所を通して30～40cm程基盤層を掘り込み、南の内側側線が比較的急傾斜となっている他は、全体的に内、外とも緩やかに立ち上っている。

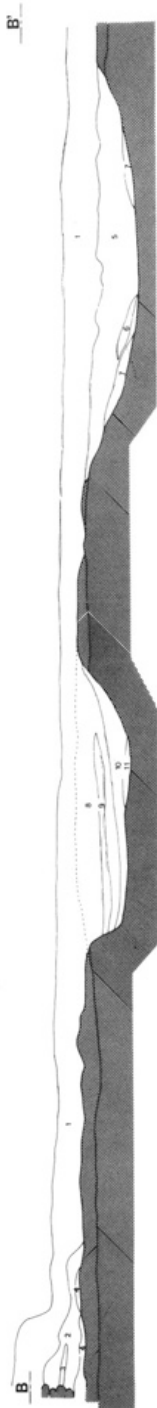
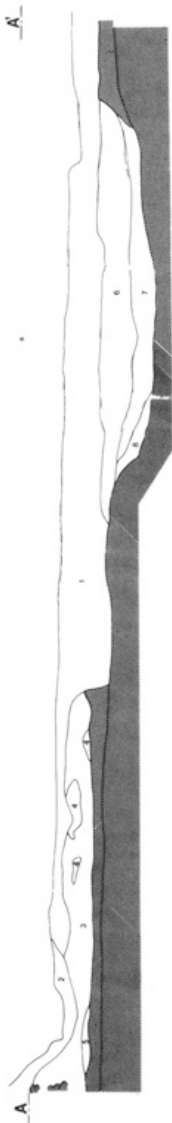
このように本墳の周溝は、基本的には相似形の周溝を呈しながらも、前方部周溝外側の立ち上り線が曲線的に処理されている点が特長となっている。

さらに、本墳の周溝については、後円部と前方部との接合部分にも後円部を巡る周溝が存続していたことが判明した。この接合部に検出された周溝は、上幅3.7mを測り、内径と同心円の弧をもって外側の立ち上りとしている。他の部分と形状、底部の高低差等に著しい違いはないが、その堆積状態においては相異を示している。この部分以外の周溝では、所により多少の変化はあるにせよ、概括的には周溝の内、外側より暗褐色土が流れ込み、そしてその後に黒褐色土（腐蝕土）が厚く堆積して周溝を埋めていて、至って自然的な堆積状態を呈している。これに対し、接合部分に確認された周溝では、暗灰褐色土と黒褐色土が交互に堆積しており、その堆積状態は、人為的な感が強い。さらに、周溝下層部においても長い間自然堆積したような土層は見受けられなく、埴輪片の流入もないことから、周溝を掘り上げて



第22図 長沖8号墳全測図 (1:200)

- A-A
1. 表土 (礫を多く含む擾乱)
 2. 表土 (盛土)
 3. 褐色土
 4. 暗黒褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗黒褐色土
 7. 暗褐色土 (非常に粘性を帯びる)
 8. 暗褐色土 (7層より明るい)



1. 表土 (盛土)
2. 褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗黒褐色土 (粘性を帯びる)
5. 暗黒褐色土 (砂利を多く含む)
6. 暗褐色土
7. 暗褐色土 (粘性を帯びる)
8. 暗灰褐色土
9. 暗黒褐色土
10. 暗黒褐色土 (9層より暗く、礫を含む)
11. 暗茶褐色土 (砂礫を含む)
12. 暗黒色土

第23図 長沖8号墳墳丘・周溝断面図 (1:100)

からそう時間的に経過しないうちに後円部周溝の前方部を接合するに当る部分が埋め戻された様である。

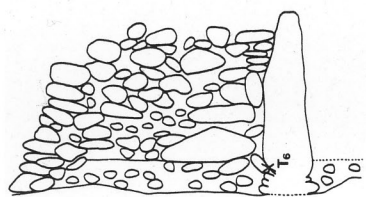
主体部

本墳の主体部は、N-5 1°-Eに主軸を取る横穴式石室である。墳形の主軸線に対して、直角の位置より38°程南側くびれ部方向に開口する。石室は盛土を20~30cm程盛った上に、後円部中央に奥壁を置き構築されている。

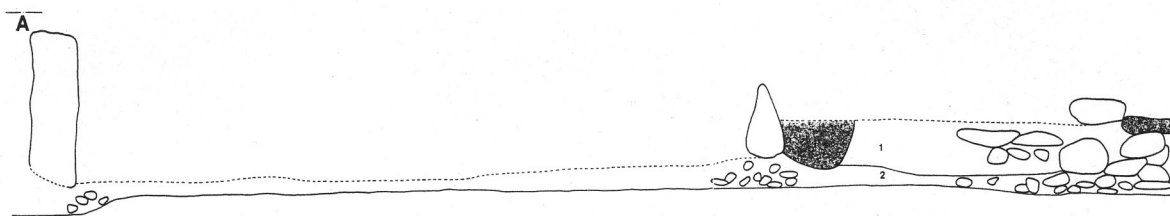
その形態は、破壊が著しく、所によっては根石すら残っていない状態であったため一概には判断が下せないが、両袖無型の可能性が強い。いずれにしても、石室は棺床面に設けられた緑泥片岩を用材とする框石により、埋葬部と羨道部が区別され、埋葬部東壁の根石のラインには、僅かながら胴張りの傾向がある。また、羨道部の入口東壁に認められた長方体の大きな河原石の存在により、同様の石材を積み上げ羨門が構築されていたことが想定される。

これらのことから石室の規模を割り出せば、全長5.86m、埋葬部長3.57m、奥壁幅1.82m、羨道部長2.29m、同幅1.14mとなる。

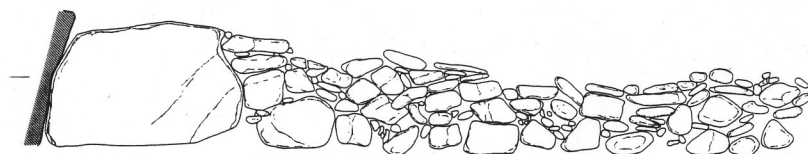
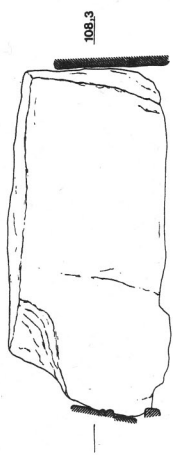
壁は現存する限りでは、奥壁で緑泥片岩の大石が1枚残り、高さは最高で77cmを測る。側壁は、埋葬部東壁で最も奥に緑泥片岩の板石を使用し、その手前が河原石の乱石積みとなっている。用材の河原石には、大きさ、形ともにやや不揃いなもの



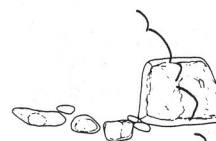
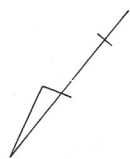
凝結 粘土層
 1. 礫層
 2. 棺床下のパラス
 (砂礫層)
 XT6 鉄線出土地点



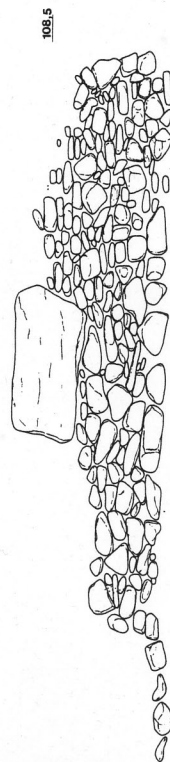
A'



A



A'



第24図 長沖8号墳石室実測図 (1:40)

が一見無造作に使用されているように見受けられるが、いずれの石も控えを長く取り、小口部を内側に向け積み上げられ、石と石の間にできた隙間の所々に小口部5～10cm程の小石材を間詰めしている。埋葬部西壁については、最も奥の部分が緑泥片岩と河原石で二段に積まれている他は不明である。羨道部側壁は、一部根石を残すのみで明らかでないが、根石のレベルが埋葬部に比べ50cm程高くなっていることが窺える。

棺床面は、攪乱により棺床面下のバラスが認められたのみで捉えることはできなかったが、框石を境として、根石のレベル差同様羨道部棺床面が一段高くなっていた様である。また、羨道部入口には閉塞石と思われる石組が最下段のみではあるが、粘土で押えられた状態で検出された。

天井石については、石室内に落ち込んだ状態で緑泥片岩の大石が数枚発見された。

さらに、石室は礫や砂利を用いた後込めにより抑えられ、その外側に控え積み施設をもつ。この控え積みは、石室を取り囲む様に存在するが、石室前面に至っては、羨門部から左右に延び、葺石に相当する外部施設の石積みと一緒に、両者の機能を兼ね備えている。このことは、使用石材の選択や積み方の入念さを見ても、側、裏面に当る控え積みとは異り、うなづける。

出土遺物

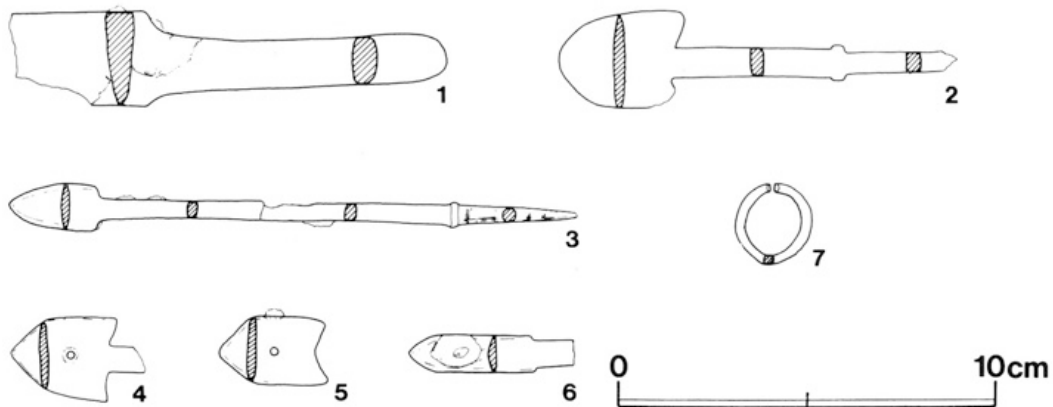
埴輪

出土した埴輪は、すべて埴丘表土中あるいは周溝内よりの検出である。周溝内より出土の埴輪は、後円部からくびれ部にかけて多く、前方部に至っては割合に少なかった。また、北側くびれ部周溝内からは、かなりの埴輪片が一箇所に集積した状態で出土した。

鉄製品（第25図-1～6・図版65-1）

6の鉄鏃を除き、すべて玄室内より攪乱のため原位置を失い出土したものである。6は奥壁の真下、それも石室から流入したとは思えない後込め内よりの出土で意図的にこの箇所に置かれた可能性がある。

刀子（1）刀身の一部及び茎を残すのみの破片である。現存長11.4cm、茎長7.6cm、棟幅0.6cmを測る。刀身は平造平棟で、関は両関である。



第25図 長沖8号埴石室出土遺物実測図（1：2）

鉄鏃（2～6）いずれも型式を異にし、2は有茎平根両丸造広鋒長三角形腹袂箆被式、3は有茎平根三角形狭鋒長茎箆被式、4は有茎平根五角形腹袂式、5は無茎平根五角形腹袂式、6は有茎尖根片刀片丸鑿箭式である。4・5については鏃身中央に径2mmの穴が穿たれている。完存に近い3では全長14.8cmを測り、茎に僅かながら矢柄材が銹着して残っている。

装身具（第25図-7・図版65-1）

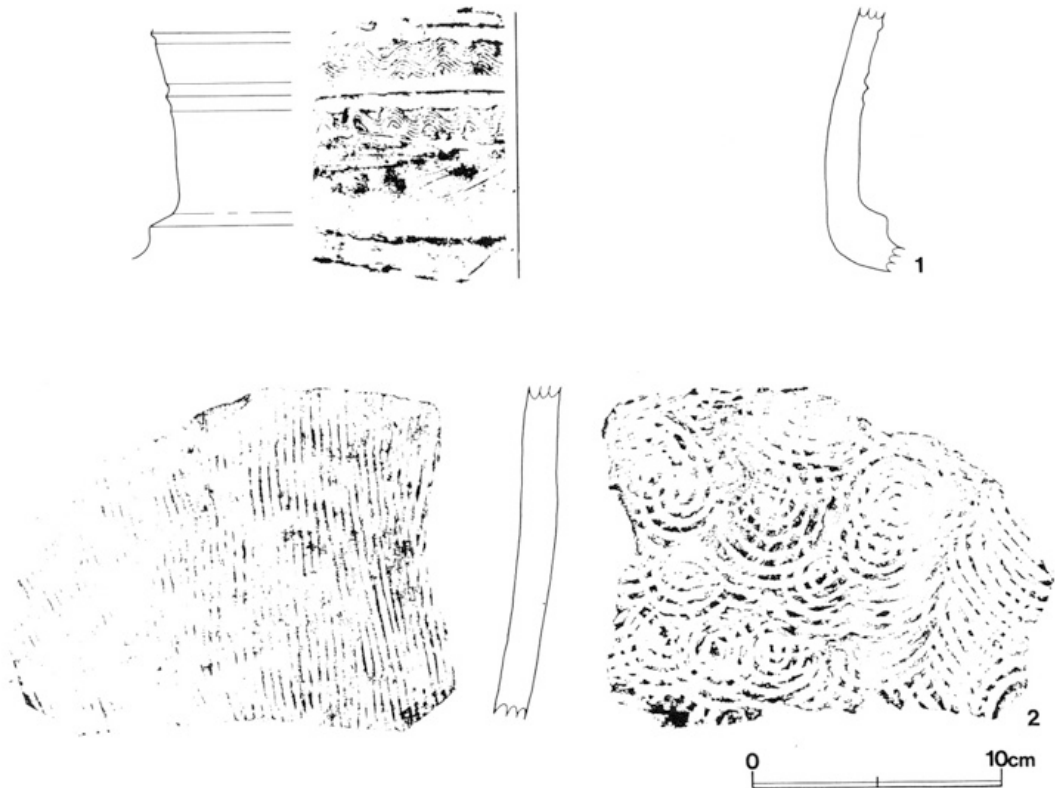
鉄製品同様、玄室内棺床面より原位置を失い耳環が1点のみ出土した。

耳環 長径7.1cm、短径2.0cmで断面隅丸方形を呈する細身のものである。銅製で金箔は既に剥落。

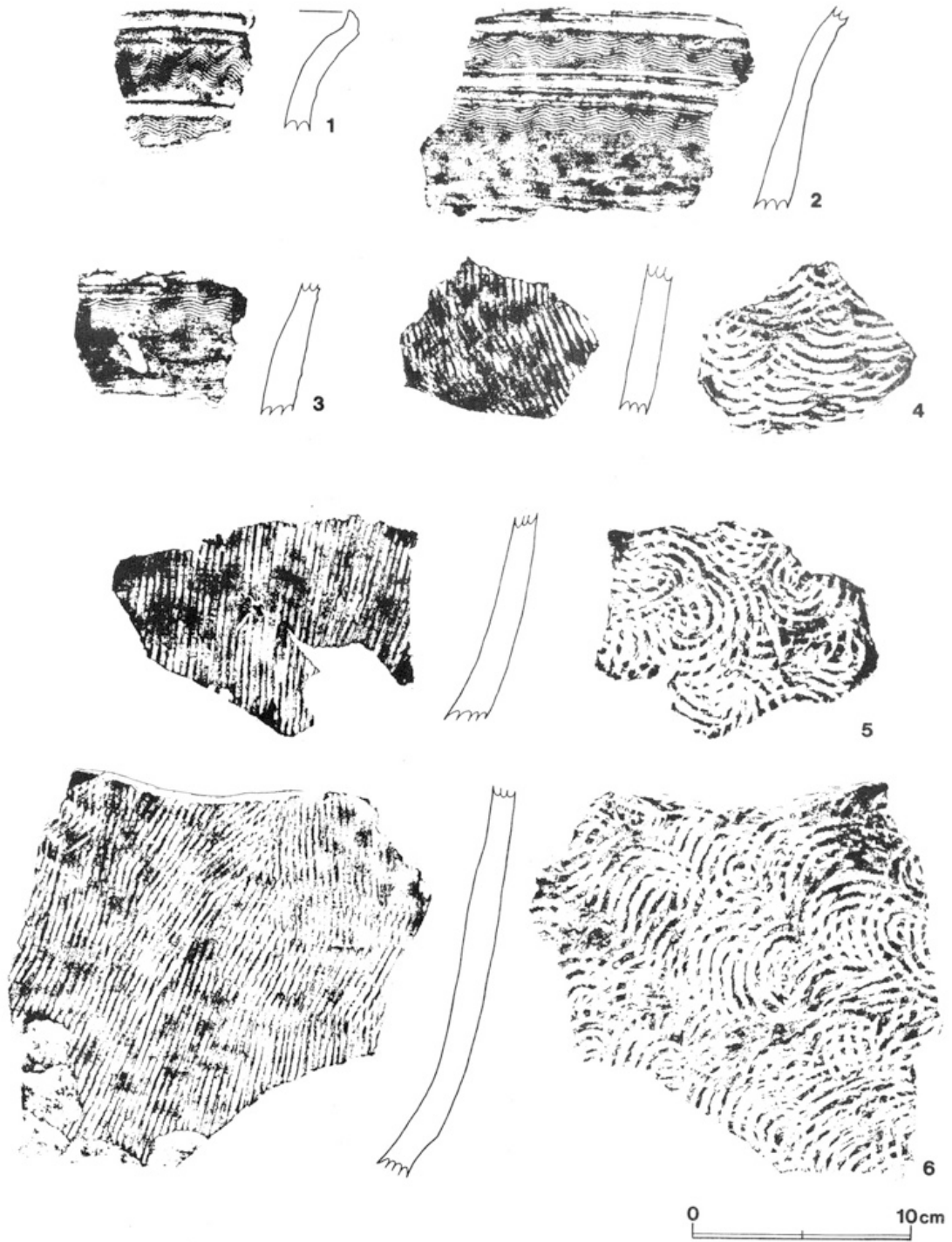
土器（第26、27図）

すべて須恵器大甕の破片であり、墳丘表土中及び南、北くびれ部付近周溝内より出土したものである。かなり多くの破片の出土を見たが、ほとんど接合不可能なものであった。

須恵器大甕 第26図-1は推定頸部径29.4cmを測る口縁部 $\frac{1}{3}$ 程の破片である。2条の凸帯を有し、三段に区画された部分には櫛描き波状文が巡り、頸部には補強帯とも言える太い凸帯がある。焼成は硬く良好で、色調は黒灰色、胎土は大粒の砂粒を多く含む（他の破片とも同様）。第26図-2、第27図-4～6は胴部破片であり、色調は黒灰色を呈するが焼きは甘く、断面中央部においては暗橙褐色を呈する。第27図-1は口唇部の破片で色調は黒灰色、焼成は良好である。第27図-2・3は口縁部の破片で、双方とも焼成は甘い。 (金子 章)



第26図 長沖8号墳出土須恵器拓影図（1：3）



第27図 長沖8号墳出土須恵器拓影図(1:3)

5. 長沖9号墳

古墳の立地と現状

9号墳は、段丘上の平坦面に占地し、現状では北より3・9・10号墳と南北方向にほぼ等間隔をおき存在していた。

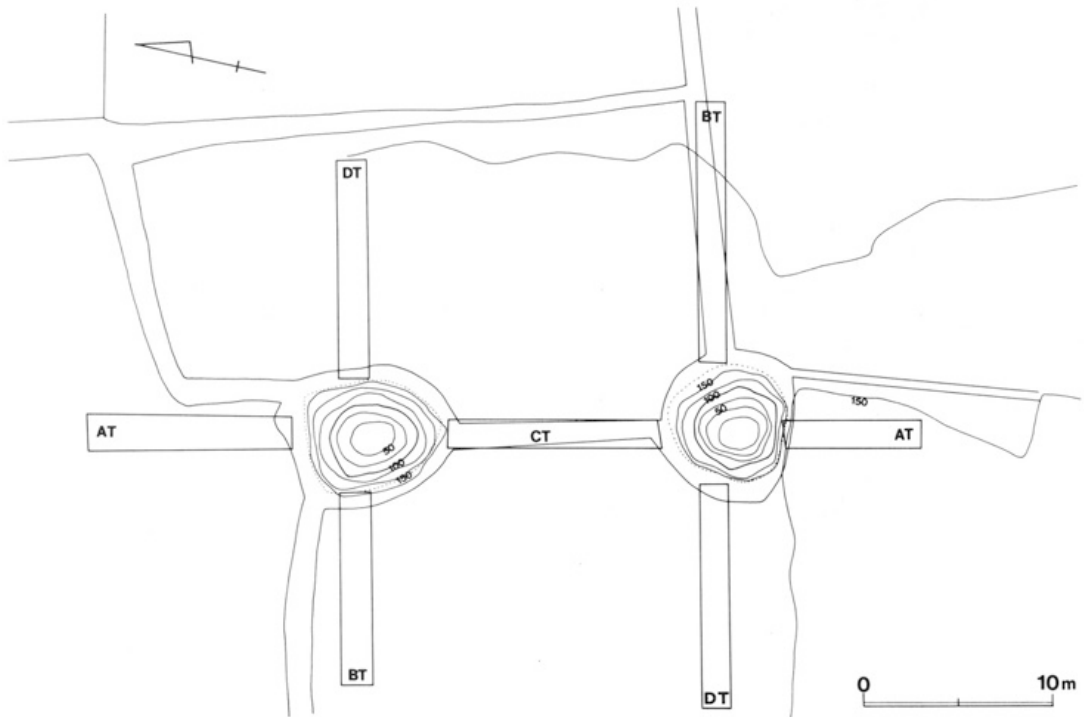
付近に点在する古墳同様桑畑の中に位置し、墳丘は耕作や盗掘による破壊が著しく、残存していた墳丘上には河原石が集積されていた。これらの河原石に混ってカワラケ片や古銭等も出土しており、本墳が中近世を通じて信仰の場として利用され、墳丘の変形が該期にまで遡ることを物語っている。本墳の現状での規模は、南北7.0m、東西5.5m、高さ1.75m程であった。

調査は、墳丘を中心に当初4本のトレンチを設定し、さらに各トレンチ間に、4本のサブトレンチを設けて調査を進め、最終的に各トレンチ間を拡張して、周囲を全掘した。

形態

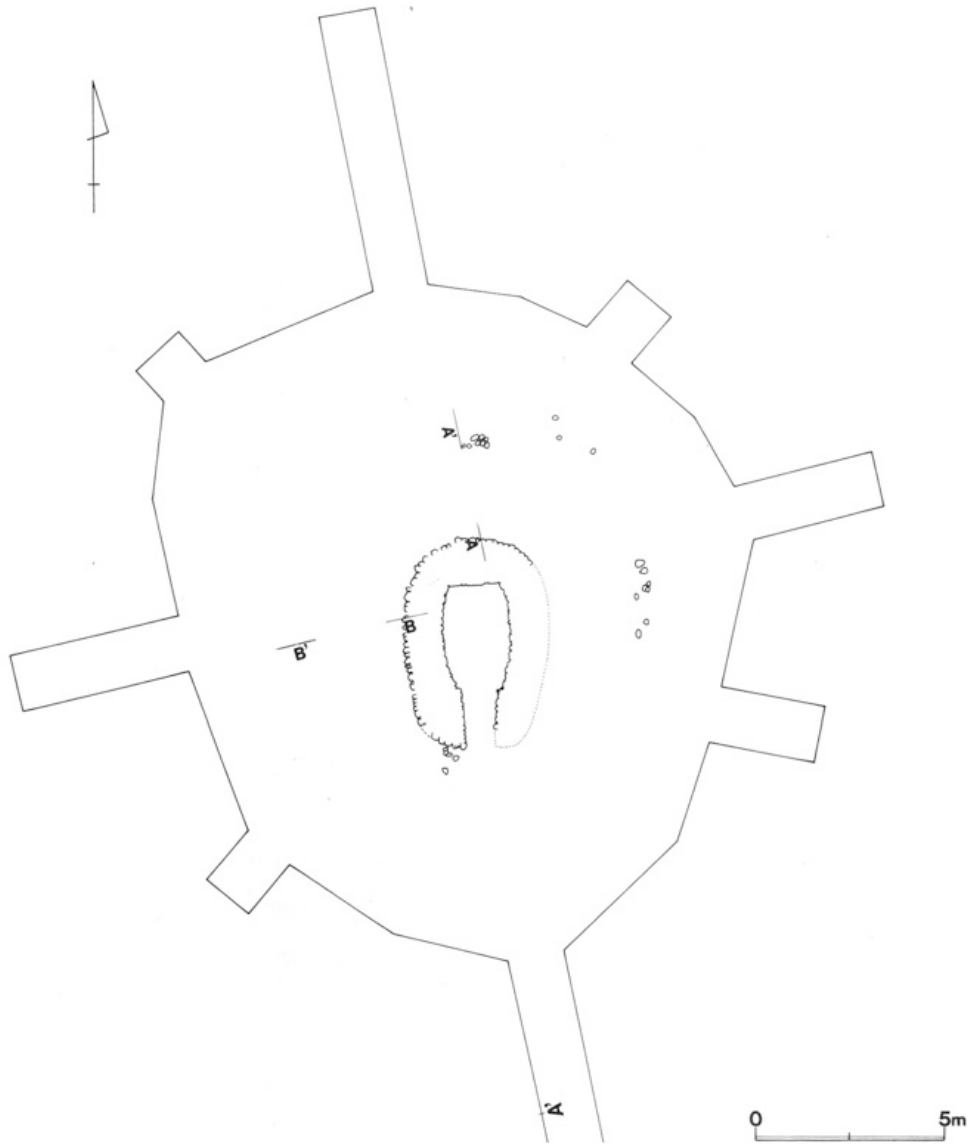
古墳の周囲を全掘したものの、本墳の規模、形状を明らかにするような遺構は検出されなかった。ただ、数本のトレンチにおいて若干の落ち込みが認められ、あるいは周溝の可能性も考えられたが、明確ではなく、たとえ周溝が掘削されていたとしても、浅い僅かな落ち込みであったろう。

残存していた墳丘は、著しく破壊が進行しており、封土が本墳の位置する周辺の粘土質の沖積土で、何層かに分層され、控え積みを抑えるように傾斜をもって斜めに盛土されていること以外は不明である。

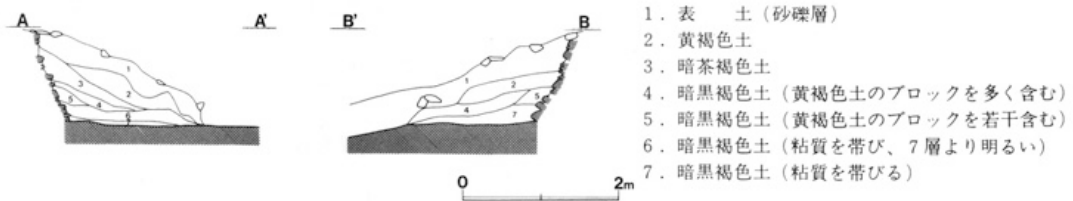


第28図 長沖9・10号墳墳丘測量図(1:400)

墳丘の破壊の程度に比べ、主体部の遺存度は割合良く、控え積みを備えた横穴式石室が発見された。この石室の規模からすれば、本墳も3・10・11号墳程度の径10～15mくらいの古墳であつたろうと思われる。



第29図 長沖9号墳全測図(1:200)



第30図 長沖9号墳墳丘土層断面図(1:100)

主体部

本墳の主体部は、胴張りを呈する両袖型横穴式石室である。主軸はN-2°-Eであり、ほぼ真南に開口する。

石室の規模は、全長4.34m、玄室長2.79m、奥壁幅1.29m、玄室最大幅（奥壁より約70cm）1.51m、羨道部長1.55m、同幅（中央部）0.84mである。

石材は、玄門に緑泥片岩の板石を門柱石として使用している以外は、すべて河原石を用材としている。壁を構成する河原石には、比較的均質で小型の扁平かつ細長い棒状の礫及び、それよりも明瞭に大型のやはり細長い礫が使用されている。これらの石材が自然石でありながらも、細長い礫、特に主体となる小型の石材では比較的均質な扁平の礫が選ばれている点は、石材選択における入念さが窺い知れよう。

河原石の転石は、すべて小口面を内側に向け、控えを長くとり使用され、壁面は奥、側壁とも小口積みにより構築されている。その仕上りは所謂模様積みと称される積み方である。羨門部付近以外の根石、奥、側壁の接合部及び玄門に接する部分、さらに奥壁面では飛白状に大型の礫がみとめられるが、その存在はあまり明瞭ではない。また側壁はやや持ち送りぎみとなっているが、奥壁についてはその傾向はみられず、ほぼ直線的に立ち上がっている。

棺床面は、やや大きな河原石を縦に並べた框石により、玄室部と羨道部が分けられている。玄室の棺床面は、攪乱のため良好とは言えないが、5cm～15cm程度の扁平な石により構成され、棺床面下には約15cm程の厚さに砂礫を主体とするバラスが敷かれている。これに対し、羨道のものは、玄室のものよりやや大きめの扁平な石が敷き詰められ、棺床面下のバラスもほとんど認められない。

閉塞施設は、玄門に立てかける様に3枚の緑泥片岩の板石を用い、さらにその手前を河原石を積み、隙間に砂利を詰め込んでいる。

天井石は、石室内に落ち込んだ状態で2枚発見されたのみであったが、その内の1枚は柱状のものであり、玄門門柱石の上部に架設されていたものと思われる。

後込めは、砂利や礫により構成され、外側には控え積みの施設を備えている。用材の河原石は、石室内に使用されている石材とはやや異り、あまり細長くなく、大きめの礫が主体となっている。控え積みの根石は、旧表土直上に捉えられ、石室内の根石がバラス等を敷いてから行なわれているのと異り、工程の手順を前にしている。

出土遺物

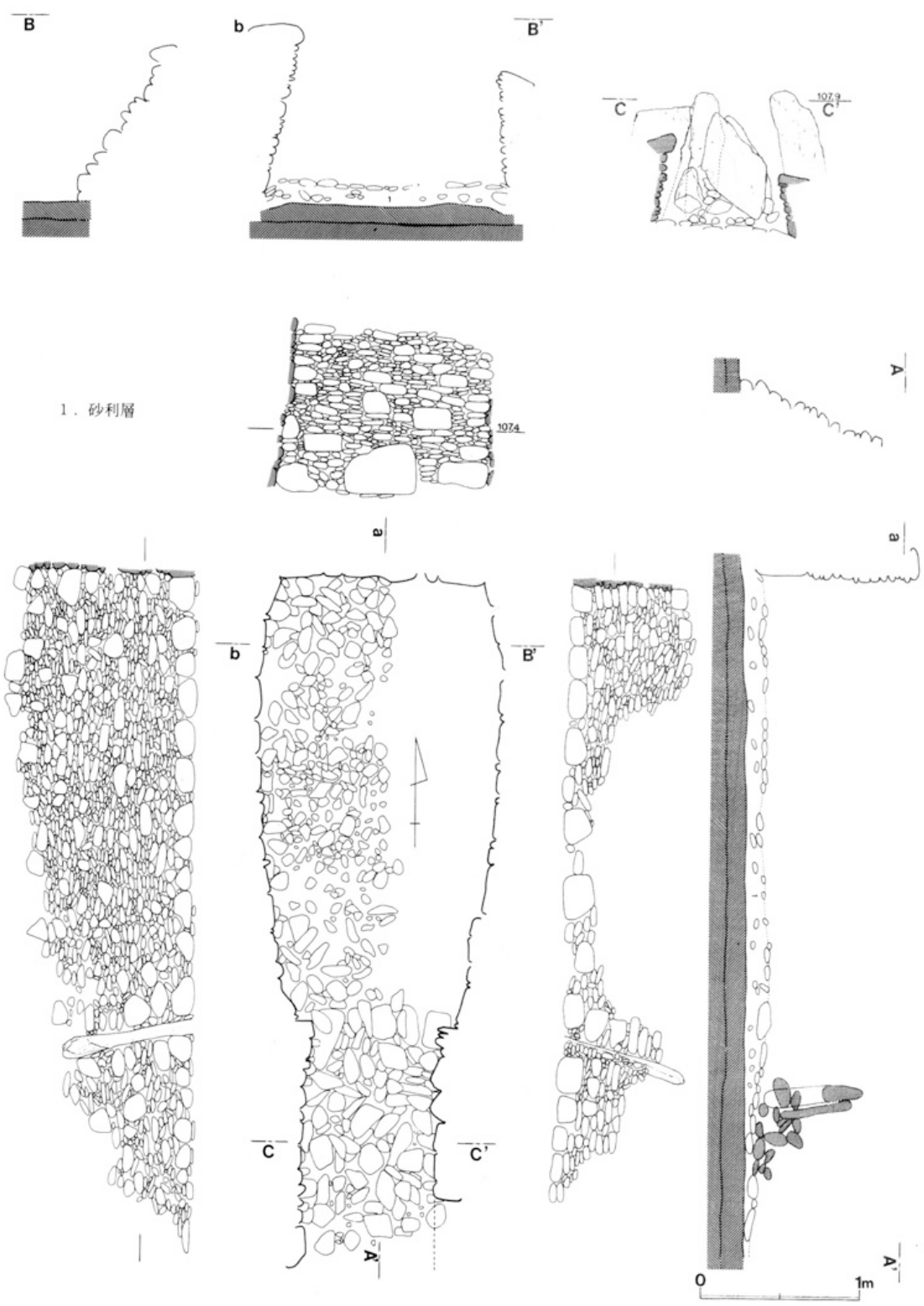
埴輪

墳丘及びその周辺部を完掘したが、出土した埴輪は細片が2点のみで、その存在の可能性は薄い。例え、埴輪の設置があったとしても、本数は僅かであったと考えられる。

鉄製品（第33図-1～4、10～13・図版65-2）

いずれも玄室棺床面よりの出土で、直刀が奥壁近くの東壁際に原位置を保ち検出された以外は、攪乱のため、玄室後半部に散在していた。ただ4の緑金具については、直刀の脇より発見された。

直刀 完形品で全長60.5cm、刀身長49.5cm、棟幅0.6cm、身幅（中央）2.2cmを測る。平造平棟で、切先に



第31图 長沖9号墳石室実測図 (1:40)

は膨らみがある。両関造りで関部には幅1.6cmの鑷がつき、これに接して長径5.3cm、短径4.1cm、厚さ0.4cmの鉄製無窓倒卵形の鑷がつく。基部には目釘孔が2つある。

刀子（1，2）1は基部末端を欠損するが、ほぼ完形品で現存長11.1cm、刀身長8.6cm、身幅は関部で1.6cmを測るが先に移るにしたがって漸次細くなる。基部には僅かに木質が残り、幅0.7cmの鑷がついている。2は切先及び基部末端を欠失し現存長9.1cm、刀身長4.8cmを測り、基部の長いものである。

鉄鏃（3）無茎広鋒長三角形腹袂式である。鋒先及び逆棘の両先端を欠き、銹化も進んでいる。

縁金具（4）一部欠損しているが、楕円形で短径2.7cmを測る。断面は長方形を呈する。

両頭座金付留金具（10～13）4個出土しているが、いずれも銹化が著しく詳細な形状は不明であるが、鉄製円筒状の中に、両端部に扁平の頭を有する鉄芯が差し込まれている状態が窺える。

装身具（第33図-5～9・図版65-2）耳環4個が玄室棺床面の奥壁寄り、ガラス小玉1個は同場所の棺床面下に潜り込んだ状態で発見された。

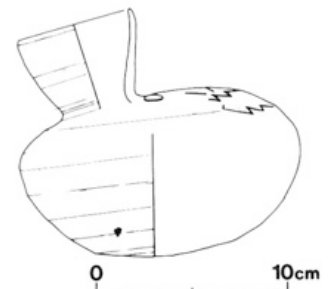
耳環（5～8）5・7は鉄芯製で、6・8は銅芯製で、いずれも金箔はすでに剥落している。断面はすべて円形である。

ガラス小玉（9）濃緑色で、径0.5cm、厚さ0.2cm、孔径0.1cm。

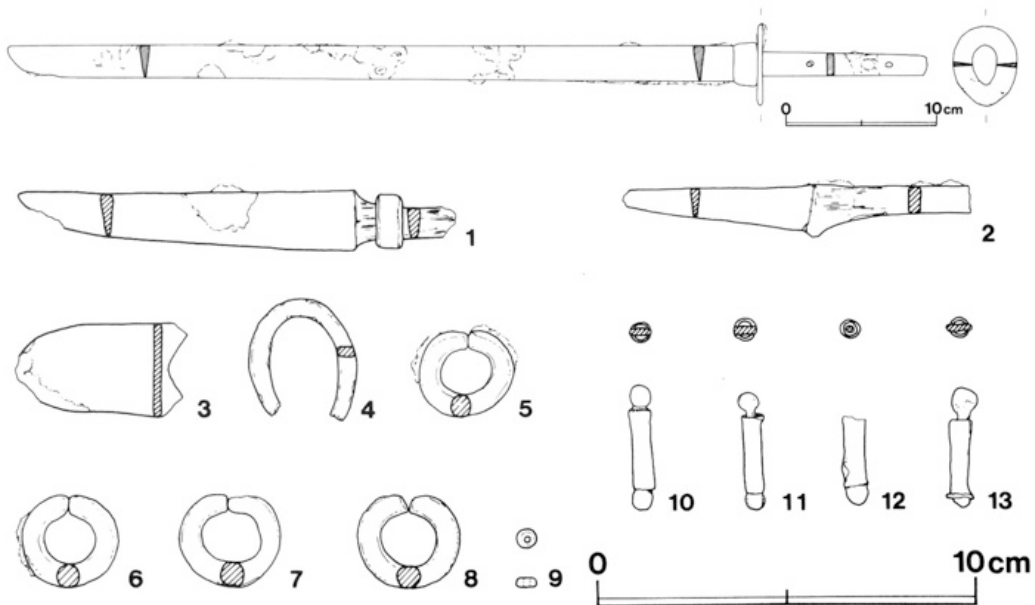
土器（第32図・図版70-4）

玄室内西壁の玄門近くより、須恵器平瓶が壁に接して出土した。

須恵器平瓶 口径6.3cm、器高13.0cm、最大径14.5cmである。胴上部には鋸歯状の篋描き文と一對の円形浮文が見られる。底部は回転篋削り調整による。色調は灰黒色で、胎土、焼成とも良い。（金子 章）



第32図 長沖9号墳出土土器
(1:4)

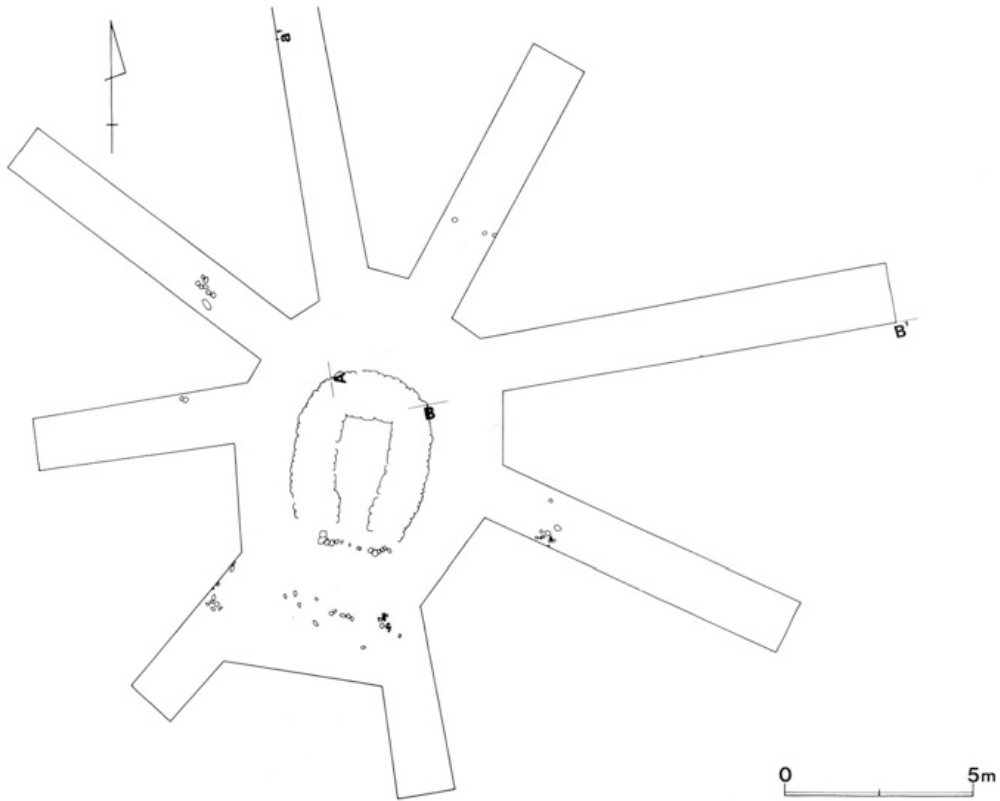


第33図 長沖9号墳石室出土遺物実測図(1:5・1:2)

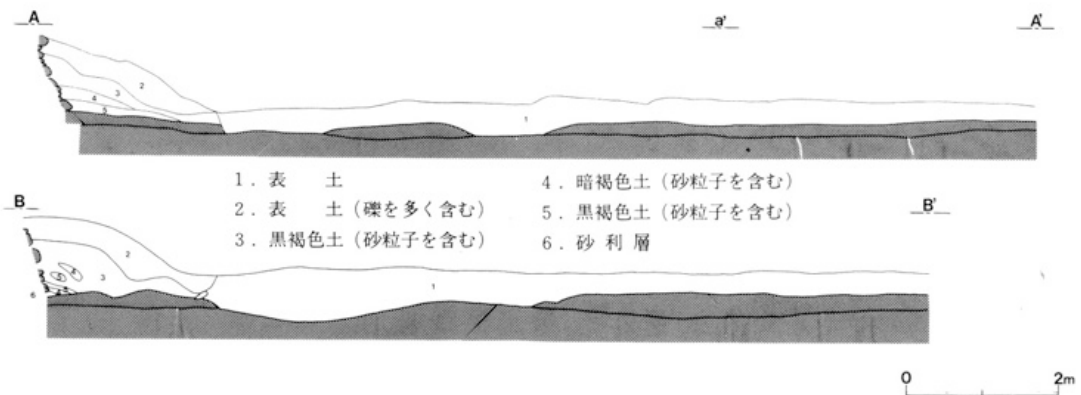
6. 長沖10号墳

古墳の立地と現状

10号墳は、身馴川の河岸段丘から、北へ約70mの所に位置する。3・8・9・10号墳の4基の古墳は近接しており、中でも10号墳は最も南に存在していた。この付近は河川による氾濫を度々受けているため、土は粘土質である。本墳の周囲は畑であり、他の古墳と同様に墳丘には河原石が集積していた。



第34図 長沖10号墳全測図 (1:200)



第35図 長沖10号墳土層断面図 (1:100)

調査時の本墳の規模は、径6 m程で円形に近かったが、南側から西側にかけてのコンターラインが特に乱れていた。墳丘上には河原石に混り、瓦や陶器片などの廃棄物が投棄されていた。

調査は9・10号墳が隣接することから、両古墳に共有する南北のトレンチを中心に放射状に計8本のトレンチを設定した。

形態

調査の結果、本墳にともなう周溝等の外部施設は全く発見されず、控え積みを持つ横穴式石室が確認されたのみであった。

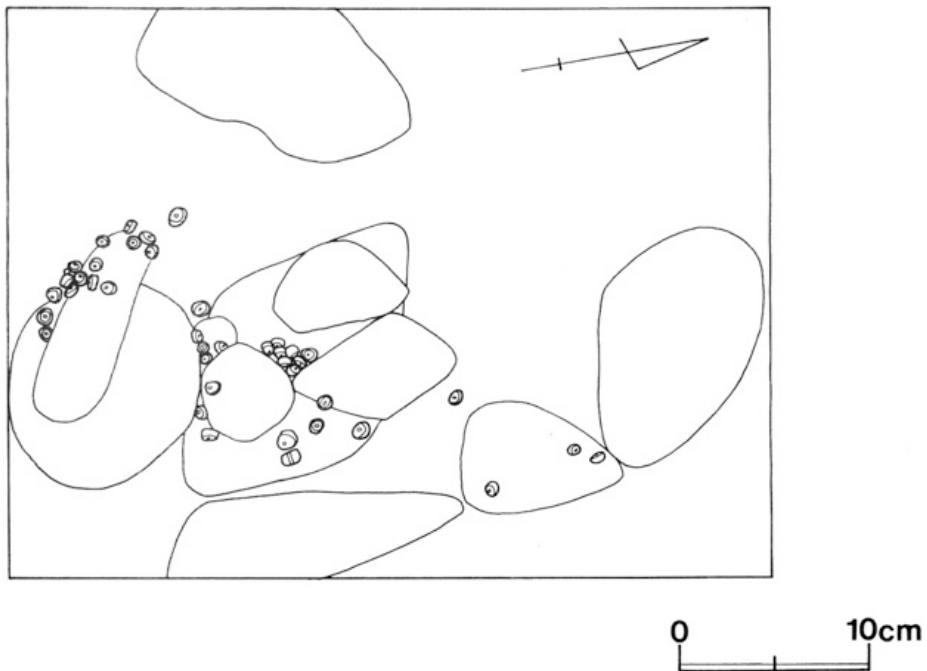
僅かに残存していた墳丘の盛土は、いくつかに分層できるが、総体的には黒褐色土層として一括できる。旧表土層は耕作その他により所々切れる箇所があるが、ほぼ水平に推積していることから、築造当時の地形は平坦であったと見られる。土層観察によっても、周溝の明確な落ち込みは確認できず、その存在の有無は不明である。

本墳の規模、形状は明らかでないが、主体部を中心に6 m前後の所に河原石が分布していることから径12 m程の円墳であったと推定される。

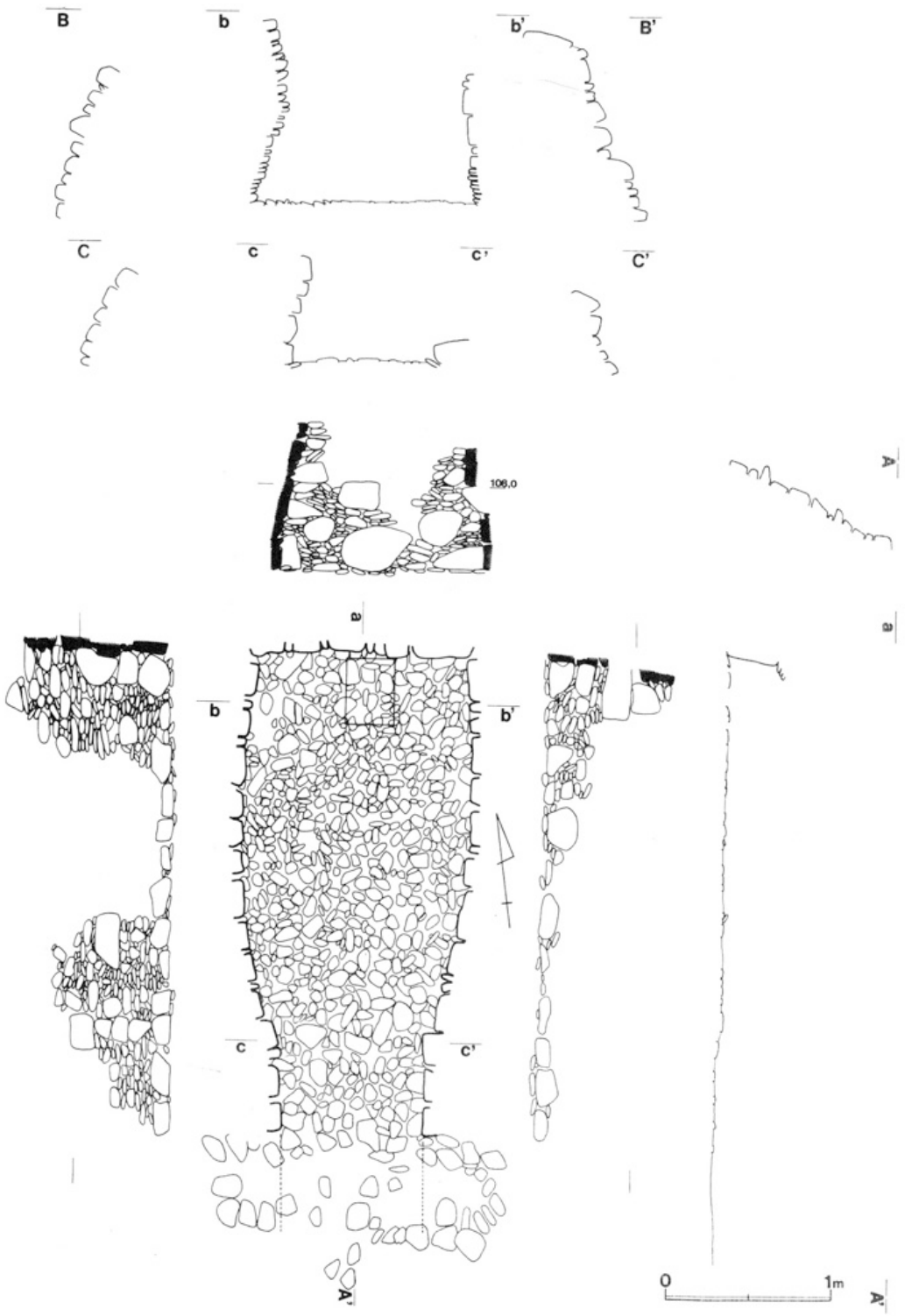
主体部

主体部は河原石使用の胴張りの両袖型横穴式石室であり、主軸はN-10°-Eを示す。

石室の規模は、現存長2.92m、奥壁幅1.25m、玄室長2.24m、同最大幅（奥壁より約1 mの所）1.37



第36図 長沖10号墳石室遺物出土状態図（1：4）



第37图 長沖10号墳石室実測図 (1 : 40)

m、玄門幅0.95mを測る。羨門部が破壊されてはいたが石室の前面に直線的に配列されていた石を、羨門部の根石と考えると石室全長は3.60mになる。

壁は、所謂模様積みと称される積み方により成されている。根石は小口部で20cm×15cm程度の河原石が並べられており、奥壁の中心部には40cm×25cmの大きな石が置かれている。西壁が一番良く残ってはいたが、中央部において石室内に大きく傾いていたため実測は不可能であった。東壁では奥壁に近い部分以外は崩れていて根石のみが確認できる程度であった。なお、壁の残存高は最も残っている所で1.0mを測る。

玄門は大型の礫を積み重ね構築されている。棺床面の保存状態は良好であり、10～15cm程の扁平な河原石が敷かれている。

天井石は確認されなかったが、石室を掘り下げて行く段階において1m×0.3m×0.3mを測る細長い緑泥片岩が見られ、これがおそらく天井石の一部であろう。

石室の前庭部において15～30cm程の河原石が1m×4mの範囲において確認された。

出土遺物

埴輪

調査においては発見されず、埴輪は存在しないと考えられる。

鉄製品（第39図-1～10・図版66-1・図版67-3）

すべて玄室の棺床面から出土し、直刀は西壁際中央部よりやや羨道に近い所、鉄鏃は奥壁に近い西壁際から塊まって出土し、東壁際からも数本確認された。西壁側の遺物は原位置を保っていたと見られる。

直刀 平造平棟で、全長71.9cm、身幅2.3cm、棟幅0.6cmである。切先は膨らみをもたぬ鱗切先である。関は両関である。刀先及び茎は先端部を欠損している。茎部には鏝が錆着している。鏝は身よりも一回り大きく長径2.9cm、短径1.9cmの環状をなしており、厚さ0.2cmを測る。

鉄鏃（1～9）8が平根であるほかは、すべて尖根である。茎の部分が残存しているもののすべてに木質部が残っていた。出土した鉄鏃は4型式に分類でき、1は有茎尖根端丸鑿箭式、2・3は有茎尖根片刃片丸鑿箭式、4・5・6・9は有茎尖根片関片丸箭式、8は有茎平根両丸造広鋒長三角形腹袂筈被式である。

刀子（10）刃先を欠き、棟は平棟で、身幅は約1.1cmを測り、断面は刃部で三角形、茎部で長方形を呈する。

装身具（11～68）奥壁に近い棺床面中央部で、丸玉が集中して出土した。

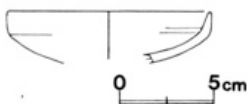
丸玉 総数58個で、材質はいずれも土製である。色調は黒褐色のものがほとんどである。径7～10mm、厚さ4～6mmを測り、比較的均一化している。

土器（第38図）

石室前庭部の河原石の分布する所より、土師器坏が出土した。

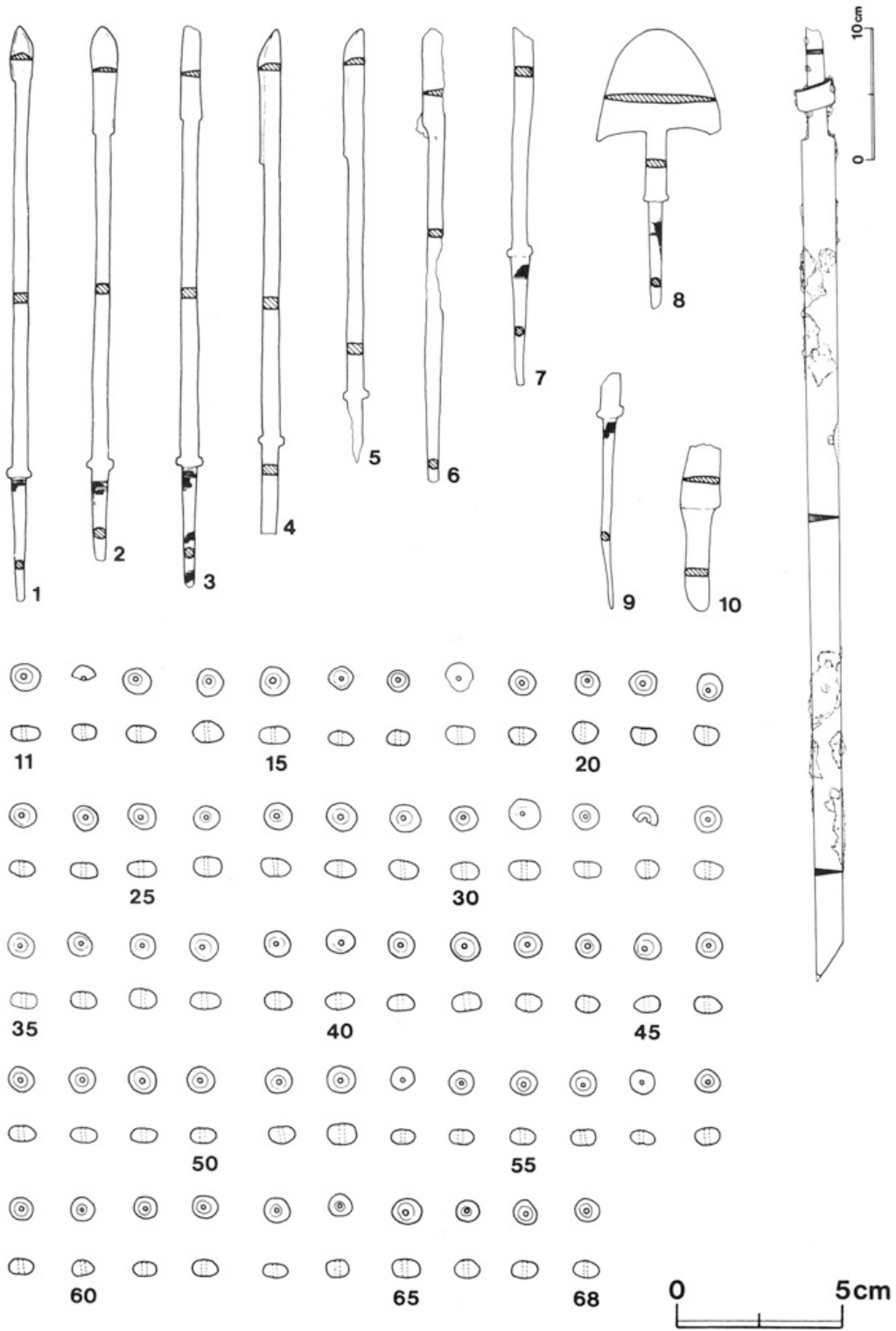
土師器坏 口縁部が短かくほぼ直に立ち上り、底部は丸底と推定される。

口径は10.8cmを測る。底部外面は筈削り、口縁部内外面及び底部内面は横撫で調整による。胎土、焼成とも良好で、橙褐色を呈する。（鈴木 純）



第38図

長沖10号墳出土土器（1：4）



第39図 長沖10号墳石室出土遺物実測図 (1:5・1:2)

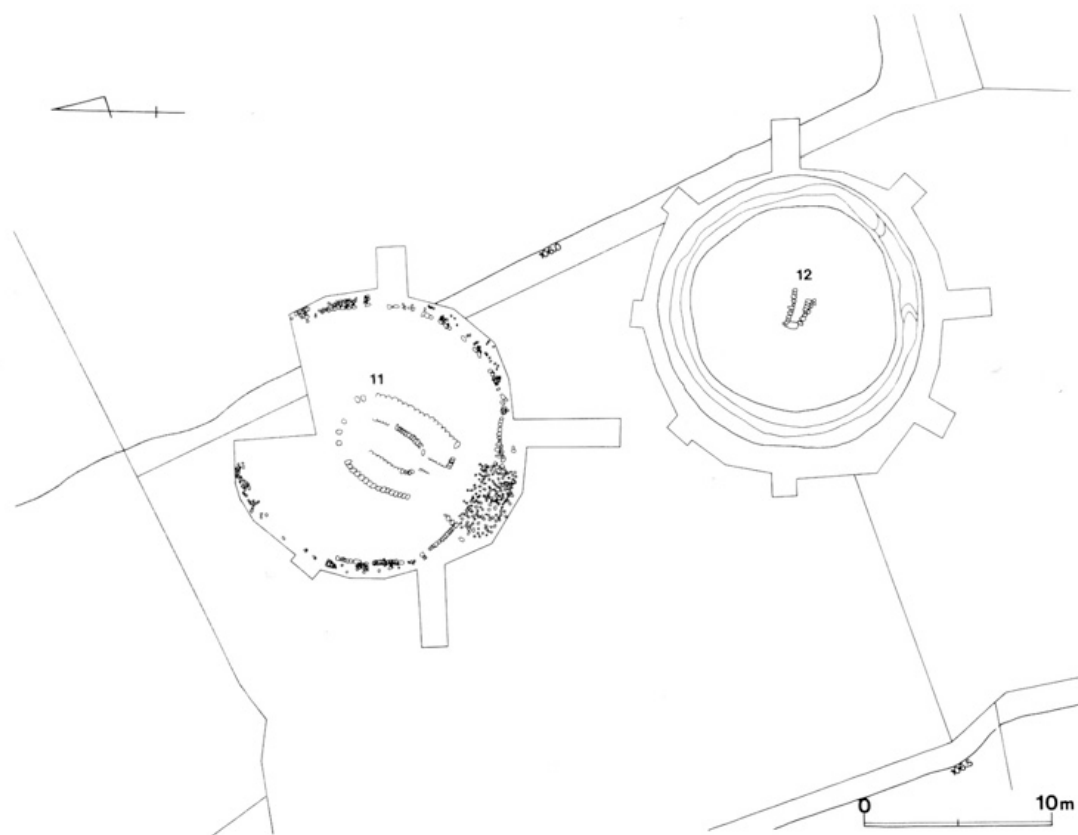
7. 長沖11号墳

古墳の立地と現状

11号墳は現在の崖から150m程北に入った河岸段丘面に位置し、3号墳からは北東へ80m程離れた所に存在していた。同段丘面と北側の台地とは、本墳から西へ行く程大きな段を持って明確に分けられるのに対し、東へはなだらかに傾斜しており、その段は不明瞭になっている。本墳の位置する辺りでは、わずかな比高差ながら両者を分けることができ、その台地裾部からは南東へ50m程離れた所である。3号墳の存在する場所からは、標高にして1.5m程低くなっている。

この付近に残存する古墳は、本墳と南接する12号墳の2基のみであり、現状では他に古墳はみられなかった。

本墳の墳丘は、耕作によりほとんど削平されてしまっており、調査時点ではわずかに高さ0.5m程の集石状の残丘が認められたに過ぎなかった。しかし、他の古墳同様集石されている所は、ほとんどが古墳跡と考えられ、この確認をするため墳丘を中心にトレンチを設定した。トレンチは、本墳が横穴式石室を有すると考えられたため、南北方向とそれに直行する様に設定したが、かならずしも石室の主軸に対して良い位置に入れることはできなかった。



第40図 長沖11・12号墳全体図(1:400)

形態

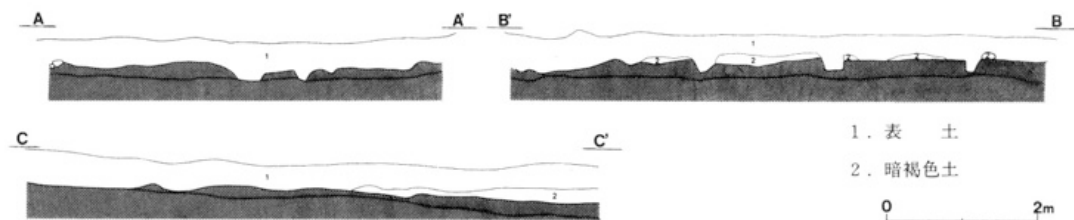
調査の結果、本墳は周溝が検出されなかったが、葦石の根石列の存在によって直径1.4m程の円墳であることが判明した。葦石根石列は、ほぼ正円を描いて全体の $\frac{2}{3}$ 程周るが、北側においては攪乱のため残存していなかった。比較的状態の良い西側では一部積石の状態もみられ、葦石は根石に大きめの長い石を用い、その上に小振りの石を小口積みになっている。石室前面部においては、一部破壊を受けていたものの台形状の平面プランを有する前庭部が存在する。前庭床には10～20cm程の石が敷かれている。

主体部

主体部は、奥壁及び羨道部西壁が破壊されている他、各部分ともほとんど根石を残すのみであったが、その状態としては比較的良好で、ある程度全容を知ることができた。



第41図 長沖11号墳全測図(1:200)



第42図 長沖11号墳土層断面図(1:100)

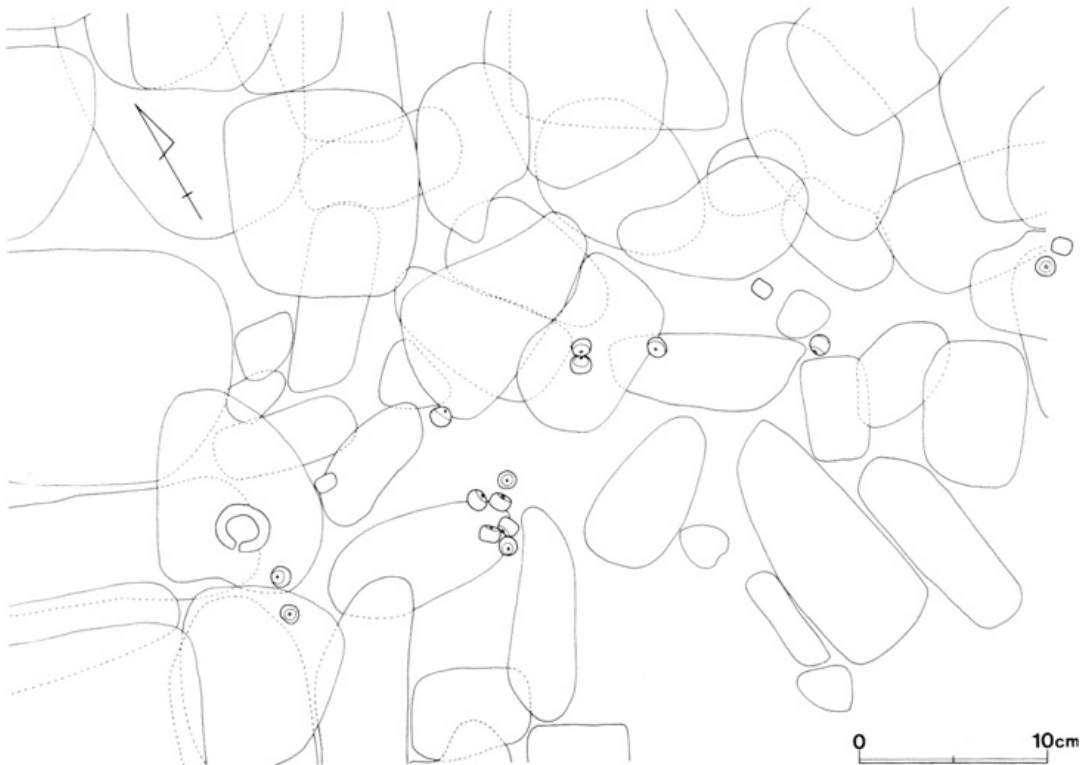
主体部は主軸をN-28°-Eに置く、胴張りの両袖型横穴式石室である。各部の規模は石室残存長4.85m、玄室最大幅1.8m、羨道部長1.4m、同幅0.85mを測る。

側壁は西側の最も状態の良い所で高さ20cm程を測り、根石には20~30cm程の河原石を間隔を置いて使用し、その間に小型の扁平な石を配していた。砂利面下の状況から、おそらく奥壁も同様な構築方法を取ったものと思われる。

玄門部東側には、玄門石と考えられる高さ35cm程の緑泥片岩が立った状態で存在するが、西側には、痕跡すらみられなかった。しかし、東側に相対する位置に河原石がないことから、西側にも同様な石があったと考えられる。又、この緑泥片岩は旧表土内に埋められており、棺床面を構築する以前に設置されたものである。

棺床面は一面に5~20cm程の扁平な石で敷きつめられており、羨道部に至るとその状態は余り良好ではなかった。断面観察によると、玄室内に敷かれた砂利層の厚さは旧表土より10~15cm程であるが、上層の扁平な石に比べて、下層は丸みのある大きめの石が使用されていた。又、壁の根石は、旧表土上に直接置かれたものではなく、その下に枕石とも言える土台の石が敷かれていることも観察できた。

天井石は全く検出されなかった。



第43図 長沖11号墳石室棺床面遺物出土状態図(1:4)



第44图 長沖11号墳石室実測図(1:40)

出土遺物

埴輪

各トレンチから小さな破片が1～2片検出されたのみで、本墳に伴うものかは断定できないが、おそらく存在しないものと思われる。

鉄製品 (第45図-1～7・図版67-4)

鉄鏃が玄室内西側壁付近より人骨と共に出土した。

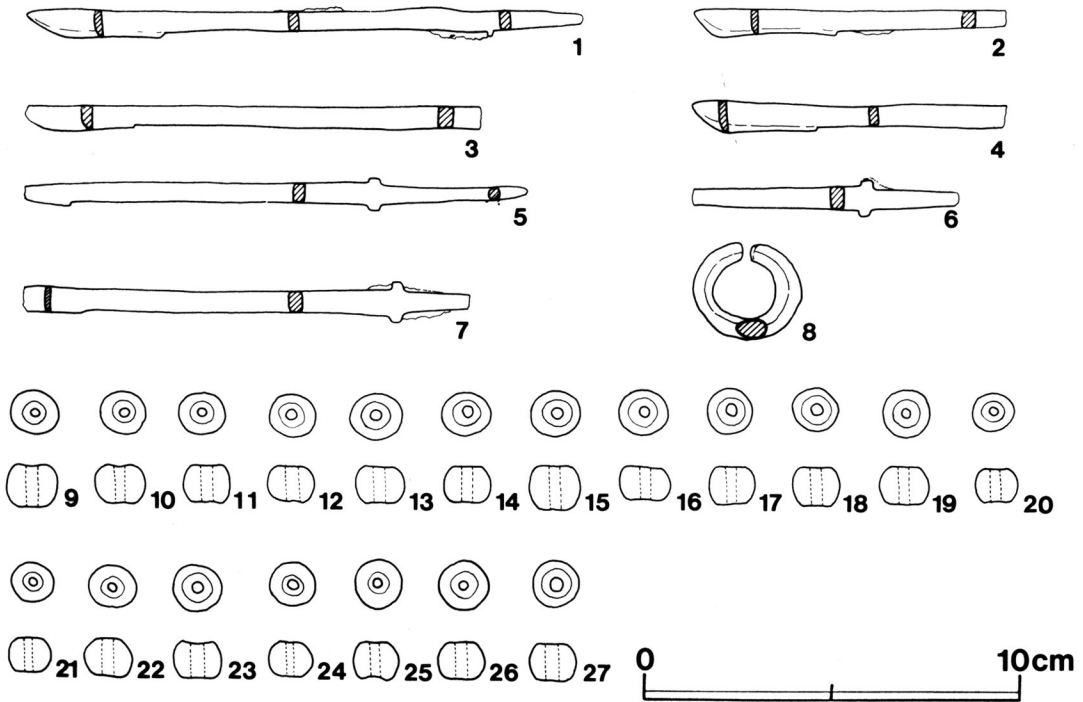
鉄鏃は全部で、7本出土しているが、そのうち形式のわかるものは6本である。1・2・3・4・7は、有茎尖根片刀片丸鑿箭式で、他は不明である。完形の1で全長14.5cmを測る。どれも銹化が進んでおり、保存状態は良好でない。

装身具 (第45図-8～27・図版67-4)

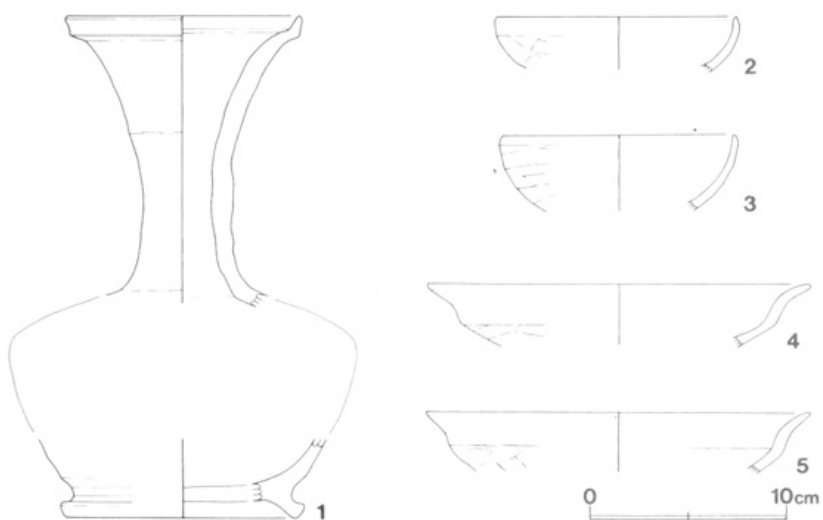
耳環1点及び丸玉19個が鉄鏃同様玄室内西側壁付近より出土した。特に丸玉は、一か所に集中して検出された。

耳環 (8) 銅芯製で、表面は殆んど剥落している。長径2.9cm、短径2.5cmの扁平形をなし、断面は楕円形を呈する。

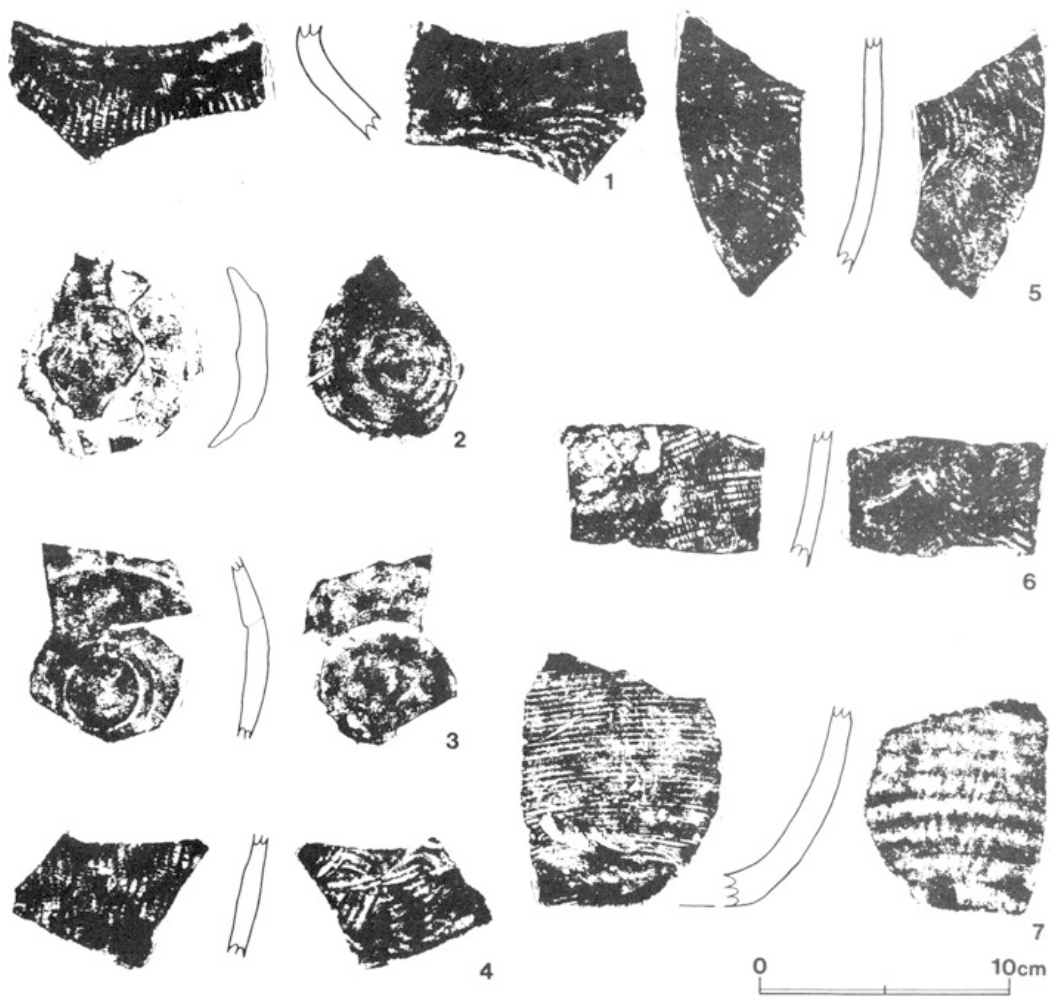
丸玉 (9～27) 大きさ形状ともほとんど同じで、材質は蛇紋岩製である。色調は黒色に近いものから風化して白色に近いものもある。いずれも、玉ずれにより両面が磨滅している。



第45図 長沖11号埴石室出土遺物実測図 (1:2)



第46図 長沖11号墳出土土器実測図（1：4）



第47図 長沖11号墳出土須恵器拓影図（1：3）

土器（第46, 47図・図版70-1, 2）

図示した土器は、いずれも前庭部床面及びその付近より検出されたものである。

須恵器台付長頸壺（第46図-1）頸部と台の付く底部で体部は発見されていない。口径11.9cm、頸部高14.1cm、底径12.1cmを測る。頸部の中程から大きく外反して開き、口縁部は短く直立する。頸部にはロクロ整形痕の凹凸がみられ、全体的につくりは雑で、稜部のシャープさはない。底部には、外へ開く短い台が付く。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良で全体的に灰白色を呈し、器面はざらついている。器形は肩部がやや張るものになると思われる。

土師器坏（第46図-2～5）いずれも小片から復原実測したものである。それぞれ口縁部の特徴から2個体分づつになる。2は口径12.1cmで、高さは明らかでないが丸底を呈するものと思われる。口縁部内、外面は横撫で調整、体部外面は篋削りがやや認められる。胎土、焼成は良好で赤褐色をしている。3は口径11.8cmで、やはり高さは不明である。口縁部先端はやや内傾気味である。口縁部外面及び内面は横撫で整形で、体部には篋削り痕が明瞭に残る。胎土には砂粒を多く含み、色調は淡褐色である。4・5は非常によく類似する土器であるが、口唇部の形態が若干異なり、4の丸くなるのに対して5はややとがっている。また、外反して開く口縁部の段も4の方が大きく明瞭である。整形はどちらも口縁部内、外面が横撫で調整され、体部外面が篋削りされている。4・5とも橙褐色を呈し、非常にもろい土器で器面は荒れている。胎土は比較的良好である。

須恵器甕（第47図-1, 4～6）1は頸部から肩部にかけての破片である。頸部外面は横撫で調整、それ以下の体部は格子状の叩きが施されている。内面は上半部が横撫で、下半部が同心円文の叩きである。色調は内側が灰色で、外側が赤灰色を呈する。焼成、胎土とも良好で、堅く焼きしまっている。4・5・6は胴部の破片である。4の外面には格子目の叩きがみられ、内面は同心円文の叩き目が施されている。焼成は良好で堅く焼きしまり、断面はセピア色を呈している。5は外面が平行叩き目、内面が浅い同心円文の叩きが施されている。胎土は良好であるが、焼成がやや甘く色調は灰赤褐色をしている。6は外面格子目叩き、内面が一部同心円文の叩きが行なわれている。焼成は甘く、断面は淡褐色をしている。色調、つくりから1と同一個体の破片である可能性が高い。

須恵器横瓶（第47図-2, 3）2・3とも横瓶の両端部である。2は外面に細かいカキ目調整痕が残り、内面の中心部に凸部がある。色調は外面で黒灰色をしており、胎土には石英粒子を含む。焼成は良好である。3は粘土板の貼り付け痕が明瞭である。外面はやや荒れているが部分的に自然釉がかかっている。全体に薄手で、作りは丁寧である。外面の色調は灰色で胎土に石英粒子を含む。2・3は色調がやや異なるが同一個体になるかもしれない。

須恵器その他（第47図-7）明確な器形は不明であるが、あるいは横瓶になるかもしれない。外面は粗いカキ目調整されている。内面は整形時のロクロびき痕の凹凸がみられる。器内は全体に厚手でシャープさはみられない。胎土に石英砂を多く含み、器面はやや荒れが目立つ。色調は暗灰色で焼成は良好である。

（山崎 武）

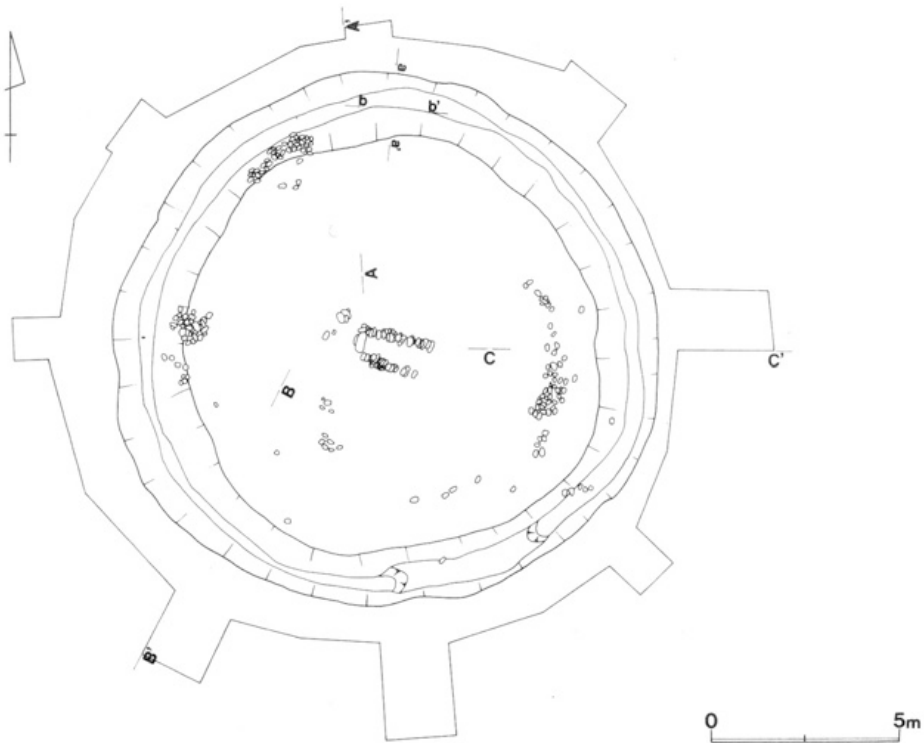
8. 長沖12号墳

古墳の立地と現状

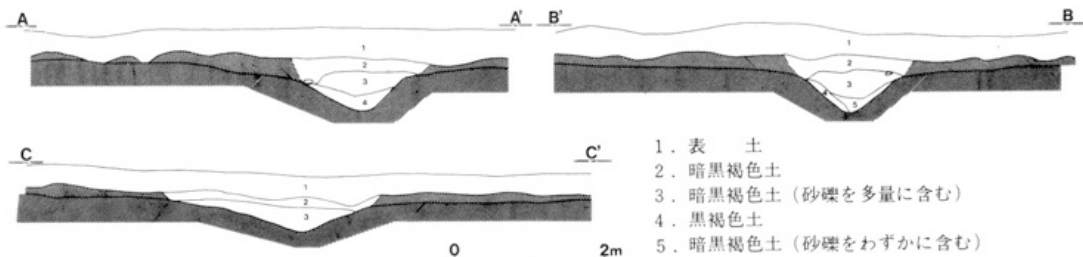
12号墳は、身馴川により形成された扇状地の標高約10.6m、同段丘崖から北へ140m程の位置に存在する。付近一帯は、平坦な地形を成しながらも、巨視的には南東に向って僅かながら低くなって行っている。

本墳の周囲には、北数mに11号墳が存在しているのみで、現状では近くに他の古墳の姿は見られなかった。しかし、南西80m程には3号墳を初め4基の古墳が、北90m程には23号墳と調査でその存在が認められた24・25号墳があり、今後の調査によっては、この間を埋める様に古墳址の発見される可能性も強い。

本墳の現況は、周囲の畑からの開墾や盗掘等により著しく変形され、東西5.5m、南北3.5m、高さ



第48図 長沖12号墳全測図(1:200)



第49図 長沖12号墳周溝土層断面図(1:100)

1 m程の僅かな墳丘が残存していたのみであった。その墳丘上には、本墳に使用されていたと思われる河原石が積まれ、墳麓には同河原石により石垣が組まれ、畑地との境界を成していた。

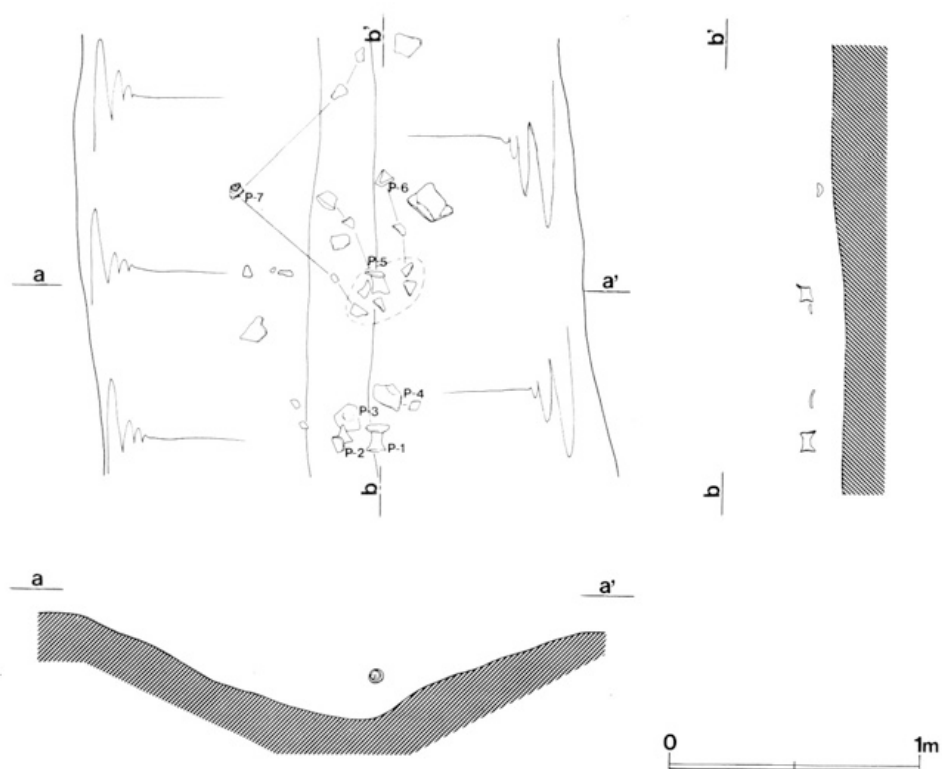
本墳の形態及び規模を知るため、残存していた墳丘を中心にトレンチを設定し、さらにそのトレンチ間を拡張して調査を行なった。

形態

調査の結果、本墳はほぼ正円形に一周する周溝をもつ円墳であることが知れた。

周溝の規模は、外径で東西14.3m、南北14m、内径で東西11m、南北10.8mである。周溝の形状は、南側の一部が約3.5mにわたり、旧表土から25cm程で浅く掘り込まれ、断面形で逆台形状を呈している他はほぼ同様である。その深さは、50～70cm程で比較的急な傾斜をもって立ち上がり、断面は『U』字状を呈しているが、部分的には『V』字状に近い形を成している所もある。

墳丘の規模、形状については、調査によっても明らかにされる可き遺構の検出がなく、明確に捉えられなかったが、当初葺石として使用されていたと思われる河原石の散在状態から、径は8m程ではなかったかと推定される。また、その高さは、主体部との関係から考えればあまり高いものではなかった様である。



第50図 長沖12号墳土器出土状態図(1:30)

主体部

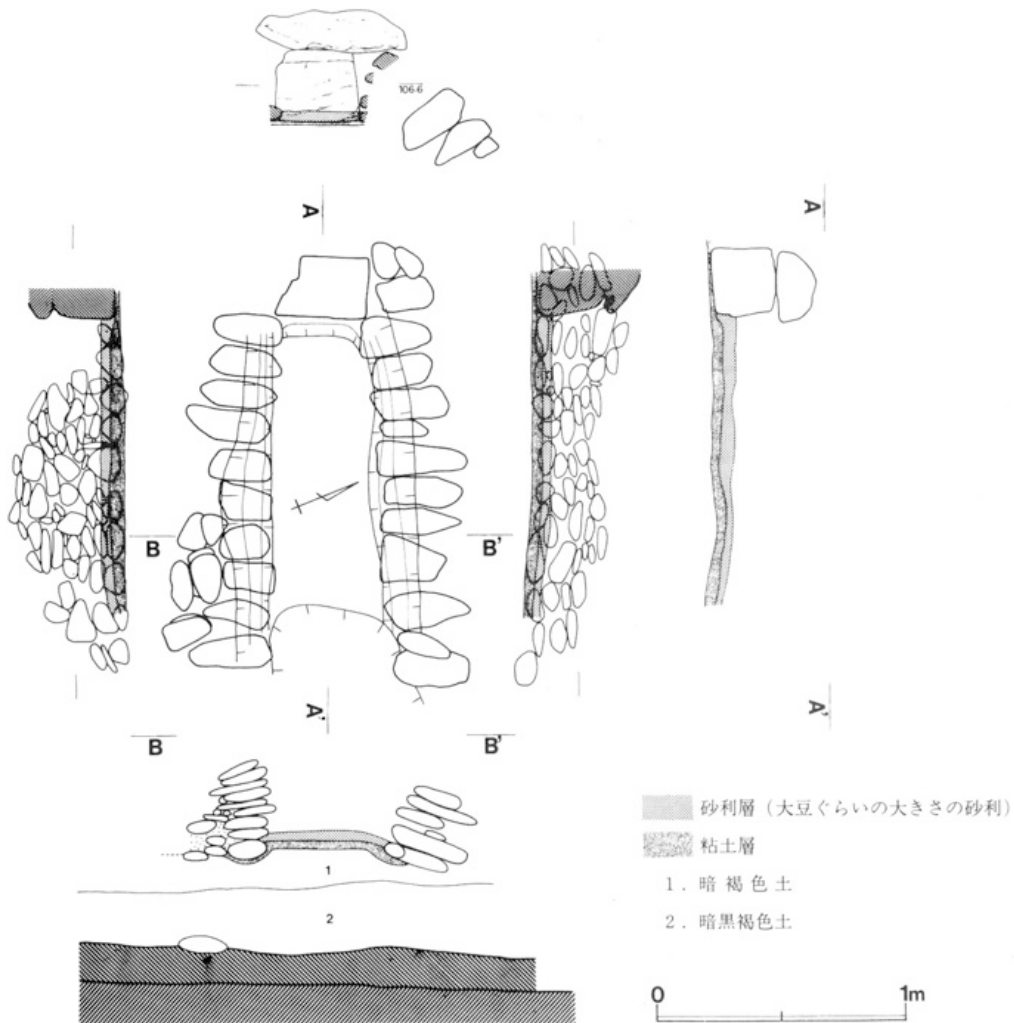
本墳の主体部は、ほぼ正円形に巡る周溝の中央に位置し、主軸をN-110°-Eにとる小規模な竪穴式石室である。

石室の遺存状態はあまり良好でなく、蓋石はすでに失われ、壁も所によって根石すら残っていない状態であった。

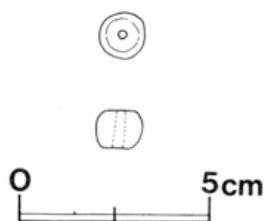
石室の主軸長は、東短壁が失われていたため不明であるが、現存長では、1.75mを測る。幅は30～40cm程であり、高さについては、完存していると考えられる西短壁で棺床面より35cmを測る。

石室の壁は、南北の両長壁が20～40cm程の細長い河原石を小口積みにして構築され、西短壁が比較的大きな自然石を2個用いて築かれている。

棺床面は、あまり良好でないが厚さ3～5cm程に小砂利が敷かれた状態でみられ、その下層には粘土



第51図 長沖12号墳主体部実測図 (1:30)



第52図 長沖12号墳出土遺物
(1:2)

層が約2～3cmの厚さで存在する。この粘土層は棺床の部分だけでなく、壁の根石の下にまで及び、南北長壁では根石を固定する様に存在する。また、西短壁近くではこの粘土層は若干落ち込んでいて、段差を成している。

石室は、旧表土より約40cm程盛土した所を構築面とし、南北両長壁の根石の下に溝状の掘り込みを設けている。石室を構築する際の墳頂部から掘り込む墓坑の存在は、墳丘がかなり失われていたためか確認できなかった。

石室の壁を積み上げるために扁平な礫や砂利を用いて後込めとしている箇所が一部ではあるが確認された。また、石室外側の南西に二つ程の縦長の礫が認められ、これらの石のみでははっきりした事は言えないが、そのあり方は控え積みの施設が存在した可能性を示している。

出土遺物

埴輪

周溝内からの出土がほとんどであり、現位置のものは認められなかった。埴輪はいずれも破片で、量も攪乱が著しかったためか、あまり多くなかった。

装身具 (第52図)

石室東側の攪乱内より丸玉一個が出土した。

丸玉 径1.2cm、厚さ1.0cmのガラス製であり、色調は淡青緑色を呈する。表面は風化により白く変質している。

土器 (第53図・図版71-1～3)

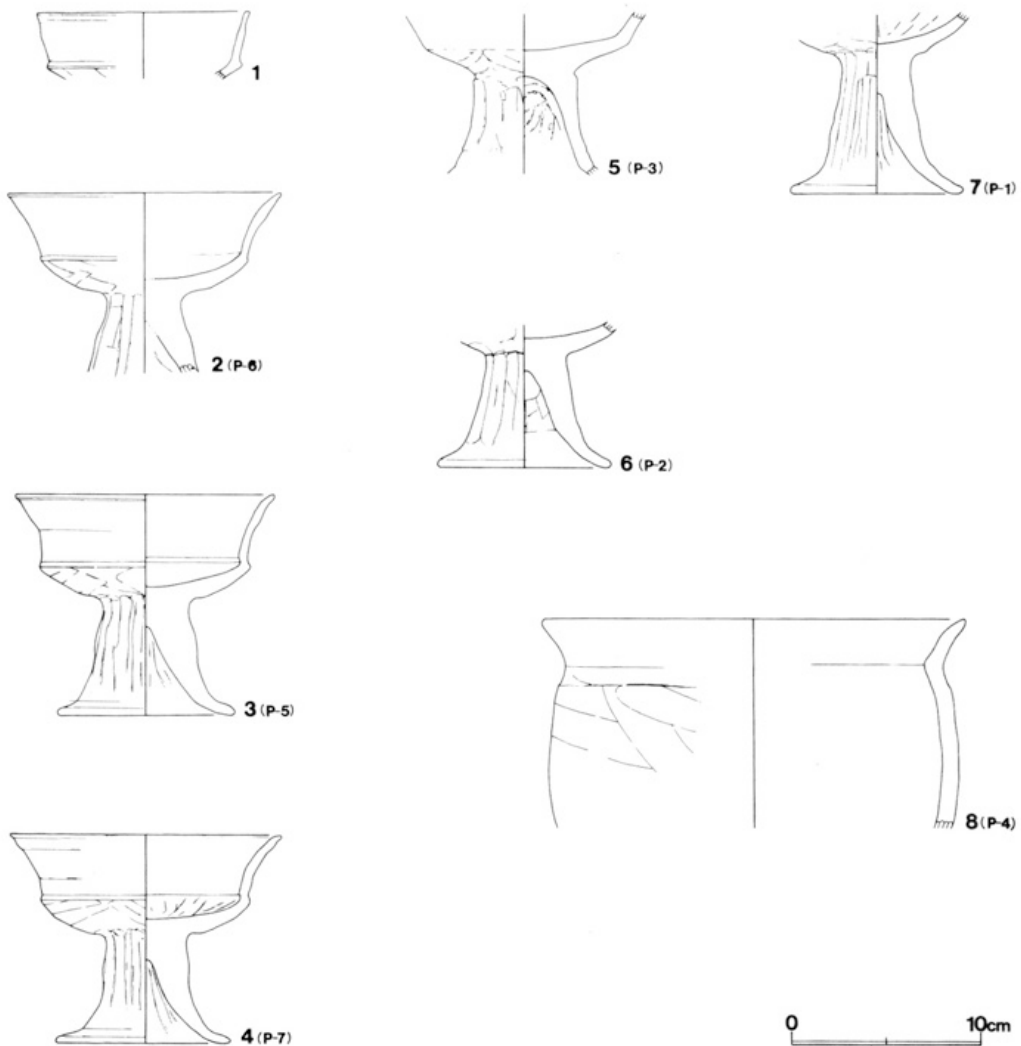
北側の周溝内から土師器杯、高杯、甕が出土した。いずれの土器も周溝底部より5～15cm程浮いた所はかなり破損して破片で散在していた。この様に出土したため、接合不可能な破片が多く、明確に個体数を知ることはできないが、一応杯1点、高杯は脚部数で6点、甕は底部数で3点を数える。

土師器杯 (1) $\frac{1}{3}$ 程の破片であり、推定口径11.2cmを測る。底部欠損のため高さは不明である。口縁部と底部は明瞭な稜により区別せられ、口縁部が直線的に立ち上がる。内面及び口縁部外面は横撫でにより、底部外面は篋削りにより調整がなされている。胎土、焼成とも良好で、色調は赤褐色である。

土師器高杯 (2～7) 2は脚裾部を欠き、 $\frac{1}{3}$ 程の破片から復原実測したものである。口径14.2cm、杯部高5.4cmを測る。杯部は、外反して立ち上がる口縁部をもち、底部と口縁部とは稜によって分けられている。脚部はやや広がり裾部へと続き、脚柱部中程で僅かに膨らむ。杯口縁部内外面及び底部内面は横撫で調整され、底部外面は篋削りによる。脚部は外面篋削り、内面指削り調整による。胎土は、僅かに微砂を含む。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。(以上5を除き胎土、焼成、色調とも同様) 3は口縁部 $\frac{2}{3}$ 程、脚裾部 $\frac{2}{3}$ 程を欠く。口径11.6cm、底径9.4cm、器高11.7cmを測る。器形は2に近く、裾部が僅かに開く。杯部の調整は2と同じであり、脚部は脚柱部外面篋撫で、同内面指撫で、裾部内外面横撫でによる。4は口縁部 $\frac{1}{2}$ 程、脚裾部 $\frac{1}{2}$ 程を欠く。口径は14.4cm、底径9.2cm、器高は11cmである。器形は3に類似し、調整もほぼ同様であるが、杯底部内面には暗文風の篋磨きが見られる。

5は坏部及び脚裾部を欠損している。口縁部内外面及び坏底部内面は横撫で、同外面は粗い篋削り調整による。脚柱部外面は篋削りにより、裾部近くに至って横撫でされている。内面は指篋りである。胎土は微砂を多く含み、焼成は良好であるが、やや軟弱である。色調は淡褐色を呈する。6は坏部を欠くが2～4と同様な器形をとるものと思われ、底形で9.2cmを測る。坏底部外面篋削り、脚部外面は篋削り整形後、一部横撫で調整されている。同内面は横位の篋削りによる。裾部内外面は横撫で調整である。7は坏部上半及び脚裾部 $\frac{2}{3}$ 程を欠く。脚部は他に比べ長脚であり、底径9.2cmを測る。整形は4と同様。

土師器甕（8）胴上半から口縁部にかけての $\frac{1}{3}$ 程の破片であり、口径22.0cmを測る。口縁部は胴肩部から緩やかに移行し外反するが、内面では口縁の屈曲は明瞭である。肩部外面には、軽い稜が部分的に巡る。口縁部内外面は横撫でにより、胴部外面は篋削りされている。胎土は微砂を多く含み粗く、焼成は良好であり、色調は暗赤褐色である。（金子 章）



第53図 長沖12号墳出土土器（1：4）

縄文 A 地区 (14・15・16号墳)

古墳の立地と現状

14・15・16号墳は、1～12号墳とは異なった一段高い台地上に存在する。この台地は、東へ行くに従ってなだらかに傾斜しており、3基の古墳は、ちょうど台地の先端付近に位置している。

発掘調査区域には、調査当初、縄文式土器片の散布が見られ、縄文時代の住居址の存在が予想されたため縄文 A 地区と名称づけ、2.5m×2.5mのグリッドを組んで発掘を開始した。しかし、1950年代作成の地籍図には「石おき」の名のもとに調査区域内に3基の古墳が存在しており、古墳址の検出も当然考えられた。

調査の結果、縄文時代の遺物と3基の古墳の周溝址が確認された。縄文時代については、調査区域内の北東部を中心にかなりの量の縄文式土器片と数点の石器が出土したが、これらの遺物はすべて包含層からの出土に関連する遺構は確認されなかった。同じ台地上の西200mの地点では環状一号線に伴う調査で2軒の住居跡が確認されているため、この調査区域においても縄文時代の住居跡の存在は当然予想されるが、おそらく古墳の構築時やその後の耕作等によって大規模な破壊を受けたものと思われる。

9. 長沖14号墳

形態

14号墳は、3基の中で最も高い所に位置していたが、大部分が調査対象区域外であったため、はっきりした形態は不明である。復原すると内径3.4m、周溝幅7mを有する大規模な円墳であると思われる。周溝は、ローム層を60～70cmほど掘り込んで築かれており、底は一様に水平である。立ち上り方は、比較的なだらかな内側に対して、外側は垂直に近い。

主体部

主体部については、本墳の調査が周溝の一部を確認したのみで、そのほとんどが、調査対象区域外にあるため確認できなかった。さらに、墳丘は、既に見られなく、知るすべもなかった。

出土遺物

埴輪 円筒埴輪および大型の朝顔型形埴輪が周溝内より検出された。

土器 (第58図・図版71-4)

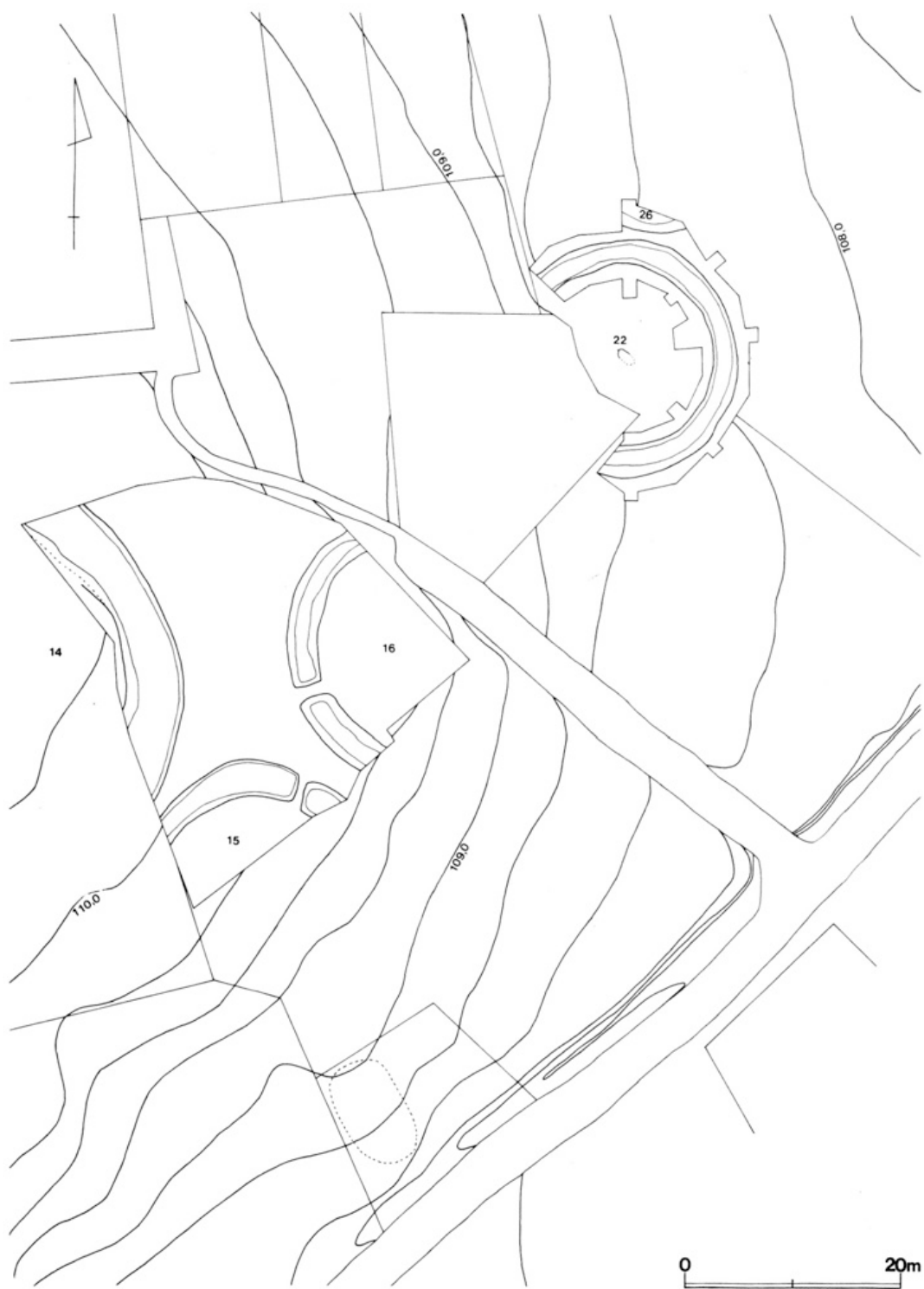
1の甗及び3の壺は周溝内より出土し、2の高坏が表土中から確認された。高坏については本墳にとりなうものかは、不明である。

土器器甗 (1) 4cm×5cmほどの破片から復原したもので、底部及び口縁部はなく、胴上部に径1cmほどの透かし孔を持つ。胴最大径は10.5cmほどである。色調は暗褐色で、胎土、焼成とも良好である。

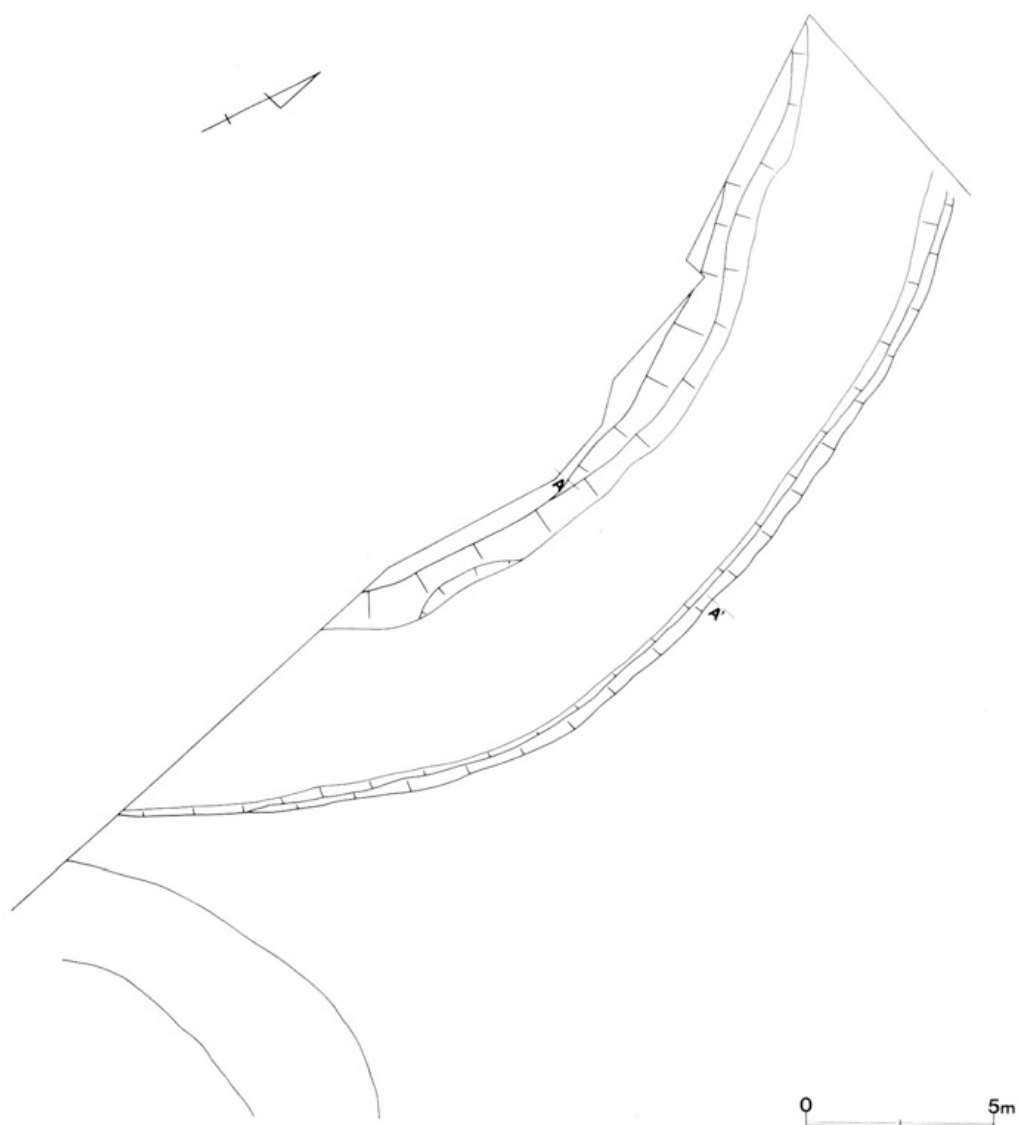
土器器高坏 (2) 坏部及び脚下半部は欠損している。現存する脚部は『ハ』の字状に開いている。色調は暗褐色で、胎土、焼成とも良好である。



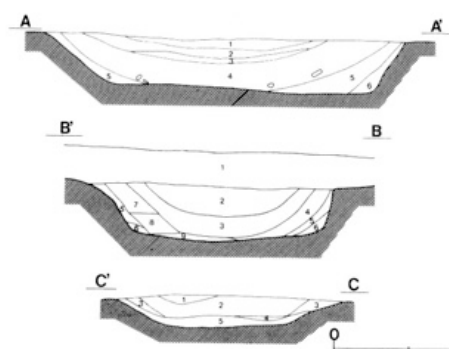
第54図 長沖縄文A地区(14・15・16号墳)地形測量図 (1:600)



第55图 14·15·16·22号墳全体图 (1 : 600)

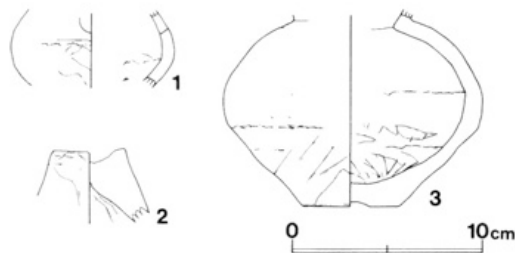


第56图 長沖14号墳全測図 (1:200)



- | | |
|----------|----------|
| A-A' | |
| 1. 褐色土 | 5. 暗黄褐色土 |
| 2. 黑色土 | 6. 黄褐色土 |
| 3. 火山砂 | 7. 暗茶褐色土 |
| 4. 黑色土 | 8. 暗黄褐色土 |
| 5. 暗茶褐色土 | 9. 暗黄褐色土 |
| 6. 暗黄褐色土 | C-C' |
| B-B' | |
| 1. 表土 | 1. 黑褐色土 |
| 2. 黑色土 | 2. 黑色土 |
| 3. 暗茶褐色土 | 3. 暗茶褐色土 |
| 4. 暗茶褐色土 | 4. 茶褐色土 |
| 4. 茶褐色土 | 5. 暗茶褐色土 |

第57图 長沖14·15·16号墳周溝土層断面図 (1:100)



第58図 長沖14号墳出土土器（1：4）

土師器壺（3）胴部 $\frac{1}{3}$ 程の破片で、口縁部はすでに欠損している。底部径は5cmで上げ底であり。胴最大径は胴中央部にあり13.5cmである。胴下半部に篋削りが見られ、内部には輪積み痕が良く残っている。色調は暗赤褐色で、胎土、焼成とも良好である。

10. 長沖15号墳

形態

14号墳の南東に近接していた古墳で、内径1.9m、周溝幅2.5m～3.5mの円墳である。

周溝は、北東部にブリッジを持ち、14号墳と接する部分では幅がやや狭くなり、14号墳を意識して築いているのではないかと思われる。また、周溝の立ち上り方は内、外側ともほぼ垂直に近く、掘り込みも深さ70cmほどの底の水平なものであり、14号墳の周溝の掘り方に類似する点を持っている。

主体部

古墳の大半が調査区域外で、さらに墳丘もすでに失われていたため全く不明である。

出土遺物

埴輪 かなりの量の破片が、周溝内より検出された。また周溝内側より、本墳のものとは明らかに異なる古い様相を呈する埴輪（第114図）が一点出土した。時期的にも、近接する14号墳との関係が最も強く考えられ、14号墳からの移動もありうるが、あるいは円筒棺に使用された可能性もある。

11. 長沖16号墳

形態

14号墳より10mほど東に位置していた古墳で、内径2.2m、周溝幅3mの円墳である。周溝は、西側に幅1mのブリッジを持ち、掘り込みは浅く、立ち上り方は内、外側ともなだらかである。

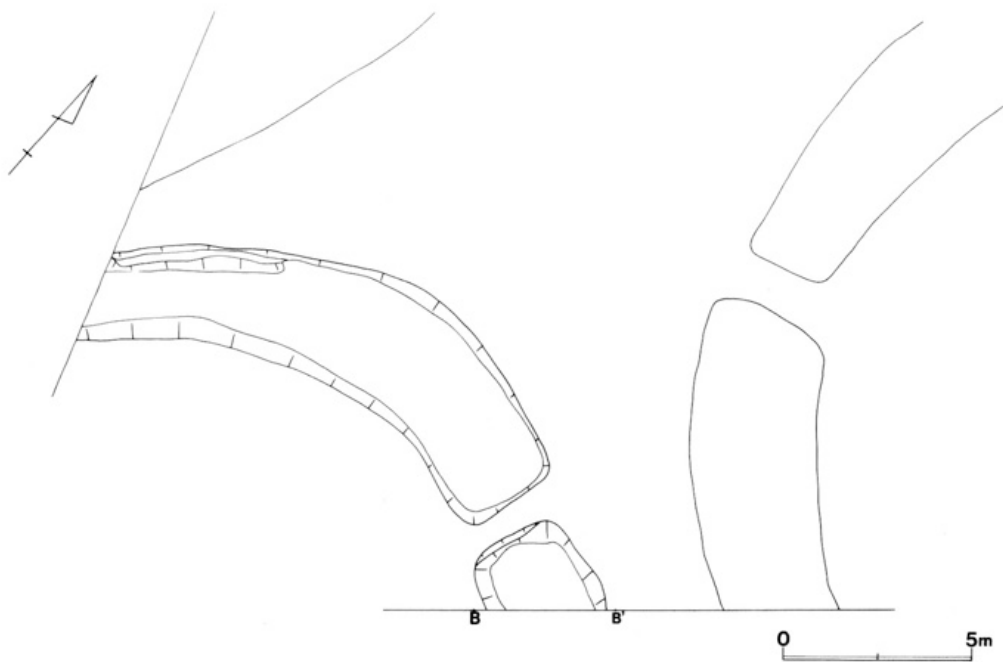
主体部

墳丘は認められず、耕作がローム面まで及んでいるためか、周溝の内部では、主体部に使用されたとと思われるような石は確認できなかった。また周溝内においても、同様な石は検出できなかったため、どのような様相であったか明らかでない。

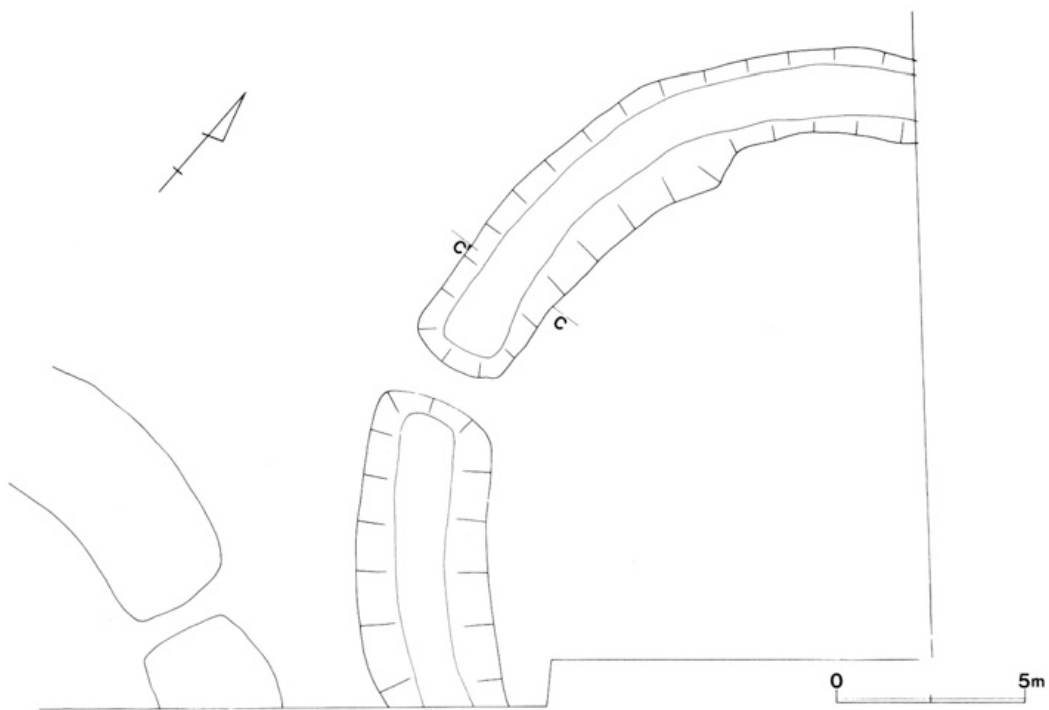
出土遺物

埴輪 周溝内外とも、全く検出されなかった。

（倉本 稔）



第59図 長沖15号墳全測図 (1:200)



第60図 長沖16号墳全測図 (1:200)

12. 長沖21・29号墳

古墳の立地と現状

21号墳は、児玉町南方の丘陵地帯より緩傾斜を持って北東に伸びる洪積台地上に位置する。この台地上には、第2、3次において発掘調査を行なった、14・15・16・22・26号墳などの古墳が存在していた。本墳はこの台地の先端部に近く、周囲には住宅が点在していた。台地の傾斜は本墳の付近でさらに緩やかになり、身馴川の氾濫によって形成された砂利層に至る。

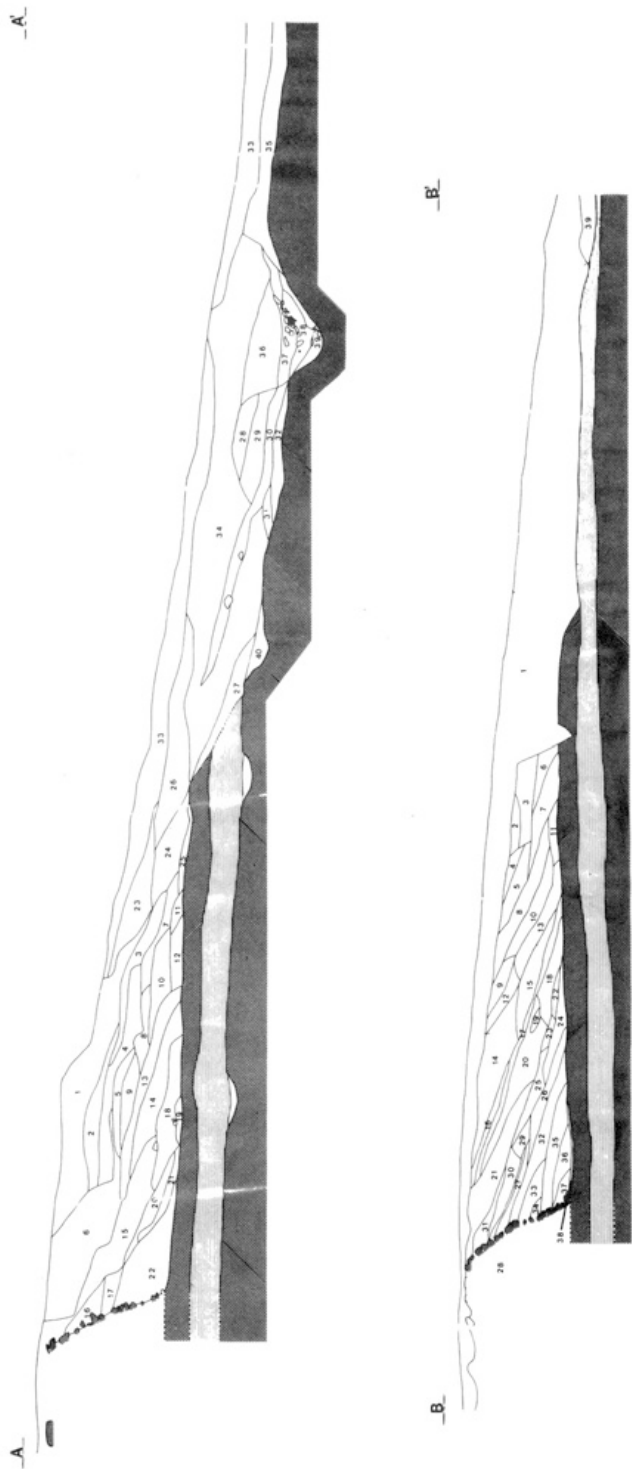
現状での墳丘は、南北約26m、東西約17mを測り、西側はカットされ、残存している墳丘上は桑畑となっていた。高さは傾斜面に占地しているため、北側からではかなりの高さを有するよう見え耕作面との比高差は2.5mを測る。これに対して南側からでの高さは1m程で、わずかに墳丘が認められる



第61図 長沖21号墳墳丘測量図(1:600)

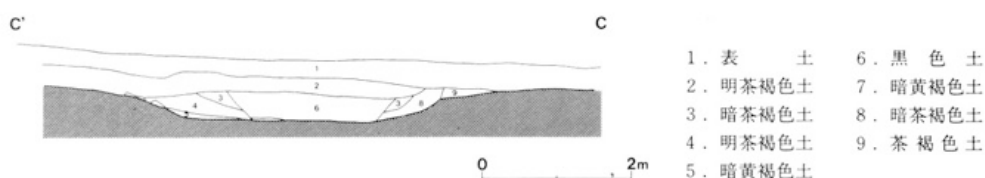


第62図 長沖21号墳全測図 (1:200)



- | | | |
|----------------------------------|------------------------|---------------------------|
| 1. 暗黄褐色土 (ロームを主体とする) | 21. 暗茶褐色土 (ロームを粘と含まない) | 21. 黄褐色土 (ロームプロックを主体とする) |
| 2. 明茶褐色土 (ロームプロックを少量に含む) | 22. 黒褐色土 (旧表土を主体とする) | 22. 暗黄褐色土 (ロームプロックを含む) |
| 3. 暗黄褐色土 (ロームプロックを少し含む) | 23. 明茶褐色土 (ローム粒を若干含む) | 23. 暗黄褐色土 (ロームプロックを少量含む) |
| 4. 暗黄褐色土 (ロームプロックを主体とする) | 24. 明茶褐色土 (ローム粒を若干含む) | 24. 黄褐色土 (ロームプロックを少量含む) |
| 5. 暗黄褐色土 (ロームプロックを主体とし、4層より多く含む) | 25. 明茶褐色土 (ローム粒を多く含む) | 25. 暗黄褐色土 (ロームプロックを少量含む) |
| 6. 暗黄褐色土 (ロームプロックを少量含む) | 26. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 26. 黒褐色土 (ロームプロックを主体とする) |
| 7. 暗黄褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 27. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 27. 暗茶褐色土 (ロームプロックを僅かに含む) |
| 8. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 28. 茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 27. 暗茶褐色土 (ロームプロックを若干含む) |
| 9. 明茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 29. 黒褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 28. 茶褐色土 (ロームプロックを含む) |
| 10. 暗茶褐色土 (スコリアを多量に含む) | 30. 暗茶褐色土 (スコリアを多量に含む) | 29. 黒褐色土 (ロームプロックを若干含む) |
| 11. 暗茶褐色土 (ローム粒を若干含む) | 31. 暗茶褐色土 (ローム粒を若干含む) | 30. 茶褐色土 (ロームプロックを若干含む) |
| 12. 暗茶褐色土 (ローム粒を若干含む) | 32. 暗茶褐色土 (ローム粒を若干含む) | 31. 明茶褐色土 (ロームプロックを主体とする) |
| 13. 暗茶褐色土 (ローム粒を若干含む) | 33. 暗茶褐色土 (ローム粒を若干含む) | 32. 暗黄褐色土 (ローム粒を少量含む) |
| 14. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 34. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 33. 黒褐色土 (旧表土を主体とする) |
| 15. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 35. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 34. 黒褐色土 (旧表土を主体とする) |
| 16. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 36. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 35. 黒褐色土 (旧表土を主体とする) |
| 17. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 37. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 36. 黒褐色土 (旧表土を主体とする) |
| 18. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 38. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 37. 暗黄褐色土 (ローム粒を少量含む) |
| 19. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 39. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 38. 暗黄褐色土 (ローム粒を少量含む) |
| 20. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 40. 暗茶褐色土 (ローム粒を多量に含む) | 39. 暗黄褐色土 (ローム粒を少量含む) |

第63図 長沖21号墳丘土層断面図 (1:100)



第64図 長沖29号墳周溝土層断面図（1：100）

程度であった。

主体部が付近の老人の話によると竖穴系ということであったので、調査区域全面に4 m×4 mのグリットを設定して調査に臨んだ。墳丘上のグリットにおいて天井石及び控え積みが出土し、主体部が横穴式石室であることが確認されたことから、改めて横穴式石室に合わせて十字のセクションベルトを設定した。台地上には、既に消滅した古墳址の存在の可能性が大きかったので、できる限り調査範囲を広げて発掘を行なった。

形態

調査の結果、墳丘の南側は近代の民家により、また北側から東側にかけてもやはり近代の溝によって既に破壊されていたことが知れた。西側は調査区域外であったが、トレンチを1本設定し同様な状況が確認された。本墳に伴なう内外部施設は、石室及びそれを取り囲む控え積みの他は残存していなかった。しかしながら、墳丘は部分的には遺存状態が良好であり、概括的に盛土の積土状態を知ることができた。墳丘を分断したトレンチを観察すると、地山であるローム層があり、この層は南から北に向かって緩傾斜している。この上には漸移層を挟んで旧表土の黒色土層が乗る。漸移層は厚さ約40 cmで黒褐色を呈し、縄文土器片を包含していた。なお、旧表土も地山と同様に傾斜しており、古墳築造当時の地形から現在まであまり変化がないことが知れる。盛土は、控え積み側から黒色土→ロームブロックと黄褐色土→黒褐色土の順で積んでいることが概括視できる。

調査区域内では、北西隅で29号墳の周溝が、21号墳の東側裾部で縄文中期の住居址1軒がそれぞれ検出された。

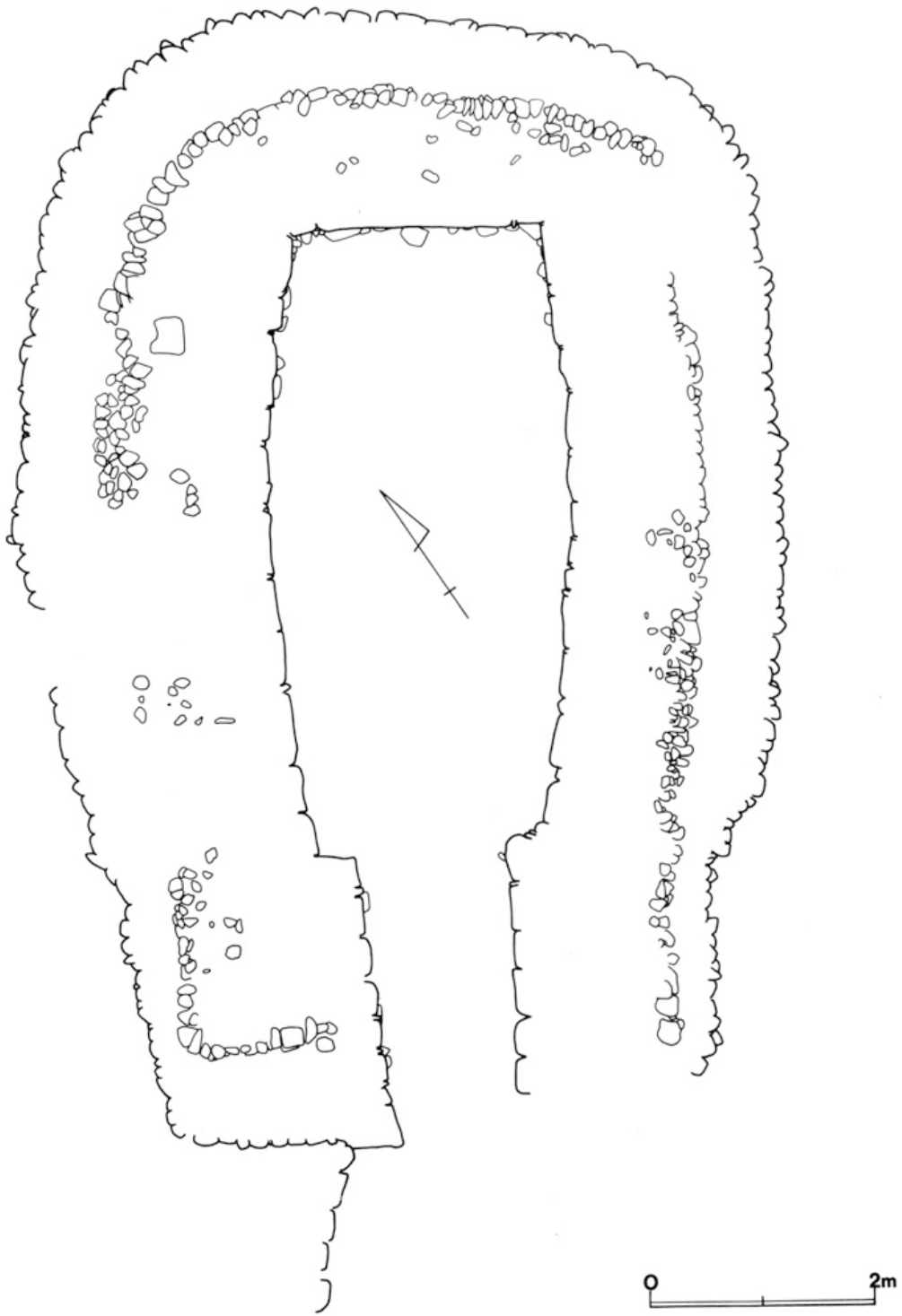
主体部

21号墳の主体部は、河原石を用いた模様積みの胴張り両袖型横穴式石室である。主軸は、N-34°-Eを示し、南西方向に開口する。

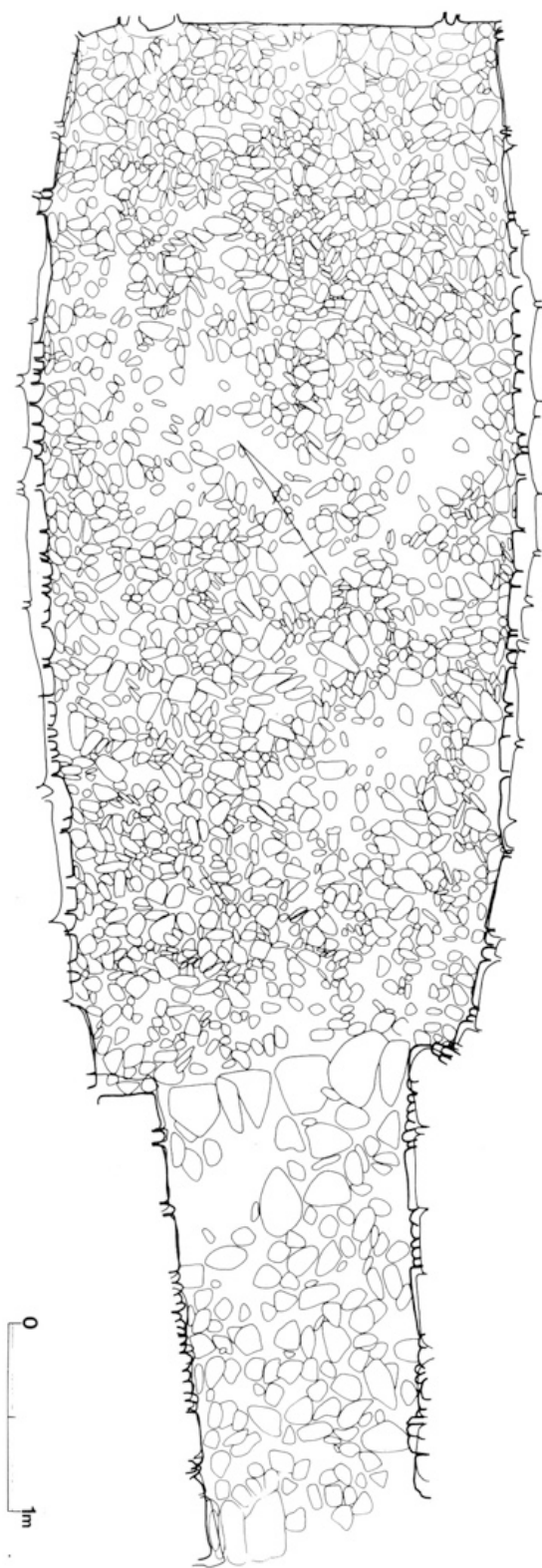
石室の規模は、石室全長8.16 m、奥壁幅2.24 m、玄室長5.48 m、同最大幅（玄室中央部）2.68 m、羨道部長2.68 m、同幅は玄門部で1.34 m、羨門部で1.00 mを測り、玄室の胴の張り方は緩やかである。本墳の横穴式石室は、5次に亘る調査を行なった長沖古墳群中で最大の規模を有する。

奥壁は、緑泥片岩を用いた一枚石で棺床面からは1.2 mの高さを有している。緑泥片岩の上部の天井部に接する部分は比較的平坦であり、それに比べ下部は不整形を呈し隙間には河原石が雑に詰め込まれている。

側壁は、玄室、羨道部ともほぼ同様な積み方により構築されている。石材はすべて河原石の転石であり、小口部を内側に向け控えを長く取り、使用されている。根石には、小口部が自然平坦面を有する30



第65図 長沖21号墳控え積み実測図 (1 : 60)



第66図 長沖21号墳石室棺床面実測図（1：40）

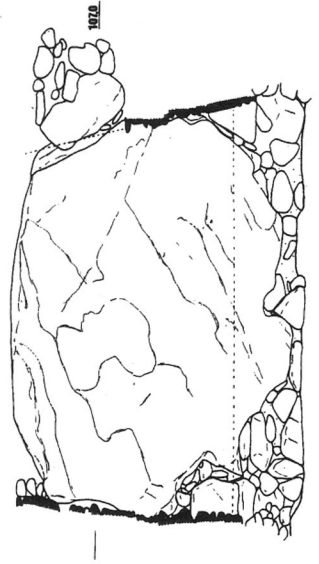
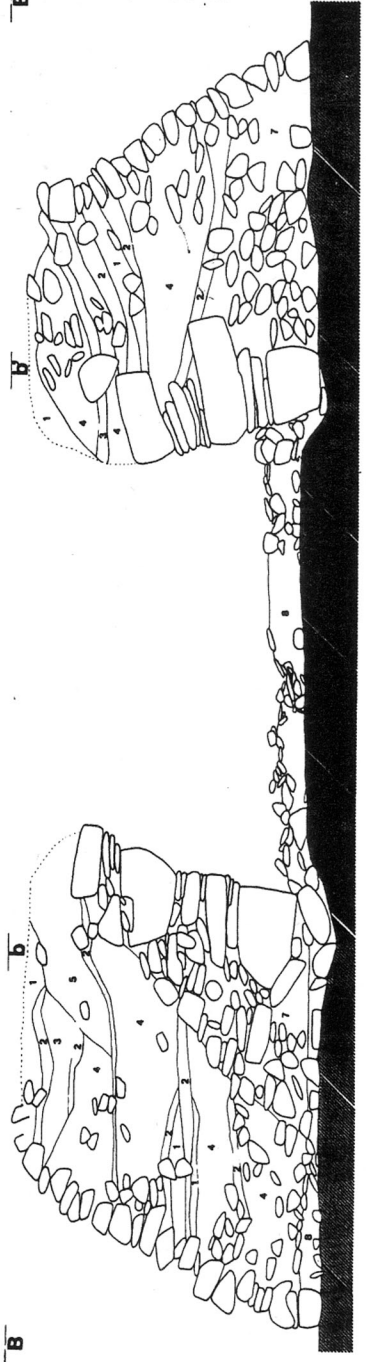
～50cm程の比較的大きな石を用い、羨道部ではバラスを敷いた上に、玄室部では北に向かって緩傾斜を持つ旧表土を若干掘り込んでバラスを敷いた上に捉えられおり、奥壁の近くの根石のレベルを上げている。壁の構成は、根石に使用されたものとはほぼ同様な大きめの石を配し、その石との隙間に小口部で5～10cm程の小ぶりな石を積み、再び大きな石を配するといった工法により概括的には構成されている。その単位は、現存する限りでは玄室部壁で4段、羨道部壁で3段認める事ができる。また、壁面は多少の持ち送りが認められる。石室築造当初の壁の高さは奥壁や天井石の遺存状態から現在とはほぼ同じであったと推察される。

玄門は、1m×0.3m×0.2m前後の直方体の河原石を用い、縦に一線上に積み上げ門柱としており、西壁で6段、東壁で7段認められる。羨門では、0.3m×0.5m×1m程の大きな河原石を根石とし、その上に玄門に使用されたものと同様な直方体の河原石を積んでいる。

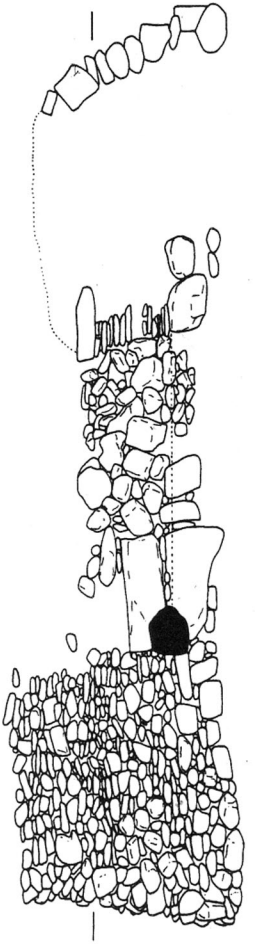
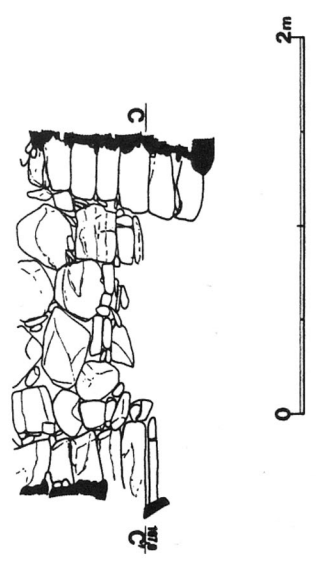
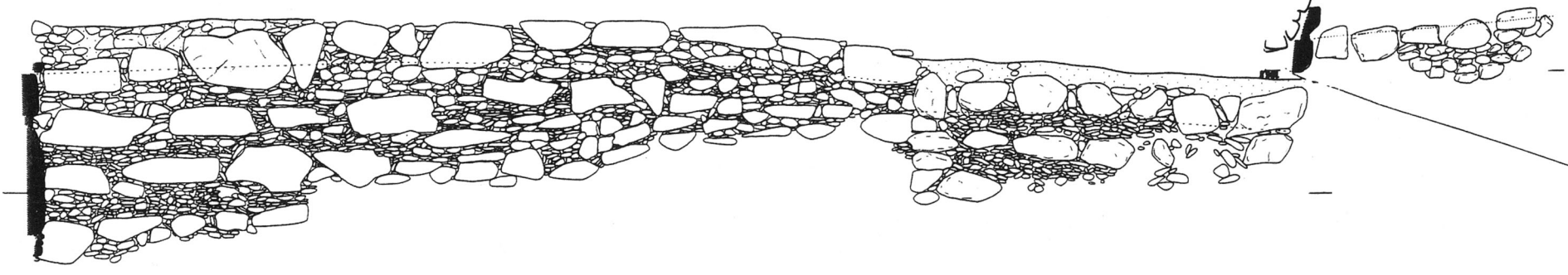
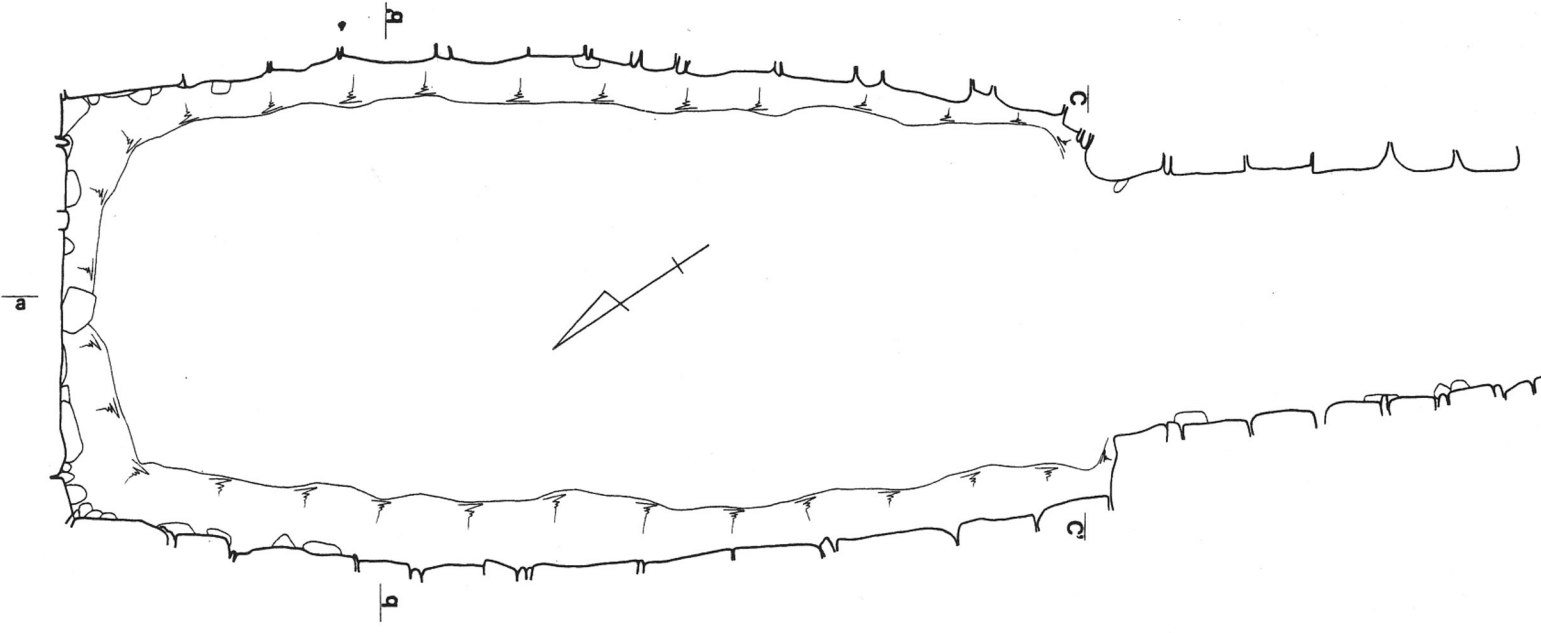
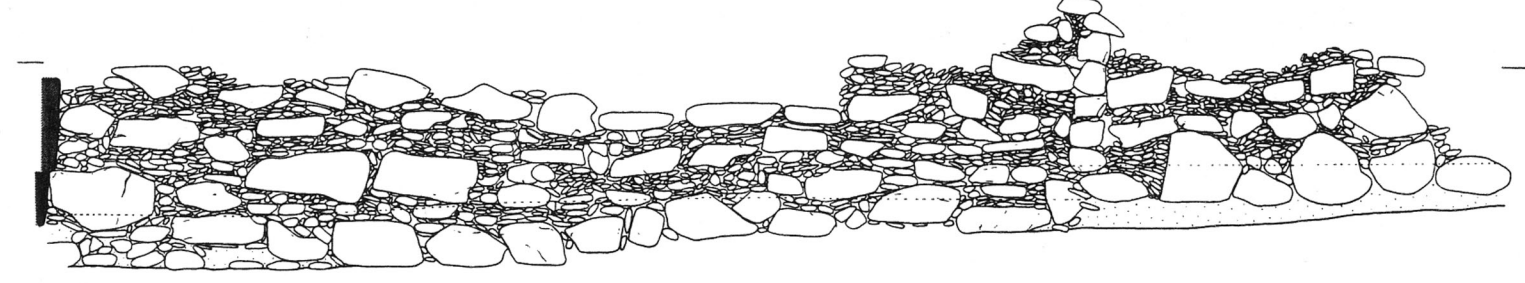
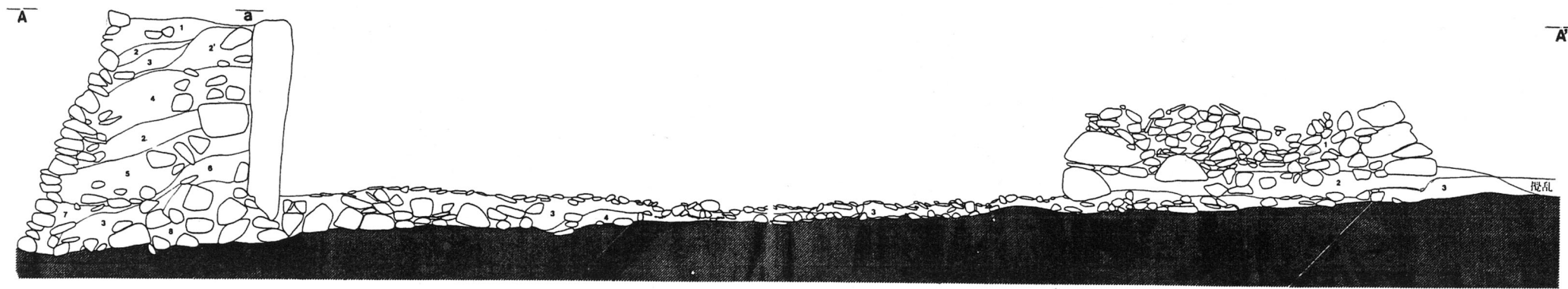
玄室部の棺床面は攪乱により良好な状態ではなかったが、旧表土上に敷かれたバラスの上に5～20cmの扁平な河原石が部分的に敷かれている。これに対して羨道部では、玄室部で見られるような棺床面ではなく、バラスの上に30cm前後の河原石が雑に置かれていた。玄室部より羨道部の棺床面のほうが30cm程高くなっている。

羨道部の閉塞施設は、玄門部と羨門部に30～40cm程の河原石を用いて面をそろえて積み、その間に10～30cmの河原石及び小砂利が充積されている。

天井石は、全部で8枚発見され、そのうちの2枚は1枚の石が割れた物であったため、7枚の天井石が残っていたことになる。石材はすべて緑泥片岩である。天井石はいずれも石室内に



- 縱断面 (A-A')
- 1. 褐色砂利層
 - 2. 黑褐色砂利層
 - 3. 黑褐色砂利層
 - 4. 黑褐色砂利層
 - 5. 暗黃褐色砂利層
 - 6. 暗褐色砂利層
 - 7. 暗褐色砂利層
 - 8. 暗褐色砂利層
- 横断面 (B-B')
- 1. 褐色砂利層
 - 2. 黑色土
 - 3. 暗褐色砂利層
 - 4. 暗褐色砂利層
 - 5. 暗褐色砂利層
 - 6. 暗褐色砂利層
 - 7. 暗褐色砂利層
 - 8. 褐色砂利層



2m
0

第67图 長沖21号墳石室実測图 (1:40)

落ち込んだ状態であって、壁に完全に架設されていたものは無かった。天井石の大きさは、最大のもので1.95m×0.77m×0.23m、最小は1.45m×0.65m×0.20mを測る。

石室前面には、羨門部より台形状に開く前庭施設の石積みが、西側の一部ではあるが確認された。石材は河原石であるが、石室に用いられている直方体状あるいは棒状の石とは異なり、断面が半円や正方形に近いものである。根石には20cm×25cm前後の自然平坦面を持った石を並べている。根石のレベルは羨門に接する部分で、羨門の根石より10cm程高く、羨門から外に向かうに従って低くなっている。石の積み方はかなり雑で、積んだというよりは貼りつけた状態であった。壁の上部は削られており、残存している高さは30cm程で、約30度前後の角度で上方に開くが、整ったものではない。全体の長さは1.5m程であるが、その開きは当時の様相をほぼ保ち、東側も遺存していれば平面プランは台形を呈すと考えられる。

石室正面は前庭部とは異なり、かなり垂直な面を河原石を用いて積み上げている。残っていたのは西側だけであるが、扁平で棒状の河原石を石室の側壁と同様な方法で積んでいる。羨門から直線的に延び、2m程でコーナーを成し左右の控え積みに続く。正面と前庭部の積石の工程は、正面が構築された後に前庭施設が構築されたことが知られる。

石室築造における旧表土の整形については、古墳が斜面に占地しているが盛土などは行なわれず、控え積み最下段の石の部分と玄室の根石部分を僅かに掘り込んでいた。

出土遺物

埴輪

調査の結果、墳丘表土中及び周辺部から比較的多くの埴輪が破片で確認された。樹立された状態で原位置を留めていたものはなかったが、破片の分布は墳丘南側から東側にかけて密であった。

装身具（第69図・図版68-1）

ガラス小玉39個が、玄室内奥壁に近い箇所からかたまって検出された。一部のものは、棺床面下に落ち込んでいた。

ガラス小玉 総数39個で、直径4～7mm、厚さ2～5mmを測る。色調は濃紺色がほとんどであるが、僅かに青色のものも見受けられる。

鉄製品（第70図・図版68-2）

17の刀子を除きすべて玄室内からの出土である。玄室内ほぼ中央の両側壁際、奥壁から1～1.5mの西壁際、同1mの東壁際から遺物はそれぞれ出土した。遺物がいずれも壁際からの出土に対し、人骨は玄室ほぼ中央にまとまって見られた。17の刀子は羨道部閉塞施設の石積みの中から出土した。

鉄鏃（1～16）1は、基部を若干欠くが完形に近く、有茎平根三角形狭鋒腹袂篋被式である。同一型式に15がある。2は、基部の断面が円形であり、有茎尖根端丸鑿箭式である。同一型式のものに3・5・6・8がある。4は、篋被と茎の境に棘が無く、基部の断面は円形を呈し完形であり、有茎尖根両丸長三角形式である。7は、基部を若干欠き、有茎尖根片闊片丸箭式である。9は、基部に木質が付着しており、有茎尖根片刃片丸箭式である。11は基部を欠くが7と同一型式である。10・12・13は同一型式であり、いずれも基部を欠き、有茎平根三角形狭鋒長茎篋被式である。16は、有茎平根両丸造柳葉

腹袂式である。14は、型式不明である。以上鉄鏃は、7型式に分類できる。

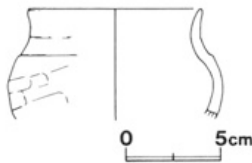
刀子（17～19）17は、刃部の一部を若干欠くが完形品に近い。全長6.7cm、刀身長4.1cmを測る小型の部類に入るものである。平造平棟で、関は両関である。基部には木質部が残っている。18は、完形品であり、全長10.4cm、刀身部長6.2cmを測る。やはり平造平棟で関は両関である。刃幅は関部で1.4cmを測り、先にむかうにしたがって漸次細くなる。切先には膨らみがある。基部には僅かながら木質が残存している。19は、刃先と基部を欠くが、現存長12.1cmを測るやや大型の刀子である。両関造りであり、刃幅は関部で2.0cmを測る。基部には直径0.15cmの目釘穴が一孔穿たれている。又基部には木質が残っている。18・19は銹化が進んでいる。

両頭座金付留金具（20～27）全部で8本検出され、いずれの形状もほぼ同様である。両端部を球状に丸めた鉄製の芯に、両端を花卉状に開かせた鉄製の筒を巻いている。24・25ではその花卉の形状が、比較的明らかである。筒の直径は0.5～0.6cmと、比較的一定している。いずれも銹化が進んでおり、24を除き木質が銹着している。

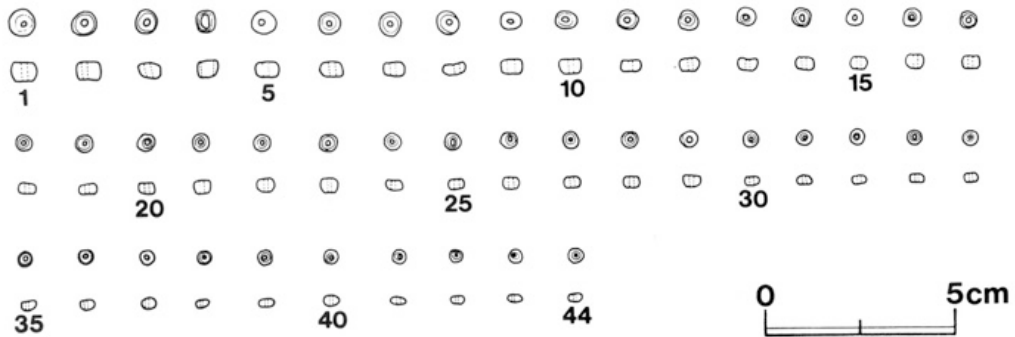
土器（第68図）

前庭部より、土師器小型壺の破片が出土した。

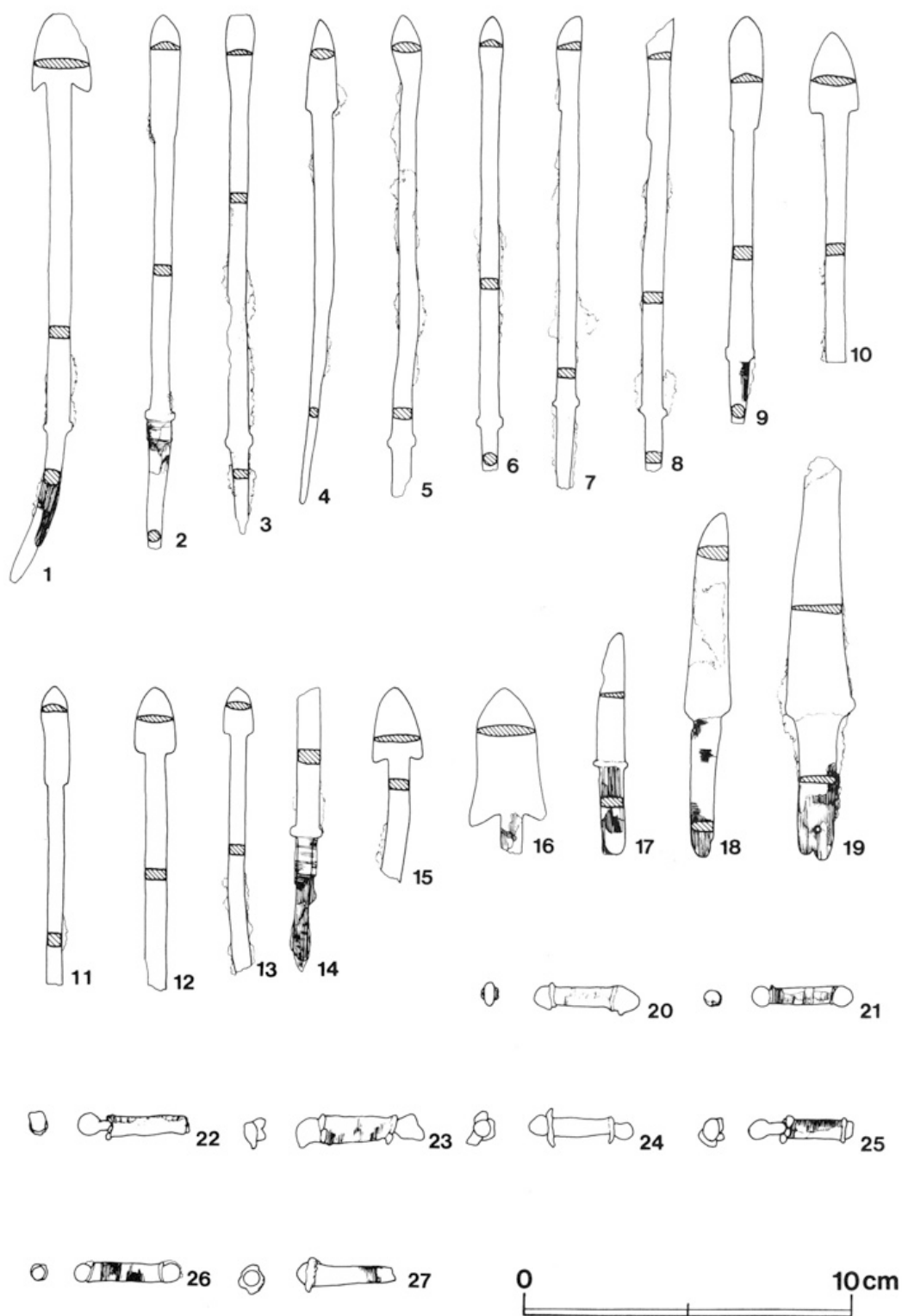
土師器小型壺 口縁部から胴部上半にかけての $\frac{1}{4}$ 程の破片である。推定口径9.0cmを測る。口縁部と胴部とは段を成し、明瞭に区別されている。口縁部は内傾して立ち上がり、上半部に至って直立ぎみに外反する。口縁部内外面及び胴部内面は、横撫で調整により成され、胴部外面は、篋削り調整されている。胎土、焼成とも良好であり、色調は淡橙褐色を呈する。 （鈴木 純）



第68図 長沖21号墳出土土器（1：4）



第69図 長沖21号墳石室出土遺物実測図（1：2）



第70図 長沖21号墳石室出土遺物実測図 (1:2)

13. 長沖22・26号墳

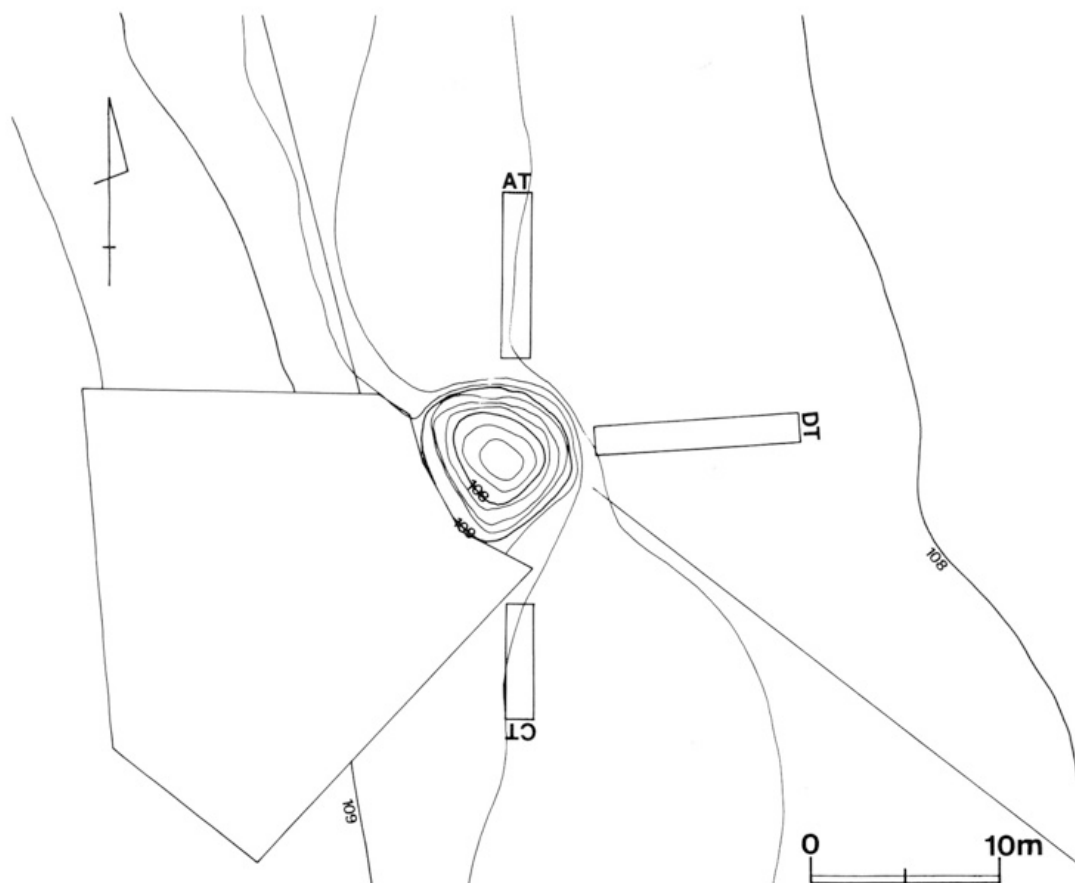
古墳の立地と現状

今回の調査古墳は、身馴川の扇状地にあたる場所に築かれた古墳が多かったなかで、22号墳はローム台地上に築かれた古墳である。墳丘の西裾は宅地になり、三方は畑にかこまれていた。そのため、宅地にするために削られたり盗掘等によって破壊を受け、その時に投げだされた石が墳丘に集められ、石置場のような状態であった。

調査時の墳丘の規模は東西7.8m、南北8.2m、高さ2.1mで、小さな墳丘のわりには高さのある古墳であった。

26号墳は、22号墳に設定したトレンチによって発見されたもので、桑畑になっていた。1950年作成の地籍図では、この付近に14基の古墳が確認できるが、現状では墳丘が残っていたのは22号墳のみであった。

調査は、西側の宅地にあっていた箇所以外について、墳丘を中心に放射状にトレンチを設定し、その間を拡張して行った。



第71図 長沖22号墳墳丘測量図（1：400）

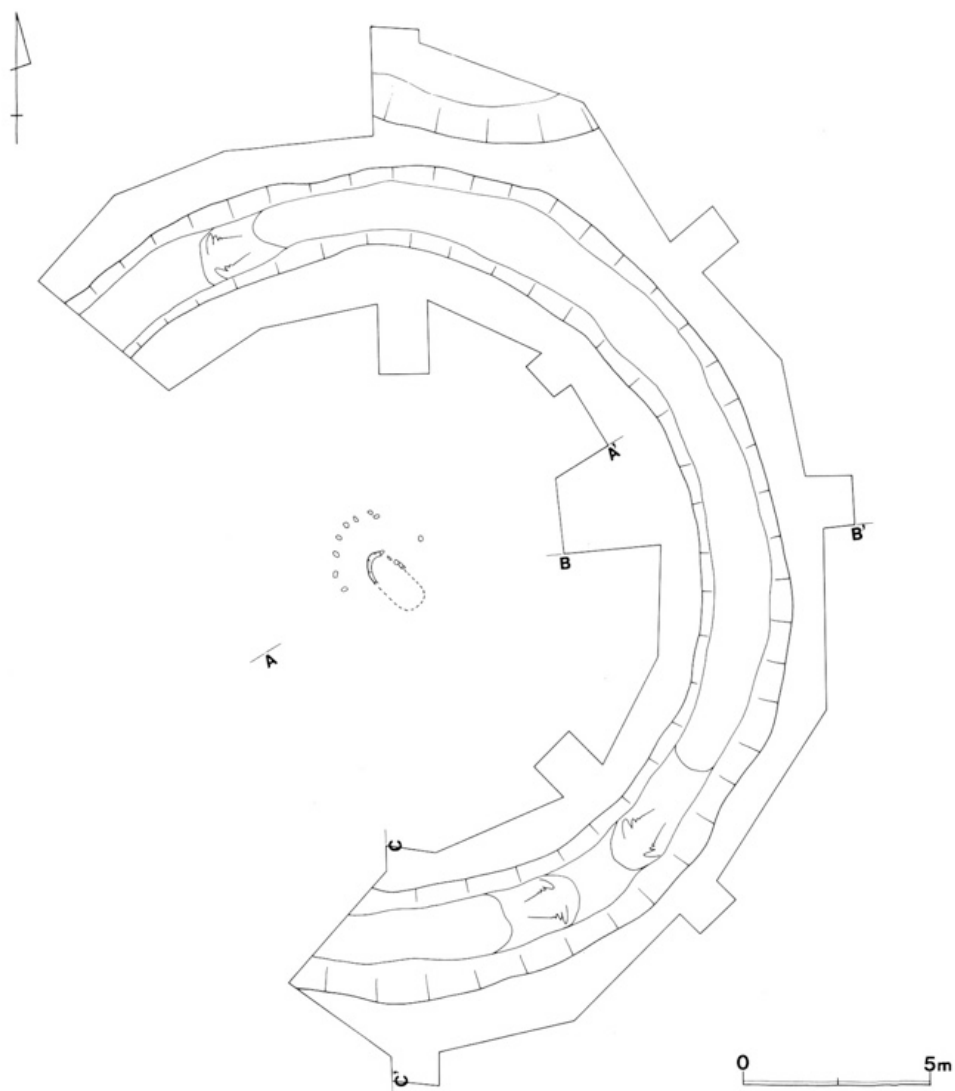
形態

墳丘の西側が宅地であったため、周溝を全掘することはできず $\frac{2}{3}$ ほど掘ることができた。周溝は外径で21.7mほどであり、周溝の上幅は2m、底幅は1.2mほどで比較的丁寧な掘り方をしている。深さは浅い部分で45cm、深い部分で80cmほどロームを掘り込んでいる。墳丘や周溝から、本古墳は径21.7mの円墳であると判明した。

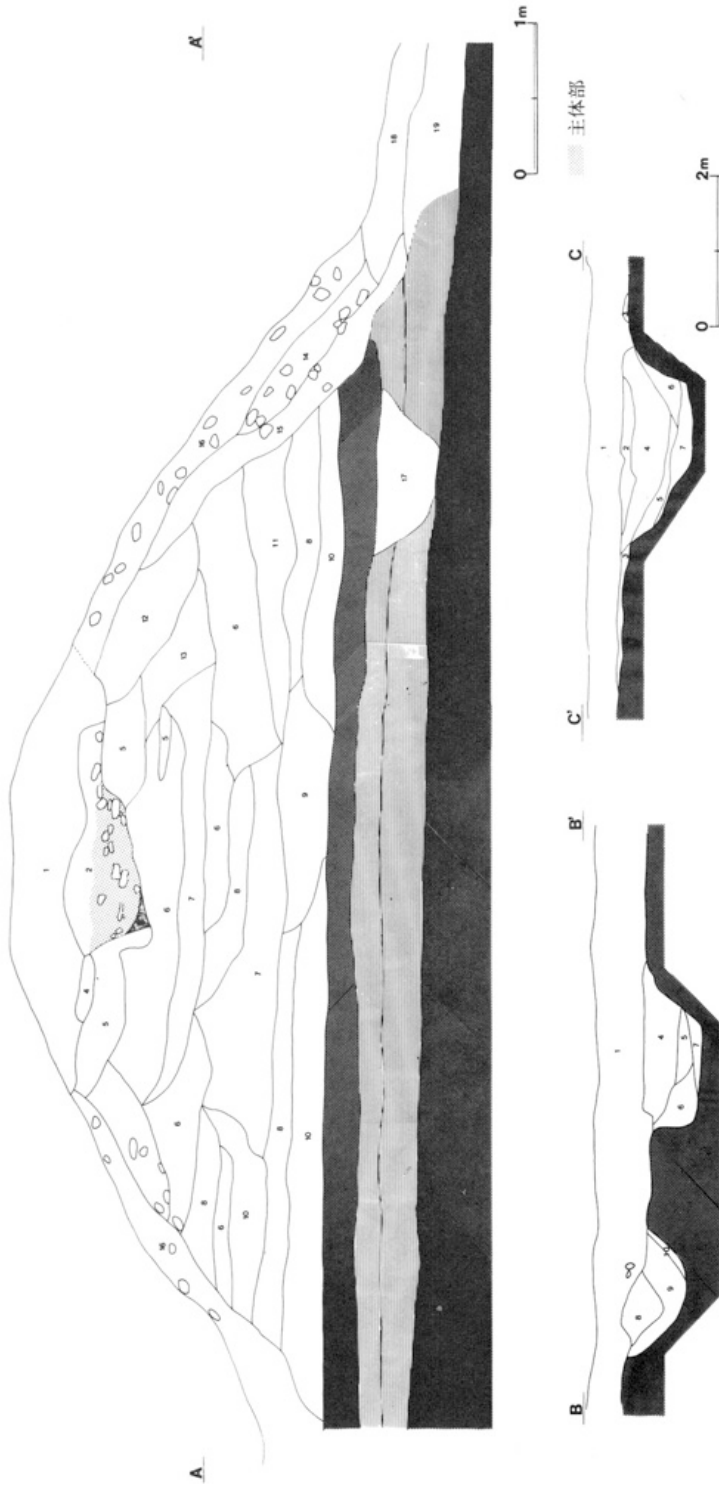
墳丘については、調査古墳のうちでは比較的残っていたものの、築造時からはだいぶ変わっているとみられるが、墳丘の高さについては主体部の位置からみて、現状とあまり大差ないと考えられる。

墳丘に散乱していた多量の河原石は、主体部のもののみでは多すぎるため、外部施設として葺石があった可能性が考えられる。

26号墳は、22号墳から90cmほど北側で発見された古墳で、周溝の一部を確認したまでであった



第72図 長沖22号墳全測図 (1:200)



- A-A'
1. 礫 (玉石を中心)
 2. 暗褐色土 (玉石・小砂利を含む)
 3. 白色粘土
 4. 暗褐色土 (砂利を含む)
 5. ロームブロック
 6. 黒褐色土 (ロームブロックを含む)
 7. 黒褐色土 (小ロームブロックを含む)
 8. 黒褐色土 (わずかにロームブロックを含む)
 9. 黒褐色土
 10. 黒褐色土 (ローム混入)

- B-B', C-C'
11. 黒褐色土 (9より褐色がかる)
 12. 黄褐色土
 13. 黄褐色土 (ロームブロックを含む)
 14. 暗褐色土 (玉石を含む)
 15. 黄褐色土 (礫を含む)
 16. 表土
 17. 黒色土 (縄文土壇)
 18. 暗褐色土
 19. 黒褐色土

- B-B', C-C'
1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土 (ロームブロックを含む)
 3. 黒色土
 4. 暗黒褐色
 5. 暗褐色土 (ローム粒子を含む)
 6. 暗褐色土 (5よりロームを多量に含む)
 7. 暗褐色土 (ロームブロック主体)
 8. 暗褐色土 (わずかにロームを含む)
 9. 暗褐色土
 10. 暗黒褐色土

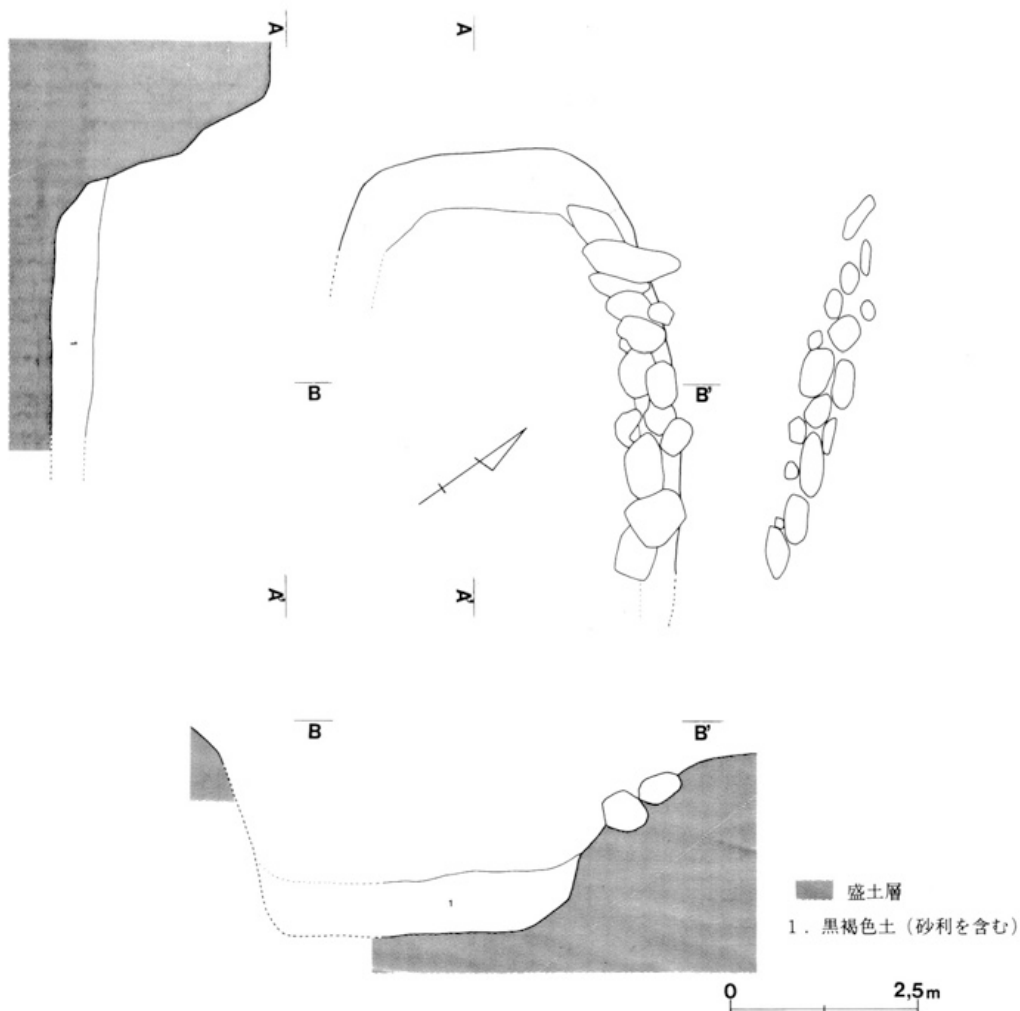
第73図 長沖22号墳丘・周溝土層断面図 (1:50・1:100)

ため古墳の規模や、周溝の幅などは不明であり、周溝の状態からみると円墳であったと思われる程度である。周溝はロームを50cm掘り込んでいる。

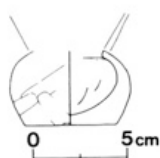
主体部

主体部は攪乱をそうとう受けていて、東側はとくにひどく西側に残っていた一部の遺構を確認したのみで、墳丘の中央部のすぐ下に築かれた主体部は、竖穴系とみられ、礫層であったろう。残存していたのは、ロームの盛土を40cm掘り下げた隅丸の長方形をした土壇の一部と、東壁にわずかに残っていた河原石の石積みだけで、東側は攪乱で不明であったが、主軸はN-12°-Eであった。

残っていた範囲は、長さ110cm、幅85cmで、攪乱を受ける前には長さが2m程度はあったであろう。深さはロームの盛土を40cmほど掘っているが、ロームの上に礫が15cmほどあり、墳頂部から55



第74図 長沖22号墳主体部実測図 (1:16)



cmほどあった。ただ掘り方の底部の上に5cmから10cmの小礫の入った黒褐色土があり、その上に礫を敷いて棺床面としている。主体部の周辺には、幅1m程度の範囲で主体部をとりまくように、河原石が小判状にみられた。

第75図 長沖22号墳出土土器（1：4）

出土遺物

埴輪

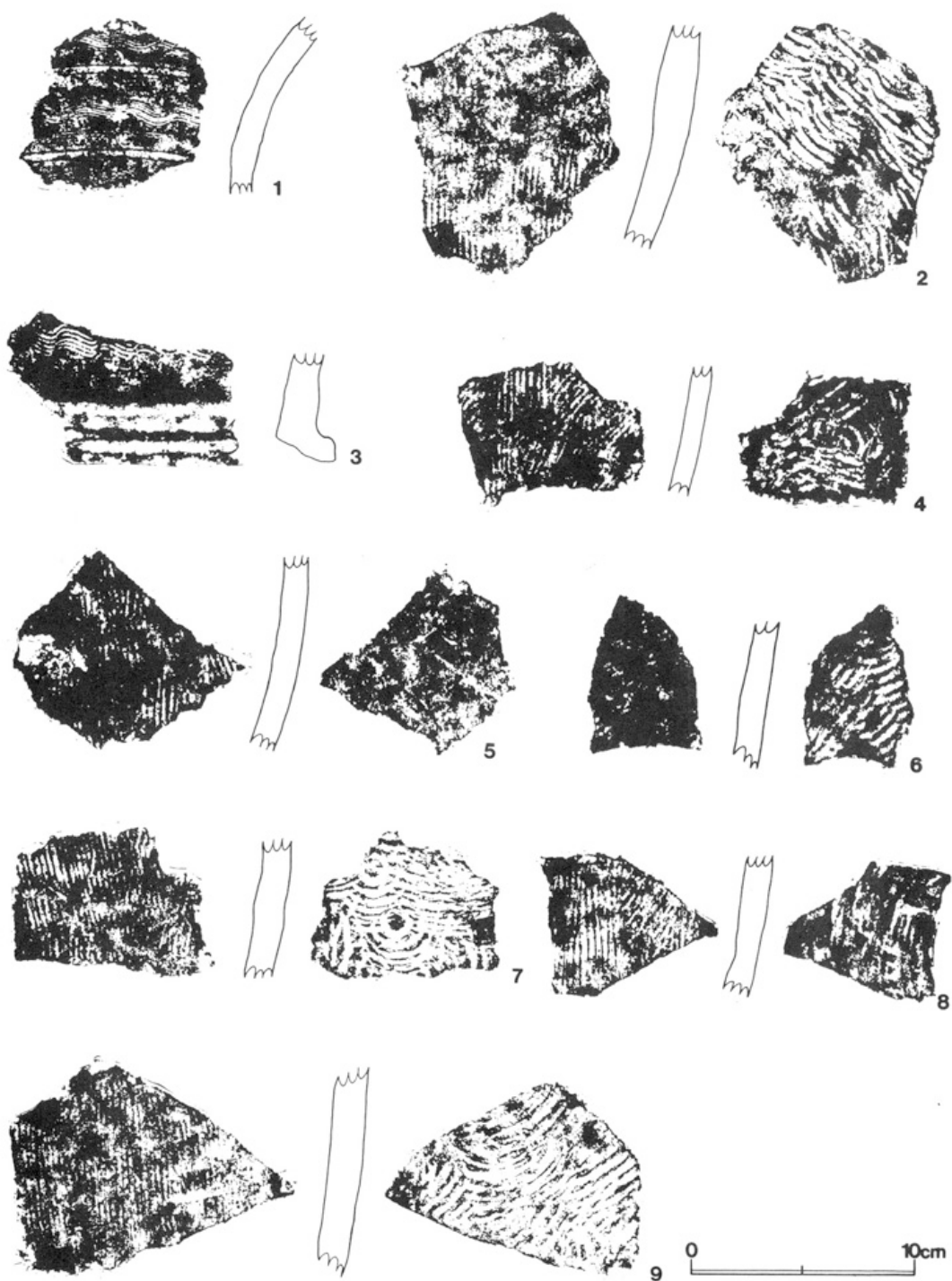
出土した破片は、非常に多く、完形に近く復原可能となったものもかなりの数を数えたが、墳丘に設置された状態で発見されたものはなく、いずれも墳丘裾部と周溝内よりの出土であった。

土器（第75、76図）

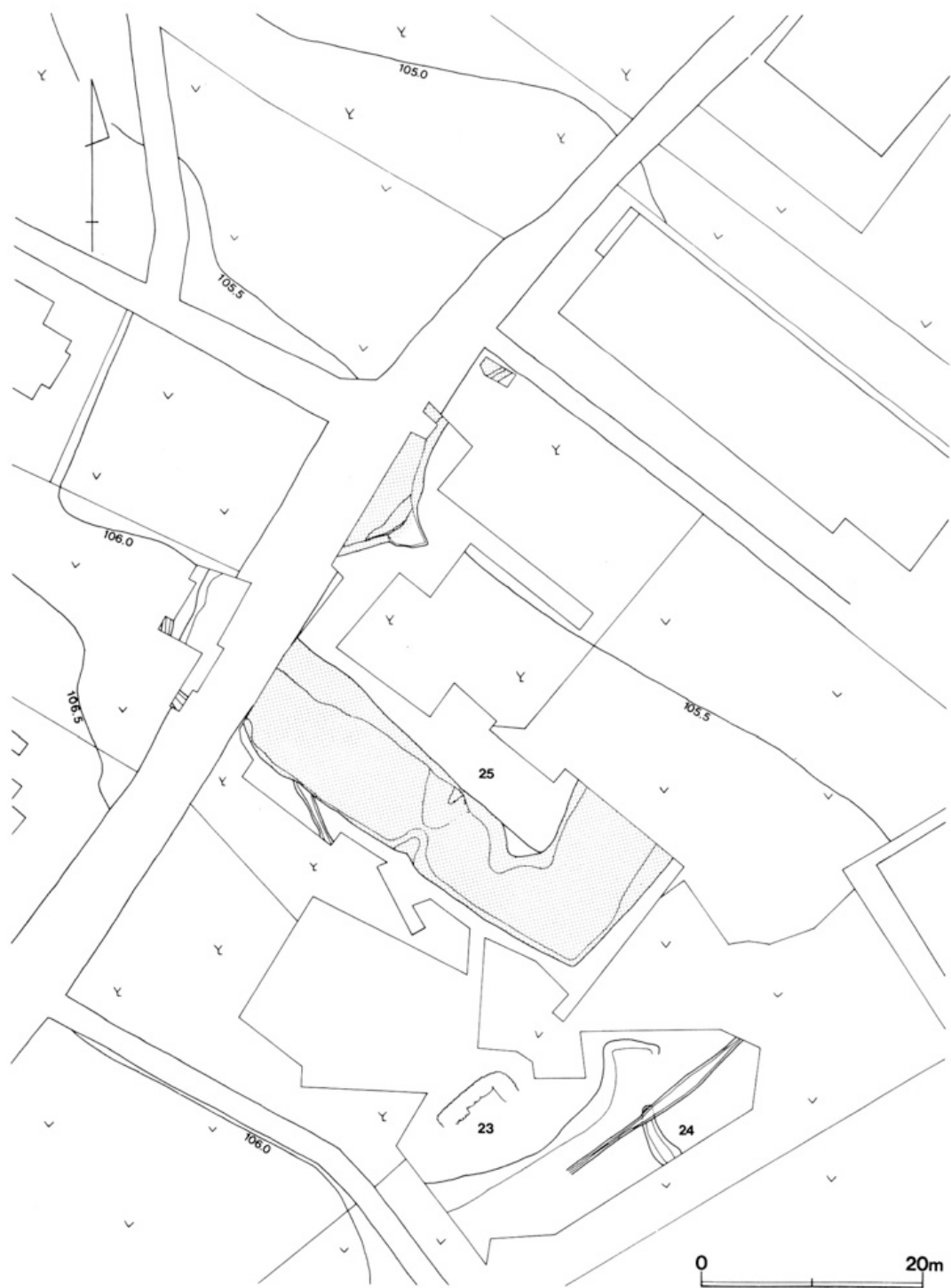
土師器埴、須恵器大形の甕とも墳丘裾部より埴輪片とともに破片で出土したものである。

土師器埴（第75図）胴部の破片で底は径4.5cmの平底、胴部径は6.3cm、現存高は4.5cmを測る。厚さは胴部中央で1.0cm程である。頸部の状態から見ると胴部に対して口縁の大きな小形埴である。胴部外面はやや荒い筥削り、内面は指撫でが施されており、つくりはやや荒い、色調は赤褐色を呈し、胎土は微砂を含む、焼成は良好である。

須恵器大甕（第76図）1は口縁部の破片で、2条の浅い沈線が巡り、沈線を挟み6本から成る櫛描波状文が2.3cmの間隔で3箇所に見られる。いずれの波状文も緩やかで、施文も浅くあまり丁寧な作りではない。内面は横撫で調整による。厚さは1.1cm程である。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、固く焼き締まっている。色調は暗灰色を呈する。3も口縁部の破片であるが、口縁部下半部から頸部にかけてのものである。外面には6本から成る櫛描波状文がみられ、頸部には補強帯ともいえる太い凸帯がある。内面は横撫で調整である。胎土、焼成とも1と同様である。外面には黒灰色の釉が全面にかかる。2・4～9はいずれも胴部の破片である。4のみが外面一部で格子状の叩きである以外、他はすべて平行叩き目文である。内面調整は5が指撫でで無文となっている他は、いずれも同心円状の叩き目が施こされている。胎土はすべて同じで砂粒を多く含んでいる。焼成は2・5がややあまく、断面中程で灰赤褐色を帯る。他は比較的良好である。内、外面の色調は、ほとんど同様に暗灰色を呈する。ただ、2については黒灰色の自然釉が外面にかかっている。（菅谷浩之）



第76图 長沖22号墳須惠器拓影图 (1 : 3)



第77図 長沖23・24・25号墳全体図（1：600）

14. 長沖23・24号墳

古墳の立地と現状

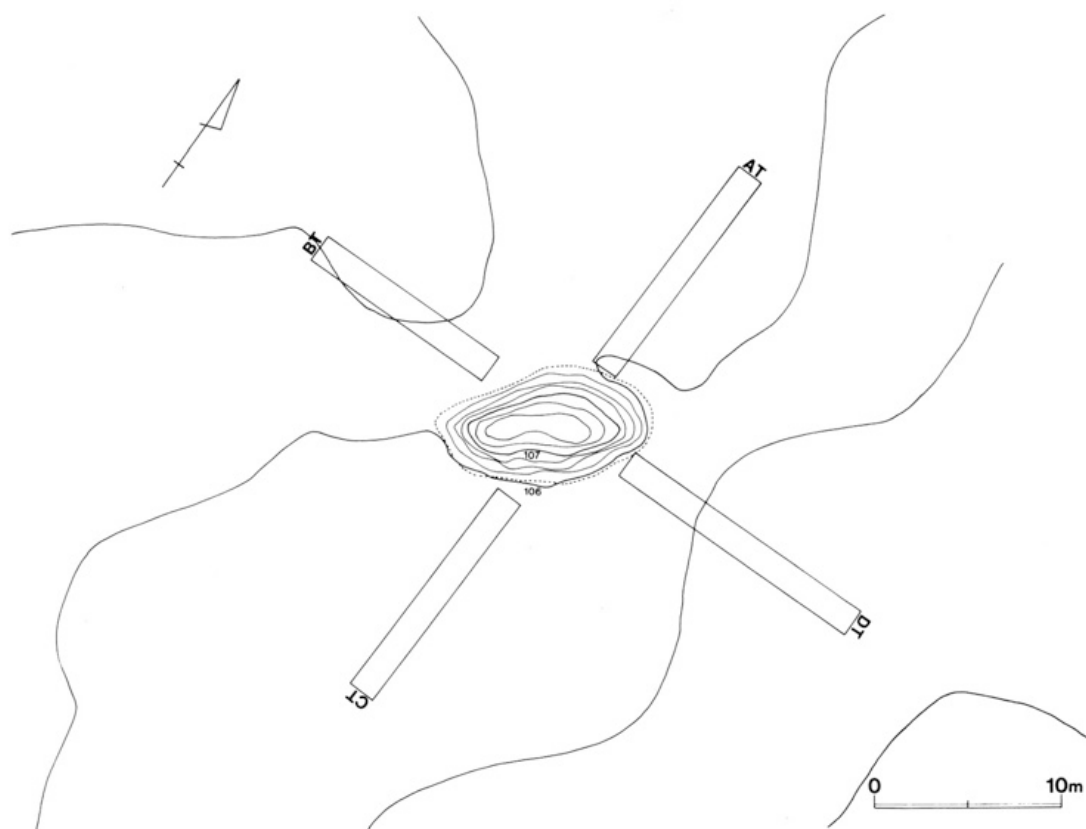
23号墳は周囲の畑地の耕作のため、外観は旧来の姿をほとんど留めることなく、高さ1.76m、長軸NE～SW方向に11.5m、短軸NW～SE方向に6.3mの、長楕円形の小山を墳丘として地表に残すのみであった。墳丘上には、石室等に使用されたとと思われる河原石が乱雑に投げられており、その中から景長通宝が一枚採集された。

立地的に見ると、全体に南東に向かって緩やかに傾斜しており、墳丘の北西数メートルの所で北から延びるローム台地は途切れており、当古墳は、南を流れる身馴川の氾濫原上に構築されている。

墳丘に向かい東西南北にトレンチを入れ、その間を拡張していき、最終的には全掘に近い発掘形態をとった。しかし南西部は墳丘から5m程で農道に接してしまうため、その先の部分は調査できなかった。

形態

調査の結果、墳丘南東側に近接して、長さ24m、深さ0.5m、幅5mを測る周溝が一本確認された。この周溝は北側で立ち上っており、その先に連続する部分は確認されなかった。全体に、内側の立ち上りは明瞭であるが、外側はなだらかに傾斜してしまい、立ち上りは不明確であった。従って、周溝の幅



第78図 長沖23号墳墳丘測量図(1:400)



が確認できたのは、その北端においてのみである。この周溝は、砂利を多少含む黒褐色の旧表土、さらには、身馴川の氾濫によってできたと思われる黄褐色の砂利層を切り込んで造られている。

この周溝に対して、北東の方向から直線的にはしる幅1.8m、深さ0.6m、長さは確認した限りで20m程の、新しい時代の溝状遺構が鋭角的に切り込んでおり、これはさらに24号墳の周溝(幅2~2.5m、長さ6m)をも切っている。

以上のように確認されたところの23号墳の周溝は、著しく主体部に近接している上に、正円にはほど遠い弧を描いているが、これは23号墳以前に構築された25号墳の存在(周溝北端の立ち上りから1.6mほどで25号墳の周溝にぶつかる)や、自然地形等により制約を受けたためと考えられ、本来円墳であると想定して良からうと思う。

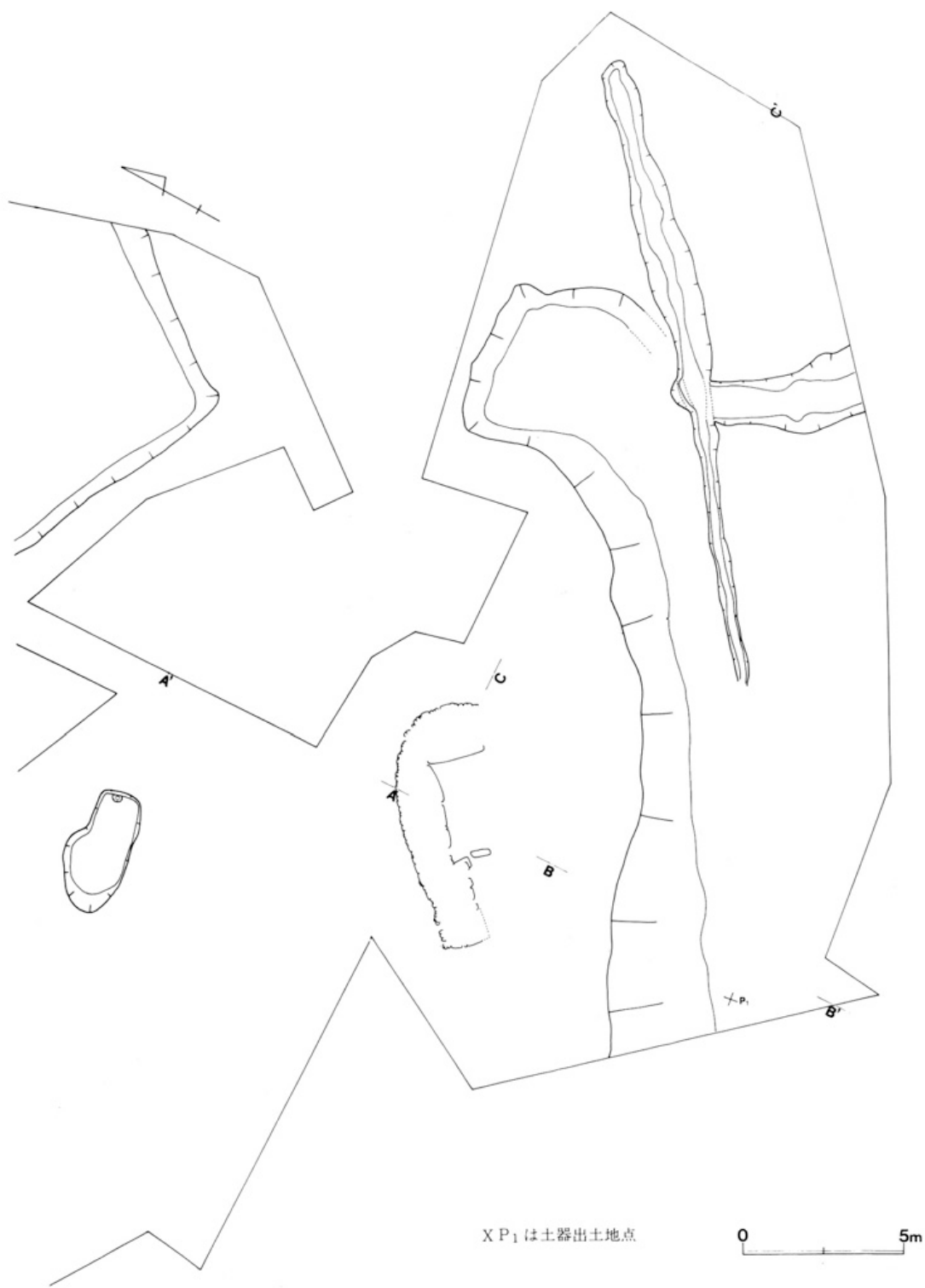
主体部

主体部は、主軸をN-48°-Wに置く横穴式石室である。石室は耕作による破壊のため南側の側壁は全く残っておらず、明確な形態は不明であるが、玄室壁と羨道部壁の積み方や框石の関係から、両袖型を呈するものと考えられる。

石室の規模は、全長5.7m、玄室長3.1m、同幅1.6m(推定)、羨道部長2.6m、同幅0.95mを測る。玄室幅と玄室長との比は1:2である。

奥壁は緑泥片岩が一枚残存しており、その高さは最高部で70cm程であるが、本来はこの上に、もう一枚乗っていたものであろう。

側壁は玄室内と羨道部において用石が異なり、その積み方も違っている。玄室の側壁は最も奥の所に緑泥片岩を使用し、その手前は方形の自然石を面を揃えて整然と積んでいる。玄室の側壁を積むにあたっては用石を慎重に選んでいると思われるが、それに対し羨道部の側壁はかなり乱雑に積まれており、用石も角のとれた河原石を用いている。羨道部側壁の根石は玄室袖の根石の上に積



第80図 長沖23・24号墳全測図（1：200）

んで構築されていることから、先に玄室側壁を積みその後羨道部側壁を引き続いて構築したものと考えられる。

棺床面は破壊を受けていて殆ど残っていないが、羨道部側壁根石と玄室側壁根石とのレベル差から見て羨道部の方が一段高かったと思われる。

出土遺物

埴輪 埴輪列は確認されなかったが、墳丘から流れ込んだ状態で、多くの円筒埴輪が検出された。しかし、復原可能なものは殆ど無かった。

鉄製品 (第82図-1~5・図版69-2) 玄室内西壁寄りから鉄鍔などが出土した。

鉄鍔 (1~4) 1は有茎平根両丸造広鋒長三角形腹袈裟被式で、2~4は有茎平根三角形狭鋒腹袈裟被式である。1・2の茎部には僅かながら木質が銹着して残っている。

両頭座金付留金具 (5) 銹化が著しく、形態は明らかでないが、大きさは3.2cmを測る。

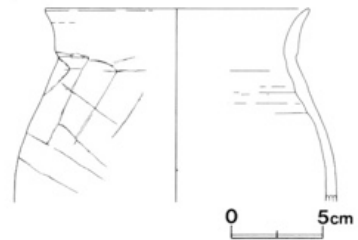
装身具 (第82図-6~9・図版69-2) 玄室内西壁寄りから耳環及びガラス玉が出土した。

耳環 (6) 銅芯製で金箔はすでに剥落していた。断面は楕円形を呈する。

ガラス小玉 (7~9) いずれも濃紺色を呈するガラス製で、気泡もなく良好な作りである。

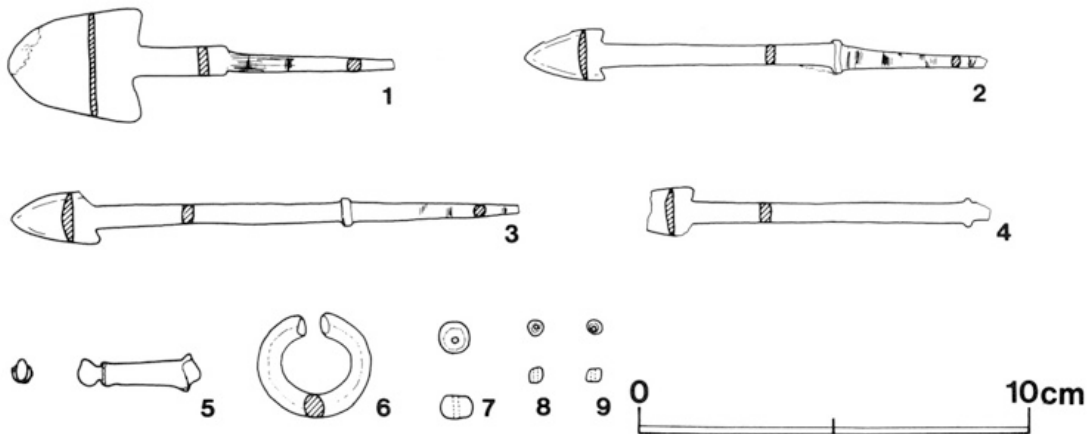
土器 (第81図) 墳丘南側の周溝内底部から土師器甕が出土した。

土師器甕 推定口径14.2cmを測る体部上半部 $\frac{1}{3}$ 程の破片である。口縁部内、外面及び体部内面は横撫で調整による。体部外面は篋削り調整されている。外面口縁部と体部との境には、篋削りにより段がなされている。胎土は非常に細かく良好である。焼成は良好であるが、仕上がりは軟質である。色調は橙褐色を呈する。体部下半は欠損しているが胴部最大径は中程にあり、器形としてはあまり長胴化しないものようである。

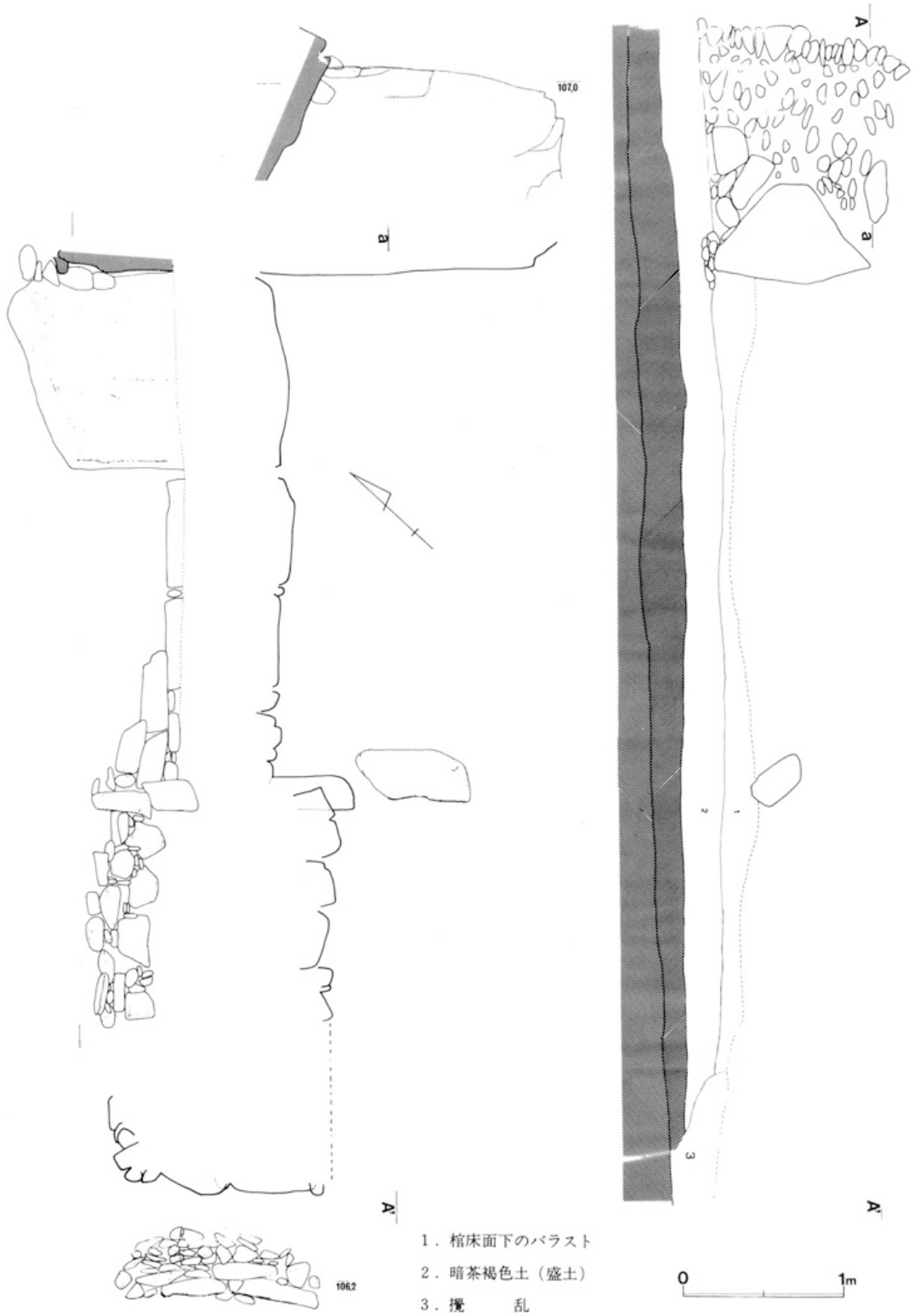


(萩原恭一)

第81図 長沖23号墳出土土器(1:4)



第82図 長沖23号墳石室出土遺物実測図(1:2)



第83図 長沖23号墳石室実測図 (1 : 40)

15. 長 沖 25 号墳

古墳の立地と現状

25号墳は当初の調査計画には、はいつていなかった古墳である。第3次調査の際に、墳丘を残していた23号墳の調査を開始した。23号墳の周溝を確認するためのトレンチを設定したが、古墳の北側の周溝が不明確であったために、さらに北側にトレンチを延長し周溝を確認しようとした。トレンチ内に黒褐色土を含む土があらわれたが、23号墳の周溝としては確認された場所が23号墳からは離れすぎ、他の古墳の周溝ではないかと調査を進めた。

たしかに23号墳の北側に埴輪片が多数落ちていた場所もあり、古墳が存在していたことを窺がわせ、付近の人の話しでもここに大きな古墳が存在していたという事であった。地主の了解の得られた畑のみ、23号墳と併行して調査を進めていったが、周溝の幅は広く、古墳の規模は大きそうで、東側で東西に延びる溝が急に北側に曲がり、北にのびてしまう周溝の状態からして、前方後円墳の前方部の周溝の可能性が強くなった。

第3次調査で、前方部南側の周溝の半分と前方部東側のコーナー部と、東側の周溝の一部を調査したため、第5次調査では前方部の西側とコーナー部、それに西側のくびれ部を調査する必要がある。後円部と東側のくびれ部の位置は、工場敷地内に入ってしまったいて調査を実施することができず、また古墳の西側には道路が古墳に沿って延びていた。

古墳の存在していた場所は、洪積台地の先端部と沖積地の境に位置していて、基盤は古墳の西側がローム層、東側が砂礫を多く含んだ土層で、古墳の西側から徐々に高くなって台地を形成していつている。

形態

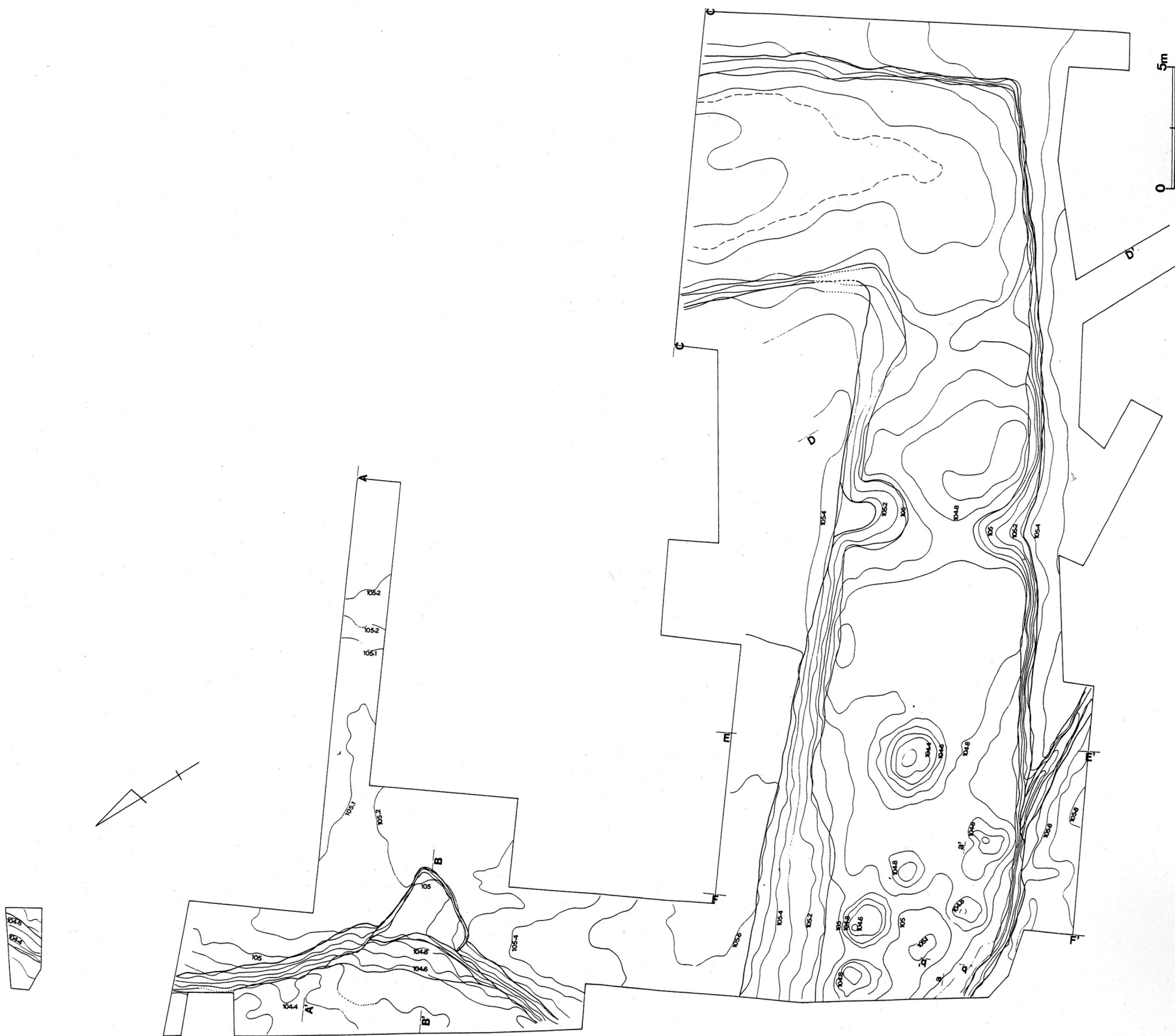
2回の調査で前方部を中心に調査したが、判明した周溝の状態は次のようである。なお、前方部の南西コーナー部は道路の下に入ってしまったいて調査できなかった。また道路を隔てて北西にトレンチを設け、周溝外側を確認すべく調査を進めたが、攪乱が著しく全く検出できなかった。

前方部前面の周溝は内側で約30m、外側で約37mの部分で調査したが、おおよそ内側で36m、外側で52mの長さである。前方部前面の幅は中央部で10.0mと最も広く、コーナー部では幅6.6mと狭くなっている。

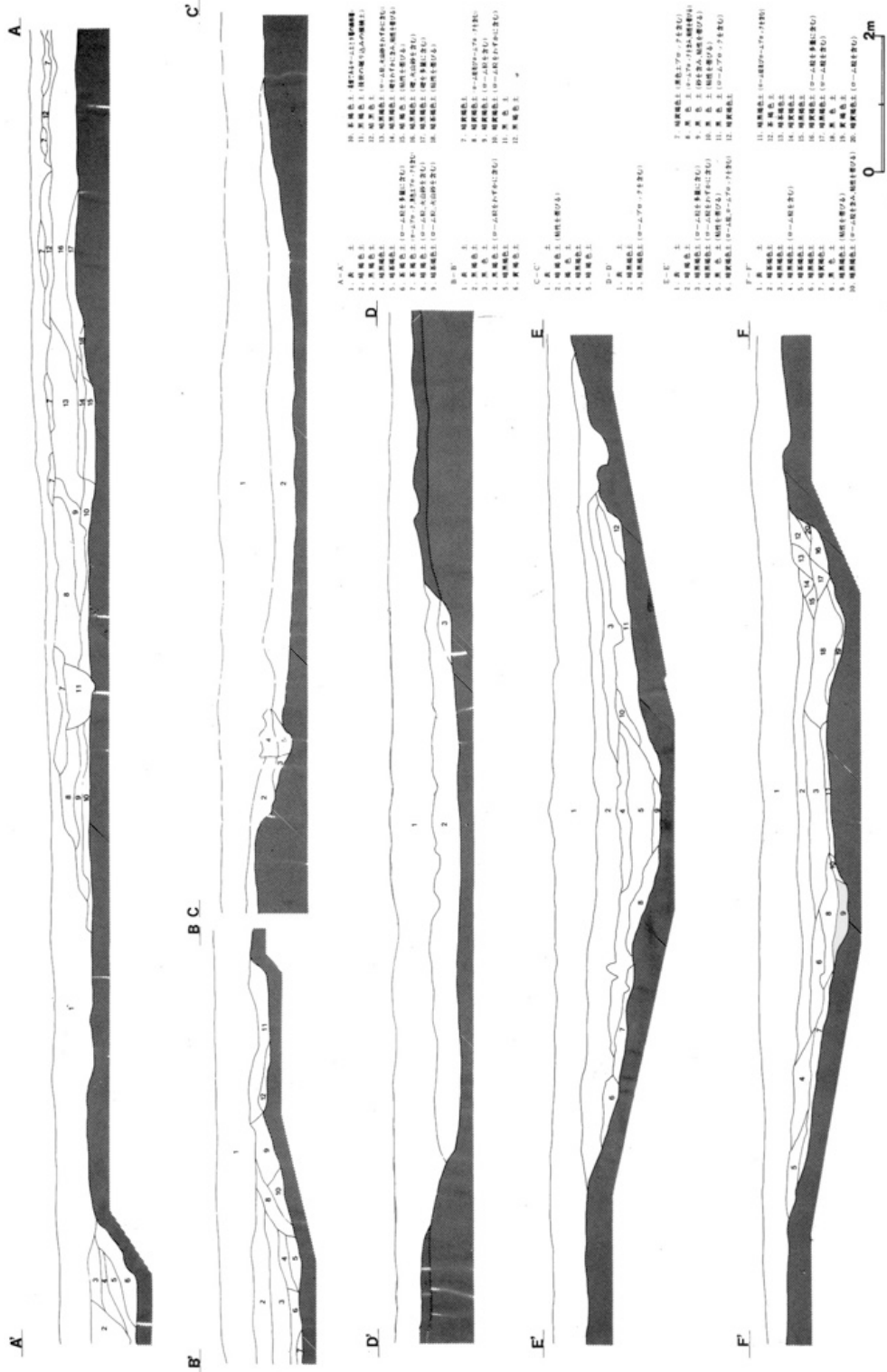
前方部南東の側面の周溝は内側で7.5m、外側で12.8mを確認したのみで、幅は調査区域北端で、10.2m程であった。北西側はくびれ部から南西にかけて、8.0m程確認したにとどまり、周溝の幅も道路によって確認することができなかった。また、くびれ部には後世の竪穴状遺構が位置し、一部切り込まれ不明瞭なものとなっていた。

周溝の立ち上りは、外側が垂直に近く掘り込んでいたが、内側はいずれも緩やかな傾斜を持っている。深さは一定でなく、東側は基盤より30cm程掘り込んで浅いが、周溝の西側は基盤から70cmとやや深くなり、底も部分的に深くなっているところもある。

前方部の南東コーナー部寄りには、ブリッチ状に掘り残っている部分がある。墳丘の内側と外側から突出して、墳丘側で幅1.4m、長さ1.5m、外側からは幅1.1m、長さ1.0mで、その間は1.3m



第84図 長沖25号墳全測図 (1:200)



第85图 长冲25号填周溝土層断面图 (1:100)

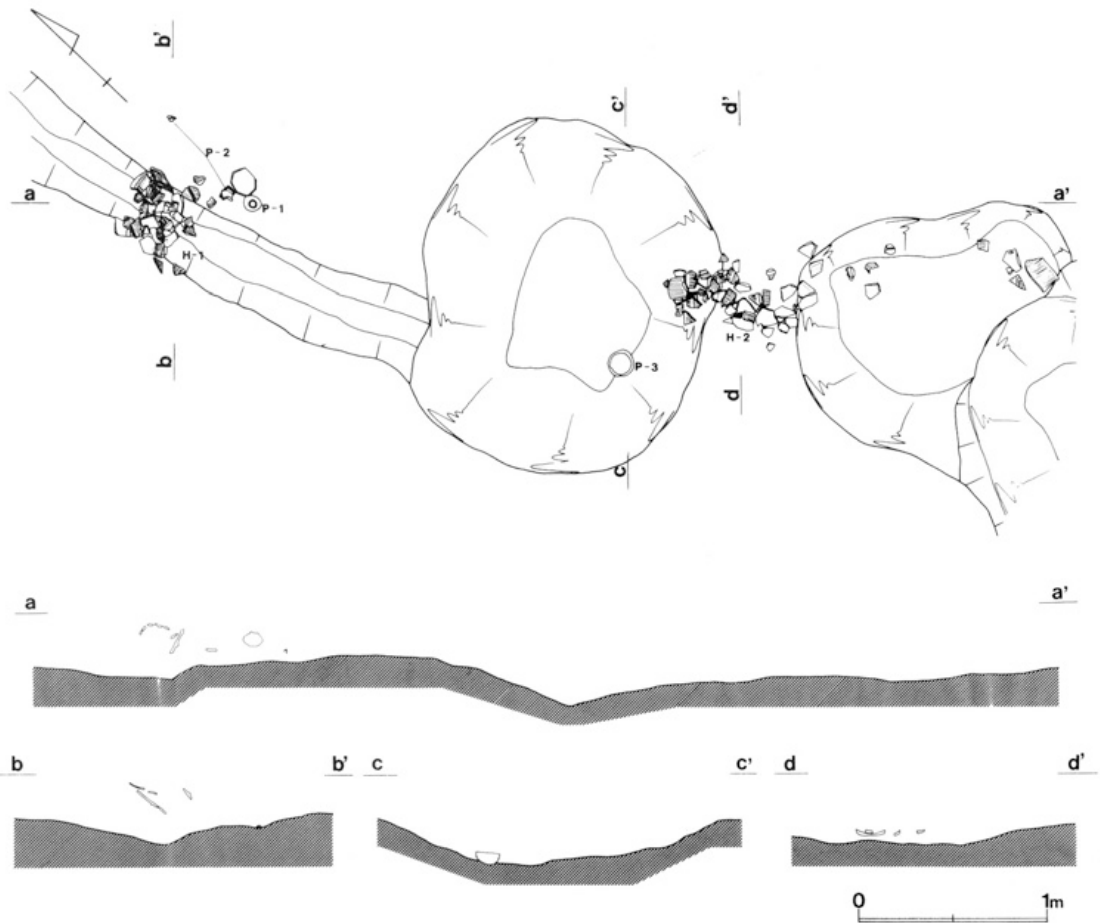
程空いている。

後円部は北西側のくびれ部から8.5mの周溝内側の確認と、そこから5.5m程離れた部分の周溝の確認をしたのみであるが、周溝の立ち上りは明瞭であり、後円部の丸味もよく整っていて、ほぼ正確に円弧を描くようであり、復元すると直径29m程となる。

以上調査結果から、25号墳は主軸をN-42°-Eに取り、主軸長約40m、後円部径約29m、前方部幅約36mを測る前方後円墳である事が判明した。周溝の形態は、南東の側面周溝の形状からして盾型を取るものと思われる。

主体部

墳丘はすでに全面にわたって削平され、墳丘の築かれていた場所にトレンチを設定したが、盛土が僅かに見られた程度で、主体部については一切不明である。ただ付近の人の話から察すると、横穴式石室であった可能性が強く、後円部のくびれ部近くに位置し、西側くびれ部方向に向いていたらしい。



第86図 長沖25号墳前方部周溝内土器・埴輪出土状態図(1:40)

出土遺物

埴輪

墳丘はすでに削平され残存していなかったため、埴輪はいずれも周溝内から出土した。埴輪の量は非常に多く、その中でもくびれ部及び前方部前面西寄りの周溝に特に集中していた。また、前方部前面周溝の外側立ち上がり部近くからも比較的多くの埴輪の出土が見られた。

土器（第87・88図・図版71-5～7）

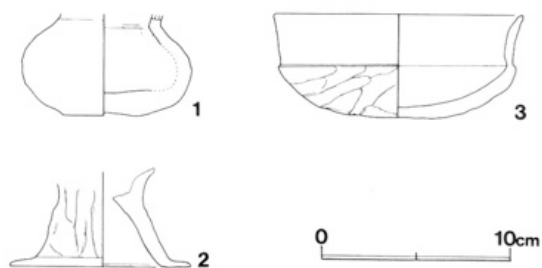
前方部前面周溝西寄りで、外側立ち上がり部から1m程離れた周溝底部が溝状あるいはピット状にくぼんだ所より土師器埴、高坏、坏が出土した。また、埴輪片とともに須恵器大甕の破片が出土した。

土師器埴（第87図-1）口縁部を欠くが、胴部は完存している。扁平球形の胴部で、最大径を中程に有し、8.8cmを測る。底部は上げ底であり、径3.8cmを測る。胴部外面の整形は磨滅しており明瞭でないが、一部上半で斜位、中程で横位の篋削りが認められる。内面は指撫でされている。胎土は微砂を多く含む。焼成は良好であり、胴外面中程に黒斑が見られる。色調は橙褐色を呈する。

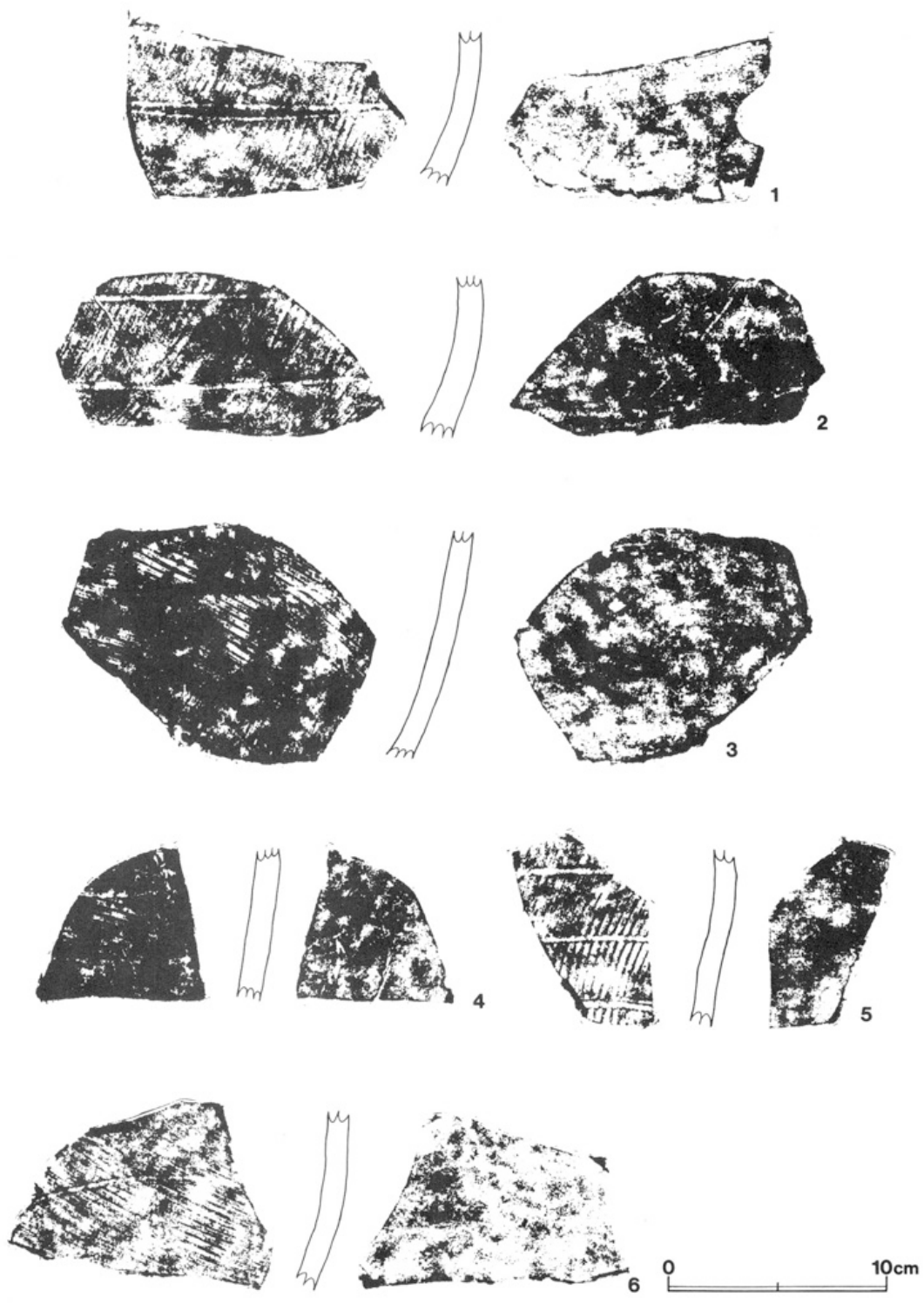
土師器高坏（第87図-2）坏部を欠く脚部の破片である。底径9.4cmを測る。脚部は『ハ』の字状に開き、水平に広がる裾部へと続く。脚柱部外面は篋撫で、同内面は不明瞭であるが横位の篋削りが施されている。裾部内外面は横撫で調整による。胎土、焼成とも良好であり、色調は赤褐色を呈する。

土師器坏（第87図-3）完形品であり、口径13.0cm、器高5.3cmを測る。口縁部と底部とは明瞭な稜により分けられている。口縁部は、僅かに外反しながらほぼ直に立ち上がる。口縁部内外面及び底部内面は横撫で調整により、底部外面は篋削りが施されている。胎土は細かく良好である。焼成は良い。口縁部から底部にかけて、4×2cm、5×1.5cmの黒斑が2箇所認められる。色調は、淡橙褐色を呈する。

須恵器大甕（第88図）図示した以外にも、かなりの破片が出土したが、いずれも接合不可能なものであり、すべて同様な胴部の破片である。1～6の破片とも、外面平行叩き目文が施され、3のみが部分的に格子状に叩き目が見られる。また、すべての破片に叩き調整後、浅い沈線が刻まれている。1では3本みられ、内2本は2条1帯を成している。2では4cmの間隔で2本、4では3cmの間隔で2本、5では3cmの間隔で3本みられる。内面調整は1～6とも同様に、丁寧に指撫でされ、叩き目文はみられない。胎土、焼成は1～6すべて同様であり、胎土は細かく、僅かに小石を含む。焼成は良好である。色調は1・3・4・5が灰白色を呈し、2・6が灰黒色を呈している。（菅谷浩之）



第87図 長沖25号墳出土土器（1：4）



第88图 長沖25号墳出土須恵器拓影图 (1 : 3)

16. 長沖27号墳

古墳の立地と現状

27号墳は、比高差約3mを測る段丘崖上の縁辺際に占地している。周囲の地形は、本墳の位置するあたりより南東へ僅かに傾斜して段丘崖へ至り、北東に向かっては平坦面と段差を成しさらに低くなり、40m程で段丘崖へ続く。

本墳の西側には隣接して28号墳があり、南西約50mの墓地内にも1基古墳の存在が認められている。周辺には、本墳を含めこの3基の他に段丘崖縁辺に位置する古墳は現状ではなく、西方約100mの飯玉神社境内に、段丘よりやや北に奥まって3基の古墳が存在するのみである。このあたりより北にかけて古墳の分布は密度を増す。本墳の北から東にかけての周辺には、現状において古墳の姿は全く見られなかった。



第89図 長沖27・28号墳丘測量図(1:400)

本墳は、畑の中に東西15m、南北14m、高さ1.2mの墳丘を留め存在していた。墳丘上には、他の古墳同様河原石が散乱し、墳丘南側には洪水によってもたらされたと考えられる河原石が多量に投棄されていた。

調査は、28号墳を含め4m×4mのグリットを設定し、さらにはトレンチを併用して遺構の検出に当たった。

形態

調査の結果、本墳の周囲に内径約16m、外径約20mを測る周溝が検出された。周溝北側の一部は、北東～南西方向に走る中世の溝により切られていた。周溝は、地形が南東へ傾斜し低くなっているためもあり、東側～南～西側にかけて概して浅く、基盤層から20cm程であり、北では30cm程掘り込んでいる。周溝南東部には、幅約5mを測るブリッジが認められるが、地形の作用もあり、その存在は明瞭



第90図 長沖27・28号墳全体図(1:400)

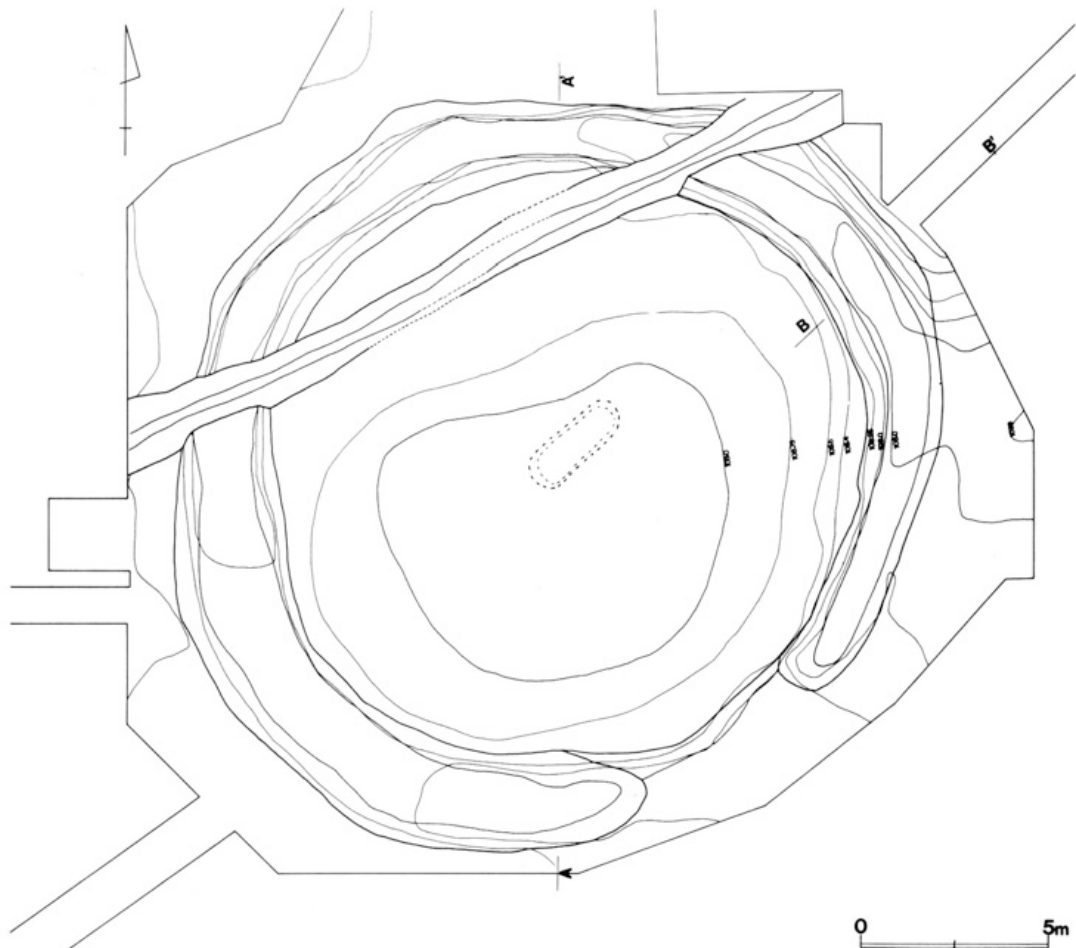
でない。周溝の形状な、外側が比較的緩やかに立ち上り、それに比べて内側がやや急傾斜となる。

墳丘は、近年の開墾、盗掘のみならず、既に中世において墳頂の成形、墳麓の石積み、さらには北側の溝の掘削等により変形されていた。該期の遺物としては、板石塔婆2基、宋銭3枚、青磁片及び中世陶器片が出土し、本墳が信仰の場として利用されていた事が窺い知れる。板石塔婆は2基とも破片であるが、当初は墳丘に樹立されていたものであろう。この様に、本墳の変形は中世にまで遡り、近年の破壊行為とあいまって墳丘の遺存状態は決して良好とは言えず、調査によってもその形状、規模を明らかにする様な遺構は検出されなかった。ただ、残存していた墳丘から、封土は、旧表土とその下層の褐色砂泥を中心に構成され、ほぼ墳丘の中央部から盛土されていることが知れた。

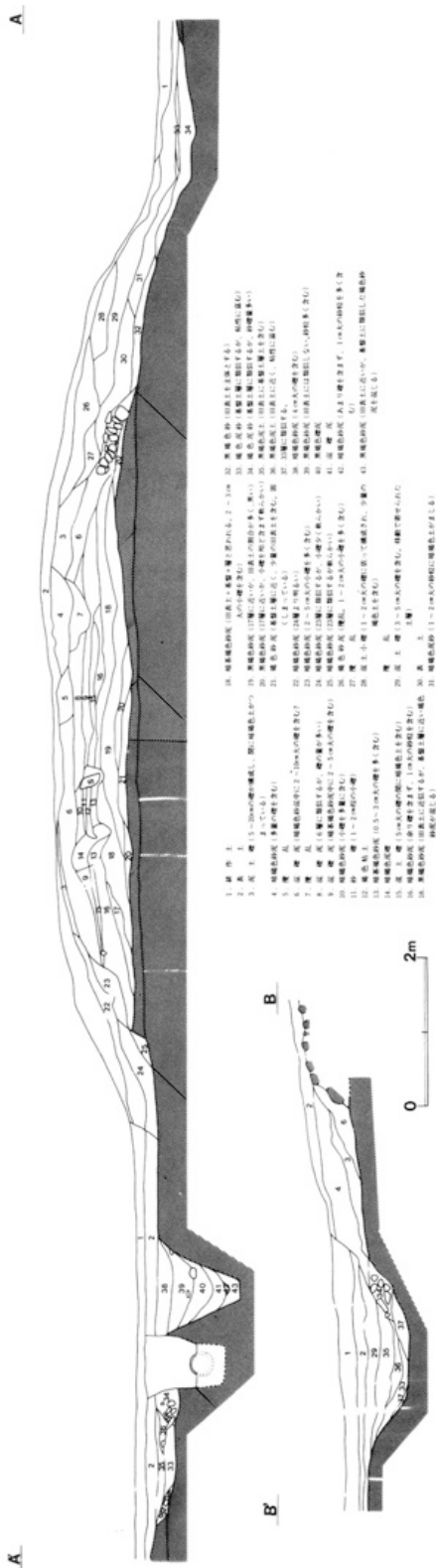
主体部

主軸をN-43°-Eにとる竪穴系の主体部である。現存する墳丘の北寄りの墳頂下において確認されたが、周溝との関係からすれば古墳のほぼ中央に位置する。

主体部は、検出面で旧表土から約70cmを測る封土層中に3m×1m、深さ20～40cm程の長楕円



第91図 長沖27号墳全測図(1:200)



第92図 長沖27号墳墳丘・周溝土層断面図 (1:100)

形の土壇を設け構築されている。主体部の規模は、南西側の短壁を欠くが全長2.2m程と推定され、幅45cmを測り、高さは現存する限りで棺床面より僅か10cm程である。

壁の用材には、北東側の短壁と南東側の長壁の一部に緑泥片岩の板石を使用している。他は河原石を用い壁を構築しているが、整った壁面を成さない。これらの石材は、いずれも粘土により固定され、さらに礫で構成される後込めによって抑えられている。

棺床面は、一面に小砂利を5cm程の厚さで敷き構成されている。

以上本墳の主体部は、緑泥片岩の板石を一部であるが用材として使用し、そのあり方は箱式石棺に類似している。また、規模の示す空間からも棺としての様相が強い。

出土遺物

埴輪

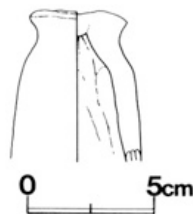
周溝内及び墳丘表土中より破片で出土した。攪乱が著しいためもあり、量はあまり多くない。

土器(第93図)

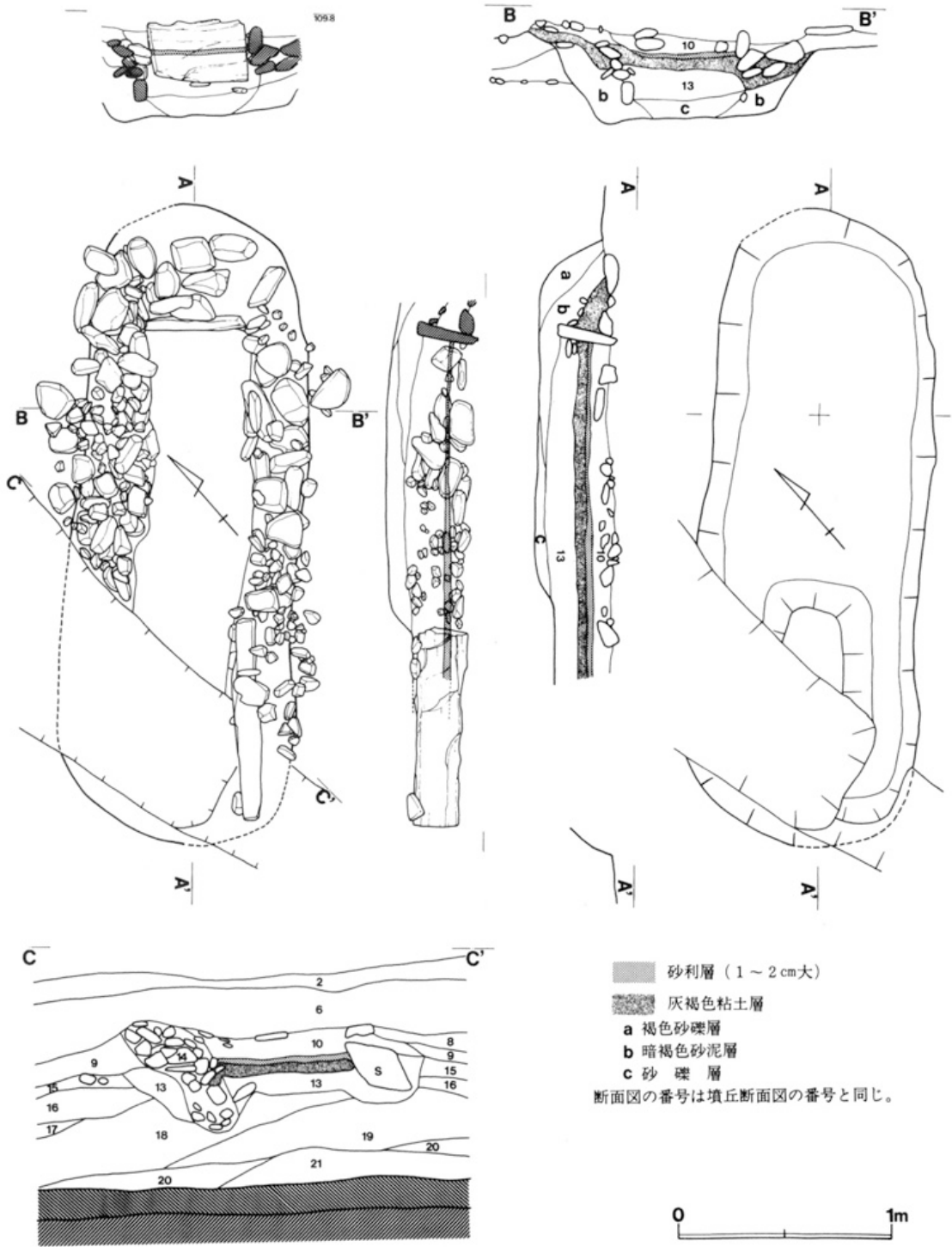
主体部付近の墳丘表土中から土師器高坏脚部片2点が出土した。内一点は小片で図化できる程でないが、同時期のものである。

土師器高坏 坏部及び脚部下半を欠損している。脚部外面は篋磨きにより、内面指削り、内面の一部上方にしぼり痕を残す。天井部には坏部接合時における粘土瘤がつまっている。胎土、焼成とも良好で、色調は暗橙褐色を呈する。

(金子 章)



第93図 長沖27号墳出土土器 (1:4)



第94図 長沖27号墳主体部実測図 (1:30)

17. 長 沖 28 号 墳

古墳の立地と現状

28号墳は身馴川河岸段丘上端部の平坦面に在り、27号墳の西に隣接して、調査古墳中では両古墳が最も河岸段丘崖際近くに位置し、また比較的低位にある。

墳丘は耕作、盗掘等により破壊を受けており、本墳に使用されたと思われる河原石が東西径7.1m、南北径9.2m、高さ1m程の集石状になっていた。周辺は桑畑であったが、現墳丘西裾部には宅地がせまっていた。

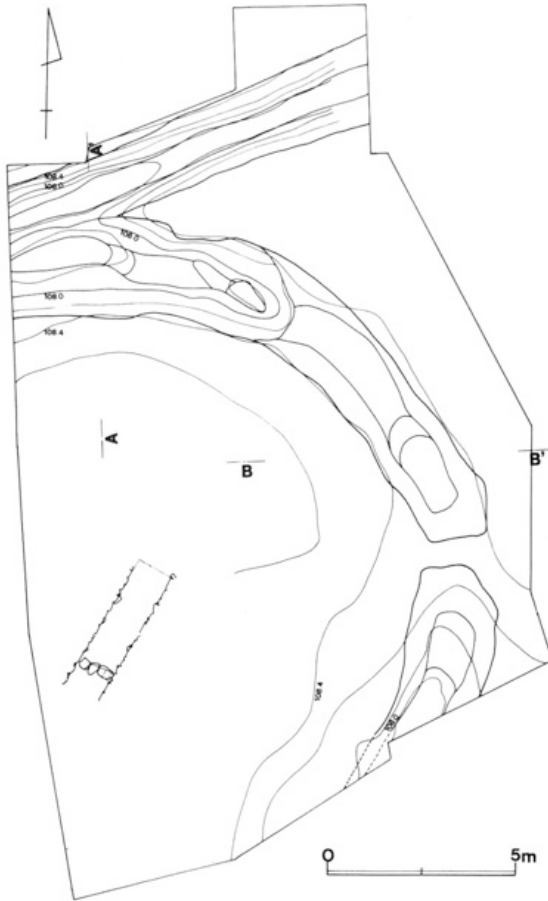
調査は27号墳と共有する4m×4mのグリットを全面に設定し、宅地内である墳丘西側及び南側の桑畑を除いた範囲内で石室の検出と周溝の確認を行った。

調査は27号墳と共有する4m×4mのグリットを全面に設定し、宅地内である墳丘西側及び南側の桑畑を除いた範囲内で石室の検出と周溝の確認を行った。

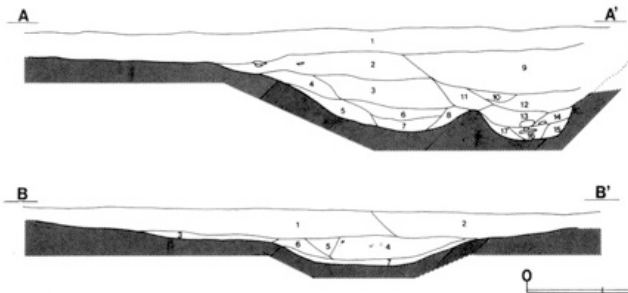
形態

本墳は調査区域の制限があったため周溝を全掘できず、墳形の断定はできないが、円墳とした場合内径16.5mを測るものである。周溝は27号墳と同じ基盤層を東側で20cm、北側で70～80cm程掘り込んでいて、周溝幅は2～2.5mを測り、東側に幅70～80cm程のブリッジを有する。この周溝は北側で27号墳同様中世の溝によって切られている。

周溝は溝底が東から北へと北東部で急に深くなるため、東側で内外ともになだらかに立ちあがり逆台形状を呈するのに対し、北側の立ちあがりは内外ともに急傾斜で開き、溝底にくぼみがあるため『U』字状に近い形を呈している。一方、ブリッジ南側の周溝立ちあがり、内側

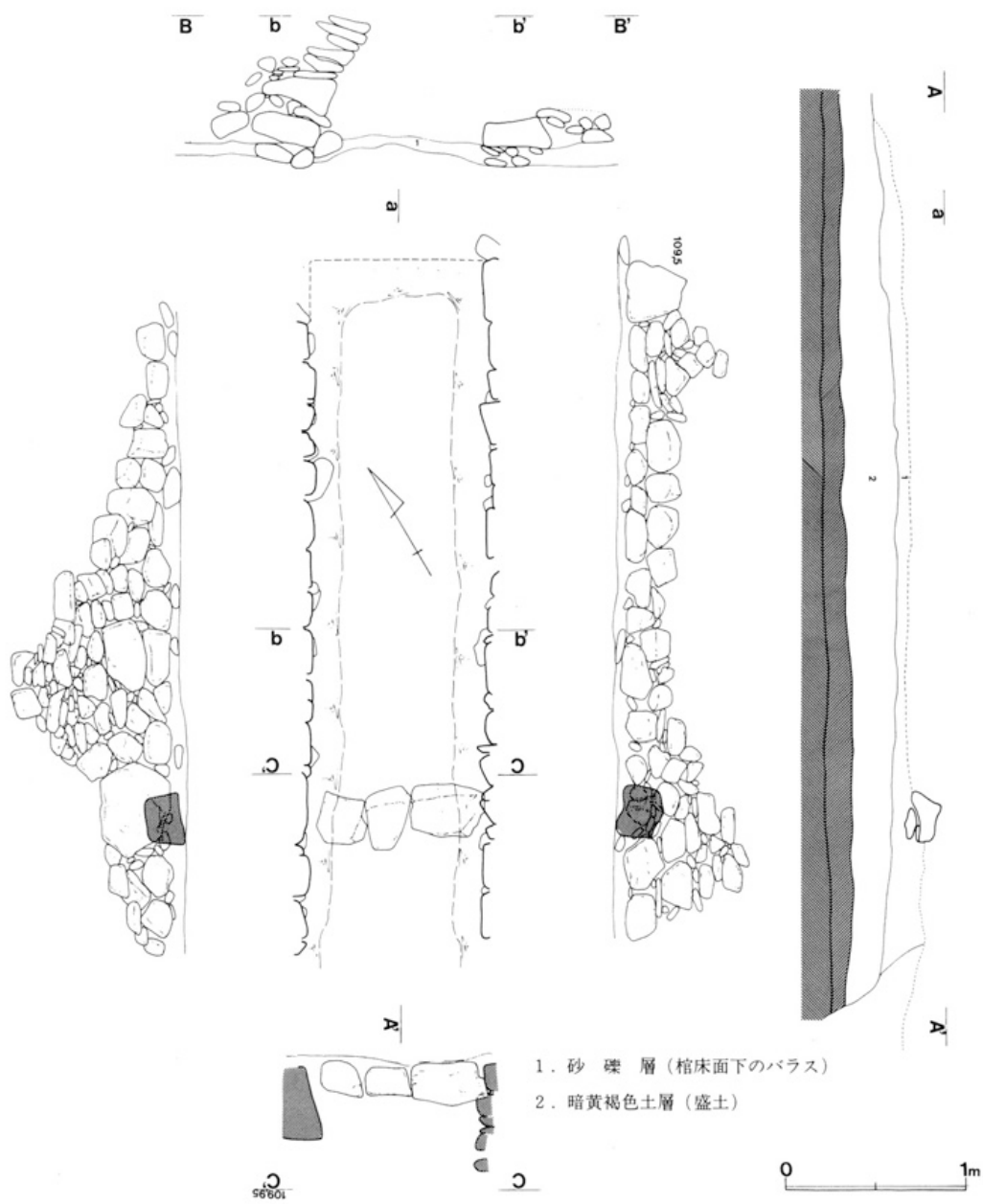


第95図 長沖28号墳全測図 (1:200)



第96図 長沖28号墳周溝土層断面図 (1:100)

- A-A'
1. 表土 (火山灰を多く含む)
 2. 暗褐色土 (小礫と砂を若干含む)
 3. 暗黒色土 (ローム粒を多量に、礫をわずかに含む)
 4. 黒色土 (礫をわずかに含む)
 5. 暗黒褐色土 (礫、砂を多量に含む)
 6. 暗黒褐色土 (礫、砂をわずかに含む)
 7. 黒褐色土 (礫を多量に含む)
 8. 暗黒褐色土 (礫をわずかに含む、粘性おびる)
 9. 暗褐色土 (小礫を多量に含む)
 10. 暗褐色土 (礫をわずかに含む)
 11. 暗褐色土 (礫を若干含む)
 12. 暗褐色土 (ローム粒を多量に、礫をわずかに含む)
 13. 暗黒褐色土 (ローム粒、砂をわずかに含む)
 14. 暗褐色土 (ローム粒をわずかに、砂を多量に含む)
 15. 暗褐色土 (ローム粒をわずかに、砂を多量に含む)
 16. 暗黒褐色土 (ローム粒をわずかに含む、粘性おびる)
 17. 暗黒褐色土 (砂を多く含む、やや粘質おびる)
- B-B'
1. 表土 (火山灰を多く含む)
 2. 表土 (火山灰をわずかに含む)
 3. 暗褐色土 (火山灰を含まない)
 4. 暗黒褐色土 (礫を多量に含む)
 5. 暗黒褐色土 (ローム粒を多量に含む、火山灰も含む)
 6. 暗黒褐色土 (火山灰と、わずかの礫を含む)



- 1. 砂 礫 層 (棺床面下のバラス)
- 2. 暗黄褐色土層 (盛土)

第97図 長沖28号墳石室実測図 (1:40)

にやや急な傾斜をもって開き、溝底はブリッジから南へと深くなっている。

ブリッジへの周溝の移行は南北両側からなだらかに盛り上がっている程度で明瞭なプランは認められない。周溝内には墳丘から流れ落ちた礫が認められた。

主体部

本墳の主体部は、主軸をN-30°-Eにとる袖無型横穴式石室である。耕作等による周囲からの破壊は主体部にまで及び、天井石や奥壁は残存せず、側壁も一部を除いて根石より2~3段を残すのみで、残りの良い所でも大きく内傾しているというように遺存状態は良好ではなかった。

石室の規模については、石室入口部が不明であり奥壁も現存していないため、正確な数値をおさえることができないが、奥壁に関しては石室の掘り方及び、墳丘精査中に奥壁に使用されたとと思われる緑泥片岩の破片が確認できた位置などから考え、奥壁は東壁北端部に緑泥片岩を用材として成されていた可能性が大きい。これに対して埋葬部は、径30~45cm程の3つの框石によって区別けされているのである程度の企画は類推できる。

以上のことから石室の規模を割り出すと、現在長3.85m、埋葬部長2.90mで石室幅は奥壁前面で99cm、框石付近で95cmとなり、埋葬部の幅と長さの比は1:3となる。

この石室は、旧表土上に直接構築するという形をとらず、粘性を帯びたやや砂質の土を一層盛った上に砂礫を敷いて築いており、根石の下には礫が詰めこまれている。使用石材及び積み方は扁平で棒状な石の模様積みではなく、径20~40cm程の不揃いな転石を利用した乱石積みである。現状でみるかぎり、下の二段程を大きな石を主体に、それ以上を小ぶりで棒状な石と径20cm程の中位の石とで構成する傾向があるようである。

棺床面は全面にわたって攪乱をうけ不明である。この他、石室の後込めは明瞭には確認できず、控え積みも根石さえ認められず、その存在の有無は明らかでない。

出土遺物

埴輪

本墳出土の埴輪で実測に耐えうるものは二点にすぎないが、量的には少なくはなく、そのほとんどが円筒埴輪片で、周溝内、とくに北部及び南部の深い部分から比較的まとまった出土を見た。

鉄製品 (第98図)

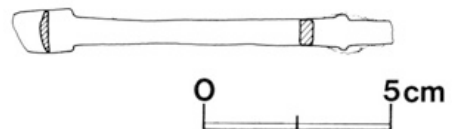
石室内は著しく攪乱をうけ遺物は全く遺存していなかったが、墳丘覆土中より鉄鏃が一点採集された。

鉄鏃 先端部及び基部の大半を欠損しているが、現存長10cmを測る有茎尖根片刃片丸鑿箭式である。銹化が著しく保存状態はあまり良くない。

その他

周溝の覆土中より鬼高I式と思われる高環脚部小片が出土した。

(篠崎 潔・金子彰男・山川守男)



第98図 長沖28号墳出土遺物実測図 (1:2)

IV 埴 輪 各 説

1. 円筒埴輪

(1). 長沖1号埴 (第99図～第102図・図版72,73)

本埴の埴輪の特徴は、底部調整の施されているものと、施されていないものとの共存にある。実測可能個体は12個体であり、うち底部調整の施されているものは6個体で、半数を占める。底部調整のすべては、外面への板叩き技法である。但し、この調整を施しても、基底部器肉が尖底化したものは、わずかにNo.12(第100図-6)のみである。底部調整の施されていない埴輪は、すべて基底部に歪みが生じており、若干開く、所謂袴腰になっている。又、底部調整の部類に入るかどうかは判らないが、破片の中には、基底部内面に、幅1cm程度の、刀子に依る横削りの施されたものもある(第101図-6)。

凸帯の形状は、断面三角形のものが圧倒的に多く、断面台形のものも、かなりグレている。粘土紐貼付の際の撫で方向は殆ど時計回りである。

須恵質に焼けているものは、No.1(第99図-1・図版72-1)の他にも、破片に何片か見受けられる。

No.9(第99図-4)の埴輪は、底面に於て、粘土板の接合痕が明瞭に残っており、巻き方向は、上から見て時計回りである。粘土板の接合、粘土紐の巻き上げ方向の判るものは、これ以外には無かった。

透かし孔に関して見ると、残存するものは3個体で、形状を復原出来るのは、No.1(第99図-1・図版72-1)のみである。これは上辺に直線部を持つ、縦長の半円窓と思われる。

外面調整はすべて一次調整の縦ハケである。内面調整は、すべて、縦方向(下→上)の指削りである。第2凸帯裏以上の斜ハケは、すべて指削り以前に為されている。

窯印と思われる刻線の施された破片が2片検出されているが、窯印の全容は判らない。

又、考察を導き出せる様なデータは得られなかったが、各埴輪の形態比率表を附記しておく。

No.	a	b	No.	a	b
1	1.0 : 0.64 : —	1.0 : 1.24 : 1.28 : —	7	1.0 : —	1.0 : 1.5 : —
2	1.0 : — : 0.69	1.0 : 1.5 : —	8	1.0 : — : 0.69	1.0 : 1.1 : 1.3 : 1.43
3	—————	1.0 : —	9	—————	1.0 : —
4	—————	1.0 : —	10	—————	1.0 : —
5	—————	1.0 : —	11	1.0 : —	1.0 : 1.16 : —
6	—————	1.0 : —	12	1.0 : —	1.0 : 1.6 : —

注： 上表の見方、aとは器高比で、第一段器高を1とする。bとは径比で、底径を1として、第1凸帯下場径～口径迄を示す。(P143凡例参照)

尚、この後に出て来る表の $\frac{a}{b_1}$ とは、底径対全器高の比率である。 $\frac{a}{a_1}$ とは第一段高対全器高の比率である。

No.は、一覧表のNo.に同じ。

(2). 長沖2号墳 (第103図～第105図・図版75-2,3)

実測可能個体は、2個体である。No.1 (第103図-1・図版75-2)は、第2凸帯、透かし孔付近の埴輪である。外面は第1次調整の縦ハケ。凸帯は断面三角形で、貼付の際の横撫では時計回りである。内面、凸帯裏以上は斜ハケ、後に縦方向の指削りである。透かし孔の形状は変則的で、一見方形かと思われる。切り込みも若干外開きである。

外面最上段と思われる部位には“<”の窯印も見られる。

No.2 (第103図-2・図版75-3)は表面の水溶が激しいために、観察しづらいが、外面は縦ハケ、内面は縦方向の指削りと思われる。凸帯は断面三角形で、貼付の際の横撫では時計回りである。底部調整は施されていない。

他に破片を見てみると、須恵質のものが多く見られると同時に、白っぽい焼のものも多く見られる。又、朝顔の口縁と思われる破片も一片ある。しかし、底部調整の施された埴輪片は、一片も見られなかった。

(3). 長沖8号墳 (第106図～第109図・図版76)

実測可能個体は、5個体である。うち、最上段迄復原出来るのはNo.4 (第106図-4・図版76-3)のみである。これを見ると、2条3段で、全器高35.7cmと小型のものである。外面は第一次調整の縦ハケ、凸帯は殆ど剥離しているが、ダレた、断面台形のもの様である。内面透かし孔付近以上は横位に近い斜ハケ、後に下→上への縦方向の指削りと思われるのだが、一般に言う埴輪製作工程で、埴輪を倒立させる工程があるのか、あるとしたら、どの工程からか、という問題に絡むため、内面指削りの方向は、慎重に確認しなければならない。途中指削りの省略された部分があり、逆時計回り、紐幅1.3～2.0cmの粘土紐接合痕が見られる。口唇端部は撫でが深く、両側がつまみ上げられたかのようになっている。外反は第2凸帯付近からはじまるが、極端に外反する部分はない。底部は、内面指押さえ、外面板押圧と思われる調整が為されている。それに対し、No.5 (第106図-5・図版76-4)は、両面板押圧と思われるが、器肉は尖っていない。No.1 (第106図-1)の口縁部残存の埴輪は、第2凸帯(?)から口縁端部迄、平均6.5cmと短く、又、その形状も、外に開いた後に、若干内湾するという、当古墳群内では、他に例の無い埴輪である。又、この埴輪は、焼成が良好である。内面のハケ目は、乾燥の甘いうちに施されたものと見え、ハケ目とハケ目の間に段差が生じている。外面透かし孔横の部分には横位の刻線があり、窯印と思われる。No.4・5 (第106図-1,2・図版76-3,4)の埴輪は、上に細くなり、円筒埴輪とは思われない。多分形象の基台部と思われる。

他に破片を見てみると、底部調整の施されたものが多く見受けられる。それも殆どが外面の叩き調整と思われる。先程の例は外面板押圧、両面板押圧であったから、この外面叩きも含め、ここでは3種類の底部調整技法が共存していた事になる(尚、底部調整の各技法に関しては、V-3の埴輪の所で詳述する)。

長沖8号墳出土埴輪形態比率表

No.	a	b	$\frac{a}{a_1}$	$\frac{a}{b_1}$
1	1.0 : 0.58 : 0.47	1.0 : 1.34 : 1.55 : 2.1	2.1	3.07
2	1.0 : 0.6 : —	1.0 : 1.59 : 1.88 : —	—	—
3	— : — : 1.0	— : — : 0.84 : 1.0	—	—
4	—————	1 : 0.9 (20cm高で)		
5	—————	1 : 0.86 (")		

左表の見方は95頁の1号埴輪形態比率表参照のこと。

(4). 長沖12号墳 (第110図)

復元実測できる程の埴輪はなく、小片で接合不可能なものが殆どである。

1～6は口縁部であり、ほぼ同様な形状である。4の破片を見ると、第2凸帯あたりから直線的に開き、外反の少ない様相が窺える。外面調整はいずれも縦ハケであり、内面については、2で斜位のハケ調整が施されている以外は、縦方向の指撫でによる。凸帯の形状は、断面台形の突出の弱いものである。透かし孔は、4で見る限り円窓と思われる。

(5). 長沖14号墳 (第111, 112図・図版78-2, 3)

実測可能個体は3個体である。すべて、当古墳群内に於ては、古式の様相を示している。No.3 (第111図-3・図版78-3)は、第1段外面に縦ハケ、第2段外面には、第1次縦ハケの後に、2次調整としての、B種横ハケ(註1)が施されている。凸帯は、上稜の張った、断面台形で、突出も強く、全体にしっかりしている。巾、貼付後の撫で幅は狭く、上・下の器面の撫では殆ど無い。内面は、粘土紐巻き上げの際の指撫でに依る接合痕が明瞭である。底部調整は施されておらず、基底部の器肉は、異常な厚みを持つ。透かし孔は円窓と思われる。

No.1 (第111図-1・図版78-2)の朝顔開口部は、口縁径を復元してみると、54.6cmと、かなり大型のものである。外面、開口第1段目は縦ハケ。第2段目は、木端に依ると思われる横方向の削り調整が為されており、その後を、やはり木端で横方向に撫でているらしい。外面は、全体に丹彩が施されている。凸帯は3の例と同じく、上稜の張った、断面台形のしっかりしたものである。但し、凸帯下場の撫で幅は広い。1・3共に、凸帯の撫で方向は時計回りである。内面は殆どハケ目調整と思われるが、凸帯裏以上は、かなり丁寧に指削りが為されており、ハケ目は殆ど消えてしまっている。内面のハケ目、指削りは、共に逆時計回りで施されている。内面も、口唇部付近に、わずかに丹彩痕がある。

No.2 (第111図-2)の口縁部は、口唇部が若干外反するだけの、ずん胴に近い埴輪であろうと思われる。外面はB種横ハケ後に、口唇付近に右下→左上への指撫でが為されている。内面は斜ハケが施されている。外面全体、及び内面口縁上部に丹彩が施されている。

他に破片を観察して見ると、縦ハケの施されている破片は、わずかに3片で、他は、皆B種横ハケである。又、凸帯をさかいとして、上・下の器壁が段違いを為す。器台形埴輪の名残りとも思われる破片が存在する。口唇部の形状としては、No.2の例の他に、端部外側に丸みを持つ破片が存在する。タガは概して、類似した形状を持ち、大小の差を見る程度である。

破片の中には、外面に黒斑の付着したものが何片かある。黒斑は、窠窯以前の焼成法である野焼の特徴であることが既に指摘されているが(註2)、本例がその範疇に入るものであるかは断定が難しい。

又、丹彩の施された破片も他に何片が存在する。透かし孔に関しては、破片で見る限りに於ても、円窓のみである。

3の形態比率は a, 1 : — b, 1 : 1.23 : — である。

(6). 長沖15号墳 (第113図～第115図・図版79)

実測可能個体は4個体であるが、うちNo.1の周溝内側出土埴輪(第114図・図版79-1)は、直接本墳に伴うものとは考えられない。それは、他の周溝内出土の埴輪に較べ、著しく古式の様相を示す為である。それで、この埴輪については後に述べることとして、他の、平均的15号墳出土埴輪から述べることにする。

共通の特徴として明記すべき事は底部調整を欠くことである。

No.3(第113図-2・図版79-3)は、凸帯断面台形であるが、突出は殆どなく、又、ひどく、ダレている。内面縦方向の指削りであるが、上→下への指削りが目立つ。

No.4(第113図-3)は、凸帯が断面台形で、下稜の突出の方が強いという特徴を持つ。凸帯断面形が台形から三角形に移行する場合、下稜の省略される事が、轟氏に依って指摘されている(註3)。従って、この凸帯の形状は、興味深いものである。内面第2凸帯裏以上に施されているハケ目は、目が粗く、刻みも浅いため、最初、棒状のへらに依る撫でかと思誤るほどであった。結局、目の粗いと同時に、かなり乾燥の進んだ時点に於いて、ハケ目が施されたものと考えられる。

窠印については、破片の中には一片も見当らず、No.2・4に施されている2種類のみである。

他の破片について見てみると、底部調整の施されたものは、やはり一片も見受けられず、又、これから述べる周溝内側出土の埴輪に類似する破片も見受けられなかった。

周溝内側出土の埴輪は、初め、その形状の特殊性から、円筒棺も想定されたが、それらしき施設(土坑等)は無かった。形態から言うと、口縁径36.6cmと、長沖古墳群内の普通円筒埴輪中最大である。又、凸帯間隔が平均7cm前後と短いことも特徴である。外面縦ハケであるが、乾燥の進んだ段階で施してあることと、水溶のひどいことのために、単位は掴みにくい。透かし孔は、上部2段に見られる。上から2段目のものは横長楕円で2個であるが、最上段のものは、どうも3個の様である。凸帯は、上辺・側辺・下辺のすべてがくぼむ、非常に古式の様相を示し、又、上・下の撫でも丁寧である。内面は随所に粘土紐の巻き上げ痕が見られ、すべて上→下への撫でつけによって接合されている。ハケ目は、上から2段目の透かし孔以上に、まばらに施されている。口唇部、凸帯すべて時計回りの撫で、布の使用痕が明瞭である。

長沖15号墳出土埴輪形態比率表

No.	a	b	$\frac{a}{a_1}$	$\frac{a}{b_1}$
1*	1 : 0.54 : 0.45 : —	1 : 0.78 : 0.72 : 0.71 : —	—	—
2	1 : 0.56 : 0.72	1 : 1.2 : 1.33 : 1.7	2.28	2.6

※の印は、最上段器高を a_1 として a 列の基準とする。
口縁径を b_1 として b 列の基準とする。

3	1 : —	1 : 1.08 : —	—	—
4	1 : 0.56 : 0.51	1 : 1.12 : 1.17 : 1.44	2.1	2.4

(7). 長沖縄文A地区 (14・15・16号墳) 表採 (第116図)

縄文A地区表採の埴輪は、多量の縄文式土器片と共に二次堆積土中から出土したものである。図示した1・2と3～9の埴輪片は、明らかに時期を異にしており、その特徴や出土状況から1・2は15号墳に、3～9は14号墳に伴う可能性が高い。

1の口縁部は器肉が薄く、口唇部は外側につまみ上げられている。造りは丁寧であり、端部の撫でも深く、外側で段を成している。外面は縦ハケ、内面は斜位のハケ調整後、端部の撫で、さらにその下部を間隔をもった縦方向の指撫でにより斜位のハケ目を部分的に磨消している。同様な内面調整は、当古墳群中では22・25号墳で見受けられたものである。2は外面に非常に粗い目の縦ハケ調整が施されたものである。凸帯は、比較的突出の強い断面三角形に近い形状を呈するが、その断面形は所により若干異なり、本来的には下稜の著しく張り出した台形と見做すことができる。

3は基底部の破片であるが、基部に凸帯を有する例であり、器種は明らかでないが、円筒であるとするればかなり特異な存在である。外面には横ハケが施されている。9も基底部の破片である。底部調整は無く、外面縦ハケ、内面指削りによる。当破片で特に注意したいのはその焼成に伴う色調の変化で、破片外表面から断面内部にかけて黒色を呈し、内表面から底面のみ2～3mmの厚さで乳褐色を呈する。このような焼成ムラは、野焼き焼成に於る黒斑が表面にのみ付着するのとは明らかに異なるであろう。8を除く3～9は、焼成ムラの有無に関わらず似通った焼き上がりを呈するが、8は外、断面が橙褐色～灰褐色、内面が灰褐色を呈し、須恵質に内面が焼き上っている。

5は胴部で、凸帯をさかいとして、上下の器壁が段違いをなすものである。凸帯の突出は、7・8に比べ弱い。7・8は第1凸帯あたりの破片である。7は凸帯をさかいに上部が横ハケ、下部が縦ハケ調整が施され、透かし孔の下辺部が直線的に切り込まれている。7・8とも凸帯の突出は強く、断面台形を呈する。

(8). 長沖21号墳 (第117図～第119図・図版80-1,2)

実測可能個体は2個体である。

No.1(第117図-1・図版80-1)の埴輪は基底部と口縁部を欠いている。外面は縦ハケで、縦長楕円形と思われる透かし孔を持つ。特徴は凸帯で、先の15号墳例にも見られたように、下稜の方が強く突出する形状を持つ。内面は、やはり凸帯裏にも指圧痕が連なり、その後縦方向の指削りが施されているが、上→下へという、変則的なものである。

No.2(第117図-2・図版80-2)は、外面には何等特徴は見られないが、内面のハケ目が、基底部近く迄施されている、という特徴を持つ。しかも、最も下のハケ目が横ハケである事から、工具は、かなり小型のものを使っていると思われる。

他に破片を見てみると、朝顔の肩部と思われる破片、又、基底部に外面板叩き調整の施されたものも見られる。注目すべきは第118図-5に見られる凸帯貼付の際の、棒状へら、もしくは指先で為されたと

思われる断続撫で技法（註4）である。これに関しては、次の22号墳に好例が見られるので、そこで詳しく取り上げる。

（9）長沖22号墳（第120図～第126図・図版81～図版83・図版84-1,2）

実測可能個体数24個体と、長沖古墳群中では最も多くの円筒埴輪を出した古墳である。すべて2条3段の形態を示す埴輪と考えられる。窯印と思われる刻線の施されたものが12本あり、うち一本はその全容が判らず、結局、11本で7種類の窯印が確認されている。同じ窯印を持つものが、せめて4～5本残っていれば、比較に絶好の資料であったろうが、ここでは最高3本と、その効果は半減してしまっているが、とにかく、窯印を持つものの比較、検討から入って行きたいと思う。

①…外面透かし孔横に、一本の横位の刻線を施すもの。No.1（第120図-1・図版81-1）とNo.8（第121図-4・図版82-2）の2本である。形態比率を見ると（後表参照）、非常に近似した数値を示す。色調は共に乳橙色、凸帯は共に上稜の方が明瞭な断面台形である。透かし孔はNo.1が若干横長楕円、No.8が若干縦長楕円と、形態的に違いがあるが、切り込み方向、開き方は同じである。口縁の形状に関しては、口唇端部に於て、No.1はくぼんでおり、No.8は若干山なりになっている、という整形の違いが見られる。又、内面凸帯裏の指圧痕列に関しては、No.8の方には存在するが、No.1の方には存在しない。以上のように、形態的には非常に類似するが、技法面において、若干の相違を示す。しかし、この後に述べる他の同じ窯印を持つもの等のセットに較べ、この2本は際立った類似を示すものである。

②…外面最上段に、2本の平行刻線を斜めに施すもの。No.10（第122図-2・図版82-4）、No.11（第122図-3・図版82-5）、No.13（第112図-5）の3本である。No.10とNo.13が基底部を欠損している上にNo.11が異常に歪んでいる為に、形態比率はとりにくかった。表を見ても判る様に、形態上の数値から、共通性を見出すことはむずかしい。凸帯はすべて断面台形であるが、No.11だけが、下稜の方が明瞭な形状を示す（No.10・13も部分的にはある）。更に、No.11には、凸帯貼付の際の断続撫で技法が用いられているが、他の2本には見られない。口唇部形状は、すべて内側の端部が尖る、という共通性を持つが、成形に、2本成形と3本指成形の違いが見られそうである。他、内外面の整形には、これと云った相違点は見られない。但し、No.10の内面には方向不明だが、幅1.9cmの粘土紐接合痕が見られる。透かし孔はすべて外開きで、切り込み方向もすべて時計回りであるが、形態は皆ダレており、共通性は見られない。

③…内面口縁部にV字の刻線を施すもの。No.4（第120図-4・図版81-3）、No.6（第121図-2・図版82-1）の2本である。両者の形態比率を見ると、かなり近似した数値を示す。しかし、実数で表わしてみると、全器高はNo.4の方が1.5cm高く、口縁径はNo.4の方が3.0cm大きい。色調は共に乳橙色、凸帯は、共に所々が断面台形になる断面三角形である。口唇部形状は、厚さに若干の違いが見られ、又、端部のくぼみ具合に若干の違いが見られる。透かし孔は共にダレた円窓で、切り込み方、切り込み方向は同じである。他の整形には、これと言った違いは見られない。

他に4種類の窯印があるが、すべて一個体ずつである。

④…外面最上段に、2本の平行刻線を横位に施すもの。No.2（第120図-2・図版81-2）の一個体である。

⑤…外面最上段に<の刻線を施すもの。No.9（第122図-1）である。

⑥…外面透かし孔横に>の刻線を施すもの。No.15（第123図-1）である。

⑦…内面口縁部に×の刻線を施すもの。No.21（第124図-1・図版83-5）である。

そして、もう一つ、全容の判らないのは、No.5（第121図-1・図版81-4）である。

窯印に重点を置いた観察は以上である。次に特筆すべき事は、21号墳の所でも述べた、凸帯の断続撫で技法である。この技法は、22号墳出土の埴輪の中では、No.2（第120図-2・図版81-2）、No.11（第122図-3・図版82-5）、No.16（第123図-2）に顕著である（註5）。他に、2号墳、21号墳にも若干の例がある。断続撫で技法と言う用語を使っているが、ここで言うのは、川西氏の指摘する技法とは異なるものである。氏の文章を引用すると「拇指と人差指を使うか、又はそのどちらか一方を使い、（粘土紐）を強く撫でる方法である。これを断続撫で技法と呼ぶことにする。これ等の技法を有するのは最下段に限られる」と言うものである。本稿で言う断続撫で技法とは、指先、又は棒状のヘラを用い、粘土紐の上側を、断続的に強く器壁に撫でつける技法である。そして、これは最下段にのみ施される訳ではない。この技法で粘土紐を器面に仮貼付した後に、横撫で調整を行う訳である。従って、撫でつけが弱かったり、横撫で調整が丁寧な場合には、その痕跡は完全に消されてしまうわけであるから、どれくらいの数の個体にこの技法が施されているのか、実体は判らない。

次に注目すべきは、No.5に見られる外面全体に施される縦方向のヘラ削りである。長沖古墳群内では本墳の他に、2号墳から1破片出土している。他にこの例の出土する古墳は、埼玉県行田市大稲荷古墳出土例（註6）、千葉県油作II号墳出土例（註7）、栃木県篠塚稲荷古墳・毘沙門山古墳出土例（註8）等がある。しかし、本墳出土例のみについて見ると、口唇部形状に若干の特徴を見る以外、他の本墳出土埴輪と比較しても、これと言った特徴は見られない。

No.2（第120図-2・図版81-2）とNo.6（第121図-2・図版82-1）の基底部には、内面に横方向のハケ目が一周している。又、No.17（第123図-3・図版83-3）の基底部には、内面板押さえ、外面板叩きによる底部調整が施されている。

長沖22号墳出土埴輪形態比率表 ①（下から）

No.	a	b	$\frac{a}{b_1}$	$\frac{a}{b_2}$
1	1 : 0.9 : 1	1 : 1.21 : 1.38 : 1.72	3.02	2.48
2	1 : 0.84 : 0.72	1 : 1.25 : 1.44 : 1.87	2.56	3.10
4	1 : 0.85 : 0.72	1 : 1.28 : 1.47 : 1.98	2.59	3.16
5	1 : 0.76 : 0.59	1 : 1.23 : 1.36 : 1.51	2.38	2.91
6	1 : 0.85 : 0.78	1 : 1.24 : 1.69 : 1.88	2.59	3.22
7	1 : 0.68 : —	1 : 1.4 : 1.64 : —	—	—
8	1 : 0.93 : 1.0	1 : 1.23 : 1.41 : 1.76	2.95	2.54
11	1 : 0.59 : 0.6	1 : 1.16 : 1.19 : 1.48	2.2	2.48
14	1 : —	1 : 1.39 : —	—	—
16	1 : —	1 : 1.08 : —	—	—
18	1 : 0.52 : —	1 : 1.13 : 1.21 : —	—	—
19	1 : —	1 : 1.13 : —	—	—

23	1 : —————	1 : 1.37 : —————	—	—
24	1 : —————	1 : 1.36 : —————	—	—

長沖22号墳出土埴輪形態比率表 ② (上から)

No.	a	b	$\frac{a}{a_1}$	$\frac{a}{b_1}$
1	1 : 0.94 : 1	1 : 0.80 : 0.70 : 0.58	3.02	1.44
2	1 : 1.16 : 1.38	1 : 0.77 : 0.66 : 0.53	3.55	1.65
3	1 : 1.15 : —	1 : 0.76 : 0.73 : —	—	—
4	1 : 1.17 : 1.38	1 : 0.74 : 0.64 : 0.50	3.58	1.59
5	1 : 1.25 : 1.72	1 : 0.89 : 0.81 : 0.66	3.88	1.92
6	1 : 1.08 : 1.26	1 : 0.93 : 0.67 : 0.60	3.28	1.75
8	1 : 0.92 : 1.09	1 : 0.80 : 0.70 : 0.65	2.90	1.44
9	1 : —————	1 : 0.80 : —————	—	—
10	1 : —————	1 : 0.69 : —————	—	—
11	1 : 0.98 : 1.65	1 : 0.81 : 0.78 : 0.67	3.63	1.67
12	1 : —————	1 : 0.79 : —————	—	—
13	1 : 1.08 : —	1 : 0.86 : 0.72 : —	—	—
15	1 : 1.60 : —	1 : 0.91 : 0.81 : —	—	—
21	1 : —————	1 : 0.78 : —————	—	—
22	1 : 1.13 : —	1 : 0.76 : 0.58 : —	—	—

注：最上段器高を a_1 として、 a 列の基準とする。
口縁径を b_1 として、 b 列の基準とする。

(10) 長沖23号墳 (第127図-1~4)

小片が多く、復原実測どころか図示できる破片も少なかった。

1の口縁部は、ほぼ直線的に開き、口唇部に至って僅かに外反するが、内側ではその屈曲は明瞭である。2は第2凸帯あたりの破片であり、外面は縦ハケ、内面は上方向に引く斜位のハケ調整が施されている。凸帯の形状は、断面台形で側辺がくぼむ。3・4は基底部の破片であり、4については内外面に底部調整が施されている。外面は板叩き技法、内面は斜位のヘラ削りによる。

(11) 長沖24号墳 (第127図-5~8)

図示した埴輪を含め10片程の破片での出土である。

5~8の破片とも器肉が比較的薄く、外面縦ハケ調整が施されてはいるが、刻みの浅い不明瞭なものである。7の口縁部は大きく外反し、口唇端部が内側につまみ上げられている。8については、やや器肉が厚く、シャープさを欠くが、作りは7とほぼ同様である。6~8の破片で見られる凸帯の形状は、断面三角形を呈する突出の弱いものである。凸帯貼付時の撫で調整は、明瞭な擦痕を残すのを特徴としている。

(12) 長沖25号墳 (第128図～第135図・図版86～図版88)

実測可能個体数は16個体である。他の古墳出土の埴輪に比べ、3条4段のものや、大型のものが見受けられるが、これは前方後円墳と言う古墳の性質から起こるものであろう。

本墳の埴輪の中にも、4個体3種類の窯印が見られる。

①…外面最上段に、上反りの刻線を施すもの。No.3(第128図-3)、No.11(第130図-2・図版87-4)の2個体である。形態を見ると、No.11は確実に3条4段であり、No.3も凸帯間隔の狭い事から、多分3条4段であろうと思われる。凸帯は、3が断面三角形であるのに対し、11が断面台形と、両者異なる。透かし孔は共に不正円形である。No.11は確実に2対の透かし孔を持つと思われるが、四分の一周しかしない個体である為に、一個しか確認出来なかった。内面整形を見ると、No.11の斜ハケはかなり下の方から施されているが、No.3は最上段凸帯裏以上の範囲にのみ施されている。又、口唇端部の形状を見ても、No.3が中くぼみであるのに対し、No.11は山なりと異なっている。形態比率の数値も、それほど近似した数値は示さない。尚、同じ窯印を持つものが、破片で2破片見受けられる。(内1例は第134図-1)

②…第2段透かし孔横に×をやや斜めにした2本の刻線を施したもの。No.8(第129図-3・図版87-1)の1個体のみである。

③…最上段に横位一本の刻線を施したもの。No.13(第131図-1・図版88-1)の1個体のみである。

No.3・11の他に3条4段の形態を示すのは、No.2(第128図-2・図版86-2)である。これも第2段、第3段に一つづつの透かし孔を持つが、第2段に設けられたものは、かなり小型である。内面斜ハケは第2段透かし孔付近の、比較的下の方から施されている。

次に底部調整の問題を取り上げて見る。No.5(第128図-5・図版86-3)、No.8(第129図-3・図版87-1)、No.9(第129図-4・図版87-2)の3個体に底部調整が施されている。うち、No.5には刀子に依るとされる削りが内面に施されているのだが、非常に狭い範囲内で部分的に為されていることから、狭義の底部調整のカテゴリーに入るかどうかは疑問である。No.8・9に関しては、一覧表の通りなのであるが、No.8・9共に工具に依る縦の断差が何本も走っており、No.8を内面板押圧、No.9を内面横位へ削りとしたのは、単に粒子の移動の有無に依る識別であり、No.9にしても、内面板押圧後の横方向の撫で調整という可能性は充分にあるわけである。従って、調整技法の観察も、未だ不備な点を否定出来ないのであるが、何れにしても、内面みの板押圧と言う底部調整技法が、長沖古墳群中、ここにしか見受けられないと言う事実は、注目すべきである。

次に問題となるのはNo.9(第129図-4・図版87-2)の埴輪の持つ外見の形態の特殊性である。第1段高が22.0cmと卓抜しており、更に透かし孔を復原した所、径9.1cmの正円形、凸帯の整形も、下稜の少し下に若干の段差を持ち、一見して、異系統の埴輪、という印象を持つ。

又、No.6(第129図-1)の透かし孔に関して見てみると、半円形の左上の部分に、縦方向の刀子の切り込みの痕跡が見られる。

No.16(第131図-4・図版88-3)の内面に見られる、右下→左上へと曲線を描く指撫で痕も、興味をひくものの一つである。

次に本墳から出土した、2つの朝顔形埴輪について見て行きたい。No.4(第128図-4)、No.10(第130図-1・図版87-3)である。クビレ部において、No.10の方が5.8cmほど径が大きい等、全体的にNo.10に比べ

No.4は小型である。クビレ部から上への開口の角度は、共に57°である。凸帯は共に断面三角形で、山なりの稜を示す。内面整形においては、ハケ目の施し方が大きく異なる。No.4は右下→左上への余り規則性が見られない、ごく一般的なハケ目であるが、No.10は、一見B種横ハケを思わせる様な施し方である。又、クビレ部内面の内面指撫では、共に丁寧に行われている。

最後に、No.13(第131図-1・図版88-1)の口縁内面の指撫では、まるで土器のヘラ撫でのように、小さく止めながら、何回も繰り返し施されている。

長沖25号墳出土埴輪形態比率表 ①(下から)

No.	a	b	$\frac{a}{a_1}$	$\frac{a}{b_1}$
2	1 : 0.61 : 0.68 : 0.96	1 : 1.3 : 1.19 : 1.26 : 1.63	3.25	2.37
5	1 : —————	1 : 1.0 : —————	—	—
6	1 : 0.71 : —————	1 : 1.24 : 1.25 : —————	—	—
7	1 : 0.50 : —————	1 : 1.23 : 1.43 : —————	—	—
8	1 : 0.96 : 0.90	1 : — : — : 1.39	2.8	2.02
9	1 : 0.57 : —————	1 : 1.39 : 1.49 : —————	—	—
12	1 : —————	1 : 1.36 : —————	—	—

長沖25号墳出土埴輪形態比率表 ②(上から)

No.	a	b	$\frac{a}{a_1}$	$\frac{a}{b_1}$
1	1 : 1.02 : —————	1 : 0.70 : 0.54 : —————	—	—
2	1 : 0.71 : 0.64 : 1.04	1 : 0.77 : 0.73 : 0.69 : 0.61	3.38	1.45
3	1 : 0.64 : —————	1 : 0.83 : 0.75 : —————	—	—
8	1 : 1.06 : 1.1	1 : — : — : 0.71	3.14	1.45
11	1 : 0.92 : —————	1 : 0.77 : 0.70 : —————	—	—
13	1 : —————	1 : 0.90 : —————	—	—
14	1 : —————	1 : 0.80 : —————	—	—
15	1 : —————	1 : 0.81 : —————	—	—

(13) 長沖27号墳 (第136図)

復原実測できる程の埴輪の出土はなく、破片も攪乱が著しかったためか多くなかった。

No.1は口縁部の唯一の破片であり、直線的に立ち上がり、外反も弱く、口唇部に至って内側がくぼみ、僅かに開くものである。凸帯の形状は、No.2・3・5とも断面三角形を呈するが、No.3については著しくダレている。No.4～7は基底部の破片であり、いずれも底部調整は施されてなく、所謂袴腰になっている。ただNo.4については、底面から棒状のものによると思われるくぼみが見られる。これは埴輪製作時において、埴輪の下に存在したものの圧痕と考えられる。

(14) 長沖28号墳 (第137図～第139図・図版89-2,3)

実測可能個体は2個体である。共通の特徴は凸帯の形状で、断面台形、比較的しっかりした作りである。又、内面調整は共に乾燥の進んでいない段階で施されている。

個別の特徴で、最も特筆すべきことは、No.2(第137図-2・図版89-3)の凸帯に見られるハケ目痕である。所謂2次調整とは異なるハケ目調整が、凸帯貼付後に為されたことの痕跡と思われる。

(15) 長沖34号墳 (第140図)

25号墳の調査に伴い検出された埴輪であり、図示したのもも含め20片程の出土である。5・6の破片が多少接合可能となったものの復原実測できる程ではなかった。ただ、5の埴輪の湾曲ぐあいからすると径はかなり大型のものと思われる。

出土した埴輪は、14号墳あるいは15号墳周溝内側出土の埴輪と共に当古墳群中では古式の様相を呈する一群にあたる。外面調整は、いずれも縦ハケであるが、刻みは浅く粗雑な感がする。また、6の基底部の破片を除き、他はすべて外面に丹彩を施している。内面は1の口縁部を除いては、指削(撫)が主で、2・6では巻き上げ接合痕が明瞭に残っている。凸帯の形状は、断面台形で突出も強く、上稜が張り出るしっかりとしたものである。3の凸帯は、15号墳周溝内側出土の埴輪程でないが、側辺・下辺がくぼみその特徴は近似する。1の口縁部はやや内湾しながら開く特徴を有し、やはり15号墳周溝内側出土のものに類似している。透かし孔は、5の破片からすると径9cm程の大きな円形を呈する様である。

また、1～6の破片とも焼成に伴う色調の変化で一種の特徴を有している。これらの破片は、個体により若干の違いはありながらも、内外表面が1～3mm程の厚さで黄褐色の明るい色を呈し、断面内部が全くの黒色を呈する。これは焼成の過程で、十分な酸素が供給されなかったために、胎土中の有機質が完全燃焼しきれず炭化し、鉄分についても酸化しきれなかったためと思われる。また、胎土中に多くの有機質を含んでいた可能性による要因も十分あろう。

((1)・(2)・(3)・(5)・(6)・(8)・(9)・(12)・(14) 萩原恭一、(4)・(7)・(10)・(11)・(13)・(15) 金子 章)

註1 川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』2-4 大阪文化財センター 1977年

同 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 日本考古学会 1978年

註2 註1の川西 1978年

註3 轟俊二郎『埴輪研究』第1冊 1973年

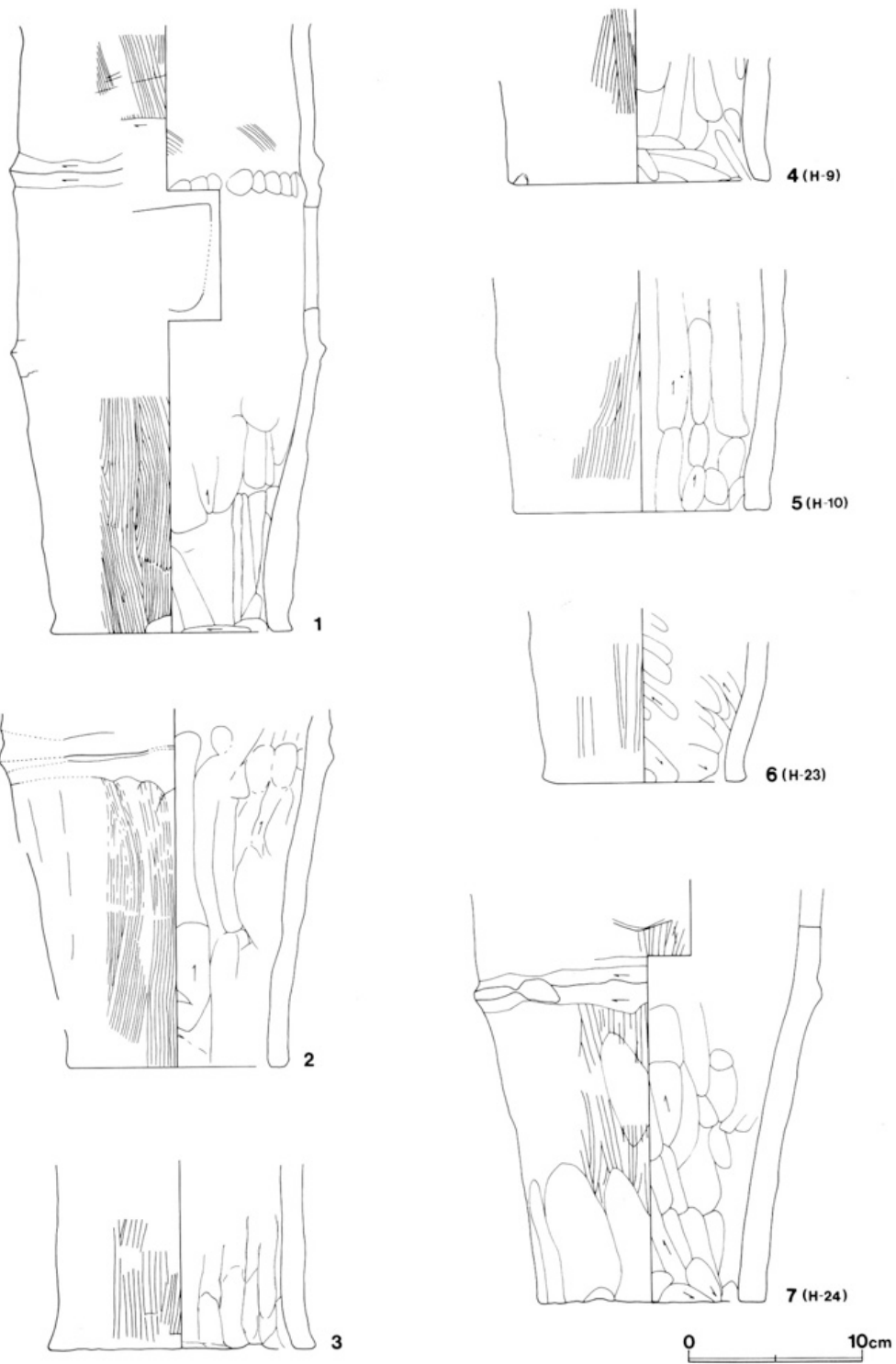
註4 註1の川西 1978年

註5 当方の不手際で、一部実測図中に表現されていない埴輪もある。

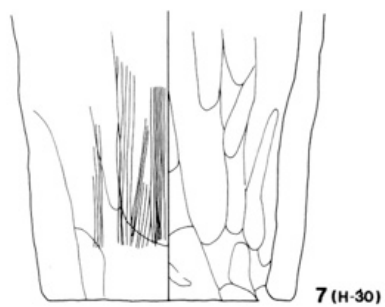
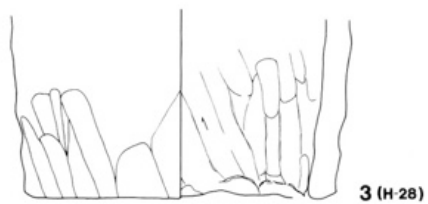
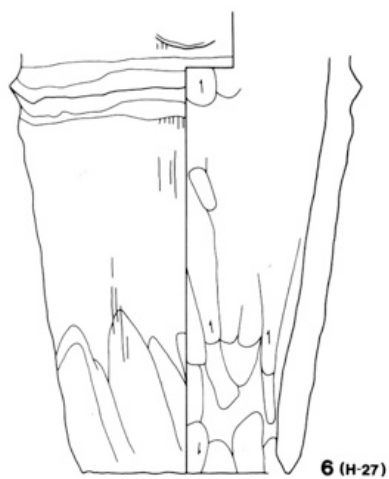
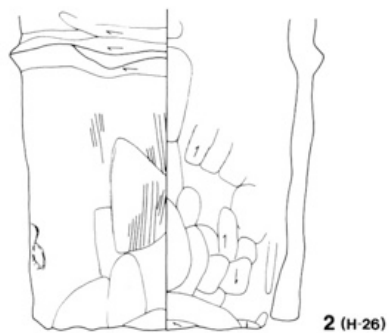
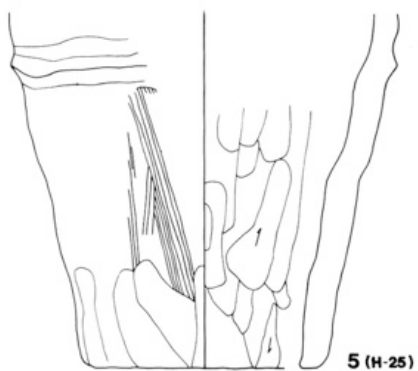
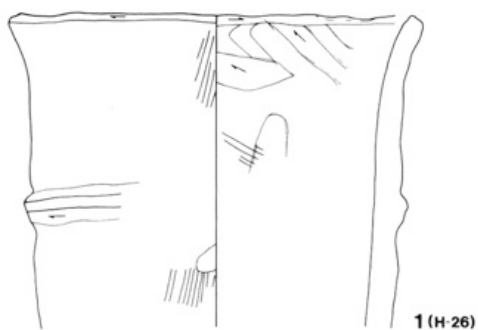
註6 栗原文蔵「行田市須賀 大稲荷古墳群について」『埼玉考古』12号 埼玉考古学会 1974年

註7 註3に同じ

註8 岩崎卓也・森田久男「小山市域の円筒埴輪」『小山市史研究』1 小山市史編さん室 1978年



第99図 長沖1号墳出土埴輪実測図(1:4)



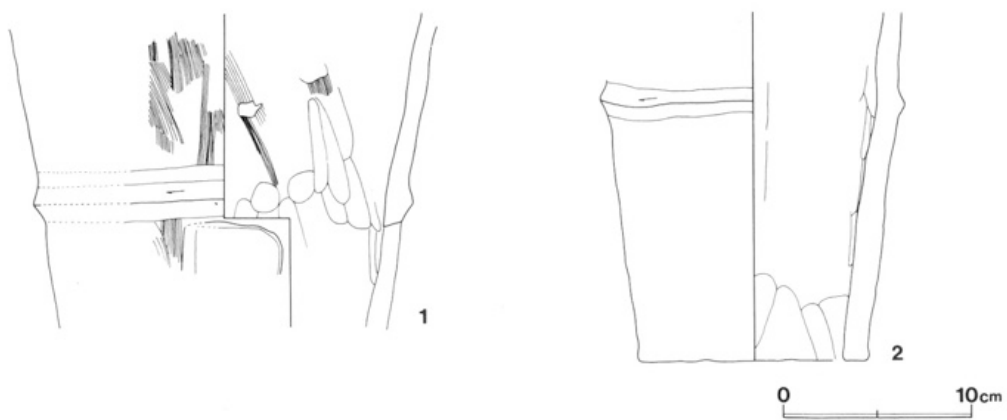
第100図 長沖1号墳出土埴輪実測図(1:4)



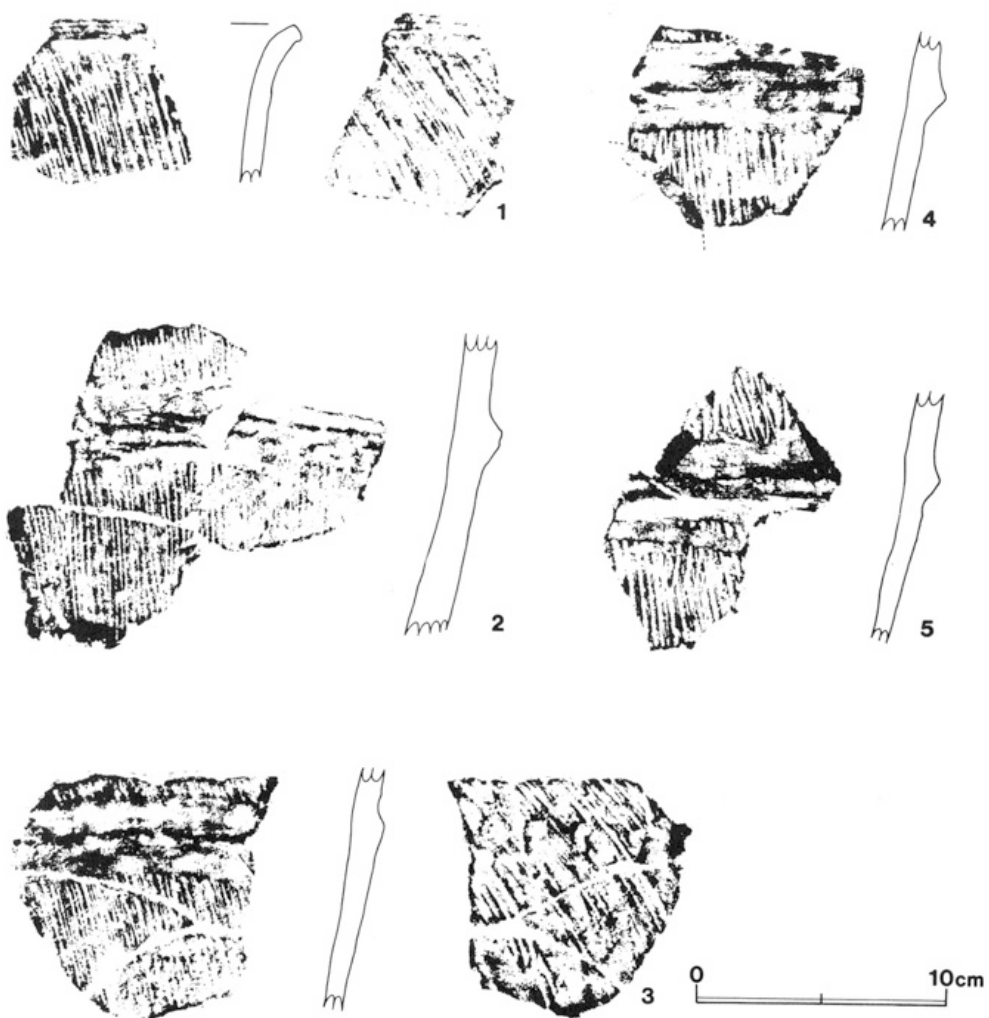
第101图 長沖1号填出土埴輪拓影图 (1 : 3)



第102図 長沖1号墳埴輪拓影図(1:3)



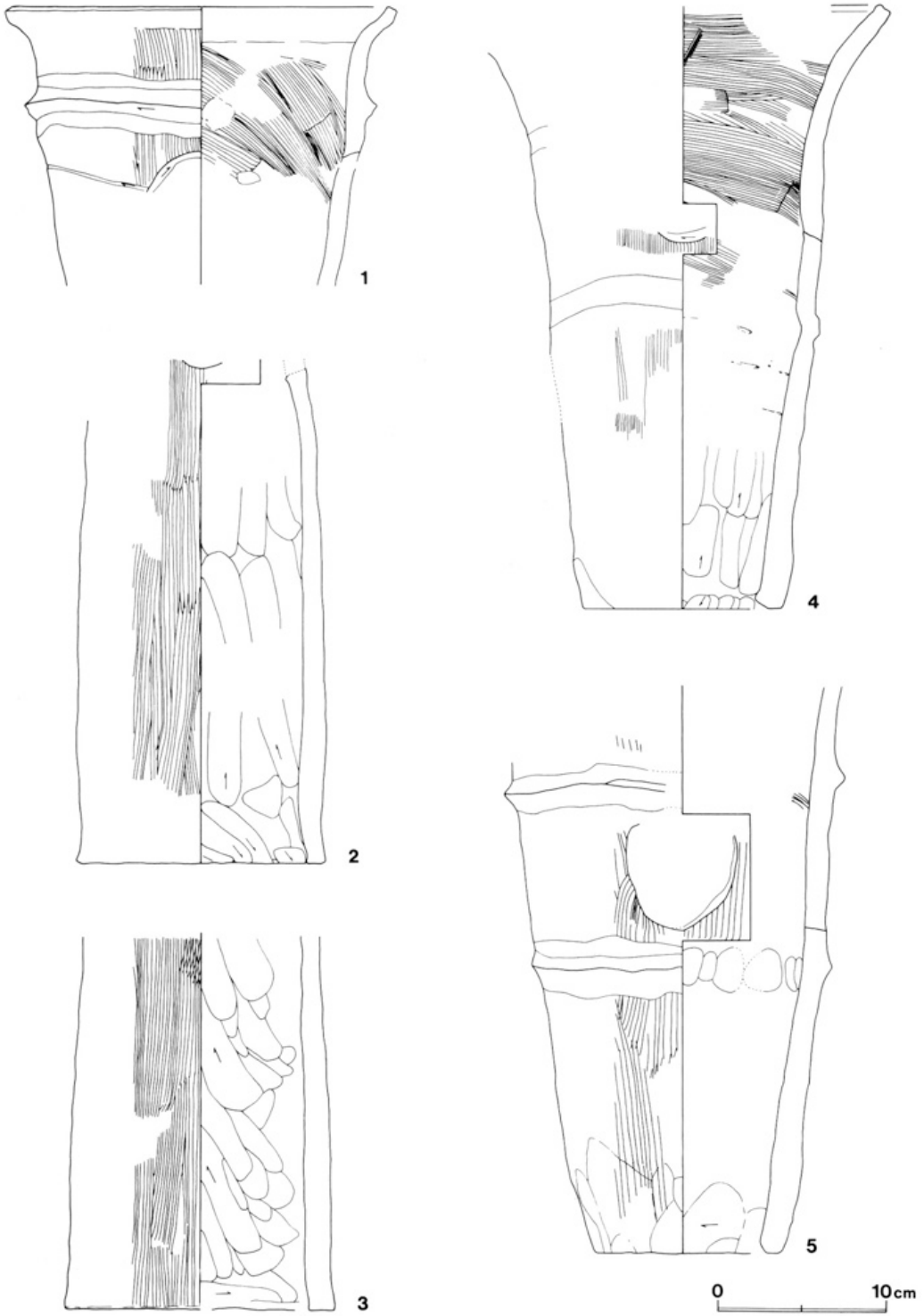
第103図 長沖2号墳出土埴輪実測図(1:4)



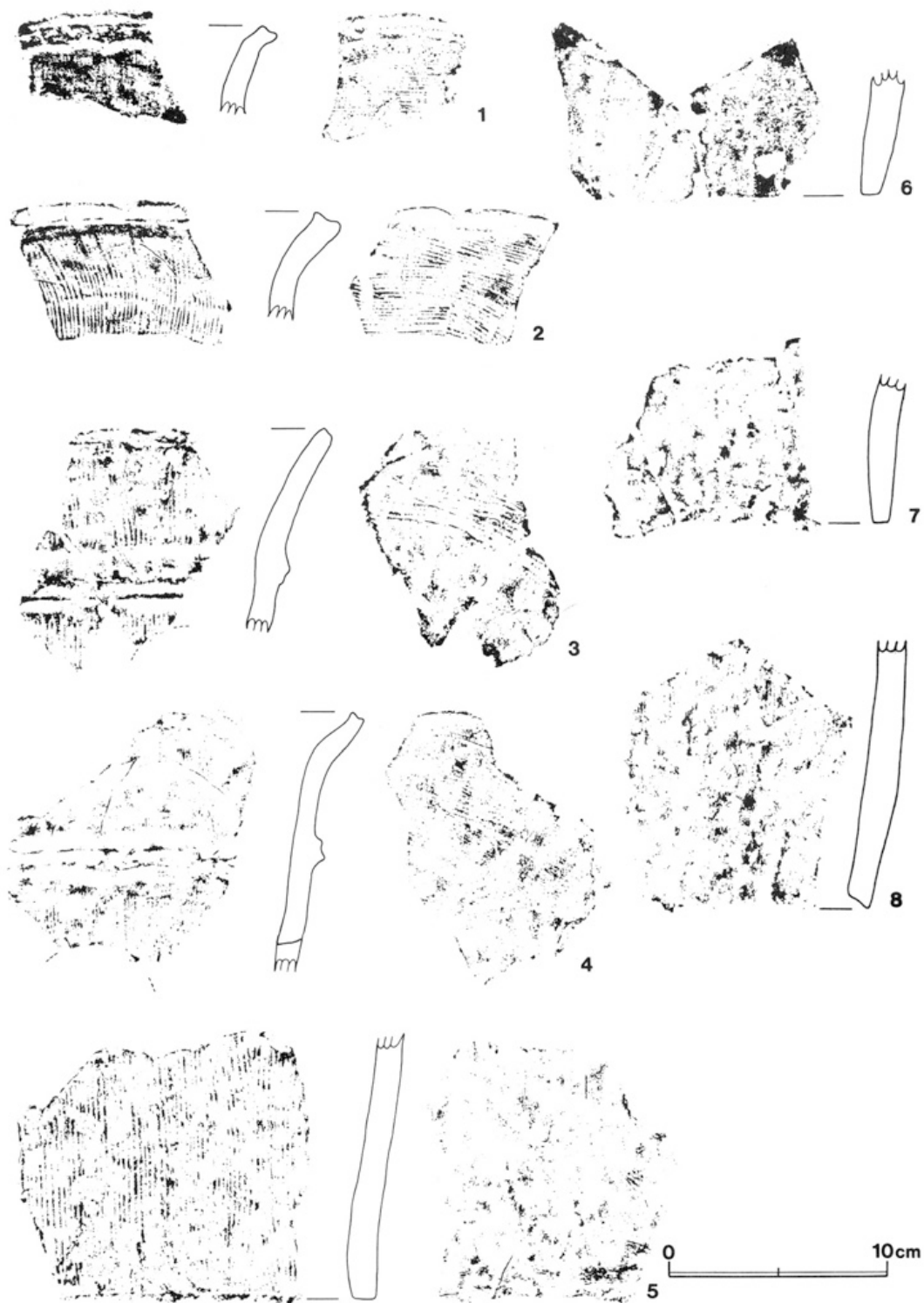
第104図 長沖2号墳出土埴輪拓影図(1:3)



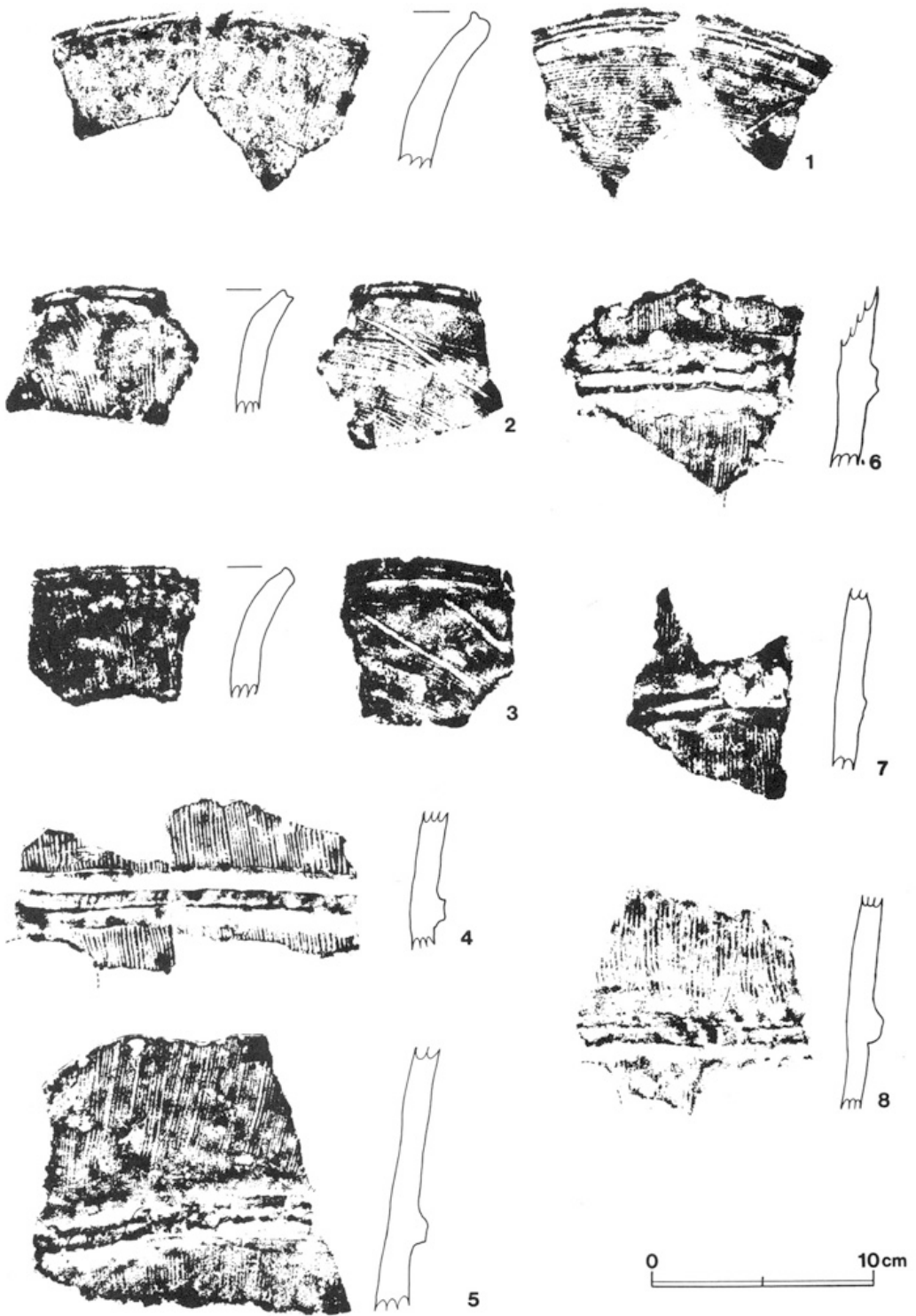
第105图 長沖2号墳出土埴輪拓影图(1:3)



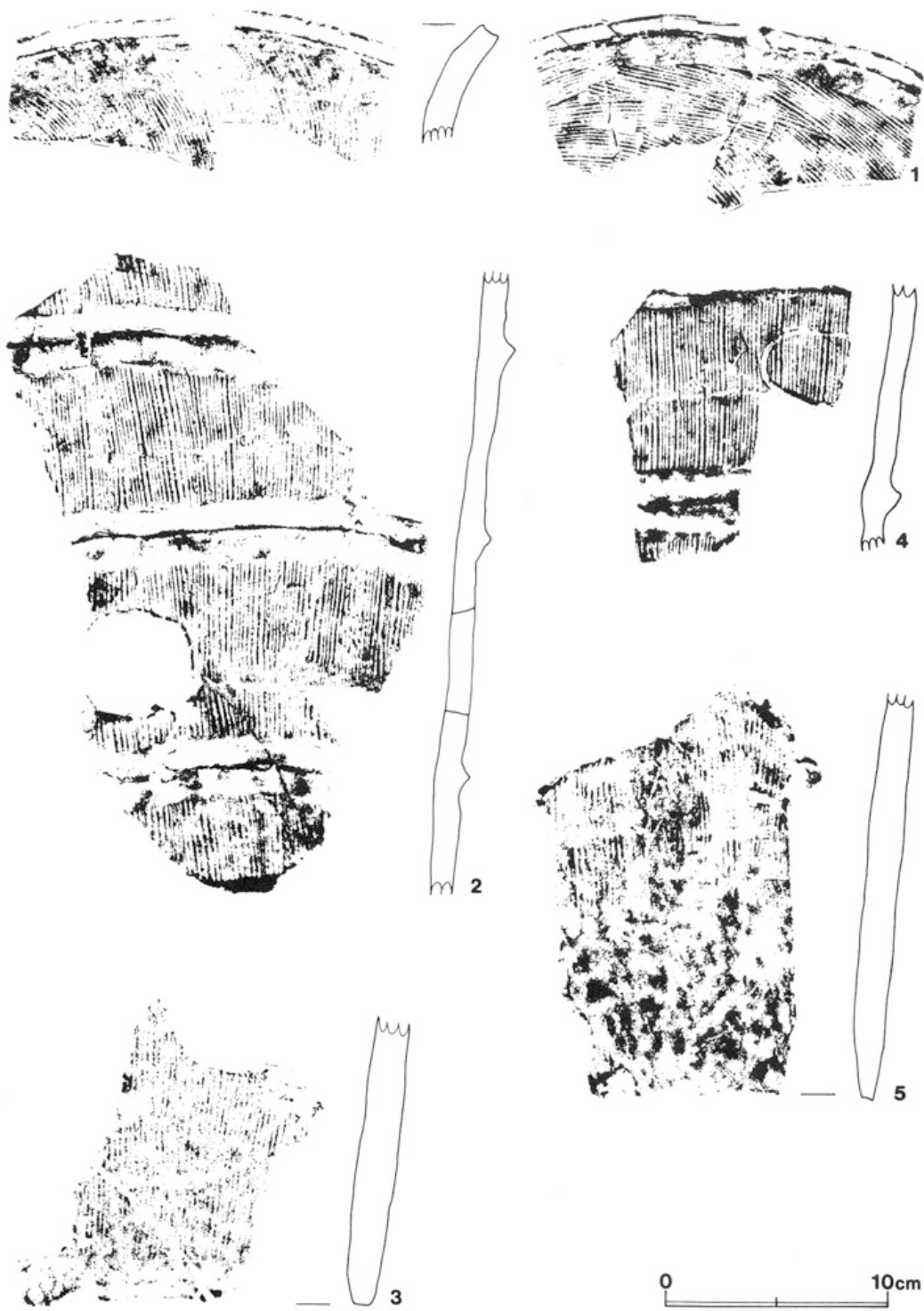
第106図 長沖8号墳出土埴輪実測図(1:4)



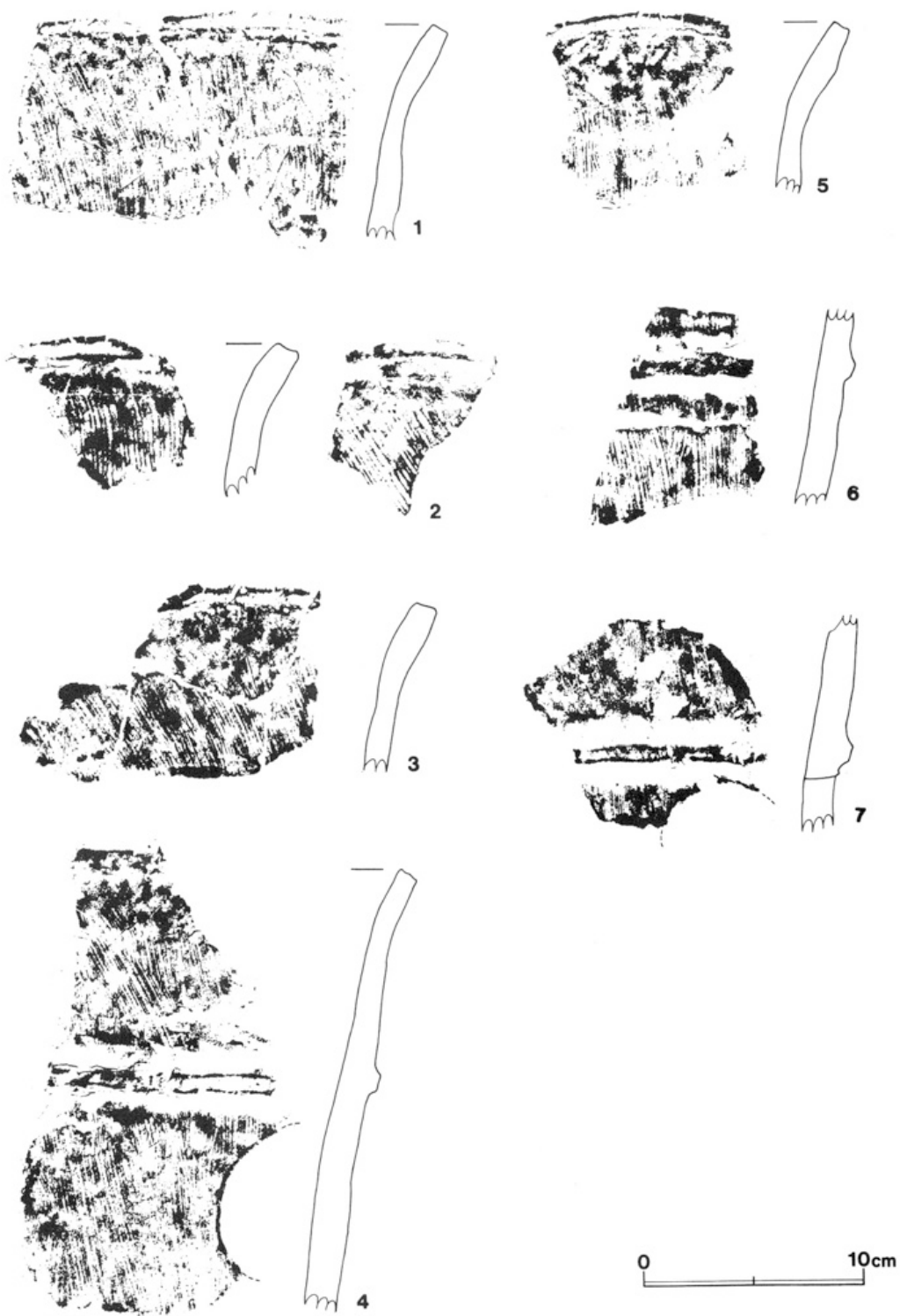
第107图 長沖8号墳出土埴輪拓影图 (1:3)



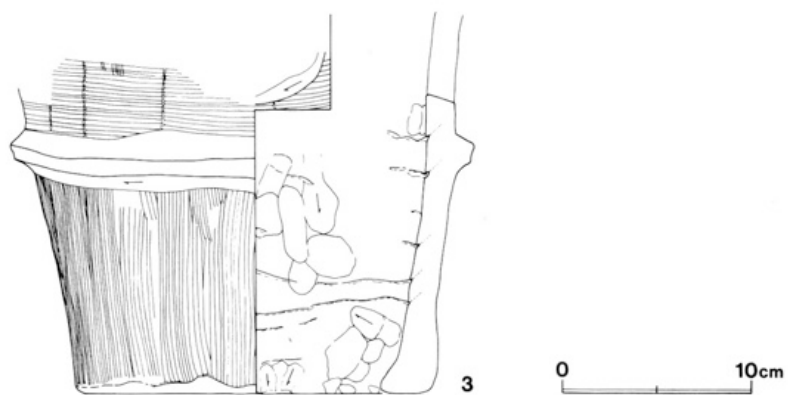
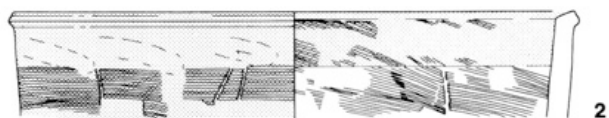
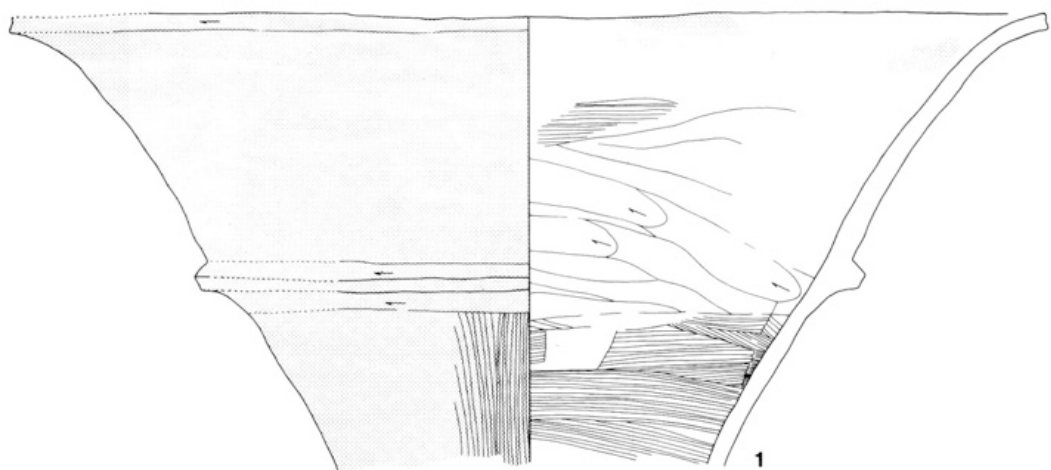
第108図 長沖8号墳出土埴輪拓影図(1:3)



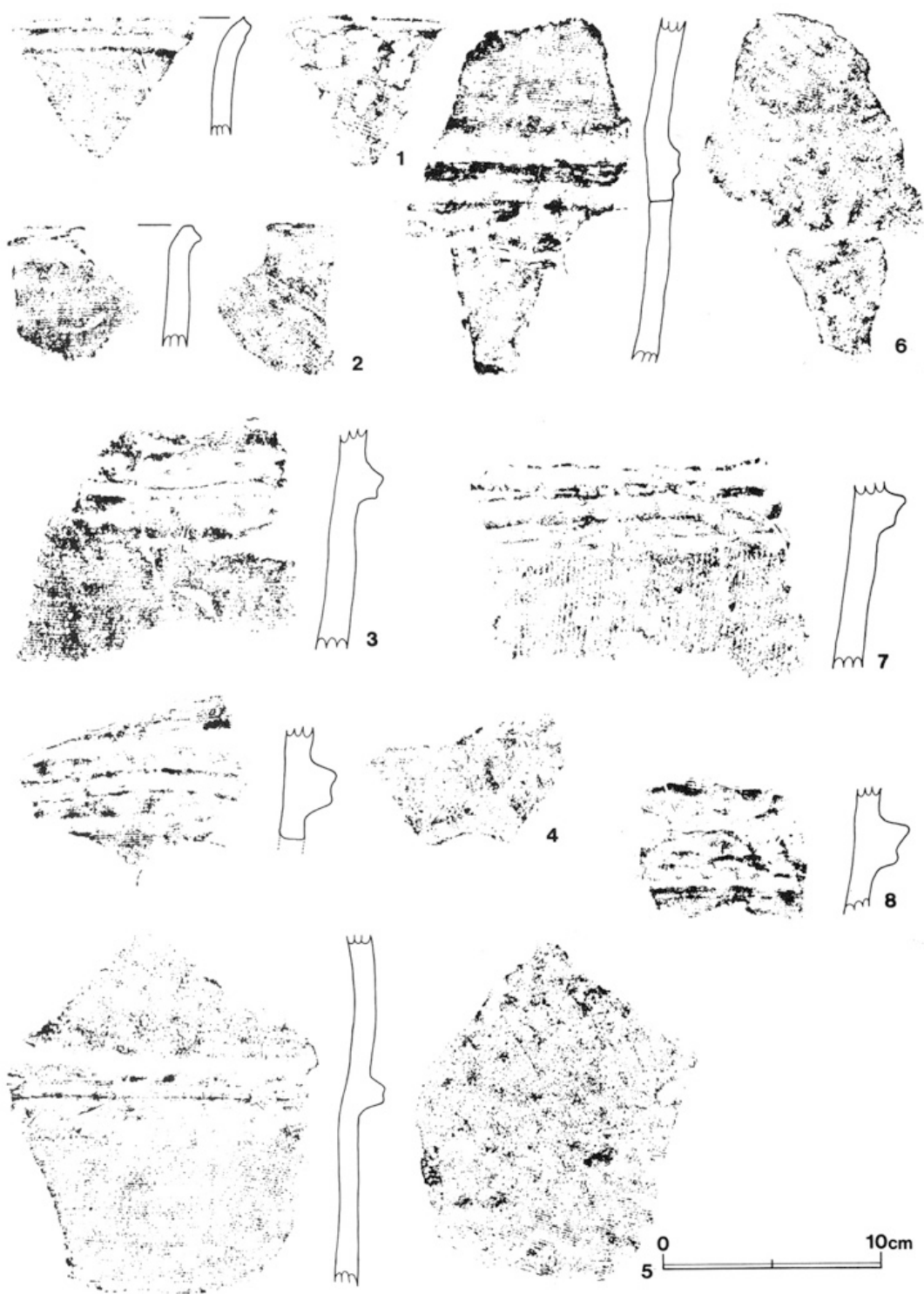
第109図 長沖8号墳出土埴輪拓影図(1:3)



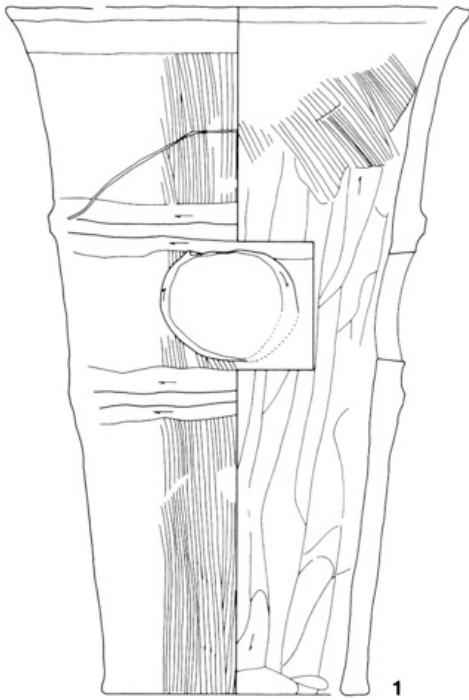
第110図 長沖12号墳出土土輪拓影図（1：3）



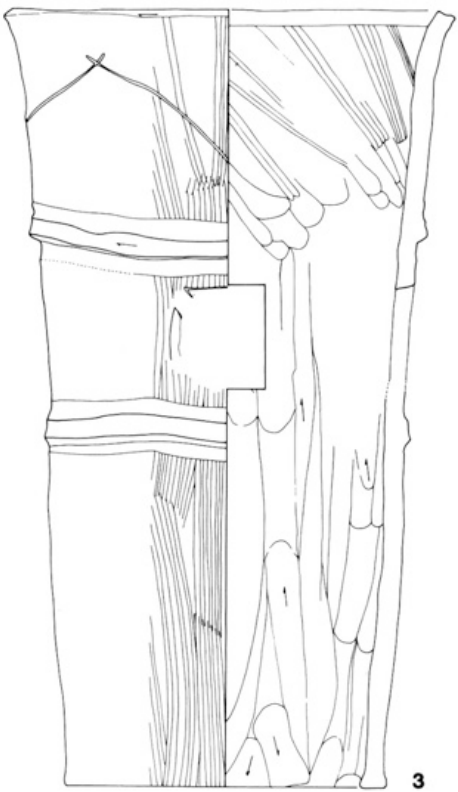
第111図 長沖14号墳出土土輪実測図(1:4)



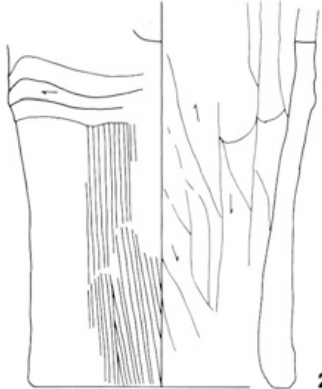
第112図 長沖14号墳出土埴輪拓影図 (1 : 3)



1



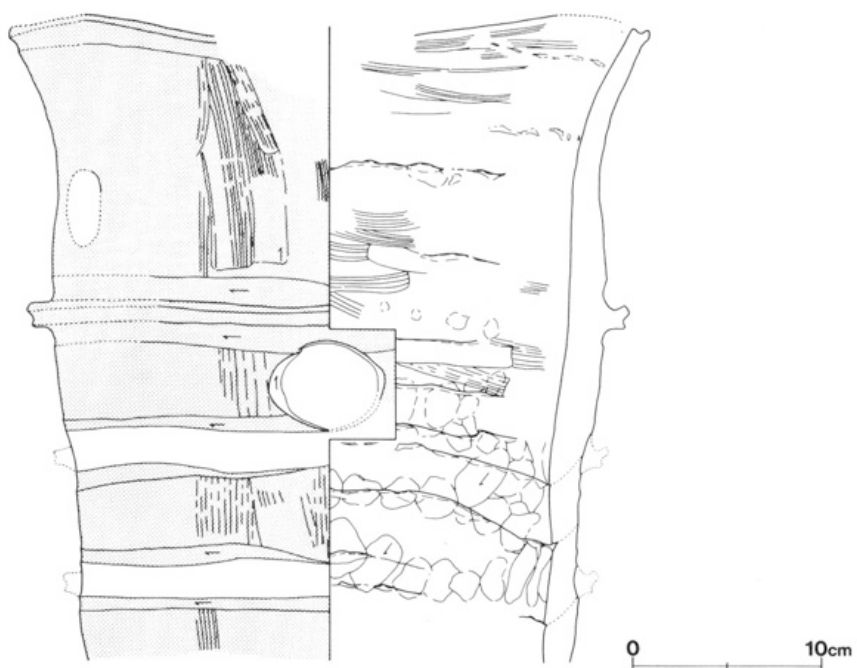
3



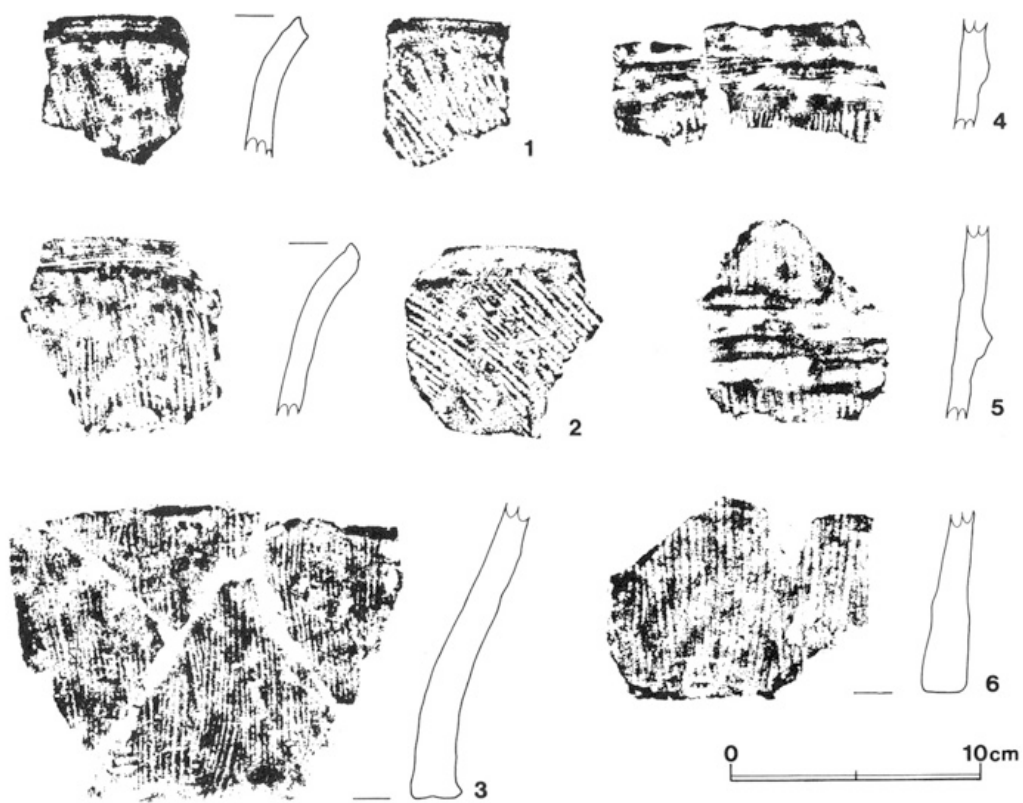
2



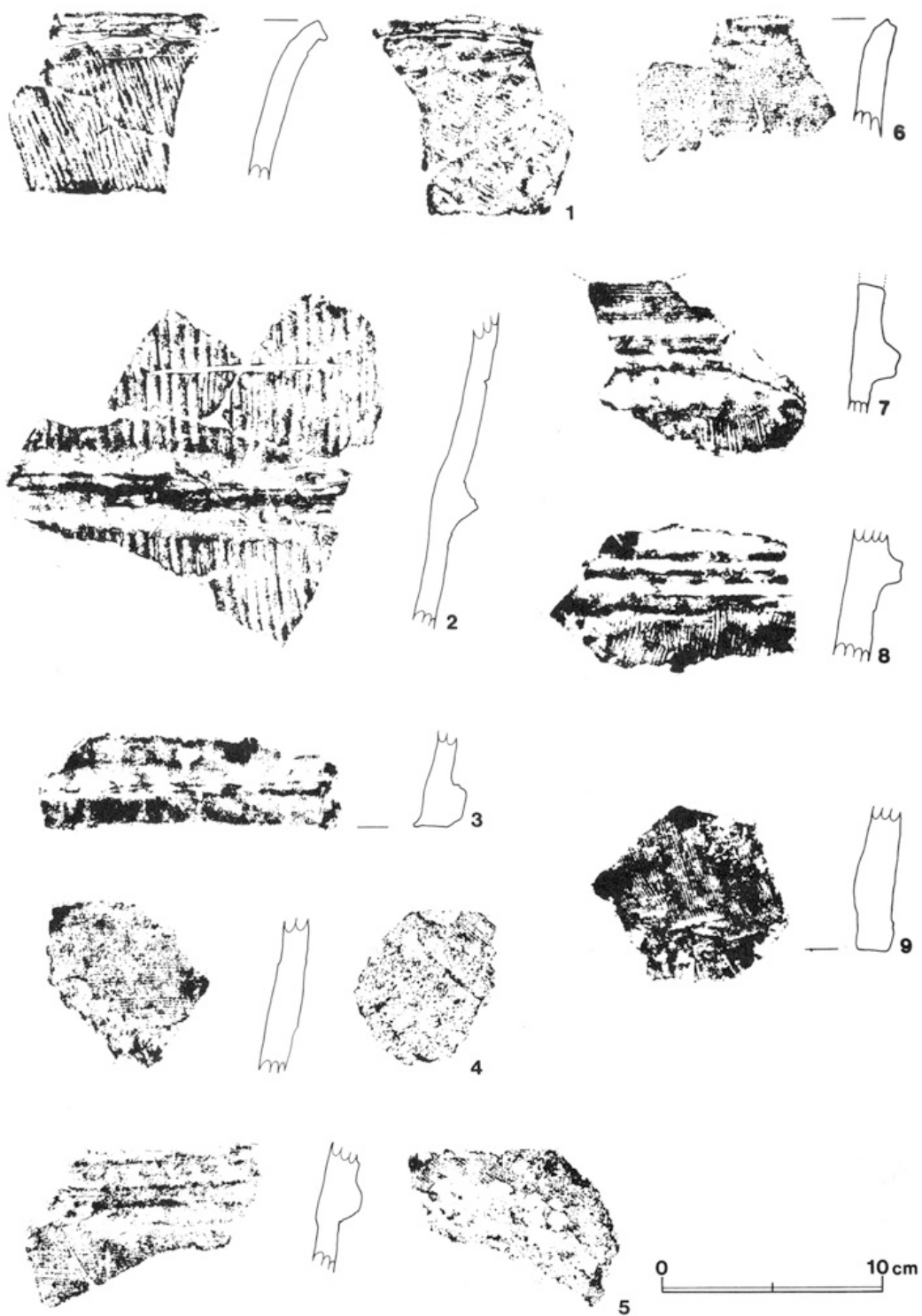
第113図 長沖15号墳出土埴輪実測図(1:4)



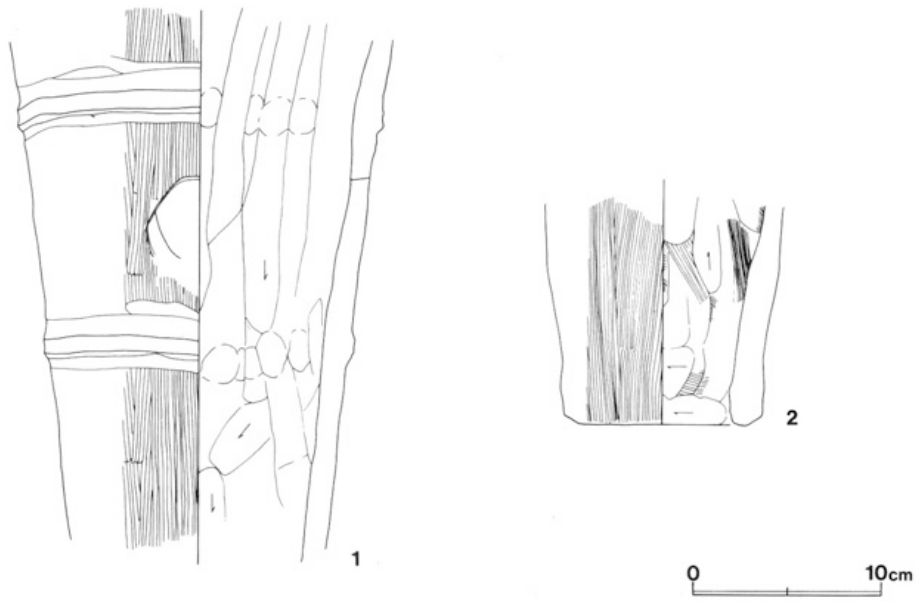
第114図 長沖15号墳周溝内側出土埴輪実測図（1：4）



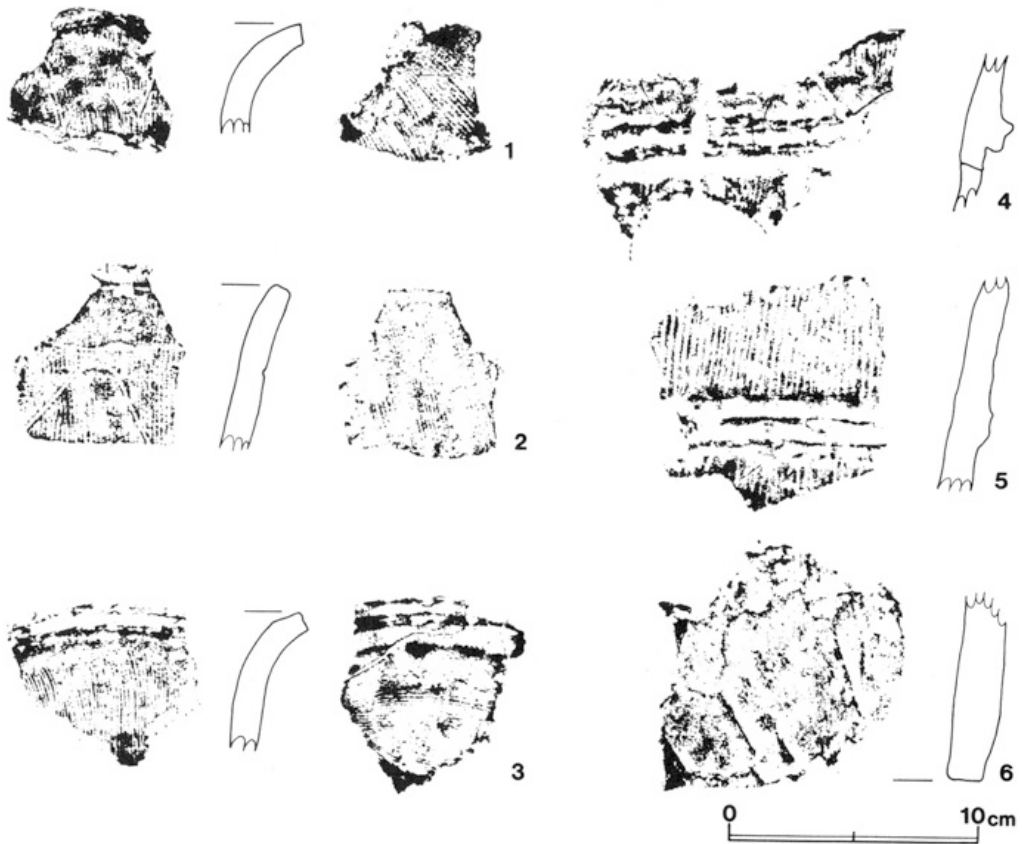
第115図 長沖15号墳出土埴輪拓影図（1：3）



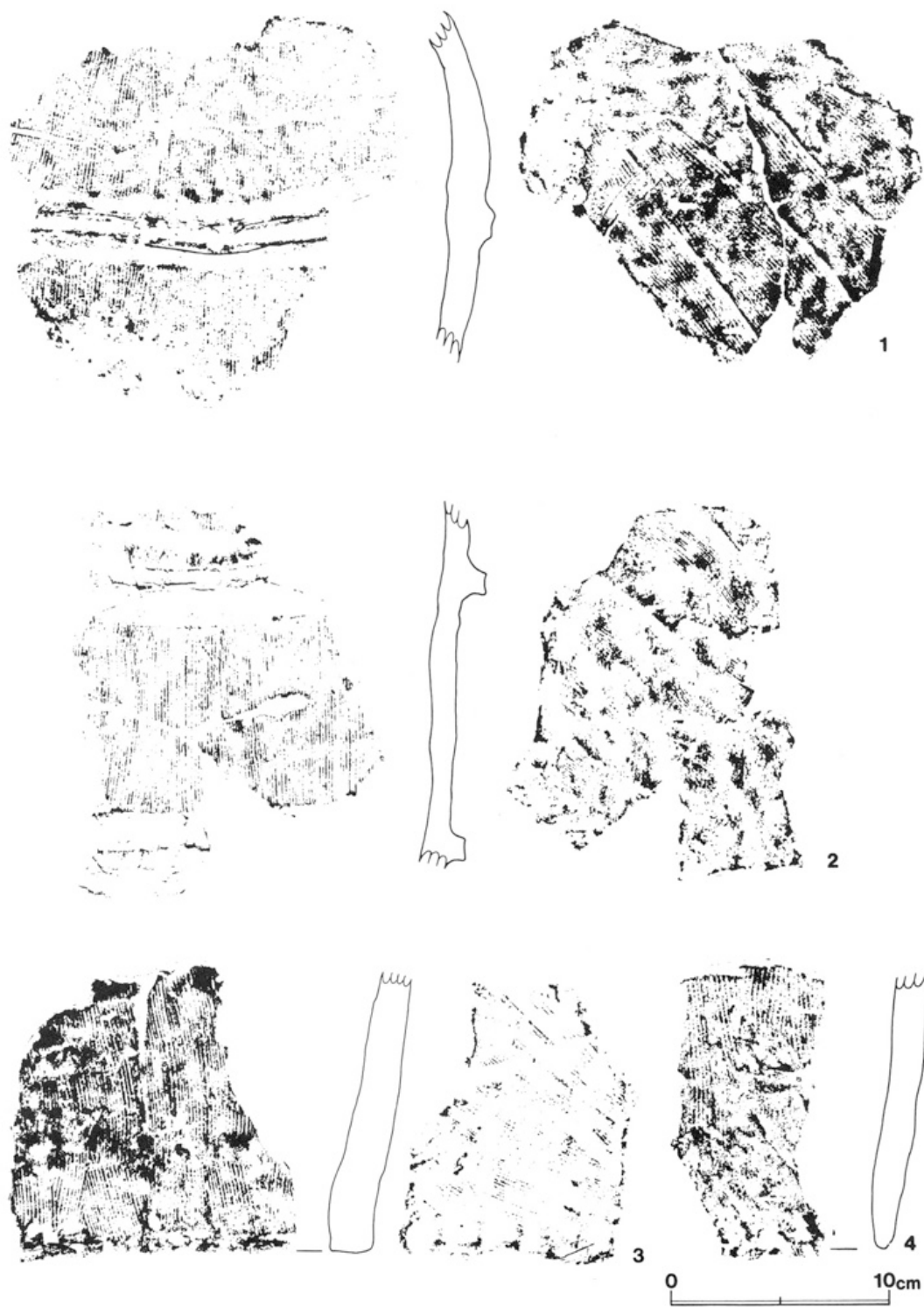
第116図 長沖繩文A地区(14・15・16号墳)表採埴輪拓影図(1:3)



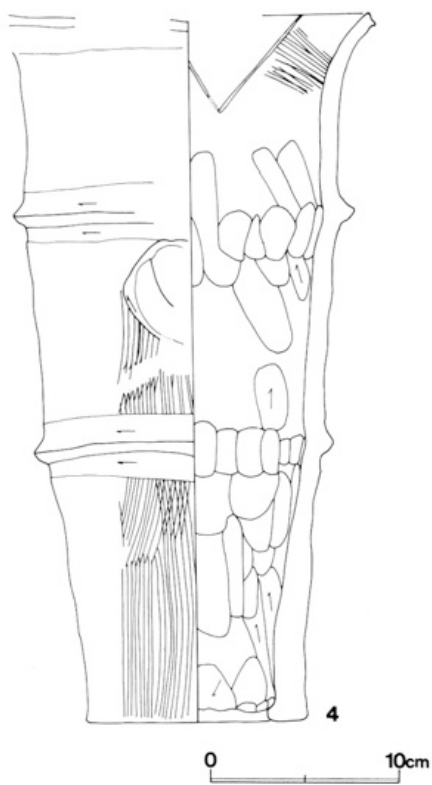
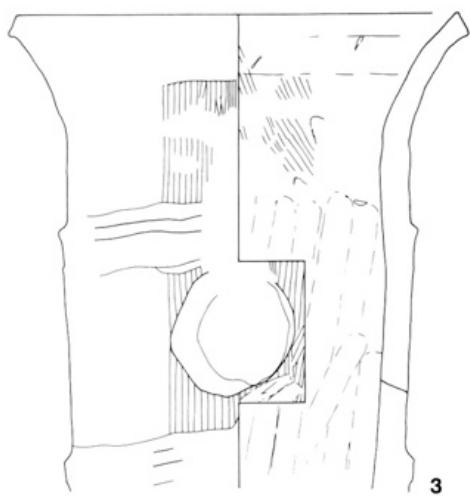
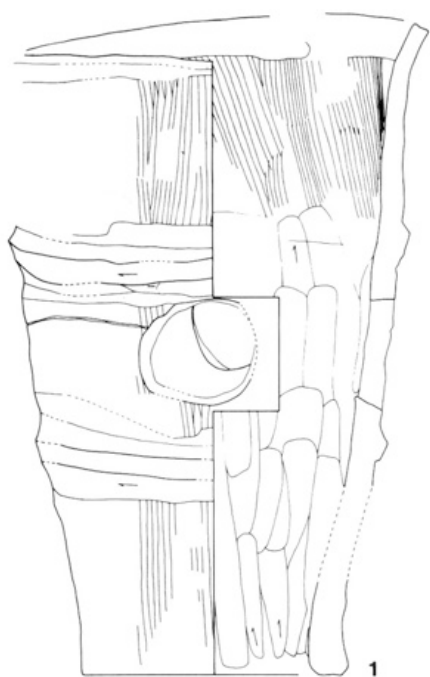
第117图 長沖21号墳出土埴輪実測図 (1 : 4)



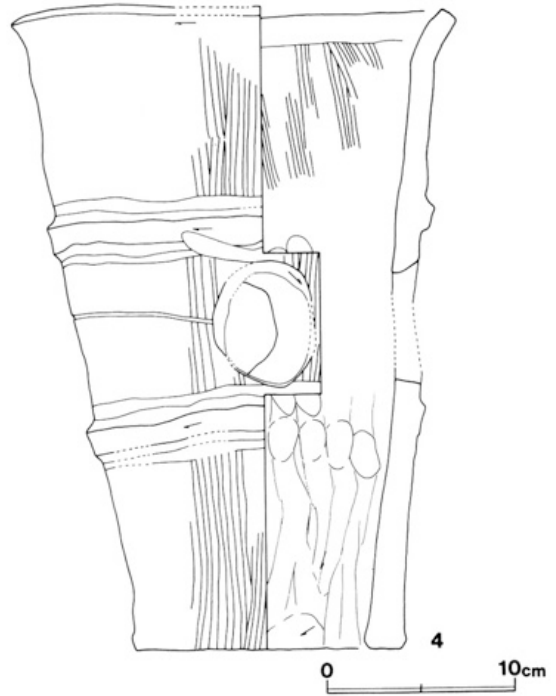
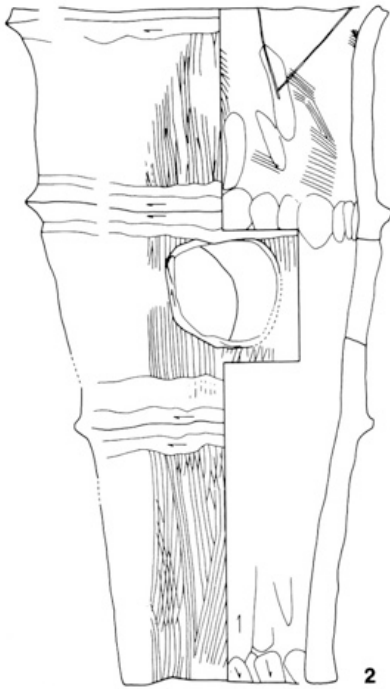
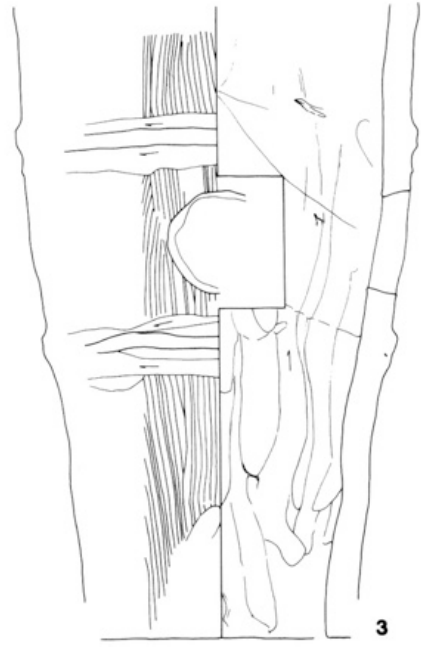
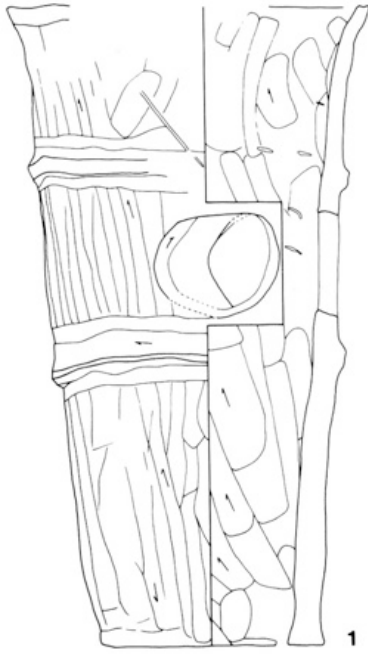
第118图 長沖21号墳出土埴輪拓影図 (1 : 3)



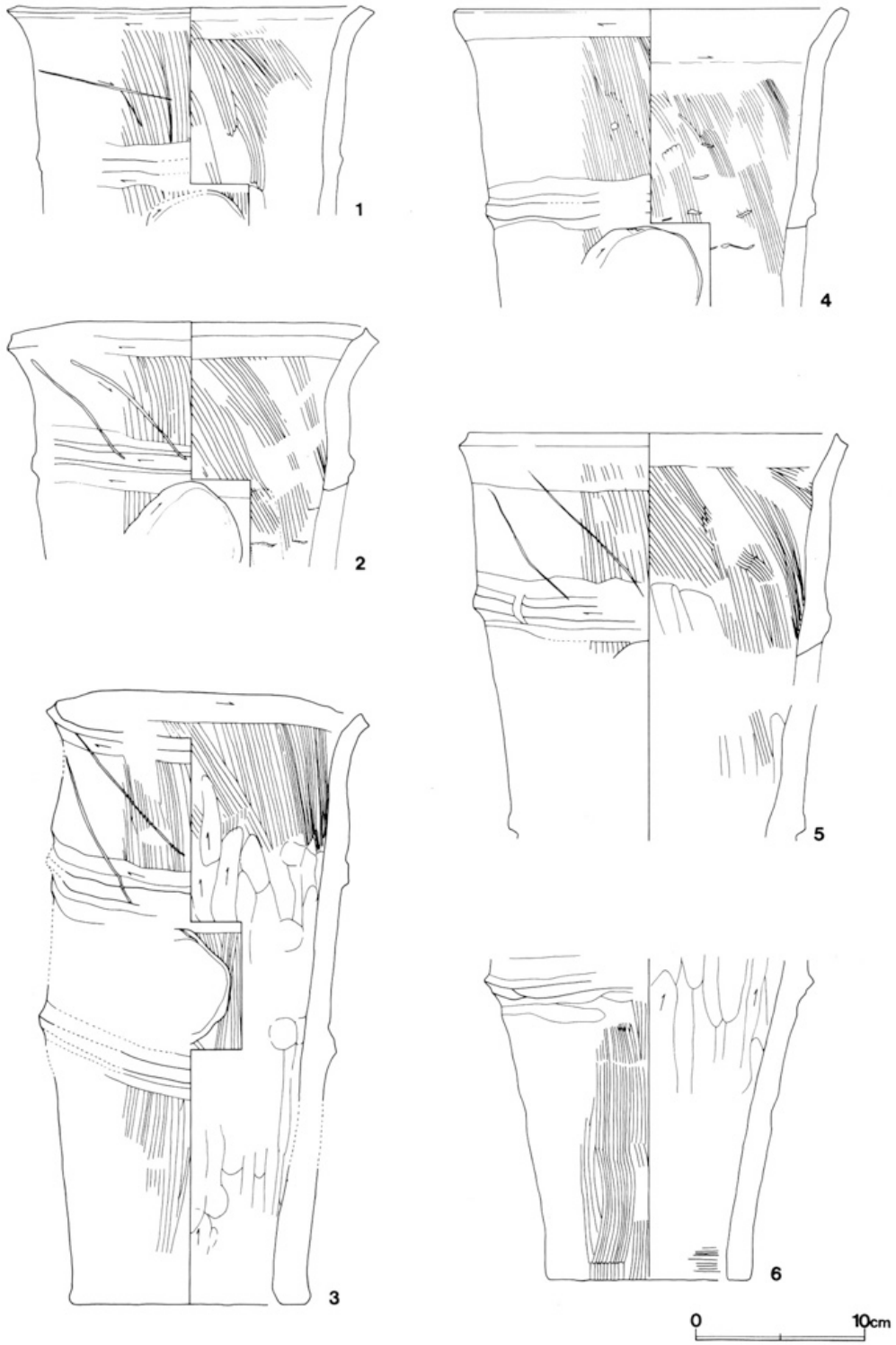
第119图 長沖21号墳出土埴輪拓影図（1：3）



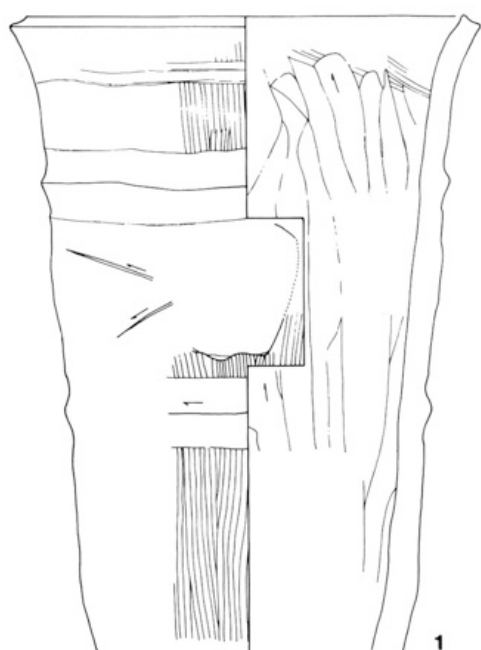
第120図 長沖22号墳出土埴輪実測図（1：4）



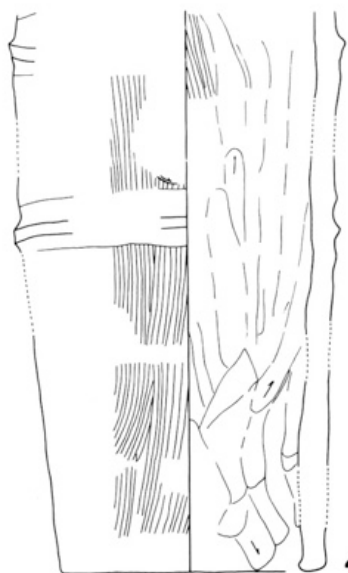
第121図 長沖22号墳出土埴輪実測図（1：4）



第122図 長沖22号墳出土埴輪実測図（1：4）



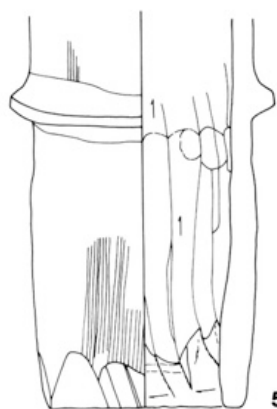
1



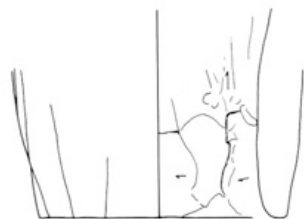
4



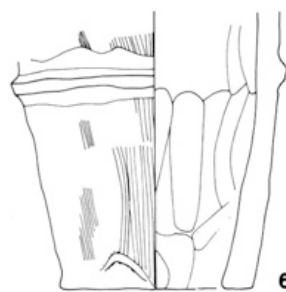
2



5



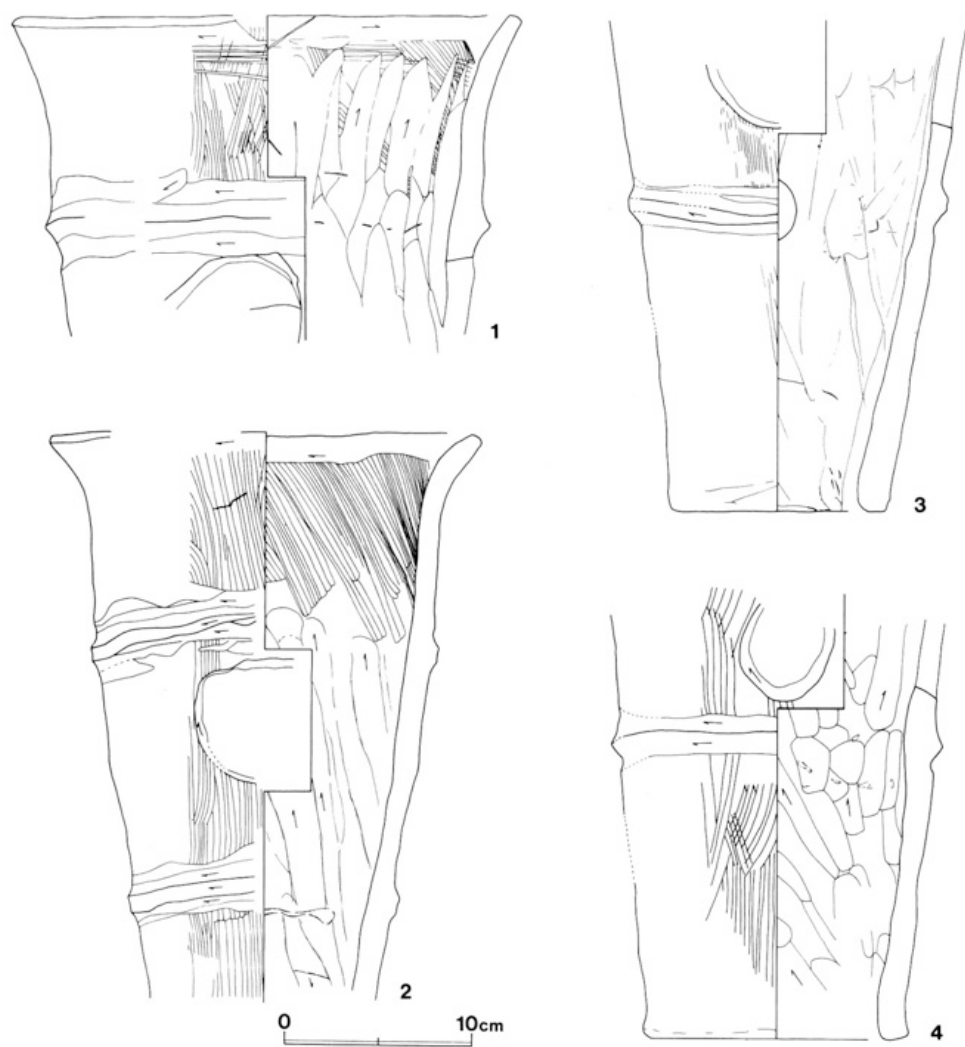
3



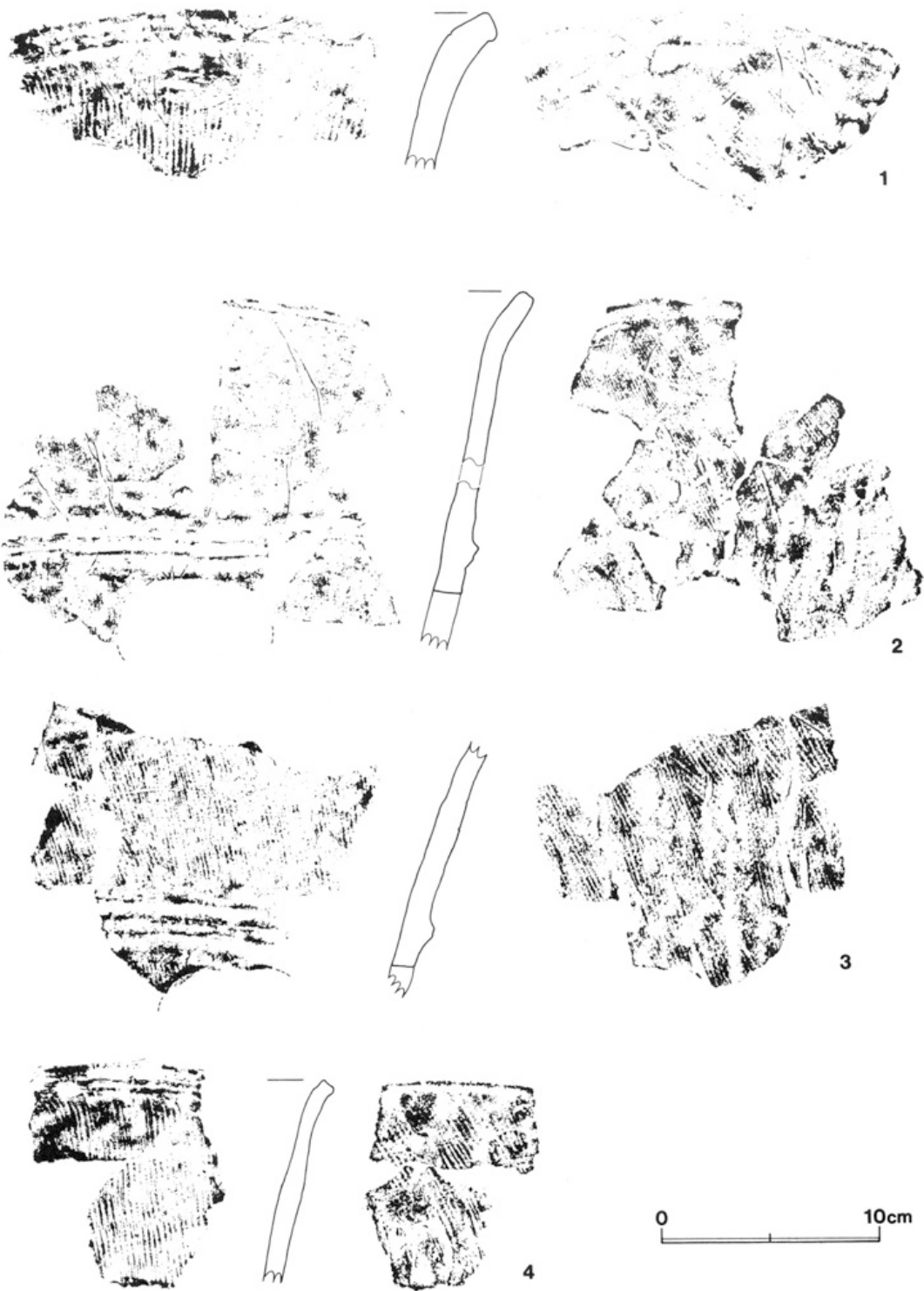
6

0 10cm

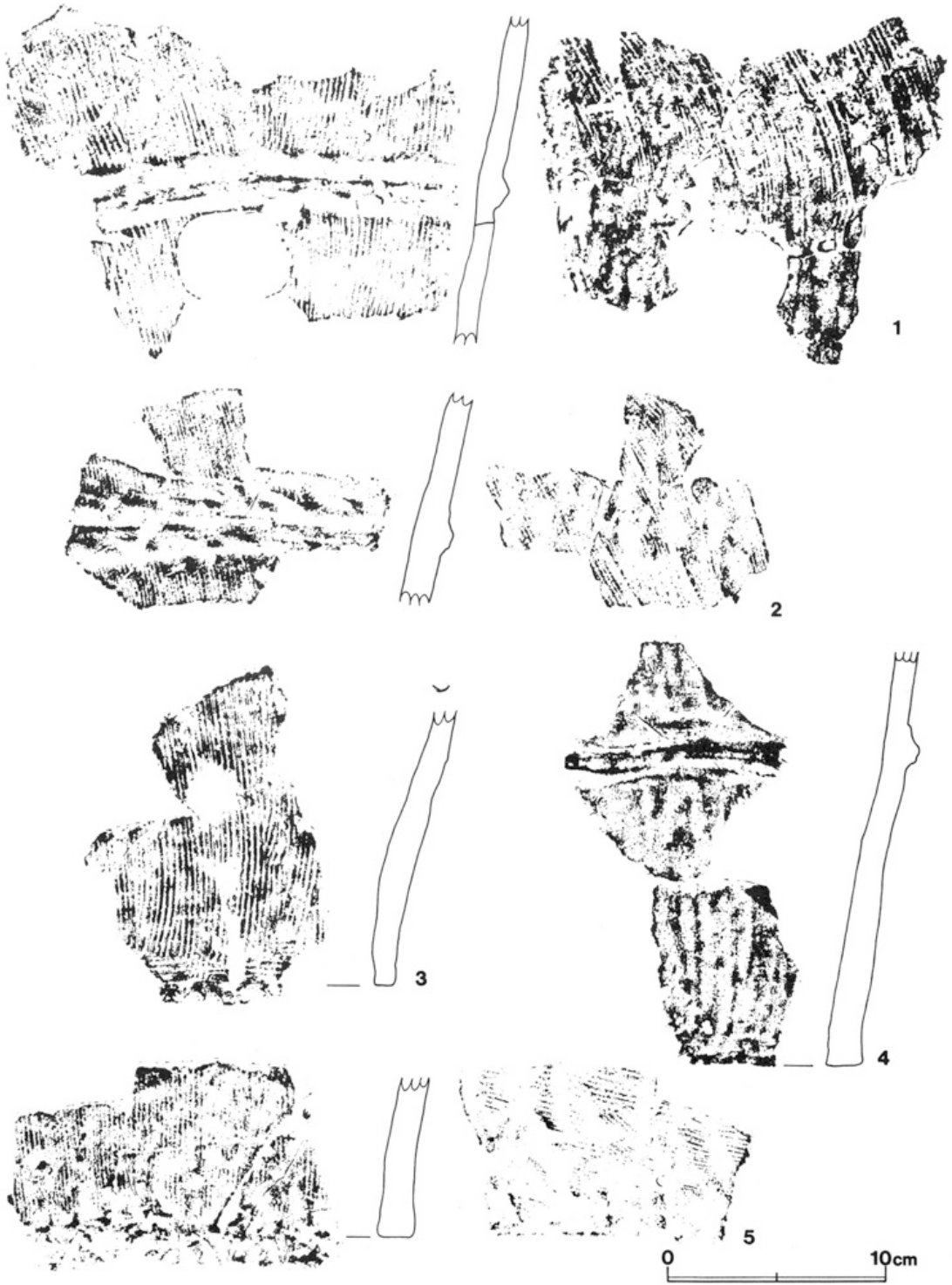
第123図 長沖22号墳出土埴輪実測図(1:4)



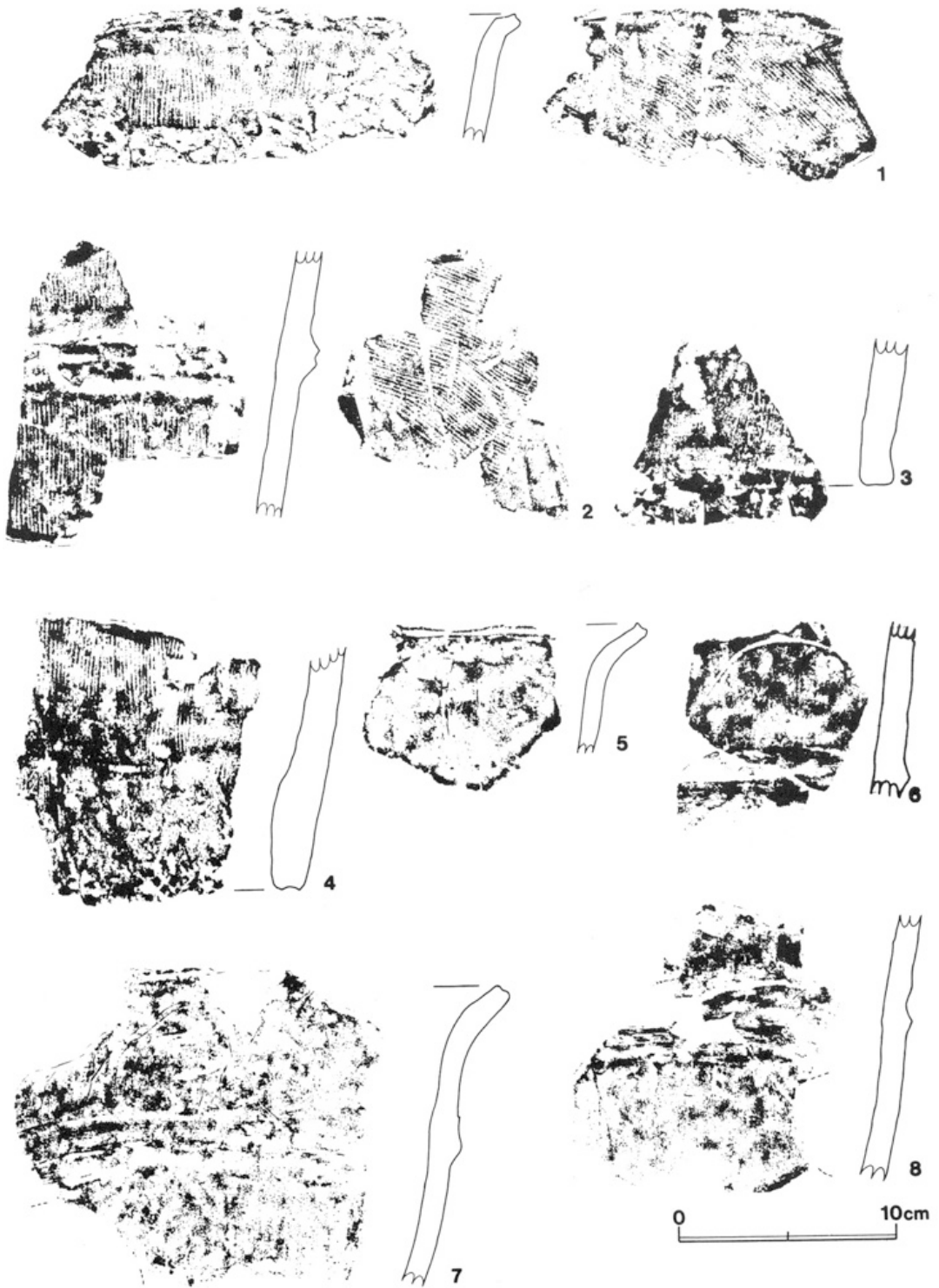
第124図 長沖22号墳出土埴輪実測図（1：4）



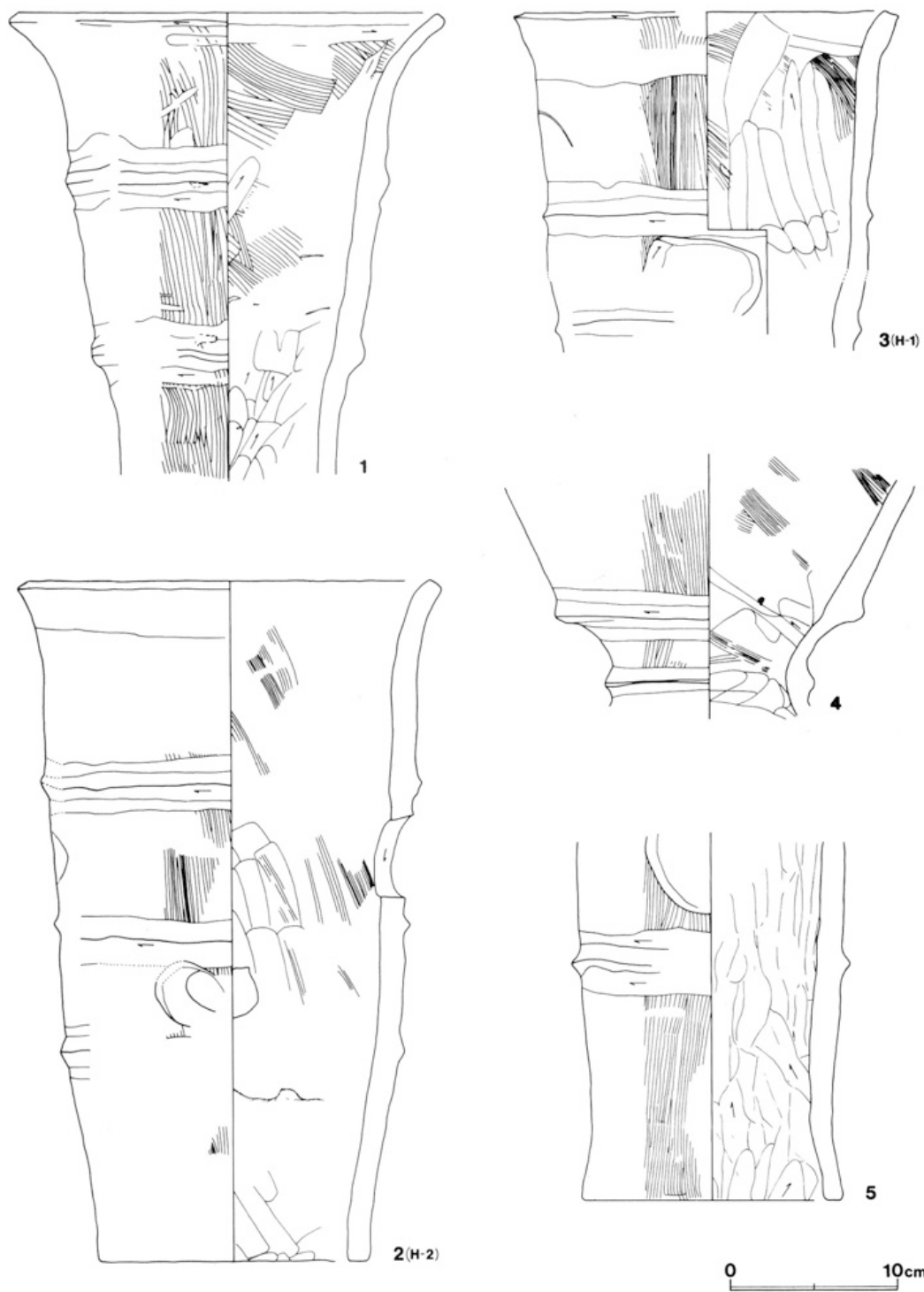
第125図 長沖22号墳出土埴輪拓影図(1:3)



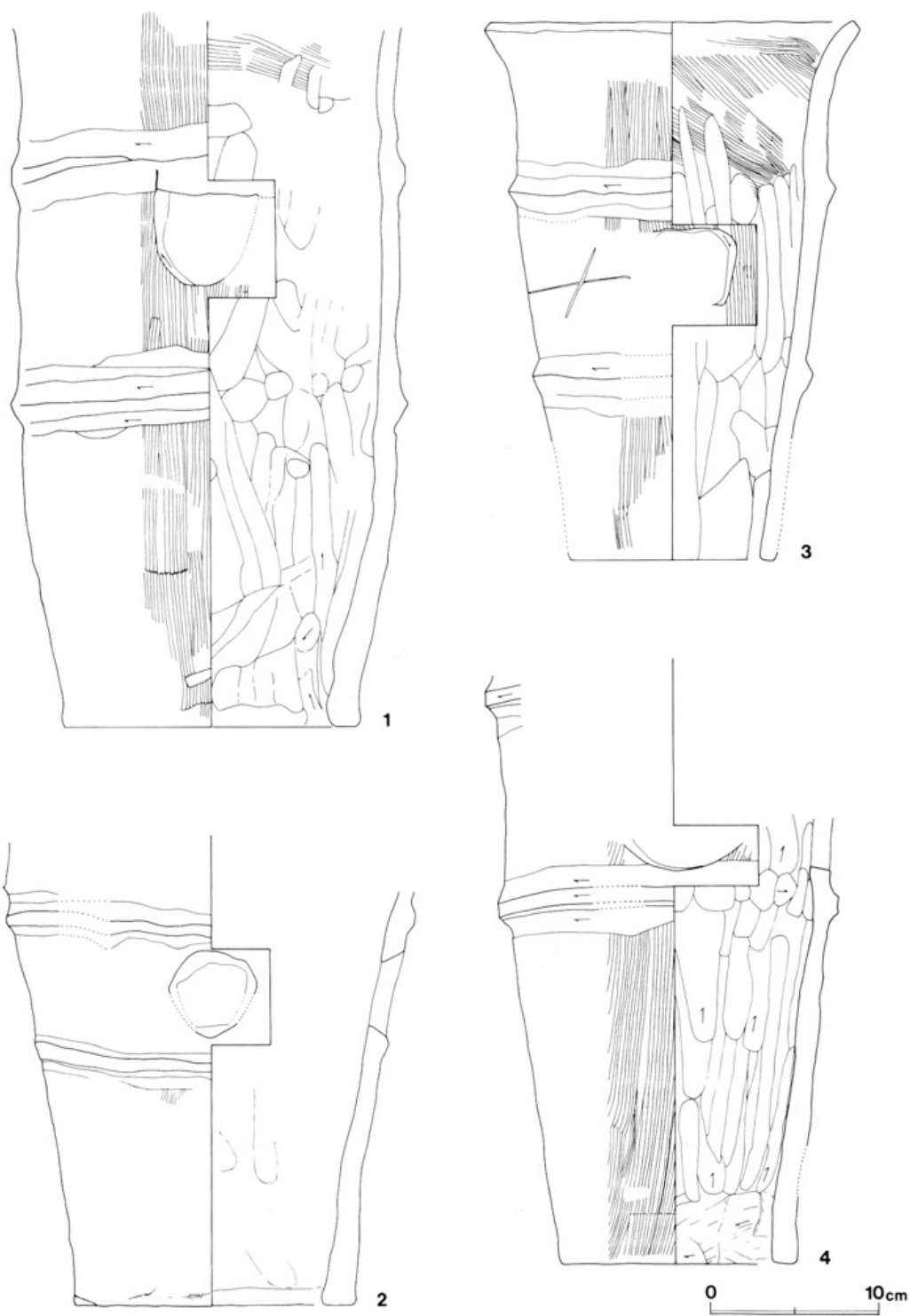
第126图 長沖22号墳出土埴輪拓影図（1：3）



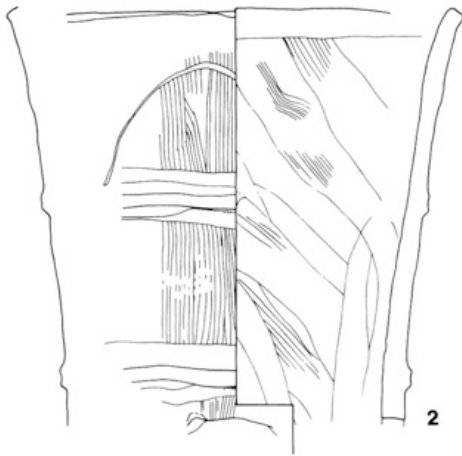
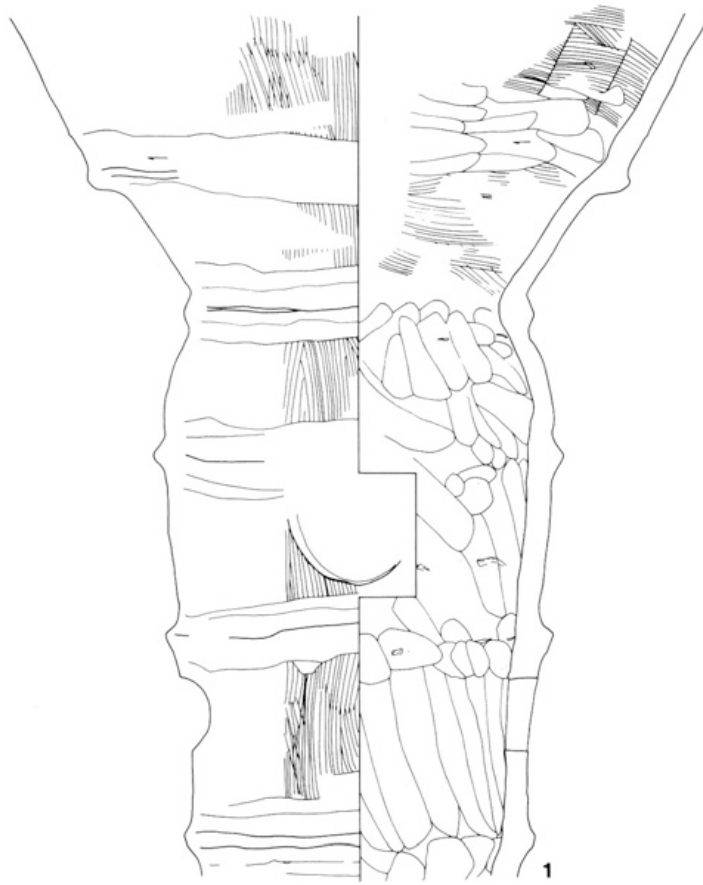
第127图 長沖23・24号墳出土埴輪拓影图 $\frac{1}{5} \sim 4 \dots 23$ 号埴 $\frac{1}{5} \sim 8 \dots 24$ 号埴 (1 : 3)



第128図 長沖25号墳出土埴輪夾測図（1：4）

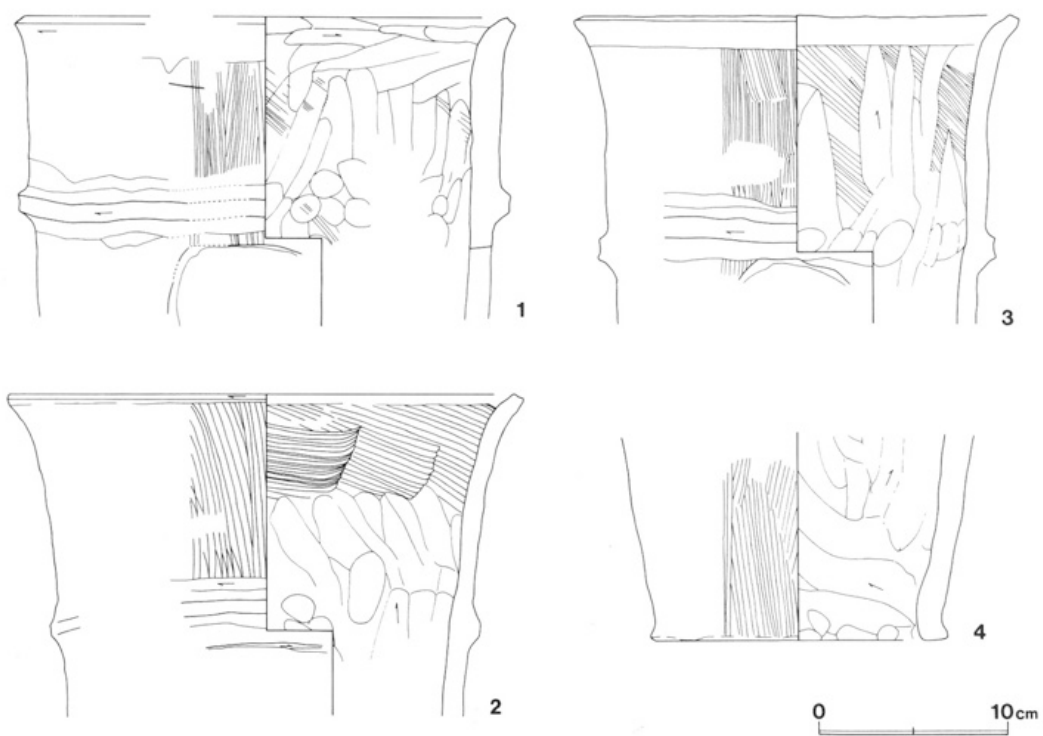


第129図 長沖25号墳出土土輪実測図(1:4)

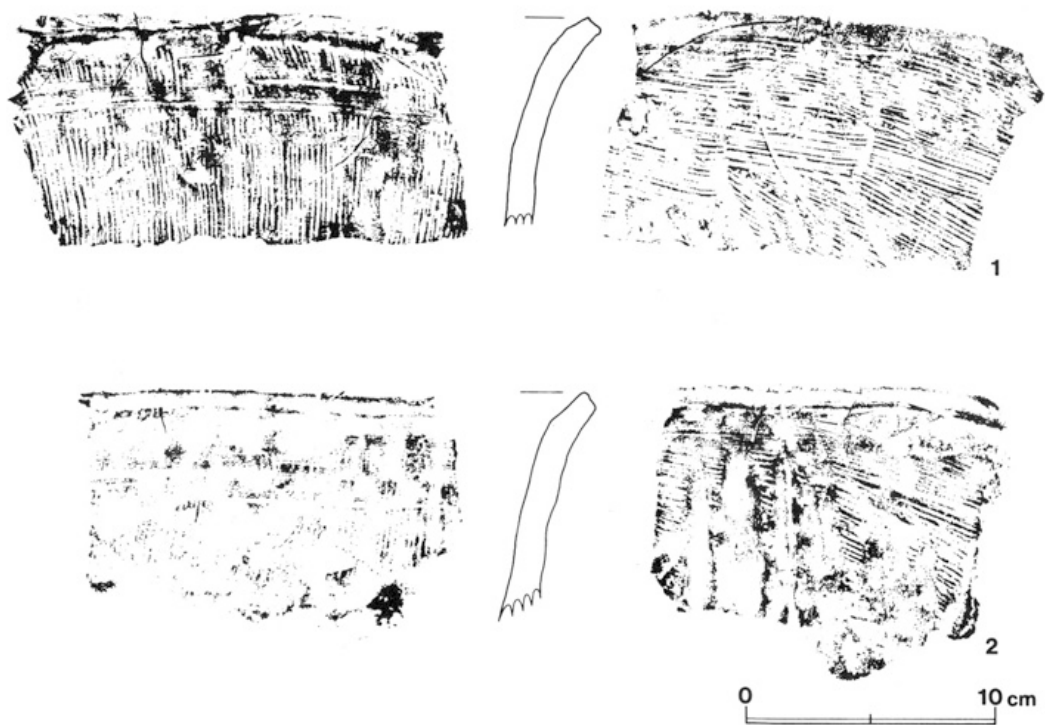


0 10cm

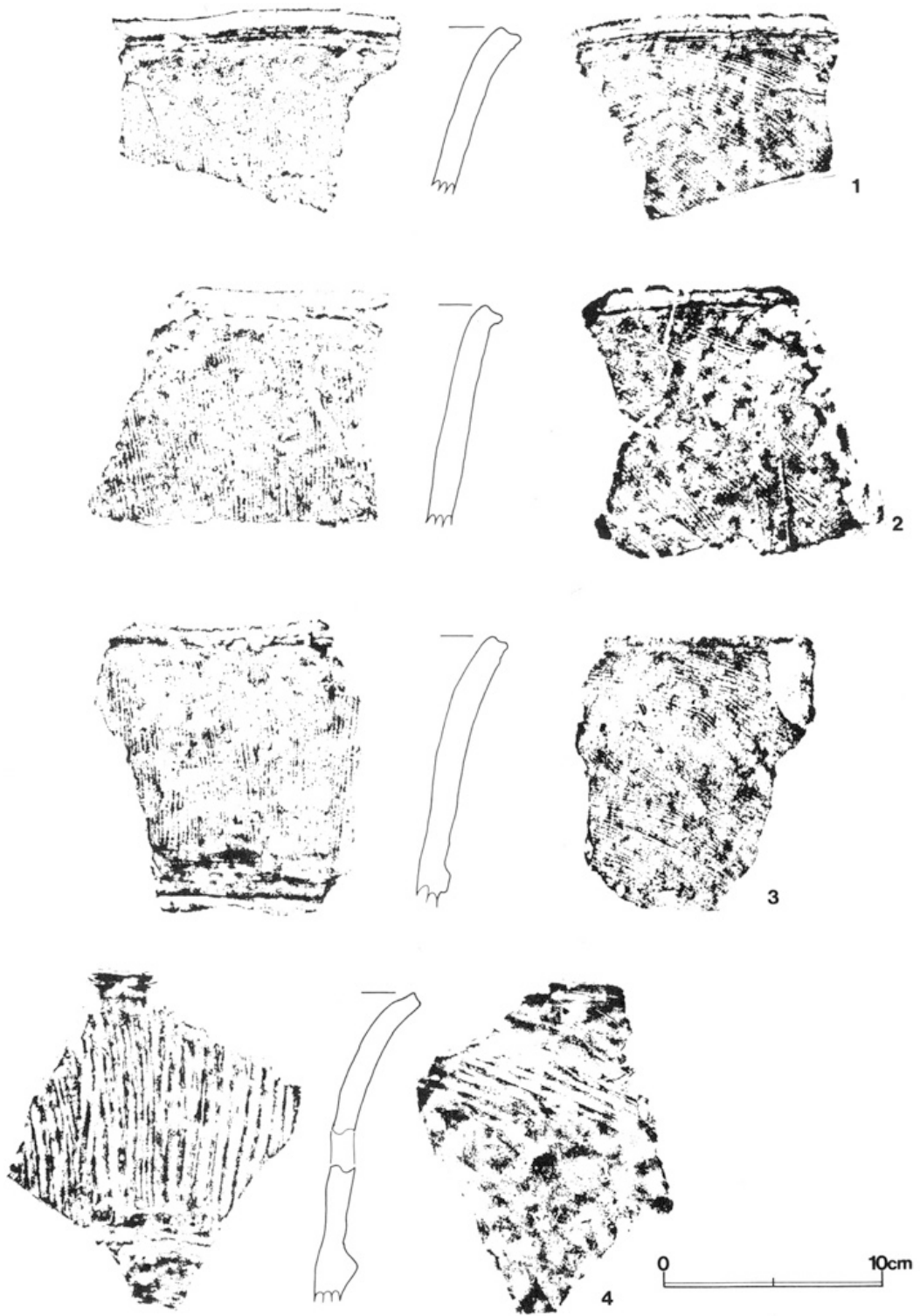
第130図 長沖25号墳出土埴輪実測図(1:4)



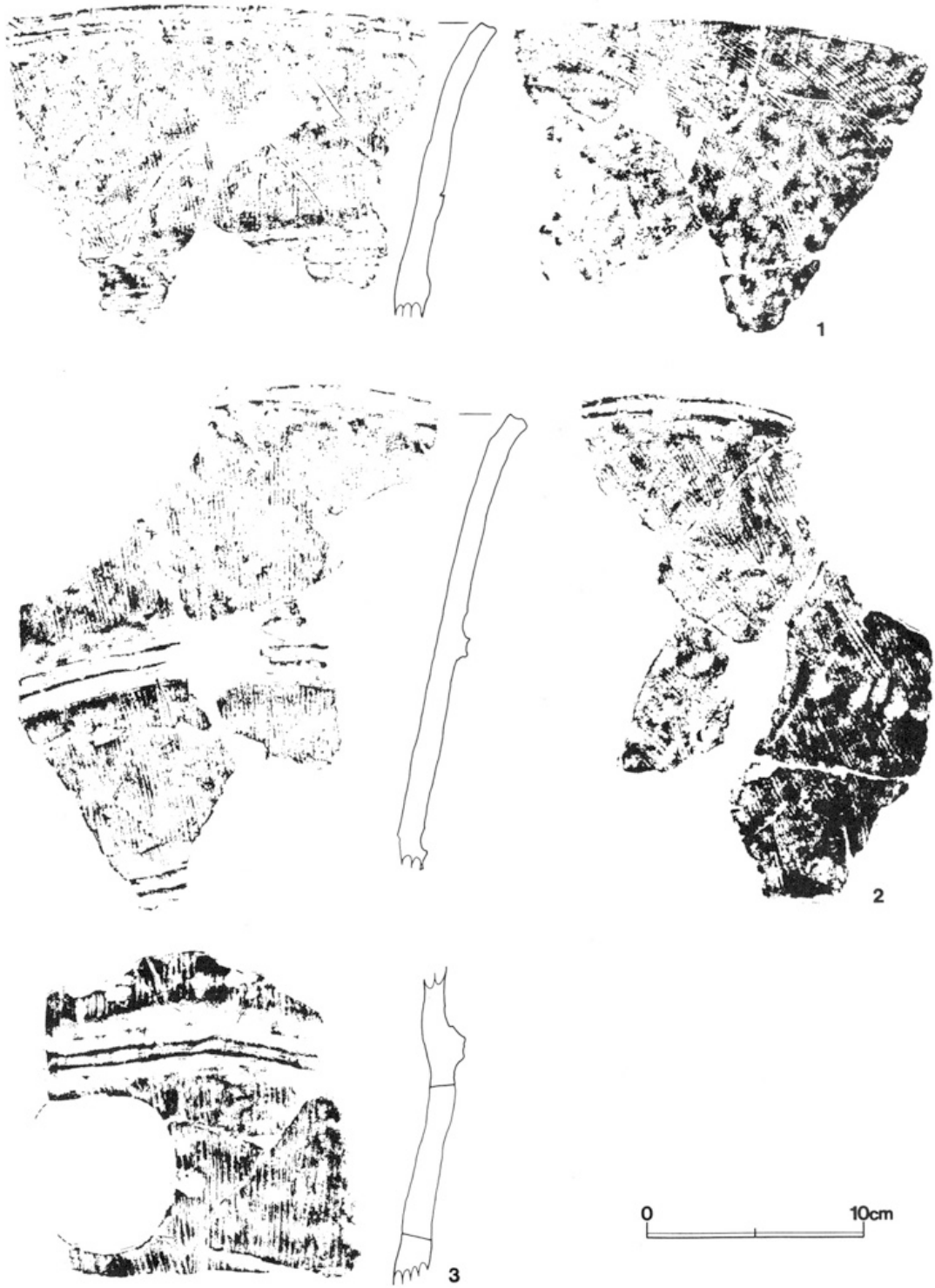
第131図 長沖25号墳出土埴輪実測図（1：4）



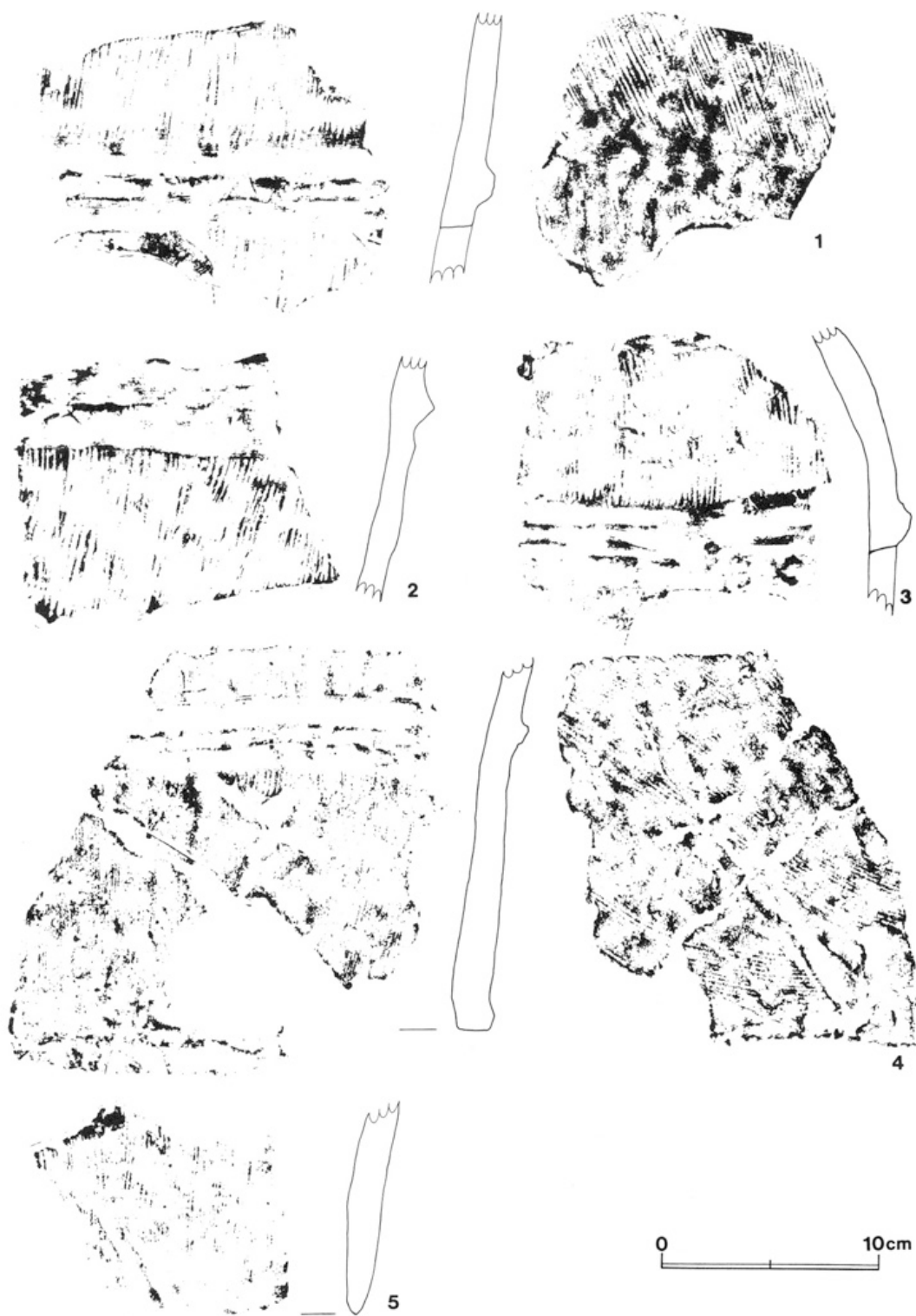
第132図 長沖25号墳出土埴輪拓影図（1：3）



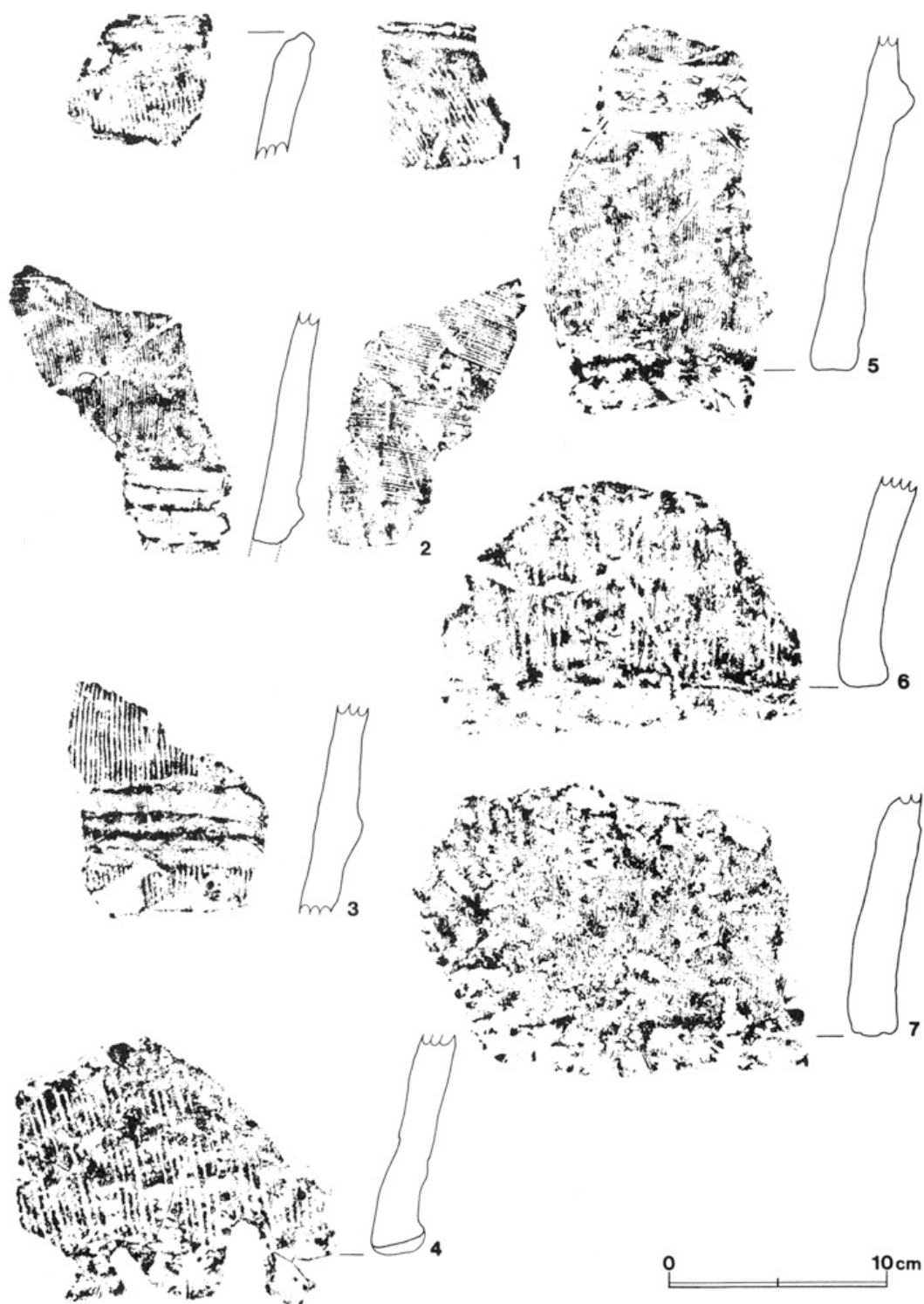
第133図 長沖25号填出土埴輪拓影図(1:3)



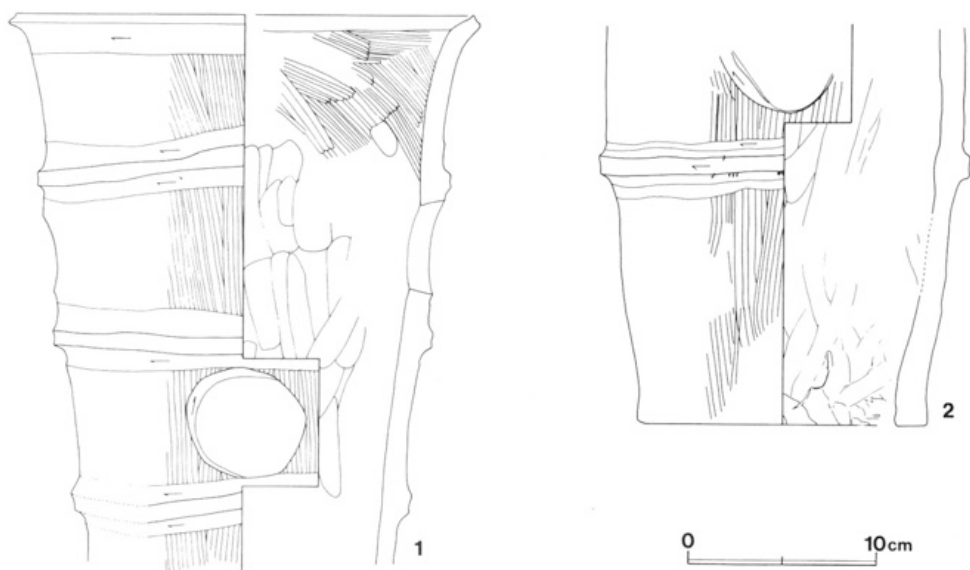
第134図 長沖25号墳出土埴輪拓影図(1:3)



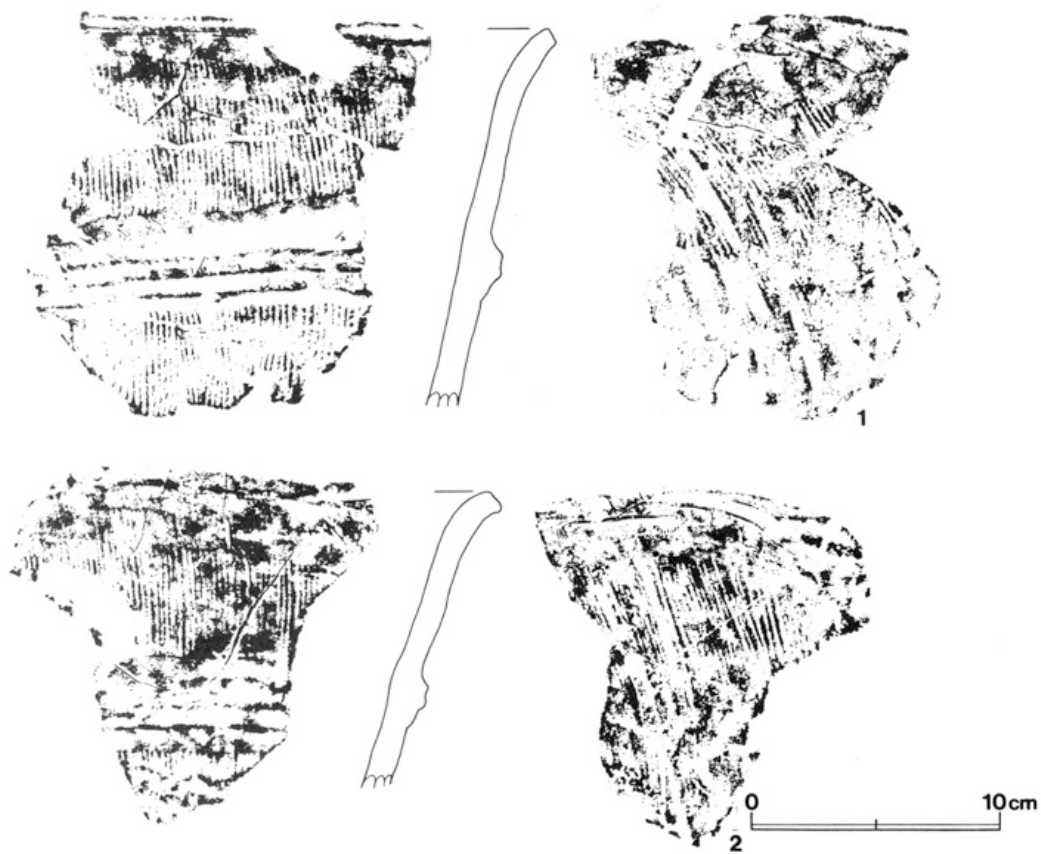
第135図 長沖25号墳出土埴輪拓影図 (1 : 3)



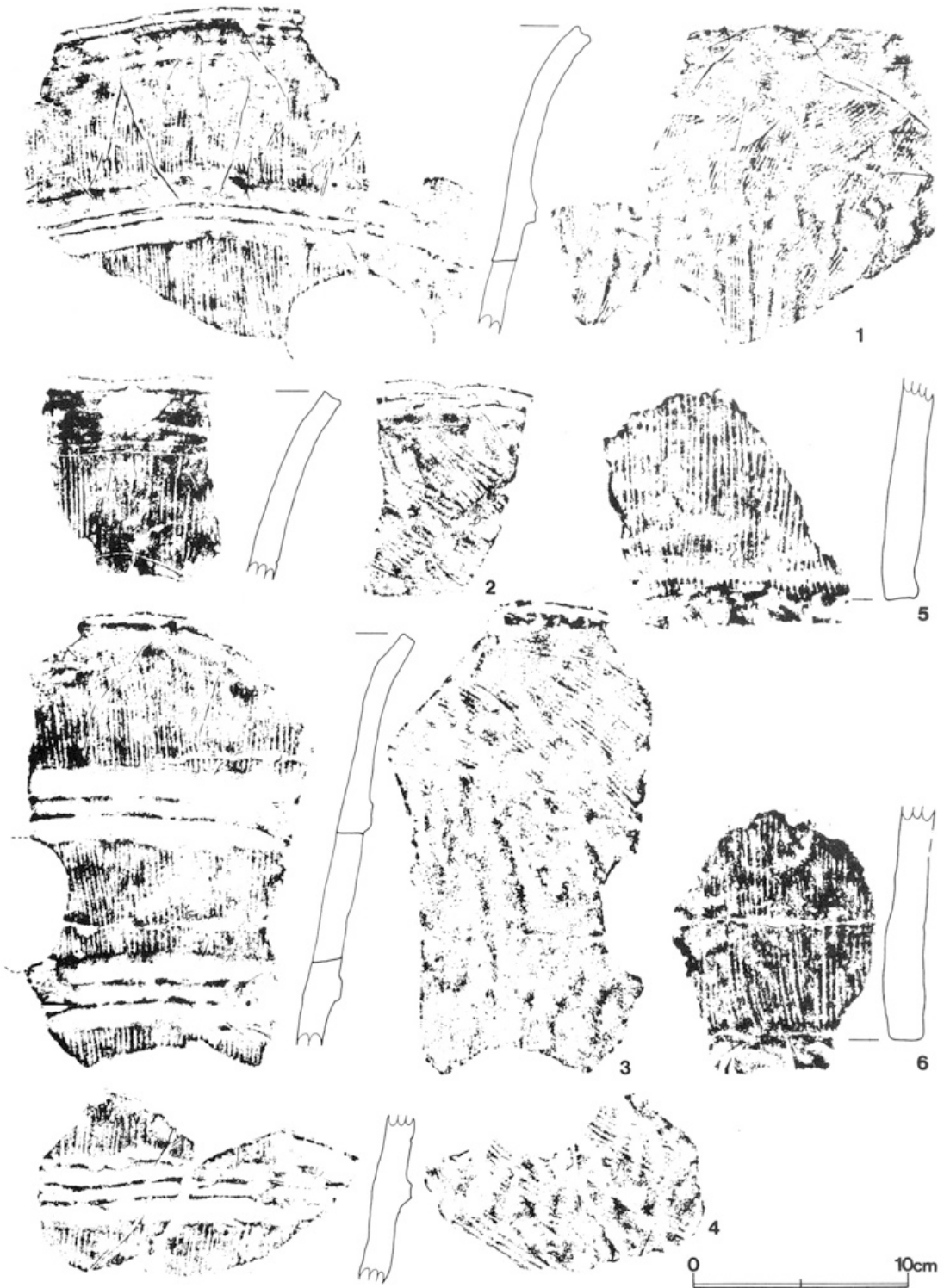
第136図 長沖27号墳出土埴輪拓影図 (1 : 3)



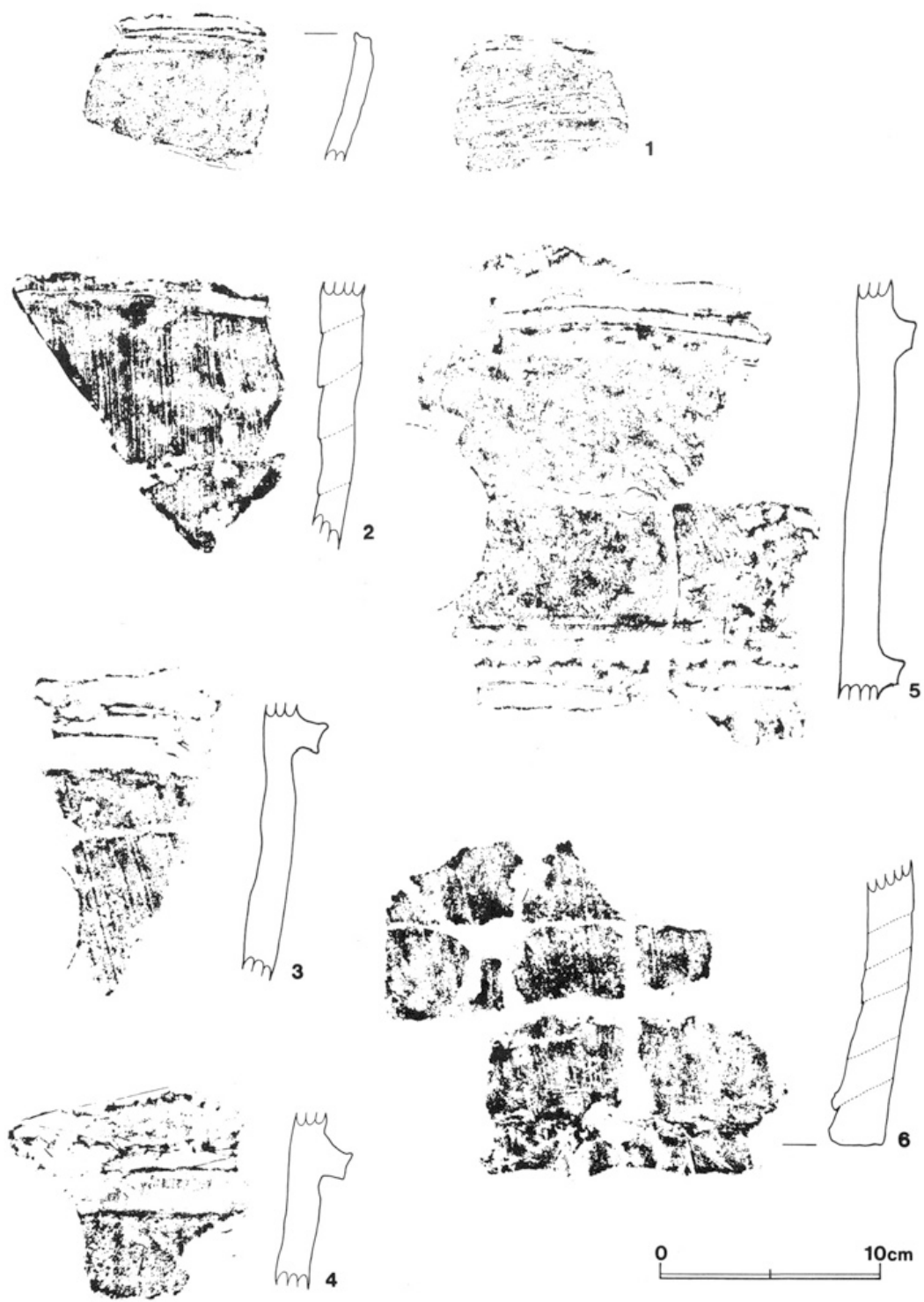
第137図 長沖28号墳出土埴輪実測図（1：4）



第138図 長沖28号墳出土埴輪拓影図（1：3）



第139図 長沖28号墳出土土埴輪拓影図(1:3)

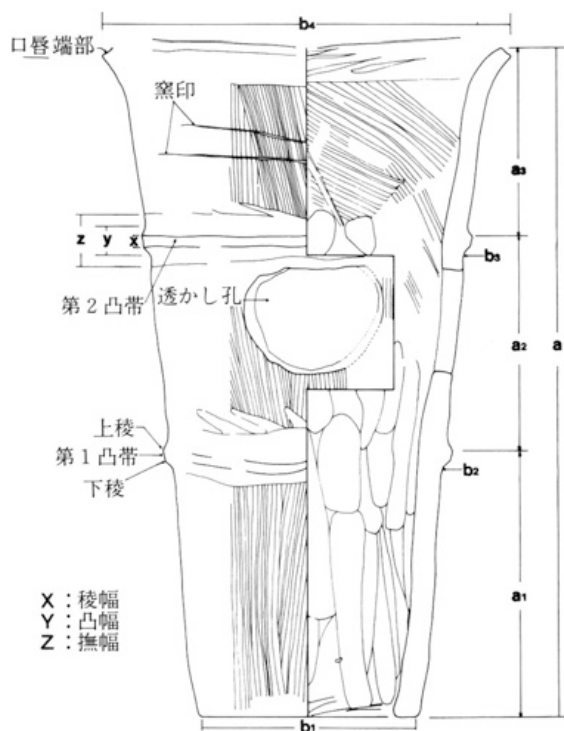


第140図 長沖34号墳出土埴輪拓影図(1:3)

長沖古墳群円筒埴輪観察表(実測図掲載埴輪)

— 凡 例 —

1. No.の欄に於ける数字は、上が通し番号、下左側が図番号、下右側が図版番号である。
2. 器高の欄に於ける数字は、() 内が全器高、それ以外は、第1段・第2段の順に記してある。第2段の器高とは、第1凸带上稜と、第2凸带上稜との間の長さである。
3. 径の欄に於ける数字は、底径、第1凸帯下場径、第2凸帯下場径、口縁径の順に記してある。
4. 器厚に於ける数字は、基底部器厚、第2段器厚、口唇部器厚の順に記してある。
※印は、基底部、又は口唇部が欠損している為、他の部位で計測した場合に記した。
5. 凸帯欄で示すアルファベット、数字について。
(A) ……しっかりした断面台形の凸帯
(A) ……ダレた断面台形の凸帯
(B) ……断面三角形の凸帯 (すべて『埴輪研究』轟 に倣う)
したがって、(A)、もしくは(A)の場合の数字は、撫幅、凸幅、稜幅の順に、
(B)の場合の数字は、撫幅、凸幅の順に記してある。
6. 口唇部に関する説明は、内面調整、外面調整の欄に於いて記してある。



円筒埴輪各部位の名称・計測点

(1). 長 沖 1 号 墳

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
1 第99版 図72 1 1	(—) 16.3 10.6 —	12.1 — —	1.1 1.0 1.0	黒 灰 色	半円窓 6.0(長) —(短)	酸化鉄粒、 長石粒等を 含む。	—	須 恵 質	(B) 1. 3.2 1.9 2. 2.9 1.6 共に時計回り の貼付。布の 使用痕が有る。	無	第2凸帯裏以上は斜ハケ。 後に、下→上への縦方向の 指削。その後横方向の指撫 でも施される。 第2凸帯裏側には指圧痕が 連なる。	縦ハケ(12/2)。 基底部に、一部指圧痕が見 られる。
2 第99版 図72 1 2	(—) 17.6 ~18.5 —	12.6 19.0 —	1.2 1.2	橙 色	—	金雲母粒、 スコリア粒、 酸化鉄粒等 を含む。 全体に石粒 含有量は少 ない。	—	や や 悪 い	(B) 1. 3.2 1.7 2. — 撫でが深い。	無	下→上への縦方向の指削。 凸帯裏に指圧痕が連なる。	縦ハケ(11/2)。
3 第99版 図72 1 3 3	(—) — —	15.0 — —	1.9	橙 褐 色	—	金雲母粒、 スコリア粒、 酸化鉄粒等 を含む。 石粒含有量 は少なめ。	—	普 通	—	無	縦方向の指削。	縦ハケ(8/2)。
4 第99版 図— 1 4	(—) — —	15.0 — —	0.9~ 2.0 —	橙 色	—	金雲母粒、 酸化鉄粒、 長石粒等を 含む。	—	普 通	—	無	縦方向の指削りの後指撫。 基底部の粘土板接合痕は明 瞭で、時計回りである。	縦ハケ(13/2)。 が施され ている。
5 第99版 図— 1 5	(—) — —	15.0 — —	1.4 — —	橙 色	—	酸化鉄粒を 多く含む。 他に、金雲 母粒を含む。	—	や や 悪 い	—	無	下→上への縦方向の指削。	縦ハケ(8/2)。

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
6 第 99 版 図 72 — 1 — — 6 4	(—)	11.8	0.9~ 1.7	暗 橙 色	—	スコリア粒、 黒雲母粒、 酸化鉄粒、 片岩系石塊 長石塊等を 含む。 石粒含有量 は若干多目。	—	普 通	—	無	横方向の指削り、又は斜方 向の指削。基底部には指圧 痕が有る。	縦ハケ (8/2)。 全体に太目のハケ目である。
7 第 99 版 図 72 — 1 — — 7 5	(—) 18.4	12.8	1.4	赤 褐 色	凹窓(?) 径不明。	金雲母粒、 酸化鉄粒、 長石粒等を 含む。	—	普 通	(B) 1. 2.7 1.9 2. —	板に依る外 面叩き調整。 若干尖底化 している。	下→上への縦方向の指削。 縦ハケ (7/2)。	
8 第 100 版 図 73 — 1 — — 1 1 — — 2 2	(—) 14.5	14.4 15.4 19.0 20.6	1.3 1.5 1.1	橙 色	—	金雲母粒、 酸化鉄粒、 長石粒等を 含む。	—	普 通	(B) 1. 3.4 1.9 2. 3.6 2.1	板に依る外 面叩き調整。	第 2 凸帯裏以上に斜ハケ、 後に縦方向の指削~指撫。 口唇部は 1cm 幅の時計回り の撫でが施されている。	縦ハケ (9/2)。 口唇部は指3本に依る整形。 口唇端部はくぼんでいる。
9 第 100 版 図 73 — 1 — — 3	(—)	16.4	1.5	赤 褐 色	—	金雲母粒、 酸化鉄粒、 金雲母粒等 を含む。	—	普 通	—	板に依る外 面叩き調整。	下→上への縦方向の指削。 縦ハケ (—)。	
10 第 100 版 図 73 — 1 — — 4	(—)	13.2	1.2	褐 色	—	金雲母粒、 酸化鉄粒等 を含む。	—	普 通	—	板に依る外 面叩き調整 尖底化して いる。	縦方向の指削。 縦ハケ (—)。	
11 第 100 版 図 73 — 1 — — 5 3	15.8	12.4	1.1~ 1.5	赤 褐 色	—	酸化鉄粒を 多く含む。 他に金雲母 粒等を含む。	—	や や 悪い	(B) 1. 2.7 1.7 2. —	板に依る外 面叩き調整。	下→上への縦方向の指削。 縦ハケ (14/2)。	

12 第100 図16	(—) 19.5~ 20.5	11.0	1.3 1.3	淡 橙 色	円 窓 径 5.8	長石粒、酸 化鉄粒、片 岩系石塊等 を含む。 石粒含有量 は普通。	—	や や 悪い	(B) 1. 3.2 1.7 2. — — 突出は0.4cm。	外面は板に 依る叩き調 整。	下→上への縦方向の指削。	縦ハケ (9/2)。
13 第100 図73 11 74	(—)	12.8	1.2 1.5	褐 色	—	金雲母粒、 酸化鉄粒、 長石粒、ス コリア粒等 を含む。 石粒含有量 は普通。	—	や や 悪い	—	叩きか押圧 か判別つか ない。内側 には施され ていない。	下→上への縦方向の指削。	縦ハケであるが、表面は水 溶ひどく、単位は攪めな い多分(15/2)くらいと思われ る。

(2). 長 沖 2 号 墳

No. 1 第103 図75 11 12	(—)	—	— 1.1 1.0	— 暗 褐 色	透孔 (?) 5.3(長) —(短) 若干外開 きである。	胎土 金・黒雲母 粒、酸化鉄 粒、スコリア 粒、長石 粒等を含む。 石粒含有量 は少なく、 良質の胎土 である。	窯印 最上段 の一部 に“こ” の字の 一方が 開いた 様な刻 印があ る。	焼成 良 好	(B) 1. — 2. 3.0 1.7 突出は0.3cm。 上側に、断続 撫技法が見ら れる。	底部調整 —	内面調整 凸帯裏以上は斜ハケ(19/2) 後に、縦方向の指削。	外面調整 縦ハケ (15/2)。
2 第103 図75 11 23	(—) 13.5~ 13.9	12.6 15.6	1.6 1.1	明 橙 色	—	長石粒、酸 化鉄粒、片 岩系石塊、 スコリア粒 等を含む。 石粒含有量 は普通。	—	や や 悪い	(B) 1. 2.5 2.0 2. — — 突出は0.3cm。 布の使用痕あ り。	無	縦方向の指撫でだが水溶が ひどい為、凶化は不可能。	縦ハケ。かなり目の細かい ものらしいが、水溶がひ どく、観察不可能。

4 第 106 版 図 76 1 1 4 3	(35.7) 17.0 10.0 8.7	11.6 15.6 16.8 24.4	1.7 1.2 1.0	赤 褐 色	円窓(?) 4.4(復外開きに切込である。)	金雲母粒、 長石塊、酸化鉄粒、小礫等を含む。 石粒含有量は普通。	—	良 好	(A) 1. 3.0 1.6 0.9 2. 3.1 3.1 1.7 — 上稜の方が突出している。	外面板押圧。 内面指押圧。 外面は基底から 3 cm 迄施されている。	幅 1.3~2.0 の粘土紐接合痕あり。逆時計回。第 2 凸帯裏以上は斜ハケ(12/2)。口縁付近は横ハケ。後、縦方向の指削。 口唇部撫幅は 0.7 cm。	縦ハケ (12/2)。 口唇部は端部がくぼんでいまる。外反は第 2 凸帯から始まる。
5 第 106 版 図 76 1 1 5 4	(—) 17.0 10.2	11.4 16.5 18.8	1.5 1.3 1.0*	淡 橙 色	円窓 6.5(短) 7.5(長) 三角形に近い歪んだ透孔である。	金雲母粒、 酸化鉄粒、 小礫等を含む。 石粒含有量は少なめ。	—	良 好	(B) 1. 3.2 2.1 3.3 2.4 — 共に上側の撫が丁寧なのに、下側は雑である。	画面板押圧に依る調整。 外面は基底から 7 cm 高 内面は 3 cm 高付近迄施されている。	第 2 凸帯裏以上は、斜ハケ(5/2)。後に縦方向の指削、後、一部指撫。	縦ハケ (6/2)。

(5). 長 沖 14 号 墳

No.	器 高	径	器 厚	色 調	透 孔	胎 土	窯 印	焼 成	凸 帯	底 部 調 整	内 面 調 整	外 面 調 整
1 第 111 版 図 78 1 1 1 2	(—) 上から 14.0	上から 55.4 30.0	上から 7.0 0.8	乳 橙 色	—	酸化鉄粒、 スコリア粒、 黒雲母粒等を含む。 石粒含有量は多め。	—	や や 悪 い	(A) 4.2 2.7 0.8 — 突出は 1.0 で、 かななりしりしてゐる。	—	口縁から 3 cm 付近迄丹塗。 凸帯裏以下は横ハケ(11/2)それ以上は横方向の指削。 口唇部撫幅は 2 cm。	全体に丹塗。凸帯以下は縦ハケ(8/2)。最上段は、木端に依ると思われる横削り、後、横撫。 口唇は、端部が直立する形状を示す。
2 第 111 版 図 78 1 1 1 2	(—)	—	— 1.3	乳 褐 色	—	長石粒、金雲母粒等を含む。酸化鉄粒を多く含む。	—	や や 悪 い	—	—	斜ハケ(15/2)の後に、口縁部には 2.3 cm 幅の横撫。	B 種横ハケ(15/2)。後に口縁付近は右下→左上への指撫の幅 2 cm。口唇部は直立のものを鋭角的に外に曲げてある。

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
3 第Ⅲ版 図78 1 3	(—) 12.3 ~13.3 —	17.4 ~18.9 22.3 —	2.0 ~4.4 1.5 —	淡 橙 褐 色	凹窓(?) 7.5cm 外開きに 切込んで ある。	酸化鉄粒、 スゴリ了粒 長石粒等を 含む。石魂 石粒、石魂 含有は多い。	—	や や 悪 い	(A) 1. 2.7 2.2 0.8 突出0.9で、か なり明瞭。 撫幅=凸中の 部分が多い。	無	幅2.4cm、時計回りの粘土紐 接合痕明瞭。接合の際の上 →下への指撫が明瞭で、指 削りは部分的。	第1段は縦ハケ(8/2)。第 2段は縦ハケ後に、B種横 ハケ(7/2)。時計回りに施 されている。

(6). 長沖15号墳

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
1 第Ⅳ版 図79 1 1	(—) 上から 14.6 6.1 6.6 —	上から 48.8 29.0 26.4 26.2	上から 1.1 1.6 1.6 1.6	— — 黄 褐 色	凹窓。最 上段と、 上から2 段目に、 3個、2 個である。 最上段 6.1cm 第2段 6.2~4.7 cm横長楕 円。	酸化鉄粒、 長石粒、黒 雲母粒等を 含む。酸化 鉄粒は特に 多い。 石粒含有量 少なく良質 の胎土。	—	や や 悪 い	(A) 突出強く、作 りも丁寧。 (上から) 1. 3.3 1.8 1.3 2. 3.3 1.9 — 3. 3.4 1.9 — 突出0.9cm。上 辺、側辺、下 辺、全てくぼ んでいる。	無	幅2.4cm平均、逆時計回り の粘土紐接合痕が明瞭。上 →下への指撫の後に、斜ハ ケ(10/2)。口縁付近は横ハ ケ(7)が施されている。 口縁付近の横撫は7cm中近 く迄施されているが、わる く、ハケ目の方が明瞭。	縦ハケ(10~14/2?)。水浴 がひどく、判らない。口唇 部は端がくぼんでいる。外 側撫巾1.3cm。 凸帯も口唇も、すべて布使 用による撫。

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
2 第113版 図79 1 1 2	(36.5) 16.0 9.0 11.5	14.0 16.8 18.7 24.4	0.9 ~1.2 1.0 0.7	暗灰 色 / 橙褐色	横長楕円 7.2(長) 5.8(短) 若干外開 きに切込 まれている。	長石粒、片 岩系石塊、 酸化鉄、ス コリア粒、 黒雲母粒を 含む。石粒 含有量多め。	第2凸 帯の上 に一本 上に反 る弧線 を施し ている。	良 好	(A) 1. 2.9 1.6 0.6 2. 3.0 1.7 0.6 第2凸帯は作 りが丁寧。	無	第2凸帯以上は斜ハケ(6/2)。その後下→上への縦方向の指削。 口縁横撫巾は1.2cm。	縦ハケ(6/2)。基底部は、若干ふくらみを持つ。 口唇部は、若干くぼんでいる。撫巾2.5cm。
3 第113版 図79 1 1 2 3	(—) 15.3 ~16.3 — —	14.0 15.4 — —	1.5 1.0	暗橙 褐色	円窓 7.6cm (?)	長石粒、酸化鉄粒、片岩系石粒を含む。 石塊含有量は若干多め。	—	普通	(A) 1. 3.5 1.9 0.7 全体にダレており、部分的に(B)である。	無	縦方向の指削→指撫。基底部に幅1cmの横位指撫が施されている。	縦ハケ(9/2)。
4 第113版 図 1 3	(41.6) 19.2 ~19.7 10.2 11.1	16.8 18.8 19.8 23.8	1.6 1.1 0.9	淡橙 色	半円窓と思われる。 4.6(直) 6.9(径) 円部は外開きの切り込み方である。	黒雲母粒、スコリア粒 長石塊、片岩系石塊、酸化鉄粒等を含む。石粒含有量は若干多め。	最上段に×に似た刻線有する。	やや悪い	(A) 1. 2.8 1.6 0.8 2. 2.9 1.5 0.7 下段の方が突出明瞭。布の使用痕あり。	無	第2凸帯裏以上は斜ハケ(7/2)。後に下→上の縦方向の指削り。 口唇部撫幅は0.9cm。	縦ハケ(8/2)。 口唇端は若干くぼんでいる。内側と端部の2本指整形。 外面には横撫の痕跡無し。

(8). 長 沖 21 号 墳

No.	器 高	径	器 厚	色 調	透 孔	胎 土	窯 印	焼 成	凸 帯	底部調整	内 面 調 整	外 面 調 整
1 第 図 117 版 図 80	(—)	—	1.4※	橙	円 窓 6.4cm 外に開か ない。	黒雲母粒、 長石粒、酸 化鉄粒を含 む。石粒含 有量多い。	—	良	(A) 1. 2.9 1.6 0.9 2. 3.2 1.7 0.8 下後の方が突 出している。	—	上→下への縦方向の指削。 凸帯裏には指圧痕が連なる。	縦ハケ (11/2)。
	12.0	15.4	1.1	褐				好				
	—	18.8	1.2※	色								
2 第 図 117 版 図 80	(—)	10.4	1.2 ~1.5	赤 褐 色	—	長石粒、ス コリア粒等 を含む。石 粒含有量若 干多い。	—	良	—	無	基底部横ハケ、それ以上は 斜ハケ(12/2)。その後縦 方向の指削。基底部は横方 向の指削。	縦ハケ (13/2)。 基底の一部に指圧痕有り。
	—	—	—	—				好				

(9). 長 沖 22 号 墳

No.	器 高	径	器 厚	色 調	透 孔	胎 土	窯 印	焼 成	凸 帯	底部調整	内 面 調 整	外 面 調 整
1 第 図 120 版 図 81	(34.8)	15.3	2.2	乳	縦長楕円 6.7(長) 5.4(短) 外開きに 切り込ん でいる。	スコリア粒 酸化鉄粒、 長石粒、金 雲母粒等を 含む。石粒 含有量は少 なめ。	透孔横 に、横 位一本 引。	良	(A') 1. 3.5 2.5 1.3 2. 4.4 2.2 1.3 上稜は明瞭。	無	第2凸帯裏以上は斜ハケ(7 /2)。後に下→上への縦方向 の指削。 口縁部横撫では2.3cm幅。	縦ハケ (7/2)。口唇部は、 端がほぼ平坦。外面の横撫 では殆ど為されていない。 時計回り。
	12.8	16.9	1.4	橙				好				
	10.5	19.7	1.0	色								
	11.5	24.1										

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
2 第 2 版 図 81 1 1 2 2	(34.8) 13.8 11.2 9.8	11.2 14.0 16.0 21.0	1.4 1.1 0.7	乳 橙 色	円 窓 上側が変 則的で、 三角状。 4.1(直) 7.2(径)	黒雲母粒、 酸化鉄粒、 スコリア粒 等を含む。 石粒含有量 は少な目。	外面最 上段に 横位 2 本の刻 線。	良 好	(A) 1. 3.6 1.3 0.6 2. 2.3 2.0 0.5 断続無でつけ。	無	透孔裏付近から上は斜ハケ (11/2)。その後縦方向の指 削。口縁の横方向指撫は、 幅 2.3cm。しかし、撫以前に ヘラ削りの様な痕跡有り。 基底部には横ハケ痕あり。	縦ハケ(10/2)。口唇部成形 は 3 本指。撫幅は、1.7cm。
3 第 3 版 図 120 1 1 3 3	(—) — 12.1 12.5	— 18.0 18.4 24.2	1.6※ 1.3 0.9	黄 褐 色	円 窓 7.0(長) 6.1(短) 大きいく外 に開く。	酸化鉄粒、 金・黒雲母 粒、スコリ ア粒等を含 む。石粒含 有量は少な 目。	—	良 好	(B) 1. 3.5 2.1 3.3 1.9 かなりダレて いる。	—	透孔付近以上は、斜ハケ(6 ~7/2)後に縦方向の指削り。 口縁横撫は、幅 4 cm。	縦ハケ(6~7/2)。口縁横撫 は、巾 2.9cm。布を使用して いる。口唇端は、直立に近 い角度で切られている。
4 第 4 版 図 81 1 1 4 3	(37.3) 14.7 12.2 10.4	11.8 14.2 16.5 23.4	1.7 1.0 0.8	淡 黄 色	円 窓 5.2(径) 外開きにて 切込んで ある。	金雲母粒、 スコリア粒 酸化鉄粒等 を含む。 石粒含有量 は少な目。	内面口 縁部に V字の 刻線。	良 好	(B) 1. 3.2 1.6 2. 3.1 1.5 台形のダレた ものらしい。	無	第 2 凸帯以上は斜ハケ(7 /2)。後に縦方向の指削。凸 帯裏には指圧痕が連なる。	縦ハケ(8/2)。口唇部端は 若干くぼんでいる。 口縁横撫巾は 1.1cm。
5 第 5 版 図 121 1 1 4 4	(33.8) 15.0 10.1 8.7	11.6 14.3 15.7 17.6	2.1 1.0 0.8	乳 橙 色	横長楕円 6.8(長) 5.3(短) 外開きにて 切込んで ある。	酸化鉄粒、 黒雲母粒、 スコリア粒 等を含む。 石粒含有量 は多目。	最上段 に、部 分のみ 見える。	良 好	(A) 1. 3.5 2.1 0.5 2. 2.4 1.7 0.7	無	ハケ目は施されていない。 幅 2 cm、逆時計回りの粘土 紐接合痕が見える。縦方向 の指削。基底は内側に歪ん でいる。	木端状工具、又はヘラに依 る下→上への削り。 口唇端は水平に切られてい る。
6 第 6 版 図 121 1 1 2 1	(35.8) 13.8 11.8 10.2	12.3 13.7 17.8 20.4	1.9 1.2 0.8	乳 橙 色	円 窓 6.1(長) 5.7(短) 若干外開 き。	酸化鉄粒、 金雲母粒、 スコリア粒 等を含む。 石粒含有量 は少な目。	内側口 縁部に V字の 刻線。	普 通	(B) 1. 2.8 1.7 2. 2.4 1.3 突出強く台形 のダレたもの と思われる。	無	第 2 凸帯裏以上は斜ハケ(9 /2)。凸帯裏には指圧痕が連 なる。その後縦方向の指削。 口縁部横撫は、幅 1.6cm。	縦ハケ(8/2)。口唇撫幅は 1.2cm 口唇端は、若干くぼん でいる。

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
7 第121図 — — — 3	(—) 16.0 11.0 —	13.4 17.4 20.6 —	1.7 1.2 1.5* —	乳 橙 色	円窓 5.6 若干外開 きである。	金雲母粒、 長石粒、酸 化鉄粒等を 含む。石粒 含有量は若 干多目。	—	良 好	(A) 1. 3.4 2.3 1.1 1.1 2. 4.0 2.2 1.0	無	ハケ目は無いらしい。幅3cmで逆時計回りの粘土紐接合痕が見られる。縦方向指削。乾燥の甘いうちに施したらしく、削りが深い。	縦ハケ(9/2)。所々に粘土が溜っている所から、乾燥の甘いうちに施したと思われる。
8 第121図 — — — 82 — — — 4 2	(34.1) 12.8 9.6 11.7	15.4 16.4 18.9 23.6	1.6 1.3 0.9	乳 橙 色	縦長楕円 6.8(長) 5.5(短)	金雲母粒、 酸化鉄粒、 長石粒、ス コリア粒、 片岩系石塊 等を含む。	外面透 孔横に 横方向 一本の 刻線。	良 好	(A) 1. 4.1 2.7 1.1 2. 4.5 2.8 1.2 上稜の突出目 立。	無	基部に逆時計回りの粘土板接合痕が見られる。第2凸帯裏以上は斜ハケ(7/2)。凸帯裏は指圧痕が連なる。後に縦方向の指削。口縁部横撫幅は2.0cm。	縦ハケ(7/2)。口縁部横撫幅は1.4cm。口唇端は、ほぼ平坦。端から2.3cmで、クイと外反する。
9 第122図 — — — 1	(—) — — 9.0	— — 17.4 21.6	— 0.9 1.0	赤 褐 色	円窓 6.4cm 若干外開。	長石塊、片 岩系石塊、 黒雲母粒、 酸化鉄粒等 を含む。大 形石塊が多 量に含まる。	外面最 上段に 一く字 の刻線 が施さ れている。	普 通	(A) 1. — 2. 2.6 1.7 0.6 突出無く、タ レている。	—	第2凸帯裏以上は斜ハケ(8/2)。後に縦方向の指削。口縁部横撫巾は、1.1cm。時計回りに施されている。	縦ハケ(7/2)。口縁部横撫幅は0.5cm。口唇端部は、若干くぼむ。
10 第122図 — — — 82 — — — 2 4	(—) — — 8.2	— — 18.3 26.0	— 1.5 1.0	乳 橙 色	楕円窓 6.9cm 大きく外 開に開く。	長石粒、金 雲母粒、片 岩系石塊、 酸化鉄粒、 スコリア粒。 石粒含有量 は少な目。	外面最 上段に 2本の 平行斜 線が施 されて いる。	良 好	(A) 1. — 2. 3.7 1.7 0.6 稜に鋭さがな い。	—	幅1.9cm、方向不明の粘土紐接合痕が見られる。透孔付近以上は斜ハケ(9/2)。後に縦方向の指削。口縁部横撫幅は、3.1cm。	縦ハケ(7/2)。口縁部横撫幅は1.1cm。口唇部内側はつまみ上げたかの様に細く立っている。

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
11 第122版 図1-35	(35.2) 16.0 9.5 9.7	14.2 16.6 17.0 21.2	2.0 1.3 0.8	褐色	円窓 6.6 ~7.4 若干外開 き。	金・黒雲母 粒、酸化鉄 粒等を含む。 石粒含有量 は少な目。	外面最 上段に 2本の 平行斜 線が施 されて いる。	良 好	(A) 1. 3.3 1.6 0.8 2. 3.2 2.4 0.9 下稜の突出目 立つ。	無	第2凸帯裏以上は斜ハケ(9/2)。後に縦方向の指削。 口縁部横撫幅は、1.1cm。	縦ハケ(7/2)。口縁部横撫 幅は0.5cm。 口唇部は若干くぼんでいる。
12 第122版 図1-43	(—) — — 11.2	— — 18.4 23.2	— 0.7 1.1	乳 橙 色	円窓 7.2 若干外開 き。	酸化鉄粒多 量、金・黒 雲母粒、ス コリア粒等 を含む。 石粒含有量 は多目。	—	良 好	(A) 1. — 2. 2.8 1.4 0.8 突出弱くダレ ている。	無	2cm幅、時計回の粘土紐接 合痕が見られる。残存部は すべて斜ハケ(9/2)。 口縁部横撫幅は、3.6cm。	縦ハケ(10/2)。口縁部横撫 幅は1.8cm。 口唇部は若干細くなり、中 くぼみである。
13 第122 図1-5	(—) — 11.7 10.8	— 17.4 19.9 22.7	— 1.4 1.1	乳 褐色	円窓 (4.4)	長石粒、金 雲母粒、ス コリア粒等 を含む。石 粒含有量は 少な目。	外面最 上段に 2本の 平行斜 線が施 されて いる。	良 好	(A) 1. — 2.1 0.9 2. 4.1 1.6 0.7。	—	第1凸帯裏以上は斜ハケ(9/2)。 口縁部横撫幅は3.6cm。	縦ハケ(10/2)。口縁部横撫 幅は1.8cm。 口唇部は、内側が細く立っ ている。
14 第122 図1-6	(—) 17.6 —	12.5 17.4 —	1.4 1.1 —	黄 褐色	—	長石粒、黒 雲母粒、酸 化鉄粒等を 含む。石粒 含有量は多 目。	—	や や 悪い	(A) 1. 3.4 1.7 0.8 2. — 部分的に三角。	無	下→上への指削。基底部に は横ハケが施されている。	縦ハケ(11/2)。
15 第123 図1-1	(—) — 11.9 8.8	— 18.6 22.8	1.7※ 0.9 0.9	赤 褐色	縦長楕円 7.7(長) 6.0(短)	酸化鉄粒、 長石塊、黒 雲母粒、片 岩系石塊等 を含む。酸化 鉄粒の含有 多い。	透孔横 に「こ」 の一方 の開い た2本 の刻線 がある。	良 好	(B) 1. 3.9 1.9 2. 3.6 1.8 突出が非常に 弱い。	—	口縁付近は斜ハケ。その後 縦方向の指削。口縁部横撫 幅は3.0cm。	縦ハケ(8/2)。口縁部横撫 幅は3.2cm。 口唇端は中くぼみになっ ている。

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
16 第123版 図1-2	(—) 14.7	12.8 13.6	1.7 1.3	乳 橙 色	円窓 6.1 外開きで ある。	酸化鉄粒多 く、金・黒 雲母粒等を 含む。石粒 含有量多い。	—	良 好	(A) 1. 3.1 2.0 0.7 上稜の突出目 立つ。断続撫 で技法。	無	透孔付近以上はハケ目(15/2)。後下→上への縦方向の指削り。基底には横方向の指削りがある。	縦ハケ(14/2)。
17 第123版 図1-3 3	(—)	13.2	2.1	褐 色	—	金雲母粒、 長石塊、酸 化鉄粒、ス コリア粒を 含む。 土器口縁片 も混和して いる。	—	良 好	—	外面板に依 る叩き、内 面は板押圧。 若干尖底化 している。	底部調整に同じ。	底部調整に同じ。
18 第123版 図1-4 1	(—) 18.8 9.2	14.2 15.6 16.4	1.1 0.9 1.1*	赤 褐 色	円窓(?) 復元不可	長石塊、片 岩系石塊多 量、酸化鉄 粒、金雲母 粒、スコリ ア粒を含む。	—	良 好	(A) 1. 3.0 1.2 0.6 2. 2.5 1.8 0.7 逆時計回(?)	無	第2凸帯以上は斜ハケ。その後下→上への縦方向の指削り。	縦ハケ(8/2)。
19 第123版 図1-5 2	(—) 16.5	11.2 11.6	1.5 1.0	橙 色	—	金雲母粒、 酸化鉄粒、 長石塊等を 含む。石粒 含有量多目。	—	良 好	(A) 1. 3.3 2.4 0.5 突出強く、特 に下稜目立つ。	両面 板押圧。 外面高6.5。 内面高5.0。 付近返押圧 されている。	下→上への指削り。凸帯裏には指圧痕列がある。底部調整の後に逆時計回の撫がある。	縦ハケ(10/2)。
20 第123版 図1-6 4	(—) 10.9	11.4 13.3	1.5 1.0	淡黄 褐色	—	金・黒雲母 粒、スコリ ア粒等を含 む。酸化鉄 粒を多く含 む。	—	や や 悪い	(A) 1. 2.9 1.7 0.7 上稜の方が出 ている。	無	縦方向の指削り。	縦ハケ(9/2)。

No	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
21 第 図 124 版 図 83 1 5	(—) — — — 11.1	— — 21.8 27.0	— 1.2 0.9	淡 橙 色	横長楕円 5.8(長) —(短) 外開き。	長石塊、酸化鉄粒、黒雲母粒を含む。酸化鉄粒を多く含む。	内面上部に、×の刻線が施されている。	良 好	(B) 1. — 2. 4.1 2.3 0.7 布使用痕跡。	—	凸帯裏上は斜ハケ(10/2)。後に下→上への縦方向の指削。 口縁部横幅は1.6cm。	縦ハケ(10/2)。口縁横撫巾は2.5cm。 布の使用痕跡。
22 第 図 124 版 図 84 1 2	(—) — 13.0 11.5	— 13.2 17.4 22.8	1.4※ 1.1 0.4	褐 色	円窓 6.5 歪んでい る。外開 き。	酸化鉄粒、金雲母粒、スコリア粒を含む。酸化鉄の含有量多い。	—	良 好	(A) 1. 3.0 1.9 0.7 2. 3.3 1.9 0.6	—	第2凸帯裏上は斜ハケ(9/2)。その後は縦方向の指削。 口縁部横幅は2.1cm。 逆時計回り。	縦ハケ(9/2)。口縁部横撫幅は0.6cm。口唇端は丸く細くなっている。 内・外で撫方向が異なる。
23 第 図 124 版 図 84 3 1	(—) 16.6 —	11.2 14.4 —	1.6 1.1 —	黄 褐 色	円窓 8.8(復) 外開き。	長石塊、スコリア粒、酸化鉄粒等を含む。表面に酸化鉄が気泡化して出ている。	—	良 好	(A) 1. 2.8 2.1 0.6 突出0.5cmで、稜はダレている。	無	縦方向の指削。基底部付近には、指削の際の粘土の溜まりが見られる。	外面縦ハケ。しかし水溶はげしく、単位は掴めない。
24 第 図 124 版 図 84 4 2	(—) 16.3 —	12.0 16.4 —	1.4 1.3 —	乳 褐 色	縦長楕円 5.9(長) 4.6(短) 外開き。	酸化鉄粒多く、長石粒、黒雲母粒等を含む。	—	良 好	(B) 1. 3.4 1.8 0.5 撫が深い。	無	幅2.3cm、時計回の粘土紐接合痕が見られる。 下→上への縦方向の指削。	縦ハケ(7/2)。

(12). 長 沖 25 号 墳

No.	器 高	径	器 厚	色 調	透 孔	胎 土	窯 印	焼 成	凸 帯	底部調整	内 面 調 整	外 面 調 整
1 第 128 図 版 86 1 1 1	(—) — 10.2 9.9	— 14.0 18.2 25.8	1.5* 1.3 0.9	褐 色	—	金雲母粒、 酸化鉄等を 含む。石粒 含有量少な 目。	—	良 好	(B) 1. 3.6 2.4 2. 4.1 2.2 布の使用痕明 瞭。	—	幅3.4cm、逆時計回の粘土紐 接合痕が見られる。第1凸 帯裏以上は斜ハケ(10/2)、 後に縦方向の指削。口縁部 横撫幅は、1.4cm。	縦ハケ(7/2)。口縁部横撫 幅は0.5cm。 これは成形時のもので、整 形時横撫幅は1.9cm。
2 第 128 図 版 86 1 1 2 2	(40.6) 12.5 7.6 8.5 12.0	17.1 19.4 20.4 21.4 27.9	1.0 1.3 1.3 1.2	暗 褐 色	2・3段 に各2対。 2. 3.6 ~4.2 3. 5.0 ~7.3 共に外開 き。	黒雲母粒を 少しと、片 岩系石塊、 長石塊を多 量に含む。	—	良 好	(B) 1. 3.0 3.0 2. 3.2 1.9 3. 3.0 1.6	無	第2段透孔付近以上は斜ハ ケ(11/2)。後に指削→指撫 (共に縦方向)。 口縁部横撫幅は3.1cm。	縦ハケ(13/2)。口唇部成形 時横撫幅は無。整形時横撫 幅は2.5cm。 口唇端部は若干山なり。
3 第 128 図 版 86 1 1 3	(—) — 6.8 12.2	— — 19.0 22.9	— 1.4 1.0	黒 灰 色	横長楕円 7.1(長) 4.7(短) 外開き。	長石塊、片 岩系石塊、 金雲母粒、 酸化鉄粒等 を含む。石 塊含有量は 多目。	外面最 上段に反 上に反 る弧状 の刻線 を施し てある。	や や 悪 い	(B) 1. 3.2 1.8 2. 2.8 1.5 突出弱い。	—	第2凸帯裏以上は斜ハケ(13 /2)。後に下→上への指削。 凸帯裏には指圧痕が5連なる。 口縁部横撫幅は1.0cm。	縦ハケ(12/2)。口唇部成形 時横撫幅は0.5cm。 整形時横撫幅は4.0cm。
4 第 128 図 版 86 1 1 4	(—) — 3.6 —	— 12.4 18.4 —	— 1.1 1.4 —	赤 褐 色	—	長石塊、片 岩系石塊、 黒雲母粒、 酸化鉄粒等 を含む。石 塊含有量は 多目。	—	良 好	(B) ●頸部 1.5 1.2 ●開口部 3.7 2.3 共に突出強い。	—	頸部以上は斜ハケ(10/2)。 後に右下→左上への指削。 頸部凸帯裏は横方向の指削。	縦ハケ(10/2)。開口部第1 段のハケ目は、上・下の凸 帯の撫により殆ど消えてい る。

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
5 第128版 図86 — — — 5 3	(—) 14.4 —	15.4 15.4 —	0.9 ~1.7 1.2	褐 色	円窓 8.6 外開き。	雲母粒、酸化鉄粒、スコリア粒等を含む。石粒含有量は少な目。	—	良 好	(B) 1. 3.3~4.3 1.4 2. — 上側に布の使用痕有り。	内面に、刀子に依る削りあり。	下→上への縦方向の指削。基部には刀子に依る削りがあるが、全周するわけではない。	縦ハケ (9/2)。基部は若干開いている。
6 第129版 図87 — — — 1 1	(—) 19.9 14.1 —	17.9 22.2 22.6 —	1.3 1.0 1.2※ —	褐 色	半円窓 6.1(直) 5.4(径) 刀子の遊びが残っている。	金・黒雲母粒、スコリア粒、酸化鉄粒、長石塊等を含む。	—	良 好	1. (B) 4.5 2.2 2. (A) 4.0 2.8 1.1 第2も一部B。	第2凸帯裏以上は斜ハケ(10/2)。後に縦方向の指削。	縦ハケ (10/2)。	
7 第129版 図86 — — — 2 4	(—) 15.6 23.5 —	20.0 3.2 —	1.4 ~2.1 1.3 1.2	赤 褐 色	円窓 5.2 外開き。	酸化鉄粒、スコリア粒片岩系石塊長石塊を多く含む。	—	や や 悪 い	(A) 1. 2.9 1.5 0.6 2. 2.8 1.7 0.7	無	縦方向の指削。底部には指削が見られる。	縦ハケ (10/2)。
8 第129版 図87 — — — 3 1	(32.4) 11.4 11.0 10.0	16.0 — — 22.3	— — — —	暗 乳 褐 色	円窓(?) 四角に近い。 5.5 外開き。	雲母粒、酸化鉄粒、スコリア粒等を含む。石粒含有量は少な目。	透孔横 に×の 刻線が 施され ている。	良 好	1. (A) 3.3 1.8 0.7 2. (B) 3.5 1.9	内面に高さ6cm程迄版押圧による調整あり。	第2凸帯以上は斜ハケ(11/2)。後に縦方向の指削。口縁部は横ハケ。口唇部横幅は1.5cm。	縦ハケ (9/2)。口唇部成形時横撫巾1.8cm。整形時横撫巾3.0cm。
9 第129版 図87 — — — 4 2	(—) 22.0 12.5 —	13.4 18.6 20.0 —	1.2 ~2.1 1.1 1.0※ —	赤 橙 色	円窓 9.1(復) 外開き。	金・黒雲母粒、酸化鉄粒等を含む。石粒含有量は少な目。	—	良 好	(A) 1. 3.2 2.8 0.9 2. 3.9 2.4 0.9	内面、高さ4.5cm程迄逆時計回りのへら削り。	下→上への縦方向の指削。第2段中程以上には、その前に斜ハケ(6/1)。又、粘土紐の巻上方向は時計回りであるが紐幅は判らない。	縦ハケ (11/2)。

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
10 第10図 130版 図87 1 1 1 3	(—) — 11.0 9.5 7.9 6.9 —	— 16.8 19.5 20.4 18.2 24.8 —	1.6※ 1.1 1.5 1.3 1.3 1.3 —	— — 乳 橙 色	第2、第3段に各2対。第2段のものは逆三角窓の可能性あり。第3段は、径6.3の楕円窓。	黒・金雲母粒、片岩系石粒、酸化鉄粒等を含む。石粒含有量は少ない。	—	良	下から 1. 3.5) A 0.6/ 2. 3.2) B 2.5/ 3. 4.1) B 2.1/ 4. 3.9) B 1.7/ 5. 4.9) B 2.3 B 0.8/	—	頸部以上は斜ハケ(10/2)。その後、逆時計回りの指削。頸部以下は縦方向の指削。凸帯裏には指圧痕が連なる。	縦ハケ (9/2)。
11 第11図 130版 図87 1 1 2 4	(—) — — 9.2 10.2	— — 17.8 19.4 25.2	— 1.0 1.1 1.0	— 暗赤 褐 色	円窓(?) 径の復原不可。	金雲母粒、片長石塊、片岩系石塊の含有量多い。	外面最上段に反る弧状の刻線が施してある。	普通	(A) 2. 3.4 1.6 0.7 3. 3.0 1.3 0.7 稜は若干ダレている。	—	第2凸帯裏以上は斜ハケ(11/2)。後に斜方向の指削り。口縁部横撫幅は1.2cm。	縦ハケ (9/2)。口縁の外反は殆どない。口縁部横撫幅は2.2cm。
12 第12図 130版 図88 1 1 3 4	(—) 16.5 — —	12.8 17.5 — —	1.5 ~2.1 — —	淡 褐 色	—	金雲母粒、酸化鉄粒等を含む。石粒含有量は少ない。	—	良 好	1. 1.2 (凸巾) のみ判る。	無	上→下への縦方向の指削。	縦ハケ (7/2)。
13 第13図 131版 図88 1 1 1 1	(—) — — — 9.3	— — 23.4 26.6	— 1.2 0.8 —	淡 褐 色	円窓。四角形に近いが、復原不可能。	金雲母粒、スズコリア粒、酸化鉄粒等を含む。	最上段に横引に刻線一本が施されている。	普通	(A) 1. — 2. 4.6 2.3 0.9 布の使用痕明显。	—	最上段裏側は斜ハケ(13/2)。後縦方向の指削。口縁部は時計回りの指削。	縦ハケ (13/2)。口縁部横撫幅は、2.6cm。

14 第 131 図 1 2	(—) 上から 12.2 — —	上から 27.1 — 21.2 —	上から 0.8 — 1.2 —	乳 橙 色	半円窓か と思われ るが、復 原不可 能。	黒雲母粒、 スコリア粒 酸化鉄粒等 を含む。	—	良 好	(A) 3.7 1.9 0.6	—	最上段裏側は斜ハケ(6/2)。 後に縦方向の指削。口縁部 横撫幅は0.8cm。 口唇部は細くなり、端部が 若干くぼんでいる。
15 第 131 図 1 3 2	(—) 上から 11.8 — —	上から 23.4 — 19.0 —	上から 0.8 ~1.2 — 1.0 —	乳 橙 色	円窓 7.4(復)	金雲母粒、 スコリア粒 酸化鉄粒等 を含む。	—	普 通	(A) 4.0 2.3 1.0 突出も強く、 しっかりして いる。	—	縦ハケ(9/2)。口縁部横撫 幅は1.7cm。 口唇部は細くなり、若干内 湾する。
16 第 131 図 1 4 3	(—) — —	15.6 — —	1.3 ~1.7 —	淡 橙 褐 色	—	金・黒雲母 粒、長石粒 酸化鉄粒等 を含む。石 粒含有量は 少な目。	無	普 通	—	—	縦ハケ(9/2)。基部は若干 開いている。

(14). 長 沖 28 号 墳

No.	器 高	径	器 厚	色 調	透 孔	胎 土	窯 印	焼 成	凸 帯	底部調整	内 面 調 整	外 面 調 整
1 第 137 図 1 1 2	(—) — 8.9 8.7 8.4	— 16.4 18.6 21.2 24.8	1.4※ 1.2 1.2 0.8	— — 黄 褐 色	第2・3 段に各2 材。 第2段 5.8 ~6.4 第3段 6.0 共に若干 外開き。	長石粒、金 雲母粒、酸 化鉄粒、ス コリア粒等 を含む。石 粒含有量は 少な目。	—	良 好	(A) 1. 2.9 2.1 1.0 2. 3.0 1.8 1.0 3. 3.1 1.8 0.9 稜がしっかり している。	—	第3凸帯裏以上は斜ハケ(9 /2)。後に縦方向の指削。ハ ケ目は乾燥の甘いうちに施 したと思われる。 口縁部横撫幅は1.0cm。	縦ハケ(8/2)。口縁部横撫 幅は1.8cm。

No.	器高	径	器厚	色調	透孔	胎土	窯印	焼成	凸帯	底部調整	内面調整	外面調整
2	(—)	15.2	1.5	赤	縦長楕円 7.9(長) 6.3(短) 外開き。	金・黒雲母 粒、長石粒 スコリア粒 酸化鉄粒等 を含む。	—	や	(A) 1. 3.2 1.8 0.9 しっかりして いる。ハケ目 の遊びが見え る。	無	縦方向の指削。乾燥の甘い うちに施したらしく、粘土 の溜りが見える。	縦ハケ(7/2)。基底部は広 がっている。
第 137 図	14.2	18.2	1.3	橙				や				
版 89 図	—	—		色				悪				
1								い				
2												
3												

長沖古墳群円筒埴輪観察表(拓影図掲載埴輪)

(1). 長沖 1 号 埴

図番	外面 断面 内面 色調	胎土	焼成	調	整
101-1	灰茶褐色 橙褐色 黒灰色	酸化鉄粒、スコリア粒。 石粒含有量少なめ。	良好 (内面須 患質)	外面縦ハケ 内面斜ハケ。	
2	橙褐色 " " 黒灰色	酸化鉄粒、スコリア粒。 石粒含有量少なめ。	普通 (内面須 患質)	外面縦ハケ 内面斜ハケ。	
3	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量少なめ。	普通	外面縦ハケ 内面縦方向指削。	
4	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量少なめ。	普通	外面縦ハケ 内面縦方向指削後、一部斜位ヘラ 削。底面刀子削り。	
5	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒。 石粒含有量少なめ。	良好	外面縦ハケ(12/2cm)。凸帯横撫 痕明瞭。内面凸帯裏以上斜ハケ後 縦方向指削(指撫)、以下縦方向指 削。	
6	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量少なめ。	普通	外面縦ハケ 内面縦方向指削。基底部縦方向刀 子削。	
102-1	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(多)、スコリア粒。 石粒含有量少なめ。	普通 (軟弱)	外面縦ハケ 内面斜ハケ。	
2	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、金・黒雲母。 石粒含有量少なめ。	良好	外面縦ハケ 内面斜ハケ。	
3	灰茶褐色 黒灰色 灰茶褐色	酸化鉄粒、スコリア粒。 石粒含有量少なめ。	良好 (断面須 患質)	外面縦ハケ(12/2cm)。凸帯横撫 痕明瞭。内面凸帯裏以上斜ハケ後 指削→指撫、以下縦方向指削。	

(2). 長沖 2 号 埴

図番	外面 断面 内面 色調	胎土	焼成	調	整
102-4	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(多)、スコリア粒。 金・黒雲母。 石粒含有量少なめ。	普通	外面縦ハケ 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(12~14/2cm)。凸帯横 撫痕明瞭。 内面縦方向指削。
5	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒。 石粒含有量多い(片岩 系石塊を主体)。	良好	外面縦ハケ 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(4/2cm)。 内面縦方向指削。
6	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量普通。	普通	外面縦ハケ 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(10~11/2)。 内面縦方向指削。基底部縦方向指削。
7	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量若干多い。	普通 (軟弱)	外面縦ハケ 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(12~14/2cm)。 内面縦方向指削。 表面磨減著しい。

図番	外面 断面 内面 色調	胎土	焼成	調	整
104-1	乳橙褐色 " " 乳橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒。 金・黒雲母(少)。 石粒含有量若干多め。	普通	外面刻みの深い縦ハケ(6~7/2 cm)。内面刻みの深い斜ハケ(6~ 7/2cm)。	外面刻みの深い縦ハケ(6~7/2 cm)。内面刻みの深い斜ハケ(6~ 7/2cm)。
2	乳橙褐色 乳橙褐色 乳橙褐色	酸化鉄粒(粒子大)、 スコリア粒(多)、金・ 黒雲母。 石粒含有量若干多め。	普通	外面縦ハケ 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(9~10/2cm)。 内面縦方向指削。
3	乳橙褐色 " " 乳褐色	酸化鉄粒、スコリア粒 (多)、金・黒雲母(少)。 石粒含有量若干多め。	普通 (軟弱)	外面縦ハケ、7/2cmの工具を用いて 1箇所回数に数回施している(12/2cm)。 内面斜ハケ(7/2cm)。	外面縦ハケ、7/2cmの工具を用いて 1箇所回数に数回施している(12/2cm)。 内面斜ハケ(7/2cm)。
4	乳褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母(少)。 石粒含有量普通。	普通	外面縦ハケ 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(7/2cm)。凸帯横撫 痕明瞭。内面縦方向指削。凸帯裏 に指痕が残る。
5	乳橙褐色 白灰褐色 乳橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒 (粒子大)、金・黒雲母 (少)。石粒含有量普通。	良好 (断面須 患質)	外面縦ハケ 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(7/2cm)。凸帯横撫 痕明瞭。 内面縦方向指削。

(3). 長 沖 8 号 墳

図番	外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
107-1	赤褐色 灰黄褐色 赤褐色	酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量多い。	良好	外面刻みの深い縦ハケ、口唇部横撫により磨消。単位不明。内面横ハケ(18/2cm)、口唇部撫幅1.5cm。	
2	赤褐色 暗黄褐色 橙褐色	酸化鉄粒(少)、スコリア粒、石粒含有量少なめ。	良好	外面縦ハケ(10~12/2cm)。内面横ハケ(10~12/2cm)。口唇部内、外面横撫により、ハケ目磨消。	
3	赤褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量多い(石塊目立つ)。	普通	外面縦ハケ(10/2cm)。内面凸帯以上横~斜ハケ(10/2cm)。以下指削。	
4	赤褐色 暗黄褐色 赤褐色	酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量若干多め。	普通	外面縦ハケ(13/2cm)、口縁部部分的横撫により磨消。口唇部内、外面横撫。内面凸帯裏以上横~斜ハケ(13/2cm)、以下指削。	
5	赤褐色 橙褐色 赤褐色	酸化鉄粒、スコリア粒(多)。石粒含有量若干多め。	普通	外面縦ハケ(9~10/2cm)。内面底部横ハケ(18/2cm)、一部及び以上指削(上→下方向)。	
6	暗橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(粒子大)、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量普通。	普通	外面縦ハケ後底部横撫。内面斜~横へラ削。	
7	暗橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量普通(石塊目立つ)。	普通	外面縦ハケ(12/2cm)、底部横撫。内面縦方向指削後、底部横撫。底面へラあるいは刀子削。	
8	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量普通(石塊目立つ)。	普通(軟弱)	外面縦ハケ(14/2cm)、底部板による叩き。一部外面突底化。内面縦方向指削。	
108-1	橙褐色 灰褐色 橙褐色	酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量普通。	良好(断面須恵質)	外面縦ハケ(14/2cm)、口縁部横撫により、磨消着しい。内面横ハケ(14/2cm)、ハケ工具によるV字及びその一部の刻みがある。	
2	赤褐色 暗黄褐色 赤褐色	酸化鉄粒、スコリア粒(少)、金・黒雲母。石粒含有量普通。	普通	外面縦ハケ(12/2cm)。口唇部内、外面横撫。内面横~斜ハケ(12/2cm)。斜位の刻線が1本ある。	

図番	外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
105-1	橙褐色 黒灰色 灰茶褐色	酸化鉄粒、スコリア粒。石粒含有量普通。	普通(断面須恵質)	外面刻みの深い縦ハケ(6~7/2cm)。内面刻みの深い斜ハケ(6~7/2cm)。	
2	暗橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量若干多め。	良好	外面刻みの非常に浅い、不明瞭な縦ハケ。内面口唇部横撫、以下縦方向指削。	
3	暗橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量普通。	良好	外面縦ハケ(20/2cm)。凸帯横撫擦痕明瞭。凸帯貼付後、上部凸帯付根にへラ状工具による断続的な刻み。内面縦方向指削。	
4	淡橙褐色 黄褐色 淡橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母(少)。石粒含有量普通。	良好	外面縦ハケ(10/2cm)。凸帯横撫擦痕明瞭。内面縦方向指削。	
5	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母(多)。石粒含有量多い。	普通	外面縦ハケ(10/2cm)。内面凸帯裏以上斜ハケ後縦方向指削→指撫、以下縦方向指削。	
6	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母(多)。石粒含有量多い。	普通	外面縦ハケ(18~20/2cm)。内面凸帯裏以上斜ハケ後縦方向指削(指撫)以下縦方向指削。	
7	暗橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母(多)。石粒含有量普通。	普通	外面縦ハケ(20/2cm)。凸帯は、突出が非常に弱く、上下を強く撫で込んで形作られている。内面縦方向指削。	
8	橙褐色 灰黄褐色 橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量多い。	良好	外面は木端あるいはへラ状工具による削り。内面縦方向指削。	
9	灰黄褐色 灰褐色 灰黄褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量若干多め。	普通(断面須恵質)	外面縦ハケ、磨滅が著しく単位は不明。内面縦方向指削。	

(4). 長沖 12 号 墳

図番	色調 外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
110-1	赤褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒 (多)、金・黒雲母(少)。 石粒含有量若干多め。	良好	外面縦ハケ(14/2cm)、口唇部横撫。 内面口唇部横撫、以下浅い斜ハケ。 後指撫により、ハケ目はほとんど磨 消。	外面縦ハケ(14/2cm)、口唇部横撫。 内面口唇部横撫、以下浅い斜ハケ。 後指撫により、ハケ目はほとんど磨 消。
2	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア 粒、金・黒雲母。 石粒含有量普通(石塊 若干)。	良好	外面縦ハケ(10/2cm)。口唇部内、 外面横撫。 内面斜ハケ(10/2cm)。	外面縦ハケ(10/2cm)。口唇部内、 外面横撫。 内面斜ハケ(10/2cm)。
3	赤褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒 (多)、金・黒雲母(少)。 石粒含有量若干多め。 (石塊若干)。	普通	外面縦ハケ(12~14/2cm)、口唇部 横撫。内面口唇部横撫、以下浅い 斜ハケ、後指撫によりハケ目はほ んど磨消。	外面縦ハケ(12~14/2cm)、口唇部 横撫。内面口唇部横撫、以下浅い 斜ハケ、後指撫によりハケ目はほ んど磨消。
4	赤褐色 " " " "	酸化鉄粒(多)、スコリア 粒(多)、金・黒雲母 (少)。石粒含有量若干 多め(石塊目立つ)。	普通	外面縦ハケ(14/2cm)、口唇部横撫。 内面口唇部横撫、以下口縁中程 まで斜方向指撫、以下縦方向指削。	外面縦ハケ(14/2cm)、口唇部横撫。 内面口唇部横撫、以下口縁中程 まで斜方向指撫、以下縦方向指削。
5	赤褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒 (多)、金・黒雲母(少)。 石粒含有量少なめ。	普通	外面縦ハケ(14/2cm)、口唇部横撫。 内面口唇部横撫、以下縦方向指削。 (指撫)	外面縦ハケ(14/2cm)、口唇部横撫。 内面口唇部横撫、以下縦方向指削。 (指撫)
6	赤褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒 (多)、金・黒雲母(少)。 石粒含有量少なめ。	普通	外面縦ハケ(12/2cm)。 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(12/2cm)。 内面縦方向指削。
7	赤褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母若干多め。 (粒子大若干)。	普通	外面縦ハケ(24/2cm)。 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(24/2cm)。 内面縦方向指削。

(5). 長沖 14 号 墳

図番	色調 外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
112-1	茶褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア 粒(少)、金・黒雲母 (少)。	普通	外面縦ハケ後横ハケ(12/2cm)。口 唇部内外面横撫。 内面斜ハケ(14/2cm)。	外面縦ハケ後横ハケ(12/2cm)。口 唇部内外面横撫。 内面斜ハケ(14/2cm)。

図番	色調 外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
108-3	赤褐色 暗黄褐色 赤褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量若干多い。	普通	外面縦ハケ(14/2cm)。口唇部内外 面横撫。外面口縁部部分的にさら らに横撫。内面斜ハケ。二本の平行 斜刻線がある。	外面縦ハケ(14/2cm)。口唇部内外 面横撫。外面口縁部部分的にさら らに横撫。内面斜ハケ。二本の平行 斜刻線がある。
4	橙褐色 黄褐色 橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒。 石粒含有量少なめ。	良好	外面刻みの深い縦ハケ(12/2cm)。 内面縦方向指削→斜ハケ(12/2cm) →一部縦方向指撫。	外面刻みの深い縦ハケ(12/2cm)。 内面縦方向指削→斜ハケ(12/2cm) →一部縦方向指撫。
5	赤褐色 暗黄褐色 赤褐色	酸化鉄粒、スコリア粒 (多)、金・黒雲母。 石粒含有量多い(石塊 目立つ)。	普通	外面縦ハケ(12~14/2cm)。 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(12~14/2cm)。 内面縦方向指削。
6	赤褐色 暗黄褐色 赤褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量若干多め。 (石塊目立つ)。	普通	外面縦ハケ(16/2cm)。 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(16/2cm)。 内面縦方向指削。
7	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(多)、スコリア 粒(少)、金・黒雲母。 石粒含有量若干多め。	普通	外面縦ハケ(12/2cm)。 内面凸帯裏以上斜方向、以下縦方 向指削。	外面縦ハケ(12/2cm)。 内面凸帯裏以上斜方向、以下縦方 向指削。
8	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(多)、スコリア 粒、金・黒雲母。 石粒含有量若干多め。	普通	外面縦ハケ(10/2cm)、凸帯貼付後 再び二次調整の縦ハケを一部に施 す。凸帯上面及び横撫部分にまで およんでいる。内面縦方向指削。	外面縦ハケ(10/2cm)、凸帯貼付後 再び二次調整の縦ハケを一部に施 す。凸帯上面及び横撫部分にまで およんでいる。内面縦方向指削。
109-1	暗橙褐色 暗黄褐色 暗橙褐色	酸化鉄粒(少)、スコリア 粒。 石粒含有量少なめ。	良好	外面縦ハケ(14/2cm)後、口唇部部 分的に横撫。内面横～斜ハケ(14 /2cm)後、口唇部横撫によりハケ 目完全に磨消→一部再びハケ目。	外面縦ハケ(14/2cm)後、口唇部部 分的に横撫。内面横～斜ハケ(14 /2cm)後、口唇部横撫によりハケ 目完全に磨消→一部再びハケ目。
2	赤褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア 粒(多)。石粒含有量 若干多め(粒子大)。	普通	外面縦ハケ(10~12/2cm)。 内面縦方向指削。	外面縦ハケ(10~12/2cm)。 内面縦方向指削。
3	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(多)、スコリア 粒(少)、金・黒雲母。 石粒含有量若干多め。 (粒子大)。	普通	外面縦ハケ(9/2cm)後、底部板押 圧。内面縦方向指削後、底部委底 の残る工具による斜位削り。底面 へラあるいは刀子削り。	外面縦ハケ(9/2cm)後、底部板押 圧。内面縦方向指削後、底部委底 の残る工具による斜位削り。底面 へラあるいは刀子削り。
4	赤褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア 粒(多)。石粒含有量 若干多め(粒子大)。	普通	外面縦ハケ(10~12/2cm)。窯印の 一部と思われるこの字状の刻線が ある。内面縦方向指削。	外面縦ハケ(10~12/2cm)。窯印の 一部と思われるこの字状の刻線が ある。内面縦方向指削。
5	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(多)、スコリア 粒、金・黒雲母。 石粒含有量若干多め。 (粒子大)。	普通	外面縦ハケ(10/2cm)、底部板によ る叩き。外面部分的に突底化。内 面縦指削後、底部斜位へラ削、上 部難だが深い刻みの斜ハケ。	外面縦ハケ(10/2cm)、底部板によ る叩き。外面部分的に突底化。内 面縦指削後、底部斜位へラ削、上 部難だが深い刻みの斜ハケ。

図番	外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
115-3	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(多)、金・黒雲母(少)、石粒含有量多い(石塊目立つ)。	普通 (軟弱)		外面縦ハケ(12/2cm)、 内面縦方向指削。
4	暗乳橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(粒子大)、金・黒雲母(少)、石粒含有量普通。	良好		外面縦ハケ(8~10/2cm)、 内面縦方向指削、一部斜ハケ。
5	暗乳橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒(粒子大)、金・黒雲母(少)、石粒含有量若干多め。	普通		外面刻みの深い縦ハケ(7/2cm)、 内面縦方向指削。
6	暗乳橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒(粒子大)、金・黒雲母(少)、石粒含有量若干多め(石塊目立つ)。	普通		外面刻みの深い縦ハケ(7/2cm)、 内面斜~横方向指削。

(7). 長沖縄A地区(14・15・16号墳)表採

図番	外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
116-1	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(多)、石粒含有量多い(石塊目立つ)。	普通		外面縦ハケ(8/2cm)、口唇部横撫。 内面斜ハケ(8/2cm)、口唇部横撫、 以下部分的に縦方向指削(削)によりハケを磨消。
2	橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(多)、金・黒雲母(少)、石粒含有量多い(石塊目立つ)。	普通		外面目の粗く浅い縦ハケ(4/2cm)、 内面縦方向指削、一部斜ハケが残る。
3	黄褐色 灰 乳橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母(少)、石粒含有量多い。	普通 (断面須患質)		外面横ハケ、単位表面磨滅のため不明。 内面表面磨滅のため不明。
4	黄褐色 乳橙褐色 乳橙褐色	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(少)、石粒含有量多い。	普通		外面縦ハケ後、横ハケ(20/2cm)、 内面斜ハケ(20/2cm)、以外斜指削。 外面丹塗。
5	乳橙褐色 灰黄褐色 乳橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒(少)、石粒含有量多い。	普通		外面二次調整横ハケ(20/2cm)、丹塗。 内面表面の剥落が著しい、一部斜ハケ(20/2cm)あり。

(6). 長沖15号墳

図番	外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
112-2	黄褐色 灰褐色 黄褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母(少)、石粒含有量多い。	やや悪い		外面二次調整横ハケ(20/2cm)、丹塗。 口唇部内、外面横撫。内面斜ハケ(20/2cm)。
3	黄褐色 黒灰褐色 黄褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、石粒含有量多い。	やや悪い		外面二次調整横ハケ(20/2cm)、丹塗。 内面縦方向指削。磨滅著しい。
4	乳橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、石粒含有量多い(石塊若干)。	普通		外面二次調整横ハケ(20/2cm)、丹塗。 内面凸帯裏以上斜ハケ(20/2cm)、以下縦方向指削。
5	黄褐色 灰黄褐色 黄褐色	酸化鉄粒(多)、スコリア粒(多)、金・黒雲母(少)、石粒含有量多い。	普通		外面縦ハケ後、二次調整B種横ハケ(18/2cm)、内面凸帯裏以上斜ハケ以下横~斜ハケ(18/2cm)、後一部横撫により磨消。外面丹塗。
6	乳橙褐色 黒灰褐色 乳橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、石粒含有量多い。	普通		外面二次調整横ハケ(20/2cm)、丹塗。 内面凸帯裏以上斜ハケ、後指削(削)によりほとんど磨消、以下縦方向指削、一部横撫。
7	灰茶褐色 黒灰褐色 乳橙褐色	酸化鉄粒(多)、スコリア粒、石粒含有量多い。	やや悪い (断面須患質)		外面縦ハケ(10/2cm)、 内面縦~横方向指削。表面磨滅著しい。
8	乳橙褐色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、石粒含有量多い(石塊若干)。	普通		外面横ハケ、丹塗。 内面斜~縦指削(削)。

図番	外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
115-1	暗乳橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(多)、金・黒雲母(少)、石粒含有量普通(石塊目立つ)。	良好		外面縦ハケ(8~10/2cm)、口唇部、 雑な横撫により、部分的にハケ目磨消。 内面斜ハケ(8~10/2cm)、口唇部横撫。
2	橙褐色 暗黄褐色 橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母(少)、石粒含有量多い(石塊目立つ)。	普通 (軟弱)		外面縦ハケ(8~10/2cm)、口唇部横撫。 内面斜ハケ(8~10/2cm)、一部縦方向指削(削)により磨消、口唇部横撫。

図番	外面 断面 内面 色調	胎 土	焼成	調 整
116-6	乳 橙 色 灰 黄 褐 色 乳 橙 色	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量多い。	普通	外面二次調整横ハケ(20/2cm)、口 唇部横撫。内面口唇部横撫、以下 斜ハケ後、斜～縦指撫によりハケ 目殆ど磨消。内、外面丹塗。
7	乳 橙 色 灰 黄 褐 色 乳 橙 色	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量多い。	良	外面凸帯下縦ハケ(18/2cm)、同上 縦ハケ後二次調整横ハケ(16-18 /2cm)、内面斜指撫。
8	橙 褐 色 灰 褐 色 灰 褐 色	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒。 石粒含有量若干多め。	普通(内 面須臾質 ヒビ割れ が生じて いる。)	外面縦ハケ(12/2cm)、凸帯貼付後 再び二次調整の縦ハケを一部に施 す。 内面縦方向指撫。
9	黒 乳 橙 色	酸化鉄粒、スコリア粒。 石粒含有量多い(粒子 大)。	普通	外面縦ハケ(16-18/2cm)。 内面縦方向指撫。

(8). 長 沖 21 号 墳

図番	外面 断面 内面 色調	胎 土	焼成	調 整
118-1	暗 乳 橙 褐 色 暗 乳 橙 褐 色 暗 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒、金・黒雲母(少)。 石粒含有量若干多め。	良	外面縦ハケ(12/2cm)、口唇部部分 的に横撫により、ハケ目磨消。 内面斜ハケ(12/2cm)、口唇部弱い 横撫。
2	暗 乳 橙 褐 色 暗 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量若干多め。	良	外面縦ハケ(12/2cm)、口唇部横撫。 窠印の一部への石粒の刻線がある。 内面縦ハケ(16/2cm)、口唇部横撫、 ハケ目磨消。
3	暗 乳 橙 褐 色 暗 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母(少)。 石粒含有量多い。	良	外面縦ハケ(16/2cm)、口唇部横撫。 内面凸 帯裏以上斜ハケ(14/2cm)、口唇部 目磨消。
4	橙 褐 色 暗 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒、スコリア粒。 石粒含有量普通(石塊 若干)。	普通 (軟弱)	外面縦ハケ 内面指削、一部斜ハケ。表面磨減 著しく、ハケの単位不明。
5	乳 橙 褐 色 暗 乳 橙 褐 色 暗 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒、スコリア粒 (少)、金・黒雲母(少)。 石粒含有量若干多め。	普通	外面縦ハケ(8/2cm)、内面横～斜方 向指撫、粘土紐接合痕が見られる。

図番	外面 断面 内面 色調	胎 土	焼成	調 整
118-6	乳 橙 褐 色 黄 褐 色 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒、スコリア粒 (多)、金・黒雲母。 石粒含有量多い。	普通	外面底部板による叩き。内面縦方 向指削。内面刀子あるいはヘラに よる削り。
110-1	暗 乳 橙 褐 色 暗 乳 橙 褐 色 暗 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒、スコリア粒 石粒含有量多い(粒子 大、石塊若干)。	普通	外面縦ハケ(14/2cm)。窠印の一部 である横方向の刻線がある。内面 斜ハケ(14/2cm)、上方は横撫によ りハケ目磨消。
2	赤 褐 色 暗 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒(多)、金・黒雲母 石粒含有量多い。	良	外面縦ハケ(16-18/2cm)、内面斜 ハケ(16-18/2cm)、縦方向の指削 (撫)によりハケ目部分的に磨消。
3	赤 褐 色 暗 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒(多)、金・黒雲母 (少)、石粒含有量多い。	普通	外面縦ハケ(14/2cm)。 内面縦ハケ(14/2cm)、基底部内面 指押圧。
4	暗 乳 橙 褐 色 暗 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒(多)、金・黒雲母 (少)、石粒含有量多い。	普通	外面縦ハケ(12/2cm)、底部板によ る叩き。内面縦方向指削、底部横 方向ヘラ削。

(9). 長 沖 22 号 墳

図番	外面 断面 内面 色調	胎 土	焼成	調 整
125-1	暗 乳 橙 褐 色 暗 茶 褐 色 暗 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒、金・黒雲母。 石粒含有量普通。	普通	外面縦ハケ(8/2cm)口唇部横撫。 内面口唇部幅広く横撫、以下斜ハ ケ(8/2cm)残る。2本の平行斜刻線 がある。
2	乳 橙 色 灰 黄 褐 色 乳 橙 色	酸化鉄粒(多)、スコリ ア粒、金・黒雲母。 石粒含有量少なめ。	普通	外面刻みの非常に浅い縦ハケ(14 /2cm)、口唇部幅広く横撫。内面凸 帯裏以上斜ハケ(14/2cm)、口唇部 横撫、以下縦方向指削。
3	乳 褐 色 黄 褐 色 乳 橙 色	酸化鉄粒(多)、スコリ ア粒、金・黒雲母。 石粒含有量普通。	普通	外面縦ハケ(11/2cm)、2本の横位 平行刻線がある。内面斜～縦ハケ (11/2cm)、一部縦方向指撫。
4	赤 褐 色 暗 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒(粒子大、多)、 スコリア粒(多)、金・ 黒雲母、石粒含有量普 通(石塊目立つ)。	普通	外面縦ハケ(8/2cm)。内面斜ハケ (8/2cm)、口唇部横撫。以下、部 分的に縦方向指撫によりハケ目磨 消。

(11). 長 沖 24 号 墳

図 番	外面 断面 内面	胎 土	焼 成	調	整
127-5	色調 赤 褐 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(少)、金・黒雲母(少)、石粒含有量普通。	普 通	外面刻みの非常に浅い縦ハケ。磨減著しく、単位不明。内面縦方向指削、口唇部幅広く横撫。	整
6	淡橙褐色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(少)、石粒含有量少なめ。	普 通	外面刻みの非常に浅い縦ハケ、単位不明。凸帯横撫擦痕明瞭。頸印の一部であるハの字の刻線がある。内面一部斜ハケ、他指削。	
7	乳 橙 色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(少)、石粒含有量少なめ。	普 通	外面刻みの非常に浅い縦ハケ、単位不明。口唇部内、外面横撫。内面縦方向指削。凸帯横撫擦痕明瞭。	
8	乳 橙 色 灰 褐 色 乳 褐 色	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(少)、石粒含有量少なめ。	普 通	外面刻みの非常に浅い縦ハケ、単位不明。凸帯横撫擦痕明瞭。内面縦方向指削。	

(12). 長 沖 25 号 墳

図 番	外面 断面 内面	胎 土	焼 成	調	整
132-1	乳 褐 色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母(多)、石粒含有量少なめ。	良 好	外面縦ハケ(12/2cm)、口唇部部分的に横撫によりハケ目磨消。内面横～斜ハケ(12/2cm)口唇部横撫。	整
2	乳 橙 色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母(少)、石粒含有量少なめ。	普 通	外面縦ハケ(12/2cm)、口唇部横撫。内面斜ハケ(12/2cm)、口唇部横撫。以下部分的に縦方向指削(撫)によりハケ目磨消。	
133-1	淡橙褐色 " " 黄 褐 色	酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母(少)、石粒含有量普通(石塊若干)。	普 通	外面縦ハケ(12/2cm)、口唇部幅広く横撫。内面斜ハケ(12/2cm)、口唇部横撫。	
2	橙 褐 色 " " " "	酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母(少)、石粒含有量若干多め。(石塊目立つ)。	普 通	外面縦ハケ(12/2cm)。口唇部内、外面横撫(幅狭い)。内面斜ハケ(14/2cm)、部分的に縦方向指削で、ハケ目磨消。	

(10). 長 沖 23 号 墳

図 番	外面 断面 内面	胎 土	焼 成	調	整
126-1	赤 褐 色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(多)、石粒含有量多い(石塊目立つ)。	普 通	外面縦ハケ(10/2cm)。内面凸帯裹以上斜ハケ(10/2cm)、以下縦方向指削。	整
2	乳 橙 色 暗 黄 褐 色 乳 橙 褐 色	酸化鉄粒(多)、スコリア粒(少)、金・黒雲母。石粒含有量普通。	普 通	外面縦ハケ(12/2cm)、凸帯貼付に於ける撫では、断続撫つけ。内面斜ハケ(12/2cm)。	
3	赤 褐 色 " " " "	酸化鉄粒、スコリア粒(少)、石粒含有量多い(石塊目立つ)。	普 通	外面縦ハケ(9～10/2cm)、基底部のみ横ハケ。内面縦方向指削。	
4	乳 橙 色 暗 黄 褐 色 乳 橙 色	酸化鉄粒(多、粒大)、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量若干多め。	普 通	外面は木端あるいはへラ状工具による縦方向指削。内面縦方向指削。	
5	乳 橙 色 灰 黄 褐 色 乳 橙 色	酸化鉄粒(多)、スコリア粒(少)、金・黒雲母。石粒含有量多い。	普 通	外面縦ハケ(10～12/2cm)。内面斜ハケ(10～12/2cm)、基底部斜～縦方向指削、指押圧。	

(10). 長 沖 23 号 墳

図 番	外面 断面 内面	胎 土	焼 成	調	整
127-1	赤 褐 色 茶 褐 色 赤 褐 色	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(少)、金・黒雲母。石粒含有量若干多め。(石塊若干)。	普 通	外面縦ハケ(14/2cm)、内面斜ハケ(14/2cm)。	整
2	赤 褐 色 茶 褐 色 赤 褐 色	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(少)、金・黒雲母。石粒含有量普通(石塊若干)。	普 通	外面縦ハケ(14/2cm)、内面斜ハケ(14/2cm)。	
3	橙 褐 色 " " " "	酸化鉄粒(少)、スコリア粒(多)、石粒含有量若干多め。(石塊目立つ)。	普 通	外面縦ハケ(14/2cm)、内面縦方向指削。	
4	赤 褐 色 暗 茶 褐 色 赤 褐 色	酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量若干多め。(石塊目立つ)。	普 通	外面縦ハケ(14/2cm)、底部板による叩き。内面縦方向指削、底部斜位へラ削。	

(13). 長 沖 27 号 墳

図 番	外面 断面 内面	胎 土	焼 成	調	整
133-3	橙 褐色 " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。石粒含有 量若干多め(石塊目立 つ)。	普 通	外面縦ハケ(14/2cm)、口唇部分 的に横撫により、ハケ目磨消。 内面斜ハケ(14/2cm)。	
4	淡橙褐色 暗黄褐色 淡橙褐色	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒、金・黒雲母。 石粒含有量普通。	普 通	外面目の粗い縦ハケ(5/2cm)。内 面、口唇部横撫。以下斜ハケ(5/2 cm)、以下縦方向指削。	
134-1	橙 褐色 " " "	酸化鉄粒(多)、スコリ ア粒(少)。石粒含有量 多い(石塊目立つ)。	普 通	外面縦ハケ(14/2)口唇部横撫。 へ字状の刻線がある。内面斜ハケ (14/2cm)、口唇部横撫、以下部分 的に縦位の指削。	
2	橙 褐色	酸化鉄粒(多、粒子大)、 スコリア粒(少)。石粒 含有量多い(石塊目立 つ)。	普 通	外面縦ハケ(12~14/2cm)、口唇部 内、外面横撫。凸帯横撫擦痕明瞭。 内面斜ハケ(12~14/2cm)。	
3	乳 橙 色 暗黄褐色 乳 橙 色	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒、金・黒雲母(多)。 石粒含有量少なめ。	普 通	外面縦ハケ(8/2cm)。内面縦方向 指削、一部斜ハケ認められる。凸 帯裏指押圧。	
135-1	淡橙褐色 " " "	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒(少)、金・黒雲母 石粒含有量少なめ。	良 好	外面縦ハケ(8/2cm)、凸帯横撫擦 痕明瞭。内面凸帯裏以上斜ハケ(8 /2cm)、一部縦方向指削、以下縦方 向指削。	
2	乳 橙 色 " " "	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒(少)、金・黒雲母。 石粒含有量少なめ。	良 好	外面縦ハケ(6~8/2cm)、凸帯横撫 擦痕明瞭。 内面縦方向指削。	
3	淡橙褐色 " " "	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒(少)、金・黒雲母。 石粒含有量普通。	普 通	外面縦ハケ(9/2cm)、凸帯横撫擦 痕明瞭。 内面縦及び横方向指削。	
4	橙 褐色 " " "	酸化鉄粒(多、粒子大)、 スコリア粒(多、金・黒雲 母(少)。石粒含有量多 い(石塊目立つ)。	普 通	外面縦ハケ(11~13/2cm)、凸帯横 撫擦痕明瞭。内面斜ハケ(10~11 /2cm)、部分的に斜方向指削(撫)で ハケ目磨消。	
5	乳 橙 色 暗黄褐色 乳 橙 色	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量普通。	普 通	外面縦ハケ(12/2cm)、底部板によ る叩き、あるいは押圧。内面縦方 向指削、底部板による押圧。	

図 番	外面 断面 内面	胎 土	焼 成	調	整
136-1	暗茶褐色 " " "	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒(少)、金・黒雲母。 石粒含有量普通。	普 通	外面縦ハケ(8~10/2cm)、口唇部 部横撫。内面斜ハケ(8/2cm)、口唇 部横撫。	
2	淡橙褐色 " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。石粒含有 量普通(石塊若干)。	普 通	外面縦ハケ(18~20/2cm)、内面凸 帯裏以上斜ハケ(18~20/2cm)、以 下縦方向指削。	
3	淡橙褐色 暗黄褐色 淡橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母(少)。 石粒含有量普通。	普 通	外面縦ハケ(10/2cm)。 内面縦方向指削。	
4	淡橙褐色 " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量普通。	普 通	外面縦ハケ(6/2cm)。内面磨滅著 しく調整不明。底面部分的に棒状 のものによる深くぼんぼん状が ある。	
5	淡橙褐色 " " "	酸化鉄粒(少)、スコリ ア粒(少)。石粒含有量 少なめ(石塊若干)。	普 通	外面縦ハケ(15~17/2cm)、凸帯横 撫擦痕明瞭。 内面縦方向指削。	
6	橙 褐 色 " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。石粒含有 量普通(石塊若干)。	普 通	外面縦ハケ(6/2cm)。 内面縦方向指削。	
7	橙 褐 色 " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。石粒含有 量普通(石塊若干)。	普 通	外面縦ハケ、表面の磨滅が著しい ため単位不明。 内面縦方向指削。	

(14). 長 沖 28 号 墳

図 番	外面 断面 内面	胎 土	焼 成	調	整
138-1	淡橙褐色 " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、 金・黒雲母。 石粒含有量若干多め。	普 通	外面縦ハケ(9/2cm)、口唇部分 的に横撫でハケ目磨消。内面斜ハ ケ(9/2cm)口唇部幅広く横撫、以 下部分的に縦位指削。	

図番	外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
140-2	黄褐色 黒色 黄褐色	酸化鉄粒(粒子大)、スコリア粒、金・黒雲母(少)。石粒含有量若干多め。	やや悪い	外面縦ハケ(10-12/2cm)、ハケ目の刻みの間には、さらに細い条痕が見られる。丹塗。内面部分的に不明瞭な斜〜横ハケ、他指撫。	
3	黄褐色 黒色 黄褐色	酸化鉄粒(粒子大)、スコリア粒(少)。石粒含有量若干多め。	やや悪い	外面刻みの浅い縦ハケ(8-10/2cm?)、丹塗。内面方向不定の指削(撫)。	
4	黄褐色 黒色 黄褐色	酸化鉄粒(多粒子大)、スコリア粒(少)、金・黒雲母(少)。石粒含有量若干多め。	やや悪い	外面ハケ目の有無不明、丹塗。内面、部分的に斜ハケ、単位及び他の調整表面磨減のため不明。	
5	黄褐色 黒色 暗黄褐色	酸化鉄粒(粒子大)スコリア粒。石粒含有量普通。	やや悪い	外面刻みの浅い縦ハケ(8-10/2cm?)、表面の磨減著しい。丹塗。内面、部分的に斜〜横ハケ、斜方向指削(撫)、表面磨減の不明瞭。	
6	黄褐色 黒色 黄褐色	酸化鉄粒(多粒子大)、スコリア粒(少)、金・黒雲母(少)。石粒含有量普通。	やや悪い	外面刻みの浅い縦ハケ(8-10/2cm?)、表面の磨減著しい。内面斜方向指撫、一部斜ハケ(単位不明)。	

図番	外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
138-2	橙褐色 " " "	酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母(多)。石粒含有量普通。	普通	外面縦ハケ(10/2cm)、口唇部部分的に横撫でハケ目磨消。内面斜ハケ(10/2cm)口唇部横撫。≪の字状の刻線がある。	
139-1	淡橙褐色 " " "	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母(多)。石粒含有量普通。	普通	外面縦ハケ(10/2cm)、口唇部幅広く横撫、ハケ目概して残る。内面斜〜縦ハケ(10/2cm)、口唇部幅広く横撫、ハケ目ほとんど磨消。	
2	暗褐色 橙褐色 暗褐色	酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量少なめ。	良好	外面縦ハケ(9-10/2cm)、口唇部幅広く横撫。内面、口唇部幅広く横撫、以下斜ハケ(9-10/2cm)、一部斜方向の指撫でハケ目磨消。	
3	淡橙褐色 暗茶褐色 淡橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量若干多め。(石塊若干)。	普通	外面縦ハケ(10/2cm)、口唇部僅かに横撫。内面上部凸帯裏以上、斜ハケ(10/2cm)、口唇部僅かに横撫、以下縦方向指削。	
4	暗褐色 橙褐色 暗褐色	酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量少なめ。	良好	外面縦ハケ(10/2cm)、凸帯横撫痕明瞭。内面、縦方向指削一部分的に斜ハケ→部分的に指撫でハケ目磨消。	
5	淡橙褐色 黄褐色 淡橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母。石粒含有量普通。	普通	外面縦ハケ(8/2cm)。内面縦方向指削。	
6	橙褐色 灰褐色 橙褐色	酸化鉄粒、スコリア粒(多)。石粒含有量多い。	普通(断面須臾質)	外面縦ハケ(8-10/2cm)。内面縦方向指削。	

(15). 長沖34号墳

図番	外面 断面 内面	胎土	焼成	調	整
140-1	黄褐色 黒色 黄褐色	酸化鉄粒(多粒子大)、スコリア粒(少)、金・黒雲母(少)。石粒含有量若干多め。	やや悪い	外面縦ハケ(単位不明)、口唇部横撫、丹塗。内面部分的に横ハケ、斜〜斜方向指撫でほとんどハケ目磨消。	

2. 形 象 埴 輪

(1). 長沖1号埴輪 (図版74・75-1)

馬形埴輪 (図版74-1~6)

1-1 (埴輪列H35出土)は、頭部の破片で現存長17cmを測る。粘土帯を貼付して表現された面繫及び轡の引手の一部が見られる。面繫の交叉する位置には、粘土粒を貼付して辻金具が表わされている。調整は、内外面とも指撫でにより丁寧に行なわれている。焼成は、普通であるが、軟弱で表面の磨滅、水溶が激しい(以下同様)。色調は橙褐色(以下同様)。胎土は、酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母(多)を含み、石粒含有量は少な目である。

1-2 (H14)は、鞍あるいは立髪の一部と思われる破片で、現存長12cm×8cmを測る。表面の磨滅、水溶のため調整不明。胎土に石粒を多く含み、石塊目立つ。酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母含む。1-3 (H35)・4 (H14)は立髪の一部で、4は先端部の破片である。3が現存長13cm、4が7.5cm、径2~3cmである。3はハケ目調整が僅かに残り、4は指撫で、双方とも磨滅、水溶激しく詳細は不明である。胎土は3が1と同様、4が石粒含有量普通で、酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母を含む。

1-5及び2~6は脚部の破片で、いずれも基底部に三角形の切り込みがあり、蹄が表わされている。1-5 (H5)は現存高9cmで、外面は縦ハケ調整(7~8/2cm)であるが、表面の磨滅、水溶が特に著しく、遺存度は悪い。内面は縦方向指削りによる。2は底径8cm、現存高15cmを測り、外面縦ハケ(7~8/2cm)、内面が縦方向指削りである。3 (H7)は底径8.5cm×10cmの楕円形を呈し、若干歪んでいる。現存高は17cmを測る。外面縦ハケ(12~14/2cm)、内面縦方向指削りによる。基底部は若干外側に開き、所謂袴腰となっている。4 (H7)は底径9cm、現存高20cmを測り、外面縦ハケ(12~14/2cm)、内面縦方向指削りによる。5 (H8)は底径7.5cm、現存高13cmを測り、外面縦ハケ(12~14/2cm)、内面縦方向指削りによる。6 (H8)は底径9cm、現存高23cmを測り、外面縦ハケ(12~14/2cm)、内面縦方向指削りである。また、円筒は現存する23cmの高さまで、粘土板をもって成形されている。胎土は、1-5が石粒含有量普通であるが石塊が目立ち、酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母を含む。2・5・6が石粒含有量多く、酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母を含む。3・4が石粒含有量多く、石塊が目立ち、酸化鉄粒(多)、スコリア粒を含む。

人物埴輪 (図版75-1)

1-5 (H16)を除き、他はすべて腕の破片である。1-1が現存長12cmの右腕、1-2が11cmの右腕、1-3 (H35)が10cmの左腕、1-4 (H16)が11cmの左腕、1-6・8 (H16)は同一個体で、16cmの左腕、1-7 (H16)が8cmを測る。いずれも指撫で調整により、基部には腕を肩に差し込むためのホゾが作られており、完存する3では2.5cm、6では5cmと長い。いずれも焼成は普通であるが、軟弱で表面の磨滅、水溶が激しい。色調は、すべて橙褐色である。胎土は、ほとんど同様で、石粒含有量普通、酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母を含む。

・5は腰部分の破片で、凸帯を貼付して帯を表わし、垂れた二本の粒土帯によって結び目が表現されている。凸帯をさかいに下方は外側に若干開き、上衣の裾のひろがり表わされている。外面には縦ハケ

(8/2cm)が施され、内面は縦方向指削りによる。焼成、色調、胎土とも他の腕の破片に同様である。

(2). 長沖8号埴 (図版77・78-1)

靱形埴輪 (図版77-1-1・78-1-7)

図版77-1-1は、円筒形の台部から右側の鱗の一部にかけての破片で、現存高2.5cmを測る。鱗の下端部表面には、粘土帯とその上に円形粘土粒が重ねて貼付され、そこから上方に向い二本の刻線がみられる。凸帯を境に下方は縦ハケ(9~10/2cm)、上方は方向不定のハケ目が施され、内側は指削りによる。焼成は普通で、色調は暗橙褐色を呈する。胎土は、石粒含有量普通で、酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母を含む。

図版78-1-7は、円筒形の本体から剥落した鱗の一部であろう。現存長1.5cm×6.5cm、厚さ0.8cmを測る。表裏とも端部が縦ハケ(9~10/2cm、以下同じ)、中央が斜ハケ、基部近くでは横ハケが施され、表面には刻線がみられる。焼成は普通で、淡橙褐色を呈する。胎土は、石粒含有量やや多く、石塊が若干目立ち、酸化鉄粒、スコリア粒(少)、金・黒雲母(少)を含む。

人物埴輪 (図版77-1-3~5・77-2)

図版77-1-3は、左肩から左胸にかけての破片で、1.4cm×1.1cmを測る。胸に円錐形の突出する粒土塊が貼付され、乳房が表現されていることから女子像であろう。肩から胸にかけて、一部剥落しているが、十字形の刺突を施し、丹塗した粘土帯が見られる。あるいは襲を表現したものかもしれない。外面はハケ目(12~13/2cm)調整、内面は指削りによる。焼成は普通で、色調は暗赤褐色を呈する。胎土は、石粒含有量普通で、酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母を含む。

図版77-1-4・5は腕の破片である。4は現存長1.2cm、5が1.5cmを測る右腕である。部分的にハケ目施し、基部には粗形のホゾが見られる。焼成は普通で、色調は4が橙褐色、5が淡橙褐色を呈する。4の胎土は、石粒含有量普通で、酸化鉄粒、スコリア粒(少)、金・黒雲母を含み、5が石粒含有量普通で、酸化鉄粒(多)、スコリア粒(少)、金・黒雲母を含む。

図版77-2は現存高3.0cmを測る上半身で、他は欠損している。下半身は、その形状から円筒形の台部となろう。性別は明らかでない。上衣の裾にあたる部分には刺突が施され、一部丹塗が遺る。頸部の正面中央から左腰にかけて、粘土帯の剥落した痕があり、やはり丹塗が一部に遺る。おそらく、上衣のあわせを表現していたものであろう。また、襟の部分も刺突と丹塗を施して表わされている。その形は、まるく仕立てた盤領を表現したものであろう。さらに頸部には、丸玉を連ねた頸飾がみられる。外面はハケ目(12~13/2cm)調整により、内面は縦方向の指削り、胸から頸部にかけての一部に横方向のハケ目(同じ)が施されている。焼成は普通で、淡橙褐色を呈する。胎土は石粒含有量普通で、酸化鉄粒、スコリア粒(少)、金・黒雲母(多)を含む。

馬形埴輪 (図版78-1~6・9)

1-1~6は馬具等に装着された鈴である。いずれもほぼ同様な作りで、内部が空洞となっている。1-1が長径5.0cm、2が4.3cm、3が4.5cm、4が4.5cm、5が3.8cm、6が4.7cmを測る。焼成はいずれも普通で、色調は淡橙褐色である。胎土もほぼ同様で、石粒含有量普通、酸化鉄粒、スコリア粒(少)、金・黒雲母(多)を含む。

1-9は、鞍の一部と思われる破片で、現存長17cm×10cmを測る。鞍橋下部から障泥にかけての部分と思われ、剥落、欠損しているが前輪、後輪を表現した凸帯が貼付されていた様である。外面は、ハケ目を施した後指撫で、内面は指削り調整による。焼成は普通、色調は淡橙褐色を呈する。胎土は、石粒含有量普通で、石塊が若干目立ち、酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母(少)を含む。

その他(図版78-1-8)

緩いカーブをもつ本体に接合された平板の一部で、現存長15cmを測る。端部は、本体から2cm程張り出している。表面には粗雑なハケ目が遺り、平面には三角文の刻線がみられる。あるいは盾か鞆を表わした埴輪の一部かもしれない。焼成は普通で、色調は橙褐色を呈する。胎土は、石粒含有量多く、石塊が目立ち、酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母(少)を含む。

(3). 長沖21号墳(図版77-1-2・80-3)

人物埴輪(図版77-1-2・80-3-1~7)

図版77-1-2は、顔面下半部のみで現存高8cmを測る。外面は指撫でにより丁寧に行なわれ、内面は指撫でにより調整されている。焼成は普通。色調は淡褐色。胎土は、酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母を含み、石粒含有量は少な目である。

図版80-3-1~4・6は、腕の破片である。1は、現存長12cm、基部にホゾの痕がある。調整は縦ハケ目の上に指撫でにより行なわれている。焼成は普通であるが、表面がやや磨滅している。色調は橙褐色。胎土は、酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母(多)を含み、石粒含有量は普通である。

2は、現存長9cmを測り、基部には肩に差し込んだホゾが残る。調整はハケ目の上に指撫でによって行なわれている。焼成は普通。色調は淡褐色。胎土は、酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母(多)を含み、石粒含有量は少な目である。

3は、現存長9cmを測り、籠手を表現した粘土帯の部分は丹塗されている。調整は指撫でによる。焼成は普通。色調は橙褐色。胎土は、石粒含有量が普通で、酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母を含む。

4は、現存長9cmを測るホゾの部分のみである。焼成は普通。色調は暗橙褐色。胎土は、石粒が多く、酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母を含む。

6は、現存長7cmを測り、縦横の刻線によって長方形の区画があり、挂甲の小札を表現していると思われる。調整は指撫でによる。焼成は普通であるが、表面はやや磨滅、水溶している。色調は淡褐色。胎土は、酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母(多)を含み、石粒含有量は少な目である。

5は、断面が円形の棒状のもので美豆良と思われ、現存長8cmを測る。調整は指撫でによる。焼成は普通。色調は橙褐色。胎土は、石粒含有量が少な目で、酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母を含む。

7は、現存長9cmを測る美豆良であり、丸い棒状で先端部をややT字形に開く。調整は指撫でによる。焼成は普通。色調は淡褐色。胎土は、石粒含有量が少な目で、酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母(多)を含む。

馬形埴輪(図版80-3-10~12)

3-10は径3.5cm、高さ3cmを測る鈴である。調整は指撫でによる。焼成は普通。色調は暗橙褐色。胎土は、石粒含有量が少な目で、酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母を含む。11も同様である。

12は、径1.8cm、高さ2cmを測る鈴で、10・11と比較すると小ぶりなもので、杏葉に貼付されていたものと思われる。調整は指撫でによる。焼成は普通。色調は乳橙色。胎土は、石粒含有量が普通で、酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母を含む。

その他（図版80-3-8・9・13）

9は、長径5cmを測り、円錐状の粘土塊を中央に貼付したもので、装飾品と思われる。調整は指撫でによる。焼成は普通。色調は暗橙褐色。胎土は、酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母(多)を含み、石粒含有量は少な目である。8も同様であるが約 $\frac{1}{2}$ 欠損している。

13は、長径7cmを測る円盤状のもので、中央部に長径4cmのやはり円盤状のものが貼付されている。星状の刻線が表現されており、装飾品の一部と思われる。調整はハケ目の上に指撫でによる。焼成は普通。色調は橙褐色。胎土は、石粒が多く、酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母(多)を含む。

(4) 長沖22号墳（図版84-3・85-1~3）

馬形埴輪（図版84-3-1~11・85-1・2）

図版84-3-1は立髪先端部と思われ、現存高4.5cmを測る。調整は荒いハケ目（8本/2cm）が施されている。焼成は普通。色調は橙褐色。石粒含有量が多く、酸化鉄粒(多)、金・黒雲母を含む。

3-2~7は鈴で、6は小ぶりで径2.1cm、高さ2.3cmを測り、他は径・高さとも3cm前後の同じ大きさである。2・4・6は、焼成は普通、色調は褐色、胎土は石粒含有量が少な目で、酸化鉄粒、スコリア粒、金・黒雲母(多)を含む。3・5・7は、焼成は普通、色調は淡赤褐色、胎土は石粒が多く、酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母を含む。

3-8は顔の左側で、径3cm程の円筒状の耳と径3cm程の目が見られる。耳と目の間には幅0.8cmの面繫と辻金具が表現されている。調整は指撫での後ハケ目（7本/2cm）により行われ、やや荒い造りである。焼成はややあまく、表面は水溶・磨滅している。色調は淡橙褐色。胎土は、石粒含有量が普通で、酸化鉄粒(多)、金・黒雲母を含む。

3-9は背部で、幅1.8cm・高さ1.2cmの凸帯が上状に貼付されている。調整は表面をハケ目（10本/2cm）整形を行ない凸帯は指撫でにより、裏面は指撫でによる。焼成は普通。色調は淡橙褐色。胎土は、酸化鉄粒(多)、金・黒雲母を含み、石粒が多く石塊が目立つ。

3-10は障泥で、現存部は厚さ1.5cm、14cm×11cmを測る方形を呈し、径4cm程の鐙の一部と、外端部に貼付された幅0.8cm程の粘土帯には十字形の刺突が見られる。調整はハケ目（11~12本/2cm）による。焼成は普通。色調は褐色。胎土は、石粒含有量が少なく、酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母(多)を含む。

3-11も障泥で、わずかに反っている程度ではほぼ扁平に近く、現存部は厚さ1.5cm、23cm×13cmを測る。表面はハケ目（11本/2cm）により、裏面は指撫でによって調整が行なわれている。焼成は普通。色調は暗褐色。胎土は、石粒含有量が多く、酸化鉄粒(多)、金・黒雲母を含む。

図版85-1は鞍の一部で前輪か後輪か不明である。厚さ1.1cm、高さ5.1cmの板状のものが垂直に近く貼付されている。調整はハケ目（9~10本/2cm）により行なわれている。焼成はややあまい。色調は褐色。胎土は、石粒含有量が多く、酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母(少)を含む。

2は背部で、幅1.5cm・高さ1.8cm程の凸帯が見られる。調整はハケ目(9~10本/2cm)によって行なわれ、凸帯は指撫でによる。焼成は普通。色調は暗褐色。胎土は、酸化鉄粒、金・黒雲母を含み、石粒含有量は普通である。

人物埴輪(図版85-3)

男子像の頭部で、現存高は11cmを測る。顔面の鼻より上の部分が遺っていたのにすぎず、後頭部は欠損している。額から頭にかけて幅0.8cm・深さ0.2cm程の筋で髪を二分している。額には部分的に丹塗が見られる。表面の顔面は丁寧に指撫でされ、頭部はヘラ削りの後指撫で、裏面は指撫でにより調整されている。焼成は普通。色調は乳褐色。胎土は、酸化鉄粒(多)、スコリア粒、金・黒雲母(多)を含み、石粒含有量は少な目である。

(5). 長沖23号墳(図版85-4)

靱形埴輪(図版85-4-2)

円筒状の本体から剥離した鱗の部分の破片で、現存長11cmを測る。表面は、ハケ調整後、ハケ目が僅かに遺る程度にまで指撫でされている。一部には刻線が施されている。裏面はハケ目(12~13本/2cm)調整による。焼成は普通で、色調は赤褐色を呈する。胎土は、石粒含有量多く、石塊が目立ち、酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母を含む。

その他(図版85-4-1・3・4)

4-1は舌状形の破片で、現存長8cmを測る。裏面の中央部には凸帯がある。表面は剥落が著しいが二重円形の刻線が遺る。焼成は普通で、色調は暗赤褐色を呈する。胎土は、石粒含有量普通で、酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母(少)を含む。

4-3は、現存長10cm×10cm程の破片である。表面はハケ目(12~13本/2cm)調整後、縦横の細かい刻線が施されている。あるいは家形埴輪の屋根の一部であるかもしれない。焼成は普通で、色調は橙褐色を呈する。胎土は石粒含有量多く、石塊が目立ち、酸化鉄粒(少)、スコリア粒を含む。

4-4は、現存長16cm程を測る。外面はハケ目(12~13本/2cm)調整後、格子状の刻線が施されている。あるいは小札を表現しているものかもしれない。凸帯の上には、円形の粘土粒が二重に貼付され、鋳を表わしている様にも思われる。焼成は普通で、色調は赤褐色を呈する。胎土は3と同様である。

(6). 長沖25号墳(図版88-5・89-1)

人物埴輪(図版88-5・89-1)

図版88-5は、現存高12cmを測る頭部で、頸部以下は欠損している。帽子をかぶる男子で、端正な顔立ちをしている。帽子は、凸帯を貼付して髷が表現されている。美豆良は左側のみ遺存し、螺線の丹塗が僅かながら認められる。先端部には結び目が表現され、付け根には髪飾りが貼付されている。また、髷の下側及び頬から顎にかけて丹塗が施されている。全体に作りは丁寧である。内面には輪積痕が遺り、頭頂部にはしぼり痕が認められる。焼成は良好で、橙褐色を呈する。胎土は、石粒含有量多く、酸化鉄粒(少)、スコリア粒(少)、金・黒雲母(少)を含む。

図版89-1-1は側頭部の破片で、現存長6cm×8cmを測る。美豆良の一部が遺存していることか

ら男子であることがわかる。美豆良の付け根には、髪飾が表わされている。外面は指撫でにより、内面は指削り、一部輪積痕が遺る。焼成は普通で、淡橙褐色を呈する。胎土は、石粒含有量少なく、酸化鉄粒(少)、スコリア粒(少)、金・黒雲母(少)を含む。

1-2~4・7・8は腕及び手の破片である。2は現存長10cmで、肩に粘土板を貼り、武具が表わされているものと思われる。3は12cmを測り、指の表現が深い切り込みにより、一本一本表わされている。4は現存長8cmを測る腕から手にかけての破片で、手の平は扁平に仕上げられ、腕にはハケ目調整が遺る。7は現存長10cmで、基部に肩に差し込むためのホゾが作られている。8は手の部分の破片で、現存高6cmを測る。深い切り込みで指が表現され、手の平と甲の区別も明瞭である。手頸には、薄い粘土帯が巻き付けてある。焼成は2が良好で、他は普通である。色調は、いずれも淡橙褐色である。胎土は、2~4・8が石粒含有量少なく、酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母を含む。7が石粒含有量普通で、酸化鉄粒(少)、スコリア粒(少)、金・黒雲母を含む。

1-5は上衣の裾部から下半の台部にかけての破片である。上衣の部分には格子状の刻線が施され、格子の交叉する箇所には粘土粒が貼付されている。あるいは挂甲を表現したものかもしれない。焼成は良好で、内面は須恵質に焼き上っている。色調は暗褐色を呈する。胎土は、石粒含有量少なく、酸化鉄粒(少)、スコリア粒、金・黒雲母(少)を含む。

1-6は、胸から腕の付け根にかけての部分であろう。現存長10cm×12cmを測る。粘土紐を貼付し、帯状のものが表現されている。あるいは襷を表わしたものかもしれない。焼成は良好で、淡橙褐色を呈する。胎土は5と同様である。

1-9は現存長8cmを測る。おそらく美豆良であろう。薄い粘土帯を螺旋状に巻き付けて髪飾が表現されている。焼成は普通で、色調は淡橙褐色を呈する。胎土は5と同様である。

(金子 章・鈴木 純・山崎 武)

V 遺構と遺物のまとめ

1. 墳丘と周溝

墳丘について

調査古墳のうち墳丘を残していたものは11基を数える。いずれも破壊が進んでおり、墳丘の遺存状態は決して良好とは言えなかった。このような状況であったため、当時の形状、規模が明確にされる様な遺構の検出も殆どなく、僅かに8・11号墳で旧状が推定しうる状態が確認されたのみである。また、比較的墳丘の遺存状態の良好な21・22・27号墳でも、概括的に封土の堆積状態を知る事ができた程度である。以下ここでは、これらの点についての得られた成果をまとめてみることにする。

調査古墳の横穴式石室は、その形態、積み方に拘らず、攪乱により確認できなかった28号墳を除いて、いずれも砂利や礫を用いた後込めにより抑えられ、その外側に控え積みの施設を備えている。この控え積みは、石室を取り巻く様に一周して存在するが、8号墳では、石室前面に至って葺石に相当する外部施設の石積みの機能を兼ね備え、円弧を描きながら左右に延びる様子が窺い知れる。その状態からすれば、当地域において美里村広木大町古墳群（註1）、神川村青柳古墳群中の城戸野及び十二ヶ谷戸支群（註2）中の数基の古墳で認められている構造に類似する。比較的遺存状態の良好な十二ヶ谷戸15号墳では、羨門部から左右に延び、石室全長をほぼ半径として一周している。さらに、その外側には約1m程の間隔をもって内側より低位の石積みが巡り、その間を埴輪の樹立帯としている。他の例についても基本的には同様で、二重に巡り、その間に埴輪を配置する構造を呈する。これらの類例から、8号墳においても同様な構造が推定でき、石室全長を半径とした径1.2m程に、約1mの埴輪の樹立帯を付設して石積みを施したものであったと考えられよう。

8号墳でこの様に類推された構造に対し、11号墳では、控え積みから直接葺石に当る外部施設の石積みに続かず、羨門部から台形状に開く前庭部の石積みを施し、そこから左右に延び、巡る状況が知れる。21号墳も控え積み及び前庭部の石積みのあり方からして、本墳と同様なものと思われる。このような構造は、台形状に石積みを施し開く前庭施設の採用により成立したものと考えられる。前庭施設に関しては、群馬県下における終末期古墳を特色付ける要素としての指摘がなされており（註3）、当地域ではその出現時期について必ずしも明確でないながらも、指摘されている年代より若干遡る7世紀前後と推定される。いずれにしても新しい時期に位置付けられる事には変わりなく、11号墳の示す構造も年代的に新しい時期の所産と見られる。これに対し、前述の十二ヶ谷戸15号墳を初め、8号墳で類推された構造を呈する古墳は、概して古く位置付けられ、埴輪を有する例が殆どである点からも裏付けられる。以上二者の構造の相異は、埴輪祭祀の衰退・消滅、前庭部祭祀の盛行といった様な内容を含み、時間的な流れの中で捉えられる様である。

次に、封土の積土状態について述べると、21号墳を初め横穴式石室を内包する古墳（8・9・10号墳）は、いずれもほぼ同様で、控え積みを抑える様に傾斜をもって斜めに盛土されている。遺存状態の良好であった21号墳においては、控え積み側より、旧表土を主体とする盛土、次にロームを主体とする盛

土といった大きな単位を認める事ができる。控え積みは、この最初の積土の単位である旧表土を主体とする盛土により、根石から最上段の石まで抑え終ってしまい、その盛土の拡がりもA・B断面とも2m程と一定している。

22・27号墳の竪穴系の主体部を有する古墳は、基本的にはフラットに盛土をし、墳丘の大略的な成形と高さを増していったものと思われる。その盛土状態は、明らかに横穴式石室を内包する古墳とは構築方法を異にしている。

周溝について

調査対象古墳の周溝の調査は、可能な限りに於いて全掘に努めて実施した。結果的には、全ての古墳について周溝の全容を明らかにする事はできなかったが、これらの調査に伴い新たに5基の古墳が発見され、縄文A地区の調査においても3基の周溝の確認に至った。ここで周溝について得られた特徴をまとめ、若干の問題的について触れてみたい。

前方後円墳である8・25号墳の周溝の平面形態は、8号墳が基本的には墳丘相似形の所謂「鍵穴状」を呈し、25号墳が「盾形」をとる。しかし、両者共そのプラン構成においては、前方部周溝内側立ち上り線による側線の開きの角度（くびれの角度）が非対称であったり、外側の立ち上り線が直線を成さず曲線になっている点等、一般的なあり方とは若干趣を変えている。さらに、8号墳については、後円部と前方部との接合部分にも後円部を巡る周溝があり、当初一周していた事が判明した。この点については、2基の前方後円墳に想定される平面企画の問題と併せて後述する。

12・27号墳は、全体の形状を知る事のできた古墳で、比較的整った円形プランを呈して周溝が巡る。全容は明らかでないが、16・22・28号墳もほぼ正円形に巡る様である。

1・2・15号墳に関しては、基本的には円形を呈するが、若干歪んだ様相を示す。

その他23号墳の周溝は、全周する事なく、部分的に巡る不整形な弧を呈する。これは自然地形による影響と共に、23号墳以前に築造された25号墳の存在により採られた形状であろうと推察される。同様な状況は、15号墳と14号墳との関係でも窺われる。14号墳の存在により15号墳の周溝は、計画通りの幅が採れず、接する部分において幅を減じ、歪んだ形状を呈している。この様に先に築造された古墳の周溝を避けて、後の古墳の周溝が掘削される例は、群馬県赤堀村峯岸山古墳群（註4）や同地蔵山古墳群（註5）において数例確認されている。両古墳群とも丘陵上に位置し、地形的に限られた範囲を墓域とする古墳群である。地蔵山古墳群について概観すると、その分布は濃密であるものの、必ずしも全ての古墳が近接して位置している訳ではない。各々の隣接する古墳との間隔には広狭があり、その様な中において、他の周溝を避け、周溝の形状を変更する程までに意識的に偏在する傾向にある古墳を認める事ができる。その例にあっては、周溝を變形する事なく築造し得る十分な空間が認められるにも拘わらず、周溝の形状を変えてまで近接して位置する古墳の存在が知れる。しかし、全ての古墳が密に分布している訳でもなく、あえて周溝を變形してまで近接する必然性はその中には見当たらない。さらに、当古墳群の様子に地形的にあまり制約されない地域を墓域にもつ古墳群を見ても同様である。つまり、周溝の形状を変更してまで近接する古墳の偏在化は、古墳群の占地等により地形的に制約された範囲を墓域にした為に生じたのではない。しかしながら、古墳を築造するにあたって、墓域の設定に何らかの

規制が働いたことは十分推定できよう。恐らくは、古墳群の墓域とした範囲内において、さらに支群として把握される様ないくつかの限定された領域の設定が想定され、ある古墳においては、墓域を設定したものの、領域に規制される様な箇所であった為、その範囲内で造墓せざるを得ない状況が生じ、周溝の形状を変更してまで密接して偏在したと考えられる。この様に密接して位置する古墳、つまり同一の領域内に存在する古墳の間には、何らかの有機的な関連が窺われよう。いずれにしても、以上の様な想定は周溝の全掘を努めて実施しない限り明らかにする事はできなく、今後の調査に期する処は大きい。

周溝の断面形、掘り方については、概括的には次の様に分けられる。

まず、内外の立ち上りが緩やかに開き、底が比較的水平的なもの、1・12・16号墳を初め23・29号墳が該当する。次に内外が急傾斜をもって立ち上り、水平的な底を有するもので、掘り方も確りしている例、14・15・22号墳を示すことができる。が、14号墳は外側に比べ内側の傾斜が若干弱く、15・22号墳では逆となっている。後者の例については、さらに外側の立ち上りが緩傾斜を呈する例もあり、27号墳を挙げる事ができる。次に断面が『U』字状もしくは『V』字状を呈するもので、12号墳を典型とし、24・28号墳の例がある。28号墳は、ブリッジが設けられている附近で掘り込みが浅くなっているが、他の部分では明らかに『U』字状を呈している。これらの他、調査において周溝の落ち込みが確認されなく、存在の有無が明らかでない例がある。3・9・10・11・21号墳で、周溝が仮に存在したとしても、掘り込みの浅いものであろうと考えられる。8・25号墳は、前方後円墳という事もあり、箇所により変化があるが、後円部のみについて見れば、両者共内側が急傾斜を呈し、外側は確認された8号墳で若干緩やかな立ち上り方を示す。

以上の如く、周溝の掘り方、断面形にはいくつかの形状の違いが認められたが、一古墳の周溝にあっても箇所によりその形状は異り、必ずしも一様でなく、細かくは個々の変化もある。この様な一古墳における周溝の形状の変化や、古墳間における共通性あるいは相違が何によるのかは明確でない。ただ、水平的な底を有し、急傾斜を呈する掘り込みの確りした例は、最も古くに位置付けられる14号墳を初め、概して古く編年される古墳のみに限られる。また、周溝の明確でない5基についても、いずれもが胴張りや有する両袖型横穴式石室を主体部とし、編年的に新しく位置付けられる古墳であるという傾向を窺い知る事ができる。この様な古墳の築造年代によると思われる周溝のあり方の変化は、一般的な傾向であり、墓域を画する施設としての周溝の意義の変化を物語っていると言えよう。

周溝の規模が判明もしくは推定できた古墳は11基を数える。最大の規模を有する古墳は、前方後円墳の25号墳で主軸長約40m、周溝を含め約60mを測る。帆立貝式前方後円墳の8号墳は、主軸長26.3m、周溝を含め34.8mの規模を示す。これら2基の前方後円墳については後円部の径を取り上げ、改めて最大から最小までの規模を示すと、内径では14号墳の3.4mを最大に、3.0mの25号墳、20m前後の16号墳(2.2m)、8号墳(19.6m)、15号墳(1.9m)、1.6m前後の22号墳(17.2m)2号墳(16.5m)、28号墳(16.5m)、27号墳(1.6m)、1号墳(15.5m)、1.1mの12号墳を最小とする。外径では14号墳の4.8mを最大に、2.7m前後の16号墳(2.8m)、8号墳(26.5m)、15号墳(2.6m)、2.4m程の1・2号墳、2.1m前後の22号墳(21.7m)、27号墳(2.0m)、28号墳(2.0m)、1.4mの12号墳を最小とする。この様に規模について、大まかにいくつかのグループを挙げる事ができる。内径1.6m前後の規模を示す古墳が多いが、周溝の幅を加えた外径では、この様な傾向は窺えな

く、多少のばらつきがある。内径規模と周溝幅とは相関関係にあるものの、必ずしも一様ではない。規模の差をもって、短絡的にその被葬者の階層や富の大小と結び付ける事はできないが、そこに何らかの意識が存在している事は充分窺われよう。

以上、周溝について平面形態、掘り方及び断面形、さらに規模の面から各々の成果をまとめてきたが、ここで、先において触れなかった問題について若干述べてみたい。

先ず、8号墳の周溝のあり方に関する問題について触れてみたい。8号墳では、既に述べた様に、当初後円部を巡る周溝が一周し、その掘削後短期間の内に接合部分が埋め戻された状況が知れた。このような事実は、本墳（帆立貝式前方後円墳）の構築に当り、重要な問題を提起している。つまり、(1)前方後円墳として構築する際の、施工の段階的作業の中で採られた措置なのか、(2)当初円墳として設計、施工されたものが、ある段階で前方後円墳に設計変更された為なのか、(3)当初円墳として構築されたものが、後に前方後円墳に改築された為なのかといった問題である。(1)の場合にあっては、前方後円墳として設計したのに、何故後円部の周溝を一周させなくてはならなかったのかという疑問もまた生じてこよう。周溝のあり方はともかく、前方後円墳を構築する際、先ず後円部の築成をある程度もしくは完了させた後、前方部が附設されたと考えられている例は少なくない。看見に触れた限りでも、愛知県池下古墳(註6)、同県大須二子山古墳(註7)、静岡県赤門上古墳、奈良県額田部狐塚古墳、兵庫県養久山古墳群中の一古墳(註8)の例がある。しかし、必ずしも施工の過程であるとは限らず、中には設計変更されたものや後に改築されたものも存在しよう。さらに、本墳の様な周溝の存在が認められる例もありえよう。この様な例は、現在の処、本墳の他に2例、千葉県持塚2号墳(註9)と群馬県王山古墳(註10)で知れている。

持塚2号墳では、後円部と前方部との境界の墳丘下に、人為的に埋没された状態で後円部を巡る周溝が確認されている。このような本墳は、当初円墳として設計、施工されたものが、墳丘の完成に近くなった頃、前方後円墳に設計変更されたと考えられている。その変更の時期について、接合部周溝の堆積状態から掘削後短期間の内である事は充分推定できようが、それをもって墳丘の完成に近くなった頃と限定するのは早急といえよう。また、その時期を墳丘完成後と考える事もでき、とすれば必ずしも設計変更であるとは言いきれず、改築の可能性も窺えよう。この様に、本墳については二つの考えが想定でき一概には判断しかねよう。

王山古墳では、詳細は未報告であるが、後円部下段の葺石が円形に完結して廻り、さらに前方部基壇下に後円部を巡る周溝が続いている事が認められている。このような本墳については、当初円墳として構築されたものが、前方後円墳に改築されたと共に、一次構築後、基壇等の附設による二次構築が成され、墳丘規模が拡大されたと考えられている。また、改築された時期について、後円部に存在する横穴式石室の年代と改築された前方後円墳の墳形から類推される年代との差をもって検討されているが、やや信憑性に欠け、再検討の必要があろう。時期的に短期間の内であれば、設計変更である場合も考えられよう。いずれにせよ、本墳の如く一次構築後二次構築が成され、接合部以外の後円部周溝の一部までもが埋土、盛土され墳丘規模を拡大する様な例においては、その過程を前方後円墳として構築の施工の段階的作業の中で捉えるには若干無理があろう。

それでは、本墳の例について考えてみる事にする。接合部分に確認された周溝と他の部分の周溝とを比較検討すると、後円部における総体的な周溝のあり方として相違が認められる。前者では、内径と同

心円の弧をもって外縁線が描かれているに対し、後者では内・外径の中心のずれが感じられる。この様な両者の違いは、くびれ部近くの外縁線と接合部分の外縁線とがすんなりと結ぶ事のできない状況からも明らかと言えよう。また、後述する本墳の平面企画を通して、この様な周溝のあり方の相違は、さながら無理なく復元できる。つまり、接合部分に確認された周溝は、当初設計された同心円状に巡る周溝の一部であり、他の部分に関しては、外径の中心点を移動し、くびれ部に向い幅を減じる様な形状に変更された周溝と解せよう。とすれば、同心円状に巡る周溝は、円墳としての意識が窺われ、他の部分においては、前方後円墳を意図して採られた周溝の措置と推定されよう。この様な事から、本墳は当初同心円状に巡る周溝を備えた円墳として構築されたが、ある段階、時期に至って前方部を接合する部分が埋め戻され、さらにはくびれ部に向い幅を減じる様な形状に、必要に応じ埋めて変更され、相前後して前方部の周溝の掘削及び盛土が行なわれ、帆立貝式前方後円墳に形態変更されたと考えられる。周溝の形状変更の際して埋土されたと考えられる部分に関しては確認していないが、接合同様埋め戻された可能性は充分類推できよう。変更された時期については、円墳（後円部）の周溝掘削後短期間の内である事は確かであるが、それが円墳の構築の際中なのか完了後なのか知る術もなく、設計変更なのか改築なのかも判断しかねる。いずれにせよ、本墳の示す状況は、前方後円墳として構築の施工の段階的作業の中で捉えられる可能性は薄い様である。

では、本墳が設計変更によらず改築によらず、何故に円墳から前方後円墳（帆立貝式）に形態変更されたのであろうか。本墳の当初円墳としての後円部径を見ると、他の古墳と比べ著しい規模の差は認められない。規模の差をもって、短絡的に被葬者の格差と結び付けるのは問題もあろうが、そこに集約された労働力の差を表現している事は確かであろう。この様な観点からすれば、本墳の被葬者は、古墳群中でも特に際立った存在でなかった事が窺えよう。にも拘わらず、本墳が前方後円墳に形態変更された、もしくは変更できたのは、被葬者のもつ在地的な社会関係や経済力以外に、何らかの外的要因がそこに介在した為であろう。しかしながら、前方後円墳への形態変更であっても、それが前方部の短い帆立貝式とも称される様な形状にしか成り得なかった処に、本墳の被葬者の特徴があったと言えよう。ともあれ、本墳が前方後円墳に形態変更された一義的な要因については、変更の内容がどちらとも判断できない今は、推定しかねる。

以上、本墳の周溝のあり方には興味深い事実が判明し、いくつかの問題を挙げる事ができた。が、判然としない点も多く、いずれの問題も明らかにする事ができなかった。今後の調査によっては、類例の増加も充分予想され、今後に期する処は大きい。

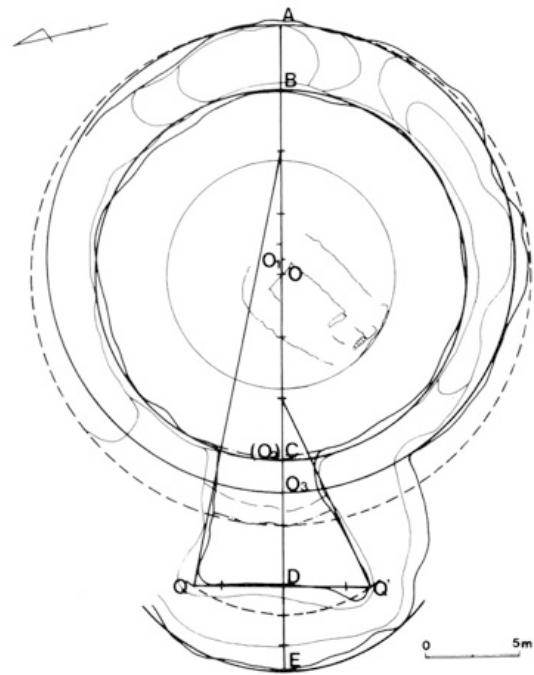
次に2基の前方後円墳の平面企画について述べてみたい。前方後円墳の企画性については、上田宏範氏の型式学的研究(註11)や梶田国男氏の古墳の設計の研究(註12)が著名だが、他にも石部正志・田中英夫・宮川渉・堀田啓一諸氏の築造企画論(註13)、梅沢重昭氏の構築企画の研究(註14)等々、数多くの論が知れる。これら先学の研究は、大型前方後円墳、中でも畿内を中心としたものが殆どで、小規模な前方後円墳については、畿内、地方に拘わらず、必ずしも充分な検討が成されているとは言えない。無論、大型前方後円墳に想定される企画性が、小規模な前方後円墳に符合しないとは限らないが、畿内の大型前方後円墳に見受けられない特徴が、本例の様な地方の小規模な前方後円墳に認められるのも確かである。いずれにせよ、そこに企画性が存在した事は充分推測できる処である。そこで、ここでは先学の研

究を参考に、2基の調査古墳と周辺地域の2例についても併せて、平面企画を検討してみるのが、資料の基礎的な分析に留まっている事を断っておく。また、企画性を想定する場合、その前提に基準尺度の問題があるが、当時使用されていたであろう尺度の想定及びその取り扱い方も論者により様々で、一概には判断しかねる為、ここでは検討を避け、切り離して平面企画の検討に当る。

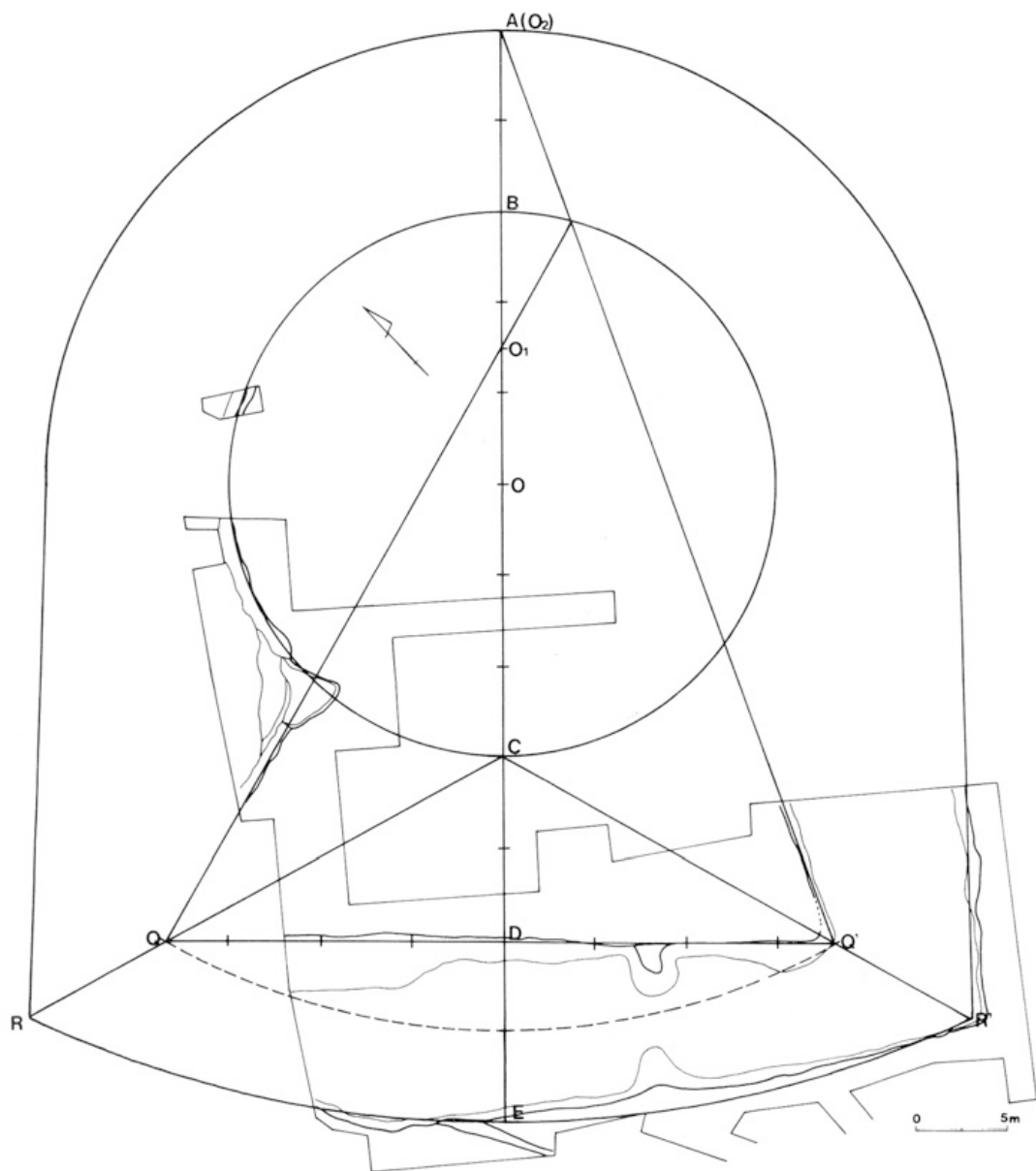
実際の検討に当っては、基本単位を求めて主要各部の比率化を行い、作図法により企画の段階でどのような操作が行なわれたかを想定し、墳形を復原してみる。基本単位については、8号墳等の円墳から前方後円墳への形態変更という事例から後円部を基準とする妥当性を得、それを6等分した値が主要各部の比率化において、最も整然とした比が得られる事から、後円部径の $\frac{1}{6}$ を基本単位とする見解

(註15)を採る。また、後円部の $\frac{1}{6}$ を基本単位とする主軸線上の地割りに主眼を置き、墳形を構成する円弧、直線が主軸線上の地割りと何らかの関係をもって成り立つという想定のもとに操作を行う。計測点の設定及び表示は、基本的には上田宏範氏の方式に依った。以下、個別に検討を行って述べる。

長沖8号墳 後円部周溝内径(後円部径)BCは、石室奥壁中央に中心点Oを置き正円形に描き出される。後円部後背の周溝幅ABは後円部径の $\frac{1}{6}$ 、つまり1単位を示す。後円部と前方部の接合部分の周溝幅も同じく1単位である。Oを中心に半径4単位の円を描くと、後円部後背の一部と接合部分の周溝の外縁線に合致する事が知れる。この外径をもつ周溝が前述の当初円墳としてのものである。前方後円墳変更に伴い採られたくびれ部に向い漸次幅を減じる周溝の外縁線は、Oを主軸線上に $\frac{1}{4}$ 単位後退させた O_1 を中心に O_1A を半径として描かれている。前方部長CDは2単位の長さに合致する。前方部前端幅(前方部幅)QQ'はDから左右に約 $1\frac{1}{2}$ 単位づつと、やや整然さに欠ける。そこで、前方部前面の外縁線が弧を描く事や後述の赤堀村285号墳の前端線が弧を描く事等から帰納して操作すると、後円部円周と主軸線との交点Cを中心(O_2)とし、 $O_2D + \frac{1}{2}$ 単位を半径とする円弧を描く事により、前端線との交点QQ'が求められ、前方部幅を決める事ができる。側線の開きの角度(くびれの角度)は左右非対称で、右側線はOから主軸線上に2単位前進させた点とQ'を結ぶ事で、左側線はOから2単位後退させた点とQを結ぶ事で、両側線を引く事ができる。前方部前面の周溝幅DEは $1\frac{1}{2}$ 単位を示す。外縁線は曲線を成し、一般的なものと異なる。前方後円墳変更の際して採られた周溝の外縁線と主軸線との交点を中心(O_3)に O_3E を半径とする円弧で描かれている。左右の外縁線は、基本的には墳丘相似形のくびれを有する形状を呈するが、やはり曲線を成す。この曲線の操作方法は明らかでない。前述の如く、前方部幅は



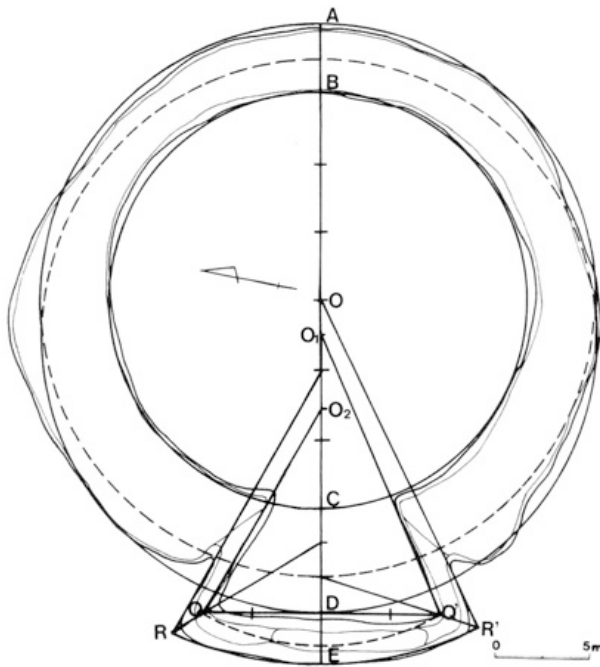
長沖8号墳平面企画推定復原図(1:400)



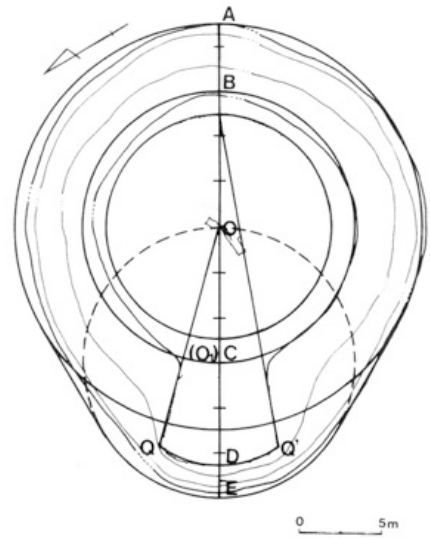
長沖25号墳平面企画推安復原図（1：400）

前面外縁線が円弧をもって描かれるのと同様に、ある定点から一定の長さをもって半径として描かれる円弧と前端線との交点により設定されると考えられ、その為に整然とした比率が成り立たないと言えよう。主軸線上の後円部径BC：前方部CDの関係は6：2となり、1単位の実長は3.3mを測る。

長沖25号墳 確認された後円部周溝内縁線から内径（後円部径）BCを割り出し、その中心点Oを通り前方部前端線と直交する主軸線を設けると、BCの1/2、つまり2単位の所に前端線が合致し、さらに2単位延長すると周溝の外縁線に当る。従ってBC：CD：DEは6：2：2となる。前方部幅Q'はD'Q'が3.65を数え、DQについても同様と推定され、整然とした比率を示さない。そこで8号墳同様



千光寺1号墳平面企画推定復原図（1：400）
（原図は『千光寺』による）



赤堀村285号墳平面企画推定復原図（約1：450）
（原図は『赤堀村峯岸山の古墳1』による）

の操作を行うと、OBの midpoint、左側線の延長線と主軸線の交点でもある点を中心（ O_1 ）に $O_1D + 1$ 単位を半径とする円弧と前端線との交点が幅を決定する事が窺える。右側線はBから主軸線上2単位後退させた点と Q' を結ぶ事により、左側線は O_1 と Q を結ぶ事により成され、また両側線は後円部の円周上の一点で結合する。前方部前面の周溝外縁線は曲線を成し、右側線の延長線と主軸線との交点を中心（ O_2 ）にOEを半径として描く事ができる。右隅角部 R' はCと Q' を結ぶ線の延長線に来る様で、 CR' という隅角線（稜線）が引ける。後円部周溝は、 O_2 を外縁AとしOを中心にしてOAを半径として半円を描き、 $R \cdot R'$ とを各々直線で結び、推定される「盾形」の周溝を復元してみた。尚、1単位の実長は5.0mである。

千光寺1号墳 前方部長CDは $1\frac{1}{2}$ 単位、前方部前面周溝幅DEは $\frac{3}{4}$ 単位、後円部後背の周溝幅は1単位に地割りされている。前方部幅 QQ' は整然とした割合を示さず、OCの midpoint、左側線の延長線と主軸線との交点でもある点を中心（ O_2 ）とし、 $O_2D + \frac{1}{2}$ 単位を半径とする円弧と前端線との交点が幅を決める様である。右側線はOから主軸線上に $\frac{1}{2}$ 単位前進させた点と Q' と結ぶ事により、左側線は O_2 と Q を結ぶ事により成される。両側線と主軸線との交点は1単位の間隔をもち、周溝外縁の両側線も同様に主軸線上で1単位の間隔を示す。前方部前面周溝外縁は曲線を成し、Oを中心にしてOEを半径とする円弧で描かれる。右隅角部 R' はDから主軸線上に $\frac{1}{2}$ 単位後退させた点と Q' を結んだ延長線上に、左隅角部RはDからさらに $\frac{1}{2}$ 単位後退させた点と Q を結んだ延長線にくる。外縁の右側線はOと R' を結ぶ事により、同左側線はOから1単位前進させた点とRを結ぶ事により成される。後円部周溝外縁は一見正円形に見えるが、Oを中心にして4単位を半径にする円と、Oから主軸線上に $\frac{1}{2}$ 単位前進させた点、右側線の延長線

と主軸線と交点でもある点を中心（ O_1 ）に同じく4単位を半径とする円との結合による。尚、1単位の実長は3.7mである。

赤堀村285号墳 O を中心の後円部径BCの $\frac{5}{6}$ を径とし、後円部墳丘を描く事ができる。前方部長CDは $2\frac{1}{2}$ 単位をとる。前端線は曲線を成し、Cを中心（ O_1 ）に O_1D を半径とする円弧で描かれるが、弧の長さ QQ' を決める方法は明らかでない。右側線は O から主軸線上に $2\frac{1}{2}$ 単位後退の主軸線と墳丘の円周との交点と Q' を結ぶ事で、左側線は O と Q を結ぶ事で成される。周溝外縁は、 O を中心とする半径 $4\frac{1}{2}$ 単位の円とC（ O_2 ）を中心とする後円部径と同じ3単位の円を結合させ、接線で2つの円を結ぶ事により描く事ができる。本墳の如く「扇形」の前方部を有する例は、他に若宮八幡古墳で知れている（註16）。1単位の実長は2.7mである。（金子 章）

- 註1 菅谷浩之・笹森健一『広木大町古墳群調査概報』美里村教育委員会 1975年
- 註2 菅谷浩之・駒宮史朗・増田逸朗『青柳古墳群発掘調査報告書』埼玉遺跡調査会 1973年
- 註3 松本浩一「群馬県における横穴式石室の前庭について」『古代学研究』80 古代学研究会 1976年
- 註4 松村一昭「赤堀村峯岸山の古墳」1・2『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告』4・5 赤堀村教育委員会 1975・1976年
- 註5 松村一昭「赤堀村地蔵山の古墳」1『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告』7 赤堀村教育委員会 1977年
- 註6 久永春男・七原恵史「池下古墳の調査」『守山の古墳』名古屋市教育委員会 1969年
- 註7 田中 稔「前方後円墳の築造—名古屋市大須二子山古墳の場合」『歴史評論』第49号 1953年
- 註8 横本誠一「前方後円墳の企画とその実態」『考古学ジャーナル』No.150 ニュー・サイエンス社 1978年
- 註9 田中新史・新田栄治他「東間部多古墳群」『上総国分寺台遺跡調査報告』I 早稲田大学出版部 1974年
- 註10 中村富夫「群馬総社古墳群」『観光資源調査報告』VOL.5-3 日本ナショナル・トラスト 1977年
- 註11 上田宏範『前方後円墳』学生社 1969年 他
- 註12 梶 国男『古墳の設計』築地書館 1975年 他
- 註13 石部正志・田中英夫・宮川涉・堀田啓一「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89 古代学研究会 1979年 他
- 註14 梅沢重昭「毛野の古墳の系譜」『考古学ジャーナル』No.150 ニュー・サイエンス社 1978年
- 註15 上田宏範氏・甘粕健氏がこの見解を執る。上田宏範 註11に同じ。甘粕健「前方後円墳に関する一考察」『日本考古学の諸問題』考古学研究会 1964年
- 註16 田島桂男他「八幡原遺跡」『高崎市文化財調査報告書』第3集 高崎市教育委員会 1974年

2. 主 体 部

調査した古墳は、周溝の一部を確認しただけのものも含めれば総計20基に及ぶものであるが、そのうち主体部の検出されたものは12基を数えるのみであった。その12基の主体部についても、盗掘や耕作等による破壊が著しく、全容の知れる完全な形で存在していたものはほとんどなく、主体部を検討するに際して大きな資料的制約をまぬがれぬものであった。そのため、ここではわずかに残存している主体部については、構築論的立場より復原を行なえるものはできるかぎり行なって分析を加えることにする。

尚、資料を検討するに当っては、本調査に附随して行なわれた環状1号線の発掘調査例も合わせて行なうことにした。

検出された主体部の内訳は、竪穴系の石室4基、横穴式石室10基（そのうち環状1号線2基）であった。そこで本節では、以下竪穴系石室と横穴式石室とに分けて検討を加えることにしたい。

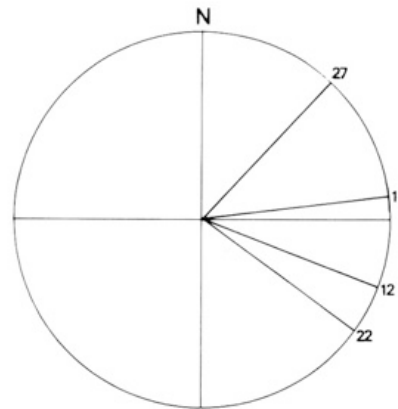
〈竪穴系石室（礫塚）〉

竪穴系の主体部は1・12・22・27号墳の4基から確認された。4基の主体部はいずれも河原石を使用したものであるが、27号墳においては、東壁と南壁の二ヶ所に緑泥片岩の板石が用いられたものであった。そのため、27号墳の主体部は、箱式石棺と思える様相を一部呈しているが、主体的には

竪 穴 系 石 室 一 覧

古 墳	主 軸	主軸長(m)	幅 (m)	壁 高(m)	構築面の高さ(旧表土より)	棺 床 面
長沖1号墳	N-83°-E	2.65	0.65	—	0.40 ~ 0.45	一部粘土層
長沖12号墳	N-111°-E	(1.75)	0.3~0.4	0.35	0.35 ~ 0.40	粘土層の上に小砂利敷
長沖22号墳	N-126°-E	(1.10)	0.85	0.55	1.00 ~ 1.20	
長沖27号墳	N-43°-E	※2.20	0.45	0.10	0.40 ~ 0.50	粘土層の上に小砂利敷

河原石を構築の基本石材としたものであり、板石を数枚組み合わせた所謂箱式石棺の形態とは若干性格を異にするものである。4基の主体部は、構築面にそれぞれ共通する点と異なる点を合わせ持ち、確実に同類として扱うにはやや問題はあがあるが、いずれも礫塚として捉えて差しつかえないものであろう。構築方法を見ると、22号墳と27号墳が掘り方を有していることに共通点を見い出せるのに対して、1号墳では埋葬部だけに土壌がみられ周辺に幅1.3 m程の控え積みがあるという違いがある。又、棺床面は12号墳と27号墳が薄い粘土層の上に小砂利を敷いて構築しているものであるのに対して、1号墳や22号墳においては、一部粘土層が認められるものの小砂利敷は検出されていないという相違点がみられる。この様に主体部の構築面からみるとすべてが全く同様な方法を取っているものではなく、この種の石室が細かいバラエティーをもっていることが窺える。しかし、4基の主体部の中で最も大きな相違点は主体部の構築面の高さであろう。1・12・22・27号墳がいずれも旧表土より40~50cm程盛り土



竪穴系石室主軸方位

した上に主体部を築いているのに対して、22号墳は、1.2m以上も高い所に構築面を置いていることである。両者の関係は墳丘の高さに関連するものであり、22号墳が比較的高い墳丘（2m以上）を有しているのに対して、他の3基は復原してもさほど高くはならないものである。古墳を構築する際に古墳の直径と墳丘の高さが身分的な表示を示すものとすれば、両者は古墳群内における被葬者の性格の違いをも物語っていると言えようか。

各石室の規模については、一覧表に示したとおりであるが、12・22号墳については破壊のため主軸長が不明であった。推定すればいずれも2m～3m程のものと考えられ、主軸長の対する差は、それ程認められない。又、幅については、22号墳の土壌幅85cmが最高であり、他は40～65cm程の概して狭いものであった。主体部の主軸の向きについては、生野山古墳群の尾根沿に点在する礫塚群が、規則的に東西のほぼ一定方向に向くという様な現象はみられず、わずかに1号墳がほぼ東西方向に向くだけで、他はかなりの方位差がみられる。特に22号墳と27号墳においては、90°に近い違いが認められている。現在までの知見では、本地域における竪穴系石室の主軸は、一般に東西方向に向くと考えられていたが、本古墳群の場合は、かならずしもそういう様相は認められない。この事実からすると編年的に古く位置づけられる袖無型石室の開口方向が西に向く例が多いことからして考えられている竪穴式石室との関連性は、主軸の方向を見る限り、両者を関連づける大きな要素にはなり得ないものと言えるであろう。殊に、丘陵上に存在する古墳群と異なって、本古墳群の様に立地的条件で主軸の方向が制約されることのない場合は、主軸の向きを決定する要因を他のものに求めなければならないであろう。

4基の古墳の位置は近接することなく、調査区内に広く分布しており、竪穴系のものがすべて1ヶ所に集中するという様相は認められなかったが、1号墳の北に2号墳、22号墳の西に14・15号墳、27号墳の西に28号墳という様に、同時期あるいは若干古く遡る古墳が1～2基近接して位置している事は興味深い事実であろう。少なくとも賀家の上支群では、6世紀前半代には、礫塚を主体部とする古墳が4～5ヶ所に併行して存在している事が明らかである。この分布の様相が異なる被葬者集団の墓域の違いを示しているのか、あるいは別の要因によるものかは、調査例からでは早急に判断は下せないにしても、古墳群の形成を考える上で大きな問題点であろう。

礫塚内出土遺物は、12号墳の主体部横の攪乱内より検出されたガラス玉が、その位置より考えて唯一の副葬品と思われる以外は全く検出されておらず、この面からの比較検討は不可能であった。石室外遺物としては、1・12・27号墳の周溝内より土師器が出土していることが注目されよう。一般的に土器類が横穴式石室を有する古墳では前庭部や石室内より出土する例が多いことからすれば、そこに大きな相違をみることが出来る。2号墳は主体部が確認されていないので問題もあるが、やはり周溝内外側立ち上がり部より土師器杯と須恵器無蓋高杯を出土しており、同様な主体部を有していた可能性が高い。

現在、本地域でこの種の竪穴系の石室が確認されているのは生野山古墳群（註1）をはじめ、寄居町北塚屋遺跡例（註2）、本庄市下野堂所在古墳（註3）、諏訪山古墳（註4）等である。このうち発掘調査が行なわれているのは、生野山古墳群・北塚屋遺跡だけであり、他は断面観察等で確認されたもので、規模・その他の詳細については全く不明である。又、調査の行なわれた生野山古墳群、北塚屋遺跡についても未だ報告書が刊行されていないので詳細は明らかではない。他には、6世紀前半代に位置づけ

られている南塚原3号墳（註5）の主体部があるいは同様なものと考えられるが破壊されていて明確ではない。他地域においては、埼玉古墳群中の稲荷山古墳（註6）の例を上げることができる。この第1主体部である礎部は規模・副葬品等が明らかになっている良好な資料であるが、古墳の築造年代や主体部については、研究者によって多少の見解の差がある。且つ100m級の大型前方後円墳の主体部であるものと本古墳群中の小円墳の主体部の性格を同一視することはできないであろう。同様な主体部を有する古墳では、駒堀遺跡第1号墳（註7）がある。1基だけの調査例で、出土遺物も全くなく、年代・性格等については不明であるが主体部の構築方法や周溝の存在しない点で、本古墳群中のものよりは後出する感が強い。以上の様にこの種の石室については、未だ資料的に少なく、その構造・性格等については不明な点が多い。しかし、本古墳群中の4基の主体部について、一応編年の位置づけを行えば、その所産年代は、出土土器、横穴式石室の出現時期等から考えて、6世紀初頭から中葉の比較的短期間に行なわれたものであろう。所謂箱式石棺や竪穴式石室、初期横穴式石室との関連性については、これからの資料の蓄積をまって再検討する必要がある。

〈横穴式石室〉

横穴式石室については、現在までの児玉郡及び周辺地域の調査例を踏まえて、形態より大きく7タイプに分類した。以下その分類に従って検討する。長沖古墳群の発掘調査では、片袖型及びその他の型の石室で検出されていないものもあるが、主体部について検討する際に、確認された石室だけを取り上げて比較検討したところで、横穴式石室全体の中での編年の位置・性格等を知ることは不可能である。そこで、今回直接関係する遺構の認められなかったものについても、一応簡単に取り上げて比較資料としたい。

横穴式石室の形態

袖無型（Ⅰ）	┌ 短冊形（a）	長沖4・28号墳
	├ 笏形（b）	長沖13号墳
	└ 胴張り（c）	※南塚原6号墳
両袖型（Ⅱ）	┌ 長方形（a）	長沖23号墳
	└ 胴張り（b）	長沖3・8・9・10・11・21号墳
片袖型（Ⅲ）	┌ 長方形（a）	※北塚原6号墳
	└ 胴張り（b）	※野原古墳（前方部石室）

※印は類例資料としてあげたもの

袖無型石室は、玄室部と羨道部の構築段階を別にしないで、一度に築かれるため、両者が梱石などでしか区別できない形態のものである。この型の石室は平面プランより、短冊形、笏形、胴張りのものに大別できる（註8）。長沖古墳群では、4・13・28号墳の3基がこの型に属する。

両袖型石室は、玄室部と羨道部が門柱石等で左右側壁が著しく屈曲して両者が明瞭に区別されるものである。この型の石室には、玄室部と羨道部の構築段階を別にして、玄室棺床面と羨道部床面が梱石部で段を成すものが存在する。平面形は長方形プランを呈するものと側壁にきれいな曲線を描く胴張りの

ものにと大別できる。前者に2・3号墳・後者に3・8・9・10・11・21号墳が属する。8号墳については、一時袖無型胴張り石室と考えていたが、羨道部と玄室部に段を有し構築の段階を別にしていくことからII-b型に含めた。

片袖型石室は、左右側壁のどちらかに屈曲を有するもので、平面形は長方形のものと胴張りを呈するものにと大別できる。このうち長方形プランの石室については、玄室部の長軸が主軸に対して平行するものと、直交するものがある。後者についてはL字形石室(註9)として把握されているものも含まれようが両者の構築理念の相違(設計上の意図)が、今のところ明確でないため、ここでは一括して長方形石室の中に入れておくことにした。この型に属する古墳は、調査例では確認されていない。近接地域に類例を求めれば、III-a型に十二ヶ谷戸15号墳(註10)、北塚原5・6号墳(註11)、黒田4号墳(註12)が属する。III-b型については、現在のところ野原古墳の前方部石室(註13)1例を上げることができるのみである。

袖無型石室の編年については、群馬県、埼玉県、長野県の例について行なった坂本和俊氏の使用尺度による細かい分析(註14)がある。ここではこの成果を基に検討を加えたい。同氏は袖無型石室の形態変遷は奥壁幅と羨門幅の差があまりない、「短冊形」から、奥壁幅と羨門幅の大きい「笏形」に変化し、「笏形」が胴張りを持つ両袖型横穴式石室の影響を受けて「徳久利形」(ここでいう胴張り)に発展したと考えている。又、その所産年代については「短冊形」が6世紀初頭から後半、「笏形」で奥壁幅と羨門幅の差が2尺以上のものが6世紀中葉から7世紀前半、「徳久利形」が、6世紀末から7世紀前半と捉えている。尚、分析の基本となった使用尺度の変遷については、この種の石室の平面企画に高麗尺伝播以前の24cm尺と25cm尺の使用が認められるとし、相対的に24cmが古いことを指摘した。これらを整理すれば、基本的には短冊形石室で24cm尺使用の狭長な石室が最も古く、幅の広い追葬を意図した胴張り石室が新しくなることを示している。そして、この型の出現時期を6世紀初頭から前半に置いている。長沖古墳群のI型に属する石室について尺度の適用を行なった結果、I-a型に属する28号墳は、24cm尺で幅が4尺、埋葬部長が12尺となり、最もすっきりした数置が得られることから、企画には24cm尺の使用が考えられる。又、4号墳においても、石室全長が不明で適用ヶ所が少ないが、やはり幅が24cm尺で4尺と成ることから同様な尺度の使用が考えられる。両古墳の石室は、構築石材をやや異にするものの、形態についてはよく類似している。以上のことから考えれば、両墳の石室は、袖無型石室の最も古い形態の部類に属するもので、その所産は6世紀初頭から前半の年代が与えられよう。このことは、28号墳の出土土器片(鬼高I式と考えられる)と相矛盾しないものである。しかし、同氏が最も古い例として上げた北塚原3号墳の石室よりは若干後出するものである。次に13号墳をみると、I-b型に属するもので、25cm尺で奥壁幅5尺、埋葬部長18尺・石室全長24尺・羨門幅4尺で完尺が得られることから、使用尺度には25cm尺が考えられる。この事からすれば、4・28号墳に後出する石室で6世紀中葉から後半にかけて築造されたものであろう。出土土器がみられないので細かい比較はできないが、4・28号墳に比べて、本墳の石室は埋葬空間が広くなり、より追葬が可能なものであること、埴輪に形象埴輪等が多く見られ、埴輪の盛行する時期と考えられることから、やはり大きく矛盾しないものである。3基の石室の規模については、後表に示した通りであるが、28号墳と4号墳が使用尺度の検討において触れた様に、ほぼ同規模のものである。13号墳の石室は全容の知れる良好なも

ので、規模的にみて4・28号墳より幅・全長とも大きくなる様相がみられる。石室の主軸は、3基ともほぼ同方向のN-30°-E前後に取っており、開口方向が西に向く傾向は認められない。参考例としてあげた類似する大町15号墳の石室(24cm尺で奥壁幅4尺、全長25尺、埋葬部長9尺と考えられる)が、N-

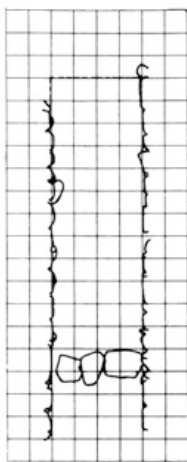
袖無型石室一覧

古墳	主軸	石室全長(m)	埋葬部長(m)	奥壁幅(m)	羨門幅(m)	平面形
長沖28号墳	N-30°-E	(3.85)	(2.90)	0.99	0.99	短冊形(I-a)
長沖4号墳	N-29°-E	(4.52)	—	1.00	1.00	短冊形(I-a)
長沖13号墳	N-32°-E	5.84	4.22	1.32	0.98	笏形(I-b)
大町15号墳	N-77°-E	5.96	2.09	0.96	—	短冊形(I-a)

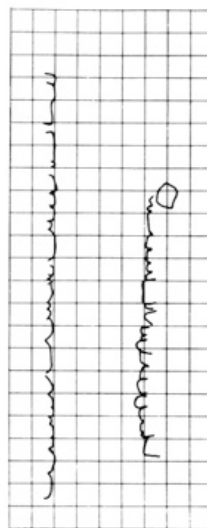
77°-Eの西方に開口するものに対して、南よりに開口している。しかし、この種の石室の多くが西方に羨門を向ける傾向は認められる様である。

3基の石室のうち、28・13号墳はやや角ばった河原石を使用し、側壁を構築しているものであるが、4号墳は主体的に割石風の自然石をもって構築していてやや趣きを異にしている。しかし3石室は、一様に控え積み、後込めをもって構成されており、構築方法を同様にするものである。28号墳においては、若干掘り込んで側壁の根石を設置していることが窺うことができた。

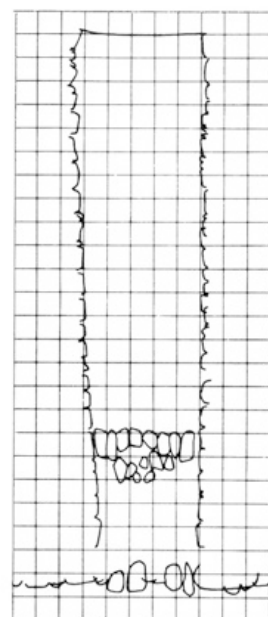
3基の古墳の位置は、4・13号墳が近接しつ位置しており、28号墳はやや離れている。青柳古墳群中の北塚原支群(註15)や黒田古墳群(註16)の様に、袖無型石室を有する古墳が1ヶ所に集中して築造されるという様な顕著な現象は、長沖古墳群の調査では全面発掘を実施していないので明確には認められていない。4・13号墳附近にこの種の石室がやや偏在するのではないかと想定されるだけである。しかし、附近には後述する両袖型胴張り石室等の新しい形態のものも存在しているので、大極的にみれば、



長沖28号墳



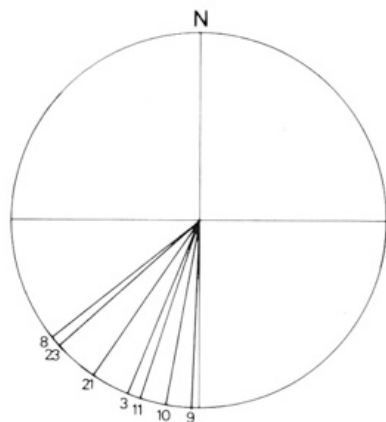
長沖4号墳



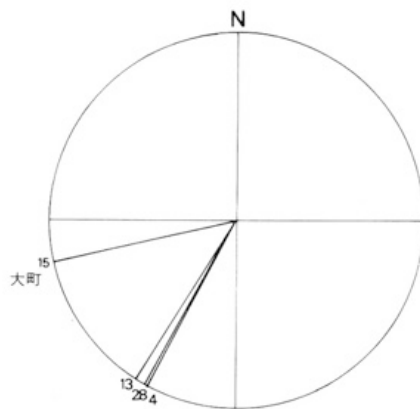
長沖13号墳

0 1m

やはり両タイプの石室が混在するものと考えられる。この様な例は大町古墳群（註17）等でも認められる現象で、黒田古墳群等と比較する以前に、同一古墳群内における支群構成を細かく分析していく必要がある。今のところ、袖無型石室を主体部を持つ古墳群には、その分布のあり方において、この種の石室だけ認められるもの（黒田古墳群例）、他のタイプの石室と混在するもの（長沖古墳群例）とがあることの指摘にとどめたい。



両袖型石室開口方位



袖無石室開口方位

両袖型石室は全部で7基検出された。そのうち長方形石室が23号墳の1基、胴張り石室が8・3・9・10・11・21号墳の6基であった。長方形石室は、隣接する群馬県においては普遍的に存在する形態であるが、本地域においては極めて検出例が少なく、長沖23号墳と南塚原4号墳の2例が知られるのみである。この様な現象は角閃石安山岩使用石室についても認められることで、この石材を使用した石室が形態的に長方形と胴張りのものに大別でき、群馬県には胴張りを有する石室は少なく、逆に埼玉県ではほとんどの石室が胴張りを有する（註18）という様相と一致をみている。しかし、群馬県全体をみた場合、胴張り石室の存在する割合は決して低いものではなく、角閃石安山岩使用石室の一樣相とみることもできよう。いずれにしても、本地域にII-a型に属する石室が極めて少ない事実は注目されるものである。本地域にみられる2基の長方形石室は、どちらも羨道部と玄室部の境に段を有するもので、構築方法としては、段を有さないものに対し、石室の構築段階を別にする複雑さを持っており若干

両袖型長方形石室一覧

古墳	主軸	石室全長(m)	玄室長(m)	奥壁幅(m)	羨道部長(m)	羨道部幅(m)
長沖23号墳	N-48°-E	5.70	3.10	1.60	2.61	
南塚原4号墳	N-36°-E	6.14	3.51	2.36	2.63	1.15

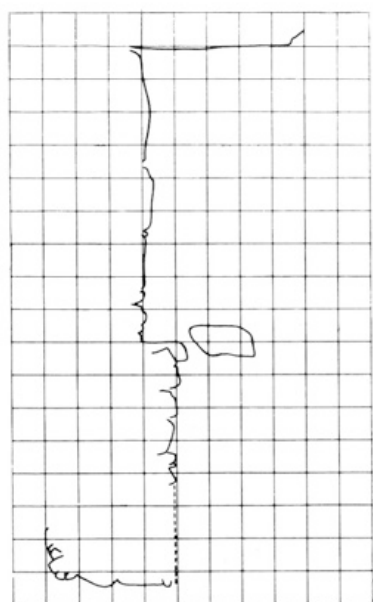
古く位置づけられよう。これは出現期の胴張り石室に、段差を持つのが多いのに対し、新しく下る石室には全くみられないことから裏付けされるであろう。2基の石室は、石室全長において大きく変らないものであるが、奥壁幅と玄室長の比が異なるものである。23号墳の石室がほぼ1:2であるのに対して、4号墳は1:1.5に近いものでより正方形に近いものである。尾崎氏の成果（註19）によれば、4号墳の石室が後出するものである。又、23号墳が確実に埴輪を有するのに対して、4号墳では、その設置が確実でなく、あったとしても数の少ないものと考えられることからしても、後出する感が強い。

使用尺度については前者が高麗尺で奥壁幅5尺・玄室長9尺・全長16尺に想定されるが、後者は唐尺で石室全長20尺・奥壁幅18尺・玄室長12尺・羨道幅4尺が考えられる。本地域における高麗尺使用開始は6世紀後半から6世紀末であるという見解(註20)もあり、23号墳も埴輪を有している事・出土土器等から6世紀後半に位置づけられよう。4号墳は前記した理由から若干新しくなるものであるが、7世紀前半までは下らないものと思われる。本地域においては、この長方形石室に併行して、あるいは若干遅れて胴張り石室が爆発的に多くなることを特徴としている。

河原石積み胴張り石室は、その側壁にみられる曲線の創出に円の弧を利用したものと考えられ、その創出規準に後述する4つの規則性が想定された。そして、その「石室全長」、「石室全長× $\frac{1}{2}$ 」、「玄室長×2」、「玄室長」の各創出規準長をそれぞれA・B・C・D型と分類し、その型の変化が胴張り石室の変遷に対応するものと考えた(註21)。また、最大幅の位置(それぞれの弧の中心点を結んだ線)より、平面形態をI類・II類に大別し、平面形の決定される要因を、奥壁幅・玄室長及び最大幅の位置の漸移的な変化と曲線創出長の関係の中に求めた。しかし、そこでは各型の所産年代について明示したものの、具体的な例を上げないまま、真実性のない中途半端なものとなっている。そこで長沖古墳群の調査例を中心にその部分を若干補足するとともに、本古墳群例を再検討したい。尚、検討するに当たっては、前述の方法にそっているものである事を明らかにしておく。

各石室について操作を行った結果、9・10・21号墳は上記分類のC型に属するものである。C型の石室は、胴張りが最も弱いことを特徴とする一群である。

そのうち、21号墳は厳密にはII類であるが、I類に近い形態を取るものであるのに対して、9・10号墳の石室は、典型的なII類のものである。I類とII類の関係については、最大幅の位置が中央にあるI類が、石室平面企画の上で最も基本的な形態と考えることができよう。つまり、中央部に最大幅を置くことは、奥壁幅と玄室前幅が等しくなるもので、「玄室長の $\frac{1}{2}$ >創出長」の関係にならない限りは、設計上すべて可能なものである。これに対してII類の場合は、より複雑になり創出長と玄室長と最大幅の位



長沖23号墳 0 1m

両袖型胴張り石室一覧

古墳	主軸	石室全長(m)	玄室長(m)	奥壁幅(m)	玄室最大幅(m)	羨道部長(m)	羨道部幅(m)
長沖3号墳	N-22°-E	(2.75)	2.35	1.48	1.78		1.05
長沖9号墳	N-2°-E	4.34	2.79	1.29	1.51	1.55	0.84
長沖10号墳	N-10°-E	$\frac{(2.92)}{3.60}$	2.24	1.25	1.37	(0.68)	0.95
長沖11号墳	N-28°-E	(4.85)	(3.08)		1.80	1.4	0.85
長沖21号墳	N-34°-E	8.16	5.48	2.24	2.68	2.68	1.00
長沖8号墳	N-51°-E	5.86	3.57	1.82		2.29	1.14

置の三者が一定の関係を越えると設計上不可能なものが出てくる。このためⅡ類の石室には、平面プランを決定する時に、三者の関係をより考慮する必要が生じる。しかし、実際の石室は全体のプロポーションにおいて均整の取れたものであることは、この三者の関係をうまく利用していることが窺えるのである。このことから一応Ⅰ類を基本形態、Ⅱ類をその発展したものとみることができよう。これについては、本地域において最も古い両袖型胴張り石室と考えられる生野山65号墳がA型-Ⅰ類になること、またDa型-Ⅱ類の塚本山1号墳より埴輪例を有することから古いと考えられる庚申塚古墳がやはりDa型-Ⅰ類になることから、基本的にはこの想定が考えられる。そして、9・10・21号墳の各石室は、規模において大きく異なるものであるが、どちらも同じ型に属し、Ⅰ・Ⅱ類の関連の中で捉えられるものである。21号墳と9・10号墳を構築面から比較すると、前者は模様積み手法に典型的なものを取るのに対し、後者は根石のみに大型の礫を残し、小石材を主体的に小口積みする模様積みの簡略化された手法を取る。また、21号墳が埴輪を有しているのに対し、9・10号墳ではみられないことから、9・10号墳の方が後出するものと考えられる。しかし、両者はその所産年代において9号墳出土土器（須恵器平瓶）等から大きく隔たるものではないと見られる。と同時に、この型が埴輪の消滅する前後に位置づけられると考えられるであろう。

このC型に属する石室の類例を求めると南塚原5号墳、同8号墳が上げられる。両墳とも埴輪の設置が認められるもののその数が少なくなっていること。また、8号墳は出土土器から7世紀前半に比定されている（註22）等から、このC型の石室はおおむね7世紀前半の所産と考えられよう。

11号墳の石室は奥壁が破壊されて存在しないため、石室全長等が明確でないが、石室断面及び控え積みとの関係から、奥壁の位置は東壁の北端に残存する根石より、そう距離を隔てないと考えられる。そして、残った側壁部より想定した弧の長さとの復原した石室全長がほぼ一致することから、この石室はおそらくA型に属するものと思われる。A型の石室については、概して古い時期のものに多いが、その終末は7世紀中葉まで存在することが、塚本山古墳群の例から明らかである。同古墳群中では7世紀中葉に編年される11号墳の石室が、やはりA型に属するものである。そして、7世紀後半以降の石室にはA型石室は全く存在しないと同時に、石室の控え積みがみられなくなり、石室も半地下式的なものになるという石室の簡略化される傾向が認められる。これからすると11号墳の石室の年代は、7世紀後半以降には下らないものと思われる。また、上限についても、埴輪を有していない事から7世紀初頭まで遡らないものであろう。このことから11号墳の石室は、A型の中でも最も新しい時期の7世紀中葉という年代が与えられよう。出土した土器は、新しい傾向を示しているが、これは追葬時のものと考えられる。

A型石室の築造年代が出現期のものから7世紀中葉まで比較的長く続くのは、この型の創出規準である「石室全長」が、両袖型胴張り石室の曲線の企画にあって最も基本的な長さであったためであろう。これは6世紀末から7世紀前半に位置づけられる石室のほとんどがA型に属するものであって、Da型やC型石室の占める割合が少ないという様相からもいえるものである。この事実は前述したC型石室とA型石室との関係をも示すもので、C型やDa型はA型石室から発展した一種の変形形態と捉えられるものであろう。

3号墳の石室は、9・10号墳例に比較して胴張りが強い様相が窺えるものの、玄室長・石室全長が



長沖21号墳 (1:120)



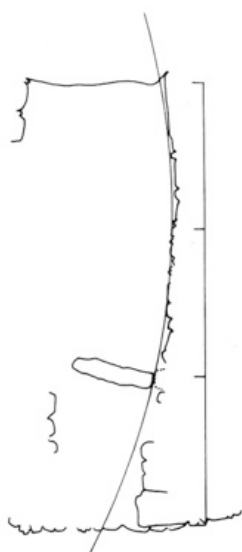
長沖9号墳 (1:80)



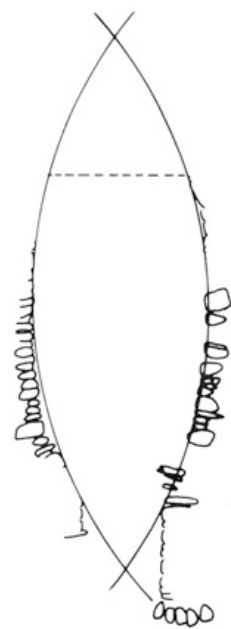
長沖10号墳 (1:80)



長沖3号墳 (1:80)



長沖8号墳 (1:100)



長沖11号墳 (1:80)

明確でないため、胴張り石室分類のどの型に適応するかは不明である。あるいは玄室長を規準としたものである可能性が考えられるが、明確なものではない。そのためその平面形態より年代を類推することは不可能である。しかし、側壁の構成に9・10号墳と同様な手法がみられることから近い年代に置くことができよう。3号墳の石室の側壁は所謂模様積みといわれる積み方で構築されているものであるが、この手

法の典型的なものと若干様相を異にするものである。この手法は、その積み方の特徴から大きく4タイプに分類され、その分類と胴張り石室の前述の型がほぼ一致し、新しくなるにつれて典型的な模様積みが見られなくなる傾向が捉えられている。

ところで、この構築技法は両袖型胴張り石室以外の形態には全く認められないことから、この種の石室の出現を要因として取られた手法とみることができる。小石材を多用する模様積みが、胴張り石室の構築において適した手法である事は、構造力学的な面からも窺えるであろう。しかし、この構築技法は両袖型胴張り石室の築造にあたって、全く新しい技術によって発現したものではなく、前代の河原石積み石室にみられる積み石技法から発展した工法と言えるであろう。つまり、模様積みは在来の横穴式石室の手法から、全く系譜を異にするものではなく、胴張りプランの導入が在地の経験的技法に影響を与えた結果、発生したものと解釈したい。

8号墳の石室は、その頭初、袖無型胴張り石室と把握していたものであるが、袖無型石室例には、羨道部と玄室部の境に構築の順序段階を示す段差が認められないことから、本石室を概念的には両袖型を呈するものと考えた。そして、両袖型胴張り石室と捉えた上で操作を行った結果、本石室の胴張り曲線の創出長には、分類した4つの型のいずれにもあてはまらない「石室全長×2」あるいは「玄室長×3」という想定が考えられた。これは本石室の場合、玄室長：羨道部長がちょうど2：1に企画されており、「石室全長×2」＝「玄室長×3」という関係が成り立っているために起った現象である。故に本石室の創出長が、どちらのものを意図したものかは明確でない。しかし、胴張り石室の曲線創出長の基本が「石室全長」にあったという前述の想定に従えば、本石室は石室全長の2倍で設計されていると考えられる。尚、この考えの中には、本石室がA型→D a型→8号墳型という発展段階を経たと考えるより、C型、D a型と同様にA型の一変形形態と捉えた方が、無理がないと思われることを含めてのことである。本石室の所産年代については、現在のところ、類例はこの1基だけであり、検討する資料がみられないが、埴輪を確実に有することや以下に述べる諸様相から、胴張り石室としては古い6世紀後半から7世紀初頭に位置づけられるものであろう。

本石室で注目される点は、第1に側壁に模様積みの手法がみられないこと、第2に本地域における他の両袖型胴張り石室を有する古墳がすべて円墳であるのに対して、帆立貝式前方後円墳に採用されていることである。第1の点については、本石室の創出長が「石室全長×2」というかなり胴張りが弱いことから、小石材を使用しなくても構築が可能であるのと相対して、何らかの要因により違った手法を用いることが意図されていたためと思われる。あるいは模様積みという絶対的石材量をより必要とする手法を取らないで労力の省力化を計った結果とも考えられよう。第2の点については、前節の形態のところで触れた様に、本墳が極めて変わった形態を取る帆立貝式前方後円墳であることに問題が求められようか。つまり、本墳はもともとは円墳であった可能性が考えられる。あるいは築造当初から前方後円墳として意図されたものであったとしたら、他の石室例との性格の相違性の中で捉えられるものである。逆にこの様な性格の違いが第1の様相や類例の少ない石室であることを成らしめた要因とも考えられよう。

以上、各石室を分類別に検討してみた。その中で片袖型石室については、本調査例ではみられなかったため、ここでは先の分類の基準を述べただけにする。そして、これからその分類を基にして、より細かい分析が必要である事を言うて置きたい。尚、結果的にはすべての石室を一貫する同一な方法で分析

を加えていない点で多くの問題があろう。しかし、それぞれの各型について、より緻密な分析を行なう必要性を感じるのが、現在の状況であろう。(山崎 武)

- 註1 菅谷浩之他「生野山古墳群発掘調査概要」『第6回遺跡発掘調査報告発表要旨』埼玉考古学会他 1973年
- 註2 鈴木敏昭・市川 修「北塚屋遺跡の調査」『第13回遺跡発掘調査報告発表要旨』埼玉考古学会他 1980年
- 註3 分布調査の際に確認されている。
- 註4 田口一郎他『いぶき』第8・9合併号 埼玉県立本庄高校考古学部 1975年
- 註5 菅谷浩之他『青柳古墳群発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会 1973年
- 註6 『稲荷山古墳発掘概報』 埼玉県教育委員会 1969年
- 註7 栗原文蔵他「駒掘」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』II 埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集 埼玉県教育委員会 1974年
- 註8 この型の分類については、坂本和俊「袖無型石室の検討」『原始古代社会研究』5 原始古代社会研究会編 板倉書房 1979年を参考にした。
- 註9 中村恵次「房総半島における変形石室—L字形・T字形石室とその周辺」『史館』第4号 市川ジャーナル 1974年
- 註10 註5に同じ
- 註11 増田逸朗「児玉郡神川村北塚原古墳群」『第4回遺跡発掘調査報告発表要旨』埼玉考古学会他 1971年
増田逸朗「北武蔵における横穴式石室の変遷」『信濃』第29巻第7号 1977年
- 註12 塩野 博・小久保 徹『黒田古墳群』 黒田古墳群発掘調査会 1975年
- 註13 亀井正道「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『MUSEUM』第310号 東京国立博物館 1977年
- 註14 註8に同じ
- 註15 註11に同じ
- 註16 註12に同じ
- 註17 菅谷浩之・笹森健一『広木大町古墳群発掘調査概報』 美里村教育委員会 1975年
- 註18 小川良祐・長谷川 勇『御手長山古墳発掘調査報告書』 本庄市教育委員会 1978年
- 註19 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』 吉川弘文館 1966年
氏は、玄室長対玄室幅の比を求め、この数値が大きいものから小さいものへと石室が変遷するとしている。
- 註20 註8に同じ
- 註21 拙稿「胴張り石室の平面企画の検討」『土曜考古』第2号 土曜考古学研究会 1980年
- 註22 註8に同じ

◎一覧表内における※印は推定長、()は現存長を示す。

3. 土 器

長沖古墳群において土器類の検出された古墳は15基を数え、土師器を中心とする。出土地点では、石室内・前庭部・周溝内に分けられる。土器類は古墳の築造年代を決定する指標となるが、必ずしも土器類の年代が合致するわけではなく、ここでは古墳とは切り離して土器類の年代検討を行う。

最も古く位置づけられるのは、14号墳の出土遺物である。14号墳からは土師器の甗・壺・高坏が各1点検出された。壺は胴部中程が張り、所謂「算盤玉形」を呈し、胴下半部は斜めの篋削りにより整形が行なわれ、底部は上げ底である。甗も胴部のみであるが同様な「算盤玉形」である。類例としては、和泉I式に比定される愛宕遺跡13号住（註1）出土の内に壺・甗ともある。高坏は脚部のみであるが、開く角度が大きく五領期から和泉期にかけて見られる特徴を示す。「算盤玉形」を成す胴部と上げ底を有する壺は和泉II式では殆ど見られなくなり、和泉I式に位置づけられ、実年代は5世紀中頃に比定されよう。

次に来るのが、1・2・12・22・27・28号墳の一群である。

1号墳の土師器広口壺は、器肉が薄く球形に近い体部は平底を成す。口縁部は直線的に外傾しながら立ち上り、口唇部に至って僅かに外反し、口縁部のほぼ中央には稜が巡り段を生じている。このような形態の特徴をもつ土師器は、住居址からの出土例はなく、他にもあまり類例を見ない。明らかな年代は知りえないが、体部の特徴からすれば、鬼高I式に比定されよう。本例の如く、集落、住居址から一般的に出土する土器の中には類例が見あらず、言わば古墳から出土の特異な器形として捉えられている様な例は、群馬県富岡5号墳出土の長頸埴においても認められている（註2）。

2号墳からは土師器坏と須恵器無蓋高坏が出土している。坏は口縁部がほぼ直に立ち、外面の稜はわずかで、底部は丸底を呈し、器肉はやや薄手である。所謂須恵器坏の模倣坏で、東谷遺跡28号住（註3）に類例が見られ、鬼高I（新）式に置けよう。無蓋高坏は坏部が浅く口縁部と体部との境には稜をもち、稜の下には簡略化された波状文が巡り、脚部には方形の四方透しを持つ。端部は丸くシャープさに欠け、胎土は悪く坏部は歪んでいる。田辺昭三氏の『陶邑古窯址群I』（註4）のTK47として図示されたなかに類似品があり、また後張遺跡（註9）において鬼高I式（新）の土師器を伴う無蓋高坏にも酷似している。陶邑窯址群の編年の研究については、森浩一氏（註5）、田辺昭三氏（註6）、中村浩氏（註7）らによる業績が大きい。陶邑窯の全期間を田辺氏はI～V期、中村氏はI～V型式に区分しているが、その編年基準は殆ど変わらず、TK47はI型式5段階に該当し実年代は6世紀前半である。（なお、今回の須恵器の編年に当っては主に中村氏の編年を用いた。）2号墳の無蓋高坏は、胎土・焼成が悪く、I型式にみられる端部のシャープさもない。また、陶邑においてTK23以後は脚部の四方透しが殆ど見られなくなる（註8）ことから、陶邑において生産されたものとは考えにくい。

12号墳では土師器坏・高坏・甗が出土しており、坏は口縁部は直線的に立ち上り端部は平端で、外面に明瞭な稜を有する。TK47と思われる須恵器坏が出土している甗神社前遺跡18住（註10）において類例がある。高坏は6点検出されており、第53図-7は他と比べると脚部が長い。他も脚部はあまり短脚化しておらず、坏部は深く外面に稜を有し、口縁部は外反しながら立ち上がる。類例は見られなかったが、高坏の脚部が短脚化するのは鬼高I式末からで、外面する口縁を持つ深い坏も鬼高I

式で見られるものであるから、鬼高Ⅰ式（新）としたい。

22号墳の土師器埴は、肩部が丸く平底を呈し手捏ねに近い。類例はあまり見られないが、当児玉郡地域においては埴型土器は鬼高Ⅰ式末に消滅するという見解があり（註11）、平底部が大きい点などを加味すれば、鬼高Ⅰ式のなかでも古い段階に位置づけられよう。

27号墳出土の土器は、あまり開かず円筒形を呈し上部で小さくくびれる土師器高坏の脚部の破片である。この様な特徴を有する脚部は和泉式土器の系統を引くものであり、鬼高Ⅰ式（古）においてまで残り、本例は鬼高Ⅰ式（古）に比定される。下田遺跡6号住（註12）出土のものに似ている。また、28号墳の土師器高坏は小片であったため実測は不可能であったが、その特徴から鬼高Ⅰ式に比定される。

これらの1・2・12・22・27・28号墳の出土土器類は、全て鬼高Ⅰ式に位置づけられ、実年代は6世紀前半に比定できる。先行する14号墳との間には半世紀以上の空白がある。

前述の一群の後には、25号墳の土師器が相当する。坏は口縁部が僅かに外反しながら立ち上がり、稜は強く、坏部は深い。東谷遺跡では鬼高Ⅰ式（新）から鬼高Ⅱ式にかけて出土しており、2・12号墳の口縁部が直立に立つ坏よりは後出のものである。高坏の脚部は短脚で「ハ」の字状に開き、裾部でさらに開く。鬼高Ⅱ式（古）に比定される精神場A区3・5住（註13）に類例が見られる。埴は扁平化した体部を持ち、上げ底であるが類例がなく、伴出した坏・高坏と同時期として扱いたい。25号墳の土器類は類例土器の年代から、6世紀の前半から中頃に置ける。

23号墳の土師器甕は、口縁部がゆるく外反しながら立ち上り、頸部には斜めの篋削りによる段が成され、最大径は胴部中程にあり、長胴化はあまりしていない。中道遺跡27号住（註14）出土の遺物の内に類似例が見られ、鬼高Ⅱ式に比定され実年代は6世紀中頃から後半にあてたい。一般的に住居址等から出土する甕は、熱効率をよくするため荒い砂粒を混入する甕特有の胎土をもつが、本例においては坏の胎土に酷似した精選されたものであり、古墳出土の特徴と言えよう。

8号墳の須恵器大甕は、2本の沈線により作られた凸線が2条あり、凸線によって三分された区画には明瞭な波状文が巡る。頸部には断面が三角形を呈する「補強帯」と呼ばれる凸帯を設ける。この補強帯を有する大甕は、群馬県太田市金山丘陵古窯址群に特徴的なものと指摘されている（註15）。古墳からの出土例は富岡5号墳、十二ヶ谷戸第3・15号墳（註16）などで知られている。本資料は十二ヶ谷戸第3号墳例に酷似しており、実年代は6世紀後半としたい。

3号墳の土師器坏は、口縁部が外反しながら立ち上り、外面の稜は鈍い。東谷遺跡12号住、原遺跡6号住（註17）、宇佐久保遺跡9b号住（註18）などにおいて類例が知られる。21号墳の土師器小型壺は、口縁部が内傾して立ち上り上半部に至って外反し、肩部に強い段を有する。宇佐久保遺跡9b号住、舞台遺跡B-13号住（註19）、雷電下22号住（註20）などの類例がある。宇佐久保遺跡9b号住・舞台遺跡B-13号住は鬼高Ⅱ式、雷電下遺跡22号住は鬼高Ⅲ式にそれぞれ位置づけられる。雷電下遺跡22号住例は肩部の稜があまく、明らかに後出の感が窺われる。3号墳と21号墳の資料が宇佐久保遺跡9b号住で伴出関係を示すことは同時期として捉えられ、最大径が口縁部にある長胴化した甕が存在することから、年代的には7世紀前後に位置づけられよう。

9号墳の須恵器平瓶は、口縁部が単口縁で、体部はやや扁平であり上面には一対の「ボタン」状の円形浮文を貼付し、底部は丸底を呈する。TK217の中に類似品がある。なお、TK217出土の製品

は単一時期の資料ではなく三期に区分されることが指摘されており（註21）、類例として挙げた平瓶はⅡ型式の6段階に比定される様である。また、平瓶の器形について、上面が平坦に近く、平底で、単口縁という特徴を示すのは7世紀中頃過ぎからと指摘されている（註22）ことから、実年代は7世紀前半から中頃に置けよう。

10号墳の土師器杯は、口縁部が短かくほぼ直立に立ち上り、外面の稜は薄れ、模倣杯の系統とすれば末期的な形態を示すもので、清水南遺跡6号住（註23）、下田遺跡49号住、雷電下遺跡13・22号住、中道遺跡25号住などで類例があり、鬼高Ⅲ式から真間Ⅰ式（古）にかけて存在し、7世紀中頃から後半に位置づけられる。

11号墳からは土師器杯4点と須恵器台付長頸壺1点が出土している。杯は、口縁部が内湾気味に立ち上り外面に明瞭な稜は残らないものと、外面に稜を有し口縁部は外反しながら立ち上り中央部に至ってさらに開き口径の大きいものの二形態に分かれる。この二形態の杯が伴出する例は多く、北谷戸遺跡10号住（註24）、本郷東遺跡3・5号住、清水南遺跡6号住、雷電下遺跡13・20号住などがある。北谷戸遺跡10号住で伴出した須恵器蓋は、内側にかえりがあるが極めて短かく、つまみは扁平となり擬宝珠様を呈し、Ⅲ型式の3段階とされる。また、本郷東遺跡3号住では伴出した土師器と須恵器が、平城京跡のSD485遺溝（註25）出土の資料と酷似することから、8世紀初頭の年代があたえられている。このようなことから、この二形態の杯は7世紀後半から8世紀初頭に比定されよう。台付長頸壺は、口唇部が短かく直立し、底部は「ハ」の字状に開く低い高台が付き、端部は丸く仕上げられている。短かく立ち上る特徴は、東海地方において多く見受けられるフラスコ型提瓶の口縁に祖形が見られる。愛知県渥美郡田原町蔵王下古墳出土例（註26）に類似しており、東海地方の須恵器の編年（註27）によると、かえりが消失した蓋と併行期に位置づけられている。この蓋は陶邑窯の編年によるとⅣ型式の1段階にあたり、実年代は8世紀初頭とされよう。（鈴木 純）

註1 駒宮史朗・大和修「本郷東・愛宕」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ 埼玉県遺跡発掘調査報告書』第7集 埼玉県教育委員会 1976年

註2 外山和夫・陣内主一「富岡5号墳」『群馬県立博物館研究報告』第7集 群馬県立博物館 1972年

註3 柿沼幹夫・小久保徹他「東谷・前山2号墳・古川端」『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 埼玉県遺跡発掘調査報告書』第16集 埼玉県教育委員会 1978年

註4 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年

註5 森 浩一「和泉河内窯址出土の須恵器編年」『世界陶磁全集Ⅰ』平凡社 1958年

註6 註4に同じ

註7 中村 浩「陶邑Ⅰ」『大阪府文化財調査報告書』第28輯 大阪府教育委員会 1976年

中村 浩「陶邑Ⅱ」『大阪府文化財調査報告書』第29輯 大阪府教育委員会 1978年

中村 浩「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書』第30輯 大阪府教育委員会 1978年

註8 註4に同じ

註9 増田逸朗・宮崎朝雄「児玉町後張遺跡の調査」『第10回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼

玉考古学会他 1977年 なお、調査担当者の増田逸朗氏の御好意により資料を実見させていただいた。

- 註10 中村倉司他「甕庭神社前遺跡・一本松古墳」『埼玉県遺跡調査会報告』第39集 埼玉県遺跡調査会 1980年
- 註11 中村倉司他「宇佐久保遺跡」『埼玉県遺跡調査会報告』第38集 埼玉県遺跡調査会 1979年
- 註12 増田逸朗・小久保徹他「下田・諏訪」『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 埼玉県遺跡発掘調査報告書』第21集 埼玉県教育委員会 1979年
- 註13 高橋一夫・中村倉司他『精神場遺跡』 神川村教育委員会 1978年
- 註14 菅谷浩之・駒宮史朗他「中道・西北原遺跡発掘調査報告書」『埼玉県遺跡調査会報告』第23集 埼玉県遺跡調査会 1974年
- 註15 橋本博文他「大久保山Ⅰ」『早稲田大学本庄校地文化財調査報告』1 早稲田大学出版部 1980年
- 註16 菅谷浩之他「青柳古墳群発掘調査報告書」『埼玉県遺跡調査会報告』第19集 埼玉県遺跡調査会 1973年
- 註17 梅沢太久夫・高橋一夫『原・清水南』 上里町教育委員会 1978年
- 註18 註11に同じ。
- 註19 井上 肇他「舞台（資料編）」『日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ 埼玉県遺跡発掘調査報告書』第17集 埼玉県教育委員会 1978年
井上 肇他「舞台（本文編）」『日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 埼玉県遺跡発掘調査報告書』第18集 埼玉県教育委員会 1979年
- 註20 駒宮史朗・大和 修「雷電下・飯玉東」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅸ 埼玉県遺跡発掘調査報告書』第22集 埼玉県教育委員会 1979年
- 註21 註7に同じ。
- 註22 檜崎彰一編「土師器・須恵器」『日本の陶磁』古代中世篇1 中央公論社 1976年
- 註23 註16に同じ。
- 註24 菅谷浩之・岡本幸男・金子 章『北谷戸・下道掘・上耕地遺跡』 美里村教育委員会 1979年
- 註25 坪井清足他「平城京発掘調査報告」Ⅵ『奈良国立文化財研究所学報』第23冊 奈良国立文化財研究所 1975年
- 註26 小野田勝一「考古編」『田原町史』 田原町教育委員会 1971年
- 註27 芳賀 陽『二本松古墳群』 愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財発掘調査団 1971年

4. 埴輪

ここでは形象埴輪に関しては省略し、円筒埴輪のみを編年的に検討することによって、論を進める。

I期 最も古く位置づけられる埴輪は34号埴出土、及び15号埴台状部出土の埴輪である。これらには黒斑は見受けられないが、器面に黄褐色の薄い層を持ち、器肉に黒色の厚い層を持つ所謂サンドウィッチ状を呈するものである。野焼の証例として黒斑の付着する事が多く言われているが(註1)、破片のみであったりすると、その決定は難しい。しかし黒斑を有するものが殆どこのサンドウィッチ状の器肉を持つ事から、34号・15号埴周溝内側出土のものは野焼であると考え、当古埴群中では最古のものと考えたい。焼成以外の編年的要素を見ると、凸帯は強く突出し、上・側・下面のすべてがくぼみ、非常に古式の様相を示す。透孔はすべて円窓であり、ハケ目はすべて縦ハケで横ハケは一片も見られない。但し、この縦ハケも二次調整と断定するのはむづかしい。従って、縦ハケのみと言う事は例外的であるがそれ以外の要素は川西編年の第Ⅲ期に組み入れる事が可能であろう。

長沖古埴群を遺物・遺構両面から追って行くと、結局34号埴が最も古く位置づけられ、当古埴群はその築成当初から埴輪を持っていた事となる。

Ⅱ期 14号埴出土埴輪、及び縄文A区出土の図116-3~9の埴輪がこの期にあてはめられると思われる。横ハケはすべてB種横ハケであり、黒斑は全く無く、中には若干須恵質のものも存在する。底部調整は一切見られない。透孔は下半部のみである為、円窓か上辺直線の半円窓であろうと思われる。周辺の生野山古埴群(註2)等の同時期の埴輪を見ると殆ど半円窓である事から、これ等も殆どが半円窓であろうと思われる。凸帯の形状等を見ると、かなりしっかりしており、窖窯導入後でも比較的古い段階のものではなかったろうか。これ等のうちでも図116-6に見られる沈線は、その形状から窯印ではなく、何かマジカルな意味合いを持つ刻線と思われる。図116-3に見られる最下段凸帯が基部にあるものはこれ一片であるので多くは言えないが、最近出土例も多い事から、今後注目すべきものの一つであろう(註3)。

ここで大きな問題が一つある。それはI期とⅡ期の埴輪の工人の系譜の問題である。I期の野焼の埴輪に横ハケの手法が無いのは先程も書いた通り非常に例外的な手法であり、Ⅱ期にあたる周囲の遺跡はその多くがB種横ハケを持っている。従ってここで考えられる事の一つは、窖窯導入によって、埴輪工人の系譜が完全に入れ替っていったと言う事である。しかし、I期と同時期の埴輪を出す遺跡が周囲に少い為、それ以上の事を推察する事は不可能である。なおⅡ期の実年代は5世紀中葉を想定する。

Ⅲ期 該期に組み入れられるのは15号・22号・2号・1号・28号・12号埴である。その実年代は6世紀前半に想定される。

本古埴群の時期の埴輪は既に横ハケを持たず、長胴化の様相を見せ初め、底部調整を持つ。従って、C種横ハケの段階は最初から存在しない可能性も有る。それにしても14号埴との間には一時期空白部が出そうである。

該期の埴輪のうち15号・22号・2号埴が古い一群となろうと思われる。これは底径の平均値の変遷においてもある程度言える事と思われる。すなわち底径は新しいもの程、矮小化する傾向があるらしい。しかし、6世紀代の埴輪が非常に編年しにくいものである事は多くの指摘の通りであり、本稿においても

その細分には誤謬を含むものと思われる。

15号埴輪は若干第1段器高が高い傾向を示しているが、その透孔の形状において、最も意識の強い半円窓を持っており、且つ出土している中には底部調整の見られない事から（勿論底部調整の伴出する可能性の方が強い）、6世紀前半でも比較的早く位置づける事が可能であろう。22号埴輪においては、その形態比率において、第II期的様相を残すものが存在し（No.1・8等）、凸帯も断面三角形のものが入り込んではいないが、比較的しっかりしたものが多い。やはり15号と同じくらいの時期を与えられよう。2号埴輪は出土数が少ない為、多くを言う事はできないが、やはり透孔は半円、もしくは方形を強く意識したものと思われる。

次の1群として捉えられるのは、1号・28号・12号埴輪である。1号の埴輪は当古埴群中、最も多く底部調整の埴輪を出しているが、底径の平均値、形態比率等を見ると、この時期にあてはめられるだけの要素を持っている。しかし、凸帯が殆ど断面三角形である事、および透孔が縦長化した半円窓である点は多く注意すべき点である。該期の底部調整は叩き、押圧がその殆どであるのに対し、1号埴輪出土の破片中に内面刀子横削りの存在する事は問題である。その事については、VI期の説明で触れる。

28号埴輪は個体数も少なく、多くは言えないが、凸帯の形状がしっかりしており、伴出土器の年代に比定してよいだろう。

12号も28号と近似した凸帯を有し、やはり伴出土器の年代に比定したい。なお、周辺の遺跡を見ると、生野山古埴群、白山古埴群等に同時期と思われるものがあるが、正式報告のない為詳細は判らない。

IV期 該期にあてはまるのは25号・8号・23号・21号埴輪である。実年代は6世紀中葉～6世紀末（又は7世紀初）に想定される。

編年の基準は底部調整の中の刀子削りの導入である。刀子削りの導入は多く、6世紀後半と考えられている（註4）。若干時間的にはその説よりも早まるが、25号あたりから刀子削りの検出例が増える事から、ここで一線を画した訳である。が、先にも記した1号埴輪の1片をどう解釈すべきか、非常に問題の多い所である。しかし尾張方面では6世紀前葉～中葉にはこの技法の出ている事を考えてみると、さして矛盾の無い様にも考えられる（註5）。時期的に並行する遺跡の周辺に多く存在する事から、それらとの比較も織りまぜながら考えて行きたい。

同時期の埴輪を出す周辺の遺跡としてあげられるのは、神川村青柳古埴群（裡、城戸野1・2号埴、十二ヶ谷戸4・10・3・15号埴）（註6）、美里村一本松古埴（註7）、岡部町千光寺遺跡（註8）、塚本山古埴群（1・15号埴）（註9）、本庄市御手長山古埴（註10）、兎玉町生野山古埴群、岡部町白山古埴群（註11）等である。

まず25号埴輪の埴輪は、第IV期でも最も早く位置づけられると思われる。その根拠として考えられるのは、意識的な半円窓の見られるのは第IV期中この古埴が唯一である事。勿論これは前方後円埴としての特異性も考えねばならないが、同じ前方後円埴（帆立貝式）の8号埴には一片も存在しない事から、8号埴よりは前出のものである事が考えられる。事実周辺の並行時期の埴輪には半円窓の埴輪は全くみられない。従って、第III期末に位置づけられる可能性もあるが、削り調整が確実に導入されている事からこの時期に位置づけたものである。最近、小森哲也氏によって「…（半円窓は）群馬以外では6世紀初頭ぐらいに（無くなりそうである）…」と指摘されたが（註12）、当古埴群は群馬に近い事もあって

か、それよりも下がりそうである。

次に位置づけられるのは、8号墳である。その編年的位置づけられるのは、多く石室形態の編年に頼るものであるが、もう一つの理由は最上段器高の短縮傾向にある。勿論すべてがそうなる訳ではないが、最も新しく位置づけられる御手長山古墳（7世紀初）にも見られる現象である。従って、その現象の初現の埴輪と見て良いであろう。

23号も破片数は少なく、その編年的位置づけは石室形態と伴出土器に頼るものであるが、やはり最上段短縮化の現象が見られる。

最終段階に位置づけられるのは21号墳出土の埴輪であるが、これと同時期もしくは近似時期に位置づけられるのは前出の、御手長山古墳、塚本山15号墳等の埴輪である。しかし、塚本山15号墳の埴輪は大型品で現存5本凸帯を有する為、周辺地域においても特殊性を示す埴輪であり、比較する事はむづかしい。御手長山の埴輪はすべて叩きによる底部調整を持つと思われる点が異なる。いづれにしても、現在確認される所の当古墳群中の埴輪において最も新しいと言うだけあって、これが当古墳群中における終末の埴輪と考える事はひかえた方が良からう。

最後ではあるが、27号・24号の埴輪に関しては破片数も異常に少なく、検討が困難である為、論ずる事は控えた。

以上約150年間古墳祭祀に用いられた長沖古墳群の埴輪を大まかに四期区分をした訳である。

大略的に言うと、

I・野焼、縦ハケ（1次、2次）

II・窯焼成・B種横ハケ

III・窯焼成・1次縦ハケ・底部調整（叩き、押圧）

IV・窯焼成・1次縦ハケ・底部調整（刀子・ヘラ削りの導入・併用）

と言う技法的な問題を中心として分け、それに形態比率の推移を加味しながら編年的検討をおこなった訳である。

骨子は川西氏の編年に基くものであり、氏が第V期（本稿のIII・IV期に該当する）として一世紀余りの大枠の中に入れたものを、底部調整の技法的相違によって、二期に分けたものに過ぎない。

なお、技法上の問題として、内面基部に施される横ハケ、凸帯貼付の際の断続撫で技法（狭義においては、川西氏のそれとは異なる）の系譜の問題などがまだ残っているが（註13）、殆ど検討の目的が立たず、ここでは避けた次第である。（萩原恭一）

註1 川西宏幸 「円筒埴輪総論」 『考古学雑誌』64-2 日本考古学会 1978年

西口寿生 「黒斑」 『奈良国立文化財研究所学報』第23冊（P126・127）

1974年

註2 菅谷浩之・駒宮史朗 「児玉町 美里村 生野山古墳群発掘調査概要」 『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会他 1973年 しかし、正式報告は未だ為されていない。

註3 森田久男・鈴木勝 「栃木県に於る後期古墳出土の埴輪の一樣相」 『栃木県史研究』19号 1979年

- 註4 橋本博文氏の御教示による。氏は群馬における底部調整（叩き、押圧、削りのすべて）の出現を6世紀後半として捉えておられる。
- 註5 註1の川西1978年に同じ。
- 註6 菅谷浩之・増田逸朗・駒宮史朗 「青柳古墳群発掘調査報告書」 『埼玉県遺跡調査会報告書』第19集 埼玉県遺跡調査会 1973年
- 註7 中村倉司他 「飯蕨神社前遺跡・一本松古墳」 『埼玉県遺跡調査会報告』第39集 埼玉県遺跡調査会 1980年
- 註8 増田逸朗 「千光寺」 『埼玉県遺跡調査会報告』第27集 埼玉県遺跡調査会 1975年
- 註9 増田逸朗・小久保徹・横川好富 「塚本山古墳群」 『埼玉県遺跡発掘調査報告第10集 関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告-VI-』 埼玉県教育委員会 1977年
- 註10 小川良祐・長谷川勇 『埼玉県本庄市御手長山古墳発掘調査報告書』 本庄市教育委員会 1978年 なお、生野山古墳群・白山古墳群に関しては、正式報告はまだ出されていない。
- 註11 小森哲也 「宇都宮市笹塚古墳の円筒埴輪の年代的な位置づけ」 『峰考古』第2号 宇都宮大学考古学研究会 1979年
- 註12 岡部町白山古墳群の発掘調査は、1973年に岡部町教育委員会により実施されたが、正式報告はまだ出されていない。
- 註13 川西氏の御教示によると、「凸帯貼付の際に、先ず粘土紐を軽く器面に接合させる為に、部分的に断続的な撫でを行い、その後に指、布で丁寧に整形するのは、ごく普通の技法である」と言う事であるが、当古墳群の場合、その痕跡の看取できた埴輪に時期的・系譜的一貫性が見られない事が、問題となるのである。

VI 考 察

1. 長沖古墳群の成立

長沖古墳群内の調査古墳について、各古墳の調査結果や出土遺物等について述べてきたので、長沖古墳群の概要については知ることができたであろう。では、高柳地区の古墳まで含め6基の前方後円墳(内1基は帆立貝式)を中心に157基の古墳から成るこの地域の古墳群の成立と推移は、いかなる状態であっただろうか。

埴輪などで検討したように、長沖古墳群の成立期は考えていたより古い時期であるという結論になった。そこで、埼玉県内の初期的古墳の類例を示しておき、長沖古墳群の成立について触れてみたい。

埼玉県内の初期的古墳を論ずる場合、まず桶川市熊野神社古墳(註1)があげられる。直径30mの円墳で硬玉製勾玉をはじめ、碧玉製石釧・筒型銅器など多くの出土遺物から、4世紀後半までさかのぼらせることのできる古墳である。この熊野神社古墳以外には、県内で4世紀代に位置づけられる初期的古墳は確認されていない。

5世紀代に入ると、東松山市雷電山古墳(註2)をはじめとして古墳は多くなるが、以前では他に児玉町將軍塚古墳(註3)、本庄市公卿塚古墳(註4)、それに埼玉古墳群の丸墓山古墳などがあげられていた。しかし、最近のように古墳の調査が増大するにつれて、埼玉県内の5世紀代の古墳の類例が増加してきている。昭和49年に調査された美里村長坂聖天塚古墳(註5)は、方格規矩鏡などを出土した5世紀前半の代表的な古墳で、その北側には河輪聖天塚古墳(註6)の存在が知られている。本庄市においては前山1号墳・前山2号墳(註7)、児玉町では鷺山古墳・金鑽神社古墳などがある。東松山市では雷電山古墳以外にも、5世紀代に諏訪山古墳・諏訪山2号墳・山の根古墳等の前方後円墳が築造されているという。(註8)

最近報告されたものでは、昭和52年に周溝の一部が調査された上尾市殿山古墳(註9)がある。熊野神社古墳に近く、この地域では重要な意味を持ちそうである。

埼玉県内の主要な4世紀から5世紀にかけての古墳を挙げたが、長沖古墳群の成立を見るまえに児玉町での初期的古墳といわれる古墳を再確認すると、長沖古墳群から北に1.5kmほど離れた生野山丘陵の頂上には、將軍塚古墳が存在する。径60mの円墳で竪穴式石室と箱式石棺の主体部が発見され、鉄斧・鉄鎌・鉄剣などが出土している。生野山丘陵と浅見山の丘陵の間には、鷺山古墳と金鑽神社古墳がある。鷺山古墳は5世紀前半までさかのぼるとみられる円墳であり、円墳の金鑽神社古墳(註10)からは滑石製模造品の出土が知られている。

このように、児玉町には5世紀代の古墳が3基存在し、他にも5世紀代に位置づけられそうな古墳もないではない。ただ、古墳群の成立、とくに古い要素を持った古墳から発展し、古墳群が成立して行く過程を見るならば生野山古墳群が好例である。生野山古墳群は5世紀代の古墳から、終末期の古墳まで同一の丘陵で捉えられるもので、古墳群の推移をよく知ることができる。

県内の初期古墳や児玉町の初期古墳について触れたが、では長沖古墳群の成立をいかなる時期に位置

づけられるかという問題を検討してみよう。5年間にわたって調査した古墳の分布していた地域は、すでに見てきたように長沖古墳群の東端のみであった。たとえ東端のみの調査ではあっても、結果的には古墳群の成立を知るための良好な資料を得ることができた。

各古墳について説明してきたが、墳丘や主体部は破壊が著しく遺物が殆ど見当たらないものが多かった。しかし、主体部の形態や埴輪、土器等で一応の築造年代を知ることができた。

今回調査した古墳のなかで、最も古く位置づけられる古墳は14号墳と34号墳である。14号墳はすでに述べたとおり、周溝の一部を調査したに過ぎなかったが、周溝上幅7mを測る大型円墳と推定される。周溝内より出土した土師器壺・壺・高坏等はいずれも部分的な破片であったが、古墳の成立年代を推測する参考資料となり得よう。加えて、年代を知る手掛りとして周溝内出土の埴輪がある。円筒埴輪は大型のもので、5世紀中頃～後半にかけての埴輪の特徴であるB種横ハケがみられる。朝顔型埴輪は口縁部径の復原では54.6cmと大型で、外面全体に丹塗が施され、内面にも丹塗がみられた。

34号墳も周溝部の一部を確認したに過ぎないが、やはり古い様相を呈する埴輪が出土している。出土した埴輪は破片のみであったが、基底部の破片以外はいずれも丹塗が施されていて、大型の円筒埴輪である。詳細については埴輪の項で記したので触れないが、古く位置づけることの可能なものである。そこで長沖古墳群における成立期の古墳に、14号墳と34号墳は位置づけられる。

では、両古墳の成立時期をいつに求めるかである。両古墳を埴輪から類推したので、児玉地方の初期的古墳として知られている古墳のなかで、埴輪の確認されている古墳を挙げると、生野山將軍塚古墳・本庄市公卿塚古墳・美里村河輪聖天塚古墳がある。生野山將軍塚古墳からは高坏と共に、朝顔型埴輪が墳丘上より出土していて、5世紀後半の年代が与えられている。公卿塚古墳は滑石製模造品の出土で知られている古墳で、円筒埴輪が確認され5世紀中頃から後半に位置づけられる。河輪聖天塚古墳からは丹塗のある埴輪壺が出土していて、5世紀中頃の古墳ではないかと見られる。この他に、金鑽神社古墳でも埴輪の存在が確認されている。

埴輪を伴わない初期的古墳としては、長坂聖天塚古墳がある。粘土槨や木棺直葬からなる6基の主体部を持ち、5世紀前半に築かれている。前山2号墳は粘土槨内より、刀子・鉄製鎌・錐・鈍・剣などを出土し、5世紀前半の古墳と考えられており、前山1号墳とともに埴輪は確認されていない。鷲山古墳は長坂聖天塚古墳と時期を同じくすると推される古墳であるが、やはり埴輪の設置は見られない。

円筒埴輪の全国的編年を行った川西宏幸氏によれば(註12)、北武蔵とくに埼玉県北部における円筒埴輪のなかで、5世紀後半代の古い要素を持つ古墳として生野山古墳群の9号墳と、熊谷市横塚山古墳(註13)をあげている。両古墳出土の円筒埴輪は、「外面に1次調整としてタテハケ、2次調整でB種ヨコハケを使う」時期の円筒埴輪であるという。生野山9号墳は径44cmの大型の円墳で、主体部は礫槨である。横塚山古墳は前方後円墳で朝顔型埴輪などとともに、多数の埴輪が出土しており、中には前記の古い要素を持つ埴輪もあるが、他の埴輪などを見ると6世紀に入ってから築かれた可能性が強い。

長沖古墳群内では、他の古墳出土の円筒埴輪と比較し、長沖14号墳と34号墳の埴輪はとくに古い要素が強い。埴輪から両古墳の年代を5世紀中頃に推定できよう。厳密にいうならば34号墳が先行しその後14号墳が築かれたと見てよい。

他に15号墳周溝内側より、34号墳の円筒埴輪に類似した埴輪が出土している。15号墳自体は6

世紀代の古墳であるが、15号墳の周辺に34号墳と同じような時期の5世紀中頃でも古い段階の古墳が、存在していた可能性が強い。

長沖古墳群の東端の調査のみであったが、2基の5世紀中頃の古墳が確認されたことは、台地とはいえほぼ平坦な場所に築かれた古墳群の在り方を知る上で良い資料となった。前記したように、同一地域で多数の古墳が集中して築かれていて、古墳群の推移を知ることができるのは、生野山古墳群以外では雷電神社古墳を頂点とした三千塚古墳群(註14)程度で、その意味でも大きな成果である。

14・34号墳の2基の古墳を初め、15号墳周辺にも同時期の古墳の存在が推測された事により、すでに5世紀中頃には支群単位程度の古墳を築造する首長層が、当地域において形成されていたと考えられよう。なお、今回の調査では5世紀後半に位置づける確証のある古墳は見られなかった。しかし今回の調査において、多くの古墳址が発見された如く、既に消滅してしまった古墳の中や調査を実施していなく、詳細の明らかでない古墳の中にその存在は充分考えられる。

5世紀中頃の古墳を基盤として、長沖古墳群の東側では6世紀に入ると社会組織、社会階層の分化とともに他地域と同じく古墳築造は急な増加を示しはじめる。

6世紀前半の古墳としてまず挙げられるのが、1号墳・2号墳・12号墳であろう。これらの古墳の主体部は、いずれも竪穴系の石室である。1号墳は主体部付近の礫の配石状態から礫榔の要素が強く、12号墳は礫を主体とした竪穴式石室である。2号墳の主体部は不明であったが、1号墳と同様な形態を示すものであったと推定される。この3基の古墳の周溝内からは、いずれも鬼高I式の土師器の出土を見ており、古墳築造の時期を決める目安となるものである。3基以外の古墳でも、22号墳の主体部は礫榔で、27号墳は箱式石棺の形をとっていた。両古墳とも時期を決める資料には乏しいが、やはり6世紀前半代の古墳であろう。22号墳の埴輪に、外面全体に縦方向のヘラ削りが施されている埴輪があり、県内では行田市大稲荷古墳(註15)に例がある。径2.6mほどの円墳で、四獣鏡・刀子などが出土していて朝顔型埴輪などと共に多くの円筒埴輪が出土している。須恵器甕などの出土もあり「5世紀末か降っても6世紀前半は動かない」古墳と考えられていて、22号墳も主体部などとともに判断すると6世紀前半に築かれている。このような主体部を持つ例としては生野山古墳群があり、竪穴式石室2基と礫榔7基が確認されていて、周溝から出土する土器は鬼高I式であり、長沖古墳群とも類似している。

長沖古墳群の横穴式石室の出現は、袖無型石室を持つ28号墳にある。5次にわたる調査で、確認された袖無型石室は本古墳1基のみであったが、昭和51年に環状一号線道路の建設に際して調査された4号墳と13号墳の2基も袖無型石室であった。袖無型石室の調査例としては、古くは上里町大御堂稲荷塚古墳(註16)があるが、その後神川村青柳古墳群(註17)や北塚原古墳群(註18)など調査例は多い。

当地方の袖無型石室の出現について6世紀初頭から前半にかけての論があるが(註19)、4号墳と28号墳は、6世紀前半に位置づけられよう。13号墳は6世紀中頃の古墳と見ている。

長沖古墳群に6世紀前半に横穴式石室が導入されてから、6世紀中頃になると前方後円墳の25号墳が築かれている。周溝より出土する土師器は鬼高I式末からII式にかけてのもので、主体部は削平されていたが横穴式石室であった可能性が強い。

その後には、6世紀後半から7世紀初頭にかけて、8号墳・21号墳・23号墳などの多様化した石室の出現を見ることになる。なかでも8号墳は帆立貝式前方後円墳で、円墳に前方部を築き足した状態であったが、本古墳は6世紀後半に築かれたものである。ここにあげた3古墳とも埴輪を持つ古墳である。

7世紀前半から後半にかけては、3号墳・9号墳・10号墳・11号墳が築かれた。これらの古墳に共通することは、いずれも小円墳で径10～15mと小さい。主体部は河原石による胴張りの両袖型横穴式石室を持ち、埴輪を持たないことである。また、初期の古墳から7世紀前半までの古墳で、はっきり確認できた周溝もこれらの古墳では確認できず、周溝の概念も失なわれている。

調査された古墳群のなかで、埴輪の消滅する過程をとらえた古墳群に美里村塚本山古墳群（註20）がある。胴張りを有する両袖型横穴式石室で出土土器から7世紀前半中頃とみられる古墳には、埴輪が認められている。塚本山12号墳は径24mほどの円墳であり、胴張りを有する両袖型横穴式石室であるが、時期的には7世紀中頃に位置づけられていて、埴輪を持たず埴輪消滅後の古墳とみられている。塚本山古墳群では、その後石室が簡素化され、胴張りが進むといい、8世紀初頭までの古墳が確認されている。

長沖古墳群では、確実に8世紀初頭まで下る古墳はなく、7世紀後半と8世紀初頭の遺物を出土した11号墳は、前者の年代、もしくは若干遡って築造されたと考えられる。また、9・10号墳の小型の石室でも控え積みは、しっかりしていて簡略化された様子はない。これが丘陵斜面に形成された塚本山古墳群の消滅期の古墳と、長沖古墳群のように平地に築かれた終末期古墳との特徴の違いかは明らかでない。調査した古墳からは7世紀後半で、長沖古墳群の築造は終わっている。

今回の調査でみるかぎり、以上のような経緯をたどって、5世紀中頃から7世紀後半にかけて形成されたのが長沖古墳群だったのである。（菅谷浩之）

- 註1 村井崑雄「武蔵国川田谷熊野神社境内所在の古墳」『考古学雑誌』41-3 日本考古学会 1956年
- 註2 大塚 実「東松山市雷電山古墳出土の壺形土器」『上代文化』第37輯 国学院大学考古学会 1967年
- 註3 柳田敏司「埼玉県児玉郡生野山將軍塚古墳発掘調査概報」『上代文化』第34輯 国学院大学考古学会 1964年
- 註4 柳田敏司「本庄市公卿塚と石製模造品」『埼玉考古』復刊1号 埼玉考古学会 1963年
菅谷浩之「壺形土器を出土した公卿塚について」『埼玉研究』19号 埼玉考古学会他 1970年
- 註5 菅谷浩之「古墳の消滅の過程、付長坂聖天塚出土の石製刀子」『埼玉考古』第12号 埼玉考古学会 1974年
菅谷浩之・坂本和俊「美里村長坂聖天塚古墳の調査」『第8回遺跡調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他 1975年
- 註6 金谷克己「武蔵児玉郡美里村川輪発見の埴輪壺」『上代文化』第27輯 国学院大学考古学会 1957年

- 塩野 博「聖天塚古墳」『日本考古学年報』24 日本考古学協会 1973年
- 註7 柿沼幹夫他「東谷・前山2号墳・古川端」『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告II 埼玉県遺跡発掘調査報告』第16集 埼玉県教育委員会 1978年
- 註8 金井塚良一「比企地方の前方後円墳―北武蔵の前方後円墳の研究―」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第1号 埼玉県立歴史資料館 1979年
- 註9 赤石光資他「殿山古墳・殿山遺跡」『上尾市文化財調査報告』第6集 上尾市教育委員会 1979年
- 註10 埼玉県教育委員会編『古墳調査報告第一編―本庄市及び児玉郡古墳調査―』 1956年
- 註11 菅谷浩之・駒宮史朗「児玉町美里村生野山古墳群発掘調査概要」『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会他 1973年
- 註12 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 1978年
- 註13 増田逸朗・駒宮史朗「横塚山古墳―後円部周溝の調査―」『埼玉県遺跡調査報告』第9集 埼玉県遺跡調査会 1969年
- 註14 金井塚良一編『三千塚古墳群発掘調査―中間報告―』 三千塚古墳群調査会 1962年
- 註15 栗原文蔵・小林重義「行田須賀大稲荷古墳群について」『埼玉考古』第12号 埼玉考古学会 1974年
- 註16 菅谷浩之『大御堂稲荷塚古墳調査報告書―袖無型石室をもつ―古墳』 上里村教育委員会 1970年
- 註17 菅谷浩之・増田逸朗・駒宮史朗「青柳古墳群発掘調査報告書」『埼玉県遺跡調査会報告』第19集 埼玉県遺跡調査会 1973年
- 註18 増田逸朗「児玉郡神川村北塚原古墳群」『第4回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会他 1971年
- 註19 坂本和俊「袖無型石室の検討」『原始社会研究』5 校倉書房 1979年
- 註20 増田逸朗・小久保徹他「塚本山古墳群」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告VI 埼玉県遺跡発掘調査報告書』第10集 埼玉県教育委員会 1977年

2. 長沖古墳群の性格

長沖古墳群の形成時期は、その開始が5世紀中頃まで遡り、6世紀前半には造墓活動が活発化して初期的な群集墳の形成の段階を迎え、その後、継続的な古墳文化の展開をみせ、後期群集墳へと発展し、7世紀中頃もしくは後半にまで至る事が判明した。

5世紀中頃に比定された大型円墳の14・34号墳は、本古墳群の先駆的な存在であると共に、身馴川上流域を墓域とする集団の首長墓と考えてさしつかえないものである。今回の調査では、相前後する系列の古墳の存在は明らかにされなかったが、現存する大型円墳の54号墳が後に続く古墳の可能性が強い。いずれにせよ、本古墳群内において、その系譜が辿れる様である。この様に、比較的狭い範囲内に5世紀代の首長墓が継続的に築造され、後に集団共有の墓域として周囲に中・小の古墳が築かれて古墳群を形成する例は、当兒玉郡内においては他に見受けられない。他の5世紀代の系譜をもつ首長層の墳墓は、いずれも独立墳の様相を呈し、点在している。

本古墳群は、6世紀前半には初期的な群集墳形成の段階を迎えている。そのあり方は、一箇所に集中する事なく、古墳群内の各所で、ほぼ期を同じくして数基の古墳の築造が行なわれ、群としての構造が複雑化している。分散して造墓された箇所は、確認された限りでも5箇所に及ぶ。このような状況は、該期に至り、経済的基盤の向上に伴って新しく擡頭してきた有力家長層の造墓が開始された為と考えられ、各々有機的な関係を保ちながらも、いくつかの単位ごとに古墳群内の数箇所を墓域とし、自立化して造墓活動を行った結果といえよう。それぞれの自立化した様相は、該期の古墳の埋葬施設が多様化している点からもうなずける。このような群集墳の出現の背景については、該期の当地域の動向を通して、ある程度推察できる。その立地から本古墳群に係わる集落として推定されるミカド遺跡からは、近辺で生産されたと考えられる数多くの須恵器の出土が知られている。同様な傾向は2号墳出土の須恵器においても認められる。とすれば、当地域では該期において須恵器を生産する集団の想定が可能であり、これらの専業者集団を既に掌握できる様な安定した経済的基盤の存在が窺い知れよう。さらには、群集墳中の被葬者の中には、これら集団の指導的立場にあったものの存在も想定されよう。また、須恵器生産集団を、北武蔵において逸速く掌握できた首長層の優位性も窺われよう。この点は、既に5世紀中頃において、北武蔵で最も早く埴輪祭祀を取り入れている事からも指摘される。

5世紀以降の首長墓は、25号墳の存在により遅くとも6世紀中頃には40m級の規模をもつ前方後円墳として変革する事が知れる。25号墳周辺には、他に同規模の前方後円墳が2基存在し、詳細は明らかでないながらも、これらは首長墓として一つの系譜を辿れる可能性が強い。とすれば、当兒玉郡内において稀に見る前方後円墳という墳形を継承する首長墓の系列として注目されよう。

6世紀後半から7世紀代にかけては、前代の古墳の間を埋める様に数多くの古墳が築かれてくると考えられる。主体部も追葬の可能な横穴式石室を採用し、後期群集墳へと発展する。古墳造営主体者も、前代に比べさらに拡がり、小規模な古墳が多くなる。このような状況下において、前代から造墓が可能であった被葬者層の中には、8号墳の如く小規模な帆立貝式とも称される様な前方後円墳の墳形を採用し、その位置を明確化して維持し続けるものも存在する様である。以上、調査結果から本古墳群の変遷を通しての特徴を述べてきた訳であるが、今後の課題として残された点は数多い。(菅谷浩之・金子 章)

VII お わ り に

昭和51年から54年にかけての5次に亘る発掘調査と、その成果を残すべく報告書の作成を行って、今回の調査は終了した。調査成果の詳細については、各項目で述べてきた通りであり、長沖古墳群についてある程度究明することができた。

調査にかかる以前では、長沖古墳群の東端に存在した古墳の数は少なく、初年度の調査区域も土器片の散布から集落址の調査を予定していた程であった。しかし、調査が進展するにつれて散布していた土器片等は、いずれも古墳と関係が深いことが判明し、結果的には古墳と古墳址の調査となった。

調査においては、盗掘などにより主体部からの出土遺物もほとんどなく、墳丘についても構築時のままで残っているものは全くなかった。しかし、主体部の形態や埴輪などを整理、検討して行く過程で、長沖古墳群を考える上での重要な資料を得ることができた。当初は、古墳群の東端に位置している古墳の調査であったために、横穴式石室を持つ終末期の古墳の調査という観念が強かったが、古墳址を調査する段階において、5世紀代の古墳を確認できた意義は大きい。調査古墳中では7世紀後半まで下る古墳も存在し、主体部についても多様な資料を得ることができ、北武蔵の古墳群を研究する上で貴重な資料を得ることができた。また、14号墳と34号墳などの古い円筒埴輪も、北武蔵の埴輪を研究するために欠かせない資料となろう。

しかし、今回の調査のみでは5世紀後半の古墳の存在、古い埴輪を出土した古墳の主体部、5世紀中頃以前にも既に古墳が築かれていたのか、さらには、古墳群が終焉を迎えるはっきりとした時期など多くの問題を解決することができず、今後の課題として残った。

これらの問題点は、今後長沖古墳群を究明する上での課題であり、今後の長沖古墳群の取組み方を示す課題であるかも知れない。51年に調査した1号墳や3号墳の上には立派な道路が既に完成しており、ゆくゆくは、調査した古墳の周辺も住宅で埋まるであろうし、この開発の対応いかんではこれらの課題の解決が不可能になることもある。

前方後円墳を公園用地として残す計画は賢明であるが、今回の調査はあくまでもこれから開発される地域の点を調査したに過ぎない。開発予定地の下には多数の古墳址の存在が予想され、これらの古墳址を解明しないかぎり、長沖古墳群の解明とはならない。これは行政や研究者の責務でもある。また、高柳地区を含めて現在多くの古墳が残っているが、平坦地でこれほど多くの古墳が一ヶ所で見られる地域は、県内では他にはなくなってしまった。そのためにも、ぜひこのまま残して後世に伝えたい古墳群である。

ともかく、ここに報告書を刊行したが、ここに至るまでの過程はなみなみならぬものがあつた。多くの問題をはねのけて調査を完了できたのは、大学生生活の4年間を長沖古墳群の調査で過ごした学生であり、おしみなく調査に協力して下さった地元地区の調査参加者、それに34号墳などの調査でもそうであつたように、時に調査予定外の場所であっても、研究ということで耕作をしているにもかかわらず、調査のために畑を提供してくれた土地所有者の方々の協力があつたからこそであつた。あらためて感謝する次第である。

(菅谷浩之)

版 圖



長沖古墳群調査区空中写真

(第2次調査時・埼玉県教育委員会提供)

図版2



1. 陣見山丘陵より児玉郡平野部を隔て榛名山を望む



2. 長沖1・2号墳付近より陣見山を望む



1. 長沖1・2号墳付近より西方を望む



2. 長沖1号墳全景(西より)



1. 長沖1号墳全景(北より)



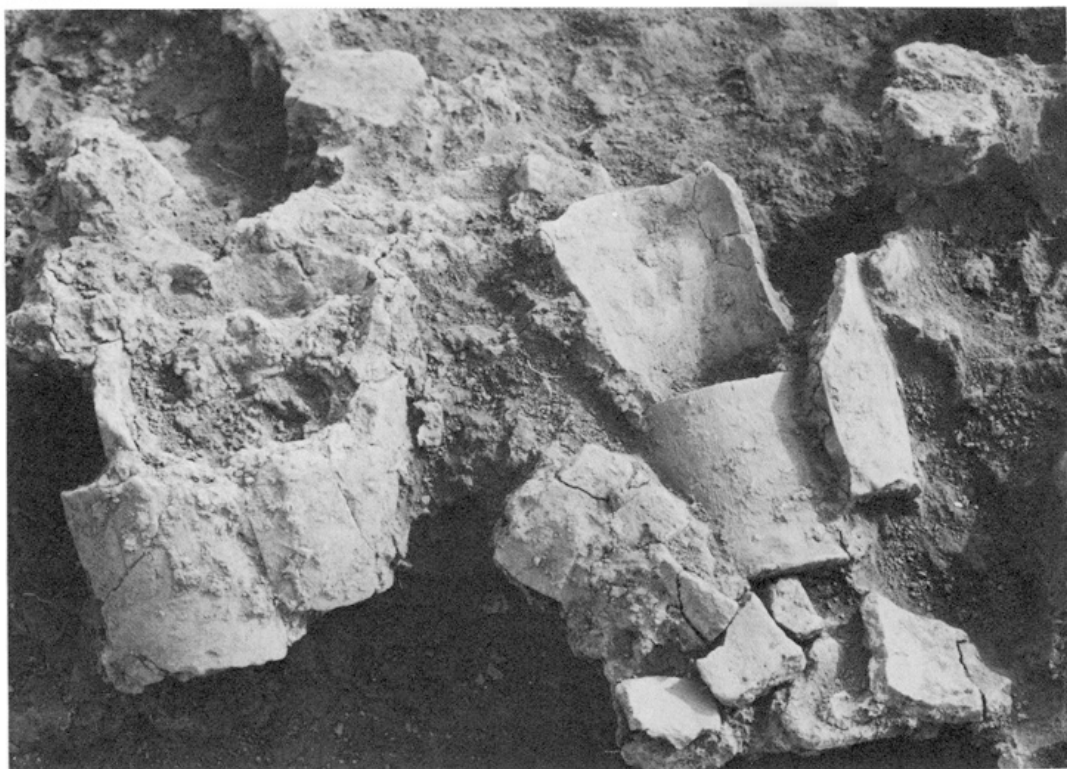
2. 長沖1号墳周溝西側



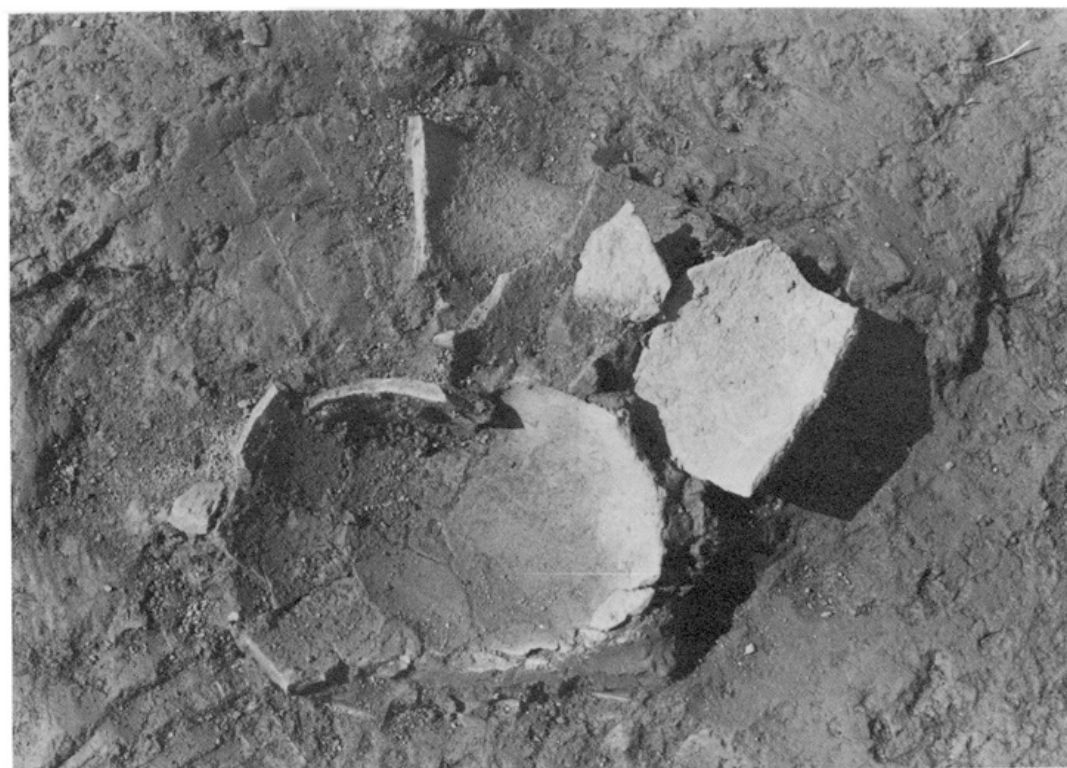
1. 長沖1号墳主体部全景



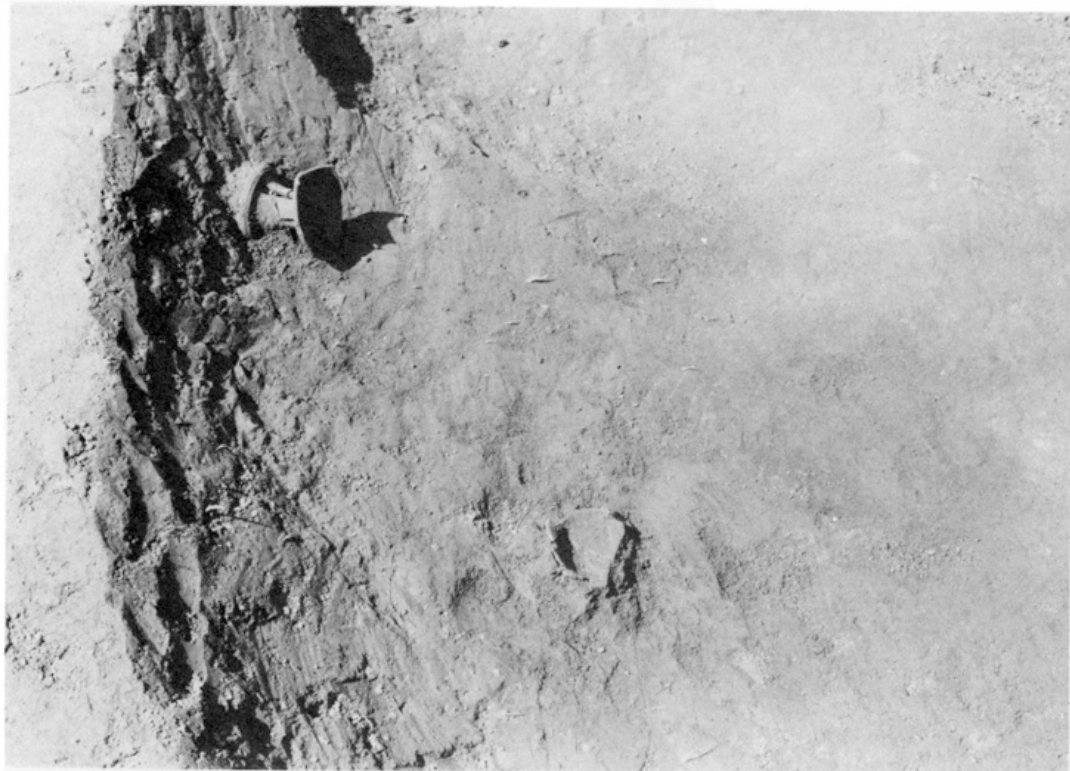
2. 長沖1号墳埴輪列出土状態



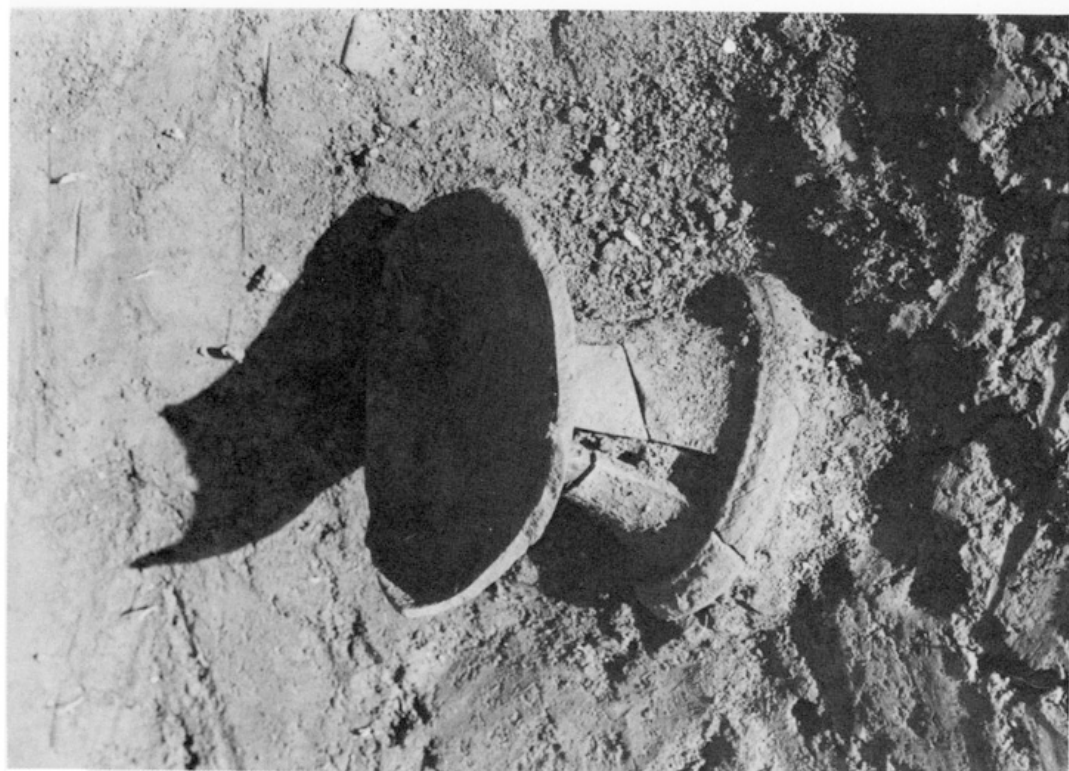
1. 長沖1号墳埴輪出土状態



2. 長沖1号墳周溝内土師器出土状態



1. 長沖2号墳周溝内須恵器・土師器出土状態



2. 長沖2号墳須恵器出土状態



1. 長沖3号墳墳丘全景（西より）



2. 長沖3号墳全景（南より）



1. 長沖3号墳石室全景



2. 長沖3号墳奥壁積み方近景



1. 長沖3号墳石室内遺物出土状態



2. 長沖3号墳控え積み



1. 長沖8・9・10号墳墳丘全景（南東より）



2. 長沖8号墳墳丘全景（南より）



1. 長沖8号墳作業風景



2. 長沖8号墳全景（前方部より）



1. 長沖8号墳近景（前方部より）



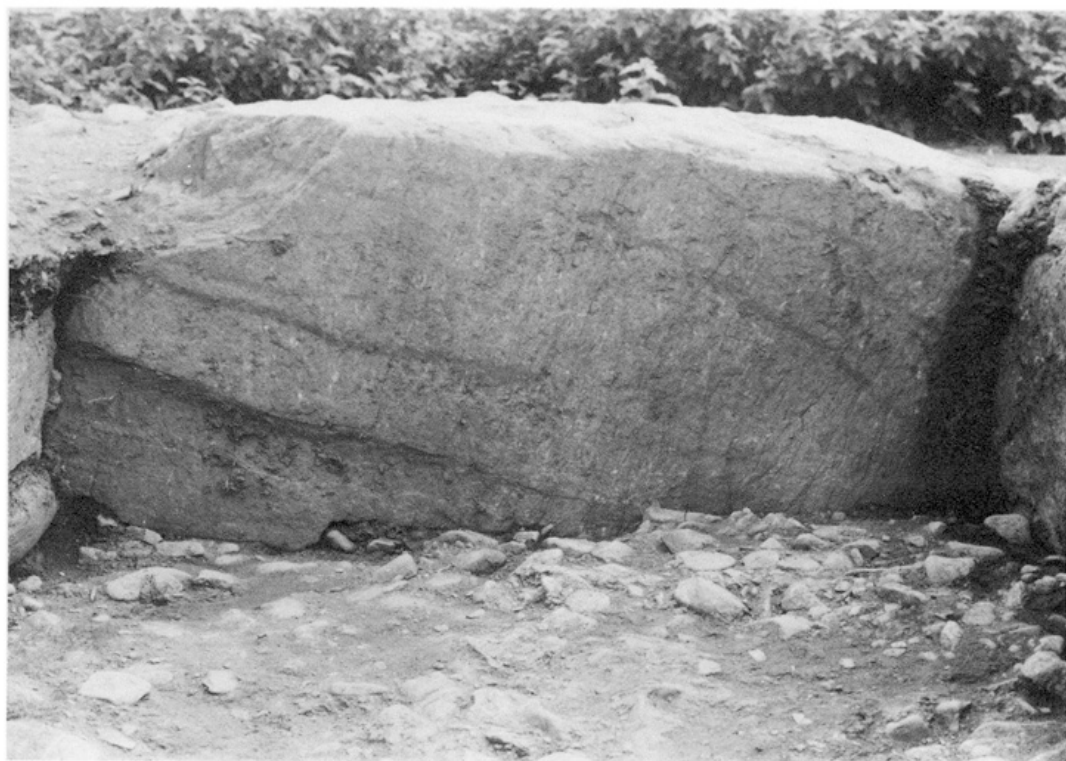
2. 長沖8号墳前方部接合部周溝近景



1. 長沖8号墳天井石検出状態



2. 長沖8号墳石室全景



1. 長沖8号墳奥壁



2. 長沖8号墳控え積み（東より）



1. 長沖9・10号墳墳丘遠景（北東より）



2. 長沖9号墳墳丘全景（南西より）



1. 長沖9号墳表土除去状態



2. 長沖9号墳石室全景



1. 長沖9号墳羨道部閉塞状態



2. 長沖9号墳奥壁積み方近景



1. 長沖9号墳石室内直刀出土状態



2. 長沖9号墳石室内須恵器出土状態



1. 長沖9号墳控え積み（西より）



2. 長沖9号墳控え積み（北より）



1. 長沖10号墳墳丘全景（南より）



2. 長沖10号墳石室全景



1. 長沖10号墳石室内鉄鏃出土状態



2. 長沖10号墳石室内直刀出土状態



1. 長沖10号墳控え積み（北東より）



2. 長沖11号墳墳丘全景（南より）



1. 長沖11号墳全景（南西より）



2. 長沖11号墳石室全景（北東より）



1. 長沖11号墳石室近景



2. 長沖11号墳前庭部



1. 長沖11号墳前庭部須恵器出土状態



2. 長沖11号墳石室内遺物出土状態



1. 長沖12号墳墳丘全景（南より）



2. 長沖12号墳全景（西より）



1. 長沖12号墳周溝南東側



2. 長沖12号墳主体部全景



1. 長沖12号墳土師器出土状態



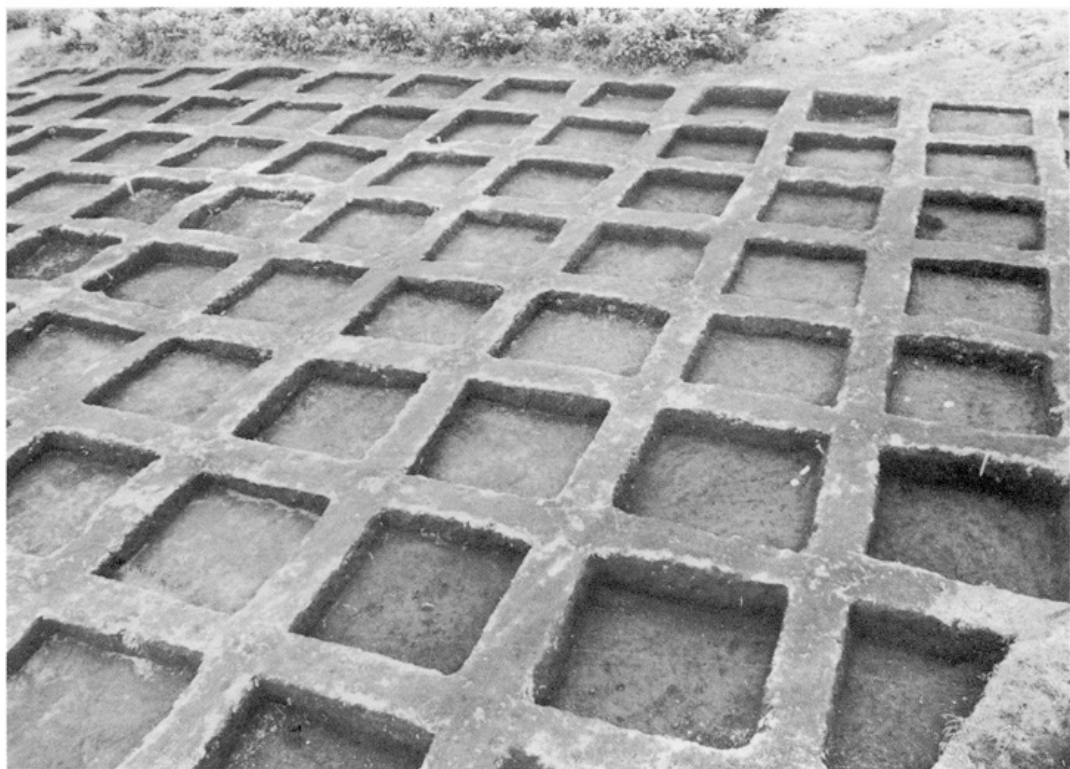
2. 長沖12号墳土師器出土状態



1. 長沖縄文A地区(14・15・16号墳)全景(南東より)



2. 長沖縄文A地区(14・15・16号墳)作業風景



1. 長沖縄文A地区（14・15・16号墳）調査時全景



2. 長沖14・15・16号墳全景（北より）



1. 長沖14号墳近景（南より）



2. 長沖14号墳周溝断面



1. 長沖15号墳近景（西より）



2. 長沖15号墳周溝断面



1. 長沖16号墳周溝近景（北より）



2. 長沖16号墳周溝断面



1. 長沖第2次調査現地説明会風景



2. 長沖21号墳墳丘(南東より)



1. 長沖21号墳全景（調査時南東より）



2. 長沖21号墳全景（調査時北より）



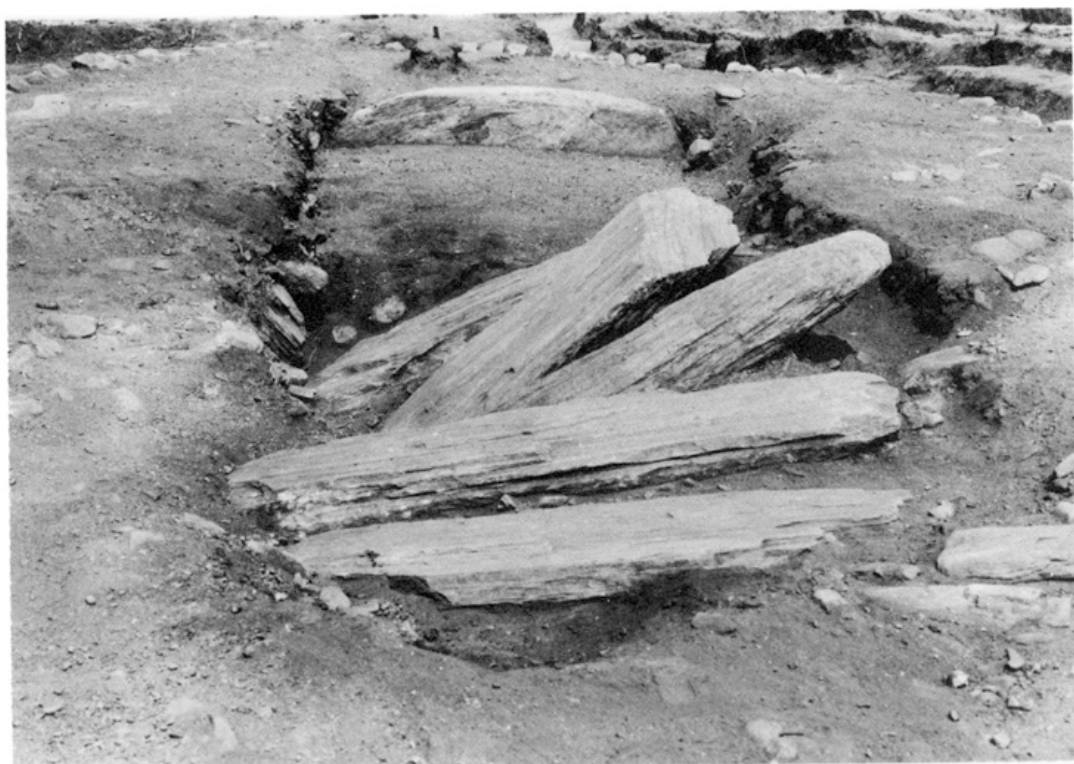
1. 長沖21号墳墳丘断面 (Aセクション)



2. 長沖21号墳墳丘断面 (Bセクション)



1. 長沖21号墳天井石被覆粘土及びび礫



2. 長沖21号墳天井石検出状態



1. 長沖21号墳石室全景



2. 長沖21号墳羨道部閉塞状態



1. 長沖21号墳玄室棺床面



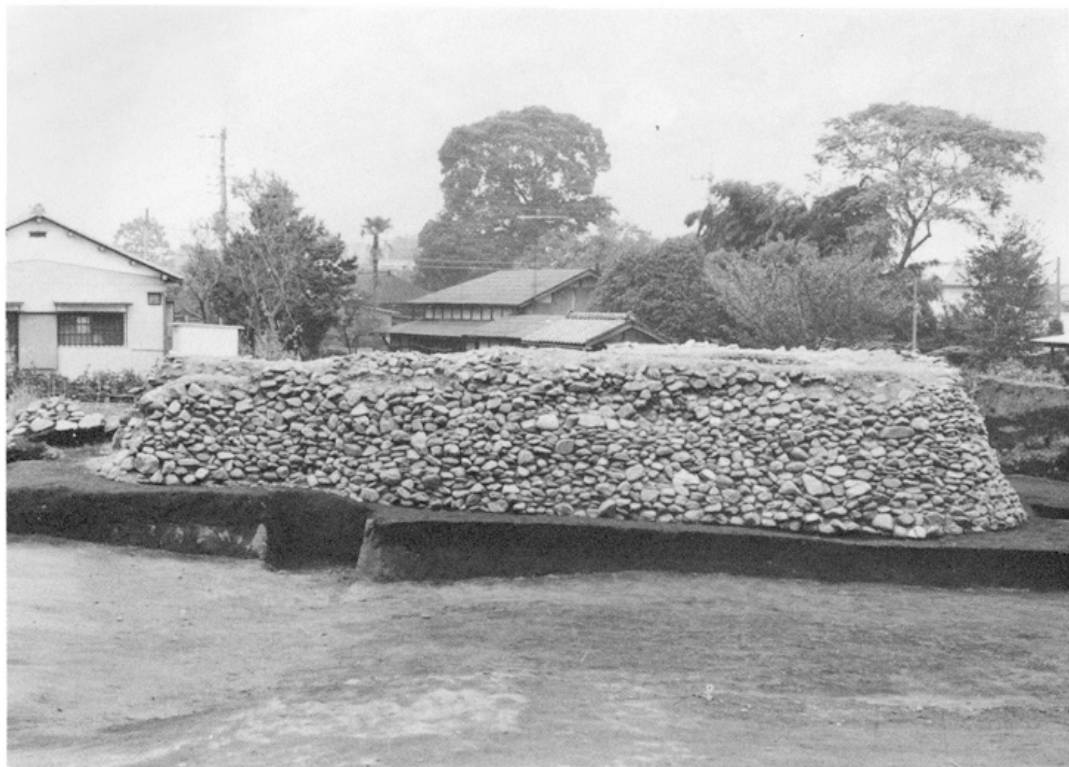
2. 長沖21号墳閉塞石積み方



1. 長沖21号墳側壁、玄門積み方



2. 長沖21号墳側壁積み方近景



1. 長沖21号墳控え積み（東より）



2. 長沖21号墳控え積み（西より）



1. 長沖21号墳控え積み（北より）



2. 長沖22号墳墳丘全景（南東より）



1. 長沖22号墳全景（南東より）



2. 長沖22号墳全景（北西より）



1. 長沖22号・26号墳周溝



2. 長沖22号墳周溝断面



1. 長沖22号墳墳丘断面



2. 長沖22号墳主体部



1. 長沖23号墳墳丘伐採風景



2. 長沖23号墳墳丘全景（南より）



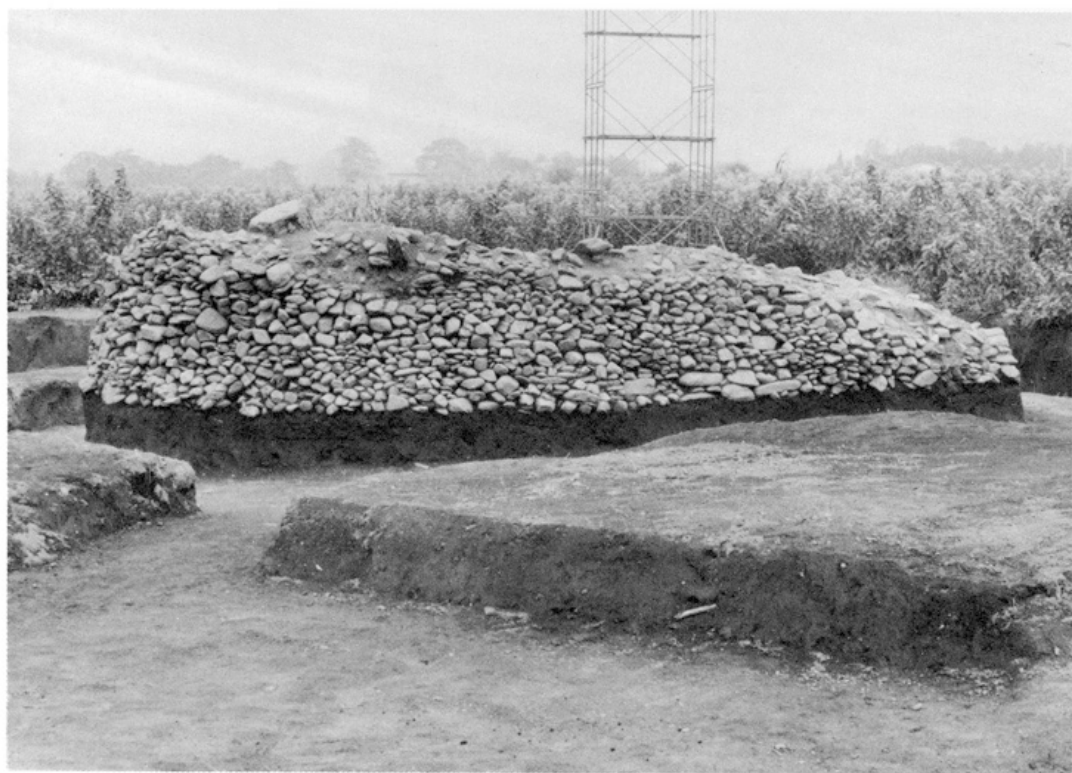
1. 長沖23号墳全景（北西より）



2. 長沖23号墳石室全景



1. 長沖23号墳石室側面



2. 長沖23号墳控え積み（北西より）



1. 長沖25号墳作業風景（第5次調査）



2. 長沖25号墳前方部周溝遠景（南西より、第3次調査）



1. 長沖25号墳前方部周溝近景（南東より、第3次調査）



2. 長沖25号墳周溝全景（南西より、第5次調査）



1. 長沖25号墳全景（北東より、第5次調査）



2. 長沖25号墳クビレ部周溝近景（南東より）



1. 長沖25号墳前方部周溝近景（南東より、第5次調査）



2. 長沖25号墳前方部周溝南東コーナー部



1. 長沖25号墳前方部周溝ブリッジ部



2. 長沖25号墳クビレ部周溝断面



1. 長沖25号墳前方部周溝内人物埴輪出土状態



2. 長沖25号墳前方部周溝内埴輪出土状態



1. 長沖25号墳前方部周溝内土師器・埴輪出土状態



2. 長沖25号墳前方部周溝内土師器・埴輪出土状態



1. 長沖25号墳前方部周溝内土師器出土状態



2. 長沖25号墳前方部周溝内土師器出土状態



1. 長沖27号墳墳丘全景（南東より）



2. 長沖27号墳全景（北東より）



1. 長沖27号墳全景（北西より）



2. 長沖27号墳全景（墳丘除去後）



1. 長沖27号墳周溝断面



2. 長沖27号墳主体部



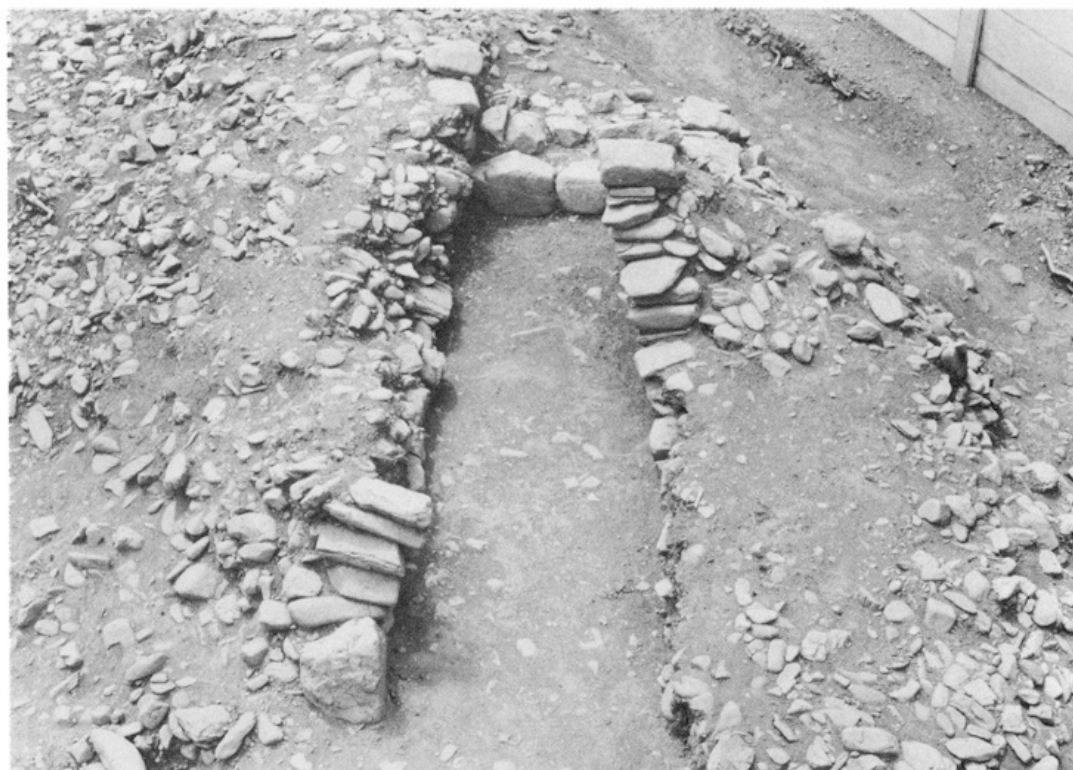
1. 長沖28号墳墳丘全景（北より）



2. 長沖28号墳墳丘全景（北東より）



1. 長沖28号墳周溝断面



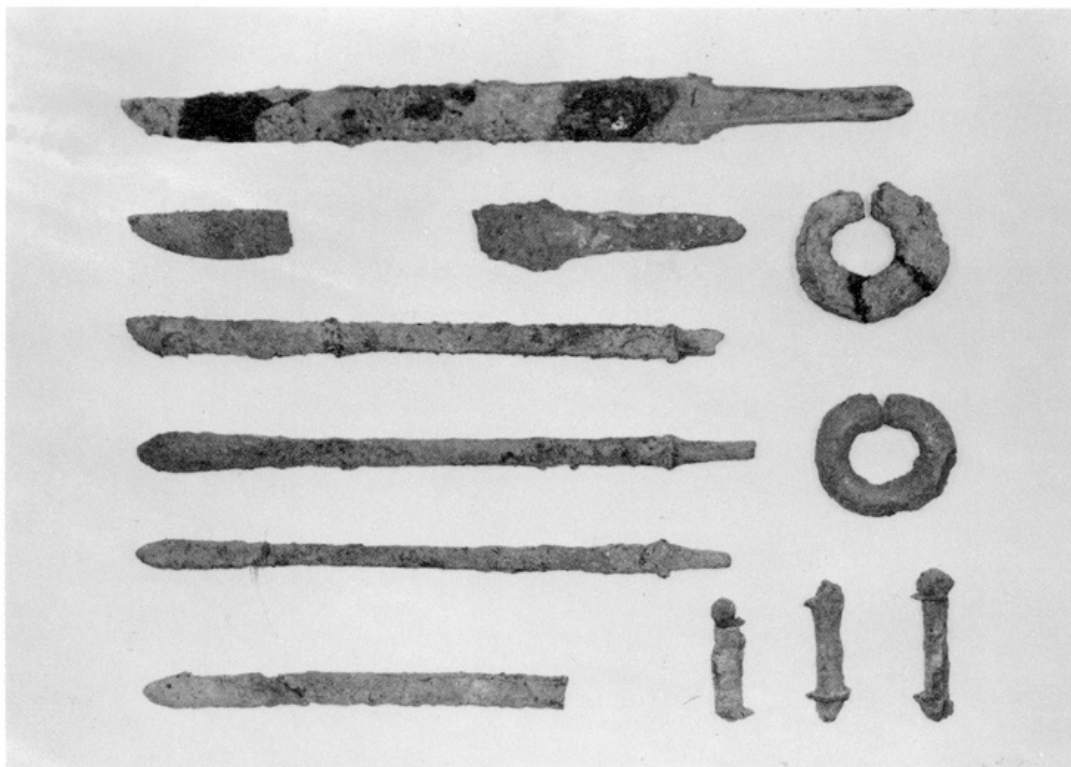
2. 長沖28号墳石室全景（北東より）



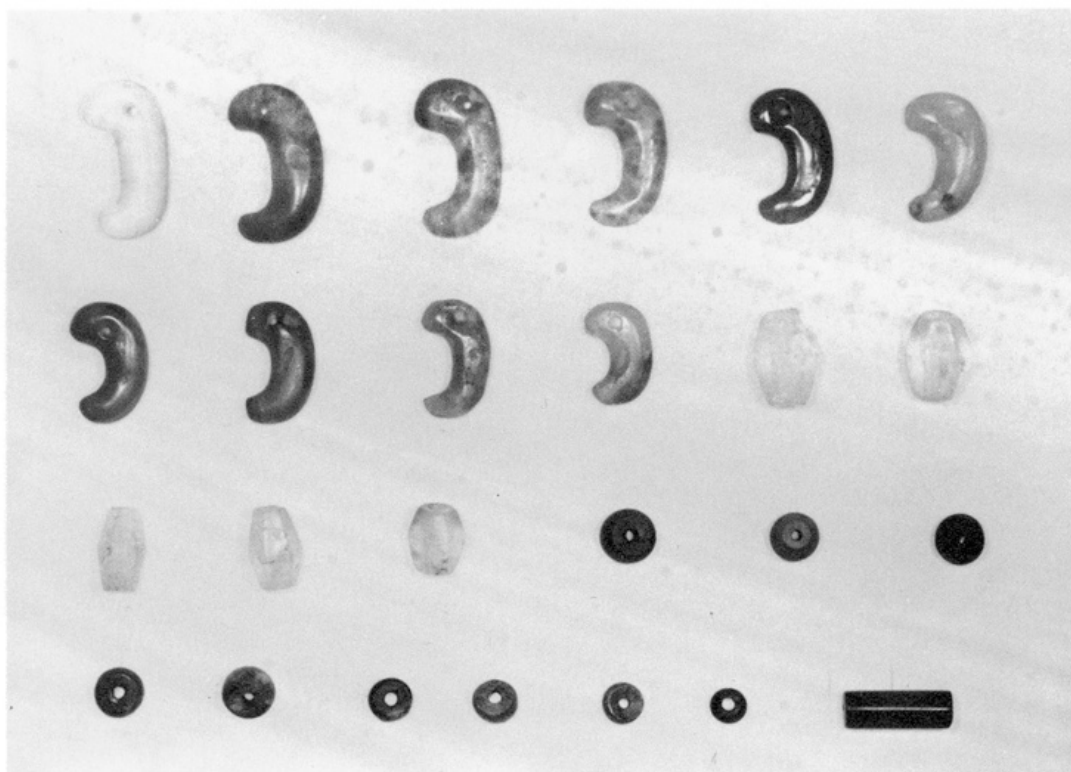
1. 長沖28号墳石室近景（北東より）



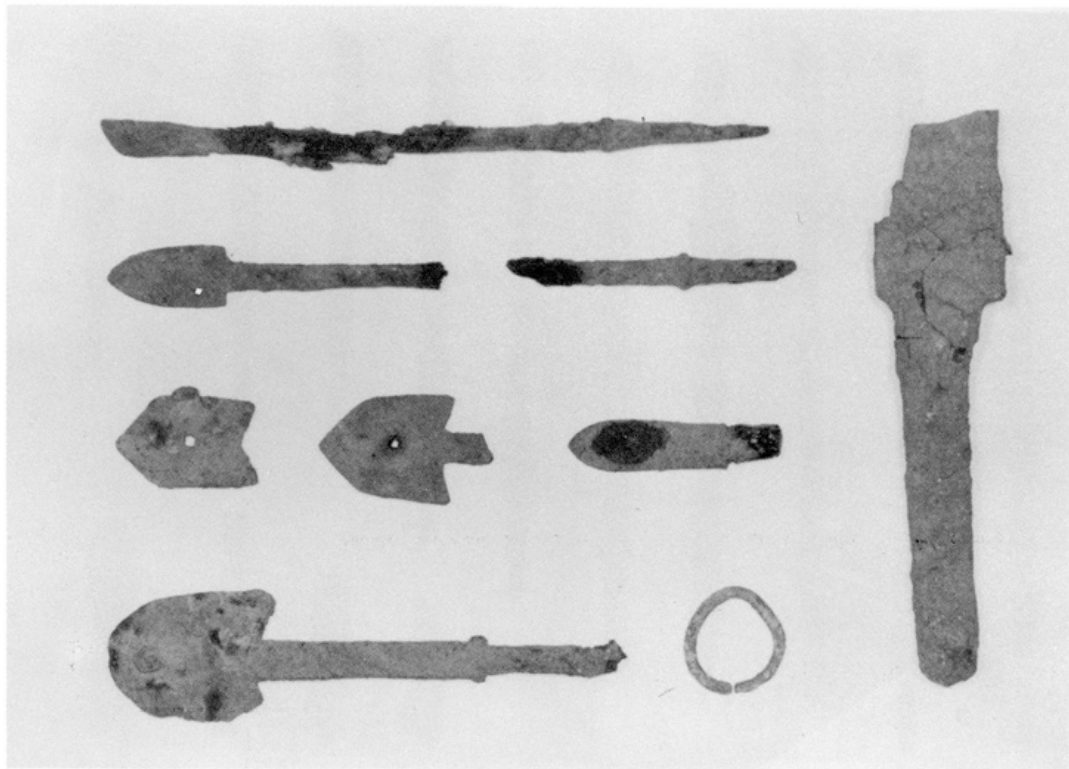
2. 長沖28号墳石室側壁積み方近景



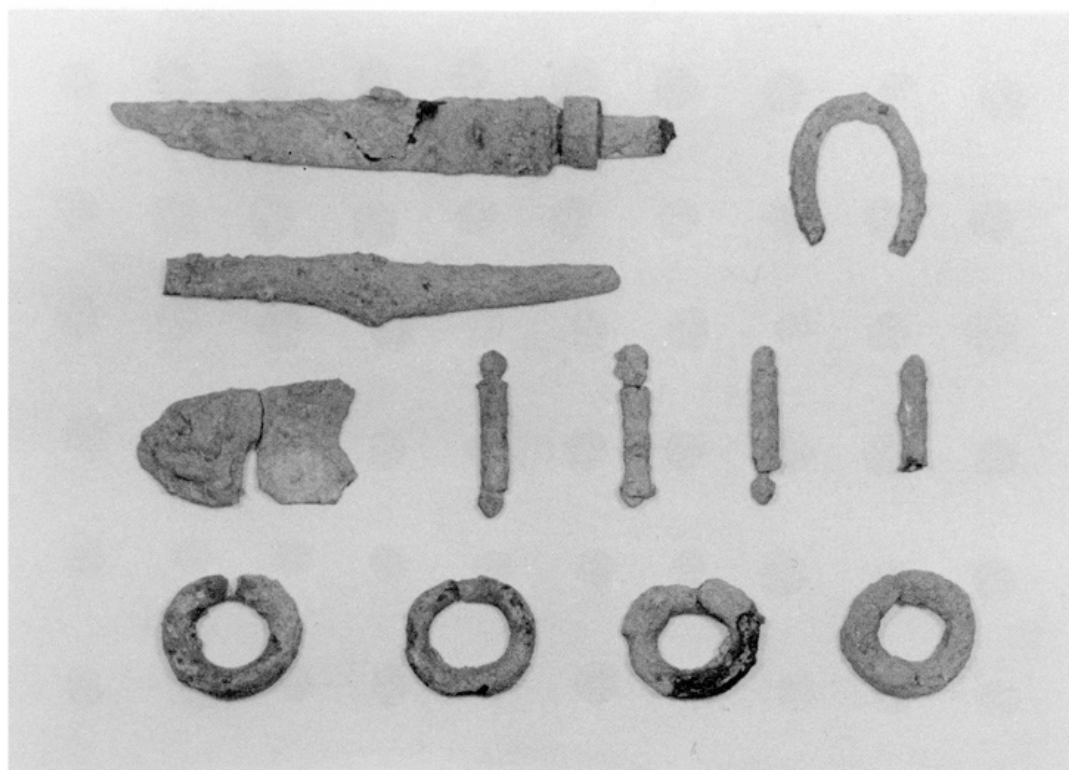
1. 長沖3号墳石室出土遺物(装身具)



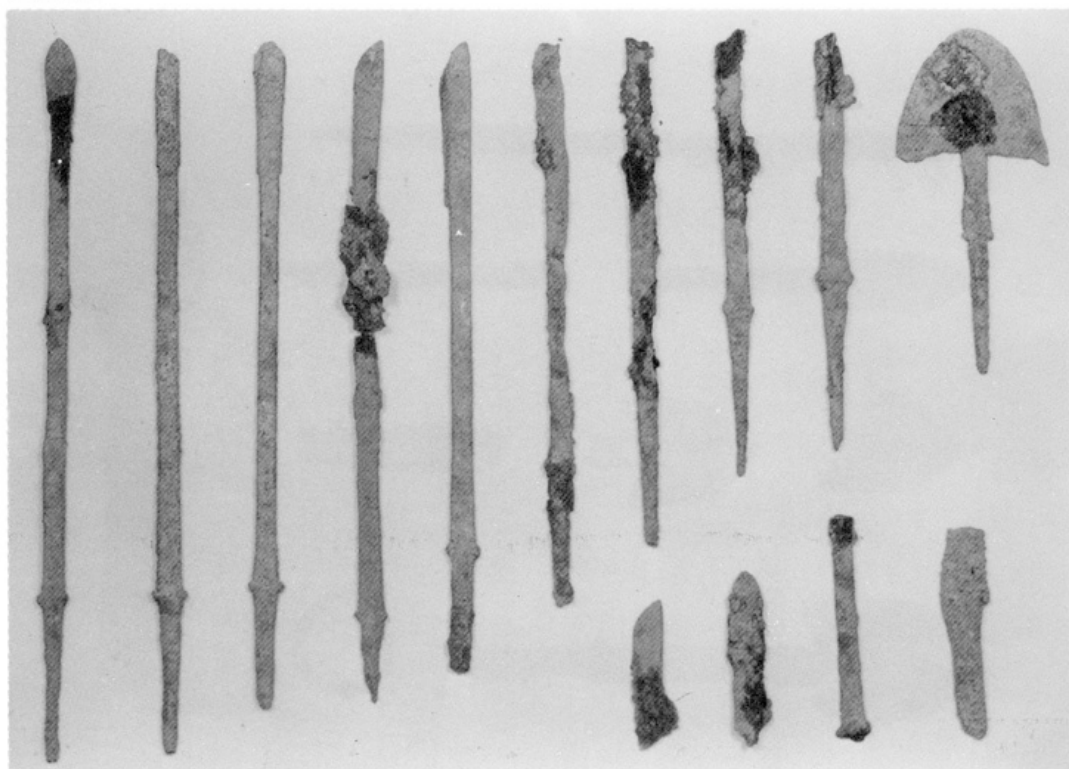
2. 長沖3号墳石室出土遺物(鉄製品・装身具)



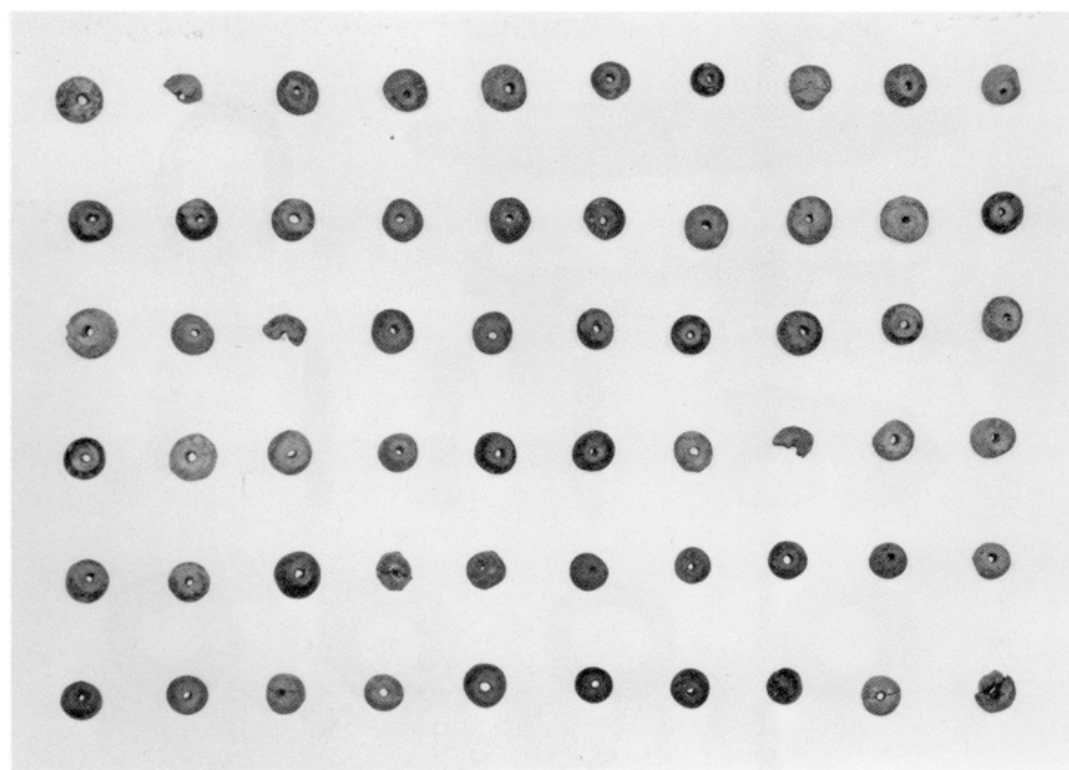
1. 長沖8号墳石室出土遺物（鉄製品・装身具）



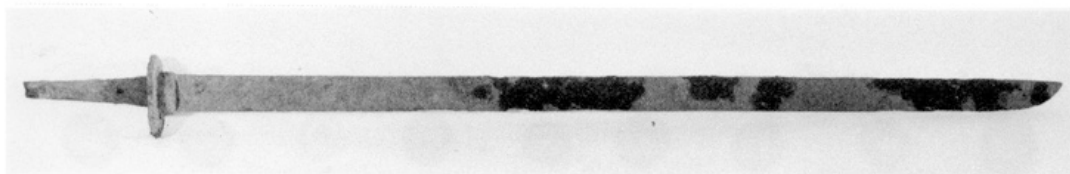
2. 長沖9号墳石室出土遺物（鉄製品・装身具）



1. 長沖10号墳石室出土遺物（鉄製品）



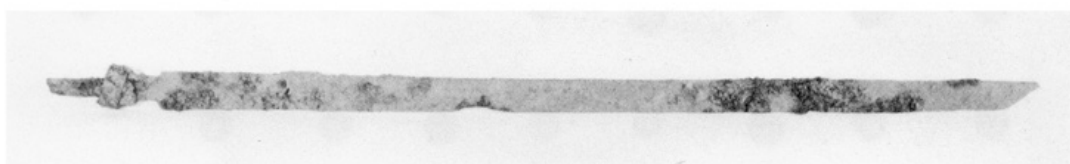
2. 長沖10号墳石室出土遺物（装身具）



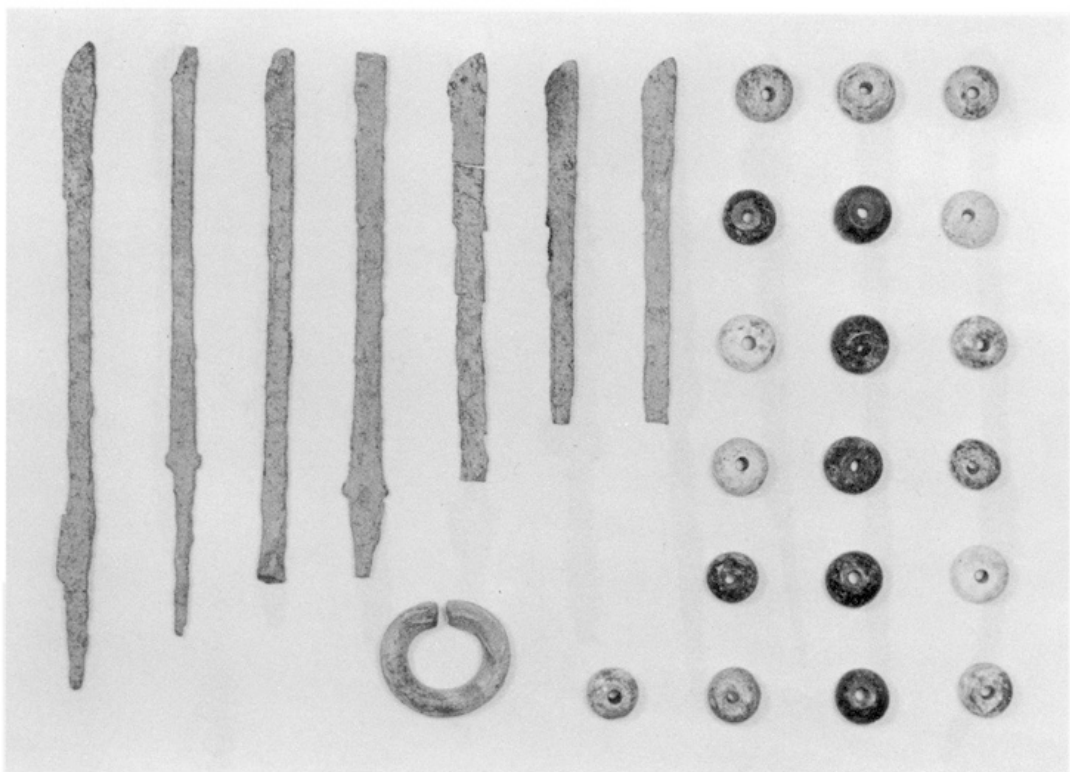
1. 長沖3号墳石室出土遺物(直刀)



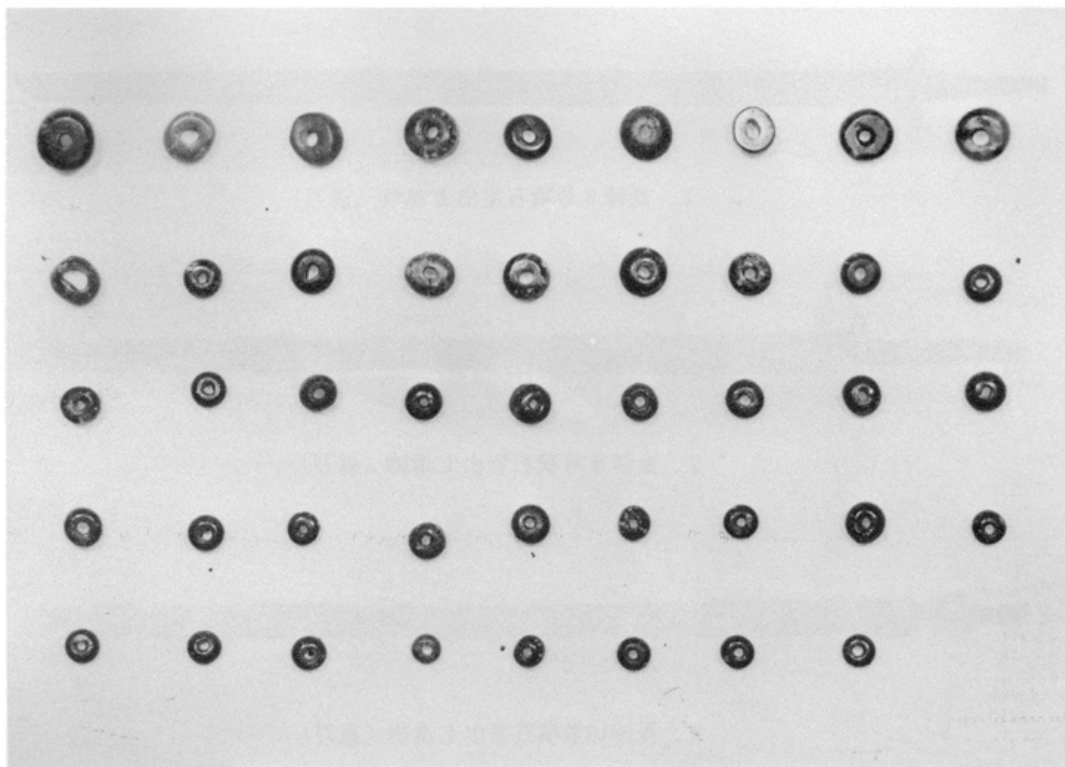
2. 長沖9号墳石室出土遺物(直刀)



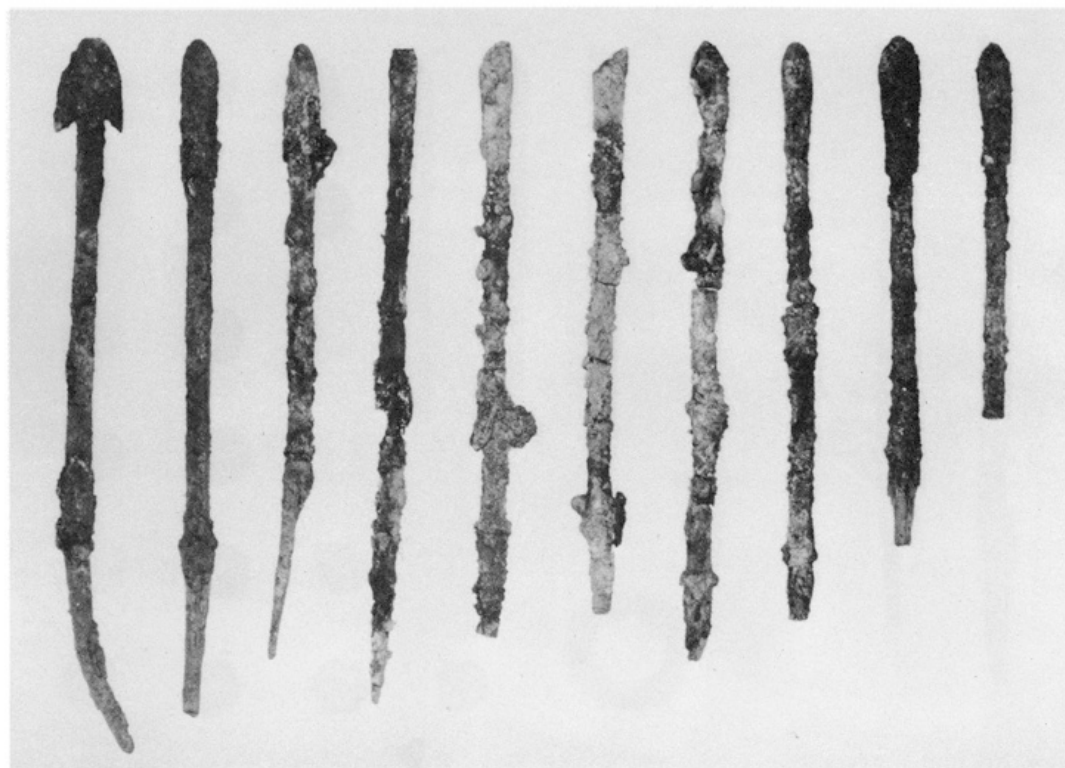
3. 長沖10号墳石室出土遺物(直刀)



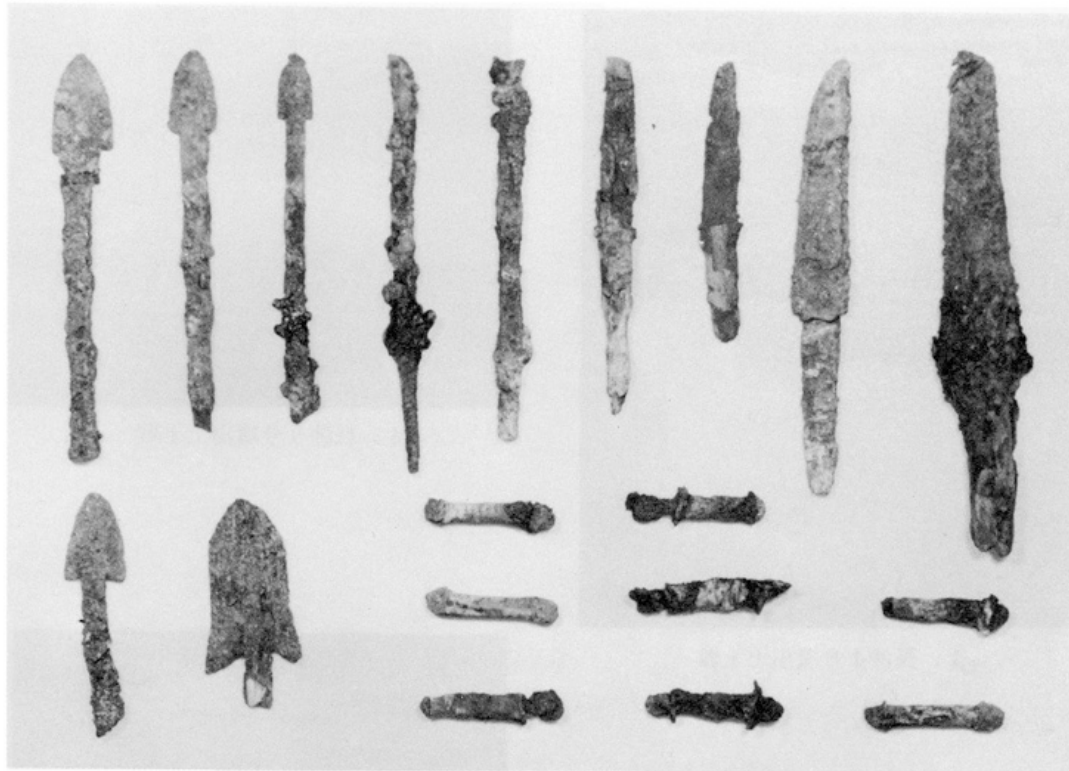
4. 長沖11号墳石室出土遺物(鉄製品・装身具)



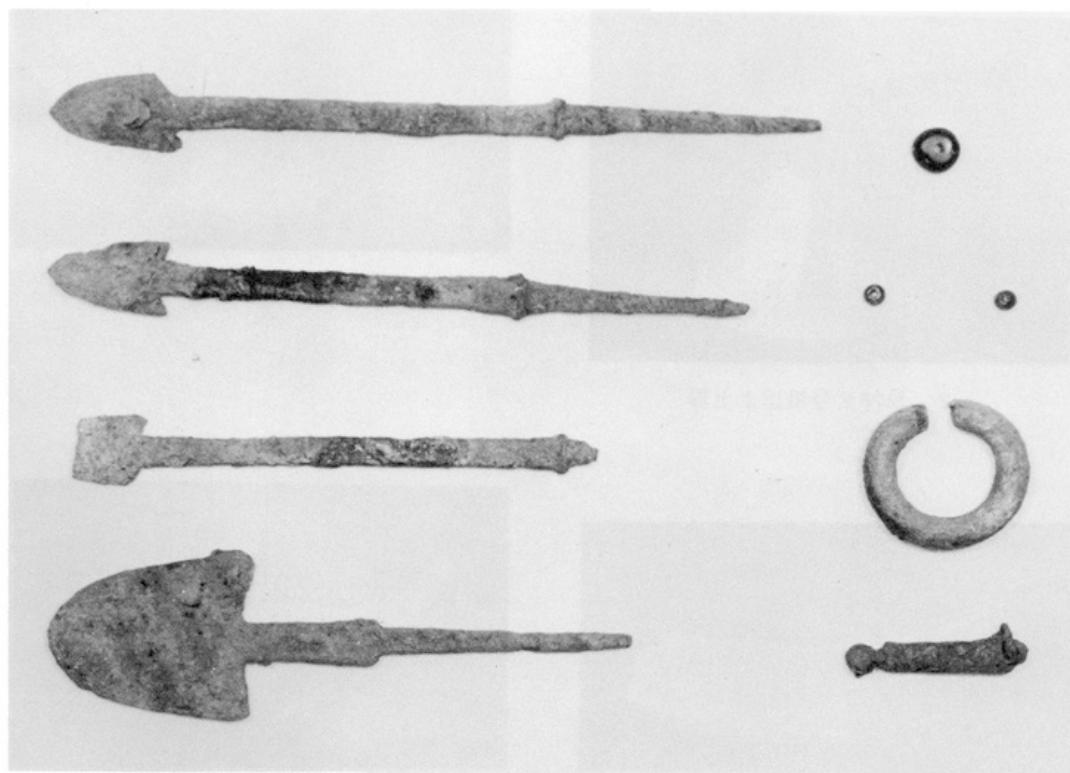
1. 長沖21号墳石室出土遺物（装身具）



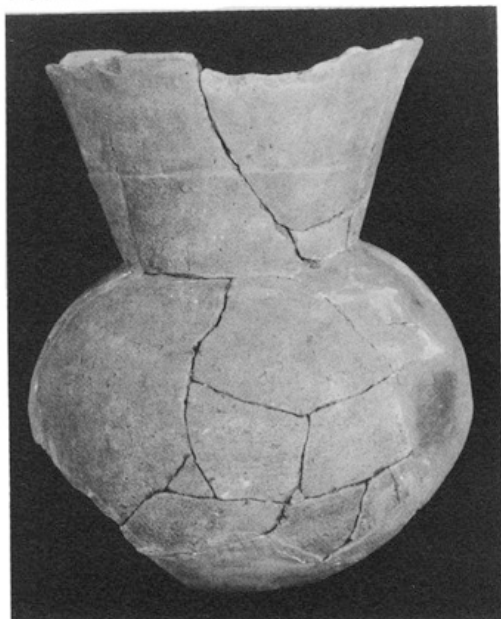
2. 長沖21号墳石室出土遺物（鉄製品）



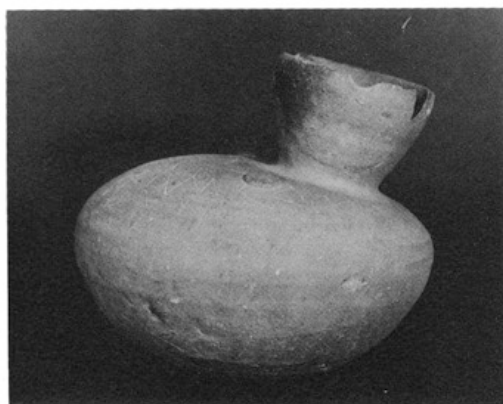
1. 長沖21号墳石室出土遺物（鉄製品）



2. 長沖23号墳石室出土遺物（鉄製品・装身具）



1. 長沖1号墳出土土器



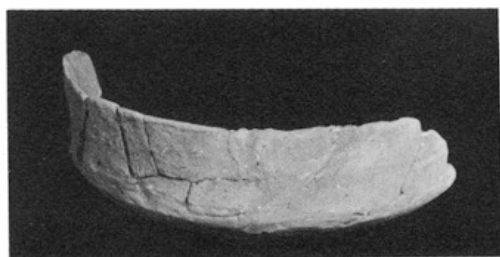
4. 長沖9号墳出土土器



2. 長沖2号墳出土土器



5. 長沖11号墳出土土器



3. 長沖2号墳出土土器



6. 長沖11号墳出土土器



1. 長沖12号墳出土土器



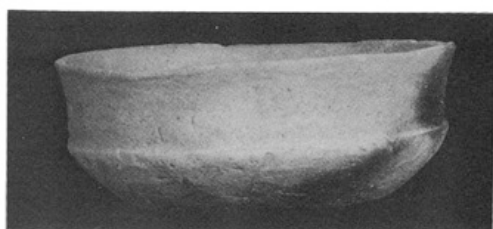
2. 長沖12号墳出土土器



3. 長沖12号墳出土土器



4. 長沖14号墳出土土器



5. 長沖25号墳出土土器



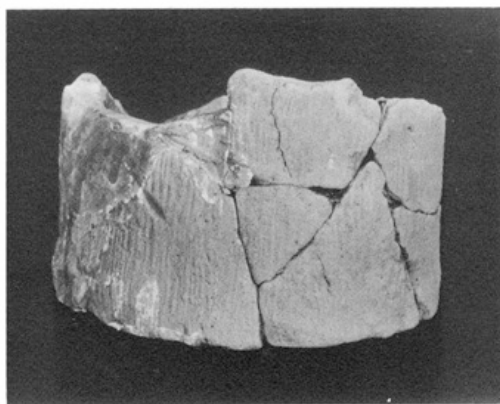
6. 長沖25号墳出土土器



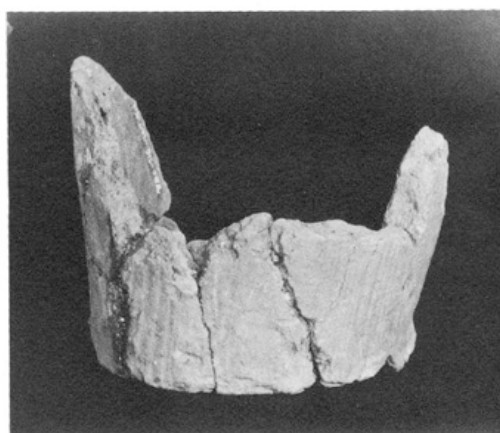
7. 長沖25号墳出土土器



1. 長沖1号墳出土円筒埴輪 (第99図-1)



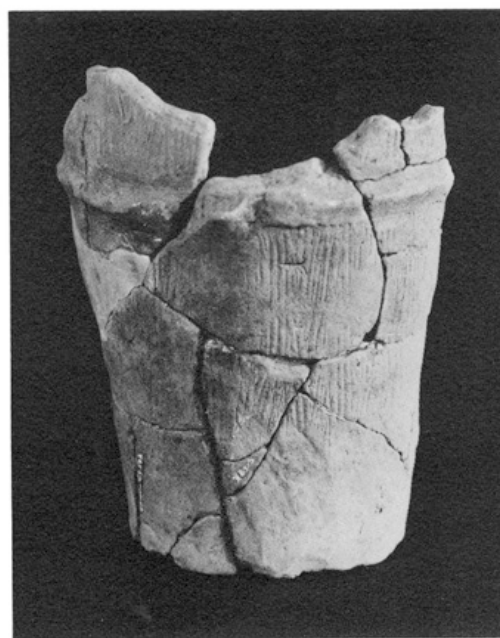
3. 長沖1号墳出土円筒埴輪 (第99図-3)



4. 長沖1号墳出土円筒埴輪 (第99図-6)



2. 長沖1号墳出土円筒埴輪 (第99図-2)



5. 長沖1号墳出土円筒埴輪 (第99図-7)

図版73



1. 長沖1号墳出土円筒埴輪 (第100図-1)



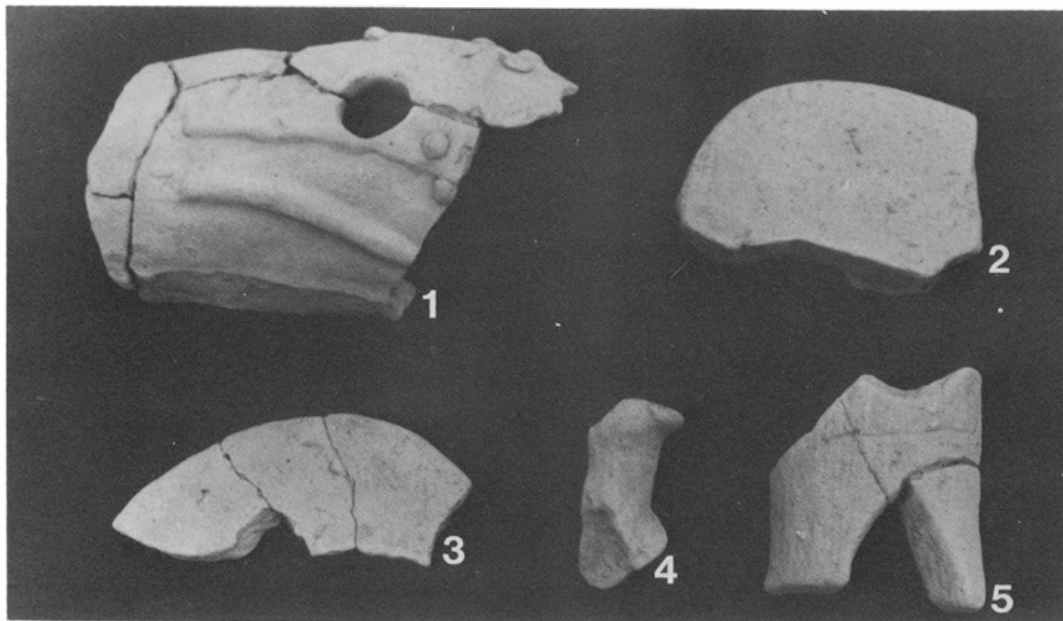
3. 長沖1号墳出土円筒埴輪 (第100図-5)



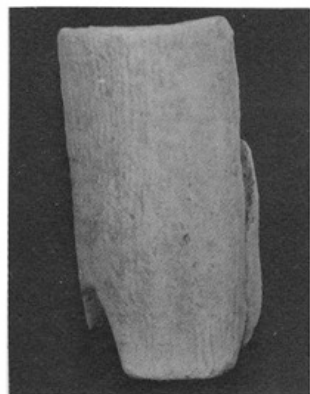
2. 長沖1号墳出土円筒埴輪 (第100図-2)



4. 長沖1号墳出土円筒埴輪 (第100図-7)



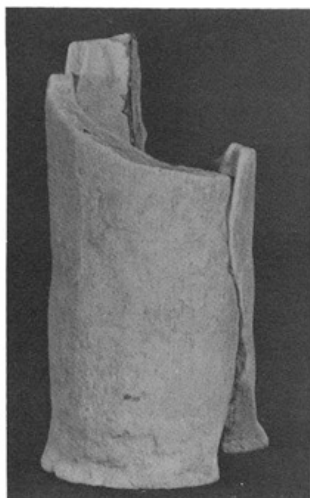
1. 長沖1号墳出土形象埴輪（馬）



2



4



3

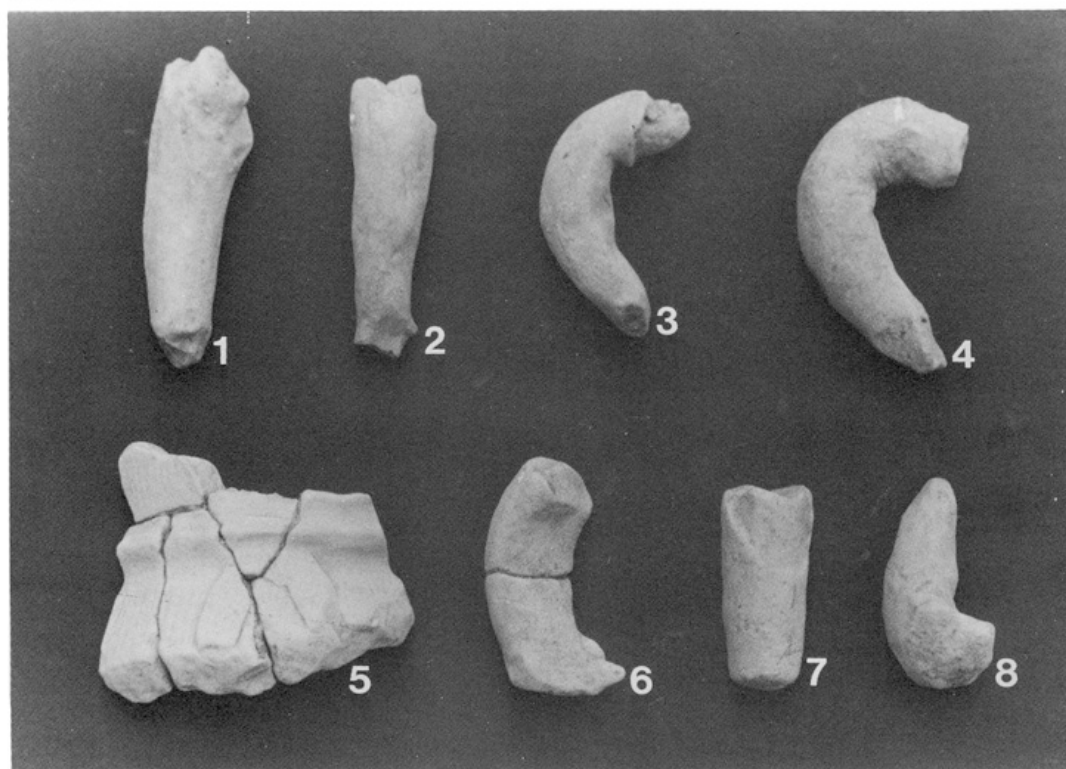


5

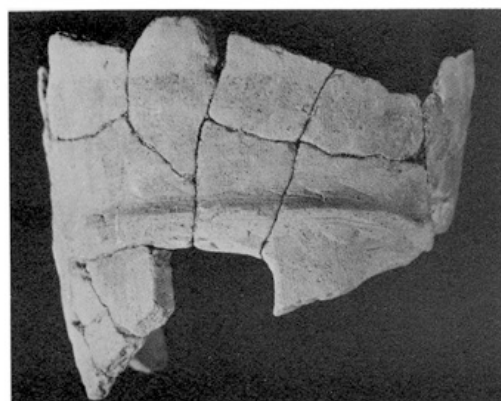


6

2～6. 長沖1号墳出土形象埴輪（馬、脚部）



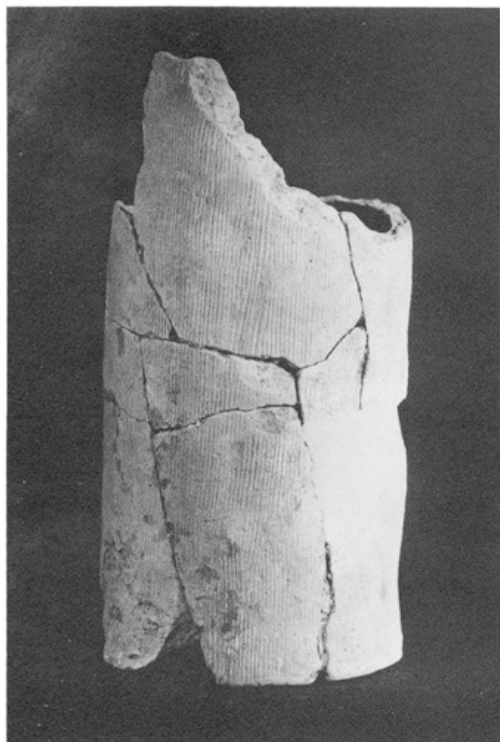
1. 長沖1号墳出土形象埴輪（人物）



2. 長沖2号墳出土円筒埴輪（第103図-1）



3. 長沖2号墳出土円筒埴輪（第103図-2）



1. 長沖8号墳出土埴輪
(形象台部 第106図-2)



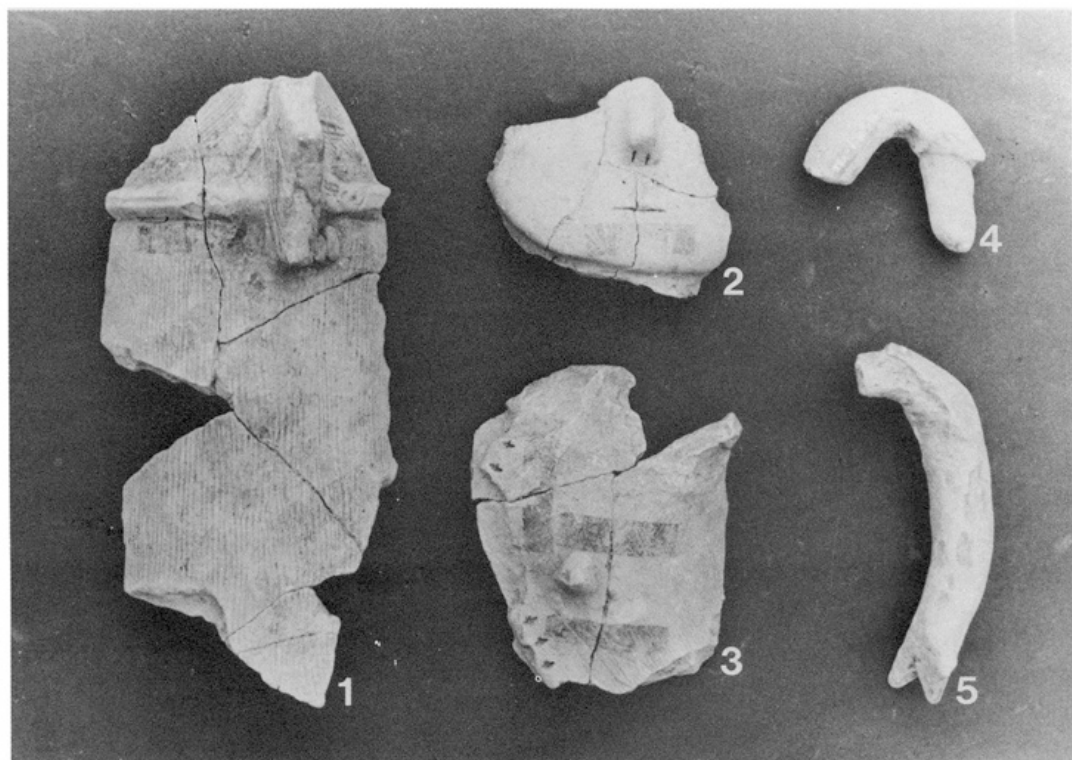
3. 長沖8号墳出土円筒埴輪 (第106図-4)



2. 長沖8号墳出土埴輪
(形象台部 第106図-3)



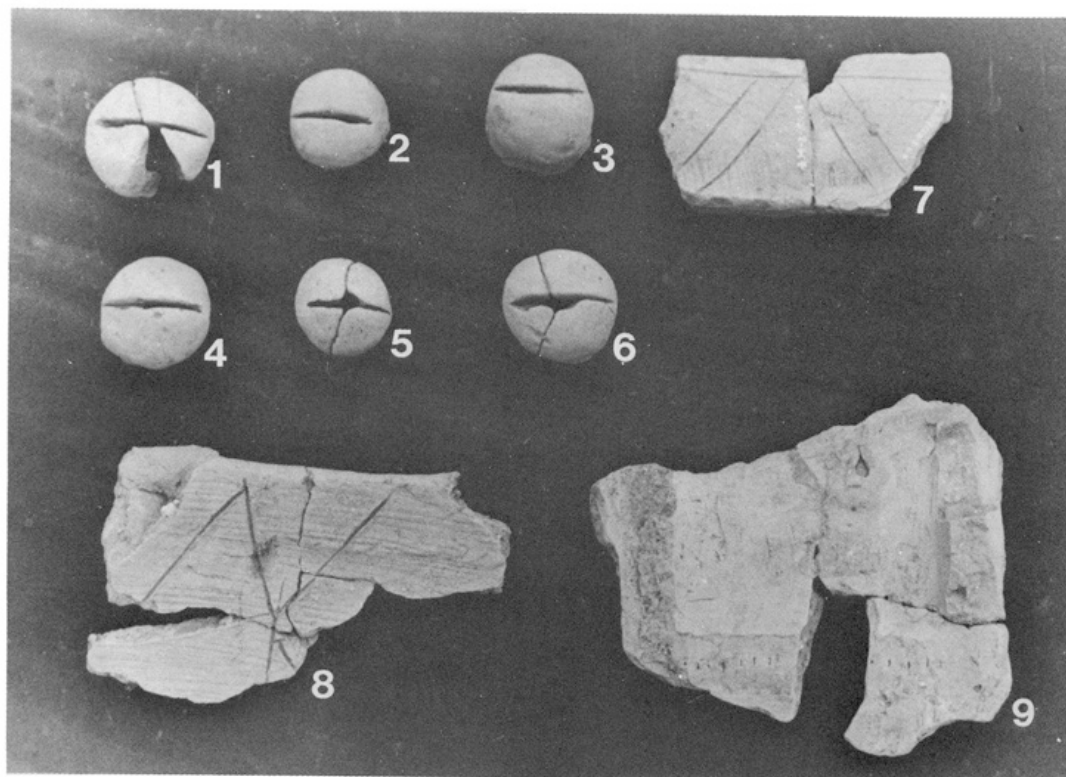
4. 長沖8号墳出土円筒埴輪 (第106図-5)



1. 長沖8号墳出土形象埴輪（靴・人物他）



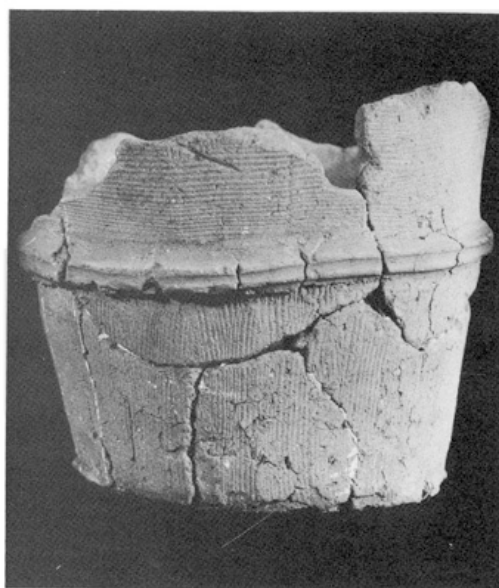
2. 長沖8号墳出土形象埴輪（人物）



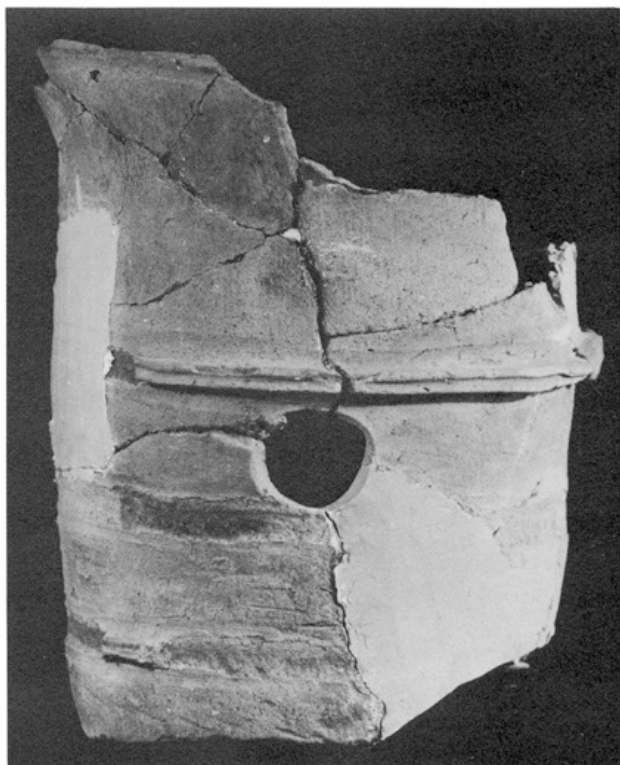
1. 長沖8号墳出土 (馬他)



2. 長沖14号墳出土朝顔形円筒埴輪
(第111図-1)



3. 長沖14号墳出土円筒埴輪 (第111図-3)



1. 長沖15号墳周溝内側出土円筒埴輪 (第114図)



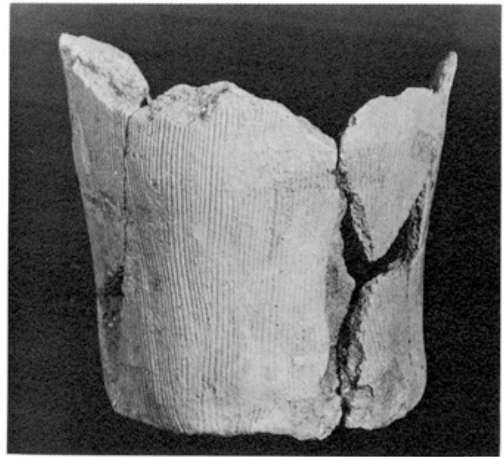
2. 長沖15号墳出土円筒埴輪 (第113図-1)



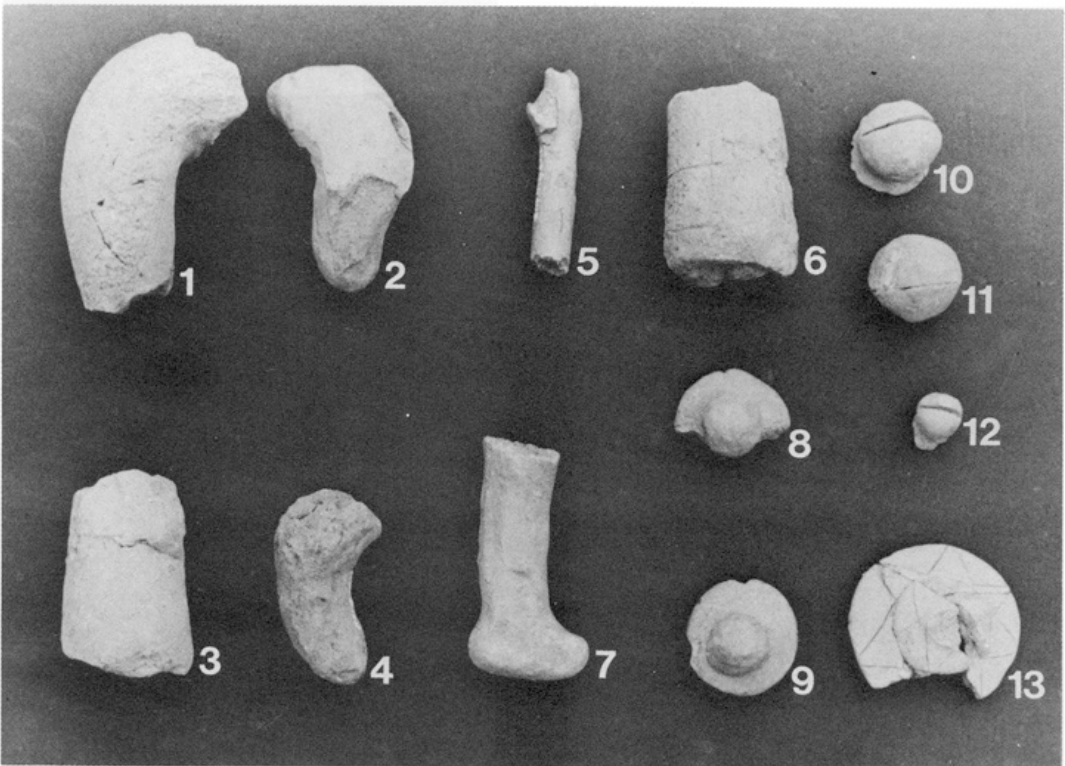
3. 長沖15号墳出土円筒埴輪 (第113図-2)



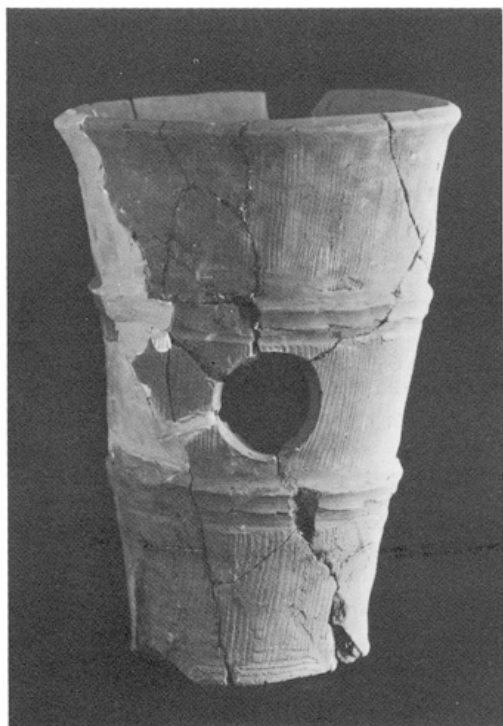
1. 長沖21号墳出土円筒埴輪 (第117図-1)



2. 長沖21号墳出土円筒埴輪 (第117図-2)



3. 長沖21号墳出土形象埴輪 (人物・馬他)



1. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第120図-1)



3. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第120図-4)



2. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第120図-2)



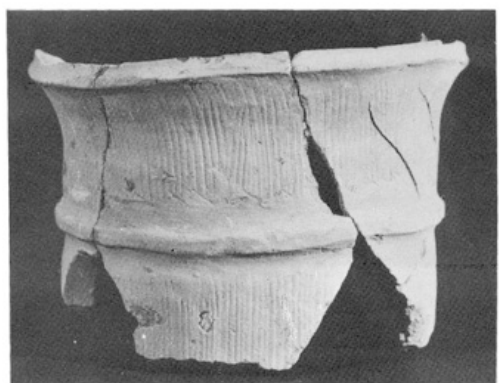
4. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第121図-1)



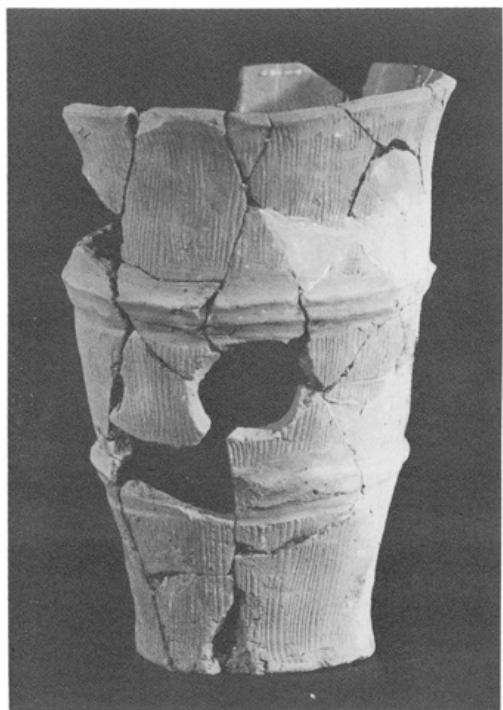
1. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第121図-2)



3. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第122図-4)



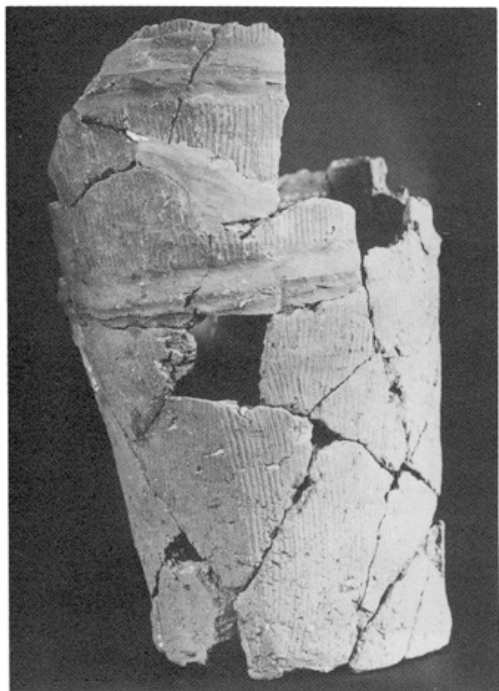
4. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第122図-2)



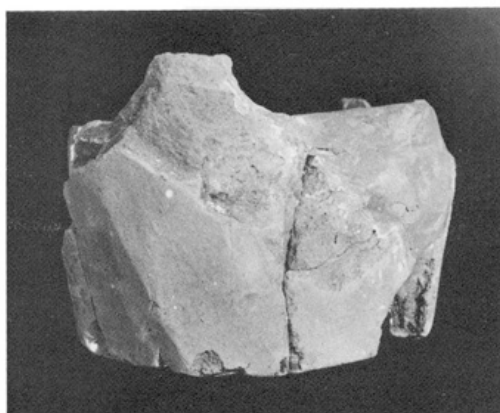
2. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第121図-4)



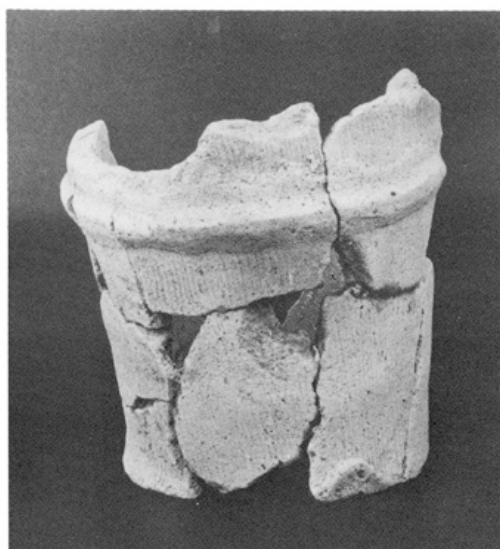
5. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第122図-3)



1. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第123図-4)



3. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第123図-3)



4. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第123図-6)



2. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第123図-5)



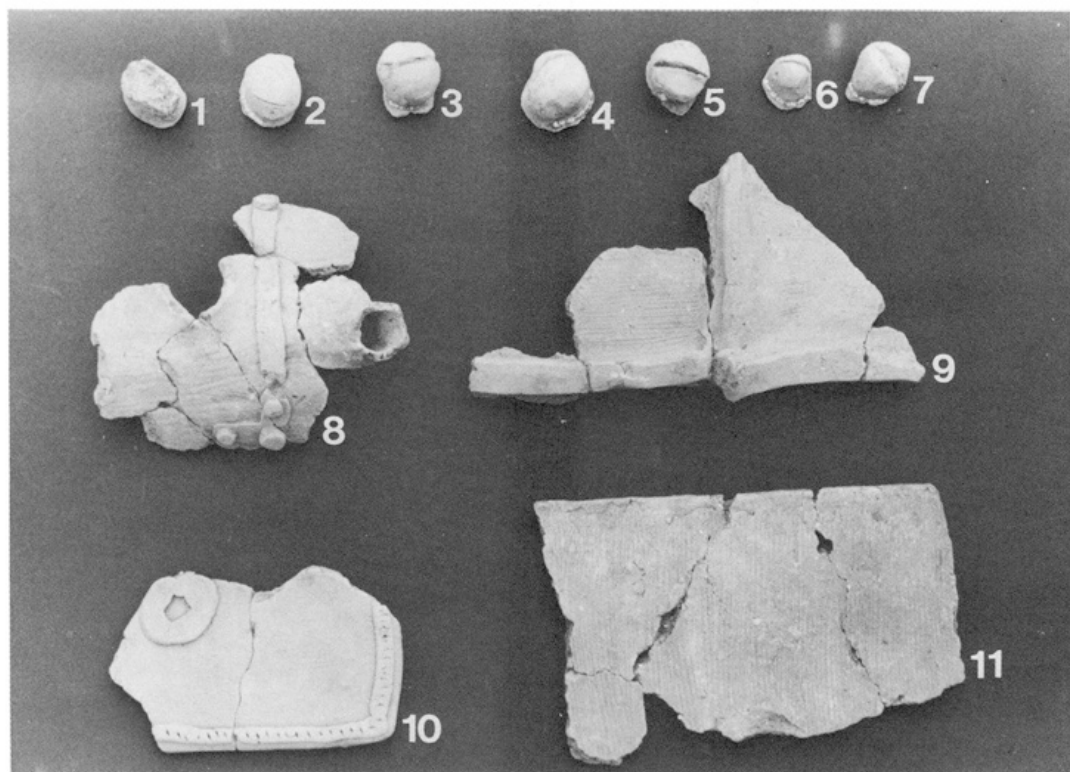
5. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第124図-1)



1. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第124図-3)



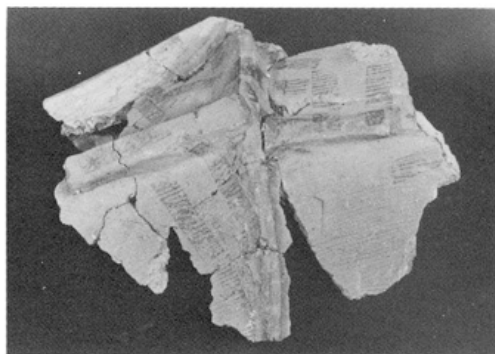
2. 長沖22号墳出土円筒埴輪 (第124図-4)



3. 長沖22号墳出土形象埴輪 (馬)



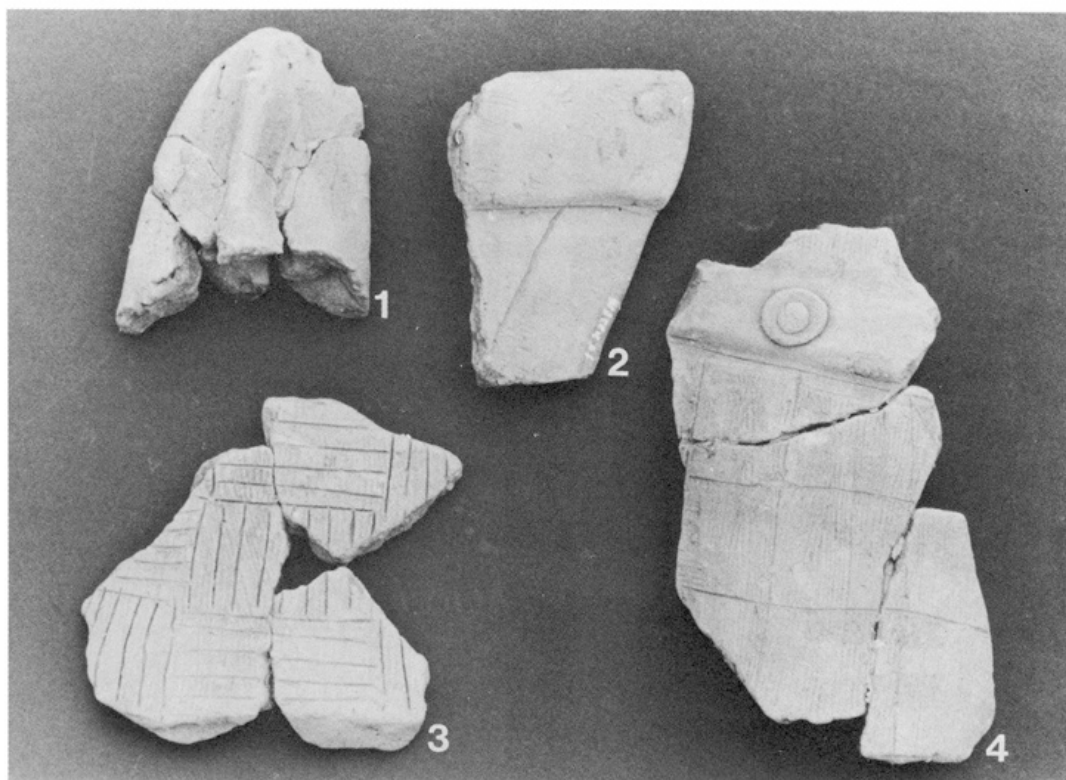
1. 長沖22号墳出土形象埴輪（馬）



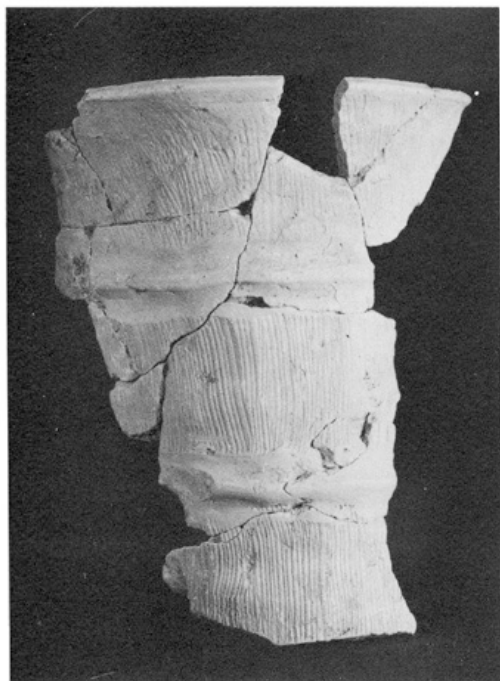
2. 長沖22号墳出土形象埴輪（馬）



3. 長沖22号墳出土形象埴輪（人物）



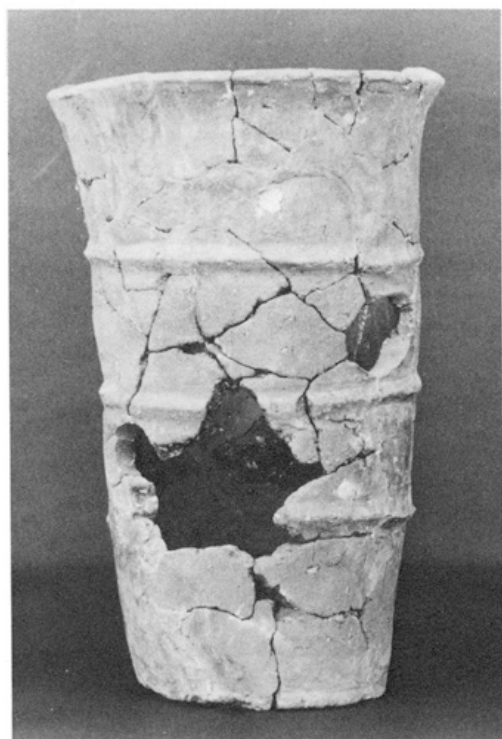
4. 長沖23号墳出土形象埴輪



1. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第128図-1)



3. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第128図-5)



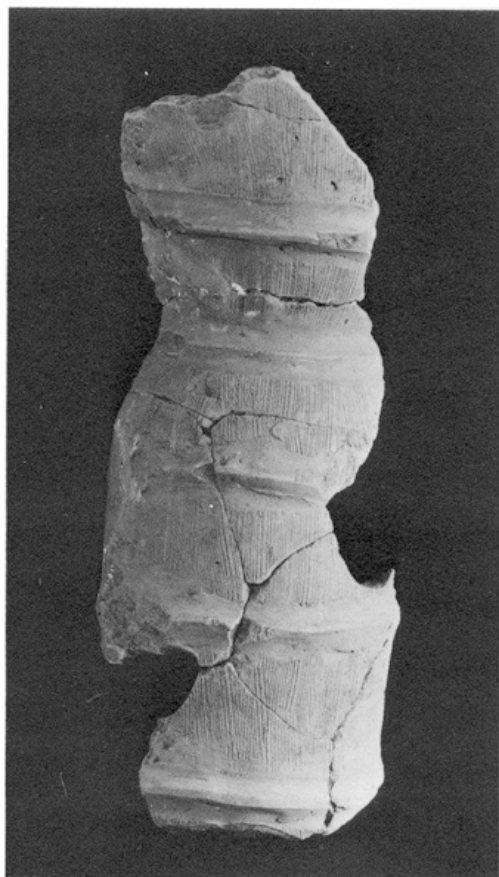
2. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第128図-2)



4. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第129図-2)



1. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第129図-3)



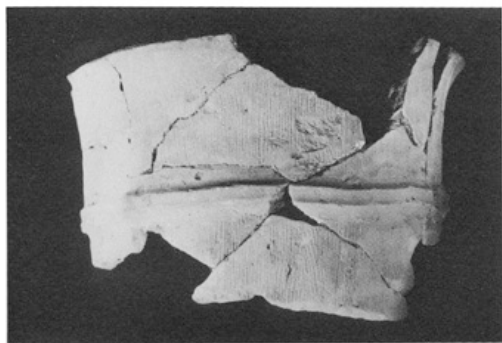
3. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第130図-1)



2. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第129図-4)



4. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第130図-2)



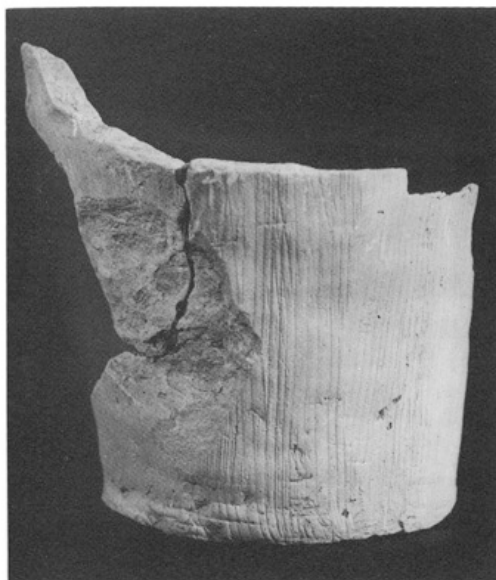
1. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第131図-1)



3. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第131図-4)



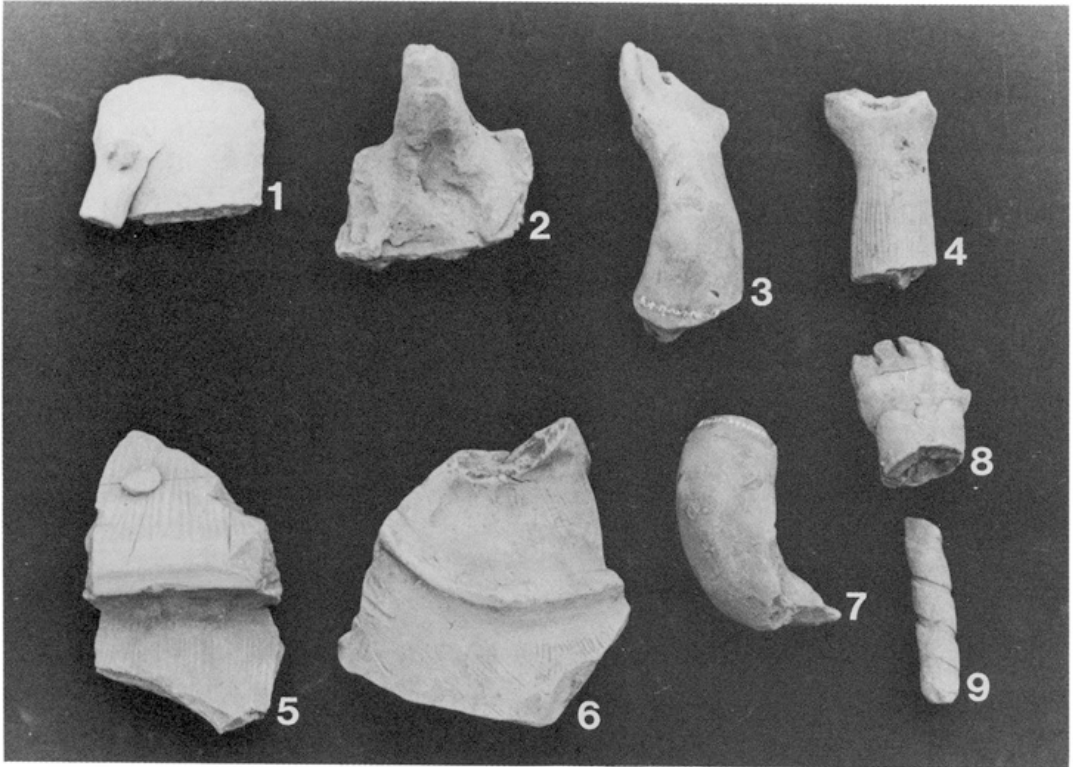
2. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第131図-3)



4. 長沖25号墳出土円筒埴輪 (第130図-3)



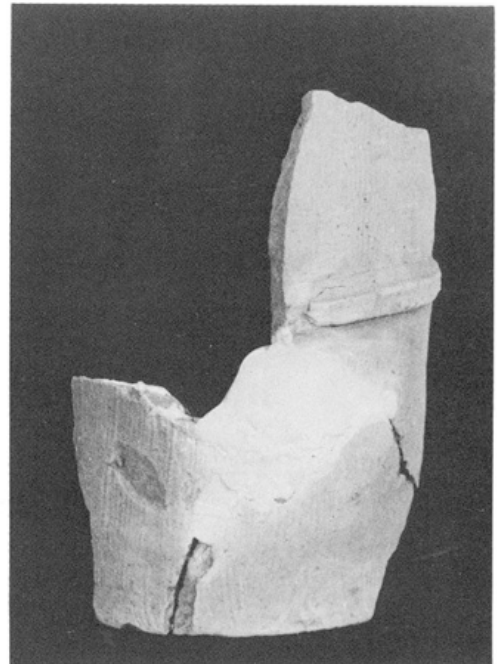
5. 長沖25号墳出土形象埴輪 (人物)



1. 長沖25号墳出土形象埴輪（人物）



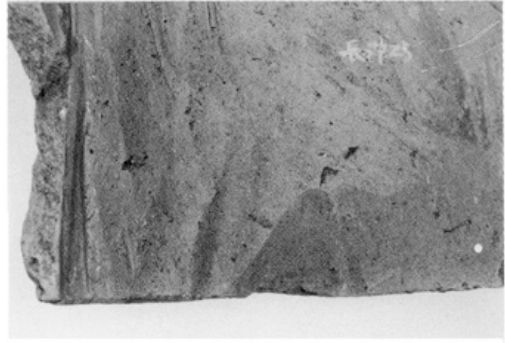
2. 長沖28号墳出土円筒埴輪（第137図-1）



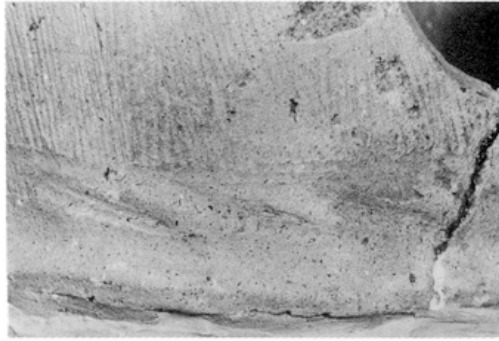
3. 長沖28号墳出土円筒埴輪（第137図-2）



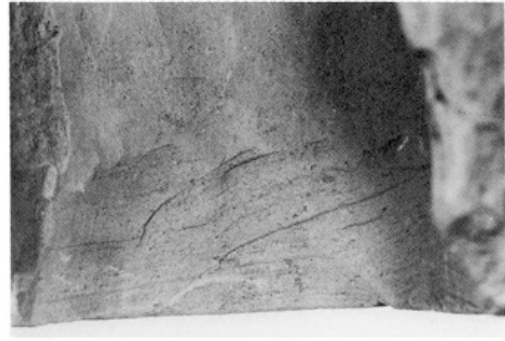
1. 外面全面縦方向のへら削り



5. 基底部内面縦方向の刀子削り



2. 凸帯断続撫で技法



6. 基底部内面横方向の刀子削り①



3. 基底部外面板押圧



7. 基底部内面横方向の刀子削り②



4. 基底部内面横ハケ調整

『長沖古墳群』正誤表

頁	行	誤	正
28	28	特長	特徴
30	15	両袖無型	両袖型
36	12	飛白	かすり 飛白
46	2	羨通部長	羨道部長
83	第85図	$\underline{D'} \quad \underline{D}$	$\underline{D} \quad \underline{D'}$
〃	〃	$\underline{E'} \quad \underline{E}$	$\underline{E} \quad \underline{E'}$
〃	〃	$\underline{F'} \quad \underline{F}$	$\underline{F} \quad \underline{F'}$
177	12	墳丘相似形	墳形相似形
181	35	墳丘相似形	墳形相似形
182	図表 説明文	推安復原図	推定復原図
184	7	C (\dot{O}_2)	C (O_1)
188	23	数置	数値
192	6	埴輪例	埴輪列
195	14	板倉書房	校倉書房
202	2	編年の位置づけ	編年的に位置づけ
203	12	なお……いない。	(なお……いない。)を削除する。
〃	13	註 11	註 12
〃	15	註 12	註 11

児玉町文化財調査報告書第1集

長 沖 古 墳 群

児玉町児玉南土地区画整理事業発掘調査報告

昭和55年3月20日印刷

昭和55年3月31日発行

発行者 児玉町教育委員会

埼玉県児玉郡児玉町八幡山368

印刷所 有限会社 暁光社

埼玉県児玉郡児玉町蛭川173-4